二丈・浜玉道路関係
埋蔵文化財調査報告

糸島郡二丈町所在遺跡群の調査

1980

福岡県教育委員会

二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告

正誤表

頁	行	誤	正
87		第58図　石鏃実測図	第58図　石鏃,石鏃実測図
112		広Z　3　トレ　2層　粘抜岩	広Z　3　トレ　2層　粘板岩
116		表15　土製紡錘車一覧表	表15　土製紡錘車一覧表
117		第73図　土製紡錘車実測図　1（1/3）	第73図　土製紡錘車実測図　1（1/2）
118		第74図　土製紡錘車実測図　2（1/3）	第74図　土製紡錘車実測図　2（1/2）
123	33	アズキかもしれない。る。：クス	アズキかもしれない。
133	17	この時期を朔ること	この時期を溯ること
150	32	いづれも精製胎土を使用し，	いずれも精製胎土を使用し，
155	18	ヘラ研き	ヘラミガキ
155	23	ヘラ研き	ヘラミガキ
156	99	大くの完形に近い	多くの完形に近い
156	9	拳大の鉄滓と	拳大の鉄滓と
157	6	ヘラ研き	ヘラミガキ
166	26	づれも中心に向って	ずれも中心に向って
168	11	出土した土器はいづれも	出土した土器はいずれも
168	12	前期を経て中期には入った，弥生時代の	弥生時代の前期を経て，既に中期の
169	4	梁行柱間ていづれも	梁行柱間ていずれも
170	7	掘り方はいづれも	掘り方はいずれも

二丈・浜玉道路関係
埋蔵文化財調査報告

糸島郡二丈町所在遺跡群の調査

序

二丈・浜玉道路は，国道202号線バイパスとして福岡県道路公社が昭和49年から建設の計画を進めてこられたものであります。県教育委員会は県道路公社から委託を受けて，この道路建設計画地内に埋蔵する文化財を昭和49～54年までの6年間にわたり道路建設計画に応じて発掘調査を実施してきたのであります。

この報告書は，この間に実施した糸島郡二丈町所在，広田遺跡・竹戸遺跡・長須隈古墳等の調査記録であります。その内容は，縄文時代大溝，弥生時代墓地・集落跡，新旧の各古墳，奈良・平安時代の役所的性格をもつ建物群，集落跡等です。本報告書を学問研究に，文化財愛護思想の普及，あるいは学校教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

諸般の事情により発刊が遅れましたことをおわびいたします。また，本文中に記名した方々はもとより，種々のご協力をいただいた地元の関係各位に深く謝意を表します。

昭和55年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1. この報告書は，二丈・浜玉道路（一般国道202号有料バイパス）建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査の糸島郡二丈町所在の各遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は，福岡県道路公社の委託事業として，昭和50年より54年まで福岡県教育委員会が実施した。
3. 本報告にあたっての種子学調査には，大阪市立大学理学部教授粉川昭平氏に担当していただいた。
4. 本書の執筆は，下記のとおりである。

Ⅲ—1	大阪市立大学教授	粉川昭平
Ⅰ，Ⅱ	福岡県教育庁管理部文化課	中間研志
Ⅲ—1	〃	小池史哲
Ⅲ—2	〃	馬田弘稔
Ⅲ—3	〃	石山勲

5. 掲載図の実測・製図の分担については，挿図目次に示すとおりである。掲載写真のうち，遺物については，各調査担当者及び，九州歴史資料館石丸洋氏の指導の下に平島美代子氏等の努力に負うところが多い。
6. 遺物整理作業にあたっては，故前川威洋氏の指導の下にバイパス担当班の各補助員諸氏・整理作業員，また，岩瀬正信氏の指導の下に，九州歴史資料館の整理作業員等が各々これを行なった。出土品は同館にて保管している。
7. 本書の編集は，中間の責任のもとに，Ⅲ—1を小池，Ⅲ—2を馬田が分担した。

目　　次

頁

Ⅰ　調査の経過…… 1

Ⅱ　位置と環境…… 7

Ⅲ　各遺跡の調査…… 9

1　広田遺跡0区…… 9

1　はじめに …… 11

2　縄文時代の遺構と遺物…… 13

3　広田遺跡大溝出土の種子類について…… 123

4　歴史時代の遺構と遺物…… 125

5　おわりに …… 134

2　竹戸遺跡…… 139

1　はじめに …… 139

2　弥生時代の遺構と遺物…… 139

3　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 147

4　Ⅱ区西トレンチ・その他の遺構と遺物…… 164

5　おわりに …… 164

3　長須隈古墳…… 171

図　版　目　次

本文対照頁

図版１ (1) 遺跡遠景（小池史哲撮影）…… 11
(2) 調査風景１（小池撮影）…… 12
図版２ (1) 遺跡東地区（０－１区）全景（小池撮影）…… 13
(2) 遺跡西地区（０－２区）全景（小池撮影）…… 13
図版３ (1) 遺跡中央部（０区）南側全景（小池撮影）…… 14
(2) 遺跡中央部（０区）北側全景（小池撮影）…… 14
図版４ (1) 大溝北部上層での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝（ＡＢ－３区）上層での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
図版５ (1) 大溝（Ｂ４区）上層での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝（Ｗ３区）７層での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
図版６ (1) 大溝（Ｅ４区）９層での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝（Ｅ５区）９ｂ層での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
図版７ (1) 大溝下部での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝内遺物出土状況（小池撮影）…… 16
図版８ (1) 大溝７層での土製紡錘車出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝９層での土製紡錘車出土状況（小池撮影）…… 16
図版９ (1) 大溝（Ｗ３～５区）下面の遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝（ＡＢ２～４区）下面の遺物出土状況（小池撮影）…… 16
図版10 (1) 大溝南部下面の遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 大溝北部下面の遺物出土状況（小池撮影）…… 16
図版11 (1) Ｗ４区での遺物出土状況（小池撮影）…… 16
(2) 調査風景２（馬田弘稔・小池撮影）…… 12
図版12 (1) 完掘後の大溝南部（小池撮影）…… 16
(2) 完掘後の大溝北部（小池撮影）…… 16
図版13 Ⅰ群土器１（小池撮影）…… 21
図版14 Ⅰ群土器２（小池撮影）…… 21
図版15 Ⅰ群土器３（小池撮影）…… 21
図版16 (1) Ⅰ・Ⅱ群土器１（小池撮影）…… 36
(2) Ⅰ・Ⅱ群土器２（小池撮影）…… 36
図版17 Ⅱ群土器３（小池撮影）…… 36
図版18 Ⅱ群土器４（小池撮影）…… 36
図版19 Ⅲ群土器１（小池撮影）…… 46

図版20　Ⅲ群土器2（小池撮影）…… 46
図版21　Ⅲ群土器3（小池撮影）…… 46
図版22　Ⅲ・Ⅳ群土器（小池撮影）…… 59
図版23　Ⅴ群土器（小池撮影）…… 65
図版24 (1) Ⅴ群・表採土器（小池撮影）…… 68
(2) 表採土器（小池撮影）…… 68
図版25　土器の細部1（小池撮影）…… 72
図版26　土器の細部2（小池撮影）…… 72
図版27 (1) 打製石斧1（小池撮影）…… 73
(2) 打製石斧2（小池撮影）…… 73
図版28 (1) 打製石斧3（小池撮影）…… 73
(2) 打製石斧4（小池撮影）…… 73
図版29 (1) 打製石斧5（小池撮影）…… 73
(2) 打製石斧6（小池撮影）…… 73
図版30 (1) 打製石斧7（小池撮影）…… 73
(2) 打製石斧8（小池撮影）…… 73
図版31 (1) 打製石斧9（小池撮影）…… 73
(2) 打製石斧10（小池撮影）…… 73
図版32　打製石斧11（小池撮影）…… 73
図版33　打製石斧刃部1（小池撮影）…… 83
図版34　打製石斧刃部2（小池撮影）…… 83
図版35　打製石斧刃部3（小池撮影）…… 83
図版36　石皿（小池撮影）…… 83
図版37 (1) すり石（小池撮影）…… 83
(2) 石錘（小池撮影）…… 91
図版38 (1) 石鏃1（小池撮影）…… 86
(2) 石鏃2（小池撮影）…… 86
図版39　磨製石斧1（小池撮影）…… 92
(2) 磨製石斧2（小池撮影）…… 92
図版40 (1) 磨製石斧3（小池撮影）…… 92
(2) 磨製石斧4（小池撮影）…… 92
図版41 (1) 削器・掻器1（小池撮影）…… 97
(2) 削器・掻器，石鏃2（小池撮影）…… 97
図版42 (1) 削器・掻器3（小池撮影）…… 97
(2) 削器・掻器4（小池撮影）…… 97
図版43 (1) 削器・掻器，石鏃5（小池撮影）…… 97

(2) 削器・掻器6（小池撮影）…… 97
図版44 (1) 砥石（小池撮影）…… 96
(2) 石錐，石刃6・7類，つまみ形石器（小池撮影）…… 97
図版45 (1) 石刃1～5類（小池撮影）…… 105
(2) 石核（小池撮影）…… 106
図版46 石柱・石棒，玉類，御物石器（小池撮影）…… 107
図版47 (1) 石製品2（小池撮影）…… 107
(2) 石製品3（小池撮影）…… 109
図版48 (1) 土偶・版状土製品（小池撮影）…… 115
(2) 土製紡錘車3・4類（小池撮影）…… 116
図版49 (1) 土製紡錘車1・2類（小池撮影）…… 116
(2) 土製紡錘車1・2類（小池撮影）…… 116
図版50 (1) 埋甕（小池撮影）…… 122
(2) 埋甕使用土器（小池撮影）…… 123
図版51 大溝出土種子類（粉川昭平撮影）…… 123
図版52 (1) 建物群全景（小池撮影）…… 125
(2) 建物群全景（小池撮影）…… 125
(3) 調査風景3（小池撮影）…… 125
図版53 (1) 1号建物跡（小池撮影）…… 128
(2) 2号建物跡（小池撮影）…… 128
図版54 (1) 3号建物跡（小池撮影）…… 128
(2) 4号建物跡（小池撮影）…… 129
図版55 (1) 5号建物跡（小池撮影）…… 130
(2) 6号建物跡（小池撮影）…… 132
図版56 (1) Ⅰ区全景（馬田弘稔撮影）…… 139
(2) Ⅱ区全景（馬田撮影）…… 139
図版57 (1) Ⅲ区全景（佐々木隆彦撮影）…… 139
(2) Ⅲ区全景（佐々木撮影）…… 139
図版58 (1) 1号甕棺墓（佐々木撮影）…… 139
(2) 2号甕棺墓（佐々木撮影）…… 139
図版59 (1) 1号・2号円形住居（馬田撮影）…… 142
(2) ＳＢ1号掘立柱建物（馬田撮影）…… 147
(3) ＳＢ2号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 147
図版60 (1) ＳＢ3号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 147
(2) ＳＢ4号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 148
(3) ＳＢ7号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 148

図版61 (1) ＳＢ８号～10号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 148
(2) ＳＢ11号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 149
(3) ＳＢ17号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 150
図版62 (1) ＳＢ12号～14号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 149
(2) ＳＢ16号掘立柱建物（佐々木撮影）…… 150
図版63 (1) ＳＫ１号土壙（佐々木撮影）…… 156
(2) ＳＫ３号土壙・ＳＤ３号溝（馬田撮影）…… 156
図版64 (1) 長須隈古墳遠景（石山勲撮影）…… 171
(2) 墳頂部から見た西側墳丘裾部（石山撮影）…… 171
図版65 (1) 舟形石棺抜取痕（石山撮影）…… 171
(2) 第２・３トレンチ断面（石山撮影）…… 173

挿　図　目　次

頁
第 1 図　二丈・浜玉道路及び周辺遺跡（中間研志作成）…… 2
第 2 図　水付古墳・竹戸・広田遺跡周辺地図（道路公社原図）…… 8
第 3 図　広田遺跡周辺地形図（道路公社原図・中間製図）…… 10
第 4 図　広田遺跡遺構全体図（中間・小池史哲作成，中間製図）……(折込み)
第 5 図　広田遺跡０区遺構配置図（小池・新開誉之・片岡宏二実測，豊福弥生製図）……(折込み)
第 6 図　大溝実測図（小池・新開・片岡実測，片岡製図）……(折込み)
第 7 図　縄文土器実測図１（小池実測・製図）…… 23
第 8 図　縄文土器実測図２（小池実測・製図）…… 24
第 9 図　縄文土器実測図３（小池実測・製図）…… 25
第 10 図　縄文土器実測図４（小池実測・製図）…… 26
第 11 図　縄文土器拓影１（小池実測・手拓）…… 27
第 12 図　縄文土器拓影２（小池実測・手拓）…… 28
第 13 図　縄文土器拓影３（小池実測・手拓）…… 29
第 14 図　縄文土器拓影４（小池実測・手拓）…… 30
第 15 図　縄文土器拓影５（小池実測・手拓）…… 31
第 16 図　縄文土器拓影６（小池実測・手拓）…… 32
第 17 図　縄文土器拓影７（小池実測・手拓）…… 33
第 18 図　縄文土器拓影８（小池実測・手拓）…… 34
第 19 図　縄文土器実測図５（小池実測・製図）…… 35
第 20 図　縄文土器実測図６（小池実測・製図）…… 37
第 21 図　縄文土器実測図７（小池実測・製図）…… 38

第 22 図　縄文土器拓影 9（小池実測・手拓）…… 39
第 23 図　縄文土器拓影10（小池実測・手拓）…… 40
第 24 図　縄文土器拓影11（小池実測・手拓）…… 41
第 25 図　縄文土器拓影12（小池実測・手拓）…… 42
第 26 図　縄文土器拓影13（小池実測・手拓）…… 43
第 27 図　縄文土器実測図 8（小池実測・製図）…… 44
第 28 図　縄文土器実測図 9（小池実測・製図）…… 45
第 29 図　縄文土器実測図10（小池実測・製図）…… 47
第 30 図　縄文土器実測図11（小池実測・製図）…… 48
第 31 図　縄文土器実測図12（小池実測・製図）…… 50
第 32 図　縄文土器実測図13（小池実測・製図）…… 51
第 33 図　縄文土器拓影14（小池実測・手拓）…… 52
第 34 図　縄文土器拓影15（小池実測・手拓）…… 53
第 35 図　縄文土器拓影16（小池実測・手拓）…… 54
第 36 図　縄文土器拓影17（小池実測・手拓）…… 55
第 37 図　縄文土器拓影18（小池実測・手拓）…… 56
第 38 図　縄文土器実測図14（小池実測・製図）…… 57
第 39 図　縄文土器拓影19（小池実測・手拓）…… 58
第 40 図　縄文土器実測図15（小池実測・製図）…… 60
第 41 図　縄文土器実測図16（小池実測・製図）…… 61
第 42 図　縄文土器拓影20（小池実測・手拓）…… 62
第 43 図　縄文土器拓影21（小池実測・手拓）…… 63
第 44 図　縄文土器拓影22（小池実測・手拓）…… 64
第 45 図　縄文土器実測図17（小池実測・製図）…… 66
第 46 図　縄文土器実測図18（小池実測・製図）…… 67
第 47 図　縄文土器実測図19（小池実測・製図）…… 68
第 48 図　縄文土器拓影23（小池実測・手拓）…… 69
第 49 図　縄文土器拓影24（小池実測・手拓）…… 70
第 50 図　打製石斧実測図 1（小池実測・製図）…… 74
第 51 図　打製石斧実測図 2（小池実測・製図）…… 75
第 52 図　打製石斧実測図 3（小池実測・製図）…… 76
第 53 図　打製石斧実測図 4（小池実測・製図）…… 77
第 54 図　打製石斧実測図 5（小池実測・製図）…… 82
第 55 図　打製石斧実測図 6（小池実測・製図）…… 83
第 56 図　石皿・すり石実測図 1（小池実測・製図）…… 84
第 57 図　石皿・すり石実測図 2（小池実測・製図）…… 85

第 58 図　石鏃・石刃実測図（小池実測・製図）…… 87
第 59 図　石錘実測図（小池実測・製図）…… 92
第 60 図　磨製石斧実測図１（小池実測・製図）…… 93
第 61 図　磨製石斧実測図２（小池実測・製図）…… 95
第 62 図　砥石実測図（小池実測・製図）…… 96
第 63 図　削器・掻器実測図１（小池実測・製図）…… 98
第 64 図　削器・掻器実測図２（小池実測・製図）…… 99
第 65 図　削器・掻器・石錐・石刃実測図（小池実測・製図）…… 102
第 66 図　石刃・つまみ形石器・石核・異形石器実測図（小池実測・製図）…… 103
第67-1図　石柱・石棒実測図（小池実測・製図）…… 108
第67-2図　御物石器実測図（小池実測・製図）…… 108
第 68 図　その他の石製品実測図１（小池実測・製図）…… 109
第 69 図　その他の石製品実測図２（小池実測・製図）…… 110
第 70 図　その他の石製品実測図３（小池実測・製図）…… 113
第 71 図　玉類実測図（小池実測・製図）…… 114
第 72 図　土偶・版状土製品実測図（小池実測・製図）…… 115
第 73 図　土製紡錘車実測図１（小池実測・製図）…… 117
第 74 図　土製紡錘車実測図２（小池実測・製図）…… 118
第 75 図　土製紡錘車実測図３（小池実測・製図）…… 119
第 76 図　土製紡錘車１・２類拓影（小池手拓）…… 119
第 77 図　小竪穴実測図（小池実測，豊福製図）…… 121
第 78 図　小竪穴出土土器拓影（小池実測・手拓）…… 121
第 79 図　埋甕実測図（小池実測，片岡製図）…… 122
第 80 図　埋甕使用土器実測図（小池実測・製図）…… 123
第 81 図　１号建物実測図（小池・片岡実測，豊福製図）…… 126
第 82 図　２号建物実測図（小池・片岡実測，豊福製図）…… 127
第 83 図　３号建物実測図（小池・片岡実測，豊福製図）…… 128
第 84 図　４号建物実測図（小池・片岡実測，豊福製図）…… 129
第 85 図　５号建物実測図（小池・片岡実測，豊福製図）…… 131
第 86 図　６号建物実測図（小池・片岡実測，豊福製図）…… 132
第 87 図　土壙実測図（片岡実測・豊福製図）…… 133
第 88 図　包含層出土土器実測図（馬田弘稔・小池実測・片岡製図）…… 134
第 89 図　竹戸遺跡周辺地形図（稲益和子製図）…… 140
第 90 図　１号・２号甕棺墓実測図（佐々木隆彦実測，片岡製図）…… 141
第 91 図　１号・２号甕棺実測図（馬田実測・製図）…… 142
第 92 図　１号・２号円形住居出土土器実測図（馬田・平田春美・稲益実測，馬田製図）…… 143

第 93 図　1号・2号土器溜状遺構，ＳＫ２号土壙実測図
（宮小路賀宏・木下修・馬田実測，平田製図）…… 145
第 94 図　1号・2号土器溜状遺構出土土器実測図（馬田・平田実測，馬田製図）…… 146
第 95 図　掘立柱建物柱穴出土土器実測図（馬田・岡部正己実測，馬田製図）…… 151
第 96 図　ＳＢ１号・８号掘立柱建物実測図（佐々木・木下実測，豊福製図）…… 152
第 97 図　ＳＢ13号掘立柱建物実測図（宮小路・佐々木・木下実測，豊福製図）…… 153
第 98 図　ＳＢ５号掘立柱建物実測図（宮小路・佐々木・木下実測，豊福製図）…… 154
第 99 図　ＳＥ１号井戸実測図（馬田実測，豊福製図）…… 155
第100図　ＳＫ１号土壙出土土器実測図（佐々木・馬田・稲益実測，中間製図）…… 160
第101図　ＳＥ１号井戸・ＳＤ３号溝出土土器実測図（馬田・稲益実測，中間製図）…… 161
第102図　ＳＤ３号溝出土土器実測図（馬田・稲益実測，中間製図）…… 162
第103図　方形住居・ＳＫ３号土壙・その他の遺構出土遺物実測図
（馬田・平田・稲益・岡部実測、中間製図）…… 163
第104図　Ⅱ区西トレンチ・ＳＫ３号土壙・ＳＤ３号溝実測図
（栗原和彦・馬田・関晴彦実測，稲益製図）…… 165
第105図　1号・2号円形住居模式図（馬田作成，平田製図）…… 167
第106図　1号・2号円形住居実測図（栗原和彦・馬田実測，平田製図）……168・169（折込み）
第107図　掘立柱建物配置模式図（馬田作成・製図）…… 170（折込み）
第108図　長須隈古墳測量図（石山勲・日高正幸測量，石山製図）…… 172

付　図　目　次

竹戸遺跡遺構配置図（馬田弘稔作成，豊福弥生製図）

表　目　次

表１　大溝出土土器の量的分布（小池史哲・下村富士子作成）……18・19
表２　掲載土器の出土層位一覧表（下村・花田淳子作成）…… 22
表３　大溝出土石器構成表（小池作成）…… 73
表４　打製石斧一覧表１（小池・片岡宏二作成）……78・79
表５　打製石斧一覧表２（小池・片岡作成）……80・81
表６　石皿・すり石一覧表（小池・片岡作成）…… 86
表７　石鏃一覧表１（小池・片岡作成）……88・89
表８　石鏃一覧表２（小池・片岡作成）…… 90

表9　石錘一覧表（小池・片岡作成）…… 91
表10　磨製石斧一覧表（小池・片岡作成）…… 94
表11　砥石一覧表（小池・片岡作成）…… 96
表12　削器・掻器一覧表（小池・片岡作成）……100・101
表13　石錐・石刃・つまみ形石器・石核一覧表（小池・片岡作成）……104・105
表14　石製品一覧表（小池・片岡作成）…… 112
表15　土製紡錘車一覧表（小池・片岡作成）…… 116
表16　1号建物計測表（小池作成）…… 126
表17　2号建物計測表（小池作成）…… 127
表18　3号建物計測表（小池作成）…… 130
表19　4号建物計測表（小池作成）…… 130
表20　5号建物計測表（小池作成）…… 131
表21　6号建物計測表（小池作成）…… 132
表22　掘立柱建物出土土師器計測表（馬田弘稔作成）…… 151
表23　ＳＫ1号土壙上層出土土師器計測表（馬田作成）…… 156
表24　ＳＫ1号土壙下層出土土師器計測表（馬田作成）…… 157
表25　ＳＢ8号掘立柱建物計測表（馬田作成）…… 169（折込み）
表26　ＳＢ13号掘立柱建物計測表（馬田作成）…… 169（折込み）
表27　ＳＢ5号掘立柱建物計測表（馬田作成）…… 169
表28　掘立柱建物計測表（馬田作成）…… 170

Ⅰ 調 査 の 経 過

本書で調査結果を報告する各遺跡は，一般国道202号二丈・浜玉有料バイパスおよびそれに伴なう工事用進入道路等に関わる建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地である。

福岡県道路公社は，昭和49年12月発足と同時に一般国道二丈・浜玉有料バイパスの建設事業計画を推進することとなった。

このバイパスの建設事業計画地には，昭和49年12月の段階で埋蔵文化財の分布状況が福岡県教育委員会の調査によって知られていた。これをもとに福岡県教育委員会と数度にわたる協議の結果，8月末におおよそ次のような合意が出来上がった。

1. 本年度（50年度）は事業主体者を福岡県道路公社として一般国道202号二丈・浜玉有料バイパスの路線決定の資料を得る目的で埋蔵文化財の予備発掘調査を実施する。
2. 福岡県教育委員会は，発掘技術者等を派遣し全面的にこれに協力する。
3. 予備調査の結果に基づいて路線は決定され，尚記録保存の形をとらざるを得ない埋蔵文化財については，51年度以降福岡県教育委員会に調査を委託し，本調査を実施する

この合意を骨子に福岡県教育委員会と福岡県道路公社は，了解事項を書式で交換し，福岡県道路公社は9月末より予備調査を実施した。

予備調査は，8地点19ケ所にわたった。各地点の調査概要は後記したい。この予備調査のうち赤岸遺跡の南半部，及び水付古墳については本調査となってこの間で発掘調査は終了した。

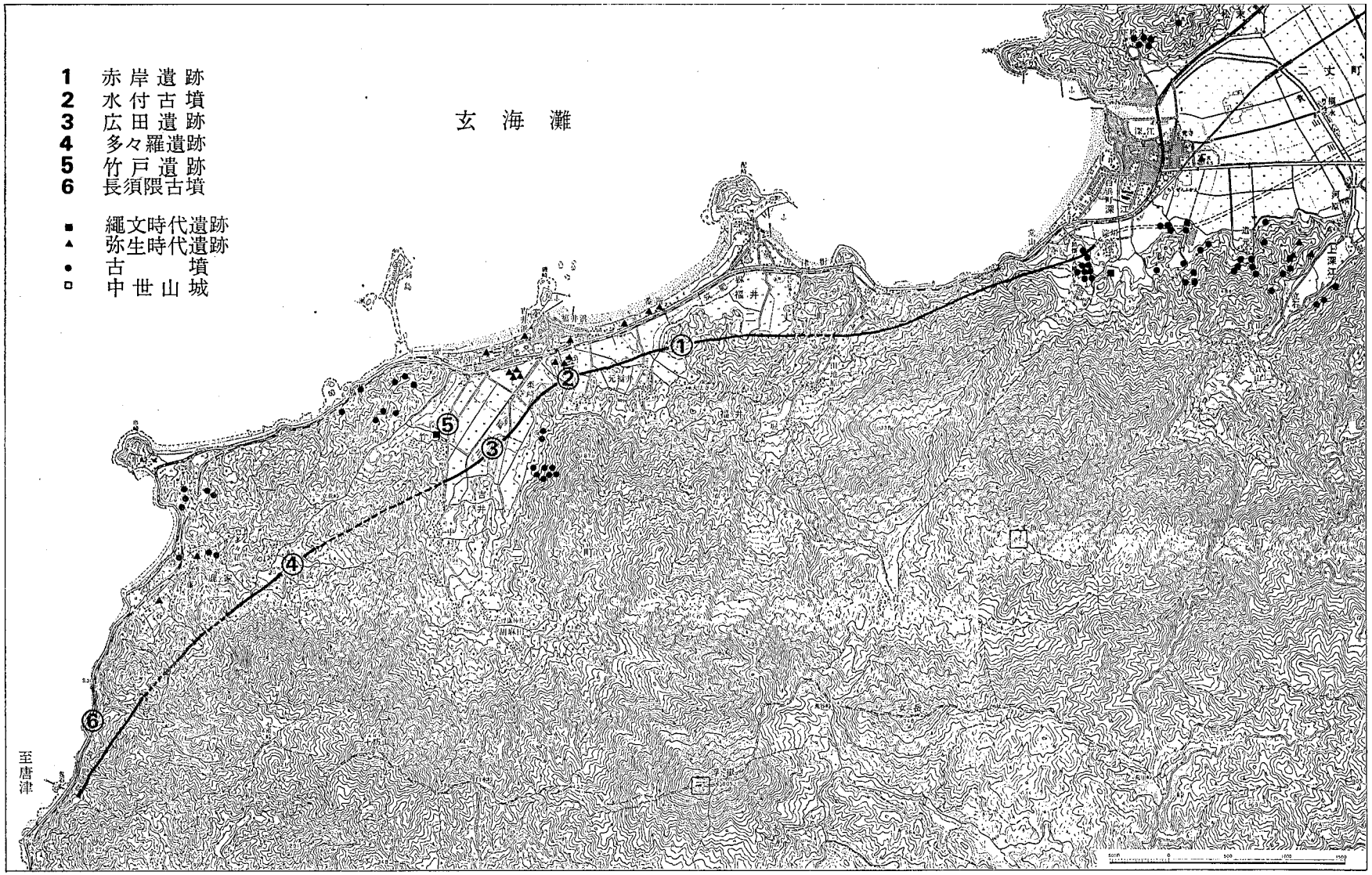
その後この予備調査の結果に基づいて，本調査のための合意が両者に協議され，福岡県教育委員会が委託を受けて本調査を実施することとなった。

昭和53年4月に至り，道路公社により工事用進入道路建設予定地内における埋蔵文化財の有無の問い合わせがあり，当教育委員会は現地踏査を行ない，その所見を公社へ示した。8本の道路のうち問題なしとした6線を除き，立花・白石道路の2線に関して，調査を必要とするとの結果を得，殊に白石道路については，前方後円墳（長須隈古墳）の裾部削除の恐れがあったため，道路公社への回答とともに，路線修正の協議をもった。そして，その資料を得るために，測量調査等を実施することとして，本線の各地点調査と並行して行なうことになった。

昭和53年6月より，第12地点多々羅遺跡を振り出しに，広田遺跡・白石進入道路（長須隈古墳）・立花進入道路（竹戸遺跡）と発掘調査を継続していった。

白石進入道路（長須隈古墳）に関しては，墳丘測量・トレンチ調査終了後，道路公社との間でその結果を踏まえて，協議がなされ，推定裾線より外側に余裕をもって法面を設定するという，若干の設計修正によって保存がなされることとなった。

昭和54年度に入り，調査に入れなかった6地点（赤岸遺跡）を発掘した。その間に大入～深



第１図　二丈・浜玉道路及び周辺遺跡　(1/50,000)

江間の工事に関して福岡県道路公社より建設省への移管が行なわれるという推移があり，3地点（西口古墳），4地点（瀬石谷遺跡）については，建設省からの委託事業として，8月に福岡県教育委員会が発掘調査を実施した。この2箇所分の本調査については，建設省今宿バイパス調査分とあわせて，別の機会にゆずることとしたい。

以下，各地点の予備調査を含めた概要を述べたい。

西口遺跡（第3地点）

（3－1地点）

所在地～福岡県糸島郡二丈町大字深江字西口2294番地。調査担当者～松岡史。調査期間昭和50年12月3日～9日。54.5㎡調査。2×14m，1.5×13m，2×3m，1×1mの連続トレンチを設定し，基盤層まで発掘。トレンチ北部に耕作土下に断面皿状の有機質土の填った溝状部を検出したが，これは自然地形ともみられる。特に遺物なし。

（3－2地点）

所在地～二丈町大字深江字西口2320。調査担当者～松岡史。昭和50年12月10日調査。総面積16㎡。2×2mトレンチ4ケ所設定，基盤層まで発掘したが遺構・遺物ともに確認できない。

（3－3地点）

所在地～二丈町大字福井字萩原404-1。担当者～松岡史。昭和50年12月2日。発掘面積24㎡。2×2mのトレンチ6ケ所設定，基盤層まで発掘したが遺構はない。近世陶片少量出土。

尚，この地点周辺には横穴式石室の群集墳がみられた為，54年8月，建設省の受託によって調査の結果，封土を失なった横穴式石室一基を調査し得たことを補記しておく。

瀬石谷遺跡（第4地点）

所在地～二丈町大字福井字瀬石谷1-116-1。調査担当者～松岡史。昭和50年12月1日調査。総面積24㎡。2×2mのトレンチを6ケ所設定し，基盤まで発掘したが特に遺構なし。近世陶片少量と鉄滓が出土し，近辺に，製鉄跡の存在が予想された。

釘原遺跡（第5地点）

所在地～二丈町大字福井字釘原3239-1。調査担当者～松岡史。昭和50年11月30日調査。発掘総面積24㎡。2×2mのトレンチ6ケ所を設定し，基盤まで発掘したが，遺物・遺構はない。

赤岸遺跡（第6地点）

（6－1地点）

所在地～二丈町大字福井字赤岸4674-1。担当者～松岡史。昭和50年12月28日調査。総面積28㎡。2×2mのトレンチ7ケ所設定。耕作土下に粘土質堆積層があったが，遺構・遺物なし。

（6－2・4地点）

所在地～二丈町大字福井字赤岸4676，4717。担当者～栗原和彦。昭和51年1月19日～20日。総面積18.25㎡。6－2地点では，8×1.5mのトレンチを入れ地表下70cmで地山にあたり溝状

の遺構を検出し，中国製輸入陶磁器片，中世土器片等出土し，本調査を期した。6－4地点では，2.5×2.5mのトレンチを設定したが，土層の変化はみられず，中世の土器数点出土した。

（6－3地点）

所在地～二丈町大字福井字赤岸4740-1。調査担当者～松岡史。昭和50年11月29日調査。2×2mトレンチ6ケ所設定し，耕作土下の整地層まで発掘したが，遺構・遺物ともみられない。

（第1次本調査）

担当～栗原和彦・新原正典。昭和51年2月26日～3月24日。発掘総面積125㎡。畑地の全面発掘と一部トレンチによる調査を行ない，谷西岸部に護岸状に石敷列がみられた。遺物は，室町時代頃の土師器・陶器類，中国産の青磁・染付陶器類が出土した。

（第2次本調査）

昭和54年3月15日～3月19日まで，第1次本調査地点の北隣接地等に1,300㎡のトレンチ調査が行なわれ，同年7月19日～30日に本調査を実施した。発掘面積224㎡。担当者～浜田信也・中間研志。谷の西麓に，各時代遺物包含層が厚く堆積し，その層に切り込んで，室町時代の土壙等がみられた。小規模な石棺状の石組み遺構，製鉄炉，住居跡様の竪穴等が検出され，多量の鉄滓とともに青・白磁類，土師器，陶器等多くが出土した。

ヲシマ遺跡（第7地点）

（7－1地点）

所在地～二丈町大字福井字ヲシマ5348-1。担当者～前川威洋。昭和50年10月14日～18日。発掘面積28㎡。2×2mの小トレンチを7ケ所設けて，土層の調査をしたが，上部は埋土で下部は旧湿地であり，遺構・遺物ともにみられない。

（7－2地点）

所在地～二丈町大字福井字ヲシマ5333。担当者～松岡史。50年11月27日。総面積28㎡。トレンチ7ケ所設定，耕作土下基盤層まで発掘。下は厚いピート層で遺構・遺物なし。

水付古墳（第8地点）

（8－1地点）

所在地～二丈町大字福井字イセ田5534-1。担当者～松岡史。面積28㎡。昭和50年12月27日。2×2mトレンチを7ケ所設定し，水田耕作土下ピート層で遺構・遺物ともなし。

（8－2・3・4地点～水付古墳）

所在地～二丈町大字福井字水付5850-2，5849及び，字栗崎3940-1。調査担当者～前川威洋。昭和50年9月25日～10月13日。発掘総面積112㎡。8－2・4地点はトレンチを設定し，調査したが，遺構・遺物なし。3地点は，封土を殆んど失なった横穴式石室で，多量の副葬須恵器・土師器・鉄鏃・耳環などが出土した。

栗崎遺跡（第9地点）

所在地～二丈町大字吉井字栗崎3916-2。担当者～前川威洋。昭和50年９月23日～25日。２×15mのトレンチを調査した。旧畑地の段落ちらしきもの，及び柱穴がみつかったが，遺跡の遺構と思われるものはない。青磁片，糸切り底土師器小片が少量出土したのみである。

広田遺跡（第10地点）

（10—１・２地点）

所在地～二丈町大字吉井字広田2858，2860。担当者～前川威洋。昭和50年10月13日～18日。発掘総面積53.5m^2。遺構・遺物ともにみられない。

（10—３地点）

所在地～二丈町大字吉井字広田2905-1。担当者～松岡史。昭和50年12月25日～26日。２×２mトレンチを３ケ所設定し，表土から基盤層まで発掘したが，遺構・遺物なし。

（広田遺跡０区）

昭和53年10月１日～12月２日。昭和54年３月１日～３月27日。発掘面積1,870m^2。担当者～馬田弘稔・小池史哲。縄文時代の大溝，埋甕１基。奈良時代土壙１基。奈良時代以降の掘立柱建物６棟分を検出した。遺物は，縄文時代後晩期の土器極めて多量，石器（石斧・御物石器・十字形石器その他多量），土製紡錘車，植物種子，骨片など。弥生時代土器片，奈良時代土器など。路線内検出の縄文時代遺構のみならず，より南側麓部に集落の存在が推定されるので，遺跡の稀少さからみて，遺跡範囲確認を行なった後，保存策等が検討される。

（広田Ⅰ～Ⅲ区）

昭和53年７月４日～10月４日。調査面積4,000m^2。担当者～中間研志。横穴式石室一基。弥生中期袋状竪穴，土壙。奈良時代竪穴（住居跡）８軒，掘立柱建物１＋α棟分。江戸時代一字一石経塚一基などが検出された。遺物は，弥生時代土器多量，石器多量，奈良時代土器類，フイゴ羽口，土錘等多量に出土した。

多々羅遺跡（第12地点）

所在地～二丈町大字鹿家字多々羅。昭和53年６月26日～７月３日。担当者～中間研志。トレンチ９本（270m^2）を入れた。中世の土師器，瓦器，青・白磁片，捏鉢片など少量出土したが，遺構は確認できなかった。東上方の中世山城に関連して，流れ込んだ二次堆積と考えられる。

竹戸遺跡（立花進入路）

所在地～二丈町吉井字竹戸。担当者～馬田弘稔。昭和53年10月17日～12月２日。240m^2調査。弥生時代中期の円形住居・甕棺墓各２，奈良～鎌倉時代の掘立柱建物19・井戸１・大溝・土壙等が検出された。緑釉陶器・青磁・白磁・瓦等が出土し，律令期地方官衙も考えられる。

長須隈古墳（白石工事用道路）

所在地～二丈町鹿家。昭和53年８月18日～26日。担当者～石山勲。調査面積1,200m^2。トレンチ６ケ所を設定し，墳丘測量を行なった結果，西に向う前方後円墳かと思われていたが，径

21～22mの円墳と判かった。墳丘は，盛土が殆んど認められず，葺石とみなされていた石材は，舟形石棺を納めていた主体部に伴なうものと思われる。なお，舟形石棺は蓋長辺側にも縄掛突起を各1個づつ持ち，県指定文化財に指定され，糸島高校に保管されている。

本報告書所載各遺跡の調査関係者は下記のとおりである。

総　括

教育長(前任)	森田　實	教育長	浦山太郎
管理部長(前任)	西村太郎	管理部長	岩下光弘
文化課課長	藤井　功	文化課課長補佐	武久耕作
文化課課長技術補佐	松岡　史	文化課調査第2係長	栗原和彦

庶　務

文化課庶務係長	大淵幸夫	文化課主任主事	豊福金蔵
文化課主任主事	入江智徳		

調　査

大阪市立大学教授	粉川昭平(種子学)	北九州大学教授	畑中健一(花粉分析)
文化課主任技師	前川威洋	文化課主任技師	石山　勲
文化課主任技師	浜田信也	文化課技師	新原正典
文化課技師	中間研志	文化課技師	馬田弘稔
文化課技師	小池史哲		
調査補助員	原田保則	日高正幸	松下真澄
	蒲原宏行	松尾昌彦	樗木弘明
	平居秀二	平島文博	新開誉之
	片岡宏二	林　覚	関　晴彦

なお，九州産業大学教授森貞次郎，別府大学教授賀川光夫の両先生には現場にて貴重な助言，指導を賜わった。また，宮小路賀宏・川述昭人・木下修・佐々木隆彦の文化課職員各氏には現場への来援を得た。更に，上記しなかったが，作業員斡旋等をお願いした二丈町教育委員会の方々，何くれとなくお世話頂いた地元作業員の方々に深く謝意を表する次第である。報告書作成までの遺物実測・トレース・編集補助等は，下記の諸君の絶大なる協力を得た。

川村　博	山本祥子	奥村俊久
平田春美	平島美代子	豊福盟子
豊福弥生	崎村ケイ子	稲益和子
渡辺佳子	宮内克己	下村富士子
花田淳子	平田みゆき	岡部正己

Ⅱ 位置と環境 (第1図参照)

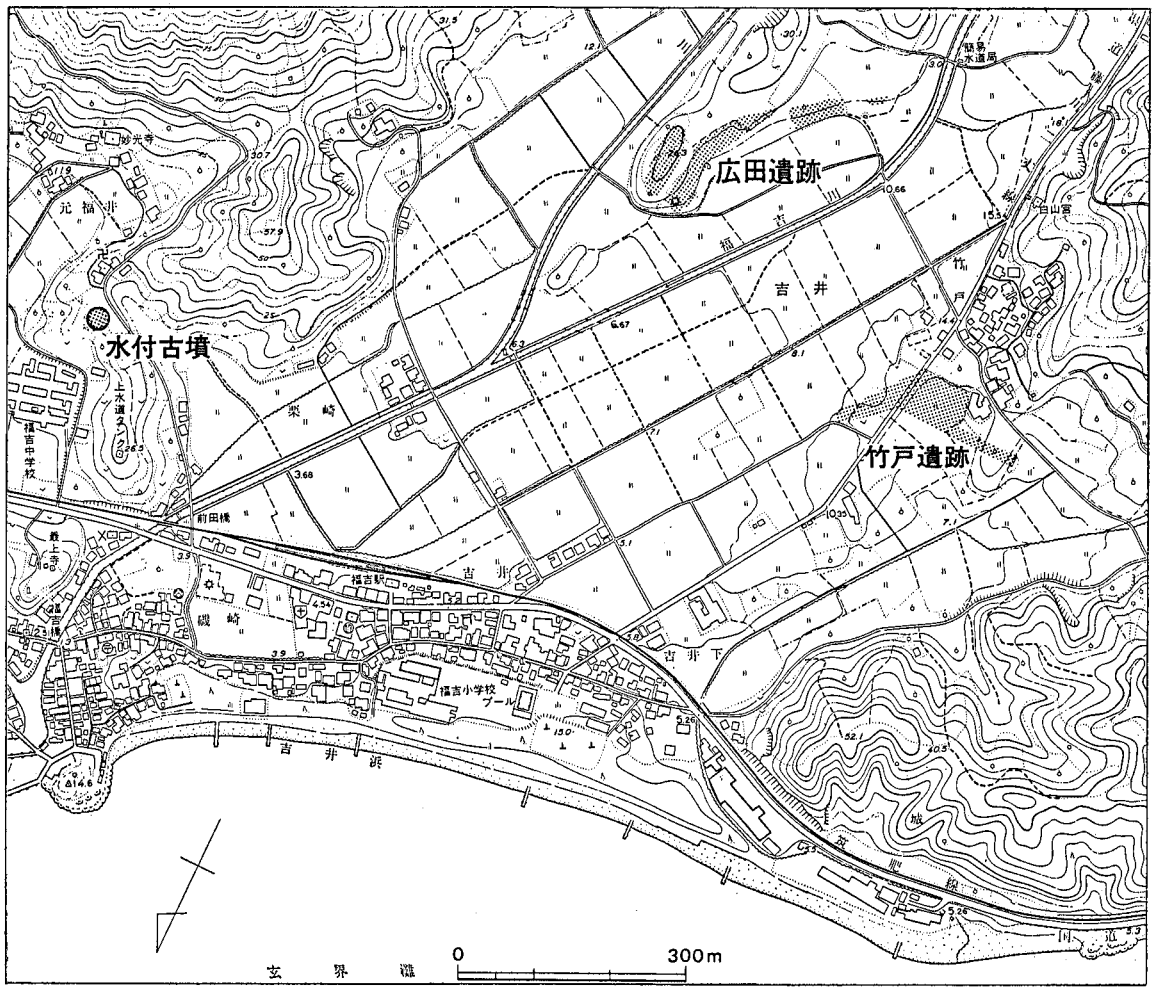
西北九州の背骨背振山塊が北へ大きく玄海の荒波中に没する所，それが佐賀県浜玉町から福岡県二丈町にかけての峻厳な海岸線となる。西に今昔違わぬ名勝虹の松原と鏡山麓に広がる唐津平野を抱き，東に現在に名を残す深江から旧糸島水道を経て怡土の平野へと続く。筑前国最西端で，肥沃な両地帯の中間に位置する今回調査の各地点は，福井・吉井・大入の小沖積地を控えるとは言え，その実態は極めて生産・交通経済の発展に困難を伴なう地理的環境に置かれているといわざるを得ない。古えより政治的・経済的な面において中心的に位置付けられることも無かったことも首肯できる。戦国時代より東西両地帯より度々脅かされた史実もあり，藩制期を経て現在でも浜玉方面との人的・経済的繋がりも強い。

二丈町内には，旧石器時代の様相は知られておらず，縄文時代になって，今回調査分の広田遺跡を除いて僅かに数地点で遺物が採集されるのみで，その内容は殆んど知られていなかった。今回の調査で，豊富な資料を得ることが出来，北部九州の有数の縄文晩期遺跡として今後あらゆる面で注目されるとなろう。弥生時代に入ると，現砂丘地帯を中心に箱式石棺墓，甕棺墓等が20基近く発見されている。中でも，福吉駅裏の沖積地（旧砂丘か）に発見された西古川甕棺墓群は細形銅剣や鉄槍（異式鉄剣）等と舶載品と思われる副葬品を有し，またその甕棺は吉井式と呼称され学界に知られている。福井にも特異な後期甕棺が発見され福井式と呼ばれている。今回竹戸遺跡発見の具体的弥生集落の様相は，今後当地域における研究の礎となるものである。古墳は，群集墳を中心に多く発見されている。東の銚子塚・二塚等の前方後円墳を盟主とする一大勢力地帯と異なり，小平野の中心となるべきものは発見されていない。今回調査した，主体舟形石棺が県指定文化財となっている長須隈古墳の如く，全く周辺に背景となる生産性基盤を見出し得ない立地のものさえ在り，その有する特殊な意味を考えざるを得ない。歴史時代に入ると平安期木造仏像3軀が国指定重要文化財として浮嶽神社に残り，古代駅家の佐尉駅が近辺に想定されている。今回調査の各地点では奈良時代～戦国期に至るまでの遺物・遺構が多くみられ，その様相がかなり明らかになった。戦国期吉井浜の戦，鹿家の合戦等が記録にみられ，東西両地帯の勢力を包み込んだ小競り合いの舞台となったのである。

（中間研志）

（参考文献）

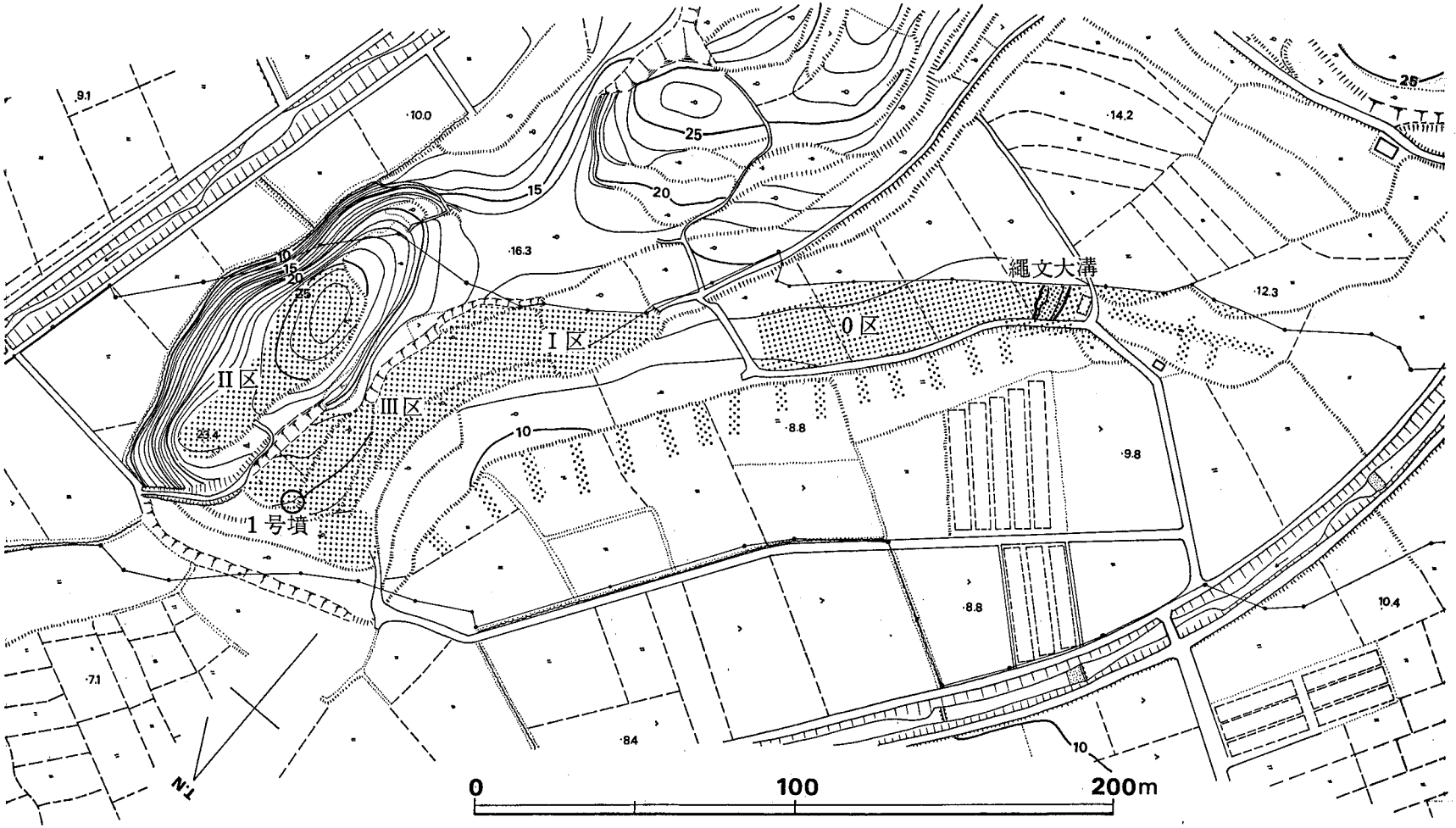
- 中山平次郎「筑前国糸島郡福吉村吉井発見物と推定すべき銅剣及び異式の鉄剣」考古学雑誌　15—4　1925
- 大神邦博「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」古代学研究53　1968
- 『二丈町誌』
- 二丈町教育委員会「二丈町文化財地図・地名表」　1974
- 文化財保護委員会「全国遺跡地図（福岡県）」　1968



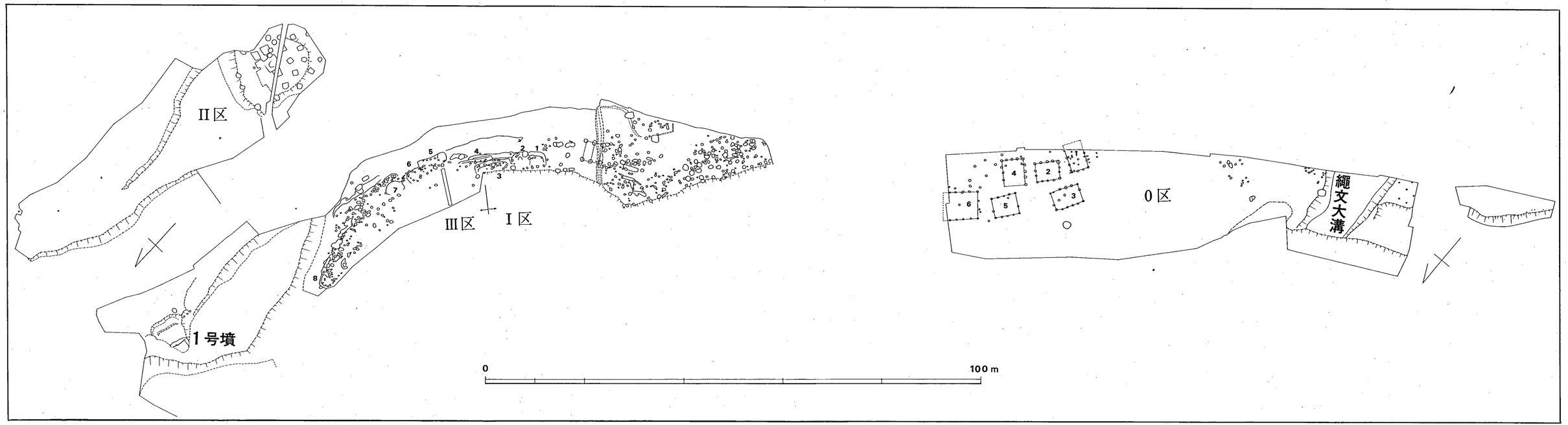
第 2 図　水付古墳・竹戸・広田遺跡周辺地図　(1/10,000)

Ⅲ 各遺跡の調査

1 広田遺跡0区



第3図　広田遺跡周辺地形図　(1/2,000)



第4図　広田遺跡遺構全体図　(1/600)

広田遺跡0区の調査

1. はじめに

二丈町大字吉井(よしい)字広田(ひろた)所在の広田遺跡0区は，福吉川とその支流東川に挟まれた標高30m程度の丘陵西側裾部に位置し，現在の福吉川流路と約100mの距離を有し，標高11m前後を測る。

この遺跡部分は，二丈・浜玉道路のインターチェンジ用地内に含まれ，料金徴収所南東方の下り方面進入路・インター側道に計画されたため，事前発掘調査を要した。第1次発掘調査を昭和53年10月1日～12月2日に実施し，この期間中に調査し得なかった部分の調査は第2次発掘調査として昭和54年3月1日～3月27日の期間に実施した。（小池史哲）

(1) 第1次調査の経過

調査は，広田遺跡全体の担当者である中間技師が0区の試掘中途で負傷し，その後の遺構確認調査を馬田技師が受け継いだ。しかし，その直後に近接したバイパス工事用進入道内に所在する竹戸遺跡の調査が併行したので，全面調査を再度小池技師に引き継いだ。

広田遺跡Ⅲ区出土遺構の実測後半で，未調査のⅠ区東側蜜柑園を0区として，ユンボーによる試掘を行なった。0区は北側と西側に農道が通り，その外域は共に一段下がって水田となっている。そこで，密柑園の中央部に東西トレンチを，約幅2m×100mで，またその間に南北トレンチを3ケ所設定した。その結果，東西トレンチ東半部に数ケ所の柱穴様小ピットが，西半部で溝状の黒色土の落ち込みが確認された。次に小ピットの広がりを知る為，中央部の南北トレンチを拡大し，若干の小ピットが現われたが，まとまりのあるものではなかった。第6図のE1・W1区に相当する。また黒色土の排土中からは，縄文土器片・石器片が見出された。

出土した遺物が縄文時代後・晩期の黒色磨研土器や粗製甕を含み，扁平打製石斧に使用痕が認められるなど，その供伴関係や遺構の性格を明らかにする必要があり，担当者の負傷で後日の再開も協議したが，工期との関係で続行することになった。東半部からユンボーで表土除去を行ない，大溝と埋甕を確認し，トレンチ壁の清掃を行なった。

清掃前の観察で，大略砂質土と黒色粘質土が相互に順次数枚にわたって堆積している状態であったので，清掃作業中に出土した遺物は，上から順次黒色土に対して1・3層等の奇数層序番号名を，砂質土に対して2・4層等の偶数層序番号名を付した。また，同一堆積状態ではあるが，漸移して砂粒子の大きさや色調に変化が認められる場合は，2a・2b層の如くに細分して取り上げつつ，セクションラインを引いた。またその両壁を比較して，同一黒色土層の上位層ではあるが，両壁間に若干の差異が認められる場合，例えば7層上位層を6a・6c等に

一応の区別をした。この基本的層位を用いて，東西トレンチの7層以下を掘り下げ，E・W区をれぞれ小グリットに分け，大略E区を終了し，後続の担当者に引き続いたが，北壁の崩壊に合い，その後のW区発掘での層位中の偶数層序に一部の統一を欠く結果となった。(馬田弘稔)

10月23日以降は，埋甕の調査と，E列各区の大溝下面の遺物出土状況写真撮影及びW列各区の掘り下げ作業から始めた（図版1－2）が，10月27日からの降雨で調査区全域にわたる冠水を被ってE列南壁・トレンチ北壁等が崩壊し，W列各区の層位とE列各区の層位の対照が難行すると共に，出土層位不明な遺物を生じさせる結果を招いた。

11月上旬からは，W列各区の下層を掘り下げると共に，小竪穴の調査・平板測量・土層断面図の作成を実施して，W列の土層観察用の畦を取り除いて，10日にはW列下面の遺物出土状況を写真撮影した。なお遺構実測の基準は，道路計画の5K600の杭から5K700の杭を直線で結んだ軸線とこれに南東方向に直交する軸線を基準とした。しかし中旬に至って再度降雨による冠水を受け，今度は掘り下げが進んでいたために水を汲み出しても湧水が激しく，掘り下げ作業がほぼ終了し全景写真を撮影できるまでに日数を要した。このあと大溝床面下の2ケ所で深層掘削を行ない，大溝形成の状況を確認して調査区を埋戻した。

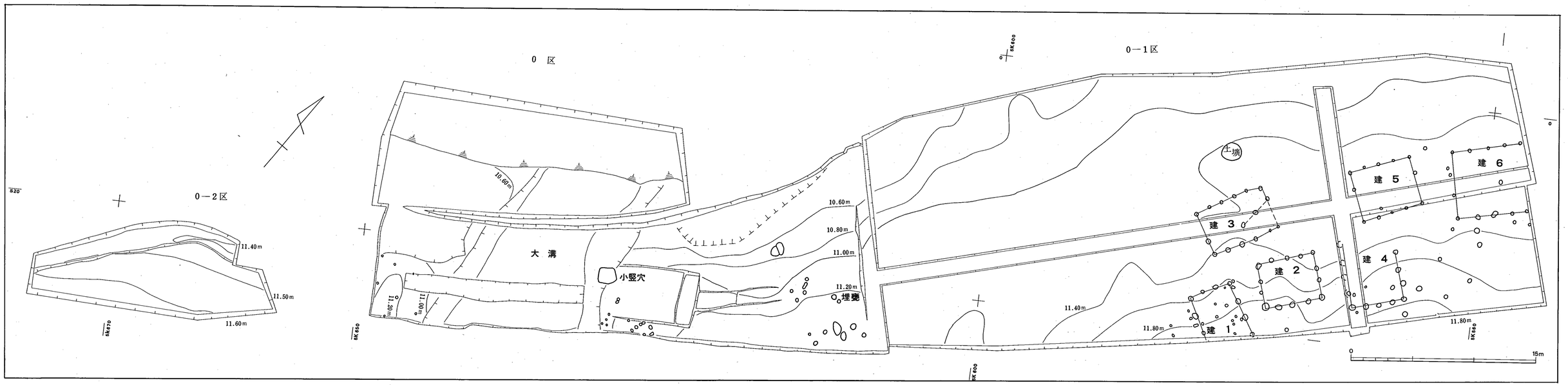
(2) 第2次調査の経過

第1次調査によって縄文時代の大溝が南北方向に延び，北側は農道敷にも及ぶことが確認できていた。しかしこの農道は0区南方一帯に広がる蜜柑園に通じているため，農道を既掘範囲内に迂回させて農道敷を調査することにした。この部分は農地開削によって上部が削平された上に砂利等を再堆積させており遺物包含層はかなり薄くなっていて北側水田部分では水田開削による大きな段落ちを生じている。調査では包含層を第1次調査時の堆積土の観察記録と記憶によって区分したが，第1次調査区域は既に埋戻していたため正確に対比できた訳ではない。B2・3区において若干の層位対比のズレが生じている可能性がある。

なお大溝の調査では，生活自然環境復原を目的として自然科学系の調査をも実施することにし，花粉分析調査を畑中健一教授，出土種子類の調査を粉川昭平教授にお願いした。

また0区とI区（約100m東方）間のトレンチに柱穴様ピットが検出されており，0区埋甕周辺での遺構の有無を確認する必要もあったので，この部分を全面発掘することにした。第1次調査時の0区と区別するために0－1区と枝番号を付して仮称する。この部分の調査では，東半部に弥生土器・土師器・須恵器の細片が混在する包含層があり，この包含層中では検出できなかったが下面で土師器片の含まれた土壙1基と掘立柱建物群が検出できた(図版2－1)。

一方，0区大溝の堆積状況が南西方向から傾斜してみられたことから，縄文時代の居住遺構は南西方向にあると想定し，南西方向で一段高くなる水田（標高12.2m）の道路工事計画範囲を全面発掘することにし，0－2区と仮称した。この地区の調査では，打製石斧片と，近世陶磁器細片が出土したのみで，遺構としても腐敗・炭化の進んでいない杭列が検出された以外何



第5図　広田遺跡0区遺構配置図　(1/200)

らの遺構も確認できなかった。杭列は水田の区画に沿って低い崖の下部にあたる位置にみられることから，崖の崩壊を防ぐ役割を果していたものとみられる（図版2－2）。なお0区と0－2区間は農道と農薬散布用溜桝があるため調査を実施し得なかった。

2. 縄文時代の遺構と遺物

前述したように，0区と総称する区域は，全長 120m以上の部分を調査対象としている。第2次発掘調査の進行に伴って東側調査区を0－1地区（標高10.53～11.82m），西側調査区を0－2地区（標高10.8～11.0m）と枝番号を付して一応区別しており，この意味からは当初0区とした地区を0－0地区としなければならないが，遺構遺物の発見がこの地区に濃密に集中し，他の地区ではそれほど顕著でないため，0－0地区とすべき地区を0地区と略している。0区は標高10.5～11.2mである。

縄文時代に属する遺構としては，0区西寄りに位置する大溝と，大溝東岸に位置する小竪穴，及び0区東寄りの大溝東方約18mに占地する埋甕の3遺構がある。遺物は大溝の部分に集中してみられ，0－1地区，0－2地区では有無に近い。

(1) 大　　溝（図版4～12，第6図）

ここで大溝と称する遺構は，むしろ大溝状遺構という名称を使用すべきであったかも知れない。目下のところ人為的な掘削によって形成された溝であるという証左はなく，台地麓部を切り込む小さな谷が埋没して浅い凹地となる自然形成的な溝として成立している。

調査区域内では，この遺構の末端と東西の肩部を検出しえたが，上流部に相当する部分については調査区域外に及ぶために検出しえなかった。しかし，出土した多量の土器・石器等の遺物は，この溝から出土し，主として西側の肩部から東に広がり，遺物自体がローリングを受けることなく，炭化物・焼土等も含まれることから，居住地域とこの溝が至近距離にあったことを想定させる。またこの遺構内堆積土は幾つかのまとまりをみせる層序を形成し，時期的な変遷を把握することも可能で，出土遺物中には日常生活用具・祭祀的な用途を帯びる用具等が含まれており，生活に密接に関係していたと想定させる遺構であるため，敢て大溝という名称を付けている。

大溝の上部は後世の削平によって本来の高さよりも低くなっているとはみられるものの，上縁の標高は，西岸南部で10.9m・西岸北部10.5m・東岸南部10.8m・東岸北部10.5mを測り，底面はおおむね10.3～10.4m位になる。上面幅は南部で13m，北部で10m，底面幅は9.5～6.5mを有し，緩やかな肩となる。

大溝の北端部は，0.7m程度下がる段落ちとなる。この段落ちは，福吉川の氾濫原に相当し洪水と水田耕地開削も加わって侵蝕されたものとみられる。段落部の調査を実施した結果，標高 9.5m位で水田床土となり，床土下はガラス・瓶片・近世陶器片を含む腐植物・粘性土混じりの強砂が約 0.5mつづき礫まじりの強砂層に達するが，冠水を被り，排水が困難であったために，調査を打ち切った。

大溝は，周辺の地形からみて，南方から北方に流下する谷に形成されたものと考えられるが，調査区域内では，ほぼ南北方向になり，南北14m間を調査したことになる。この間での溝下面の状況は，南端と北端の比高がほとんどみられず，勾配を算出することが出来ない状況にある。

なお，大溝は第6図の如く区割りしている。遺構確認のため，重機によって任意に掘削した試掘溝（南北トレンチと称しているが，むしろ東西に近い方向で設定している。当初方位を確認しないまま南北に近いと思い誤りによるものである。）の南側をE列・北側をW列とし，大溝東方で直交する短いトレンチの西端を基点として西側へ約 3.5m間隔に区割りして1～6列とした方割区割によるもののうち，大溝部分に相当するE2～E6区・トレンチ2区・W2～W5区が第1次調査時の区割である。第2次調査時の区割は，道路建設用の本線基準杭の5K650の南20mの点を基点とし4m方眼を組み，南16～20mをA列・南12～16mをB列，5K622～5K650間を1～7列に区割りした。このうち大溝部分の小地区はA2～A5区，B2～B4区が相当する。

1　層　　序（第6図）

大溝に関する層序については，当初調査区域の南壁での土層堆積を含めて，断面土層図を作成する予定であったが，前述したように調査区全域にわたる冠水を受けた際に壁面が崩壊したため作成しえず，図示した6ケ所の土層図のみを作成したので，これに基いて概述することにする。なお耕作土表面は11.0～11.8mの標高を有す。

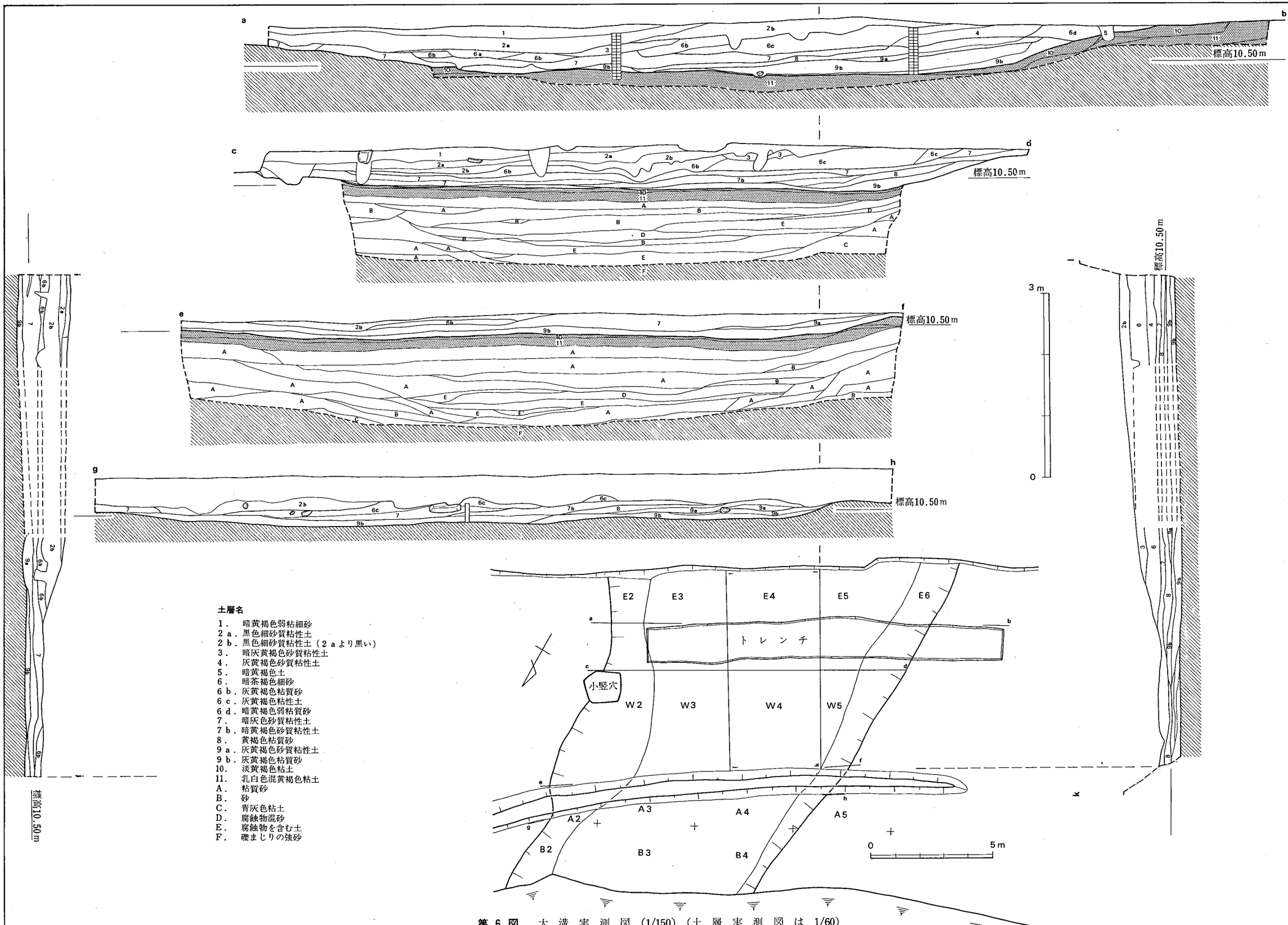
a－bは試掘溝南壁での土層堆積状況，c－dはW列の堆積状況観察用のセクションベルト南壁で，地山下の深層試掘溝の北壁を反転投影させて加えた状況，e－fは第1次調査区域北壁で深層堆積状況を含めた土層堆積，g－hは第2次調査区域南壁，i－j・k－lはこれらに直交する方向の土層堆積状況である。

これらの堆積状況は，a－b間の堆積状況を基準として11の層位に区分でき，この中でも幾つかの層では更に細分できるため合計17の層に分ける結果になった。

1　第1層　暗黄褐色を呈し粘性の弱めな細砂からなる。ややガチガチに固まった感じがある。大溝の南東部にみられる。

2　第2a層　やや褐色系の色調を帯びる黒色細砂質粘性土。土溝の南東部にみられる。

3　第2b層　2a層より黒っぽい色調を呈し，2a層より下位にやや広い範囲に及ぶ。



土層名

1. 暗黄褐色弱粘細砂
2 a. 黒色細砂質粘性土
2 b. 黒色細砂質粘性土（2 a より黒い）
3. 暗灰黄褐色砂質粘性土
4. 灰黄褐色砂質粘性土
5. 暗黄褐色土
6. 暗茶褐色細砂
6 b. 灰黄褐色粘質砂
6 c. 灰黄褐色粘性土
6 d. 暗黄褐色弱粘質砂
7. 暗灰色砂質粘性土
7 b. 暗黄褐色砂質粘性土
8. 黄褐色粘質砂
9 a. 灰黄褐色砂質粘性土
9 b. 灰黄褐色粘質砂
10. 淡黄褐色粘土
11. 乳白色混黄褐色粘土
A. 粘質砂
B. 砂
C. 青灰色粘土
D. 腐蝕物混砂
E. 腐蝕物を含む土
F. 礫まじりの強砂

第 6 図　大溝実測図（1/150）（土層実測図は 1/60）

第6図 14頁の次

4　第3層　暗灰黄褐色砂質粘性土。E3区・W4区にわずかにみられる。

5　第4層　灰黄褐色砂質粘性土。E5区を中心とした大溝南西部に限られるが，第6層より下位で第6d層より上位になる。第6d層が第6層と色調が似かよっており，6層より後出するとみたため順が逆転している。

6　第5層　暗黄褐色土。部分的にあり第6d層より暗い色調で砂質弱粘性土。

7　第6層　暗茶褐色細砂。大溝東南寄りの一部にわずかにある。

8　第6b層　灰黄褐色粘質砂。大溝東南部にやや広がる。

9　第6c層　灰黄褐色粘性土。大溝西肩部と東南部を除いた全域に広がる。

10　第6d層　暗黄褐色弱粘質砂。大溝南西部にみられる。

11　第7層　暗灰色砂質粘性土。木炭をやや含み，部分的に多い処もある。ほぼ全域に広がる。

12　第7b層　第7層の下部に暗黄褐色を呈する砂質粘性土がみられ，第7層と区別した。木炭を多く含む。

13　第8層　黄褐色粘質砂。弱粘性で部分的に焼土・灰を混じえる。大溝南寄りに広がる。

14　第9a層　灰黄褐色砂質粘性土。部分的に暗灰色になる。木炭を多く含み遠くから眺めると黒っぽい色調に見える。大溝東南部を除いたほぼ全域に広がる。

15　第9b層　灰黄褐色粘質砂。9a層より木炭の含む量が少なく淡い色調で褐色度が強い。ほぼ全域に広がる。

16　第10層　淡黄褐色粘土。遺物を含まなくなり一応地山面と考えられる。全域にみられる。

17　第11層　乳白色混じり黄褐色粘土あるいは灰色を呈する粘土。遺物は含まない。

これより下位は，砂を主体とする堆積をみせ，人為の全く加わらない堆積とみられる。おそらく谷部が流水を伴って埋没したものであろう。この部分は粘質の細かい砂・粘性の少ないやや粒の粗い砂・腐蝕物・腐植物を混じえる砂等が互層となって堆積しているが腐蝕物は比較的下位にみられる。また下面は中央部でやや大きな礫混じりの強砂，両肩部では青灰色・淡い卵黄色の粘土となる。

礫混じりの強砂層では，スコップをたてることが困難な程に礫が組み合っており，これより下位の状況まで観察することが出来なかった。なおc—d間での強砂層上面と，e—fのそれとの比較による勾配は 55/1000となり，北へ流下している。

これらの層序を，堆積状況でまとめると，

1群　1～3　黒っぽい色調の細砂質粘性土。

2群　4～9　灰黄褐色系の色調を呈す粘質砂。

3群　10・11　暗灰色系の砂質粘性土。木炭をやや含む。

4群　12～14　灰黄褐色系の粘性土。木炭・焼土・灰を含む。

5群　15　灰黄褐色の粘質砂。

6群　16・17　ほとんど遺物を含まない粘土。

7群　A～E　旧地形の谷を埋める堆積土。

8群　F　礫混じりの強砂。

なおg－h間の堆積土では9b層に前後関係を考えうる状況がある。あるいは東寄りの9b層は西寄りの8層ないしは7b層に近いと考えるべきかもしれない。土器片の接合資料の中には，W4区の7層出土資料とA3区9b層出土資料の接合があり，この部分の層序については群のズレを生じている可能性がある。分割調査で相互の比較が充分になし得なかったことも起因するが，慎重を欠き充分な検討を実施すべきであったと悔まれる。

2　遺物出土状況（図版4～12）

大溝内では各層にわたって縄文土器片・石器等が，花崗岩あるいはアプライト質の円礫等と共に，出土している。各遺物の出土層位及び地区については各遺物の項で表等によって触れることにして，ここでは図版に掲載した遺物出土状況を若干補足する。

図版4では，第2次調査時における大溝上層での出土状況を示しており，大溝中央部と西肩部でややまとまった状況がわかる。169土器，131磨製石斧等がみられる。図版5－1は西肩部付近での出土状況である。図版5－2は第1次調査時におけるW3区での第7層の遺物出土状況で，東南寄りにまとまった遺物の出土があり，156・161土器やD3土製紡錘車等が含まれる。なお図版7－2上でその部分拡大をする。

図版6は調査区南端部の下層での遺物出土状況である。1はE4区の状況でD1の土製紡錘車も含まれ，図版8－2下に部分拡大している。2はE5区の状況で，6・34・59土器，U3石皿等がある。図版7－1はA4区・E4区での出土状況の部分写真で，7－2はW3区・E5～6区境での出土状況である。E5～6区の重った石斧はH30・31で，いずれも南方に光沢のある刃部を向けている。図版8では土製紡錘車の出土状況を示す。

図版9・10は大溝下面での遺物出土状況である。第1次調査時のW3～5区側で遺物の量が少なめになっているのは，土器の小破片をかなり除いたことによる。なお図版11－1はW4区の大溝下面の状況で，石柱や御物石器が地山面に接して出土した状況が窺える。遺物を全て取り除いた大溝は図版12の如くである。

3　縄文土器（図版13～26，第7～49図，表1・2）

総量にして，パンコンテナ約 200箱，破片の重量 600*kg*以上に及ぶ土器が出土した。重量による精製土器・粗製土器の比は 6：94になる。各層での出土量については表1に示すが，この中には実測図・拓影に供した資料を含んでいない。表の数値による精製土器の占める割合は，Ⅰ群で口縁部破片11.4%・底部破片 3.6%・重量 4.7%，Ⅱ群で口縁部破片 9.8%・底部破片

5.1%・重量 3.9%，Ⅲ群で口縁部破片 10.2%・底部破片3 .3%・重量４%，Ⅳ群で口縁部破片24.1%・底部破片6.1%・重量８%，Ⅴ群で口縁部破片41%・底部破片3.5%・重量11.7%となる。これらの数値でそのまま個体数の比を算出することは出来ないとしてもある程度の傾向を窺うことが可能であろう。

なお表２は，実測図・拓影に供した資料の，出土地区・層位を示す。

これらの縄文土器は，深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・椀形土器・注口土器等の器種がある。各土器については各群毎に記述するが，煩雑になるので器種毎の分類をまず一括して記述し，各群では補足的な記述に留めることにしたい。

深鉢形土器

口径に比して器高が優る形状を呈する器形を深鉢形土器とした。甕形土器という名称にふさわしい器形のものも含まれるが，多くの破片を深鉢形・甕形と区別するのは困難な面が多く，混乱を招く結果となりかねない。このため従来から汎用される深鉢形土器の名称を用いて一括している。

深鉢形土器は，その形態によって10種類に区分できる。

１類　内彎する頸部から屈折して口縁部が立ち上る器形で，口唇端部を平坦にさせたもの。口唇端部に施文した例も平坦面を有す例に含める。

２類　内彎する頸部から屈折して口縁部が立ち上る器形は１類同様であるが，口唇端部が丸味をもっておさまるもの。

３類　内彎する頸部からそのまま外反する口縁部になる器形で，口唇端部が平坦になるもの。

４類　３類同様の器形で，口唇端部が丸味をもつ点が異なる。

５類　外反する口縁を有す器形であるが，３・４類の如く大きく内彎せず緩やかな頸部となるもので，口唇端部が平坦になるもの。

６類　５類同様の器形を有し，口唇端部が丸味をもつもの。

７類　口縁から直接胴部に移行し頸部を形成しない器形で，口唇端部の平坦なもの。

８類　７類同様の器形で，口唇端部が丸味をもつもの。

９類　口縁部が内傾し，いわゆるキャリパー形口縁に近い器形を有し，口唇端部が平坦になるもの。

10類　９類同様の器形で，口唇端部が丸味をもつもの。

この分類には，口縁部の形状としての波状口縁・平縁の区別を加えていない。退化した波状口縁ともみられるわずかに山形に盛り上る波状頂部を有す例が多く，破片資料では波状を呈すか否かの区別のなしえないものが多いために分類項目から除外している。

一方，器面の調整方法では４種類に区別できる。

ａ類　内外面共に条痕が施される例。

表1　大溝出土土器の量的分布

Ⅰ群		精製土器			粗製土器			合計		
地区	層位	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部
E3	9b	225	3	1	550		2	775	3	3
E4	9b	110	3		5,300	4	3	5,410	7	3
E5	9b	600	3		5,550		6	6,150	3	6
トレンチ	9b	380	5		5,700	12	6	6,080	17	6
W2	9b	40	1		4,050	27	2	4,090	28	2
W3	9b	240	1	1	16,650	67	31	16,890	68	32
W4	9b	520	7		14,700	62	18	15,220	69	18
W5	9b	880	7	1	14,400	47	19	15,280	54	20
A4	9b	820	8	1	13,100	83	25	13,920	91	26
B4	9b	730	6	1	13,700	48	22	14,430	54	23
A5	9b	170	2		2,000	8		2,170	10	
合計		4,715	46	5	95,700	358	134	100,415	404	139

Ⅱ群		精製土器			粗製土器			合計		
地区	層位	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部
E4	9a				1,000	2	1	1,000	2	1
E5	8	55		1	2,100	3	3	2,155	3	4
	9a	300	2	2	8,750	2	8	9,050	4	10
E6	9a	80	1		4,400		1	4,480	1	1
トレンチ	8	70			2,700	14	4	2,770	14	4
	9a	265	5	1	5,800	33	6	6,065	38	7
W3	7				2,200	5	6	2,200	5	6
	8	100			2,550	13	2	2,650	13	2
W4	7	30			19,050	97	7	19,080	97	7
	8	250	3	1	9,250	41	9	9,500	44	10
	9a	750	1		3,900	30	6	4,650	31	6
W5	8	260	2		7,210	43	4	7,470	45	4
	9a	180	5		2,700	12		2,880	17	
B2	9b	130	2		3,950	10	7	4,080	12	7
A3	9b	290	3		4,900	28	2	5,190	31	2
B3	9b	1,000	12		14,500	30	15	15,500	42	15
A4	8	170	3		3,000	14	9	3,170	17	9
	9a	90	2		3,100	10		3,190	12	
B4	8	355	3		6,700	14	1	7,055	17	1
B4	9a				1,450	4	1	1,450	4	1
A5	8				100		1	100		1
合計		4,375	44	5	109,310	405	93	113,685	449	98

Ⅲ群		精製土器			粗製土器			合計		
地区	層位	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部
E2	7	45	1					45	1	
E3	7	155	0	1	500		4	655		5
E4	7	700	10		10,650	8	10	11,350	18	10
E5	7	50			1,500		2	1,550		2
6E	6d	20			2,200			2,220		
トレンチ	7	470	5		24,900	55	26	25,370	60	26
トレ2G	7				1,500	8		1,500	8	
W2	7	90	1		2,350	13	3	2,440	14	3
W3	7	440	4		34,050	219	46	34,490	223	46
W4	7	2,030	14	1	35,000	126	60	37,030	140	61
W5	7	320	3	2	6,600	22	13	6,920	25	15
B2	8	350	4	1	3,200	3	3	3,550	7	4
	9a	840	7	1	6,900	19	10	7,740	26	11
A3	9a	190	4	1	5,400	29	9	5,590	33	10
B3	9a	340	6		7,300	23	7	7,640	29	7
A4	7b	120	2		1,200	2	3	1,320	4	3
B4	7b	120	2		6,100	19	9	6,220	21	9
A5	7b	40	0		800	5		840	5	
合計		6,320	63	7	150,150	551	205	156,470	614	212

Ⅳ群		精製土器			粗製土器			合計		
地区	層位	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部
E2	6	15	0					15	0	
E3	3	280	3		2,700	6	4	2,980	9	4
E3	6b	275	3		4,200	4	5	4,475	7	5

b類　外面のみ条痕が施され，内面はナデで無文になる例。

c類　外面はナデ仕上げで無文になるが，内面に条痕のみられる例。

d類　内外面共にナデ仕上げで無文になる例。

鉢形土器

口径と器高が同程度の長さになる形状のものを鉢形土器として一括した。鉢形土器は器形によって3種類に区分している。

1類　大きく内彎する頸部から屈折して口縁部が立ち上るもの。深鉢形土器1・2類と対応

E 4	3	145	3		2,050	4		2,195	7	
E 4	4	130	0	1	4,000	10	2	4,130	10	3
E 4	6 b	390	1		7,210	14	7	7,600	15	7
E 4	6	75	1		1,330	3	1	1,405	4	1
E 5	4	50			5,400	12	4	5,450	12	4
E 5	5				500	3		500	3	
E 5	6	400	4		8,800	4	5	9,200	8	5
E 6	4	12						12		
トレンチ	3	190	1		3,700	20	5	3,890	21	5
トレンチ	6 b	160	1		2,700	4	6	2,860	5	6
トレ2G	3				350	—	1	350		1
トレ2G	6 b	10	2		980	6	1	990	8	1
W 2	6 b	360	5		5,100	16	6	5,460	21	6
W 2	6	100	2	1	470	1	1	570	3	2
W 3	3	15	1		500	4		515	5	
W 3	6 a	650	6		4,850	15	4	5,500	21	4
W 3	6 b	1,105	12	2	16,530	62	11	17,635	74	13
W 4	3	40	1	1	1,500	3		1,540	4	1
W 4	4	265	9		5,100	23	6	5,365	32	6
W 4	6 a	300	4		11,850	43	10	12,150	47	10
W 4	6	70			2,600	14	2	2,670	14	2
W 5	4	600	4		2,650	15	4	3,250	19	4
W 5	5	152	1		1,500	4	2	1,652	5	2
W 5	6 b	1,600	8	3	185	1		1,785	9	3
W 5	6				4,300	22	4	4,300	22	4
A 2	7 b				300	1	2	300	1	2
B 2	7	80	2		800	2	1	880	4	1
B 2	7	230	7		1,600	3	2	1,830	10	2
B 2	7 b	710	11		5,500	16	12	6,210	27	12
A 3	7	70			550	1		620	1	
A 3	7	1,010	13	1	4,600	21	5	5,610	34	6
A 3	7 b	360	5		1,900	8	2	2,260	13	2
B 3	7	2,090	31		11,500	42	13	13,590	73	13
B 3	7 b	140	3		10,000	33	12	10,140	36	12
A 4	7	310	7		3,300	11	4	3,610	18	4
A 4	7	370	2	1	4,530	20	5	4,900	22	6
B 4	7	260	0		4,600	11	4	4,860	11	4
合　計		13,019	153	10	150,235	482	153	163,254	635	163

V 群		精製土器			粗製土器			合　計		
地区	層位	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部	重量g	口縁	底部
E 2	1	70	1		1,700			1,770	1	
	2 a	110	1		1,050	3	1	1,160	4	1
	2 b	95	3		900	3	2	995	6	2
E 3	1	90	4		700	5	1	790	9	1
	2 a	210	16		4,700	21	26	5,910	37	26
	2 b	355	5		2,800	5	4	3,155	10	4
E 4	1	400	6		1,900	3	1	2,300	9	1
	2 a	475	5	1	4,900	17	6	5,375	22	7
	2 b	1,585	13		12,400	25	9	13,985	38	9
E 5	2 b	340	2		3,350		5	3,690	2	5
トレンチ	2 a				830	4	1	830	4	1
	2 b	680	7		3,400	5	4	4,080	12	4
トレ2G	1	300	3	1	530	1	2	830	4	3
	2 a	300	2		1,570	2	3	1,870	4	3
	2 b	70	1		650	3	—	720	4	
W 2	1	45			100		2	145		2
	2 a	25			350	2		375	2	
	2 b	120	1	1	1,350			1,470	1	1
W 3	1	240	4		2,340	6	3	2,580	10	3
W 3	2 a	450	5	1	3,750	20	5	4,200	25	6
	2 b	490	4		4,250	4	6	4,740	8	6
W 4	1	240	8		2,600	3	4	2,840	11	4
	2 a	200	2		1,700	4	2	1,900	6	2
	2 b	390	6		2,500	9	3	2,890	15	3
W 5	2 b				200			200		
A 2	上層	90	2		650		1	740	2	1
B 2	上層	60			850			910		
A 3	上層	70			350		2	420		2
B 4	上層	250	2		3,500	6	5	3,750	8	5
	上層	155	2					155	2	
A 5	上層	10			1,200		11	1,210		11
合　計		8,915	105	4	67,070	151	109	75,985	256	113

総　量		37,344	411	31	572,465	1,947	694	609,809	2,358	725

する器形である。

2類　大きく内彎する頸部からそのまま口縁部に移行するもの。深鉢形土器3・4類と対応する器形である。

3類　口縁部から直線的に底部に至るもの。

鉢形土器1類では器面に平行凹線あるいは沈線をめぐらせ，波状隆起部等に押点を施す例がみられることから，この文様を分類すると，沈線あるいは凹線が，

a類　口縁部外面に2条・肩部に2条めぐらされる例。

b類　口縁部外面に2条・肩部に1条めぐらされる例。

c類　口縁部外面に2条めぐらされるが肩部にはみられない例。

d類　口縁部外面に1条・肩部に2条めぐらされる例。

e類　口縁部外面に1条・肩部に1条めぐらされる例。

f類　口縁部外面に1条めぐらされるが肩部にはみられない例。

g類　口縁部外面に3条以上めぐらされる例。

h類　口縁部にはみられないが肩部に2条めぐらされる例。

i類　口縁部にはみられないが肩部に1条めぐらされる例。

j類　口縁部外面・肩部共にみられない例。　に区分できる。

一方，押点（押圧痕）の付される資料は，その形から，

ア類　栗の実の如き三角形（扇状）　　イ類　横長な楕円形

ウ類　小円形　　エ類　縦長な楕円形

オ類　縦長な方形　　カ類　押点の代用ともみられる沈線等

に区別できる。なお2類の資料中にもこれらの分類に対応できる例が若干ある。

浅鉢形土器

口径に比して，器高が⅓程度の長さになる形状のものを浅鉢形土器として一括した。浅鉢形土器は器形によって2種類に区分している。

1類　大きく内彎する頸部から屈折して口縁部が立ち上るもの。鉢形土器1類に対応できる。

2類　頸部を形成せずに胴部最大径の屈折部から直接立ち上る口縁部に移行するもの。

1類は鉢形土器1類の文様分類が直接あてはまるが，2類では直接相当しない（例えば口縁部と肩部が区別できないためa・b・d・e類は考えられない）。しかし混乱を除くために1類の文様分類中のc・f～j類の分類項目等を援用することにする。

椀形土器

椀形土器では器形での大きな変化はみとめられない。文様で分類するとすれば，口縁部の沈線あるいは凹線が，

a類　外面に2条・内面に2条めぐらされる例。

b類　外面に2条・内面に1条めぐらされる例。

c類　外面に2条のみめぐらされる例。

d類　外面に1条・内面に2条めぐらされる例。

e類　外面・内面共に1条めぐらされる例。

f類　外面に1条のみめぐらされる例。

g類　3条以上めぐらされる例。

h類　内面にのみ2条めぐらされる例。

i類　内面にのみ1条めぐらされる例。

j類　内外面共にみられない例。

に区分でき，押点の形状については鉢形土器・浅鉢形土器1類の分類に含まれるので略す。

注口土器

全体的にみても数量的に極めて少ない。完形資料がなく，注口土器と断定しうる資料は注口部破片のみである。これ以外には一応，精製土器で口縁部がほぼ直線的に内傾する資料と若干の底部破片を注口土器破片と考えている程度である。

その他

前述の器種に直接あてはまらない資料が若干検出された。

なお実測図・拓影の番号は図版中の番号と対応するが，図版中にNo.を付した番号の例は実測図等に掲載していない資料である。

(1)　**I群土器**　(図版13～16，第7～19図)

第5群土層出土土器を一括してI群土器とする。

深鉢1b類　良好な資料は少ないが(27)がこの類に含まれる。口唇端部がわずかに外側に屈折し，端部上面に1条の沈線が施される。

深鉢2a類　(25)，口縁部外面に2条の沈線がめぐり，頸部には沈線状の条痕もみられる。

深鉢3b類　(11・30・49)，11は肩部に2条の沈線がめぐり，上下に並ぶ三角形の押点がみられる。30は波状口縁を呈す。49は深鉢5b類に近い器形である。

深鉢3c類　(33)の外面はナデ仕上げ，内面は板状原体によるナデを施し上半部に若干条痕がみられる。

深鉢4d類　(12・35)，35の外面の胴下半はいわゆるナデで仕上げられるが，頸部は横方向の板状原体によるナデ（板ナデ）で調整される。また内面も胴部を板状原体でカキ上げた状況がみられる。

深鉢5a・5b類　(29・50)，共にいわゆる如意状口縁に近い形状を有すが，29は内外面共にアナダラ条痕が施され口唇端部にも条痕がみられる。50は外面にやや雑な条痕が施され，内面板ナデ。

深鉢6a類　(52・55・63)，55内面の条痕は上半部のみにみられ下半部は板ナデが残る。

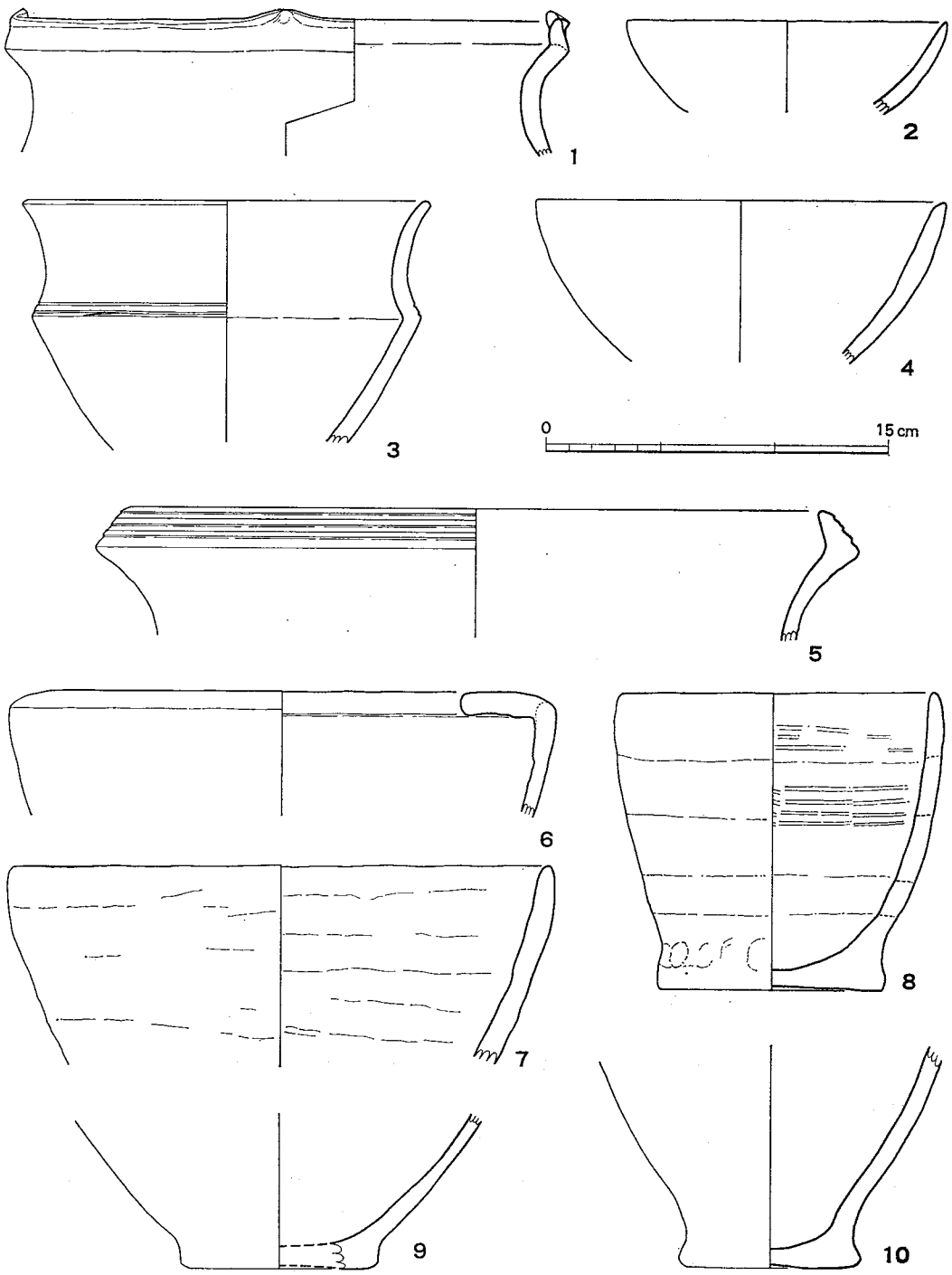
深鉢6b類　(28・54・56)，いずれも外面にアナダラ条痕，内面に板ナデがみられるが，28の口唇上面に条痕のなごりと思われる1条の条線がみられる。

深鉢6d類　(58・61)，58は8d類に近い形であるがわずかに外反する口縁である。61の胴下半は条痕と同様の手法を用いてカキ上げているが条痕の粗いイメージよりもむしろ無文に近い感じを受けるためd類に含めている。

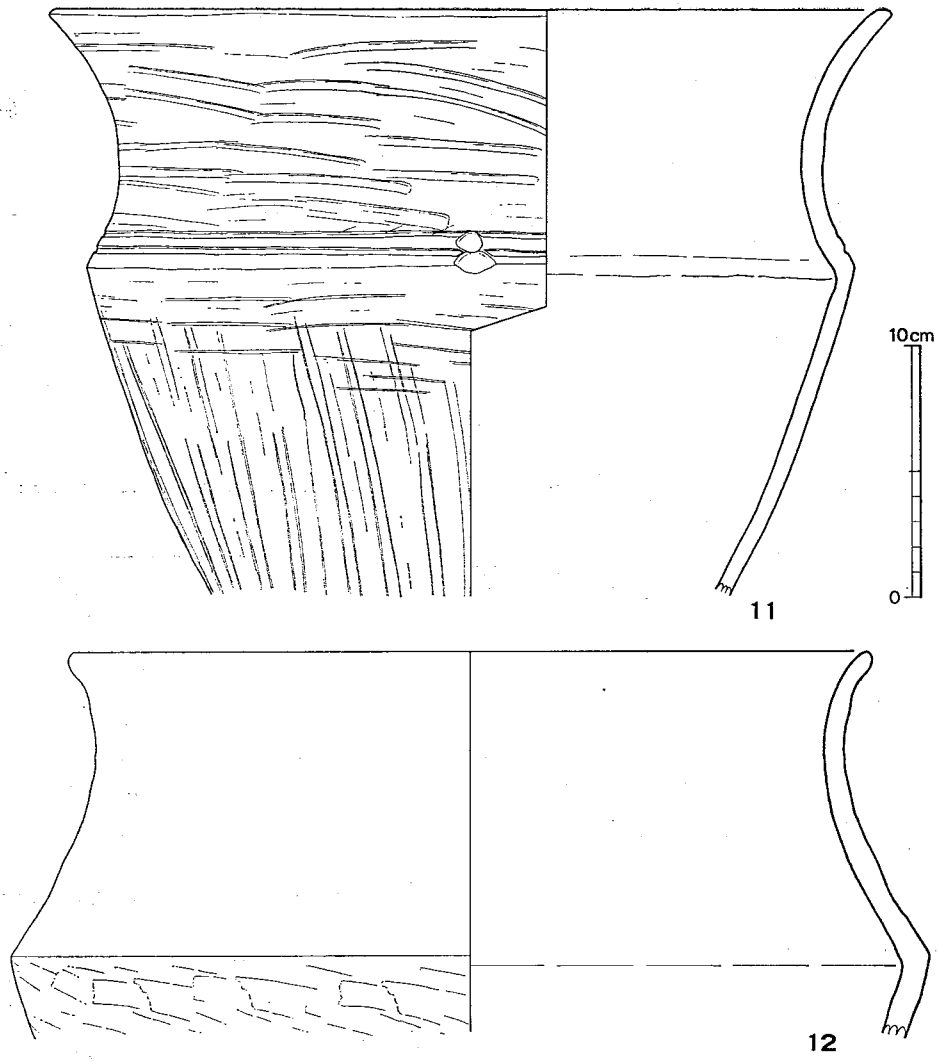
深鉢7a類　(53・57)，条痕の施される例ではおおむね右下から左上に向い，胴下半では縦

表2　掲載土器の出土層位一覧表

No.	遺物No.	地区	層位	No.	遺物No.	地区	層位	No.	遺物No.	地区	層位	No.	遺物No.	地区	層位	No.	遺物No.	地区	層位	No.	遺物No.	地区	層位
1	200	E 5	9 b	53	65	E 5	9 b	105	114	W 5	8	157	9	W 4	7	209	62	W 4	7・9 a	261	237	E 4・5	2 b
2	181	W 3	9 b	54	77	E 5	9 b	106	312	A 4	8	158	20	W 4	7	210	144	W 3	7	262	236	E 4・5	2 b
3	170	W 5	9 b	55	55	W 5	9 b	107	112	B 4	9 b	159	99	W4・5	7	211	207	A 4	7	263	229	W 3	2 b
4	248	W2・3	11	56	256	トレ	9 b	108	16	W 4	7 b	160	7	W 3	7	212	89	E 6	4	264	235	E 4	2 b
5	191	B4W5	9 b	57	262	W 3	9 b	109	125	W 4	7 b	161	2	W 3	7	213	327	W 4 / 3	7・8 / 6 b	265	35	E 5	2 b
6	180	E 5	9 b	58	255	トレ	9 b	110	109	W 5 / E 4	8 / 9 b	162	146	B 4	7 b	214	98	E 4	7	266	32	E 5	2 b
7	141	W 2	9 b	59	138	E 5	9 b	111	139	トレ	8	163	279	トレ	7	215	72	W 4	7	267	319	E4・5	2 b
8	311	A 4	9 b	60	250	トレ	9 b	112	270	E 5	9	164	325	トレ	7	216	102	トレ	7	268	234	W 4	2 b
9	316	E 5	9 b	61	135	W 4	9 b	113	245	トレ	9 a	165	278	E 3	7	217	31	E 4	7	269	239	トレ2	1・2 a
10	317	E 5	9 b	62	97	W 4	9 b	114	53	W 4	7 b	166	277	E 4	7	218	313	E 5	7・9a	270	63	W 4 / E 3	1 / 6 a
11	42	B 3	9 b	63	41	W 4	9 b	115	321	W4・5	8	167	142	W 4	7	219	222	B 4	6 b	271	45	E 4	2
12	39	W 3	9 b	64	153	W 5	9 b	116	315	E 5	9 a	168	71	W 4	7	220	213	W 3	6 b	272	305	W 3	2 b
13	201	W 5	9 b	65	253	トレE	9 b	117	317	W 3	8	169	145	B 3	7	221	165	E3～4	3	273	332	E 4	2 b
14	12	E 5	9 b	66	182	E 5	9 b	118	322	B 4	8	170	123	W 4	7	222	13	トレ / W 4	3 / 4	274	330	E 3	2 a
15	27	E 6	9 b	67	312	トレ	9 b	119	160	W 5	8	171	61	E 4	7	223	221	W 5	4	275	329	E 3	2 a
16	168	E 5	9 b	68	95	トレ	9 b	120	320	トレ	8	172	212	A 4	7	224	214	W 3	6 b	276	311	E 3	2 a
17	174	A 5	9 b	69	152	W 3	9 b	121	318	E 5	9 a	173	1	E 2	7	225	162	W 4 / W 5	7 / 4	277	56	トレ2	2 b / 6 b
18	175	W 5	9 b	70	151	W 4	9 b	122	323	W 4	7 b	174	294	E 6	6	226	172	W 4	3	278	19	E 4	6
19	167	E 3	10	71	148	W 4	9 b	123	314	E 5	9 a	175	284	W 4	7	227	220	W 4	4	279	320	E 4	2 b / 2
20	173	W 4	9 b	72	149	W 4	9 b	124	50	B 2	9 b	176	133	W 5	6 d	228	293	W 4	6 b	280	309	E 3	2 a
21	192	B 4	9 b	73	150	W 4	9 b	125	143	W 4	7 b	177	281	W 3	7	229	300	E 5	4	281	331	E 4	2 b
22	4	トレ	9 b	74	14	W3・5	8・9 b	126	69	W4・5	8	178	156	W 3	7	230	299	E 5	4	282	307	E 2	2 a
23	121	A 5	9 b	75	247	トレ	9 a	127	241	E 5	9 a	179	157	W 4	7	231	5	W 4	4	283	308	E 2	2 a
24	178	B 4	9 b	76	169	W 5	9a・9b	128	40	W4・5	8	180	155	W 4	7	232	159	W 3	6 b	284	306	E 2	2 a
25	131	W 2	9 b	77	197	W 5	8	129	51	W4・5	8	181	48	B 3	7 b	233	161	W 5	7	285	310	W4・5	2 b
26	261	W 3	9 b	78	199	B 4	8	130	6	W 3	7 b	182	49	B 3	7 b	234	30	E 4	3	286	86	B 4	上層
27	252	トレ	9 b	79	33	W 4	8	131	314	E 3	7	183	121	B 3	9 a	235	203	W 3	6 b	287	223	B 2	黒色土
28	251	トレ	9 b	80	176	A 3	9 b	132	313	E 5	7	184	326	W4・5	7	236	17	E 4	6 b	288	231	E4・5	2 b
29	127	W 3	9 b	81	318	E 4	8	133	80	W 4	7	185	280	トレ	7	237	110	W 3	6 b	289	232	E 4	2 b
30	254	トレ	9 b	82	194	A 4	9 a	134	315	E 3	7	186	285	W 3	7	238	215	W 3	6 b	290	240	W 3	2 a
31	249	トレ	10	83	196	E 6	9 a	135	316	W 4	7	187	128	W 5	7	239	195	B 2	9 a	291	96	B 4	上層
32	259	トレ	9 b	84	177	B 3	9 b	136	18	W 4	7・8	188	290	E 3	7	240	298	W 5	4	292	111	E4・5	2 b
33	68	W 2	9 b	85	166	A 4	9 b	137	10	W 4	7	189	288	E 3	7	241	328	W 4	6 b・3	293	94	E4・5	2 b
34	137	E 5	9 b	86	206	B 4	7 b	138	79	W 3	7	190	118	トレ	7	242	296	W 3	6 a	294	230	W 4	2 b
35	267	B 4	9 b	87	193	トレ	9 a	139	81	W 4	7	191	120	E 4	7	243	57	E 4	4	295	101	トレ	2 b
36	190	B 4	9 b	88	266	E 5	9 a	140	164	W 4	7	192	286	W 3	7	244	287	E 5	6	296	92	E3・4	2 b
37	113	B 4	9 b	89	129	W 4	7 b	141	24	W4・5	7・9b	193	218	B 2	7	245	59	E 5	6	297	184	W 3	2 a
38	82	W 4	9 b	90	78	トレ	9	142	23	A・B3 / W 4	9 b / 7	194	84	トレ	7	246	66	W 3	6 b	298	108	B 2	段落下
39	119	E 4	9 b	91	271	E 5	9	143	3	W 4	7	195	198	B 2	8	247	303	E 3	3	299	107	E 1	1
40	264	W 3	9 b	92	242	A 4	9 a	144	205	W 4	7	196	219	A 3	7	248	124	W 3	6 b	300	37		表採
41	274	W 5	9 b	93	246	トレ	9 a	145	179	B	9 b	197	116	E 3	7	249	301	E 5	4	301	103		黒色土
42	263	W 3	9 b	94	272	E 5	9	146	185	W 4	7	198	117	E 3	7	250	297	E 4	4	302	88		表採
43	258	トレ	9 b	95	275	トレ	8	147	34	E 6	6 b	199	289	E 4	7	251	302	E 3	3	303	43	E2～6	崩落土
44	90	W 3	9 b	96	268	A 4	9 a	148	208	A 4	7	200	283	W 3	7	252	217	W 4	6 b	304	226		黒色下
45	115	E 6	9 b	97	244	トレ	9 a	149	25	B 3	7 / 9 a	201	276	E 4	7	253	106	E 4	4	305	228		黒色下
46	183	トレ	11	98	136	E 5	9 a	150	163	A3・4	7	202	282	W 3	7	254	216	W 3	6 b	306	224		黒色下
47	122	W 4	9 b	99	105	W4・5	7 b	151	202	B 3	7b・9a	203	60	B 3	7 b	255	47	W 4	6	307	225		黒色下
48	70	A 4	9 b	100	269	E 5	9	152	321	トレ	7	204	15	W3・4	7	256	87	B 3	7	308	8		黒色下
49	67	A 4	9 b	101	132	W 4	7・9b	153	322	W 5	7	205	126	W 4	7	257	93	W 2	6 b	309	85	E2～6	崩落土
50	134	A 4	9 b	102	140	W 4	7 b	154	204	W 4 / W 5	6 b / 4	206	11	W 4	7	258	291	W 4	6 b	310	83		表採
51	243	E 4	9 b	103	75	B 3	9 b	155	211	W4E4	7	207	36	W 3	7	259	292	W 4	6 b	311	227		黒色下
52	257	トレ	9 b	104	130	W 4	7 b	156	91	W 3	7	208	73	A 3 / A 4	7 / 9 a	260	238	E 4 / W 4	2 a / 3				



第 7 図　縄 文 土 器 実 測 図　1　(1/3)　第Ⅰ群



第 8 図　縄 文 土 器 実 測 図 2 (1/3) 第Ⅰ群

位に近く，頸部では水平に近いものが多いが，53では短く交差する条痕が観察できる。57は口縁部がわずかに波状を呈す。

深鉢7 b類　(47・48)，47の内面は板ナデ調整される。

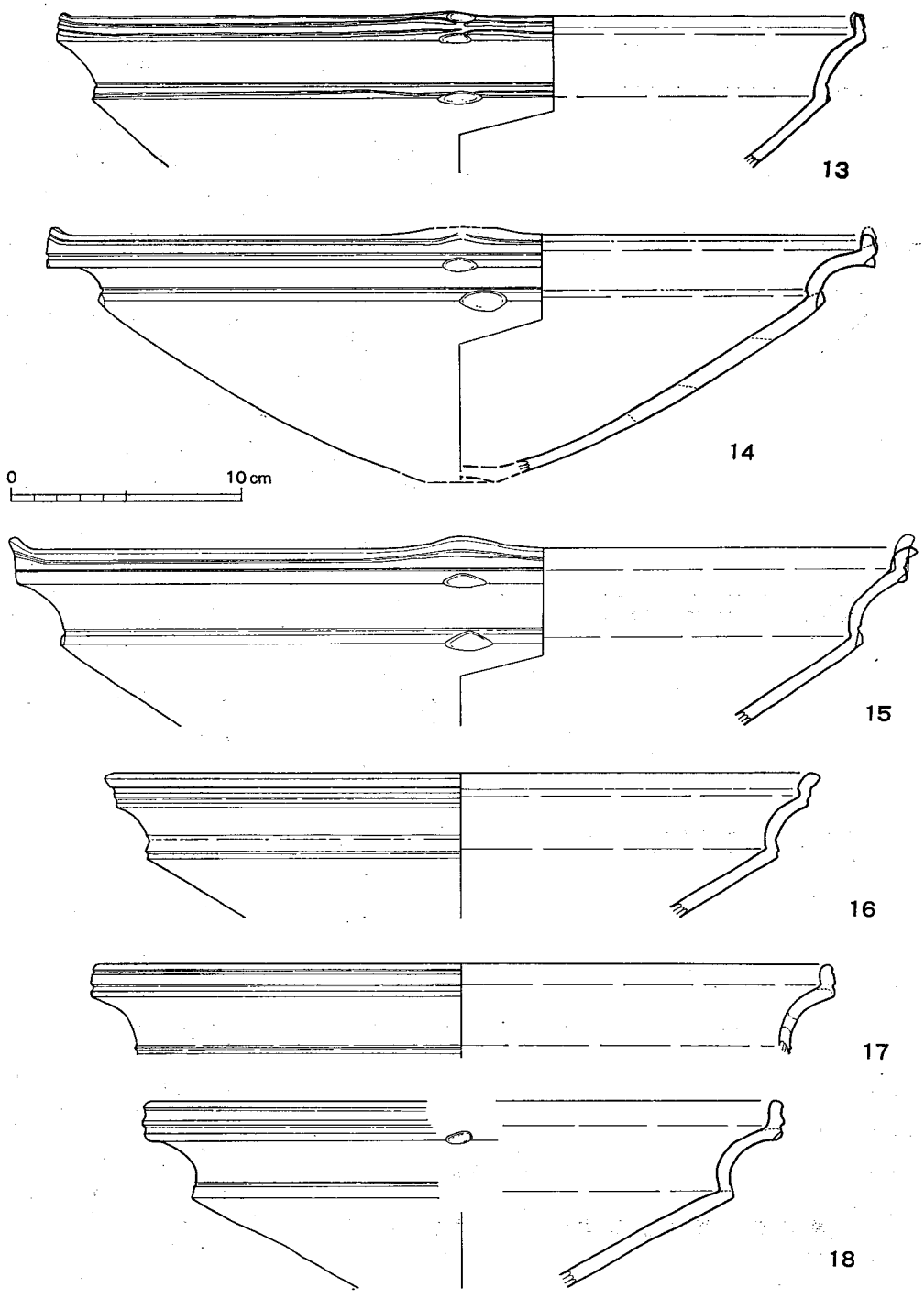
深鉢7 d類　(34) 外面下半は縦位・口縁付近は横位の板ナデ，内面は横位の板ナデ調整。

深鉢8 a類　(31・51)，31はやや波状を呈す器形になる。

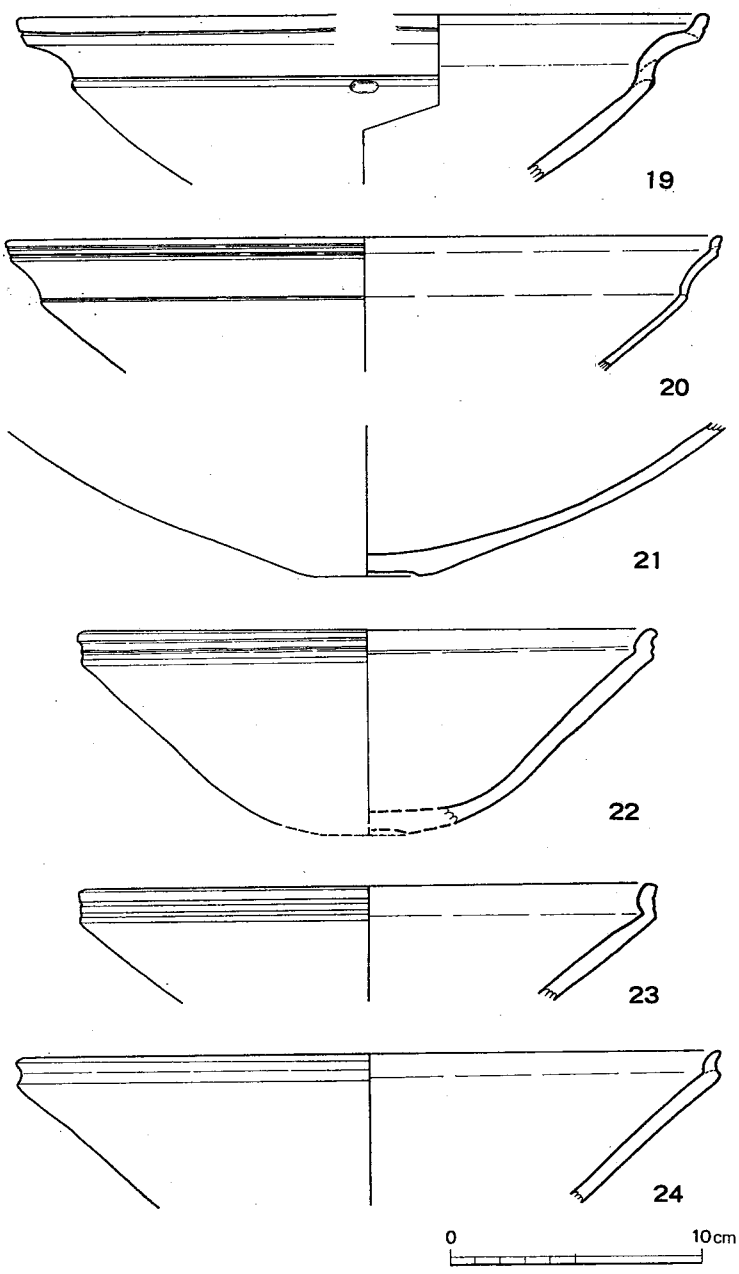
深鉢8 b類　26・32がある。

深鉢8 d類　(7・8・59・60)，8の内面には若干アナダラ条痕の痕跡がみられる。

深鉢9 d類　6の資料を含めているが，口縁部内側に幅広なタガが水平に付いたような器形を



第 9 図　縄 文 土 器 実 測 図 3 (1/3) 第Ⅰ群



第 10 図　縄文土器実測図 4　(1/3)　第Ⅰ群

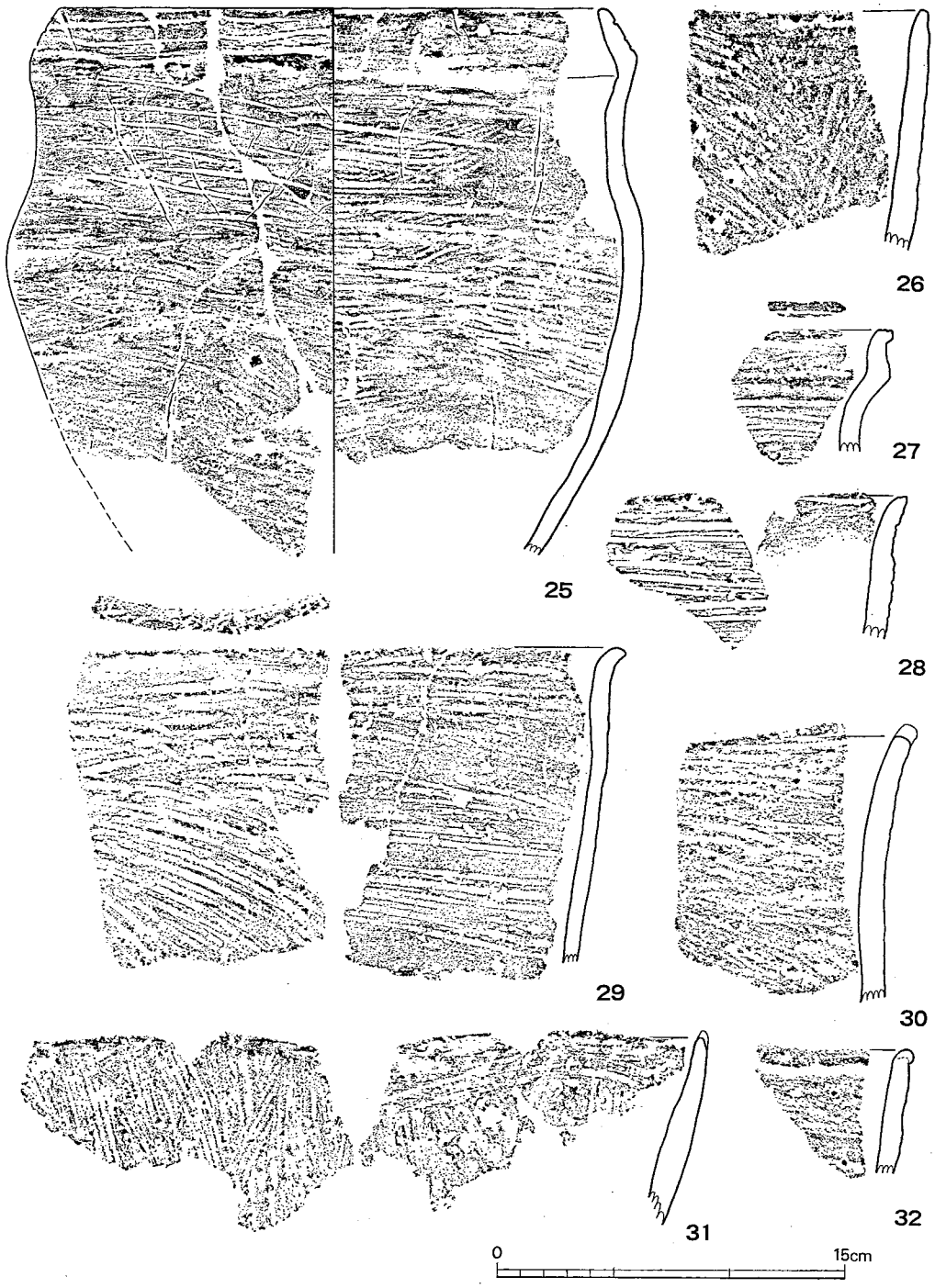
呈す。外面はナデで仕上げられ内面はやや雑に指圧痕が残る。

深鉢底部　(10・62・64 65・67・71～73) 62の底部外面には編籠状の圧痕がみられる（第18図・図版25）。底部のみでは鉢形土器と深鉢形土器の区別のつけ難い例が多い。

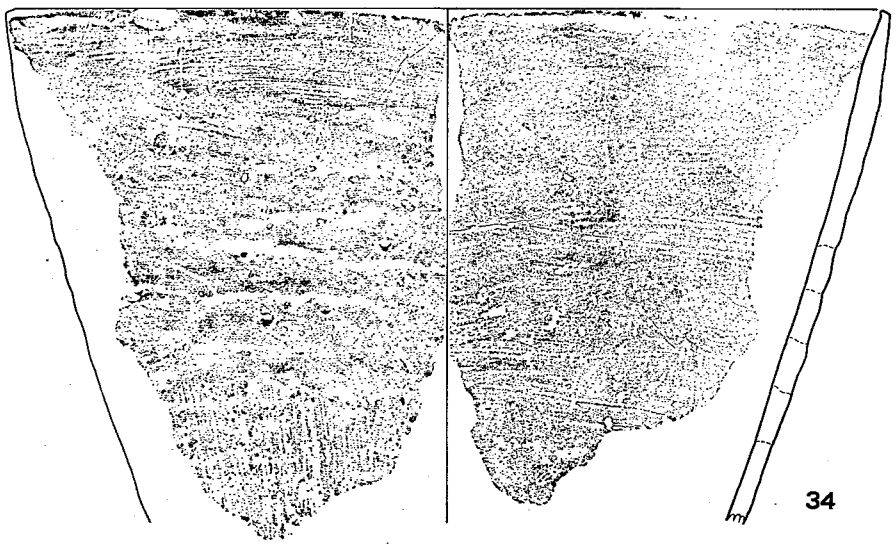
Ⅰ群の深鉢形土器は，胎土に細砂粒・若干の細かい金雲母粒を含み，植物質のものを混入させるため気泡が多くみられる。焼成は良好で暗褐色ないしは黒褐色系の色調を呈すものが多い。

鉢1類　(1・5・36・39・40・43)，1a～1c類のいずれかに含まれ，ア・イ両方の押点が付される例として36がある。1c類では39・40，1fア類に1，1g類に3と分類できるが，1は口縁外面全体に及ぶ凹線で波状頂部下に押点がある。5は段状の沈線が3条めぐる。43は2類に近い形状を有すが1f類に含めうる。

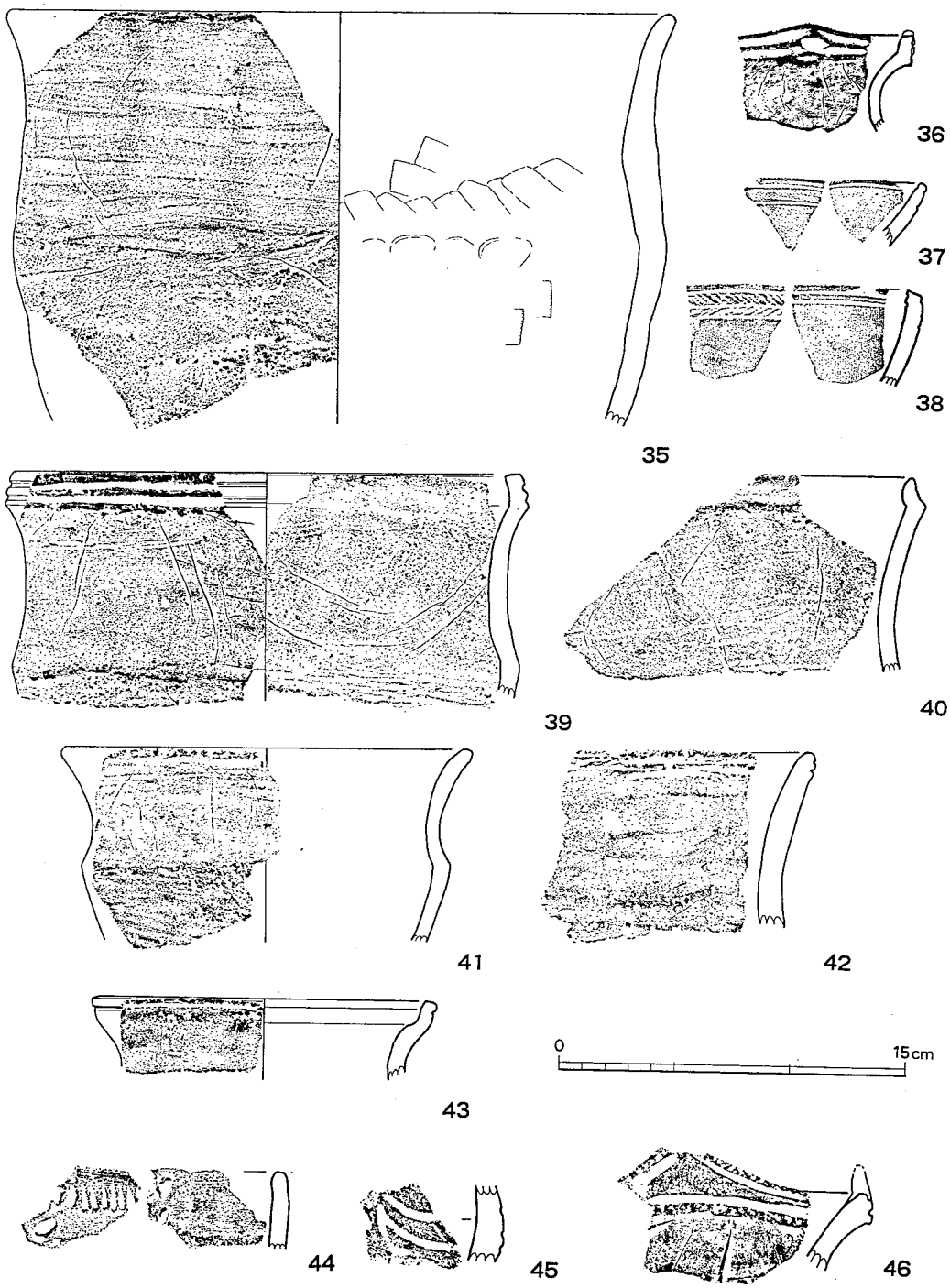
鉢2類　(3・41・42)



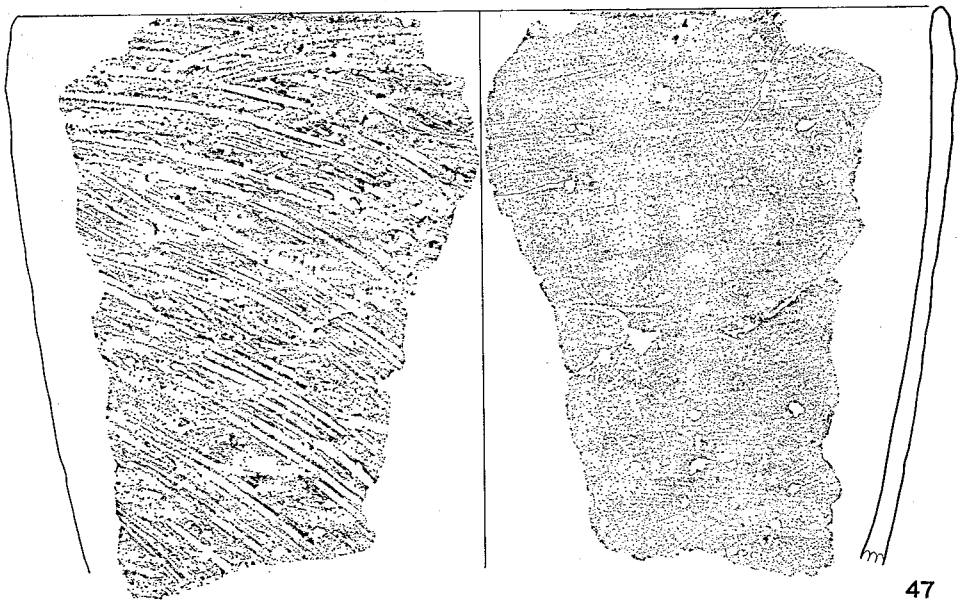
第 11 図　縄 文 土 器 拓 影 1 (1/3) 第Ⅰ群

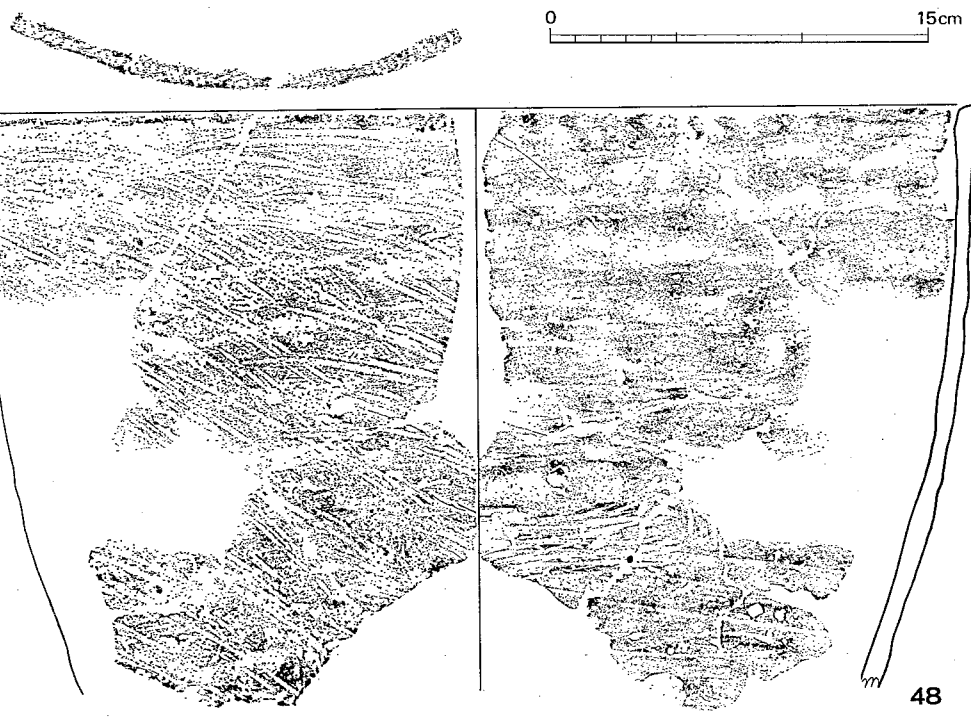


第 12 図　縄 文 土 器 拓 影 2 (1/3) 第Ⅰ群

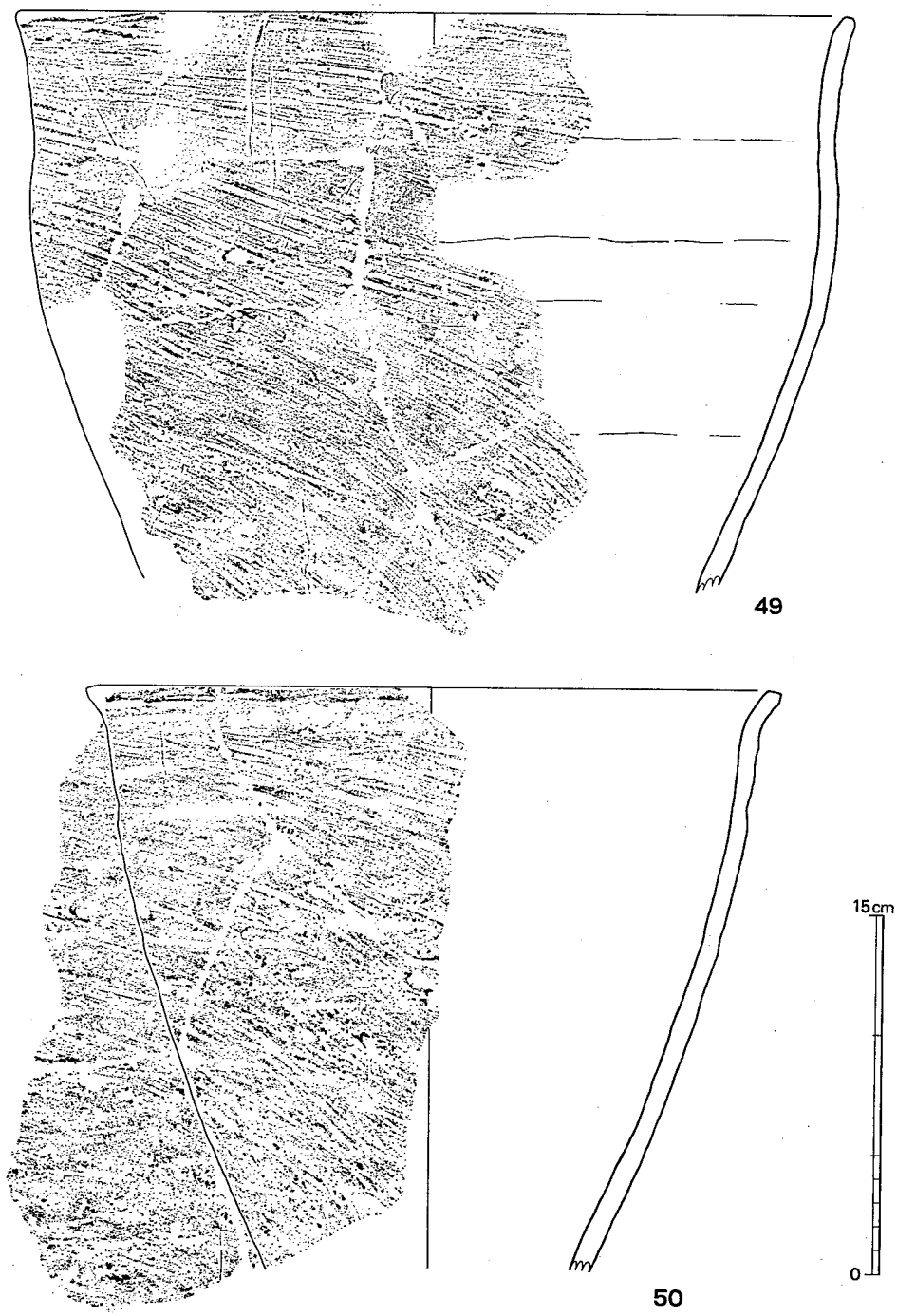


第 13 図　縄 文 土 器 拓 影 3 (1/3) 第Ⅰ群

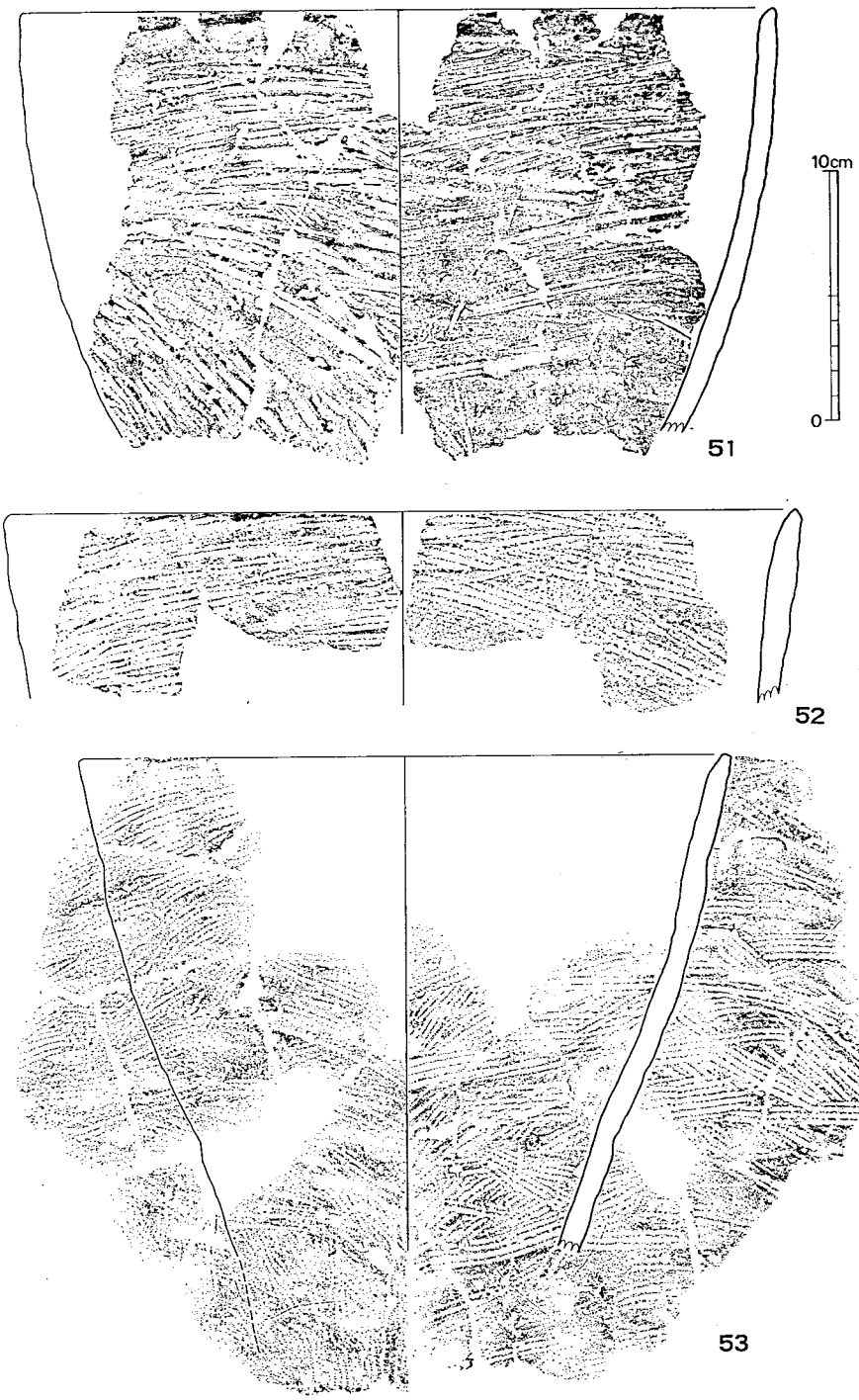




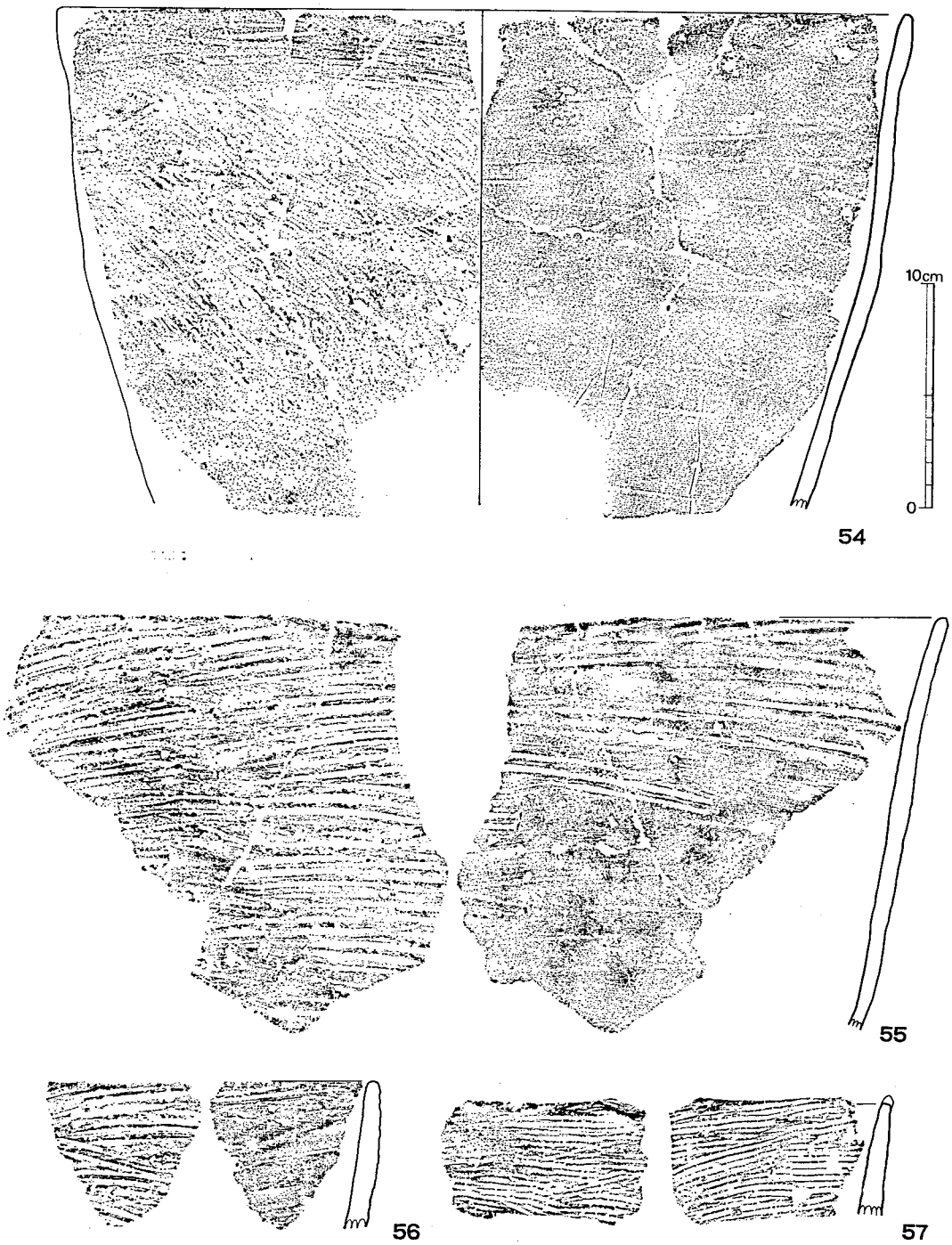
第 14 図　縄 文 土 器 拓 影　4　(1/3)　第Ⅰ群



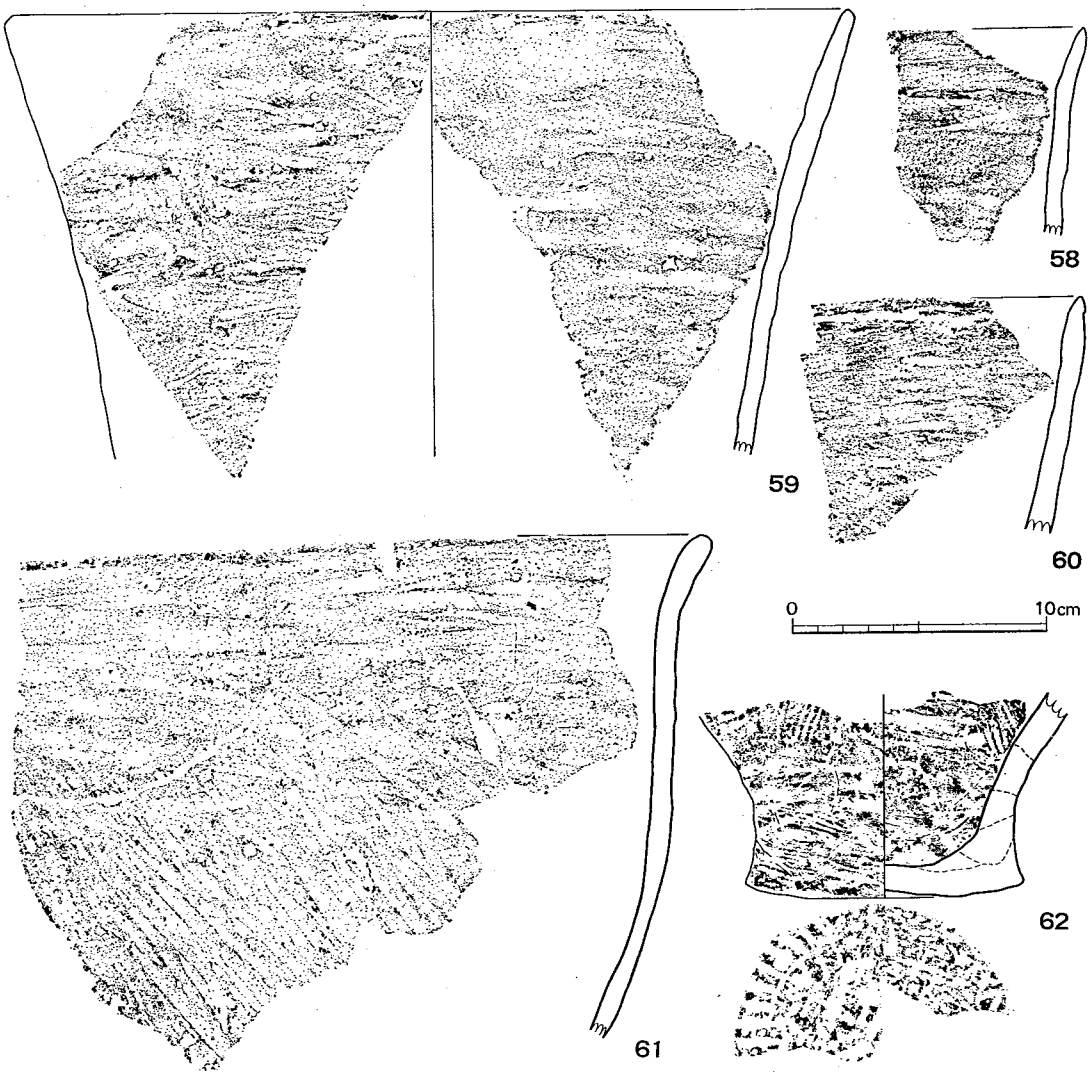
第 15 図　縄 文 土 器 拓 影　5　(1/3)　第Ⅰ群



第 16 図　縄 文 土 器 拓 影　6　(1/3)　第Ⅰ群



第 17 図　縄 文 土 器 拓 影　7　(1/3)　第Ⅰ群



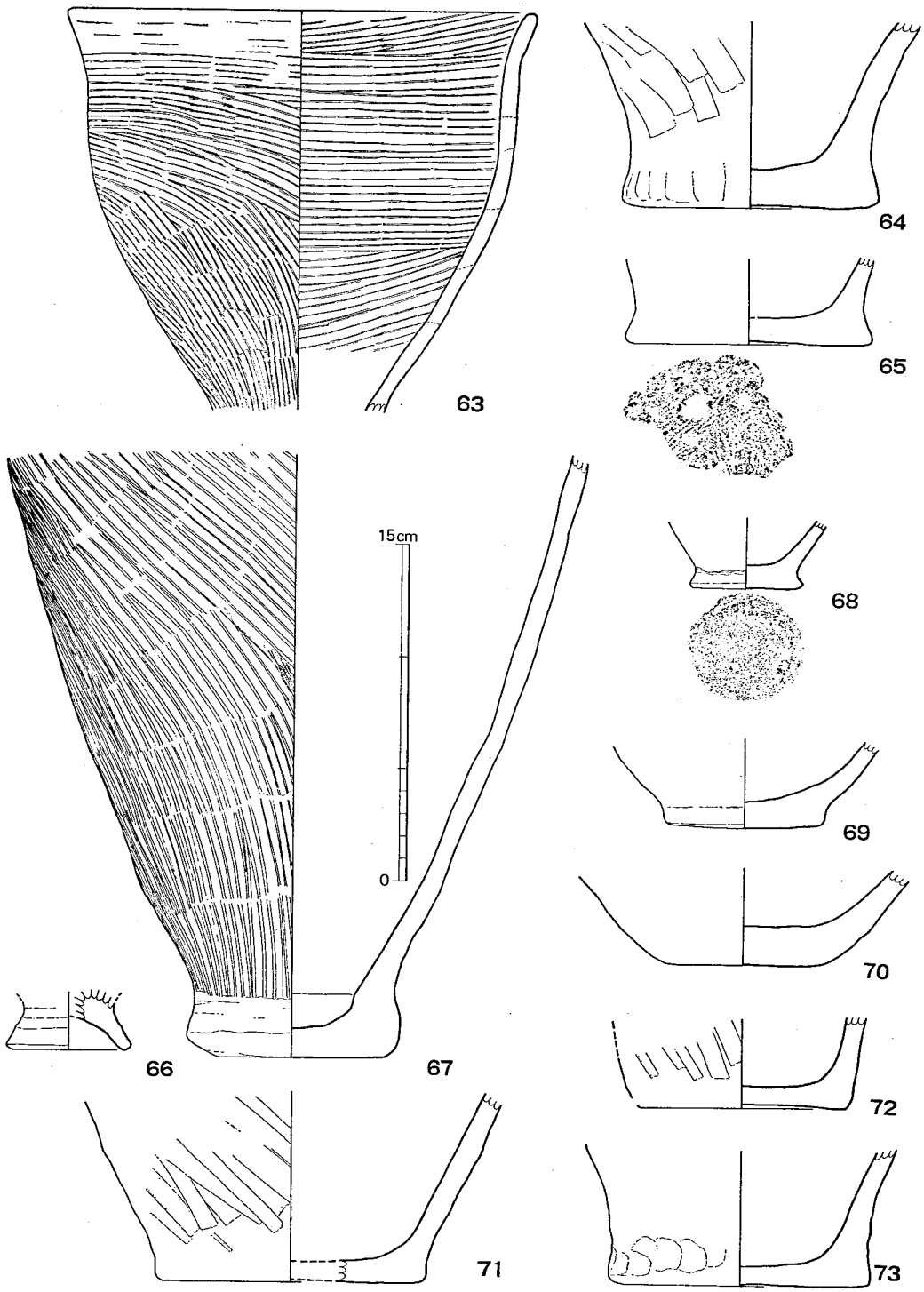
第 18 図　縄 文 土 器 拓 影　8　(1/3)　第Ⅰ群

2 c類に42，2 h類に3，2 j類に41が該当する。

鉢底部　(9・68～70)，深鉢形土器に比して浅く立ち上り胴部に移行する例を鉢形と考えている。

浅鉢1 a類　13はイ類押圧が口縁部に上下2・胴部界線に1個付される。16も波状隆起をみないが，含められる。

浅鉢1 b類　(14・15・17・18・20)，14が底部を欠失するもののほぼ全体の形状の明らかな例で，屈折部界線にイ類押圧を各1個付している。15はア類押圧を付している例である。なお14の内面下半には赤色顔料の付着がみとめられる。



第 19 図　縄 文 土 器 実 測 図　5　(1/3)　第Ⅰ群

浅鉢1c類　19があり波状隆起部を欠失するが，胴部界線にイ類押圧がみられる。

浅鉢2類　(22～24)，22・23はc類，24はf類に相当する。

浅鉢底部　21は底面がわずかに上げ底になるもので，おそらく大半の浅鉢がこの底部形になるとみられるが出土資料中にこの種の破片が少ない。

椀　(2・4・37・38)，2・4はj類，37はb類，38はg類に含めうる。38の外面は3条の沈線をめぐらせ，沈線間に羽状文を充填させている。内面は2条の沈線をめぐらせている。

鉢・浅鉢・椀形土器は精製磨研される例が多く，細砂粒を含むが精良な胎土を使用し，整形・焼成も良好な例が多い。色調は黒褐色系の色調が多い。

その他の土器　66は脚台部の破片である。一方44は内外面に粗い連続爪形文的な文様を有すもの，45は磨消縄文を有す破片である。46は波状口縁に沿った沈線と屈折部付近に沈線を画して磨消縄文にするもので地山である灰色粘土層中に出土した。46は西平式・45は鐘ケ崎式に含まれる土器でこれらの土器は前述の土器よりも古い時期の資料で混ざり込みであろう。

なお図版13の№21資料はE4区9b層出土，図版14の№29資料はA4区9b層出土土器である。

(2)　**Ⅱ群土器**　(図版16～18，第20～28図)

第4群土層に出土した土器を一括してⅡ群土器とする。

深鉢1d類　(76・77・108)，76は頸部の上下を突帯状に肥厚させており，口縁部外面と肩部に凹線をめぐらせた形状となる。やや精巧な造りであり，精製土器の範疇に含められるが，鉢e類に通じるものがある。77は口縁部を欠失するが残存する部分ではb類あるいはe類に通じる形状となる。108は外面を条痕で整えた後ナデを施したもので無文に近い。

深鉢3b類　103が該当し，外面をアナダラ条痕で飾る。

深鉢4b類　106があり，口縁部はやや波状を呈す。アナダラ条痕。

深鉢4d類　74・75が該当する。74は胴下半をナデ，頸部を研磨で仕上げられる。胎土中には細砂粒と共に金雲母をやや含む。

深鉢5a類　93・94があり，93はナデに近い条痕を施し口唇外面に瘤状の突起を有す。

深鉢5b類　98は外面を細かめの条痕，内面を板ナデ調整し，口唇端部を連続押圧の疑似縄文で飾るもの。111は外面にアナダラ条痕が粗く施される。

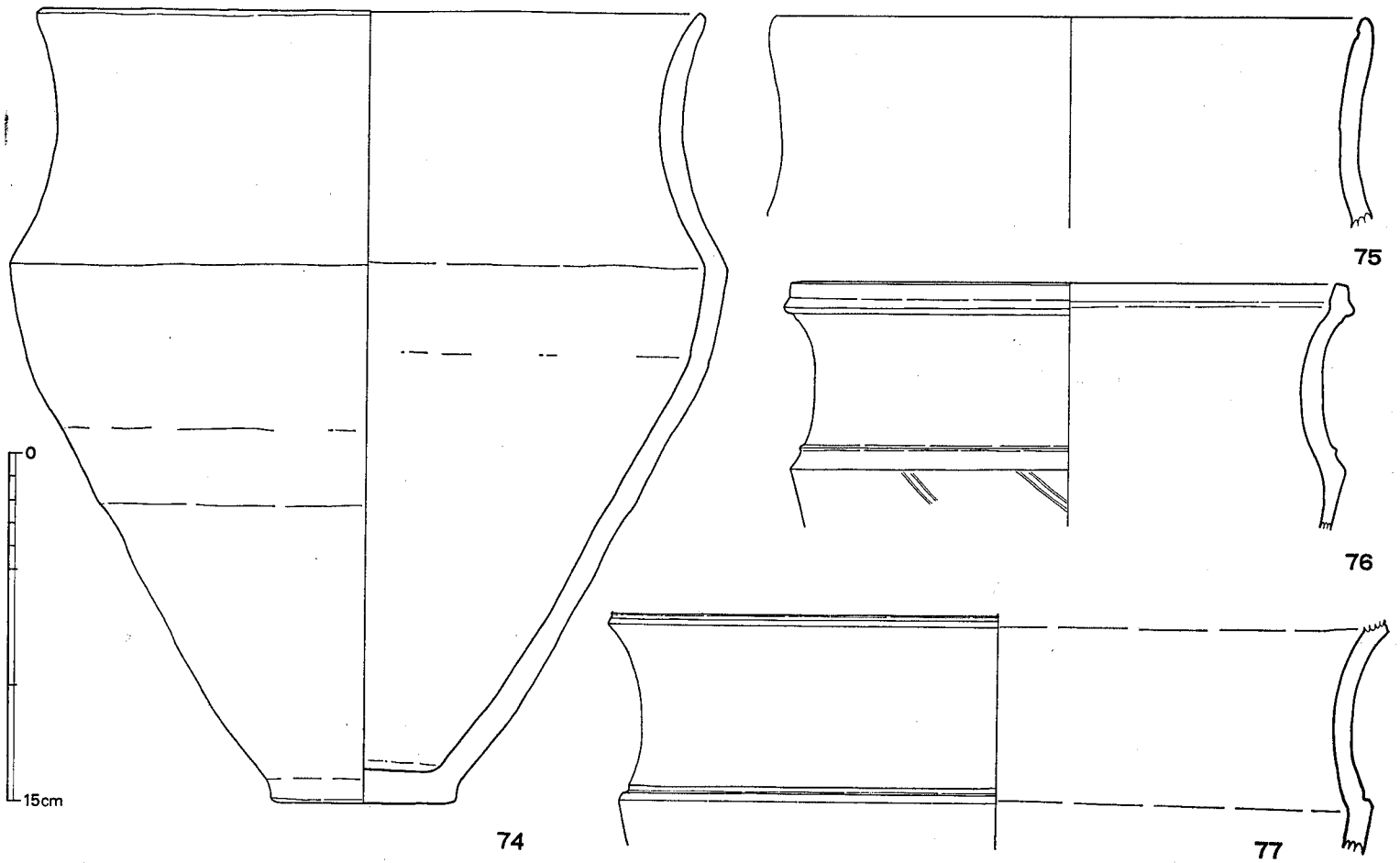
深鉢5d類　外面に板ナデを施す101が該当する。

深鉢6類　(88～90) 88は外面を粗いナデ，内面を板ナデ調整しており6d類，89は6a類に分類でき，口唇部にアナダラ属貝殻放射肋を連続押圧した疑似縄文で飾る。90は外面アナダラ条痕，内面板ナデ（図版26）で調整し6b類に該当する。

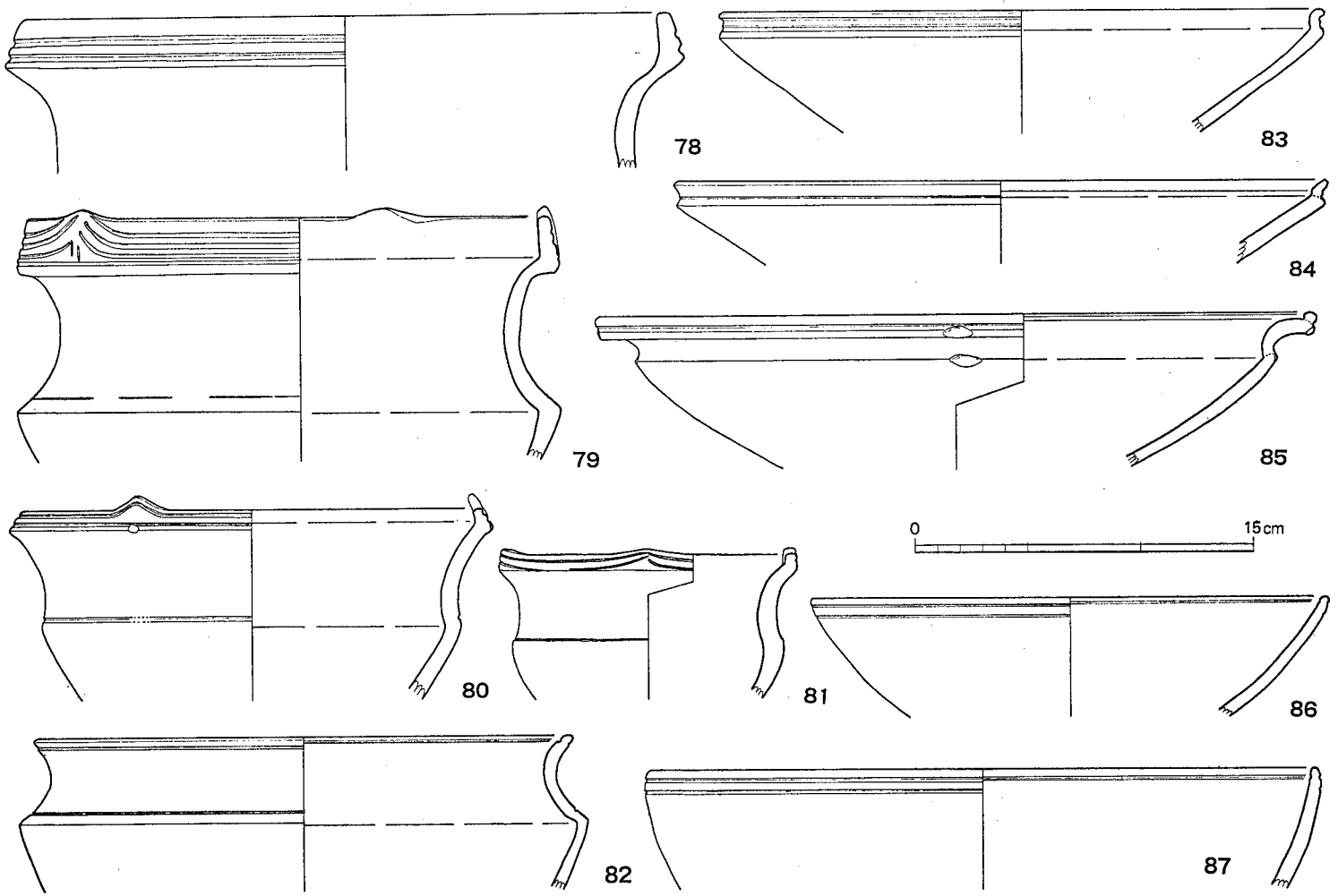
深鉢7a類　92が該当する。

深鉢7b類　91があり，口唇部外面を疑似縄文で飾る。

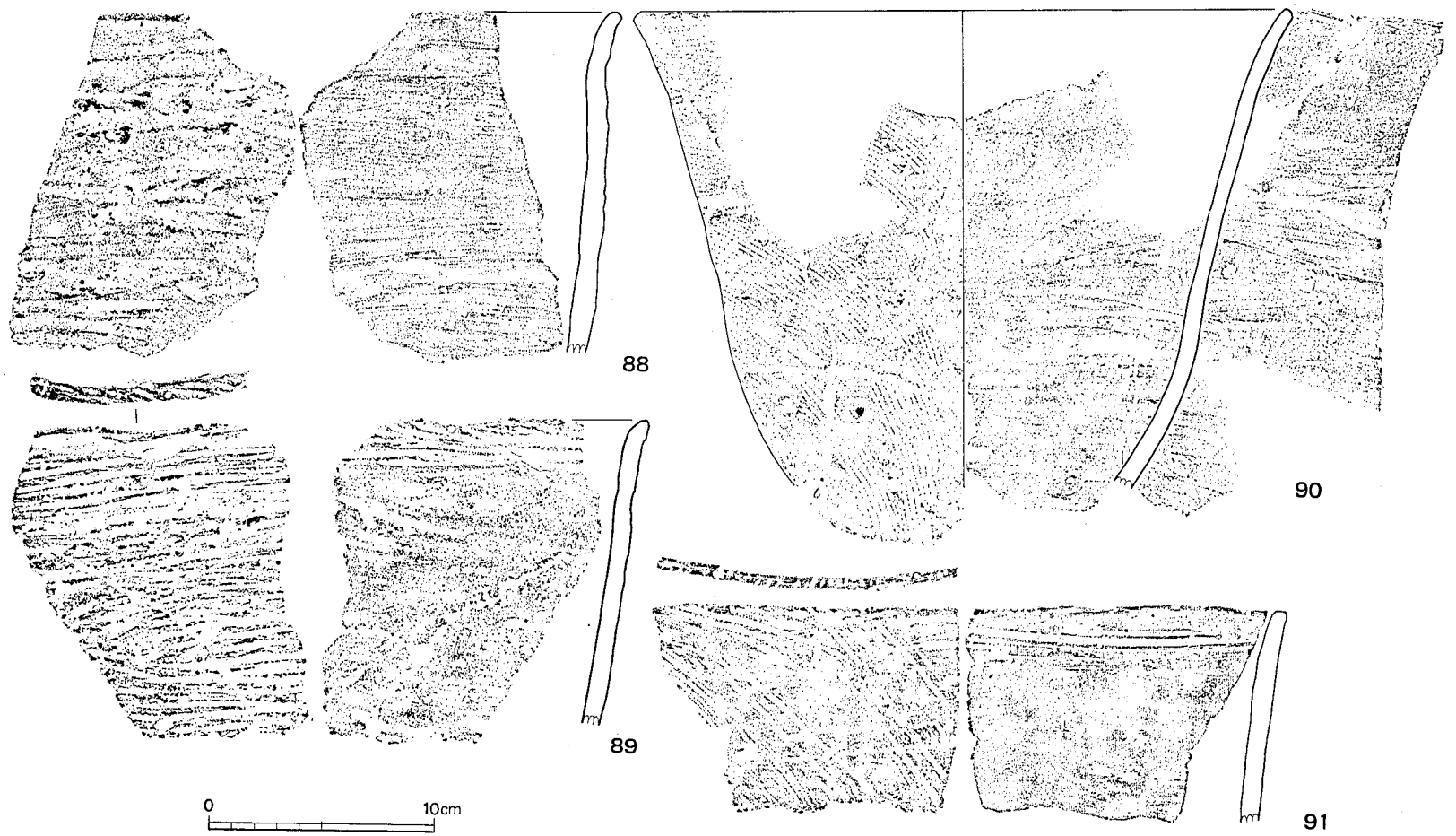
深鉢7d類　(97・99・125～127・130)，99の胎土中には堅果類の種子が混入されていた



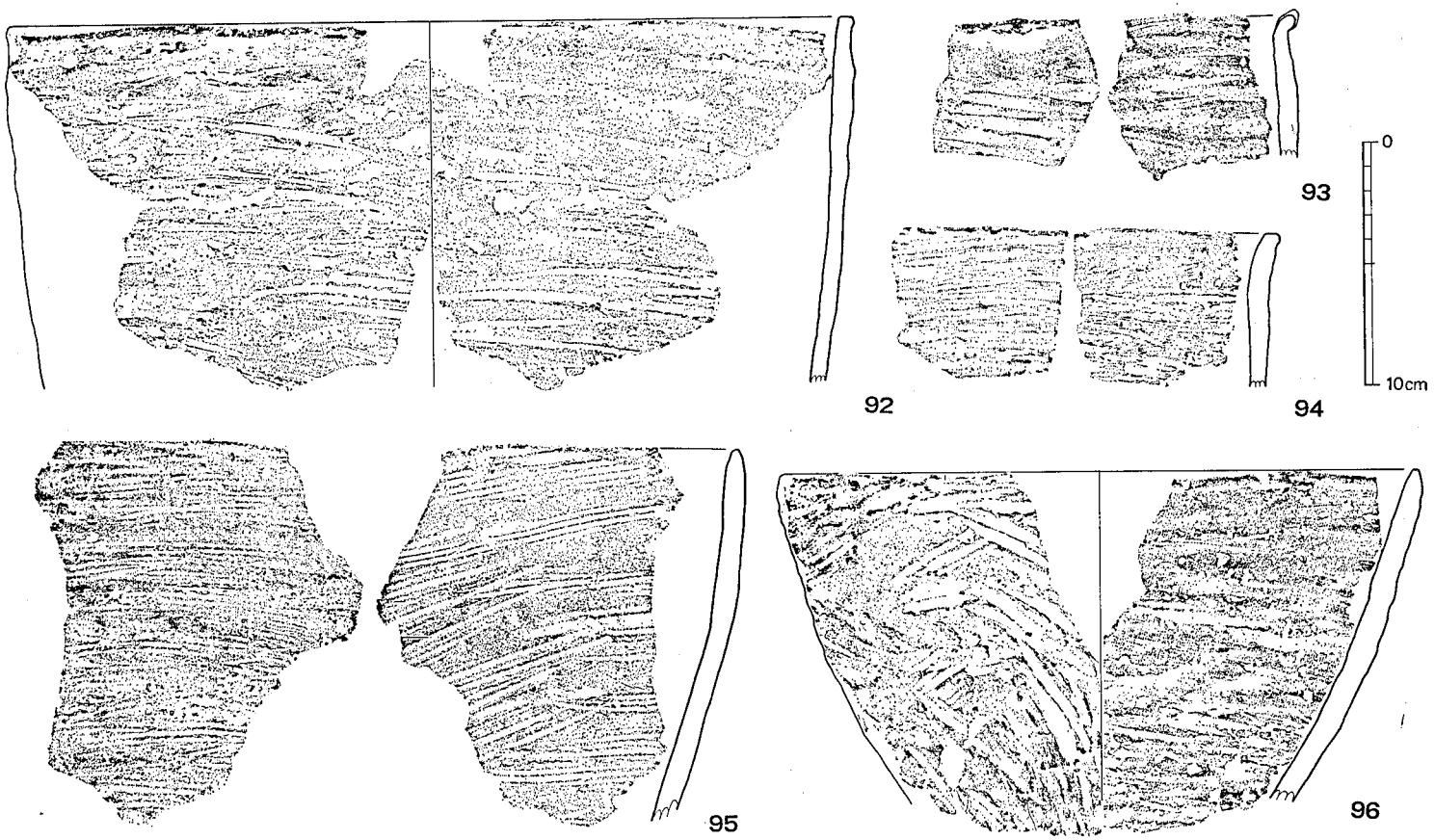
第 20 図　縄 文 土 器 実 測 図 6 (1/3) 第Ⅱ群



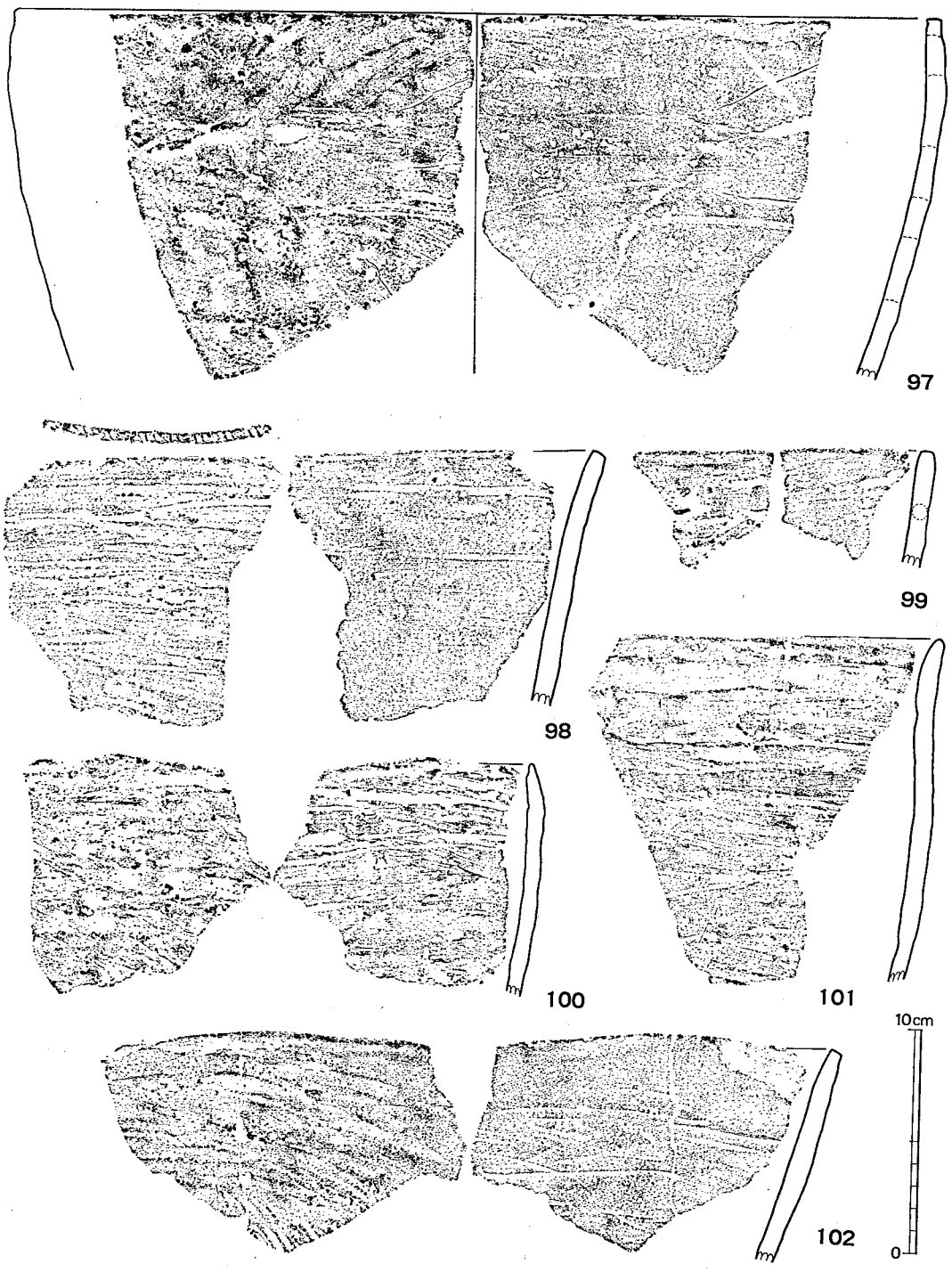
第 21 図　縄 文 土 器 実 測 図 7 (1/3) 第Ⅱ群



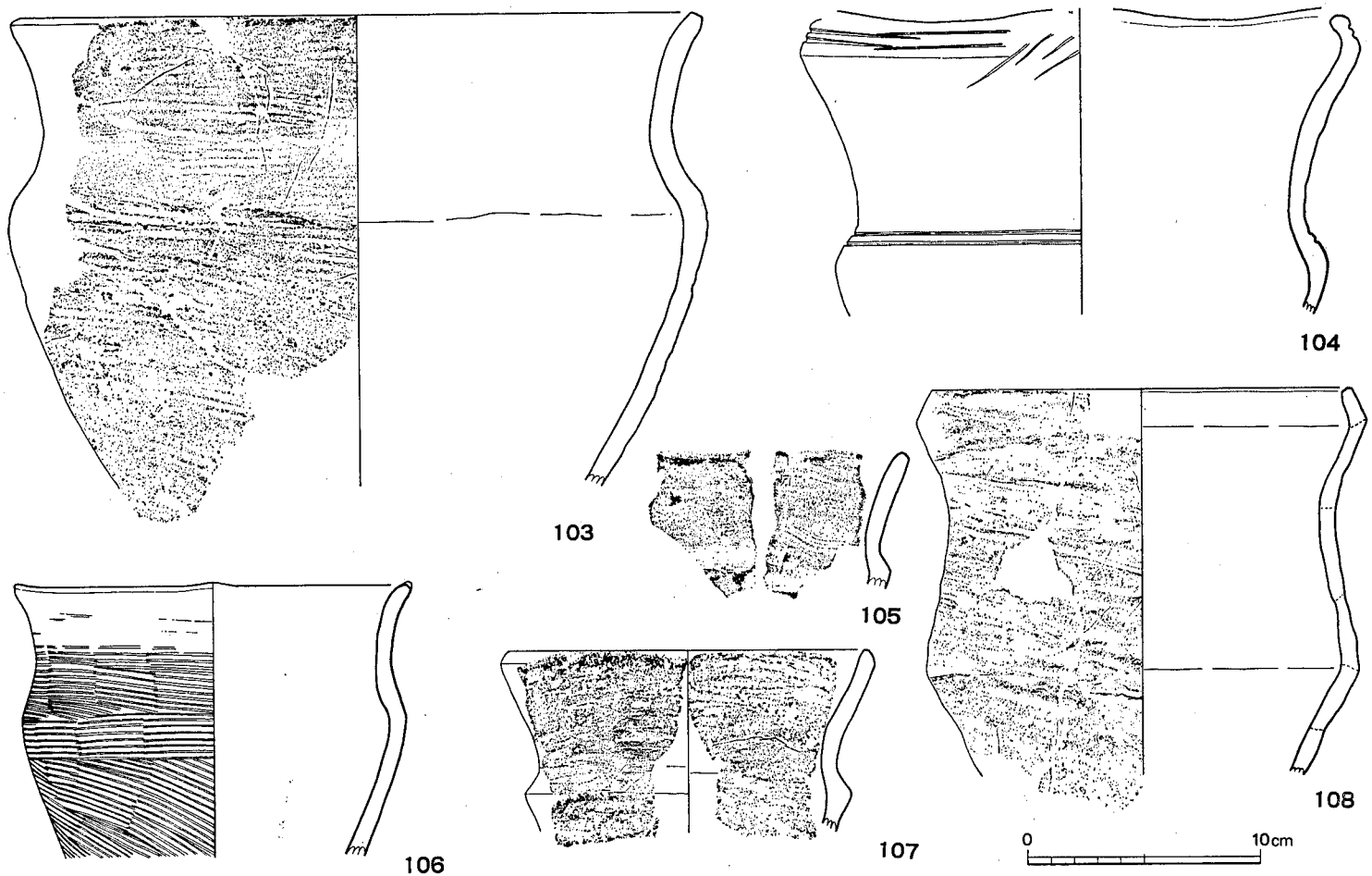
第 22 図　縄 文 土 器 拓 影 9 (1/3) 第Ⅱ群



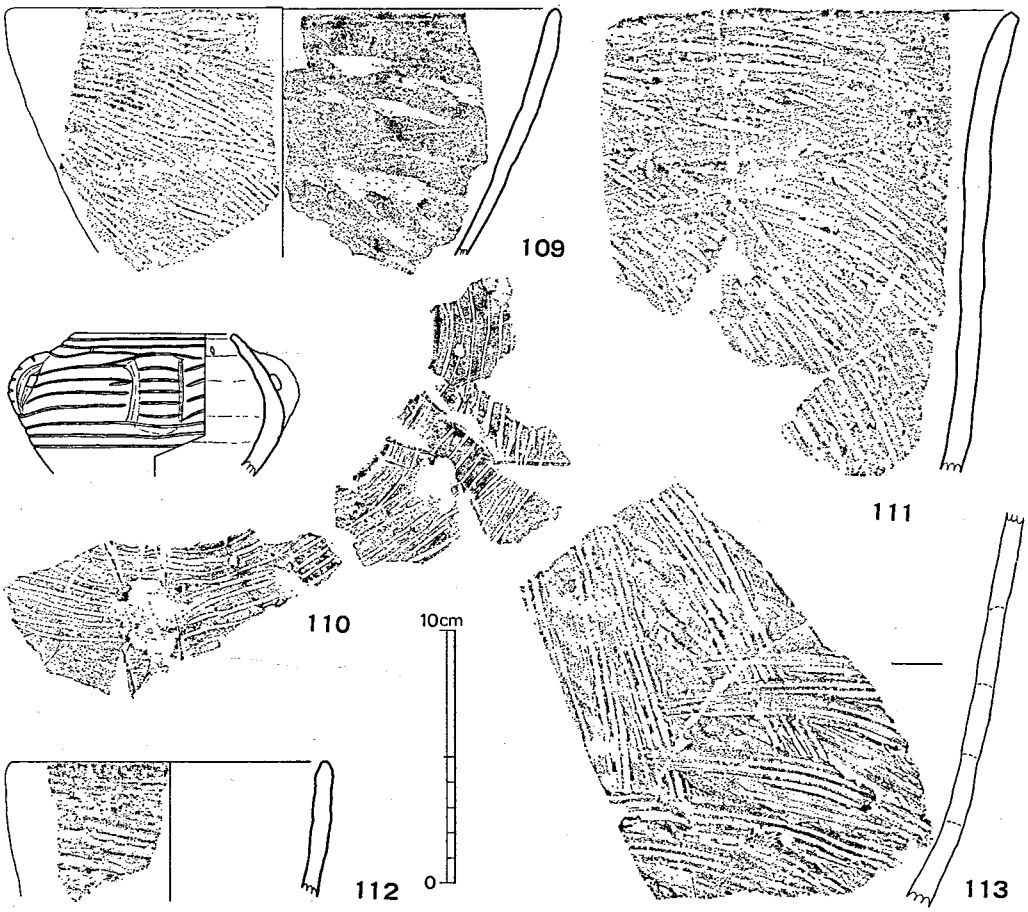
第23図　縄文土器拓影 10 (1/3) 第Ⅱ群



第 24 図　縄 文 土 器 拓 影 11 (1/3) 第Ⅱ群



第 25 図　縄 文 土 器 拓 影 12 (1/3) 第Ⅱ群



第 26 図　縄 文 土 器 拓 影 13 (1/3) 第Ⅱ群

(図版25)。130には輪積の痕跡が明瞭に残されている。

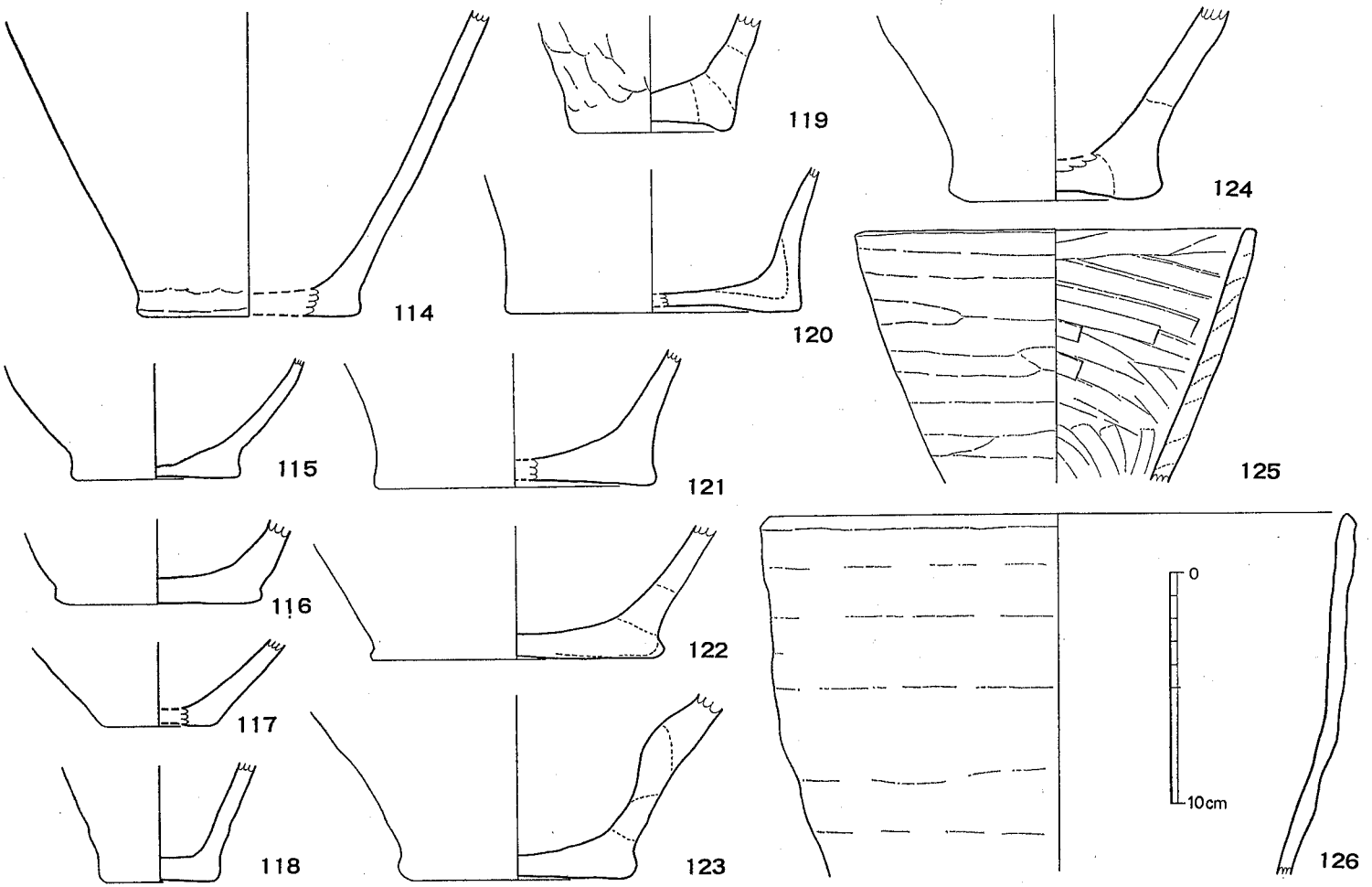
深鉢8類　(95・99・112・128・129)，95は内外面にアナダラ条痕を施しており8 a類。112は8 b類でヘナタリ条痕が施される。他は8 d類に該当する。このうち 129は胴部にくびれを有する器形をなし，胴下半部と胴上半部を別々に作り接合した状況が窺える。

深鉢10 d類　100が該当する。内外面共にアナダラ条痕施文後にナデられている。

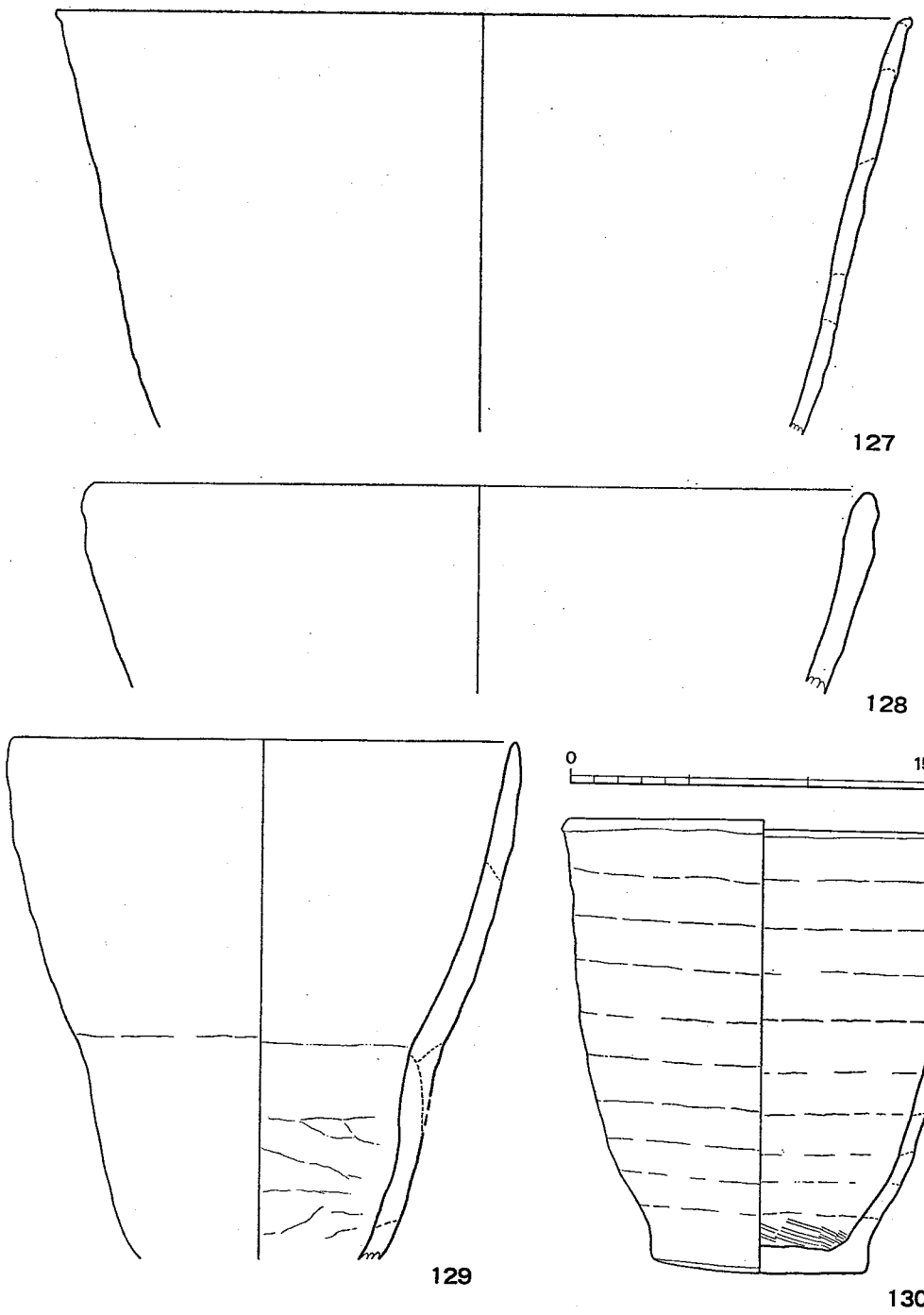
深鉢底部　118～124が該当する。

深鉢形土器では胎土に細砂粒・金雲母粒・植物・貝殻片等を混入させているが，Ⅰ類のそれに比して金雲母の存在が，ややめだつようになる。

鉢1類　(78～82)，79は1 g類に含まれるが，肩部にも途切れ気味の沈線が1条めぐる。3ケ所の波状隆起を有し，口縁部では波頂部下に集まる3条の沈線とそのままめぐる沈線との空白部に2条の垂線を描いている。80・81は1 b類に分類できるが，81の口縁部沈線が波頂部で



第 27 図　縄 文 土 器 実 測 図　8　(1/3)　第Ⅱ群



第 28 図　縄 文 土 器 実 測 図 9 (1/3) 第Ⅱ群

2条共集約されるのに比し,80では波頂部で別々になり空白を作る。なお80はウ類押点を有す。

鉢2 j類 105と107が該当する。

鉢底部 114～117が鉢形土器の底部と考えられる。

浅鉢1 f類 85が該当し，ア類押圧が口縁部界線と胴部界線に付される。平縁。

浅鉢2類 (83・84)，83は2条の沈線を有し2 c類に含まれる。84は凹線の中に段状の沈線を更に加えたもので，結果的には2条の沈線を施したのと同様になる。

椀b類 86・87が該当する。

把手付壺形土器 (110) 精製磨研された土器で，口縁部は胴部から大きく内傾してすぼまり，肩部4ケ所に橋状把手が付けられる。口縁部下と橋状把手の下にそれぞれ3条の沈線がめぐる。橋状把手間は4条の沈線でつながれ，把手にも5～6条の沈線が横位に施されている。また口縁部下に一対の焼成前穿孔がみられる。なお外面には赤色顔料が付着している。胎土中に金雲母を全く含まず精良で，焼成良好，黒色の色調を呈す。無頸壺の範疇に含めうる資料である。

これらの鉢・浅鉢・椀共に精製土器が多く，胎土に細砂粒・金雲母粒等を含む。Ⅰ群のこの種土器に比して金雲母を含む割合が高くなり，色調では黒色・黒褐色・暗褐色・赤褐色の色調等，黒っぽいものと赤味の強いものがめだつ。

なお図版16—1のNo.26土器は浅鉢1 b類でW4区の第8層と第9 b層出土で接合したもの，図版17のNo.44・No.58はB3・B4区9 b層出土の深鉢8 b類資料，図版18のNo.74はB4区8層出土の深鉢8 b類資料である。

(3) **Ⅲ群土器**（図版19～22，第29～39図）

第3群土層出土土器を一括してⅢ群土器としている。

深鉢1 d類 188資料が該当する。なお197・198は同一個体になるものと思われるが，外面に斜格子の沈線文様が描かれている。口縁部は長くのびるが器形は1類に近いとみられる。

また186は，深鉢形の破片で無文地の肩に雑な沈線が2～3条めぐらされる。口縁部を欠失するため分類しえないが，1 d類もしくは2 d類のいずれかに含めうる。

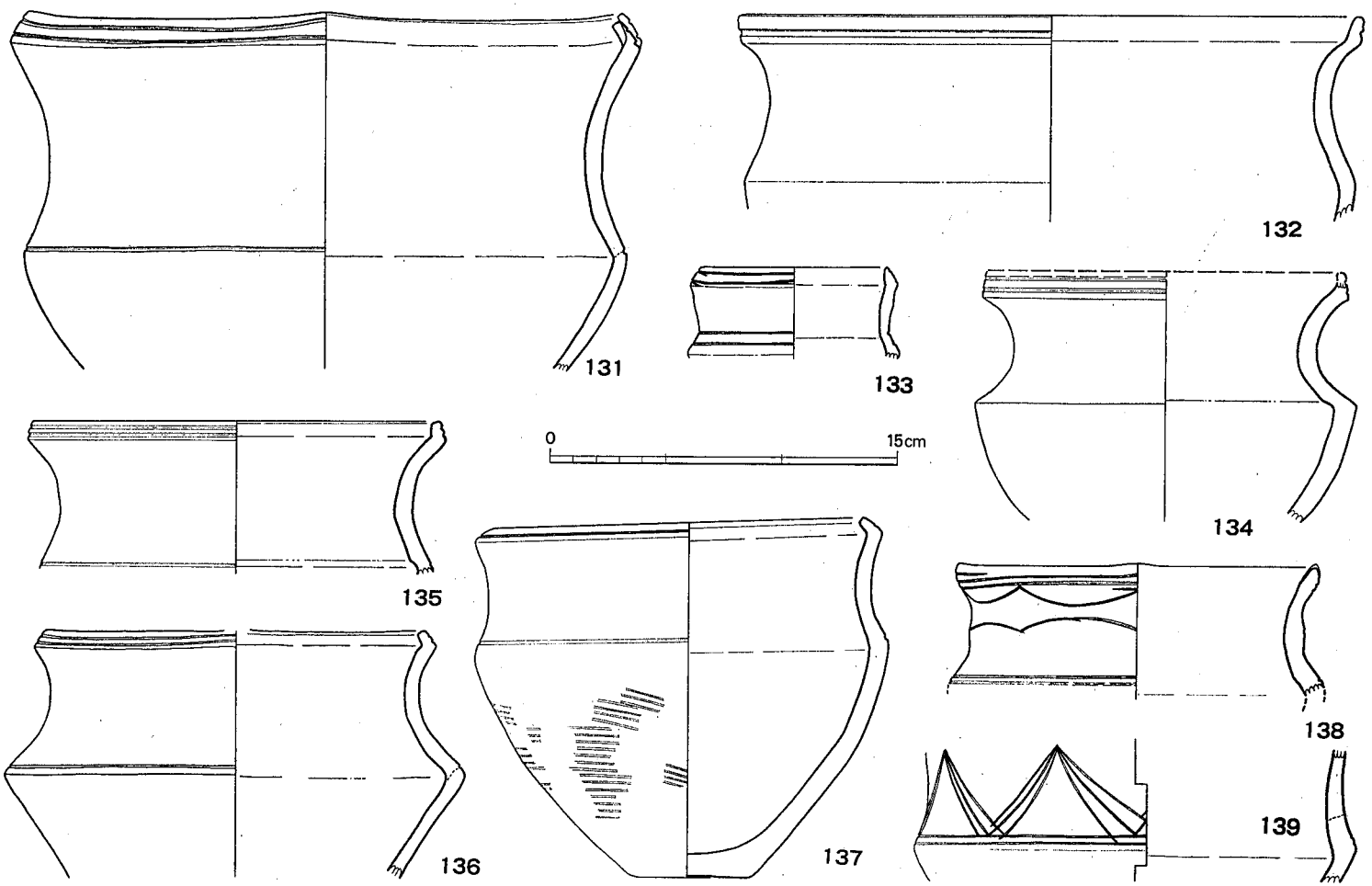
深鉢4 a類 169は鉢形土器の可能性もあるがこの類に含める。内外面共アナダラ条痕で調整される。

深鉢4 b類 189をこの類に含める。口縁部・底部の形状は不明だが，頸部は短くくびれナデ調整される。

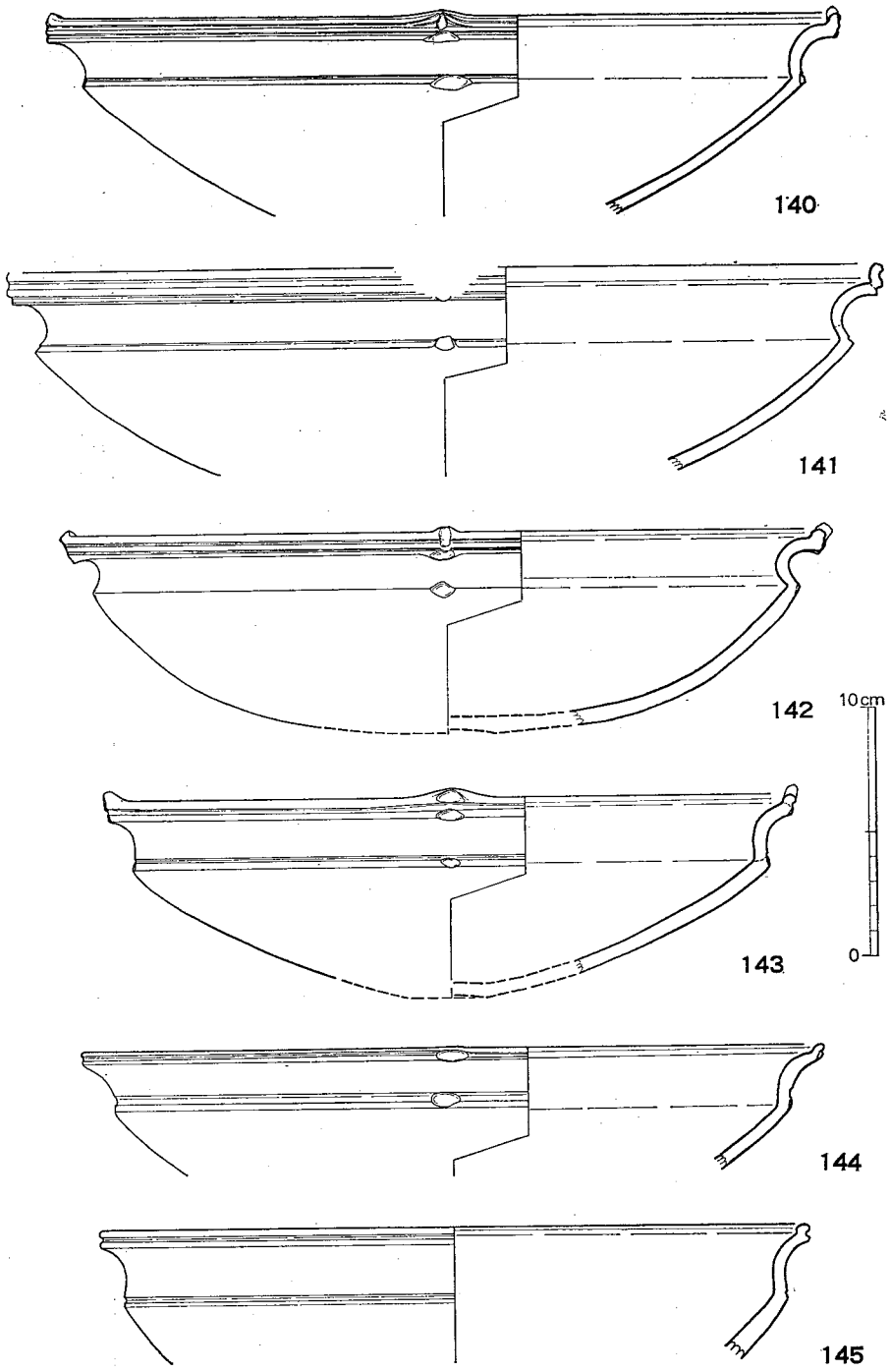
深鉢4 d類 187は胴下半に細密な条痕状のナデが縦位にみとめられるものの，短い頸部外面は横方向にナデられる。

深鉢5 b類 203は外面をアナダラ条痕で調整している。

深鉢6類 174・199・205をb類，163・167・209をd類に分類している。205・163の内面は板ナデ調整されている。



第 29 図　縄 文 土 器 実 測 図 10 (1/3) 第Ⅲ群



第 30 図　縄 文 土 器 実 測 図 11 (1/3) 第Ⅲ群

深鉢7類　170・175をａ類，171・177・202をｂ類，166・208をｄ類に分類している。170の口唇端部は押圧による浅い刻み目を付して疑似縄文としている。

深鉢8類　185・204・207をｂ類，161・165をｄ類に分類している。185は波状隆起を有し波頂部下にイ類押点が配される。

深鉢9類　176をｂ類，157・158・162・206をｄ類に分類している。157は完形になる資料である。158は，胴部から稜をなして屈折し直線的に内傾する器形を呈す。

深鉢10類　172をａ類，200・201をｂ類に分類している。201は内面の口縁下に１条の沈線がめぐる。

深鉢底部　(164・168・178・181～184・214・215)，215の底部には小さな堅果類種子圧痕がみられる。

鉢1類　133・138・139を１ａ類，131・135・136を１ｂ類，134を１ｃ類，137を１ｅ類，132を１ｆ類，211・212を１ｊ類に分類している。138の頸部には弧線を使って波状を上下に反転させる文様が，139の頸部には３本を単位とした沈線を相互に斜行させる連続文様が描かれる。139は口縁部を欠失しているが，１ａ類になる可能性を有す資料である。211は口縁部と胴部界線にヱ類押点を有す。なお196は胴部破片であるが，胴部最大径位からやや下に２条の沈線をめぐらせ，ウ類押点を有している。ａ類もしくはｄ類に含めうる資料である。

鉢2類　190・210はｊ類に該当する。

なお191・192が１類もしくは２類に含めうる。

鉢3類　(159・160・173)，159・160は小形の鉢で，159は殊に小形である。

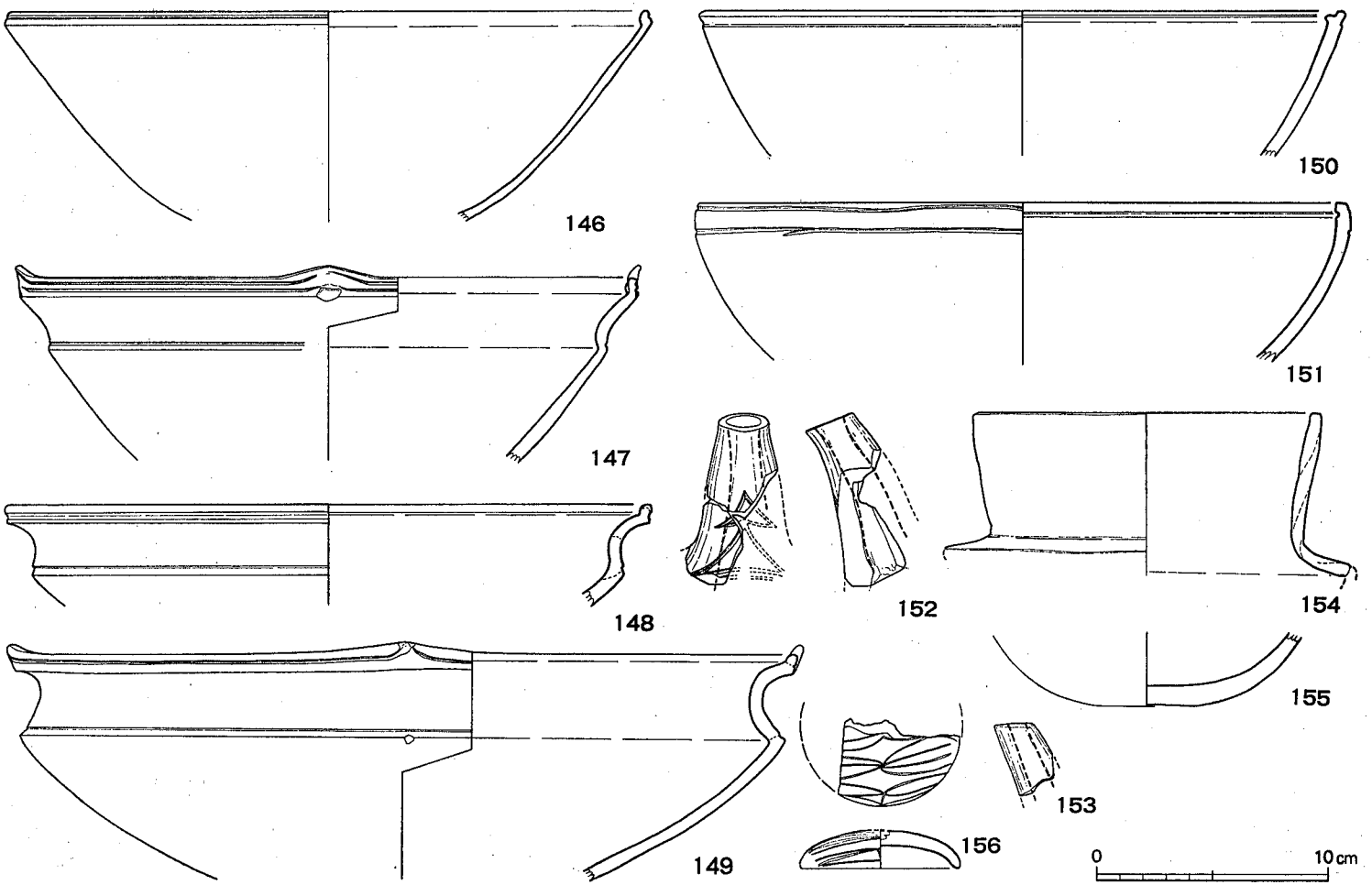
鉢底部　(213・217・218)，213は上げ底の底面に堅果類種子の圧痕がみられる。

浅鉢1類　140・141・147が１ｂ類，142が１ｃ類，143～145・148・149が１ｅ類に分類できる。140には界線にア類押点，波状部の空間にヱ類押点が付される。また141はウ類押点，147にはイ類押点が付されている。142は口縁部界線にイ類・胴部界線にウ類・波頂部空間にヱ類押点が付される。143・144にはイ類押点が付され，149ではウ類押点が付される。147・149では波頂部空間に押点のみられないことが他の押点を有す例と異なる。147は沈線施文・押点押圧後に波頂部をつまみ出した形状になることから空間部に押点が消失したと考えるべきであろうか。

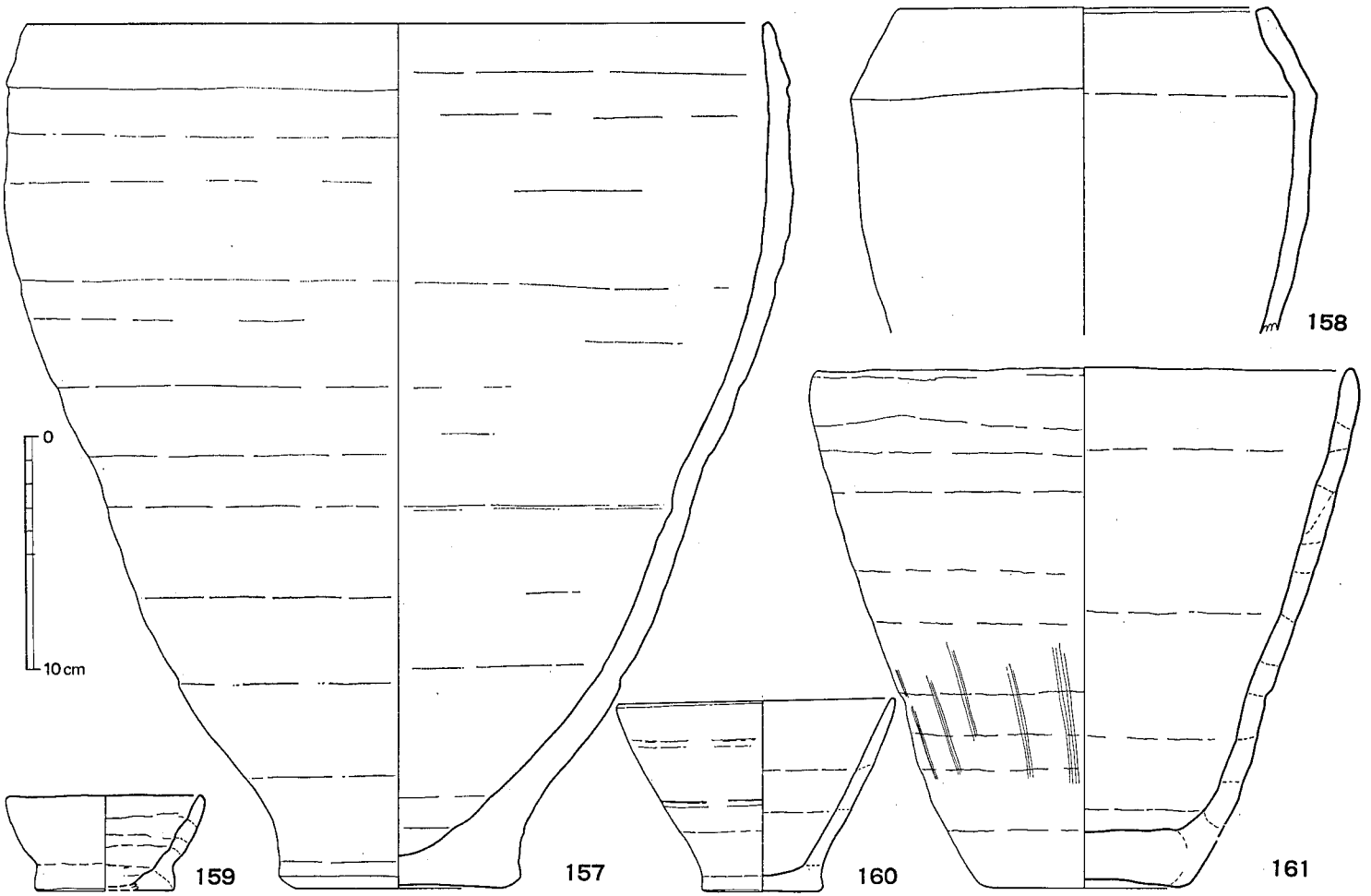
浅鉢2類　146を２ｆ類に分類している。極めて薄手で堅緻な器壁で淡めの暗褐色を呈す精製磨研土器である。

椀　ａ類に193，ｂ類に151，ｃ類に194，ｅ類に150が該当する。150は口縁外面に段状の浅い沈線と，口唇上の内面側に沈線を施して，内面側は隆起した形状となる。193は外面の沈線間に羽状文を充填させ，194は口唇と沈線の間を羽状文で充填させる例である。

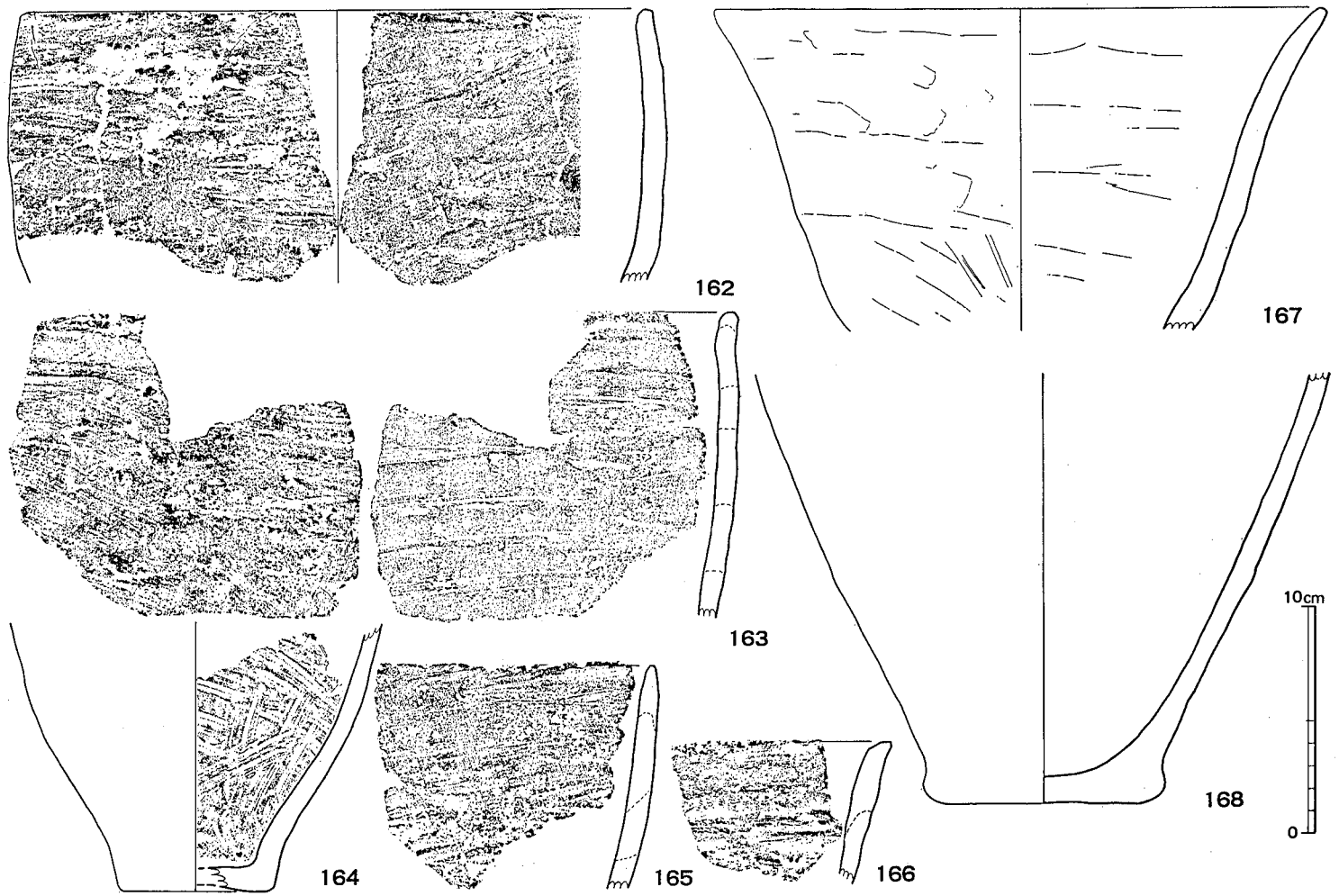
注口土器　152～155が注口土器片と考えられる資料である。152・153は注口部で152には浅めの沈線でイナズマ状文様を相対させた様な文様が付される。154は胴部から水平に近い平坦



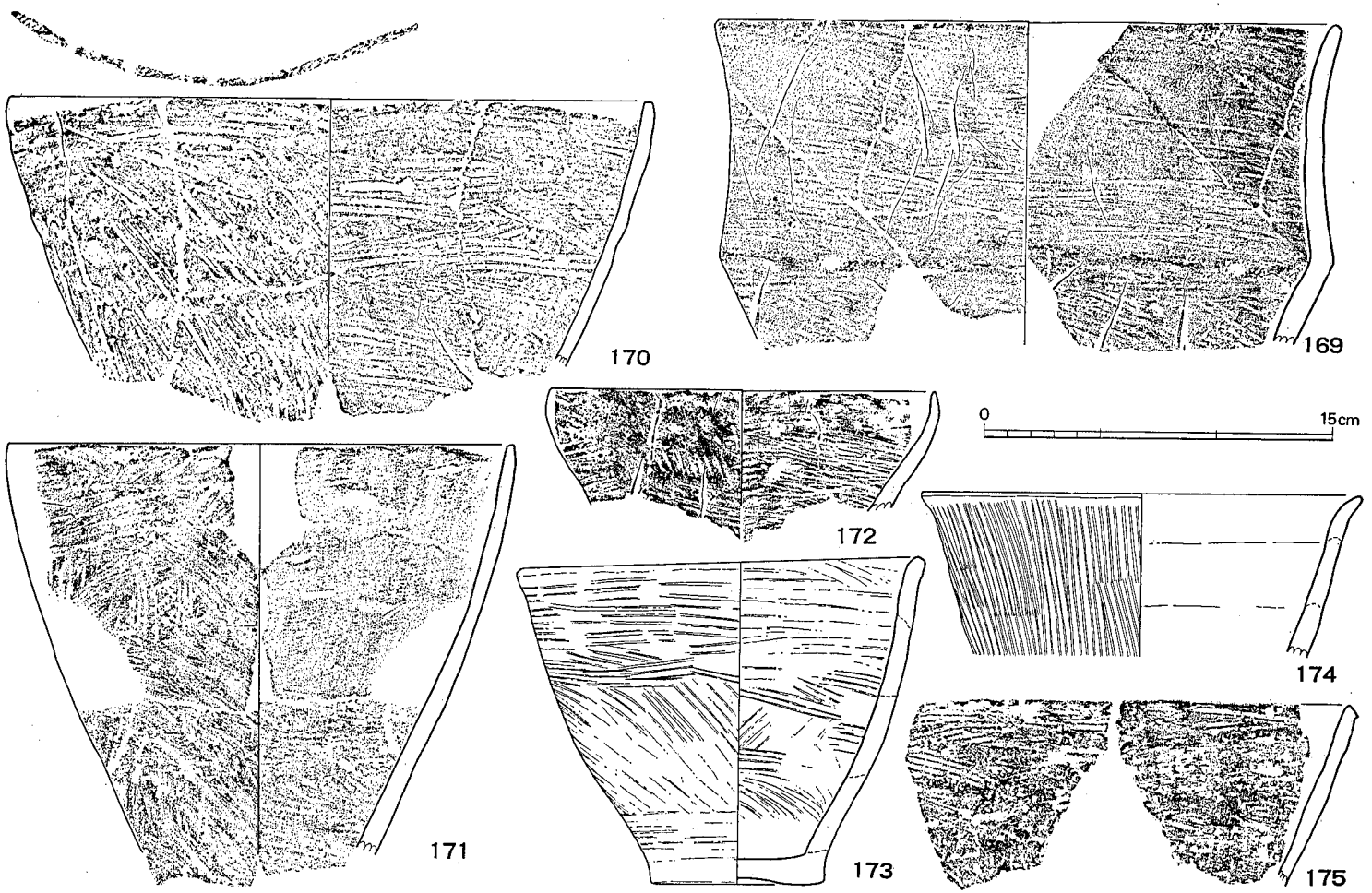
第 31 図　縄 文 土 器 実 測 図 12 (1/3) 第Ⅲ群



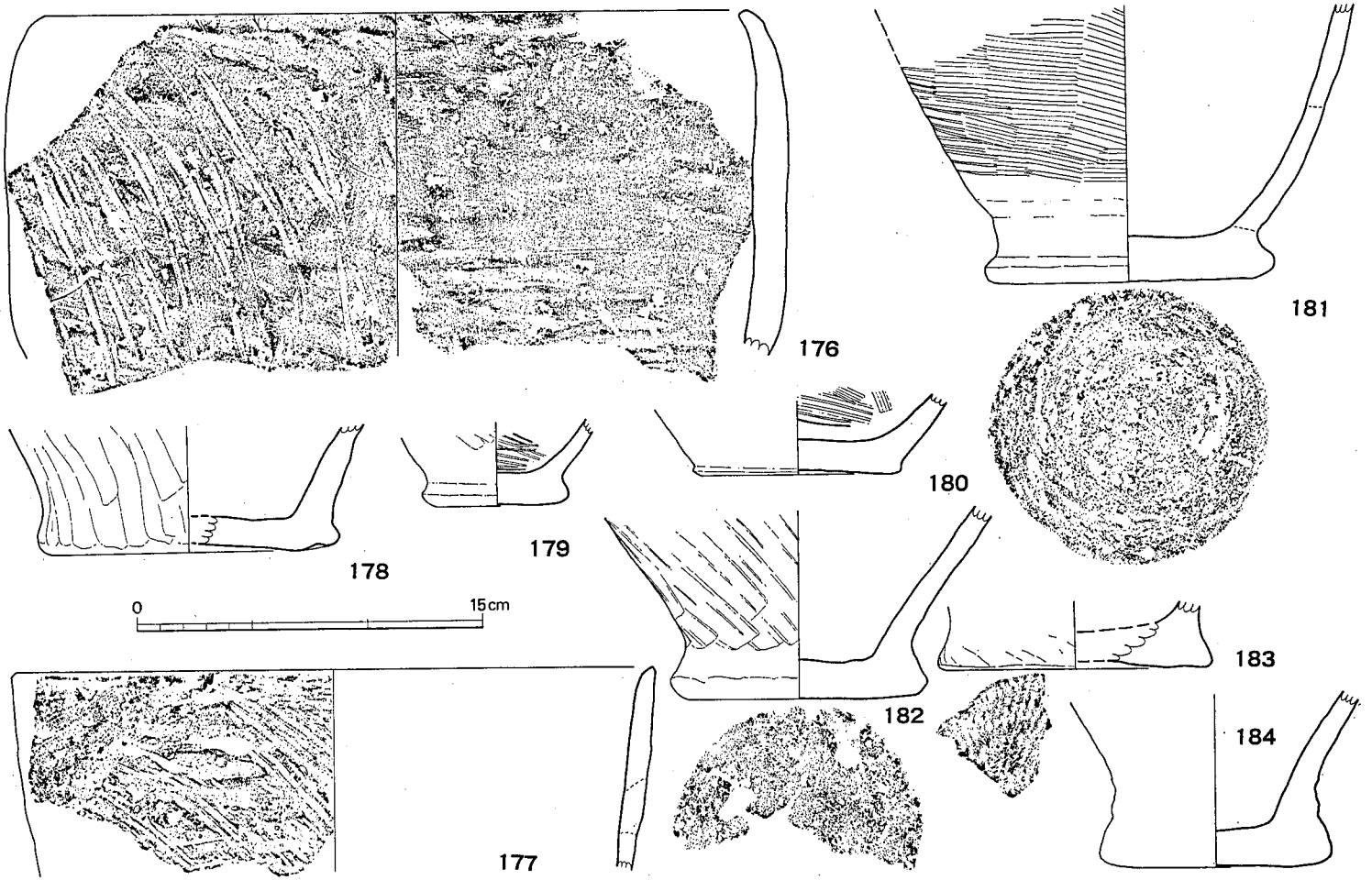
第 32 図　縄 文 土 器 実 測 図 13 (1/3) 第Ⅲ群



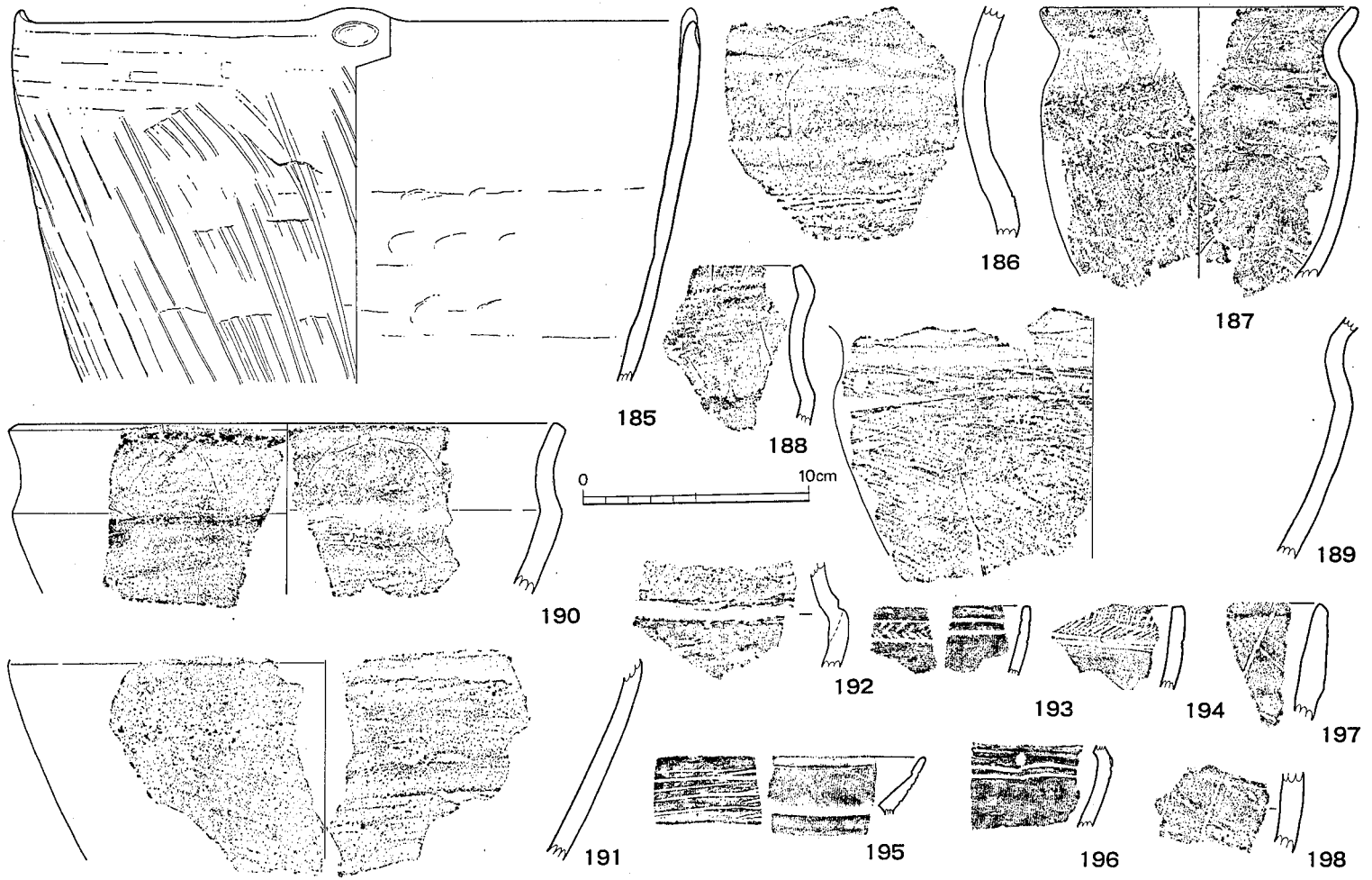
第 33 図　縄 文 土 器 拓 影 14 (1/3)　第Ⅲ群



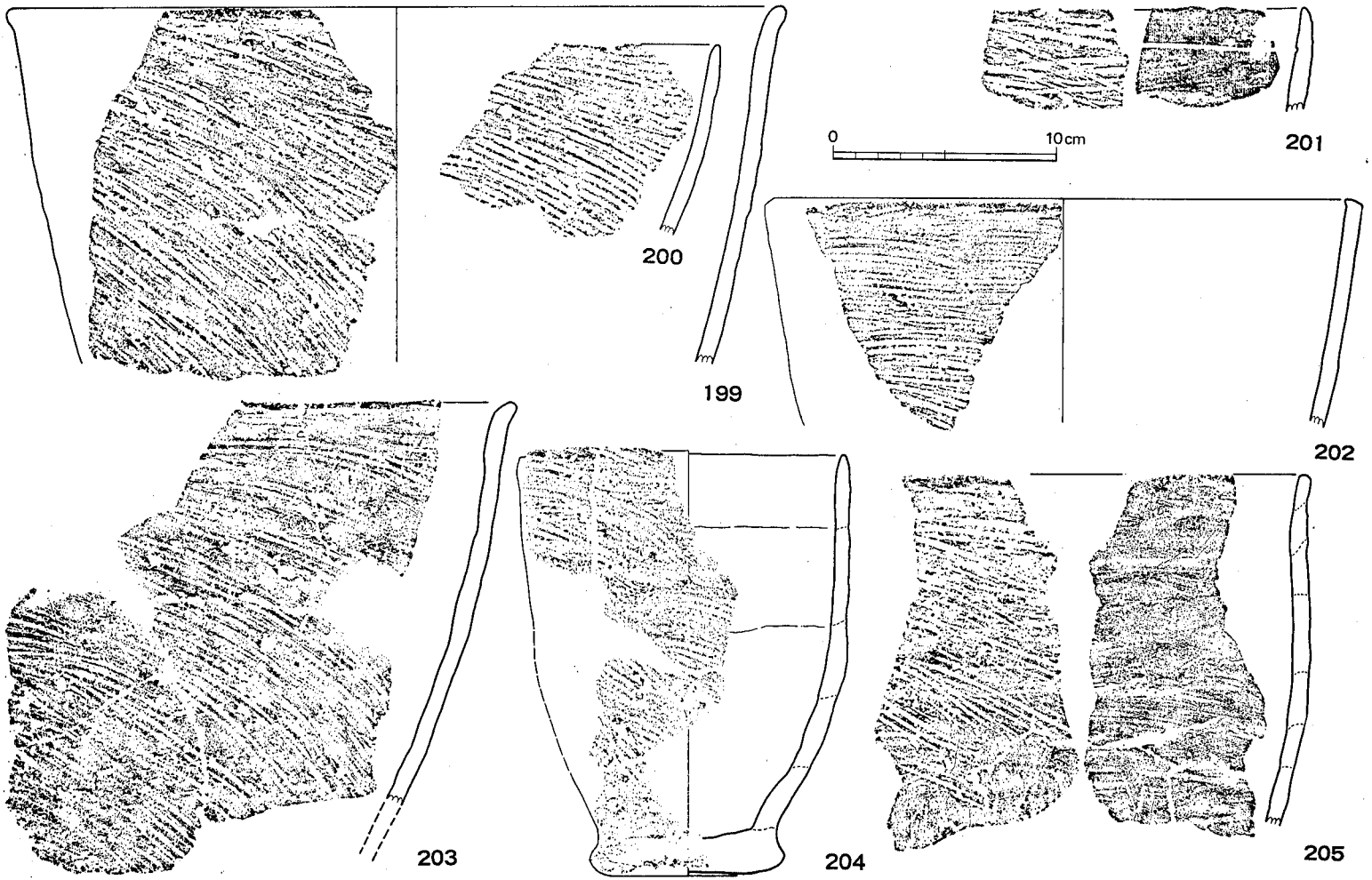
第 34 図　縄 文 土 器 拓 影 15 (1/3) 第Ⅲ群



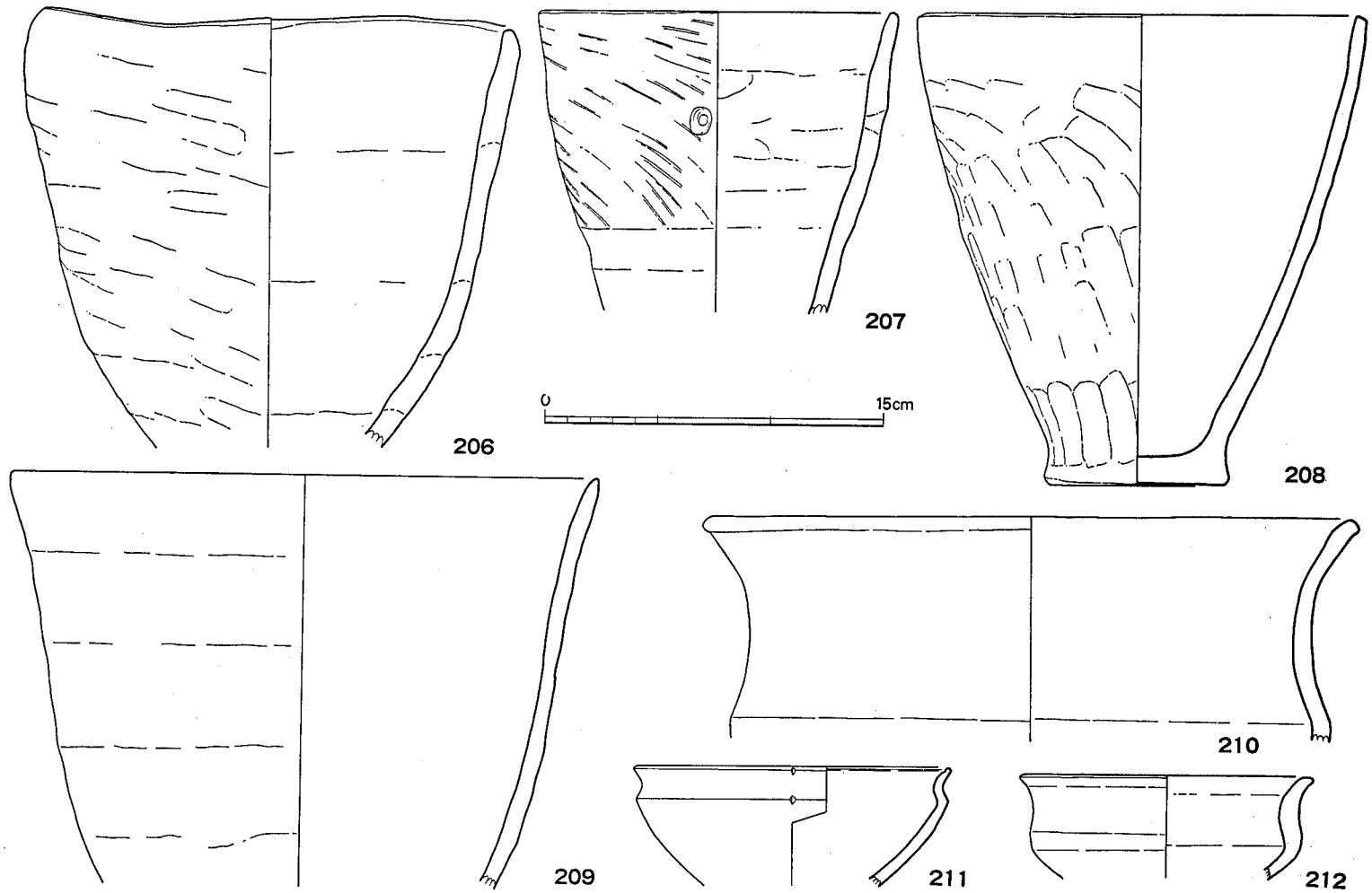
第35図　縄文土器拓影16 (1/3) 第Ⅲ群



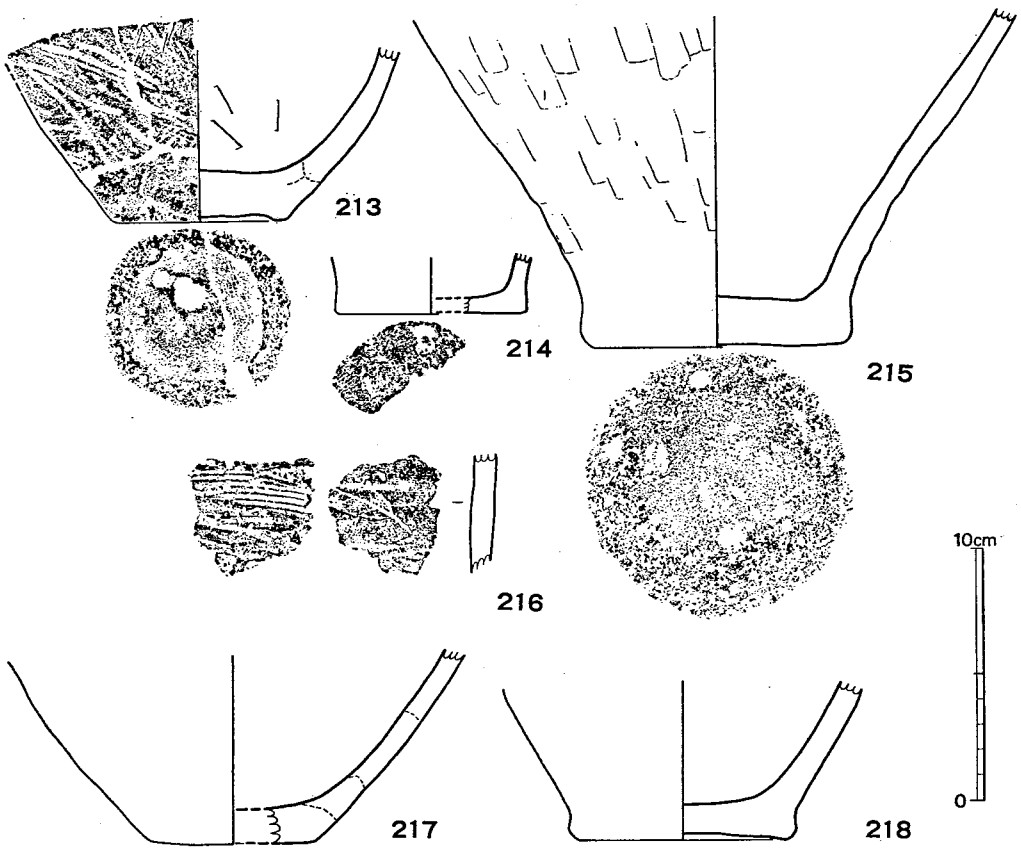
第 36 図　縄 文 土 器 拓 影 17 (1/3) 第Ⅲ群



第 37 図　縄 文 土 器 拓 影 18 (1/3) 第Ⅲ群



第 38 図　縄 文 土 器 実 測 図 14 (1/3) 第Ⅲ群



第 39 図　縄 文 土 器 拓 影 19 (1/3) 第Ⅲ群

面をなす肩部を有し，口縁部は外反して開き端部がやや内にまとまる形状をなす。口唇端部はやや平坦に整えられる。また頸部には途切れ気味の浅い沈線がめぐる。口縁部の高さは一方に短くなる。全体の約¾程度が残存するが，残存する部分には注口部が接した痕跡をみとめることが出来ない。底部は155の如き形状になるとみられる。153はやや粗雑な造りであるのに比して他の資料は精製で，殊に152は精巧な造りである。

蓋形土器　156は，約⅓程度残存する資料であるが，浅い皿状を呈す器形の外面に沈線による連続する文様を描いており，内面はナデのまま放置される。文様面を重視すれば，低い小形の鉢・椀形土器，あるいはⅡ群中にみられる 110資料の如き器形の蓋として使用された可能性を有す。

その他の土器　216資料は深鉢形土器 b 類の破片であるが，内面に木葉圧痕（図版25）のみられるものである。

この群に含まれる土器では，粗製土器に金雲母粒・植物質破片・貝殻片等を含む例が往々にしてみられ，焼成良好でありながら器壁中に気泡が多く観察される。精製土器では黒色を呈す

例が多く，磨研も丁寧なものが多い。

なお図版20・26のNo.76資料はB3区7層出土の深鉢8b類に分類できる土器で，図版21のNo.28資料はW4区7層出土の鉢1b類に分類できる。

(4) Ⅳ群土器（図版22，第40～44図）

第2群土層出土土器を一括してⅣ群土器とする。

深鉢3b類 243の器形は胴部最大径の位置から内傾する頸部が口縁部でわずかに外反し，胴部での屈折はみられないが，この類に含めた。口唇部には小さな瘤が付き，瘤を中心に山形の沈線が描かれ，瘤と瘤の間を小さな刻みによる疑似縄文で飾る例であろう。

深鉢5b類 249～251をこの類に含める。249は，前述の深鉢3b類に近い器形になる。5類との区別は明確にし難い例である。250は口唇内面にアナダラ条痕をめぐらせているが下部はナデによって調整されている。

深鉢6d類 228をこの類に含めている。外面はやや雑なナデで調整される。

深鉢7b類 244・248。248はむしろ鉢に近い器形とみられる。

深鉢8d類 229。

深鉢9b類 (240・242・245～247)。240は外面が縦位のアナダラ条痕，内面は粗いナデ調整される。242・245～247は，外面のアナダラ条痕が胴上半で斜めに交差する方向に施される。

深鉢10d類 230・255が該当する。

深鉢底部 (232～234・241)，241の外面にはアナダラ条痕が施され，深鉢b類の底部。

鉢1類 219を1a類，252・254を1b類，221を1d類，236を1e類，259を1g類にそれぞれ分類する。252は精製磨研の鉢で波頂部にV字形の小さな切り込みを入れ，頸部との界線にウ類押点を配している。236は小形の鉢で金雲母を多量に含み精製。259は口縁部に3条・胴部に2条の沈線がめぐる。なお，220・253も鉢1類に含まれるが，220は口縁外面に凹線がめぐり，253は波状の沈線が描かれる例で，胎土中に堅果類種子が混入されている。

鉢2類 256は小さな波状隆起の頂部に切り込みが付される。押点のオ類に含めうる。

鉢3類 258があり，内外面共無文ナデ調整される。

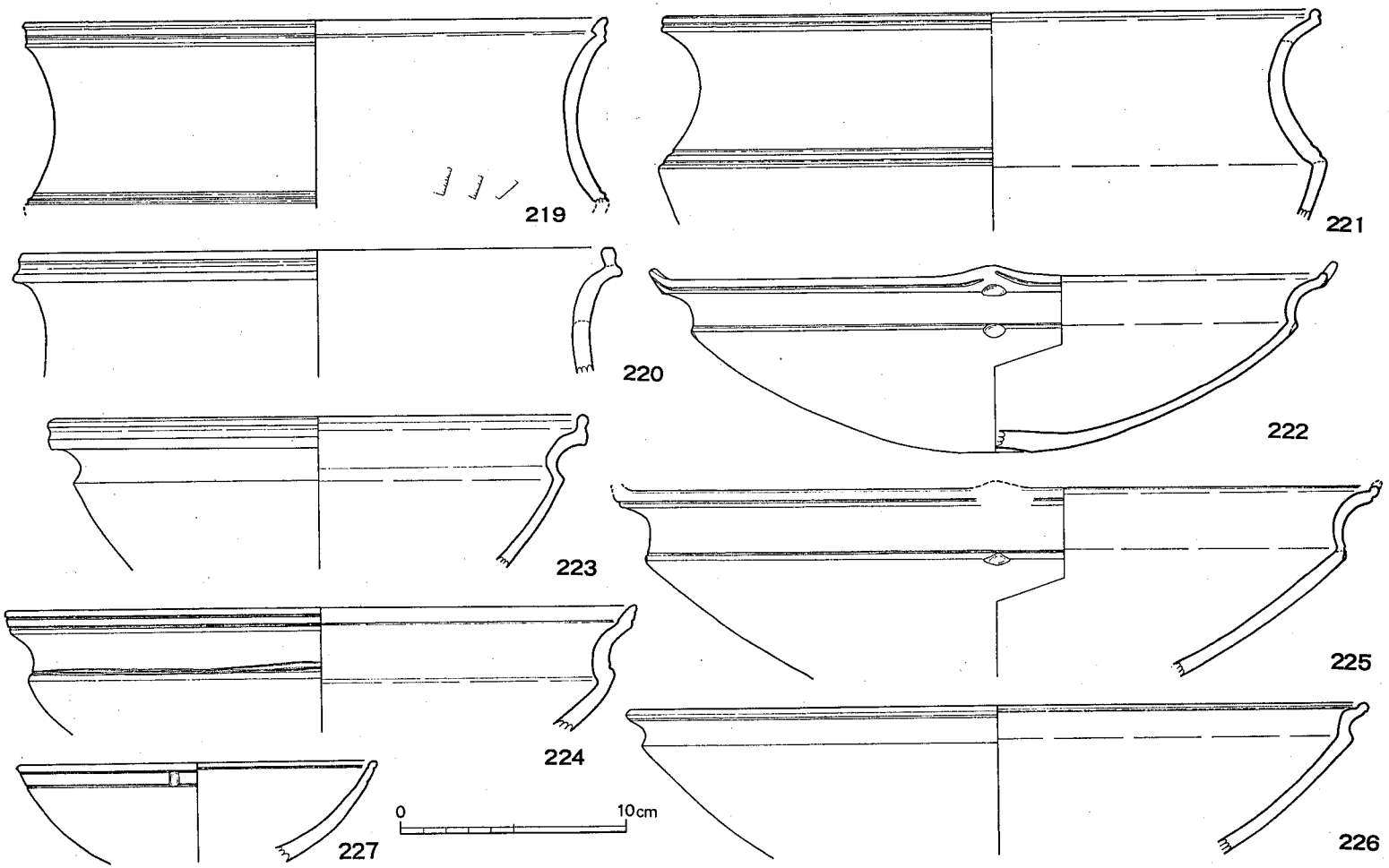
浅鉢1類 1b類に224，1e類に222・225，1f類に223・226とそれぞれ細分できる。222・225の界線には小さめの楕円形押点が付される。226は頸部が短くかつ口縁も短い器形で，口縁部内面にも浅い沈線を1条めぐらせている。

浅鉢底部 239は浅鉢の底部破片で，小さく浅い上げ底状となる。

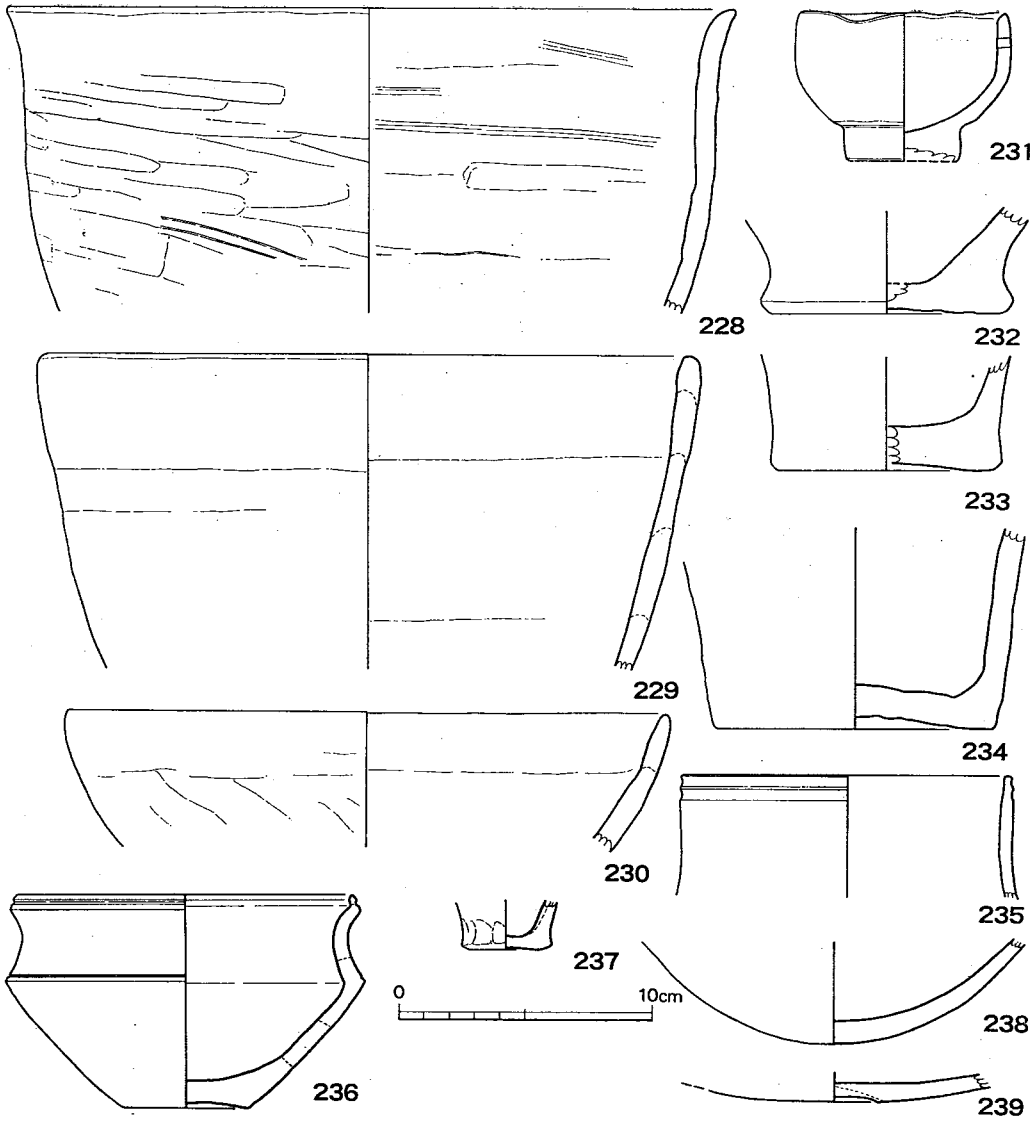
椀b類 精製磨研された227がある。外面の沈線間をつなぐようにヱ類押点が付される。

小形椀 231は手捏に近いナデ調整の器面を有す土器で，体部に比して大きめの底部が付く。焼成前の穿孔があるが，破片資料のため1ケ所確認できたのみである。

注口土器 235はほぼ直立する口縁部破片で，注口土器の口縁部とみられる。外面の口唇部直



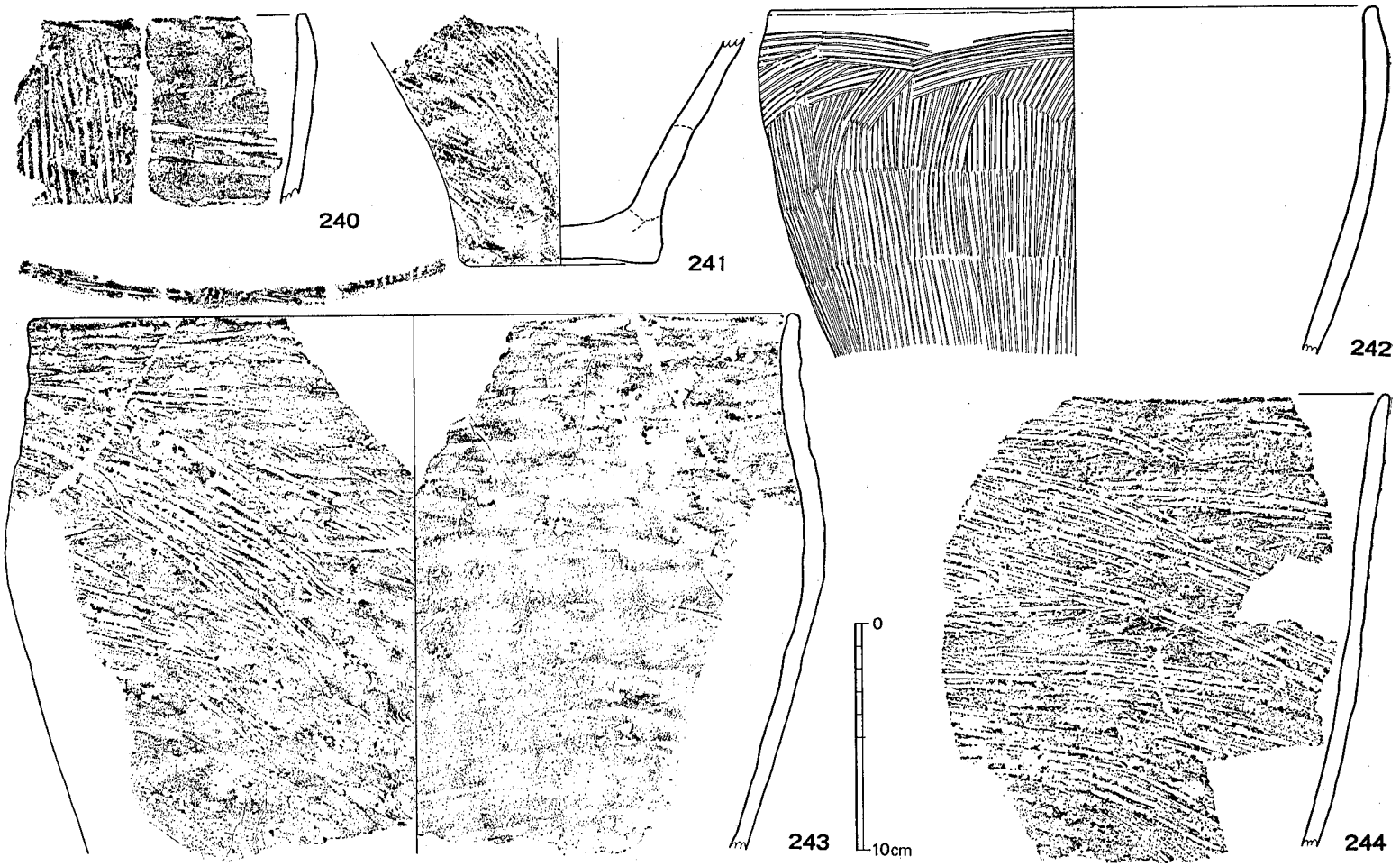
第 40 図　縄 文 土 器 実 測 図 15 (1/3) 第Ⅳ群



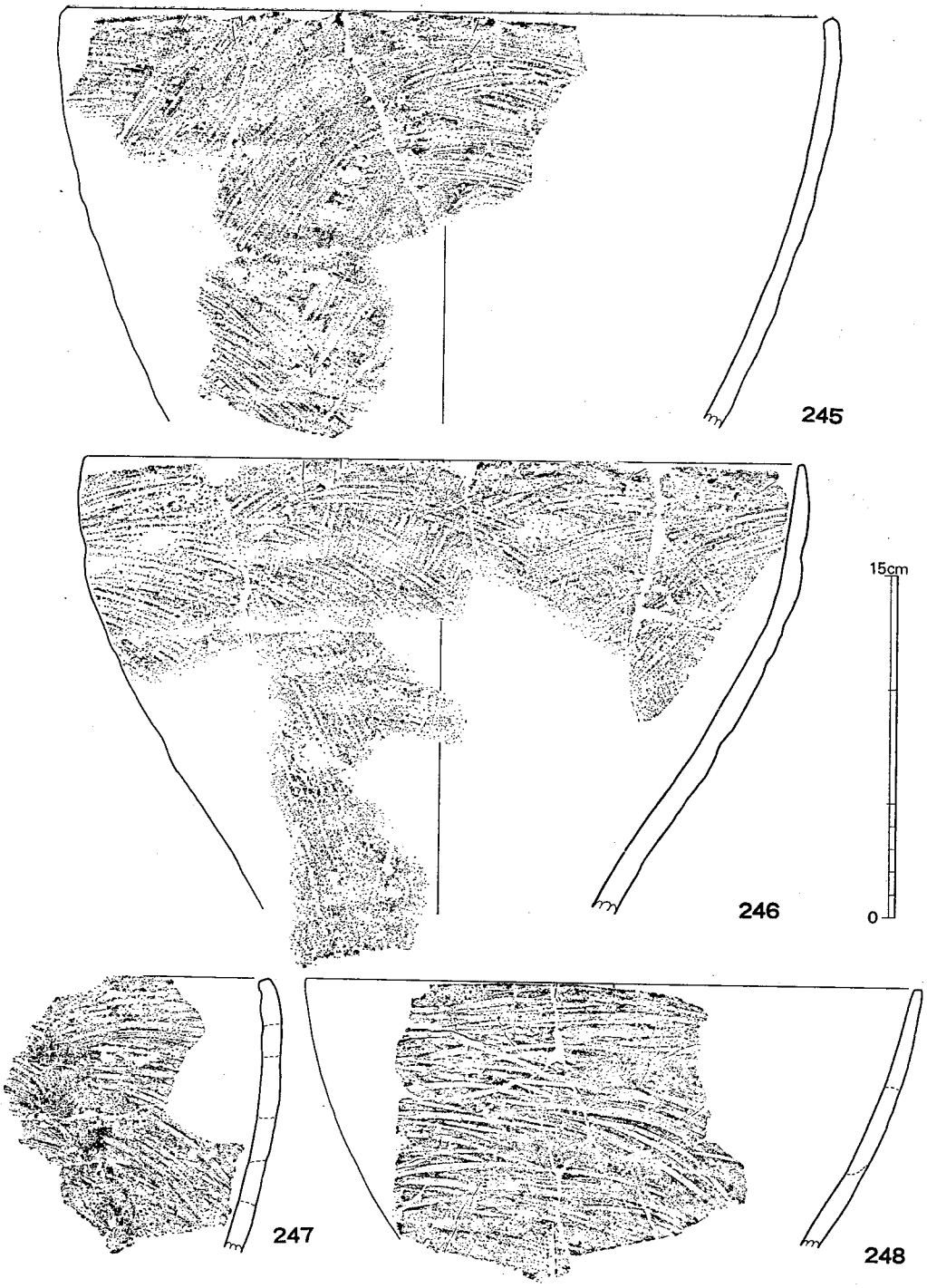
第 41 図　縄 文 土 器 実 測 図 16 (1/3) 第Ⅳ群

下に2条の凹線がめぐる。また238は丸底の精製土器底部破片で，椀形土器 もしくは 注口土器の底部であろう。

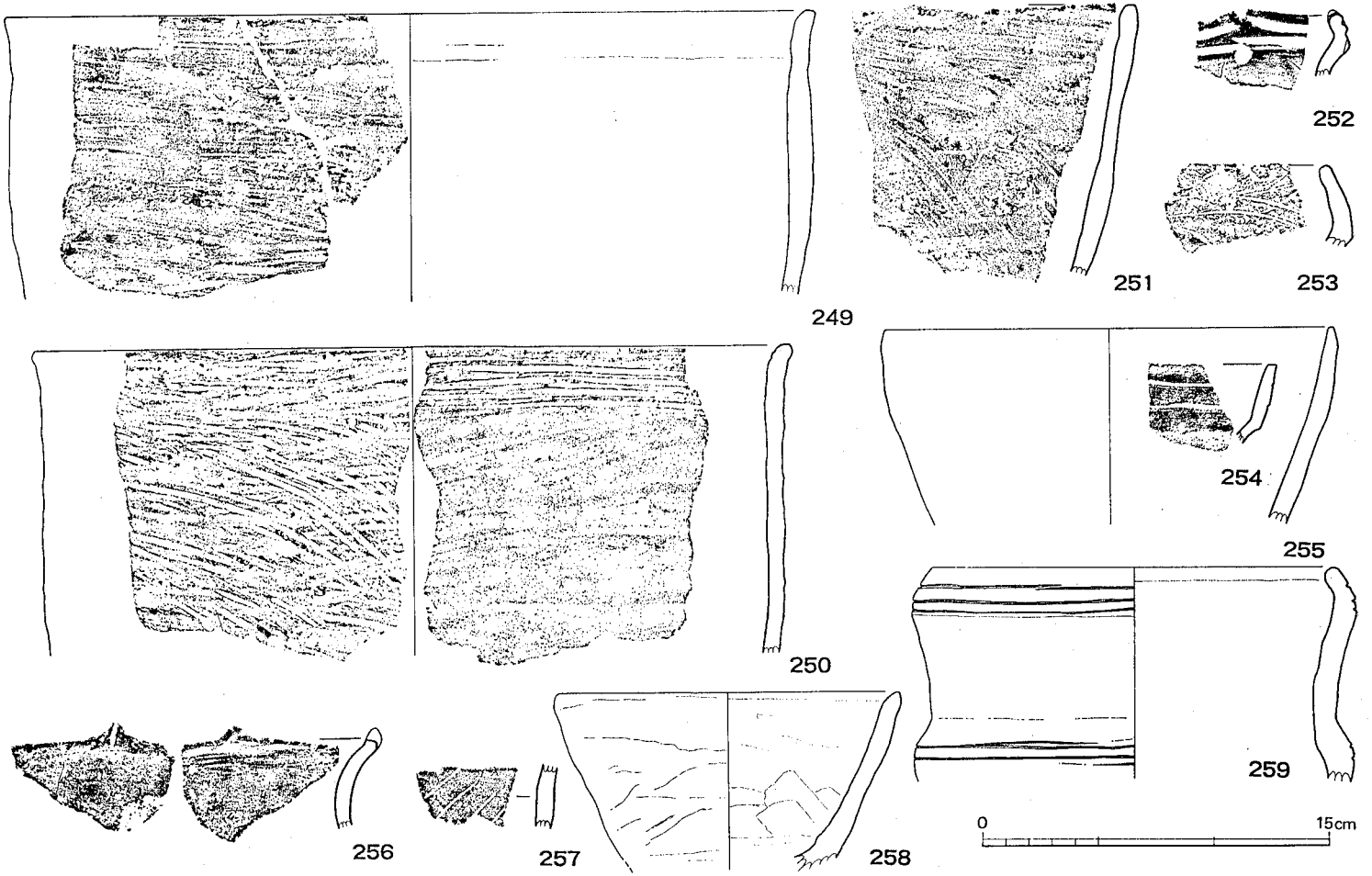
その他の土器　237はわずかに上げ底となる小さな底部破片でナデ調整される。また257はナデ調整の外面に斜行する沈線が等間隔に並ぶ小破片である。いずれも全体の器形は窺えない。



第 42 図　縄 文 土 器 拓 影 20 (1/3) 第Ⅳ群



第 43 図　縄 文 土 器 拓 影 21 (1/3) 第Ⅳ群



第 44 図　縄 文 土 器 拓 影 22 (1/3) 第Ⅳ群

(5) **Ⅴ群土器**（図版23・24—1，第45～48図）

第1群土層出土土器をⅤ群土器として一括する。

深鉢 282を7 a類，283・284を7 b類，280を7 d類，270を8 d類，271・279・285を9 d類，278を10 d類にそれぞれ分類できる。284は口縁部外面に2条の鋭い沈線がめぐる。279は口縁部が著しく内傾する例である。Ⅰ群の6資料に類似した器形であるが，胎土・調整共に279の方が良好である。285は，口唇部上面に1条の沈線がめぐらされており外面のナデは粗い。273～275は内外面共に無文ナデ調整される深鉢底部破片でいずれもわずかに上げ底となる。276・277は，外面に下から上にカキ上げたような擦過痕のみられる深鉢底部破片で，276の内面には横位に近いアナダラ条痕が一部残る。また292・293は底面に籠状・編物状の圧痕がみられる例である。

刻み目突帯を有す深鉢 298・299の2片がある。いずれも破片資料で全体の形状は不明。

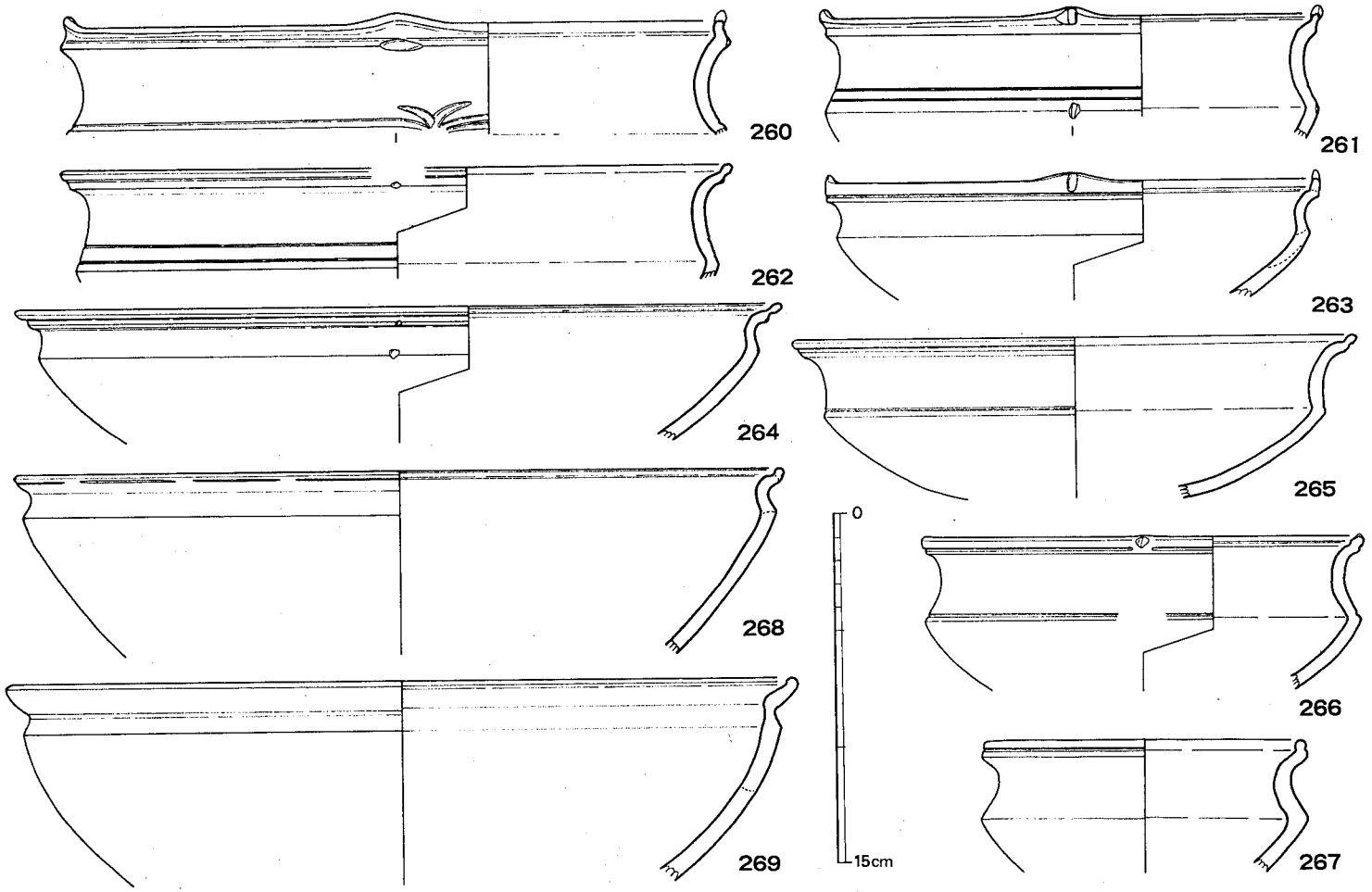
鉢 260～262は胴上部の破片のため，浅鉢との区別はし難い。261・262を1 d類，260を1 e類，267を1 f類に分類しえる。261にはオ類押点が付され，262には小さなウ類押点（図版23では261と262は接しているが，特徴・口径に若干の違いをみとめうる），260にはイ類押点が付される。260の波頂部やや右斜め下方の肩部にはⅤ字形文様がみられ，太目の沈線は2条になる可能性がある。また 286は口縁部内面がやや浅く凹み外面は沈線が1条めぐる。

浅鉢 265・266を1 e類，263・264・268・287・289を1 f類，269・288・290を1 j類に分類できるが，1 f類の268・289は頸部の極めて短い器形になる点で269・290に近い。これらの浅鉢を前述の分類以外に一つのグループとして取り扱うべき器形とも言えよう。268・289は口縁部外面にかすかな沈線をわずかに有すのみで沈線のめぐらせ方にも近似点を窺わせる。押点は，263の波頂部にみられるオ類押点の他に，264・266・287に付されるがいずれも極めて小さな小円形もしくは刻みの如き形状の例になる。また 288は短い頸部から口縁部が長く延びる例である。外面には沈線がめぐらずに内面に1条の沈線がめぐり，波頂部には何らの装飾をも施さない。288は，頸部の短い点で269・290に近いが，口縁部が長く外反する点に大きな相違があると言えよう。

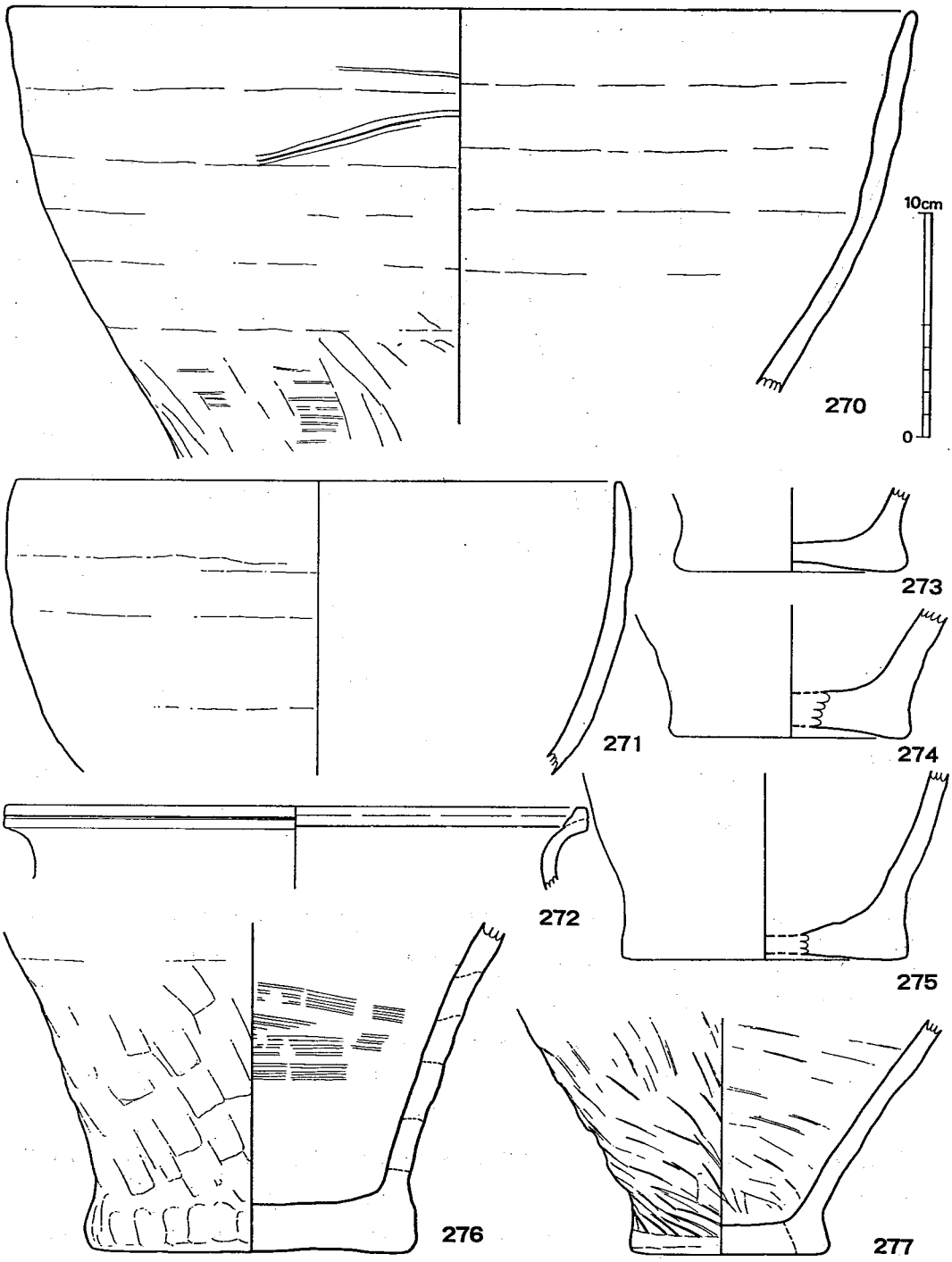
注口土器 注口土器の可能性のある資料として294・295がある。いずれも精製磨研されるが294の頸部に1条の段状沈線と胴部に4条あるいは4条以上の沈線を有す。295は破片の下端部に羽状文がみられる。

盤状の土器 281は口縁部がわずかに残る程度であるものの底部が完全に残存する資料である。底面形は楕円形を呈す。器形は低平であり上面観も楕円形になるとみられ，皿や浅鉢とするよりも盤状とする方が穏当であろう。胎土に金雲母を多く含む。

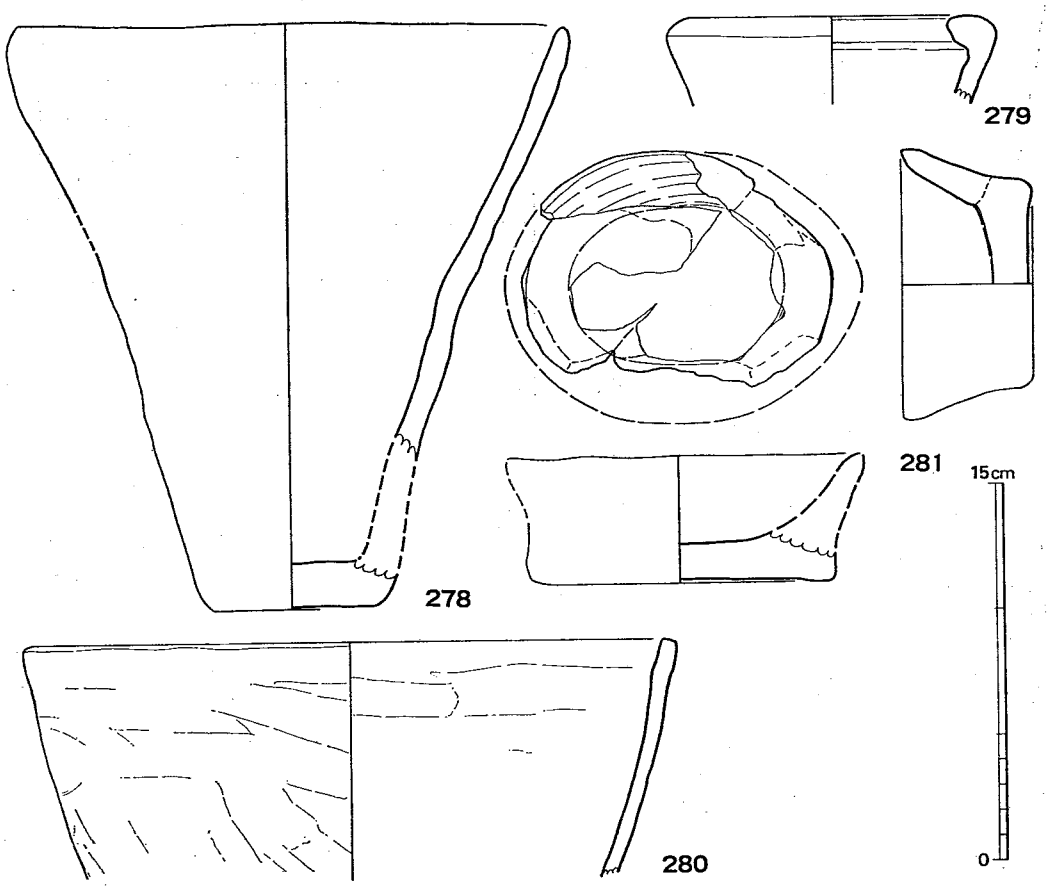
その他の土器 296は内面に文様を描いた低平な土器で底面に焼成前の穿孔がみられる資料である。また297は外面に縄文を施文し，沈線で画した部分を磨り消した資料である。おそらく



第 45 図　縄 文 土 器 実 測 図 17 (1/3) 第V群



第 46 図　縄 文 土 器 実 測 図 18 (1/3)　第V群



第 47 図　縄 文 土 器 実 測 図 19 (1/3) 第V群

混入した土器であろう。

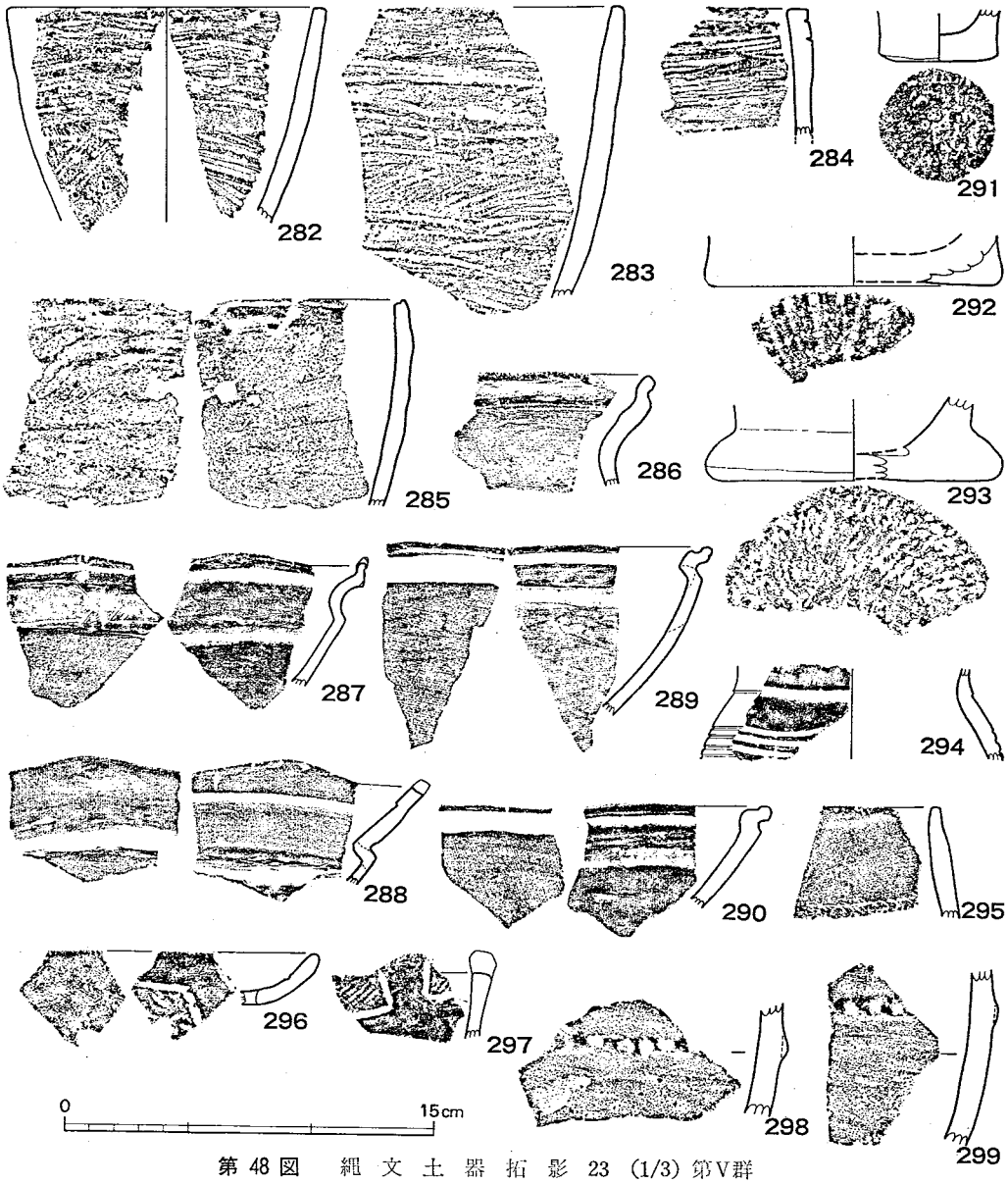
なお図版23中のNo.233資料は浅鉢１ｊ類に分類できるが，288と同様短い頸部から口縁部が長く外反する例で，内面に沈線のみられないことが相違する。Ｅ４区２ｂ層出土。

(6) **表採等の土器**（図版24，第49図）

重機によるトレンチ掘削時に出土した土器（黒色包含層及び黒色包含層下層と一応区別したが，層位はやや傾斜した堆積状況となっているため，直接対応できない）及び表採土器を層位不明の土器として扱う。

深鉢10類　300・301・303があり，300は外面に細かな条痕が施されることからｂ類，303は内外面共にナデ調整されるのでｄ類に細分できる。また301はナデ調整された外面に２条のほぼ並行する弧線・直線を組み合わせて文様を描いた例である。いずれも金雲母を多量に含み器面にやや光沢がある。

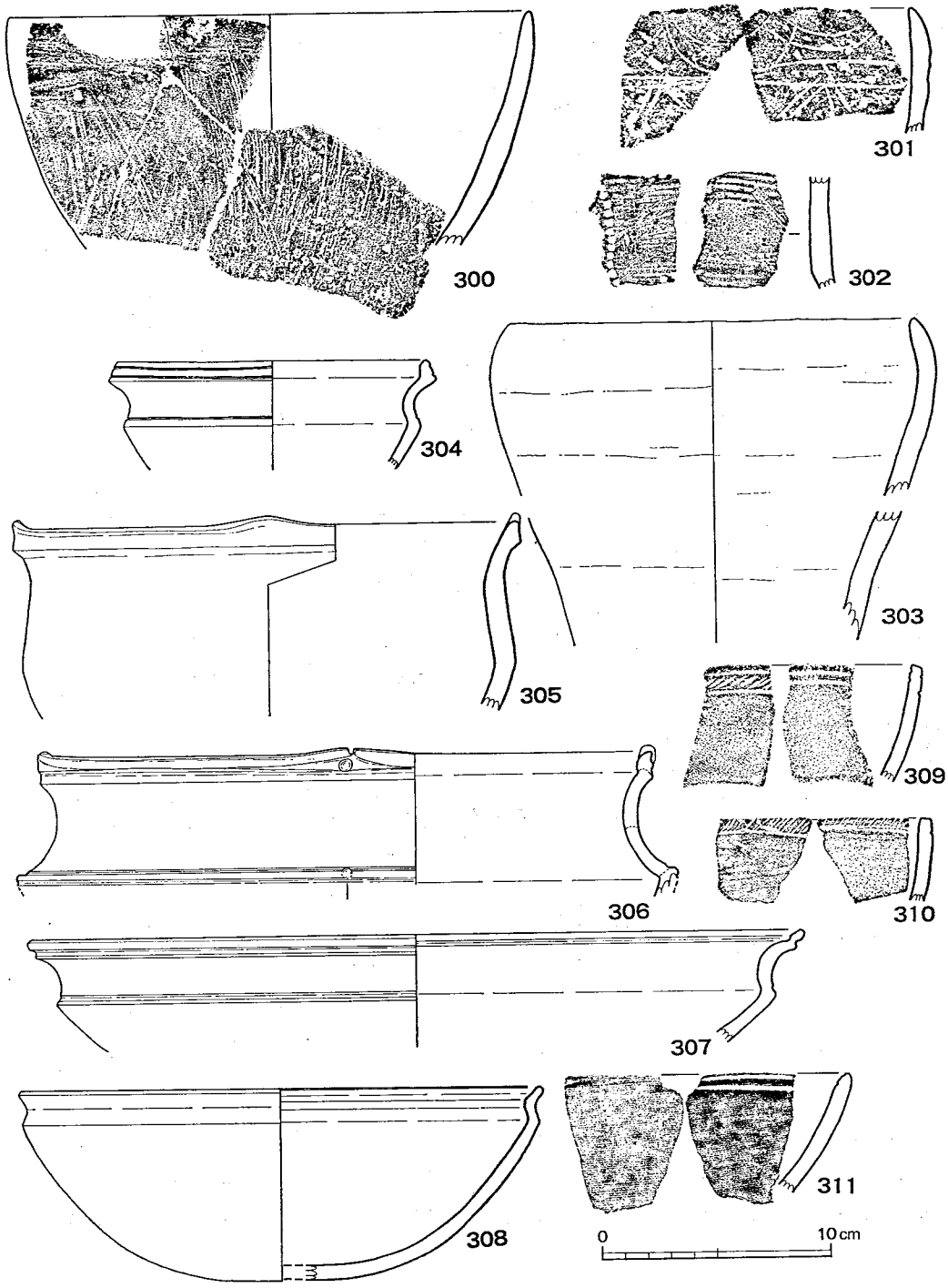
鉢１類　304～306がある。304は１ｂ類の小形の鉢で，306は口縁部外面に２条の凹線がめぐ



第 48 図　縄 文 土 器 拓 影 23 (1/3) 第V群

り波頂部にカ類押点と，波頂部直下の空間・胴部界線に小さなウ類押点が付される。肩部から胴部にかけて2条の沈線が確認できることから1 a類に分類できる。305は頸部が緩やかに内彎し胴部も丸味をもつ器形となるが，口縁部外面が浅い凹線となり1 f類に近い。なお波頂部には押点等が付されない。

浅鉢1類　307・308がある。307は1 e類に分類できるが，口縁部内面にも1条の沈線がめぐる。308は口縁部・頸部共に短い器形で1類に含めるよりむしろ区別すべき種類の器形である。



第 49 図　縄 文 土 器 拓 影 24 (1/3) 表採等

椀　309～311があり，309はａ類，310はｅ類，311はｈ類に分類できるが，309外面の沈線間は斜行文，310の内外面共に口唇部から沈線の間を斜行文で充塡される。

その他の土器　302は内外面共にアナダテ条痕が施され，外面には横位・縦位の連続刺突文がみられる。なお図版24—１のNo.38はＥ２～６区南壁崩落土に含まれていた，深鉢10ｄ類に分類できる資料である。また図版24—２のNo.104は，301と同一個体になる破片である。図版25のNo.100土器はトレンチ黒色包含層出土土器で編物状圧痕が底面にみられる。

(7) 小　結

以上のように，大溝出土土器を層位に従って，５つの群に区分し，器種分類を加えた。大溝出土土器は圧倒的に粗製深鉢形土器が多く，精製の鉢形・浅鉢形土器は割合として少ない。しかし福岡県下においてこの種の土器の出土は稀薄であり，当該土器の量は県下において無類に多いと言えよう。

これらの土器類のうち，時期の明確なものでは最も古い時期とみられる資料として，所謂磨消縄文的手法を有す45・297資料があり，46の西平式土器が続く。また最も新しいとみられる資料では，298・299の刻み目突帯を有す晩期後半まで下る例がある。しかし両者共に量的に少なく混入した土器とみるべきであろう。

各群の精製土器を分類に従って概観すれば，鉢形土器１ａ類（Ⅲ・Ⅳ群）１ｂ類（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群）１ｃ類（Ⅰ・Ⅲ群）１ｄ類（Ⅳ・Ⅴ群）１ｅ類（Ⅳ・Ⅴ群）１ｆ類（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ群）１ｇ類（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ群）１ｊ類（Ⅲ群）２ｃ類（Ⅰ群）２ｈ類（Ⅰ群）２ｊ類（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群）となり，１ｄ・１ｅ類はⅣ・Ⅴ群から出現し，２ｃ・２ｈ類はⅠ群以降にみられない。

浅鉢形土器では，１ａ類（Ⅰ群）１ｂ類（Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ群）１ｃ類（Ⅰ・Ⅲ群）１ｅ類（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群）１ｆ類（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ群）１ｊ類（Ⅴ群）２ｃ類（Ⅰ・Ⅱ群）２ｆ類（Ⅰ・Ⅲ群）となり，１ａ類はⅠ群のみ，１ｅ類はⅢ群以降，１ｊ類はⅤ群のみ，２類はⅠ～Ⅲ群にみられ，１ｆ類もⅡ群に１点例がある以外Ⅳ群以降にまとまる。また口縁部・頸部共に短くなる１類浅鉢はⅣ・Ⅴ群にみられる。

一方押点文の種類では，ア類押点がⅠ～Ⅲ群，ウ類押点がⅢ群以降，エ類がⅢ群のみ，オ類がⅤ群のみにみられる等の傾向がみられる。

凹線・沈線の配し方では，口縁部・肩部共に２条みられるものから，１条に変化していること，更には口縁部外面に沈線が消失する傾向と，押点が大きめの三角形・横長な楕円形から，円形・縦長方形・刻み目へと変化している傾向があり，一方では屈折した口縁部・頸部が短くなる傾向がみられる。この傾向は両者共に相関関係にあり，屈折した口縁部帯の幅，肩部の消失化現象のためにそれぞれの部分に充塡される文様が消失化していると言えよう。

粗製深鉢形土器では，内外面共に条痕を施す例がⅢ群まで，内面のみ条痕を施す例はⅠ群のみ，外面のみ条痕を施す例がⅣ群までで，Ⅳ群では外面のみ条痕を施す例が大半を占める。な

お胎土の変化としてⅡ群以降に金雲母の混入される例が多くなり，なかには器面が光沢を有す程の例もある点が注目される。

粗製土器では従来時期による変化を明確にした例が少ないが，当該遺跡出土土器は精製土器との共伴として把握することができる。

時間的な余裕がないため充分な検討はなしえていないが，精製土器の特徴と従来の土器形式とのおおむねの対比は以下の如くである。

Ⅰ群土器　凹線・沈線が口縁部に2条・肩部に2条ないしは1条，あるいは口縁部に3条の凹線を有す例がみられ，三角形・横長な楕円形の押点が付される特徴は後期三万田式あるいは宮滝式の特徴を備えるものの，三万田式に特徴的な羽状文等は顕著ではないことから三万田式よりも後出する土器群とできる。また御領式的な土器もみられる。

Ⅲ群土器　沈線が口縁部に2条・あるいは1条，肩部に1条あるものとみられないものがあり，押点には，横長楕円形・円形・縦長楕円形のものが見られ，胴部の屈折が稜をなす例が多くなることから，御領式土器の特徴に近いと言えるものの滋賀里式的なやや後出する要素も含んでいる。

Ⅴ群土器　屈折する口縁部・頸部が短くなる浅鉢形土器・短い頸部から長く外反する浅鉢形土器があり，口縁部内面に沈線を有す例が多くなること，押点に切り込みがみられるなど，晩期前葉的な土器とすることができよう。

従って大溝出土土器は縄文時代後期末葉から晩期前葉の時期におさまる。

なお当該遺跡出土土器にみられる特徴を図版25・26で示したが，胎土中に堅果類種子（99・253等）や木葉（№21）をそのまま含んでいる例，ヘナタリ等の貝殻片を含む例が多く，金雲母を多量に含む（134・137）例もある。また器面にみられる圧痕として，堅果類種子圧痕・籠状圧痕（62）・編物状圧痕（293・№100）等が底面に，木葉圧痕（216）が土器内面にみられる。器面調整では，外面に原体不明の細かい条痕（300）・粗いナデ調整（61）・アナダラ条痕（90）が施され，内面には板目のナデ調整痕（90・34・№76）のみられる例がある。

以上，広田遺跡出土土器を概述したが，単に層序による区分をしただけで，層序相互の混入等については形態分類と共に，今後類似資料との充分な比較検討を要するものである。出来れば「吉井広田遺跡出土土器群」として稿を新たにしたいと考えている。

4　石　器（図版27～45，第50～66図，表3～13）

大溝からは554点の石器が確認された。これらの器種別構成は表3に示すが，土器と同様に出土層位によって群に区分すれば，Ⅰ群とⅢ群に多いことを知り得る。但しこの数量は，打製石斧に磨耗した刃部破片を含めていることと，相互の接合について充分な検討をなしえていないため実数よりもやや多く数えている可能性を否定できない。これらの石器類は各々一覧表に

計測値等を示した。また記述では，特に遺物番号を用いる場合を除いて挿図中の番号で示す（例えば打製石斧H３は９として示す）。但し図版中の表示は遺物番号を用いている。

打製石斧（図版27～35，第50～55図，表４・５）

打製石斧は総数161点出土し，完形品は25点ある。前述したように刃部破片をも１点として数えているため実数はこれより少なくなるかも知れないが，石器類のうち３割を占める。一覧表には０～２区出土の５点を含めた166点を収録している。実測図ではⅠ群土器に伴った資料１～８・32，Ⅱ群土器に伴った資料９～13，Ⅲ群土器に伴った資料14～24，Ⅳ群土器に伴った資料25・26，Ⅴ群土器に伴った資料27・28，その他29～31・33～36を図示している。

表３　大溝出土石器構成表

種類＼群	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	その他	合計
打製石斧	33	20	56	20	13	19	161
石皿	10	—	3	—	—	—	13
すり石	8	2	7	1	2	—	20
石鏃	19	12	33	20	16	11	111
有溝石錘	—	—	1	—	—	—	1
礫石錘	3	1	4	3	1	—	12
磨製石斧	6	6	18	2	4	7	43
砥石	2	2	2	4	2	2	14
削器・掻器	17	12	35	12	7	16	99
石錐	1	2	—	1	—	—	4
石刃	6	6	21	7	5	9	54
つまみ形石器	3	2	1	—	1	—	7
石核	—	—	1	3	6	5	15
合計	108	65	182	73	57	69	554

打製石斧の原材としては安山岩が多く，玄武岩・緑色片岩・結晶片岩等も利用されている。

これらの打製石斧はその形態から８種類に分類できる。

１類　短冊形で厚みのあるもの，１～３・６・８・10～12・14・15・19・20。

２類　短冊形で扁平なもの。18・23～27・30・34。

３類　短冊形で厚みを有すが，刃部幅が頭部幅の約 1.5 倍を有するもの。撥形に近い形を呈する。４・31・32。

４類　短冊形で，刃部幅が頭部幅の約 1.5 倍を有する撥形に近い形を呈し，扁平なもの。16・17・35。

５類　撥形を呈し厚みのあるもの。刃部幅が頭部幅の約２倍を有するものを仮に撥形としている。21。

６類　撥形を呈し扁平なもの。22・23。

７類　基本的には短冊形に含まれるが，胴部両側縁に抉りが入り，やや分銅形に近い形を呈すもので，厚みのあるもの。５・７・９。

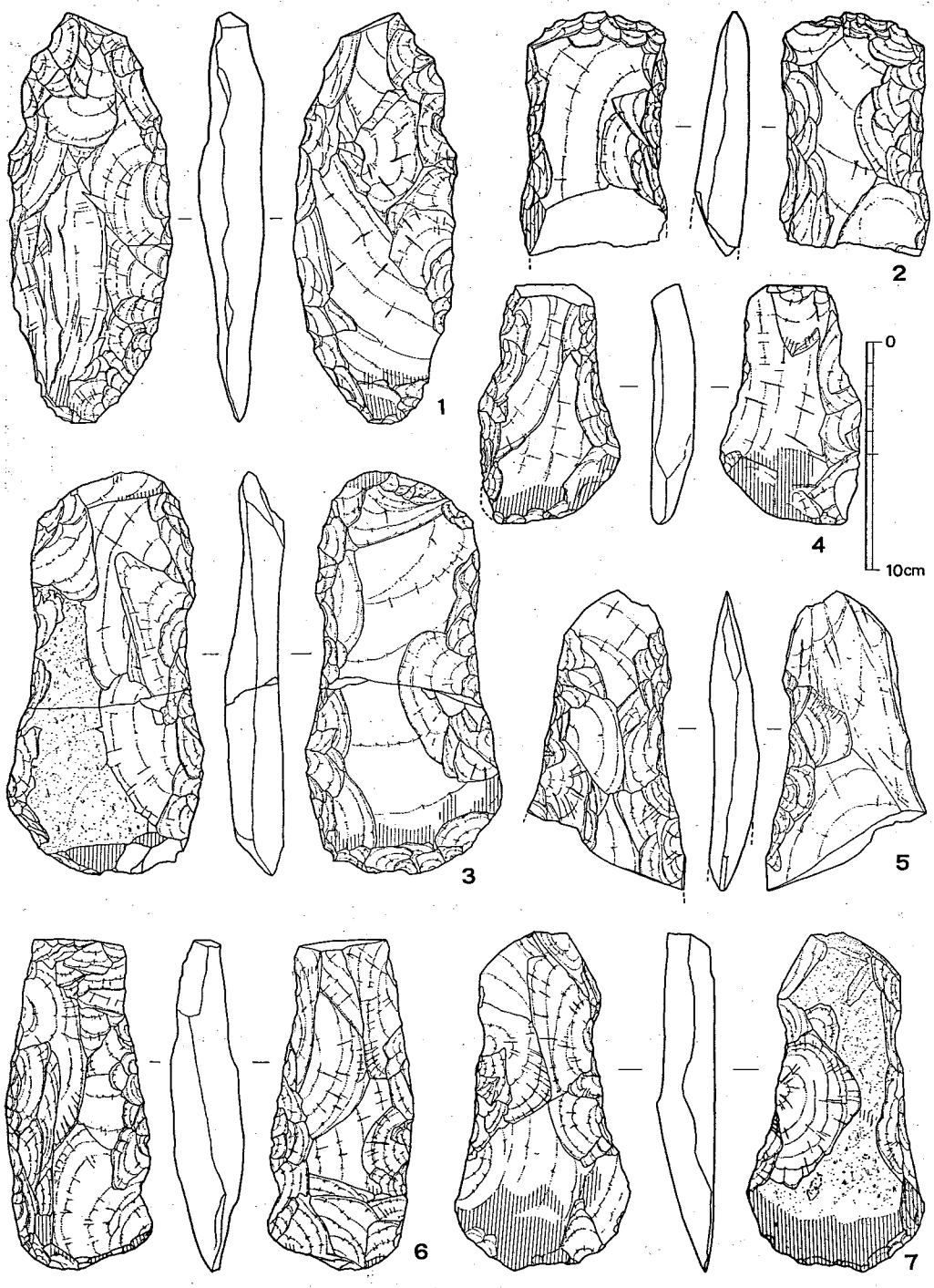
８類　基本的に短冊形に含まれるが，やや分銅形に近い形を呈し，扁平なもの。13・29・36。

一方，製作方法では，

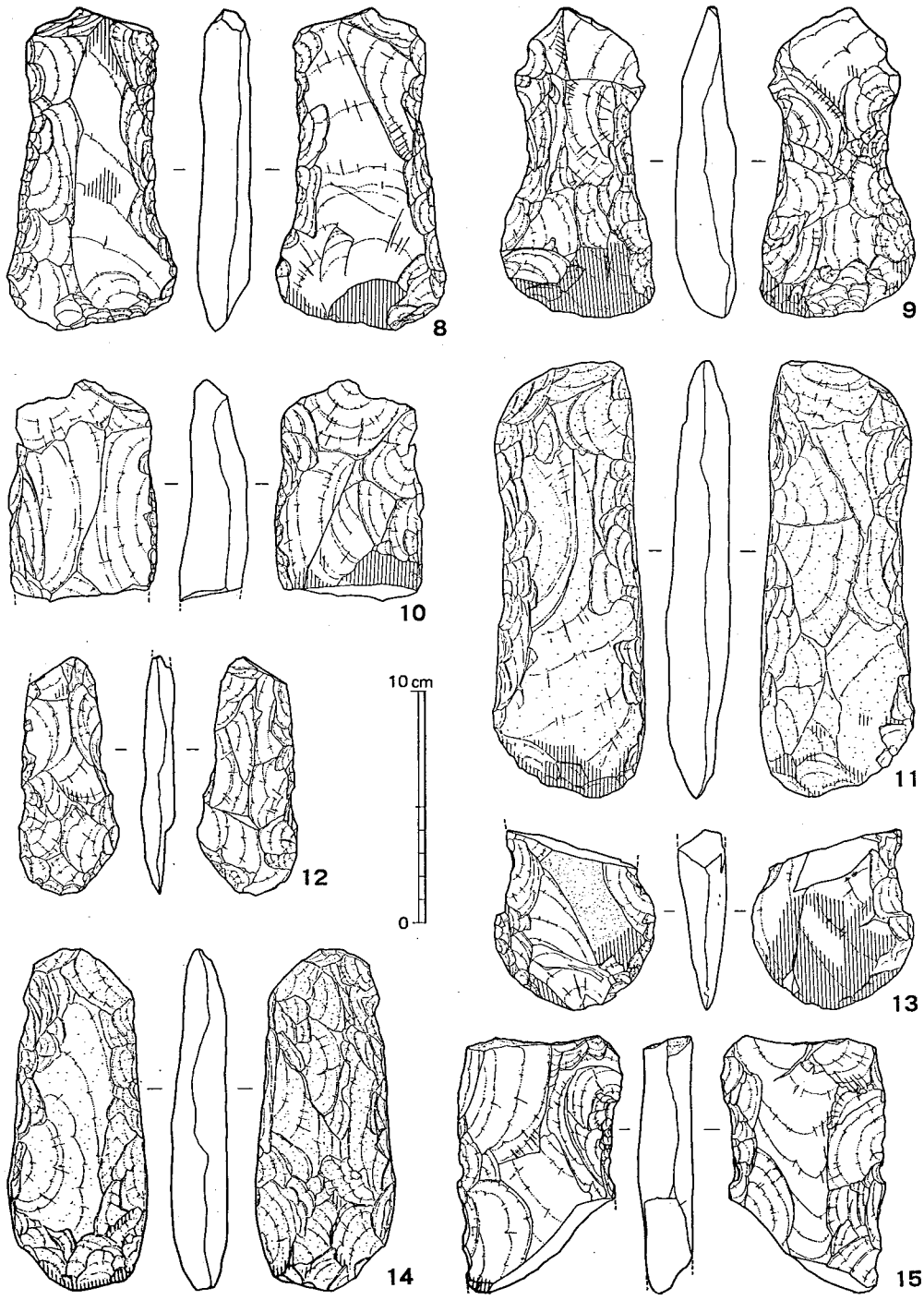
A　横剝ぎによって板状の素材を作出したもの。この中には，(a)横剝ぎの打面を調整して厚みを減じたもの，(b)打面を調整しないままのものが含まれる。

B　縦剝ぎによって板状の素材を作出したもの，A類同様に(a)(b)の両方がみられる。

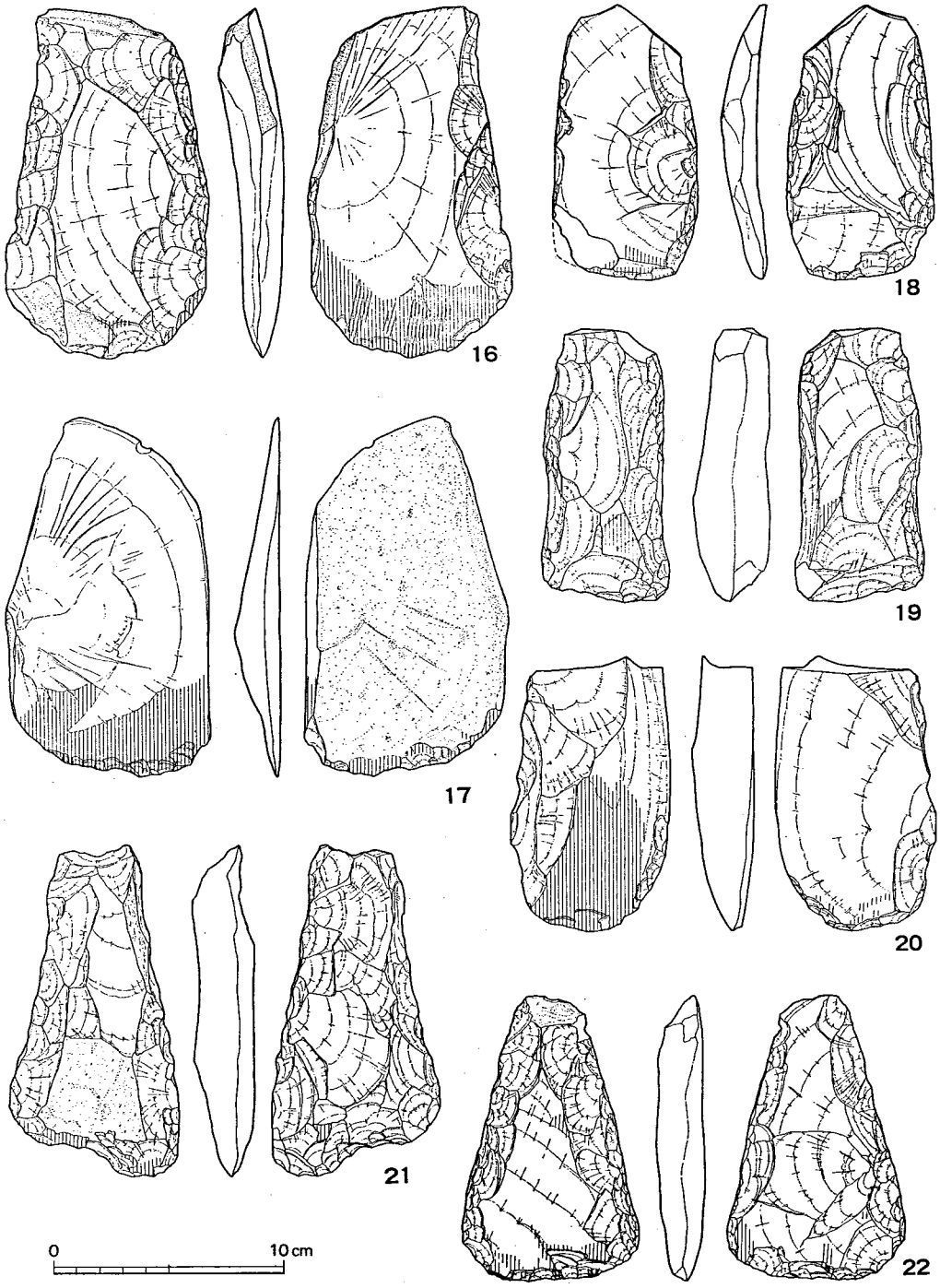
Aａ類は，２・５～７・９～11・13・14・16・18・20～26・29・31・32・36。Aｂ類は，



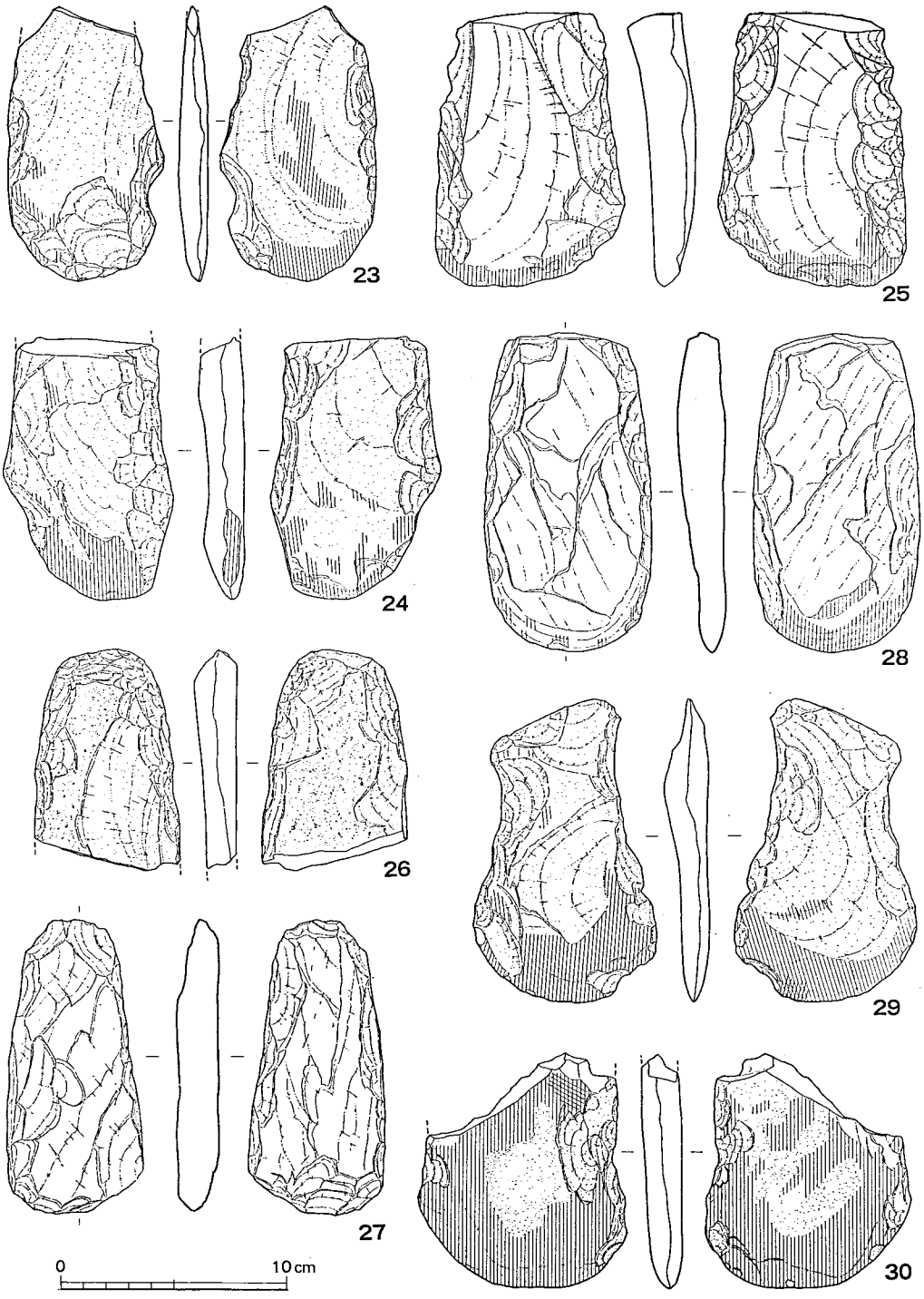
第 50 図　打 製 石 斧 実 測 図 1 (1/3)



第51図　打製石斧実測図 2 (1/3)



第52図　打製石斧実測図 3 (1/3)



第53図　打製石斧実測図 4 (1/3)

表4　打製石斧一覧表 1

〔単位cm及びg（ ）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広H 3	トレ	9層	安山岩	13.3	6.5	2.5	209	7—a	完	9	28-2・34
広H 6	表採		玄武岩	20.5	20.1	3.3	722	3Aa	完	31	32
広H 7	表採		橄欖石玄武岩	(13.6)	9.7	1.6	(252)	4Ab	基部一部欠	35	31-2
広H 8	W 2	7層	玄武岩	14.7	6.0	2.4	291	1Aa	完	14	29-1
広H 11	トレ2区	6b層	玄武岩	(9.3)	7.5	(2.3)	(228)	—	刃部のみ		30-2
広H 12	W 3	9a層	玄武岩	18.7	6.6	2.8	403	1Aa	完	11	28-2
広H 16	W 3	9b層	玄武岩	(7.1)	(4.8)	(1.4)	(71)	—	胴部のみ		
広H 17	W 5	7層	安山岩	14.3	7.3	2.2	260	5Aa	完	21	29-2
広H 19	W 2	7層	安山岩	(6.1)	(6.0)	(1.9)	(93)	—	胴部のみ		
広H 20	W 3	9b層	砂質頁岩	21.4	10.3	3.4	796	3Aa	基部欠	32	32・33
広H 21	W 4	9b層	安山岩	(10.6)	6.4	(2.3)	(172)	1Aa	基部のみ	2	27-2
広H 22	W 3	2層	橄欖石玄武岩	(6.7)	(7.8)	(1.7)	(140)	2—a	刃部		
広H 24	W 3	9b層	安山岩	10.5	6.0	1.8	119	3Aa	完	4	27-2
広H 25	E 4	9b層	安山岩	17.9	7.1	2.9	301	1Aa	完	1	27-1・33
広H 27	W 2	9b層	安山岩	17.6	8.6	2.6	375	1Ba	刃部	3	27-1・33
広H 28	表採		橄欖石玄武岩	(10.3)	(9.1)	(1.9)	(216)	2—b	刃部	30	31-1・35
広H 30	E 5	6d層	安山岩	15.5	8.8	2.0	218	4Ab	完	17	30-1・34
広H 31	E 5	6d層	安山岩	15.1	8.8	2.8	327	4Aa	完	16	30-1・34
広H 32	トレ	2層	安山岩	(7.5)	(6.3)	(1.5)	(76)	—	基部		
広H 33	W 3	9b層	安山岩	(3.4)	(5.3)	(0.7)	(11.9)	—	刃部剝片		
広H 35	E 3	6a層	安山岩	(12.0)	8.2	(2.4)	(288)	2Aa	基部一部欠	25	30-2・35
広H 37	トレ	7層	玄武岩	(7.3)	(7.8)	(2.2)	(149)	—	刃部のみ		
広H 38	W 3	11層上	安山岩	14.4	6.1	3.1	266	1Aa	完	6	28-1
広H 41	W 4	9b層	安山岩	13.9	7.3	2.3	240	1Aa	完	8	28-1・33
広H 42	W 4	9b層	安山岩	9.7	4.3	2.1	71	1Aa	?		27-2
広H 44		9b層		14.8	7.7	2.5	262	7Aa	完	7	27-1・33
広H 45		9b層		(13.0)	(6.4)	(1.6)	(150)	7Aa	刃部欠	5	27-2
広H 46	表採		橄欖石玄武岩	24.6	12.9	1.7	(486)	2Aa	完		32・35
広H 47	表採		橄欖石玄武岩	(14.6)	9.0	1.3	(173)	6Ab	基部欠	33	31-2
広H 48	表採		安山岩	(6.8)	(4.8)	(1.8)	(67)	—	基部のみ		
広H 49	表採		蛇紋岩	12.2	5.8	0.8	90	2—	ほぼ完	34	
広H 51	A 4	6b層	閃雲片麻岩	14.0	7.3	2.1	299	9—a	完	28	39-2
広H 52	B 3	6b層	玄武岩質	7.3	6.4	1.4	100	—	刃部のみ		
広H 53	B 4	6b層	蛇紋岩	12.9	5.9	1.8	221	2—a	完	27	31-1
広H 54	B 4	6b層	安山岩	(8.3)	6.8	1.8	88	—	刃部のみ		
広H 55	A 4	7層	角閃片岩	8.9	4.2	1.7	68	—	ほぼ完		
広H 56	表採		玄武岩	13.3	8.0	2.0	201	8Aa	ほぼ完	29	31-2・35
広H 57	W 2	9b層	安山岩	(8.7)	(5.0)	(2.2)	(104)	—	基部欠		
広H 58	W 2	9b層	玄武岩	(4.8)	(6.1)	(1.4)	(46.8)	—	胴部欠		
広H 59	W 2	9b層	安山岩	(3.2)	(3.7)	(1.5)	(9)	—	刃部片		
広H 60	W 4	6層	安山岩	(7.0)	(5.3)	(2.0)	(81)	1Aa	基部片?		
広H 61	トレ	9a層	玄武岩	(7.3)	(6.9)	(2.2)	(17.8)	1—a	基部片?		
広H 64	W 4	6b層	安山岩	(7.3)	(7.2)	(1.7)	(88)	2Aa	刃部片		
広H 65	W 4	9b層	玄武岩	(2.5)	(2.9)	(1.2)	(23.7)	—	刃部片		

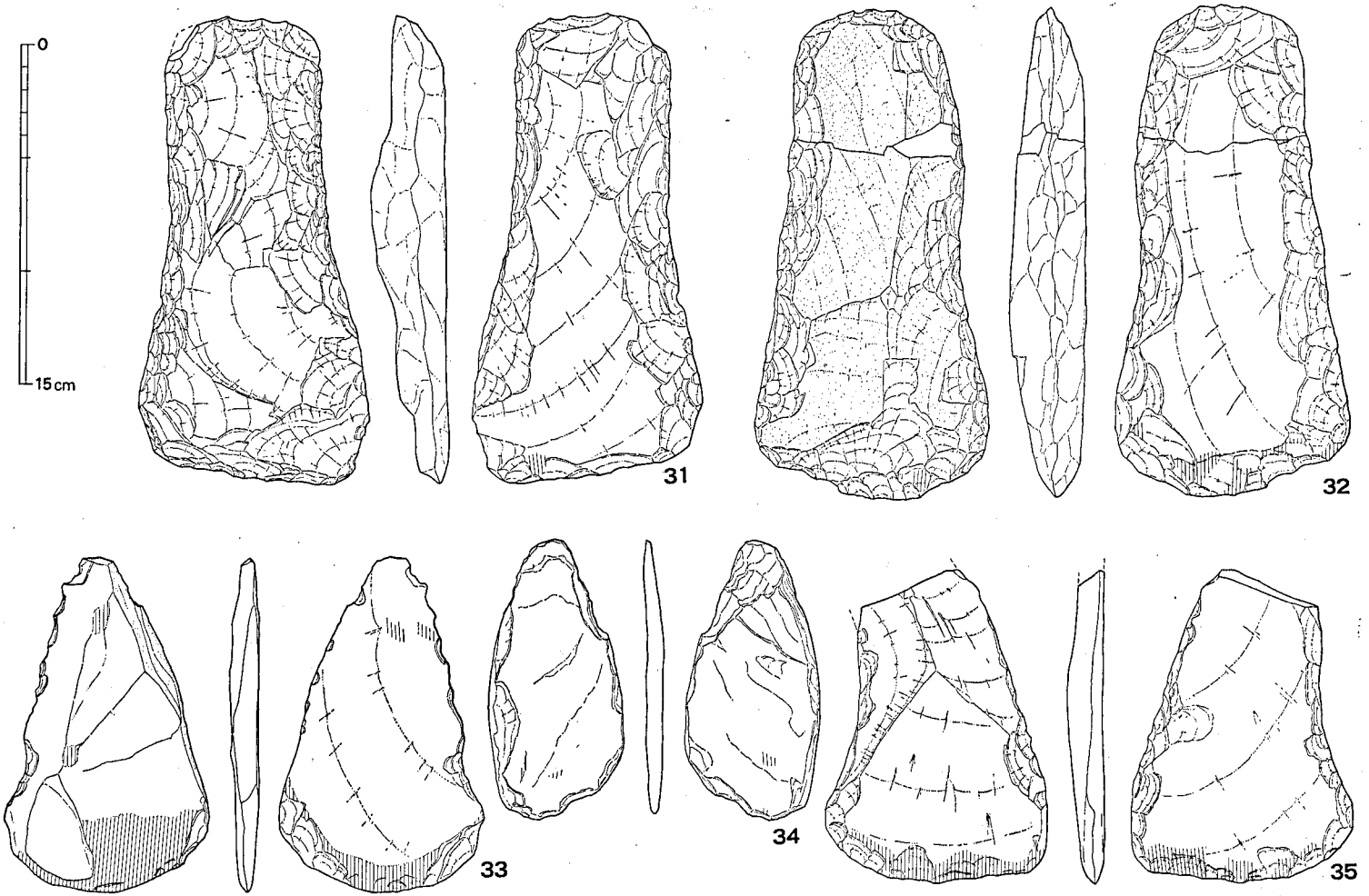
No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広H 69	E 5	6 層	安山岩	(2.5)	(2.9)	(1.2)	(8.2)	—	刃部小片		
広H 70	W 4	7 層	安山岩	(5.9)	(6.6)	(1.3)	(9.9)	—	刃部小片		
広H 71	W 4	7 層	安山岩	(8.4)	(4.5)	(2.0)	(82)	1—	基部片		
広H 74	E 3	7 層	安山岩	(7.9)	(7.0)	(1.6)	(81)	2Aa	刃部片		
広H 75	—	2a層	安山岩	(3.6)	(4.0)	(1.4)	(18.2)	—	胴部片		
広H 76	—	2a層	安山岩	(3.8)	(3.1)	(0.7)	(6.5)	—	刃部片		
広H 77	W 5	9a層	玄武岩	(5.5)	(4.1)	(1.0)	(22)	—	胴部片		
広H 78	W 2	9b層	緑色片岩	(7.5)	(7.1)	(1.0)	(69)	2—b	刃部片		
広H 79	W 3	7 層	玄武岩	(5.5)	(8.2)	(2.0)	(108)	2—b	刃部片		
広H 80	W 3	7 層	安山岩	(5.3)	(5.0)	(1.9)	(60)	—	胴部片？		
広H 81	W 4	7 層	安山岩	(7.0)	(5.2)	(2.2)	(70)	—	片		
広H 82	トレ	7 層	安山岩	(4.8)	(3.7)	(1.6)	(21.7)	—	刃部片		
広H 83	W 4	4 層	安山岩	(5.7)	(3.3)	(1.5)	(20.9)	—	刃部片		
広H 84	E 1	1 層	玄武岩	(4.8)	(5.4)	(2.3)	(92)	—	胴部片		
広H 85	W 5	8 層	安山岩	(4.5)	(6.0)	(1.9)	(38.3)	—	刃部片		
広H 86	W 5	8 層	安山岩	(2.3)	(2.0)	(0.7)	(2.0)	—	刃部剝片		
広H 87	トレ2区	6b層	安山岩	(2.8)	(3.3)	(0.9)	(7.5)	—	刃部小片		
広H 88	W 3	6b層	安山岩	(10.6)	(6.3)	(2.5)	(155)	1Aa	胴部片(刃部近)		
広H 89	W 2	9b層	玄武岩	(6.0)	(6.3)	(2.4)	(96)	2Ba	刃部片		
広H 90	W 2	9b層	橄欖石玄武岩	(5.9)	(6.6)	(1.3)	(69)	—	刃部片		
広H 91	W 5	8 層	安山岩	(11.3)	(5.4)	(2.4)	(112)	—Ab	胴部のみ		
広H 92	E 5	9 層	安山岩	(5.7)	(6.3)	(2.3)	(61)	—	胴部片(刃部近)		
広H 93	W 4	6b層	安山岩	(5.9)	(6.4)	(1.8)	(58)	—	刃部片		
広H 94	W 3	8 層	安山岩	(7.9)	(6.9)	(2.1)	(91)	7Aa	刃部片	13	28-2・33
広H 95	トレ	7 層	安山岩	(5.9)	(4.8)	(1.4)	(26.3)	—	刃部片		
広H 96	トレ	7 層	安山岩	(3.9)	(5.2)	(0.8)	(15)	—	刃部片		
広H 97	トレ	7 層	安山岩	(4.2)	(7.1)	(2.0)	(63)	—	刃部片		
広H 98	W 4	7b層	安山岩	(6.7)	(5.1)	(1.8)	(45)	—	刃部片		
広H 99	W 4	7b層	安山岩	(5.9)	(6.5)	(1.4)	(99.4)	—	刃部片		
広H 102	W 4	7b層	片岩	(7.4)	(5.8)	(1.3)	(71)	—a	胴部片		
広H 103	トレ	2b層	片岩	(6.8)	(4.9)	(1.1)	(62.5)	—	基部片		
広H 107	表採		安山岩	(3.5)	(5.4)	(1.3)	(19.5)	—	刃部片		
広H 108	E 4	7 層	安山岩	(11.9)	6.8	(2.6)	(237)	1Aa	基部欠	20	29-2・34
広H 109	E 5	7 層	安山岩	(11.8)	5.5	3.3	(233)	1—a	一部欠	19	29-2
広H 111	E 5	9a層	安山岩	(9.6)	(6.3)	(2.8)	(182)	1Aa	刃部欠	10	28-2
広H 112	E 5	9b層	玄武岩	(14.4)	7.4	(2.7)	(340)	1Ba	基部欠		28-1
広H 113	トレ	6a層	安山岩	(5.5)	(3.4)	(0.9)	(17.9)	—	刃部小片		
広H 114	トレ	6a層	安山岩	(2.2)	(4.5)	(0.5)	(4.9)	—	刃部小片		
広H 116	W 4	7b層	安山岩	(6.6)	(4.8)	(1.5)	(26.7)	—	刃部片		
広H 118	E 3	2a層	安山岩	(4.1)	(4.8)	(2.2)	(27.2)	—	胴部片		
広H 119	E 3	2a層	安山岩	(2.7)	(4.0)	(1.7)	(14.2)	—	胴部片		
広H 121	W 4	9b層	玄武岩	(10.1)	6.5	(2.7)	(229)	1—b	胴部片		
広H 122	E 4	4 層	橄欖石玄武岩	(9.7)	(6.4)	(1.9)	(152)	2Aa	基部片	26	30-2
広H 123	E 4	4 層	安山岩	(3.7)	(3.5)	(0.4)	(4.6)	—	刃部剝片		

表5　打製石斧一覧表 2

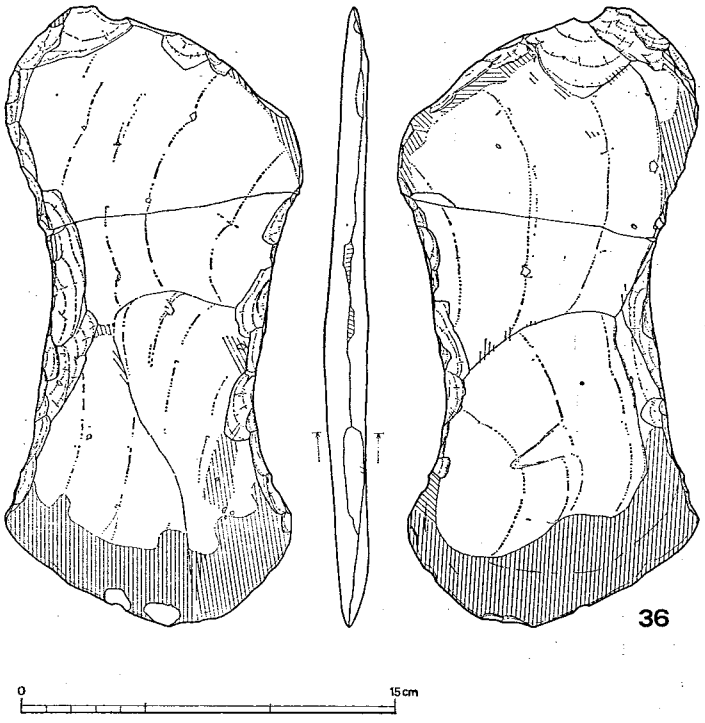
〔単位cm及びg（ ）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広H 124	W 3	7 層	安山岩	(3.2)	(3.4)	(6.4)	(3.2)	—	刃部剝片		
広H 125	A 4	9b層	緑色片岩	(7.5)	(6.3)	(1.0)	(84)	2Bb	胴部片		
広H 126	A 3	7 層	玄武岩	(8.6)	(8.0)	(1.7)	(148)	2—a	胴部片？		
広H 128	B 2	9b層	玄武岩	(12.0)	6.9	1.3	(143)	2Bb	基部欠	23	29-1
広H 129	B 2	9b層	緑色片岩	(4.9)	(5.1)	(1.2)	(37.5)	—	胴部片		
広H 130	B 3	9b層	玄武岩	(11.5)	7.2	(2.0)	(232)	2Aa	基部欠	24	29-1・34
広H 133	B 3	9b層	安山岩	(11.1)	(6.9)	(2.3)	(213)	1Aa	刃部欠	15	
広H 134	B 3	9b層	安山岩	(5.3)	(7.7)	(1.5)	(65)	2Ab	刃部片		
広H 135	A 3	9a層	安山岩	12.3	7.6	2.1	200	6Aa	完	22	30-1
広H 136	W 3	7 層	安山岩	(8.1)	6.3	(2.8)	(139)	1—b	刃部片		
広H 137	B 3	7 層	安山岩	(5.1)	(4.5)	(1.4)	(40.7)	—	刃部片		
広H 139	A 4	7 層	安山岩	(7.1)	(5.1)	(1.9)	(52.7)	—	基部片		
広H 140	B 3	7 層	安山岩	(5.4)	(6.0)	(1.0)	(29.5)	—	刃部小片		
広H 141	B 3	7 層	玄武岩	(6.0)	(5.5)	(1.9)	(60)	—	基部片？		
広H 142	B 3	7b層	安山岩	(5.6)	(7.2)	(1.8)	(82)	—	胴部片		
広H 143	B 3	7b層	安山岩	(7.5)	(4.7)	(1.7)	(51)	—	片 ？		
広H 144	トレ 3	層	安山岩	(14.5)	(7.5)	(2.5)	(82)	—	刃部片		
広H 145	B 3	9b層	安山岩	(6.9)	(6.1)	(2.7)	(172)	1Aa			
広H 149	B 2	9a層	安山岩	(6.6)	(6.9)	(2.1)	(133)	1Aa	刃 部		
広H 150	B 2	9a層	安山岩	(5.6)	(7.9)	(2.2)	(107)	2Aa	刃部？		
広H 151	B 2	9a層	安山岩	(5.3)	(4.6)	(2.0)	(43.7)	—	基部片		
広H 152	B 4	7 層	安山岩	(9.7)	(6.0)	(2.1)	(126)	—Ab	胴部？		
広H 153	B 4	7 層	安山岩	(9.4)	(6.4)	(1.9)	(91)	6Aa	基 部		
広H 154	B 3	7b層	安山岩	(9.7)	(6.6)	(2.1)	(118)	2Ab	先端欠		
広H 155	トレ 8	層	安山岩	(6.4)	(6.7)	(2.3)	(91.9)	—	刃 部		
広H 156	B 4	7 層	安山岩	(7.2)	(6.5)	(1.6)	(82.7)	—	胴 部		
広H 157	B 4	7 層	安山岩	(7.2)	(6.1)	(1.5)	(68.7)	—	刃 部		
広H 158	B 4	7 層	安山岩	(6.5)	(4.5)	(1.8)	(46.4)	—	刃 部		
広H 159	B 4	7 層	玄武岩	(6.5)	(5.7)	(1.7)	(100.2)	—	刃 部		
広H 160	E 4	9a層	安山岩	(10.4)	6.4	(1.9)	(130.0)	1Aa	基部端欠		
広H 161	B 3	9a層	安山岩	(6.5)	(4.9)	(1.6)	(53.7)	—	基 部		
広H 162	B 3	9a層	安山岩	(6.0)	(3.8)	(1.3)	(14.8)	—	刃部剝片		
広H 163	A 5	7b層	安山岩	(5.9)	(3.8)	(0.7)	(18.0)	—	刃部剝片		
広H 164	A 5	7b層	安山岩	(7.6)	(6.5)	(2.1)	(89)	1Aa	刃 部		
広H 165	B 4	9b層	安山岩	10.2	5.4	1.6	109	1Aa	ほぼ完		
広H 166	E 4	9b層下	安山岩	(6.8)	(6.6)	(1.5)	(78.0)	Aa	基 部		
広H 167	A 4	9a層	安山岩	(7.2)	(8.5)	(1.7)	(102)	2Ab	刃 部		
広H 168	A 3	9a層	安山岩	(9.3)	(7.0)	(2.2)	(145)	5Aa	基 部		
広H 169	A 3	9a層	安山岩	(6.5)	(6.6)	(1.9)	(94.2)	—a	基 部		
広H 170	A 3	9a層	安山岩	(6.7)	(7.1)	(2.2)	(99)	—Aa	基 部		
広H 171	A 4	9b層	安山岩	(9.3)	7.1	2.5	(169)	1Aa	基部欠		
広H 172	E 5	9b層	安山岩	(6.8)	(6.2)	(2.1)	(102)	—	胴 部		27-2
広H 173	E 3	2a層	玄武岩	(3.8)	(5.9)	(1.3)	(43.5)	—	胴 部		
広H 174	B 3	7 層	玄武岩質	(4.8)	(4.7)	(1.1)	(36.2)	—			

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広H 176	表採		安山岩	(8.7)	(7.0)	(1.1)	(76.7)	Aa	基部端欠		
広H 177	表採		安山岩	12.0	5.8	1.8	141	2Aa	完		31-1
広H 178	表採		安山岩	(10.5)	(5.9)	(1.4)	(96.7)	—	基部		
広H 179	表採		安山岩	(7.7)	(6.8)	(2.5)	(211)	—Aa	胴部		
広H 180	表採		安山岩	(8.7)	(4.7)	(2.4)	(80)	7—	刃部欠		
広H 181	E 3	7層	安山岩	(4.6)	(3.9)	(1.7)	(28.2)	—	基部		
広H 182	B 4	8層	安山岩	(6.0)	(3.9)	(1.9)	(50.9)	—	基部		
広H 183	E 4	9b層下	安山岩	(2.6)	(3.6)	(0.7)	(5.8)	—	刃部剝片		
広H 184	B 2	7b層	玄武岩	(6.7)	(5.3)	(1.9)	(23.3)	—a	刃部側面		
広H 185	トレ	黒色包含層	玄武岩	(4.0)	(3.5)	(1.1)	(7.3)	—	刃部側面		
広H 186	B 4	9b層	玄武岩	(5.5)	(5.8)	(1.5)	(53.2)	—b	刃部		
広H 187	B 4	9b層	玄武岩	(4.0)	(4.0)	(0.8)	(16.4)	—	基部		
広H 188	B 4	9b層	安山岩	(5.5)	(4.6)	(1.2)	(26.4)	—Ab	刃部		
広H 189	B 4	9b層	安山岩	(3.5)	(2.3)	(1.7)	(7.9)	—	刃部片		
広H 190	B 4	9b層	安山岩	(4.2)	(3.0)	(0.6)	(7.3)	2—	刃部剝片		
広H 191	表採		安山岩	(7.0)	(4.7)	(2.2)	(80)	1Aa	基部		
広H 192	表採		安山岩	(8.4)	(6.6)	(2.3)	(122)	—	基部		
広H 193	B 3	9b層	安山岩	10.2	4.3	1.5	57.5	—	完	12	30-2
広H 194	B 3	9b層	安山岩	10.0	6.7	1.8	110	—	完？		
広H 195	B 3	9b層	安山岩	(4.2)	(4.6)	(1.3)	(27.1)	—	基部		
広H 196	B 3	9b層	安山岩	(5.2)	(3.8)	(1.6)	(12.6)	—	刃部片		
広H 197	B 3	9b層	安山岩	(2.7)	(4.2)	(0.8)	(8.2)	—	刃部片		
広H 198	トレ	—	玄武岩	(10.6)	(6.0)	(1.4)	(96.8)	—a	片面刃部剝脱		
広H 199	E 5西	9b層	玄武岩	(8.8)	(4.5)	(2.5)	(90)	1Bb	刃部片		
広H 200	トレ	7層	雲母を含む片麻岩	14.1	5.9	2.1	218	2—a	完		
広H 203	W 5	6d層	玄武岩	(7.6)	(6.1)	(1.4)	(86.5)	—a	刃部片		
広H 207	E 3	6b層	橄欖石玄武岩	11.6	6.0	1.4	105.0	2—a	完？		30-2
広H 208	E 5	9b層	安山岩	(6.9)	(5.9)	(3.1)	(15.1)	1Aa	胴部		
広H 209	表採		玄武岩質	(4.9)	(4.1)	(1.0)	(28.5)	—	刃部片		
広H 210	0-2区	上層	玄武岩	(6.6)	(4.5)	(1.2)	(35.5)	—a	刃部		
広H 211	0-2区	上層	安山岩	(4.7)	(3.5)	(1.2)	(18.6)	—	刃部片		
広H 212	0-2区	上層	安山岩	(6.6)	(5.4)	(2.1)	(80.6)	1—a	胴部		
広H 213	0-2区	上層	安山岩	(5.7)	(5.3)	(1.6)	(41.2)	—	基部片		
広H 214	0-2区	上層	安山岩	(5.9)	(3.6)	(0.9)	(14.5)	—	刃部片		
広H 216	E 3	7層	安山岩	11.9	6.3	1.5	143.9	2Ab	完	18	29-2



第54図　打製石斧実測図5 (1/3)



第55図　打製石斧実測図6　(1/3)

17・33・35，H91。

Ba類は，1・3・8，H89・H112。

Bb類は，15が該当する。

なお28は全体の形態では，2類に含まれるが，閃雲片麻岩の節理による板材を利用しており刃部の形状が磨製石斧の刃部に似る。局部磨製石斧に含めるべきであろうか。図版39-2にH51で掲載した。

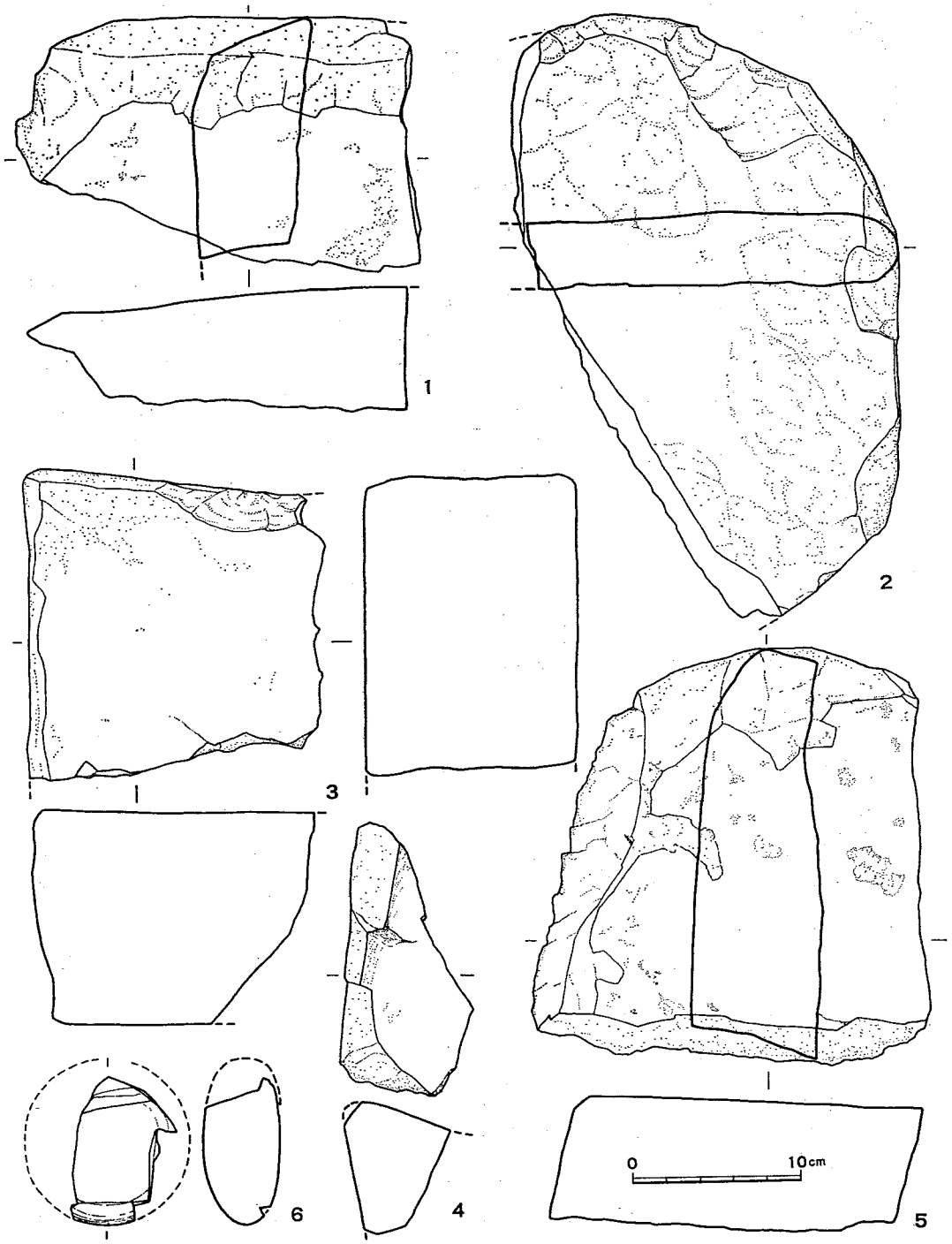
刃部には使用による磨耗痕が大半の資料にみられ，特に厚みを有す面に顕著に観察される。石材が玄武岩質の場合は明瞭な条線となり，安山岩の場合は条線と共に光滑面を有し局部磨製石斧を想起させうるものもある。磨耗痕は，刃部先端に対し直角方向に力が加わったことによる，石斧の長軸方向に沿った縦位の条線が大半を占め，斜行する例としては16・23・29・36の一部にみられるが少ない。刃部以外の例としては，胴部に，縦位の磨耗痕をみとめるものがあり，胴部側面には多くの資料に磨耗を観察することができる。胴部側面では19に斜行する磨耗痕，36に横位の磨耗痕をみとめるが，大半の資料では方向まで観察しえなかった。また，3・8・12の資料では頭部にも縦位の磨耗痕が観察され，12にはやや風化した面に磨耗痕がある。

石　皿（図版36，第56・57図，表6）

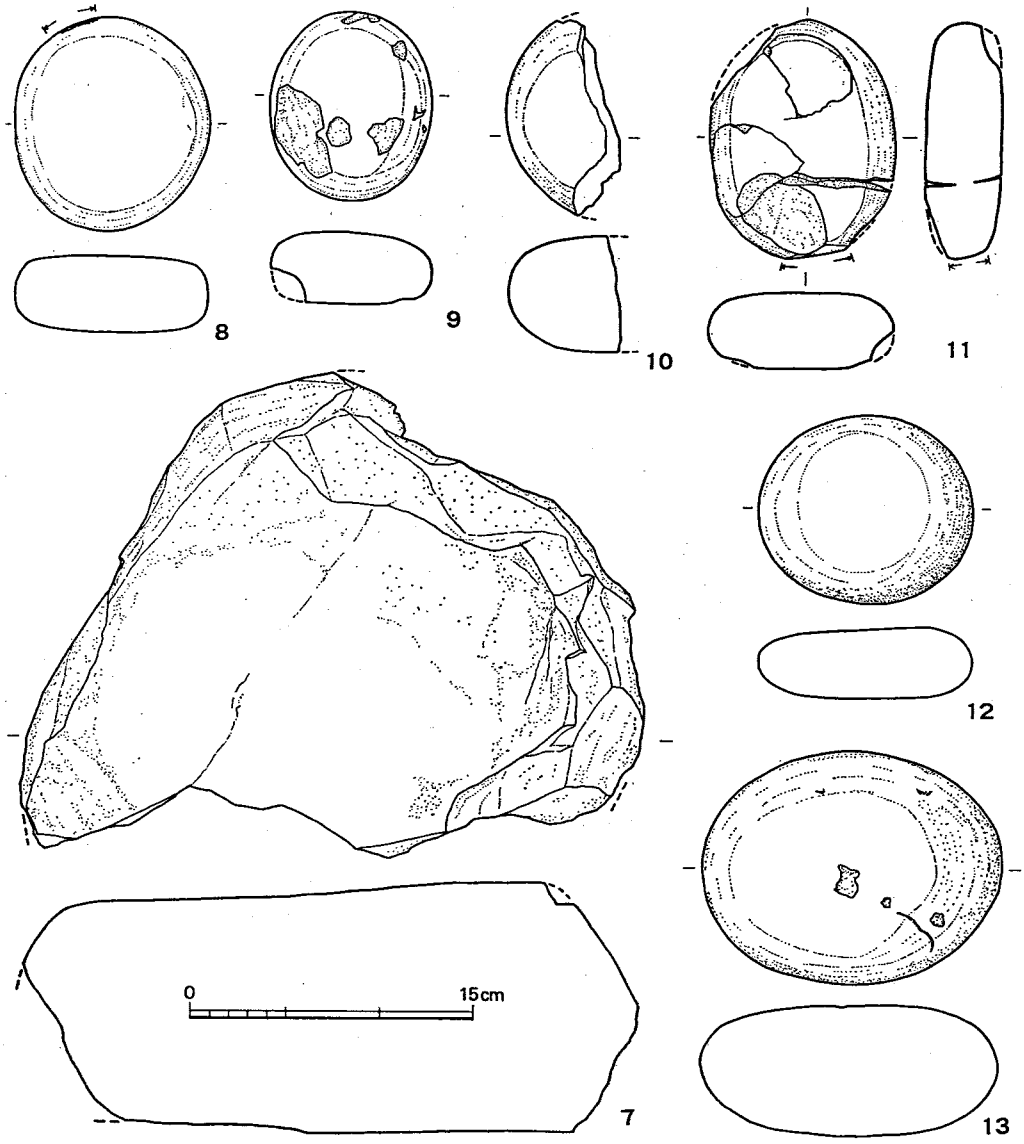
石皿は表6に示す13点が出土しており，6点を図示する。完形品はなく，出土層位では9b層が多く，7層の資料もある。いずれも花崗岩質の石材を素材とし，使用面に磨耗をみとめる。しかし凹みは明瞭でなく，平坦面あるいはわずかに凹む程度で，わずかに4の石皿片がやや大きく凹む形状を呈すのみである。

すり石（図版37—1，第56・57図，表6）

すり石は20点あり，7点を図示している。完形品は3点で，この他に全体の形状のわかる資料が3点ある。石材は玄武岩・玢岩が多く，アプライト・花崗岩を素材としたものを含む。出



第 56 図　石 皿・す り 石 実 測 図 1 (1/4)



第57図　石皿・すり石実測図 2 (1/4)

土層位では，9 b層が多く7層が次ぎ，それより上層出土のものを若干含むが，この傾向は石皿のそれと近似する。

6・9・10・11は全面が磨耗し，殊に9は平坦度が強い面を有す。8・12・13は，周縁に磨耗が及ばないもので，13は背面にも磨耗痕がみとめられない。8は周縁の一部に敲打痕を有し，敲石としての機能を備えていることを示す。また11は，長軸の下端にあたる周縁に面取りされたような磨耗痕を有している。

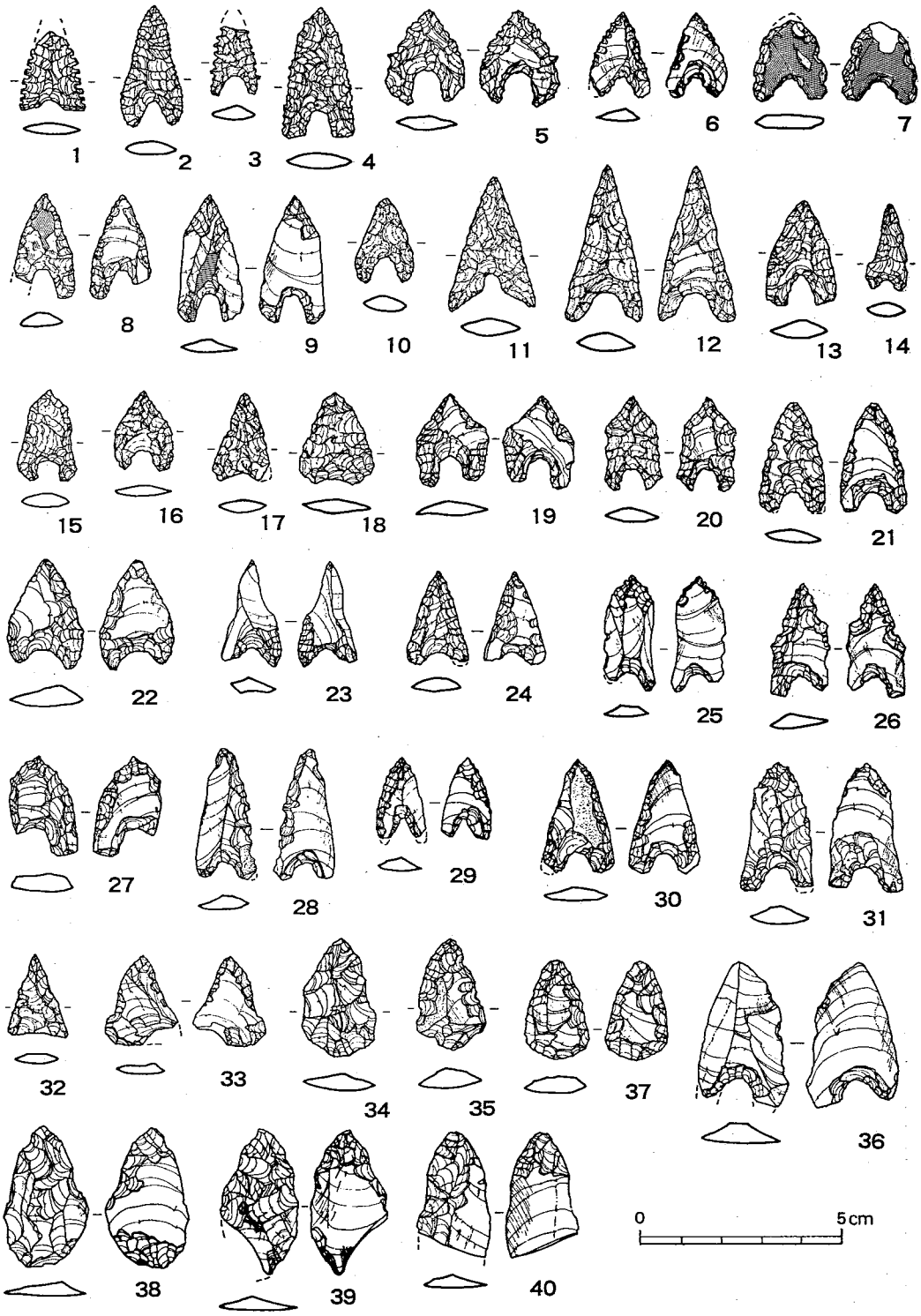
表6　石皿・すり石一覧表

〔単位は*cm*及び*kg*（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広U 1	W 4	9b層	花崗岩質	(18.5)	(13.4)	(6.8)	(1.94)	石皿	片		36
広U 2	W 4	9b層	花崗岩質	(24.2)	(15.1)	(7.6)	(3.55)	石皿	片	1	36
広U 3	E 5	9b層	花崗岩質	(24.7)	(23.8)	(8.6)	(7.14)	石皿	片	5	36
広U 4	E 5	9b層	花崗岩質	(37.8)	(21.2)	(5.2)	(5.25)	石皿	片	2	36
広U 5	W 5	9b層	花崗岩質	(40.5)	(19.6)	(8.1)	(9.4)	石皿	片		36
広U 6	E 3	9b層	花崗岩質	(18.0)	(18.5)	(12.8)	(7.6)	石皿	片	3	
広U 7	トレ2区	7層	花崗岩質	(32.7)	(25.3)	(13.5)	(15.0)	石皿	片	7	
広U 8	W 5	9b層	アプライト	(16.8)	(7.8)	(8.2)	(0.7)	石皿	片	4	36
広U 9	E 4	9b層	花崗岩質	(15.2)	(13.3)	(5.0)	(1.62)	石皿	片		36
広U 10	B 3	7b層	花崗岩質	(12.3)	(7.9)	(5.7)	(0.85)	石皿	片		36
広U 11	B 3	7b層	花崗岩質	(8.7)	(7.2)	(5.1)	(0.47)	石皿	片		36
広U 12	B 4	9b層	アプライト	(10.1)	(8.1)	(3.0)	(0.32)	石皿	片		
広U 13	E 4	9b層	花崗岩質	(8.4)	(6.1)	(2.2)	(0.14)	石皿	片		
広M 1	トレ	7層	玢岩	(12.6)	(9.7)	(4.0)	(0.69)	すり石	ほぼ完形	11	37-1
広M 2	B 4	6b層	玢岩	10.0	8.6	3.9	0.48	すり石	完		37-1
広M 3	W 4	8層	玢岩	(8.3)	(5.5)	(4.6)	(275*g*)	すり石	片	6	37-1
広M 4	W 4	9b層	花崗岩質	(8.2)	(6.4)	(4.9)	(0.33)	すり石	片		37-1
広M 5	W 4	9b層	玄武岩	(6.0)	(5.1)	(2.5)	(65*g*)	すり石	片		
広M 12	W 4	9b層	玢岩	(9.9)	(8.6)	(3.8)	(0.51)	すり石	一部欠	9	37-1
広M 13	W 4	9b層	玄武岩質	11.1	10.3	4.0	0.85	すり石	完	8	37-1
広M 14	W 4	9b層	アプライト	(9.8)	(8.0)	(6.1)	(0.57)	すり石	片		
広M 16	E 5	9b層	玢岩	(10.1)	(6.0)	(6.1)	(0.45)	すり石	⅓片	10	37-1
広M 17	A 2	9a層	花崗岩	11.2	9.9	3.8	0.65	すり石	ほぼ完	12	37-1
広M 18	B 3	7b層	アプライト	(7.0)	(5.5)	(5.4)	(0.28)	すり石	片		
広M 19	A 3	9a層	玢岩質	(4.4)	(3.3)	(5.2)	(0.11)	すり石	片		
広M 20	E 5	6層	アプライト	(4.2)	(4.7)	(2.1)	(43.5*g*)	すり石	片		
広M 21	E 4	7層	玄武岩	(5.7)	(3.6)	(1.3)	(30.5*g*)	すり石	片		
広M 22	B 4	9b層	玄武岩	(10.5)	(8.5)	(3.4)	(0.22)	すり石	剝脱多し		
広M 23	B 4	9b層	玄武岩	(7.1)	(1.5)	(1.3)	(13.5*g*)	すり石	片		
広M 24	B 2	9a層	玄武岩	(8.2)	(4.5)	(2.4)	(1.3)	すり石	片		
広M 26	B 3	9a層	玄武岩	(6.8)	(1.9)	(1.2)	(20.5*g*)	すり石	片		
広M 27	B 4	9a層	玄武岩質	15.5	12.2	6.9	2.6	すり石	完	13	
広M 28	E 3	2a層	玢岩質	(3.5)	(3.2)	(0.5)	(0.01)	すり石	片		

石　鏃（図版38，第58図1～36，表7・8）

石鏃は大溝から表7・8に示すように総計111点出土した。各層の資料があり，Ⅲ群土器に伴う資料33点とやや多めで，以下Ⅳ群・Ⅰ群・Ⅴ群・Ⅱ群土器に伴った資料の順になる。この内36点を図示し，第58図37～40は，サイドブレイドに分類すべき資料である。なお一覧表には，この4点を含む6点のサイドブレイドと，0－1地区出土の石鏃6点の合計12点をも含め



第 58 図　石 鏃 実 測 図 (3/5)

表7　石鏃一覧表 1

〔単位㎜及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	有効長	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広A 1	W 4	7 層	黒曜石	(19.5)	(16.7)	16.2	3.0	(0.7)	C′ 1 a 鋸	先端一部欠	1	38-1
広A 2	W 4	7 層	黒曜石	23.1	18.3	16.2	5.3	1.2	C 1 a 鋸	完		38-1
広A 3	W 4	7 層	黒曜石	(17.4)	(12.9)	14.4	2.6	(0.7)	C 1 a	先端欠		38-2
広A 4	W 4	7 層	安山岩	24.4	16.4	(16.1)	2.7	(0.8)	C 1 b	片脚欠		38-2
広A 5	W 4	7 層	安山岩	38.4	31.5	19.0	4.8	2.2	C 1 b	完	12	38-2
広A 6	W 4	6 b層	黒曜石	22.85	15.4	17.8	3.4	0.9	C 1 b	完	19	38-2
広A 7	W 4	6 b層	黒曜石	(15.7)	(6.7)	16.7	3.0	(0.5)	C 1 b	先端欠		38-1
広A 8	W 3	6 b層	黒曜石	30.0	23.5	15.9	3.4	1.1	C 1 a 鋸	完	2	38-1
広A 9	W 4	4	安山岩	24.8	20.5	14.4	2.8	0.8	C 1 a	完		38-2
広A10	E 5	6	黒曜石	28.0	22.8	17.5	3.6	1.2	C 3	完	30	38-1
広A11	E 5	6	黒曜石	23.3	17.9	14.3	3.3	0.8	C 1 b	完	20	38-1
広A12	W 3	2 a層	黒曜石	23.8	18.2	16.7	3.0	0.8	C 1 b	完		38-2
広A13	W 3	2 a層	黒曜石	27.9	22.9	14.55	3.7	0.9	C 2 b	完	26	38-1
広A14	W 3	2 a層	黒曜石	(18.4)	(10.6)	17.7	3.4	(0.9)	C 1 a	先端欠		38-2
広A15	トレ		黒曜石	25.9	22.6	(13.2)	3.1	(0.6)	C′ 1 a 鋸	片脚一部欠		38-1
広A16	表採		黒曜石	20.7	19.4	14.8	2.4	0.5	B 1 a	完	32	38-1
広A17	表採		安山岩	18.4	—	18.6	3.8	1.3	B 1 a	完		38-1
広A18	表採		黒曜石	(22.3)	(13.6)	18.0	3.55	(1.2)	C 1 b	先端欠		38-2
広A19	表採		黒曜石	21.3	19.0	(16.2)	2.8	(0.7)	C 1 a	片脚欠		38-2
広A20	表採		黒曜石	16.4	12.4	13.9	2.8	0.5	C 1 a	完		38-2
広A21	表採		黒曜石	17.9	16.7	(11.25)	2.8	(0.4)	C 1 a	両脚欠		38-2
広A22	W 2	7 層	黒曜石	22.5	16.0	13.1	3.2	0.9	C 3	完		38-1
広A23	W 5	7 層	黒曜石	27.15	23.7	15.6	5.5	2.0	C 1 b	完		38-2
広A24	W 5	7 層	黒曜石	21.8	19.7	14.0	3.4	(0.7)	C′ 1 a	欠	17	38-1
広A25	W 5	7 層	黒曜石	(21.8)	(14.6)	17.6	3.9	(1.3)	C 両面磨	先端欠		38-1
広A26	W 5	7 層	黒曜石	25.3	18.8	(15.25)	4.3	(0.8)	C 1 a	片脚欠		38-2
広A27	W 5	8 層	黒曜石	(23.95)	21.5	(16.0)	4.5	1.5	C 1 b	脚欠		38-2
広A28	W 3	7 層	黒曜石	21.5	16.4	13.95	3.25	0.7	C 1 b	完		38-2
広A29	W 3	7 層	安山岩	22.0	13.7	16.2	3.65	(0.9)	C 1 a	一部欠		38-2
広A30	W 3	7 層	黒曜石	27.0	22.0	16.5	3.3	1.2	C 1 b	完	21	38-2
広A31	W 3	7 層	黒曜石	(17.0)	(12.1)	12.2	3.2	(0.4)	C 1 a 鋸	先端欠	3	38-1
広A32	W 4	9 b層	黒曜石	21.8	17.9	19.0	4.4	1.3	C 1 b	完		38-2
広A33	W 4	6 b層	黒曜石	31.9	25.1	18.0	4.0	1.7	C 1 a 鋸	完	4	38-1
広A34	W 4	1 層	黒曜石	22.4	17.4	14.4	3.3	0.8	C 1 a	完	15	38-2
広A35	W 6	層不明	黒曜石	34.5	—	15.7	4.2	1.7	サイドブレイド	完	36	44-2
広A36	W 3	9 b層	黒曜石	31.75	25.6	18.1	4.5	1.6	C 3	完	31	38-1
広A37	E 4	7 層	黒曜石	28.2	21.9	(16.2)	5.1	(1.5)	C 1 a	側面欠		38-2
広A38	W 5	7 層	黒曜石	(22.7)	(16.7)	15.5	3.85	(1.2)	C 2 a	先端欠		38-1
広A39	W 4	7 層	黒曜石	29.6	22.2	(13.6)	3.3	(0.9)	C 1 b 鋸	片脚欠		38-1
広A40	A 4	7 層	黒曜石	25.8	18.6	(14.9)	3.4	(1.0)	C 2 b片面磨	片脚欠	8	38-1
広A41	B 2	6 b層	黒曜石	(33.4)	(23.6)	24.65	4.2	(2.9)	C 3	先端欠		38-1
広A42	B 3	6 b層	黒曜石	(20.4)	(14.6)	18.1	3.1	(1.1)	C 両面磨	先端欠	7	38-1
広A43	B 4	6 b層	黒曜石	24.0	15.4	20.0	3.4	1.1	C 1 b 鋸	完	5	38-1
広A44	B 4	6 b層	黒曜石	38.5	23.4	17.0	4.5	1.5	C 1 b	完		38-2

No.	地区	層序	石質	長さ	有効長	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広A45	B 4	6b層	安山岩	33.4	23.7	21.3	4.4	1.6	C 1a	完	11	38-2
広A46	B 3	7 層	黒曜石	25.2	19.8	13.8	3.2	0.9	C 1b	完		38-2
広A47	W 4	7b層	黒曜石	(25.8)	—	18.8	3.7	(1.5)	—	基部欠		
広A48	W 4	7b層	黒曜石	29.3	—	18.45	4.5	2.1	A 1a	完	34	38-1
広A49	E 5	6 層	黒曜石	29.0	23.4	(19.6)	3.7	(1.3)	C 1b	片脚欠		38-2
広A50	E 5	6 層	黒曜石	28.5	24.0	12.65	3.0	0.9	C 2a	完	25	38-1
広A51	E 3	1 層	黒曜石	21.2	15.8	(13.7)	2.7	(0.6)	C 1a	片脚欠		38-2
広A52	W 4	9b層	安山岩	29.2	27.3	16.7	4.2	(1.6)	C 1b	脚部欠		38-2
広A53	W 4	2b層	黒曜石	27.4	—	16.95	5.5	1.9	A 1a	完	35	38-1
広A54	?	?	黒曜石	22.7	21.3	18.6	3.7	1.2	C′ 1a	完	18	38-1
広A55	A 4	9b層	黒曜石	21.2	18.6	10.0	3.6	0.5	C 1a	完	14	38-2
広A56	A 4	9b層	黒曜石	31.4	24.4	16.4	3.5	1.3	C 2a 片面磨	完	9	38-1
広A57	W 3	6b層	黒曜石	(20.2)	(16.2)	12.5	4.6	(0.9)	C 1b	先端欠		38-2
広A58	W 4	7 層	黒曜石	25.4	19.4	17.55	3.7	1.0	C 1b	完		38-2
広A59	W 3	6a層	黒曜石	(31.1)	20.9	(19.0)	4.75	(1.7)	C 3	先端片脚欠		38-1
広A60	W 5	7 層	黒曜石	25.45	18.2	15.6	4.7	(1.5)	C 2b	脚一部欠	27	38-1
広A61	W 5	7 層	黒曜石	(23.0)	—	15.2	4.5	(1.3)		先端欠		
広A62	W 5	7 層	黒曜石	(20.5)	(15.2)	(10.0)	(3.2)	(0.5)	C′ 1a	½		38-1
広A63	W 5	7 層	黒曜石	(22.1)	—	22.3	5.6	(2.6)	—	一部欠		
広A64	W 4	7 層	安山岩	(21.3)	(12.0)	(17.5)	4.35	(1.1)	C 1a	先端片脚欠		38-2
広A65	W 4	7 層	黒曜石	31.2	—	18.0	3.5	1.8	サイドブレイド	欠	40	44-2
広A66			黒曜石	21.6	16.6	15.0	3.2	0.6	C 3 鋸	完	6	38-1
広A67	W 5	9a層	黒曜石	(21.2)	—	23.0	4.6	(2.2)	B 1a	先端欠		38-1
広A68	W	6a層	黒曜石	27.6	—	21.9	4.5	2.1		完		
広A69	W 3	6b層	黒曜石	(17.0)	(12.85)	14.9	3.85	(0.9)	C 1a	先端欠		38-2
広A70	W 5	8 層	黒曜石	(17.3)	(14.5)	(15.0)	4.9	(0.8)	C 1a	先端・両脚欠		38-2
広A71	W 4	6b層	黒曜石	27.4	—	18.8	3.0	1.8	B 1b	完		38-1
広A72	トレ	7 層	黒曜石	35.0	—	21.8	3.4	1.05	サイドブレイド		38	44-2
広A73	W 4	8 層	安山岩	(23.2)	—	16.0	3.6	(1.5)	—	脚部欠		
広A74	W 4	7b層	黒曜石	26.2	19.6	(17.8)	2.5	(1.6)	C 1b	片脚欠		38-2
広A75	表採		黒曜石	21.7	—	17.2	3.5	1.8	B 1b	完		38-1
広A76	表採		黒曜石	(18.0)	(13.0)	(10.8)	(2.0)	(1.0)	C′ 1b	脚部のみ		
広A77	E 5	4 層	黒曜石	(14.65)	(7.3)	16.55	3.4	(2.1)	C 1a	先端欠		38-2
広A78	トレ	7 層	黒曜石	36.0	27.5	22.4	5.1	0.7	C 3	ほぼ完	37	38-1
広A79	E 3	1 層	黒曜石	22.1	—	18.3	2.5	(0.8)	B 1b	一部欠	33	38-1
広A80	W 5	4 層	黒曜石	(17.7)	(10.3)	(22.2)	1.8	(1.1)	C 1b	片脚のみ		38-2
広A81	—	—	黒曜石	36.0	—	19.6	3.6	(1.9)	サイドブレイド	一部欠	39	44-2
広A82	W 4	7 層	黒曜石	29.5	19.9	(17.8)	2.6	(1.0)	C 1a	片脚欠		38-2
広A83	E 3	2a層	黒曜石	32.0	28.0	15.0	3.7	1.5	C 2b	完	28	38-1
広A84	E 3	2a層	黒曜石	24.1	—	20.0	4.0	(1.6)	B 1b	一部欠		38-1
広A85	E 4	2b層	黒曜石	(25.0)	—	22.2	3.0	(1.9)	B 1b	先端欠		38-1
広A86	W 5	6 層	黒曜石	(24.1)	(21.7)	(17.7)	2.9	(1.0)	C′ 1b	一部欠		38-1
広A87	B 4	9b層	黒曜石	29.5	25.1	18.6	4.75	2.1	C 2b	完		38-1
広A88	B 4	9b層	黒曜石	20.1	15.6	16.3	3.3	0.7	C 1b 鋸	完		38-1
広A89	B 4	9b層	黒曜石	26.3	21.4	14.8	4.1	0.9	C′ 1b	完	23	38-1
広A90	B 4	9b層	黒曜石	28.6	22.4	16.1	3.4	1.1	C 2a	完		38-1
広A91	B 4	9b層	黒曜石	19.6	14.7	12.5	3.2	0.5	C 2b	ほぼ完	29	38-1

表8　石鏃一覧表 2

〔単位㎜及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	有効長	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広A 92	B 4	9b層	黒曜石	(19.6)	17.5	(10.5)	3.1	(0.4)	C 1a 鋸	脚部欠		38 -
広A 93	B 3	9b層	黒曜石	(11.3)	(5.0)	13.8	2.8	(0.3)	C 1b	脚部のみ		38-2
広A 94	A 4	9b層	黒曜石	27.2	22.35	18.7	5.4	1.6	C 1b	完	22	38-2
広A 95	A 4	9b層	黒曜石	19.5	14.8	14.7	2.8	0.6	C 1a	完	16	38-2
広A 96	A 4	9b層	黒曜石	22.5	19.9	15.4	3.6	0.9	C′ 1b	完	24	38-1
広A 97	A 4	9b層	黒曜石	26.2	18.4	17.0	4.5	1.5	C 1a	ほぼ完	13	38-2
広A 98	A 4	9b層	安山岩	20.8	14.4	14.8	4.0	0.8	C 1a	完	10	38-2
広A 99	B 3	9a層	黒曜石	(18.3)	(12.7)	15.3	3.4	(0.8)	C 2b	先端欠		38-1
広A 100	0-1区	表採	黒曜石	21.8	17.7	(15.9)	5.2	(1.2)	C′ 1a	片脚欠		38-1
広A 101	B 2	7b層	黒曜石	25.8	18.0	14.6	4.3	1.1	C 1a	完		38-2
広A 102	B 3	9b層	黒曜石	27.7	20.8	(18.4)	3.5	(1.1)	C 1b	片脚欠		38-2
広A 103	B 4	9b層	黒曜石	21.4	—	17.2	4.3	1.4	サイドブレイド	完?		44-2
広A 104	A 3	7 層	黒曜石	23.3	21.1	18.0	5.4	1.8	C′ 1b	完		38-1
広A 105	A 3	7 層	黒曜石	22.0	14.9	19.4	2.9	0.9	C 3	完		38-1
広A 106	B 2	7 層	黒曜石	(22.7)	(20.1)	15.5	(4.3)	(1.4)	C′ 2b	先端欠		
広A 107	B 2	8 層	黒曜石	(11.2)	(11.5)	(13.4)	3.1	(0.6)	C 1a	先端・片脚欠		38-2
広A 108	A 5	9b層	黒曜石	30.1	25.0	(15.7)	5.3	(1.6)	C 1a	片脚欠		38-2
広A 109	B 2	7b層	安山岩	28.0	25.5	(17.9)	3.3	(1.4)	B 1a	片脚欠		
広A 110	E 4	9a層	黒曜石	26.0	21.6	17.8	4.0	1.2	C 1b	完		38-2
広A 111	B 4	上 層	黒曜石	25.9	—	18.7	5.5	2.0	A 2b	完		
広A 112	E 3	2b層	黒曜石	(25.3)	—	20.0	3.6	(1.7)	サイドブレイド	先端欠		44-2
広A 113	E 3	9 層	黒曜石	(17.0)	15.6	(13.4)	3.1	(0.7)	C 1a	脚部欠		38-2
広A 114	E 3	7 層	黒曜石	30.7	25.7	16.6	3.6	1.4	C 1a	完		38-2
広A 115	トレ	8 層	黒曜石	(28.3)	21.0	(21.5)	(3.8)	(1.5)	C 1b	片脚欠		38-2
広A 116	E 3	7 層	黒曜石	32.0	27.0	(14.8)	2.5	(1.0)	C 1b 鋸	片脚欠		
広A 117	B 3	7b層	安山岩	(26.0)	(19.7)	16.0	3.6	(1.4)	C 1b	ほぼ完		38-2
広A 118	W 3	7 層	黒曜石	(11.8)	—	10.5	(2.0)	(0.2)	—	先端のみ		
広A 119	0-1区	上 層	黒曜石	(22.7)	20.9	11.1	4.0	(0.8)	C 1b	脚部欠		38-2
広A 120	0-1区	上 層	黒曜石	34.2	26.5	(13.5)	4.1	(1.5)	C 1a	片脚欠		38-2
広A 121	0-1区	上 層	黒曜石	20.3	18.2	20.1	4.5	1.3	C′ 1a	完		
広A 122	0-1区	上 層	黒曜石	(21.8)	21.8	(14.5)	2.3	(0.6)	—	脚部欠		
広A 123	0-1区	上 層	黒曜石	19.1	18.3	18.3	3.5	0.9	B 1a	ほぼ完		

た123点を収録している。完形品は53点を数える。石質は安山岩の12点を除いた他全て黒曜石で色調が漆黒色を呈し透明度が深い。

これらの石鏃は形態から次の4種類に分類している。

A　いわゆる凸基式のもの。基部は必ずしも明確に茎を形成しないが最大幅の位置が下端にないもの。数量的には少なく3点。

B　いわゆる平基式のもの。9点。

C　いわゆる凹基式の石鏃。大半がこの類に含まれる。

C′　凹基であるがわたぐりが浅く平基に近いもの。11点。

また製作方法によって5種類に区分している。

1 a類　不定形の剝片を素材として製作されたもので，打欠きによる調整が顕著な例。全面に剝離が及び，主要剝離面を残さないもの。

1 b類　不定形の剝片を素材として製作され，打欠きによる調整がみられるが主要剝離面を残すもの。

2 a類　石刃状剝片の打面側を利用し，打面部を鏃の先端部としたもの。

2 b類　石刃状剝片の打面側を利用し，打面部を鏃の基部としたもの。

3類　石刃状剝片の先端部をそのまま鏃の先端部としたもので，基本的に鏃を形成するための加工が基部に集中し，先端部及び両側縁にほとんど加工を施さないもの。いわゆる狭義の剝片鏃とされている類である。

資料にA 1 a類は34・35，B 1 a類32，B 1 b類33，C 1 a類2～4・10・11・13～16，C 1 b類5・12・19～22，C 2 a類9・25，C 2 b類26～29，C 3類6・30・31・36，C′1 a類1・17・18，C′1 b類23・24がある。

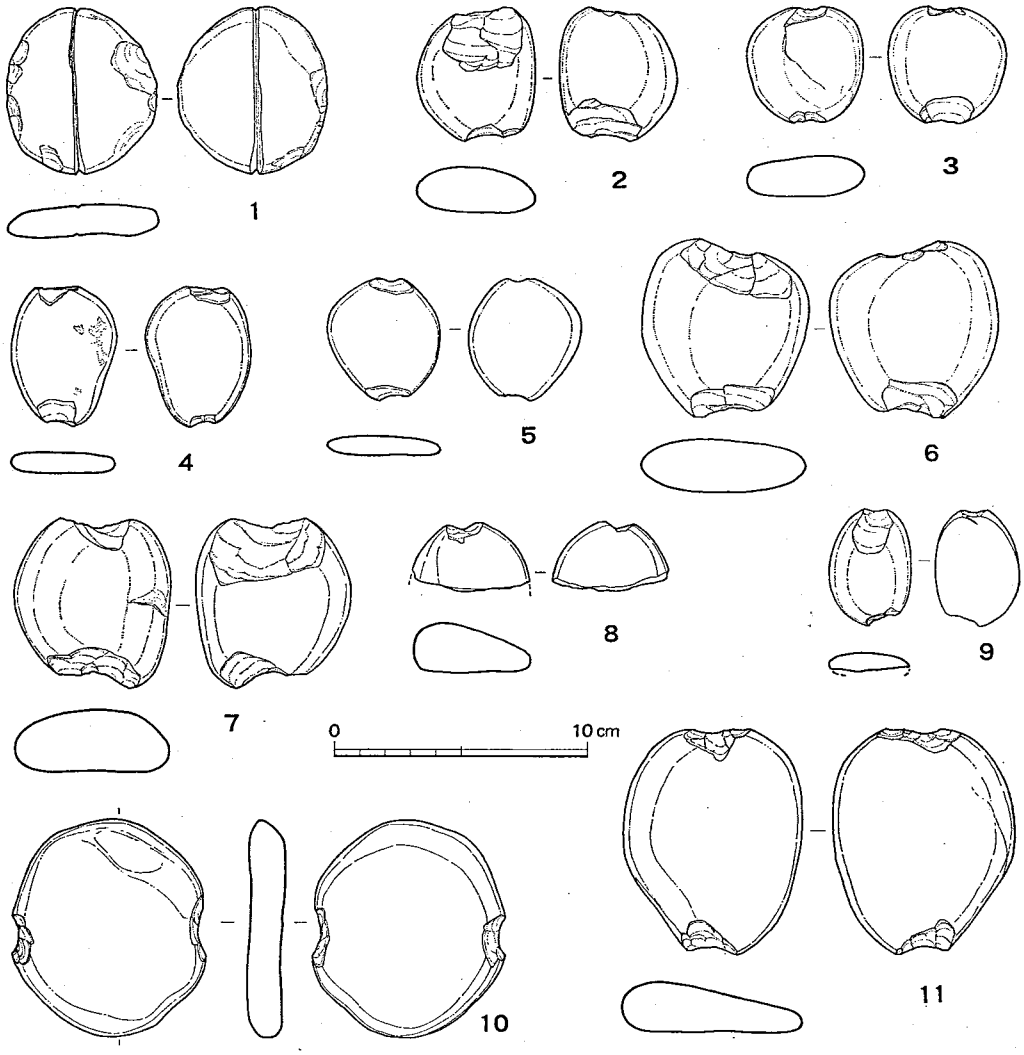
この分類とは別に，鋸歯鏃と称される例(1～6)，駒形鏃と称される五角形を呈する例（19・20），片面あるいは両面を研磨する例（7～9）がある。7は両面を研磨された例で，図示しないが，A 7・A25資料もある。片面に研磨痕のみとめられる例としては8・9があり，最も肥厚した部分が研磨される。なお安山岩質のA 117資料は片面にも磨耗痕があるが剝離の及ばない面にのみみとめられおそらく磨耗した打製石斧刃部片を再利用したものとみられる。

有溝石錘（図版37—2，第59図1，表9）

表9　石錘一覧表

〔単位はcm及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	有効長	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広O 1	W 4	7 層	閃雲片麻岩	7.6	7.0	8.6	1.4	161	打欠石錘B	完	10	37-2
広O 2	E 4	7 層	砂岩	6.6	6.3	5.9	1.4	70.2	有溝石錘A	完	1	37-2
広O 3	E 4	9 b層	花崗閃緑岩?	7.0	6.2	6.5	2.1	142	打欠石錘A	完	6	37-2
広O 4	B 3	7 層	閃雲片麻岩	5.3	4.9	4.6	1.8	66.2	打欠石錘A	完	2	37-2
広O 5	ト レ	2 a層	蛇紋岩質	4.8	4.5	4.4	0.8	66.5	打欠石錘A	完	5	37-2
広O 6	W 4	7 層	アプライト	5.5	5.3	4.1	0.8	31.4	打欠石錘A	完	4	37-2
広O 7	W 2	9 b層	玄武岩質	5.4	4.5	5.7	1.2	49.5	打欠石錘A	完	—	
広O 8	W 4	6 b層	硬質砂岩	4.6	4.3	3.2	(0.8)	(15.4)	打欠石錘A	½	9	37-2
広O 9	ト レ	6 a層	縞状片麻岩	4.6	4.3	4.6	1.6	56.1	打欠石錘A	完	3	37-2
広O 10	W 5	9 b層	花崗閃緑岩	(2.8)	(2.5)	(4.6)	(2.0)	(26.3)	打欠石錘A	½	8	37-2
広O 11	B 2	9 b層	花崗閃緑岩	8.9	8.4	7.1	1.9	172	打欠石錘A	完	11	37-2
広O 12	B 4	9 b層	花崗閃緑岩	6.7	5.6	6.1	2.0	131	打欠石錘A	完	7	37-2
広O 13	A 3	9 層	閃雲片麻岩	(4.3)	(3.8)	4.8	(1.2)	(37.4)	打欠石錘A	¾	—	37-2



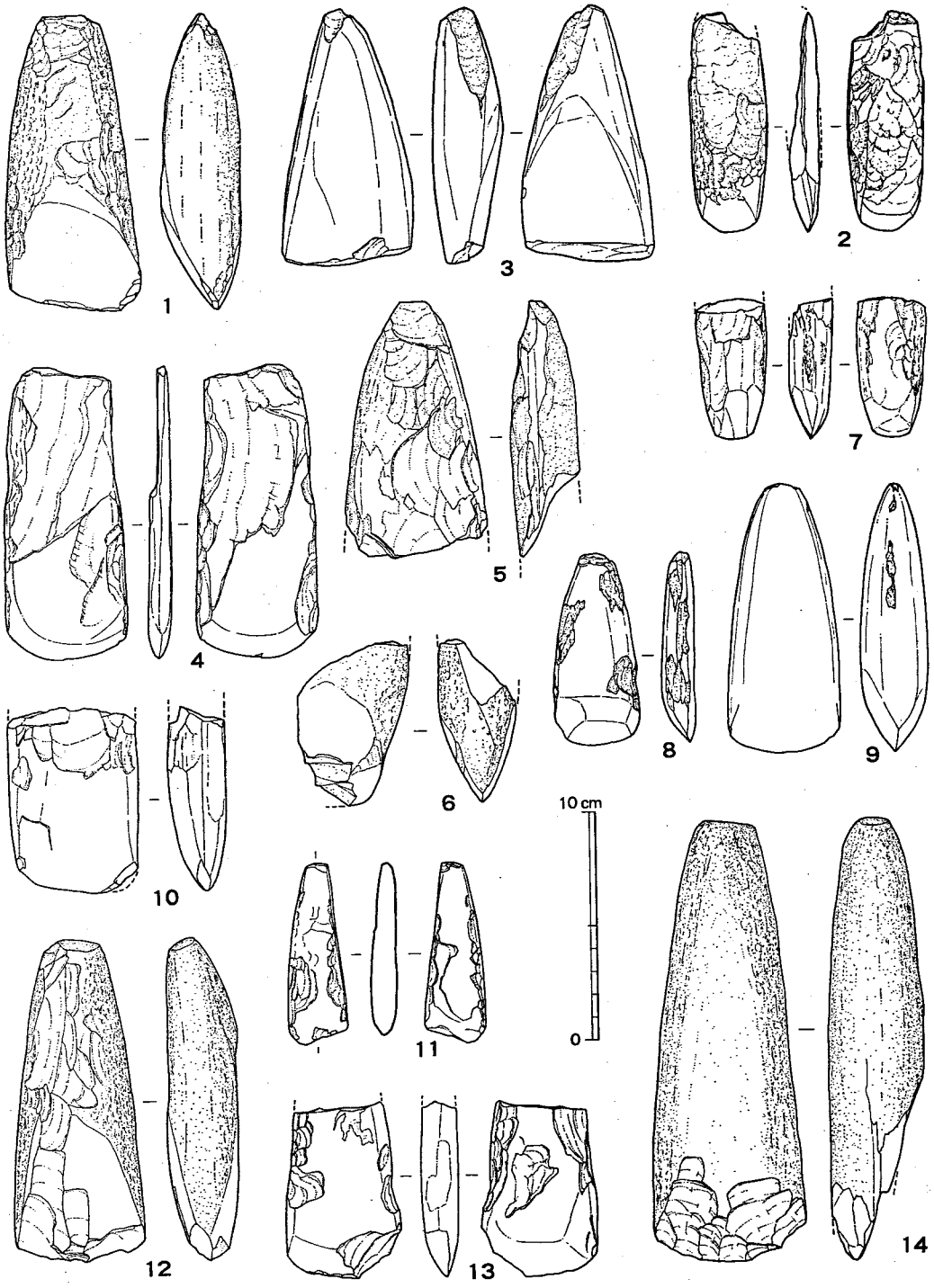
第59図　石　錘　実　測　図　(1/3)

Ⅲ群土器に伴って完形品が1点出土している。重量70.2ｇを測る。扁平な円礫の周縁をわずかに調整し，礫の長軸方向に溝を刻んで一周させている。A類。

打欠石錘（図版37—2，第59図2～11，表9）

破片を含めて12点出土した。花崗閃緑岩・片麻岩等の円礫を素材とし，糸掛けは長軸方向の両端を打欠いたものと，短軸方向の両端を打欠いたものがあり，前者をA類，後者をB類と分類している。数量的にはB類1点（10）を除いた他全てA類である。重量では30ｇ～70ｇの例（2～5）と，100ｇを越す例6・7・10・11に分かれる。

磨製石斧（図版39・40，第60・61図，表10）

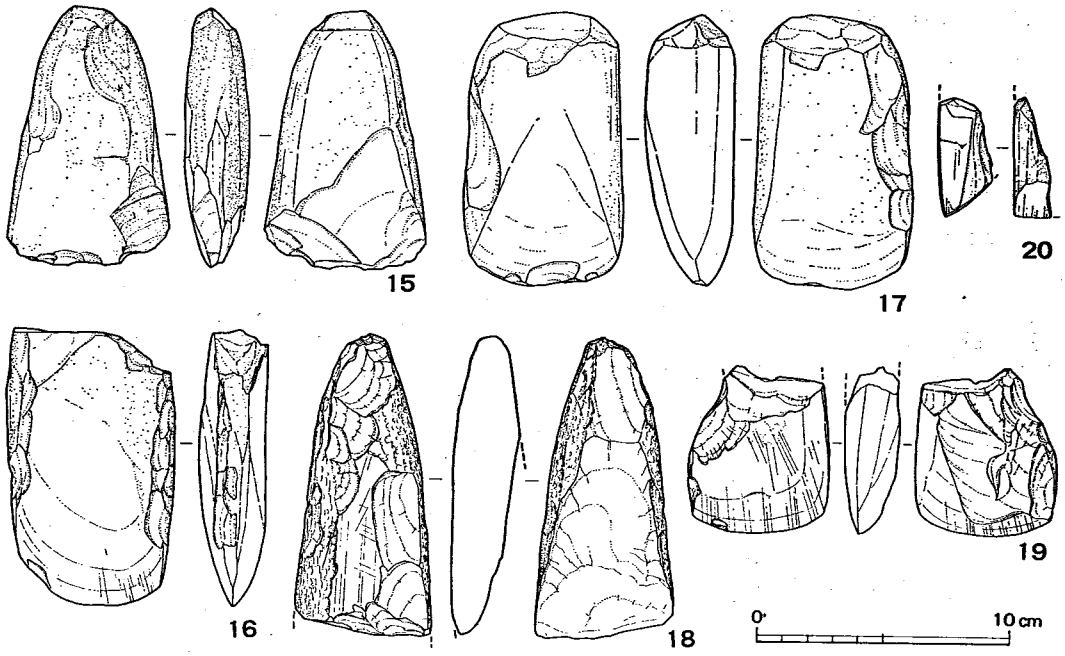


第 60 図　磨 製 石 斧 実 測 図 1　(1/3)

表10　磨製石斧一覧表

〔単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広H 1	W 3	2 b層	玄武岩	(11.2)	(6.2)	(3.1)	(313)	1(A)	胴部		
広H 2	E 4	1 層	玄武岩質	(10.9)	(6.7)	(2.6)	(315)	4(A)	刃部	61-16	
広H 4	表採		硬質細粒砂岩	(6.6)	(5.5)	(2.2)	(98)	4(A)	刃部	61-19	
広H 5	表採		花崗岩	10.8	6.3	3.5	372	5(A)	完	61-17	
広H 9	W 3	7 b層	緑色片岩	(12.9)	5.4	(1.1)	(110)	3(A)	基部側欠	60- 4	40-1
広H 10	W 3	7 層	玄武岩	19.4	6.6	4.1	655	2(B)	完	60-14	39-1
広H 14	W 2	7 層	砂岩	10.2	6.4	2.5	213	2(B)	完	61-15	39-2
広H 15	W 2	7 層	蛇紋岩	(7.8)	5.1	(1.6)	(97)	4(A)	刃部のみ	60-13	40-1
広H 18	W 5	7 層	蛇紋岩	8.4	3.7	1.5	60	6(A)	完	60- 8	40-1
広H 23	W 4	9 b層	玄武岩質	13.0	6.0	3.5	363	2(B)	完	60- 1	39-1
広H 29	表採		頁岩？	(4.7)	(1.5)	(2.1)	(18.1)	7(A)	刃部	61-20	40-1
広H 34	E 3	8 層	蛇紋岩	(11.3)	5.8	3.1	(261)	2(A)	刃部一部欠	60- 3	39-1
広H 36	E 2	崩落土	玄武岩質	(11.6)	5.3	(3.6)	(260)	2(A)	基部欠		
広H 39	トレ	7 層	蛇紋岩質	(11.8)	(3.5)	(3.0)	(289)	—(A)	片		
広H 40	トレ	7 層	玄武岩	(12.3)	(6.8)	(2.7)	(341)	4(A)	片		
広H 43	E 4	7 層	蛇紋岩	11.8	4.9	3.0	262	1(A)	完	60- 9	39-2
広H 50	表採		玄武岩	(11.9)	(5.4)	(2.2)	(209)	2(B)	刃部欠	61-18	
広H 62	W 5	9 a層	蛇紋岩	(6.1)	(3.3)	(1.4)	(24.5)	6(B)	刃部片		
広H 63	W 5	9 a層	蛇紋岩	(3.7)	(2.5)	(0.3)	(4.2)	—	刃部剥片		
広H 65	W 4	9 b層	蛇紋岩質	(6.2)	(4.0)	(1.4)	(32)	—	刃部片		
広H 66	W 4	9 b層	蛇紋岩	(6.2)	(1.8)	(1.4)	(17.7)	—	胴部片		
広H 67	W 4	9 b層	砂岩	(7.3)	(4.7)	(3.3)	(109)	1(B)	刃部片	60- 6	39-1
広H 72	トレ	7 層	玄武岩質砂岩？	(8.1)	5.7	(2.5)	(175)	5(A)	刃部片	60-10	39-2
広H 73	E 3	7 層	玄武岩	(4.2)	(4.1)	(1.9)	(31)	2—	基部片		
広H 101	W 4	7 b層	安山岩？玄武岩	(6.3)	(4.5)	(0.6)	(18.5)	—(A)	刃部片		
広H 104	トレ	2 b層	粘板岩	(7.6)	(2.9)	(0.9)	(12.2)	—	胴部片		
広H 106	表採		玄武岩質砂岩	(6.7)	(5.6)	(1.5)	(82)	4—	刃部片		
広H 110	W 5	6 b層	砂質頁岩	7.9	2.6	1.2	32	6(B)	完	60-11	40-1
広H 115	表採		安山岩？玄武岩	(3.6)	(4.9)	(0.7)	(19.5)	—(A)	刃部片		
広H 117	E 3	2 a層	玄武岩	(2.1)	(6.5)	(1.4)	(9.9)	—	刃部片		
広H 127	B 4	9 b層	玄武岩	(9.7)	3.4	(1.3)	(47)	6(B)	基部欠	60- 2	40-1
広H 131	B 3	7 b層	玄武岩質	14.2	5.8	3.1	361	2(B)	ほぼ完	60-12	39-2
広H 132	A 4	9 a層	玄武岩質	(11.2)	(6.1)	(3.0)	(207)	2(B)	刃部欠	60- 5	39-1
広H 138	A 4	7 層	蛇紋岩	(5.8)	(4.5)	(2.2)	(65.4)	1(A)	基部片		
広H 146	B 2	9 a層	蛇紋岩	(8.3)	(4.6)	(1.6)	(78.4)	2(A)	刃部		40-1
広H 147	B 2	9 a層	玄武岩質	(6.2)	(4.9)	(1.2)	(52.9)	4(A)	刃部		40-1
広H 148	B 2	9 a層	片麻岩	(3.4)	(2.5)	(1.3)	(13.4)	—	刃部片		
広H 201	A 3	9 層	蛇紋岩質	(6.8)	(4.9)	(3.3)	(140)	1(A)	基部		
広H 202	W 5	6 d層	蛇紋岩質	(5.2)	(2.1)	(1.1)	(14.1)	—	胴部片		
広H 204	B 2	9 b層	玄武岩	(2.4)	(4.0)	(1.2)	(10.4)	—	刃部片		
広H 205	B 2	9 b層	？	(6.1)	(3.0)	(1.8)	(47.0)	6(A)	刃部片	60- 7	40-1
広H 206	A 5	9 b層	玢岩質	(4.3)	(3.1)	(1.2)	(20.6)	—	刃部		
広H 215	B 4	7 層	砂岩質	(4.3)	(1.4)	(0.4)	(2.5)	—	剥片		



第61図　磨製石斧実測図 2 (1/3)

総計43点が出土し，完形品は 8 点ある。Ⅲ群土器に伴った資料が18点と多い。石質は蛇紋岩質・玄武岩質が多く砂岩・片岩を用いたものもある。20点を図示しているが，1・2はⅠ群土器，3～6はⅡ群土器，7～15はⅢ群土器，16はⅣ群土器に伴って出土し，17～20は表採資料である。これらの磨製石斧はその形態から次の 7 種類に区分できる。

1類　乳棒状を呈し，円形ないしは楕円形の断面を有す。刃部は両刃で蛤刃になる。6・9。

2類　乳棒状を呈し，円形ないしは楕円形の断面を有す。刃部は両刃を有すが片面が優勢で偏刃となるもの。1・3・12・14・18。

3類　短冊形を呈し扁平，刃部は両刃で蛤刃に近い。4。

4類　乳棒状というよりは，むしろ短冊形を呈し扁平度の強い断面を有す。刃部は偏刃となる。10・13・15・16・19。

5類　短い短冊形を呈し，楕円形断面を有す。刃部は偏刃になる。17。

6類　小形の磨製石斧を一括して 6 類とした。撥形に近い形状を有し偏刃の 8・11，扁平な短冊形で偏刃の 2 と，楕円形断面で柱状になり偏刃の 7 がある。

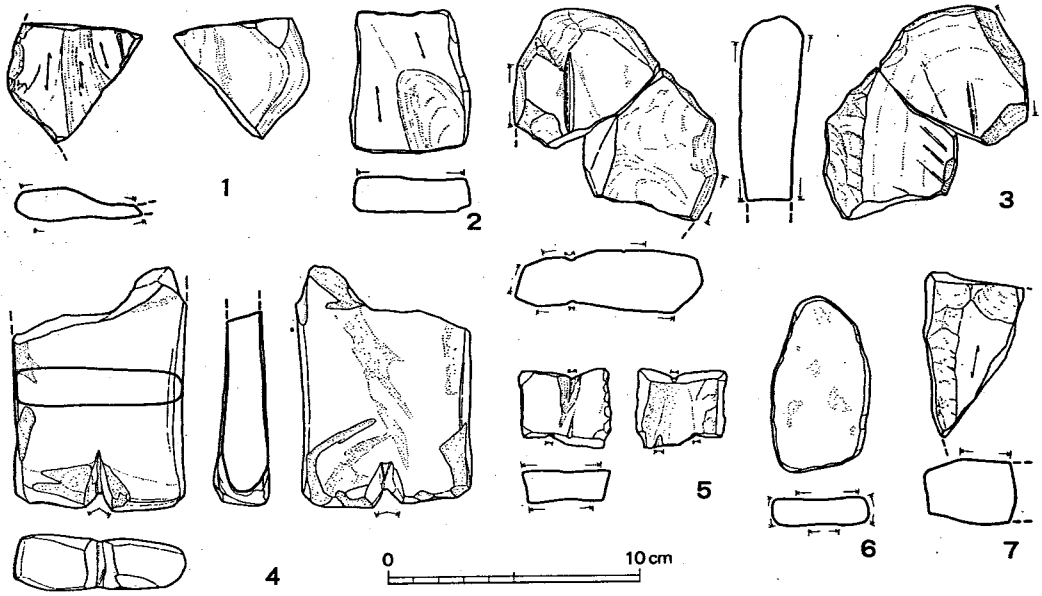
7類　柱状片刃石斧，表採資料である20の 1 点のみある。この種類の石斧は弥生時代に盛行するが，0区大溝及びその付近では弥生時代に属する土器は出土していない。縄文時代に属さない可能性があるものの注意する必要はあろう。

一方製作方法では，研磨が全面に及ぶもの（A）と，刃部のみ研磨されるいわゆる局部磨製

になるもの（B）があり，前者には3・4・7・8～10・13・16・17・19・20，後者には1・2・5・6・11・12・14・15・18が含まれ，後者の研磨されない部分は敲打によって調整されている。

砥　石（図版44—1，第62図，表11）

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ群土器に伴った資料各2点，Ⅳ群土器に伴った資料4点，その他2点の計14点が出土している。このうちⅠ群（7），Ⅱ群（1），Ⅲ群（2），Ⅳ群（3），Ⅴ群（5），



第62図　砥石実測図（1/3）

表11　砥石一覧表

〔単位は*cm*及び*g*（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	最大長	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広Z 12	E 5.	9 a層	砂岩	(5.6)	(4.8)	(1.2)	(30.7)	砥石 1 類	片	1	44-1
広Z 13	E 6	5 層	砂岩	(7.3)	(4.2)	(2.0)	(58.2)	砥石 2 類	片		
広Z 14	トレ	3 層	砂岩	(4.0)	(2.2)	(1.8)	(20)	砥石 2 類	片		
広Z 15	W 3	7 層	砂岩	(5.8)	(4.7)	(1.4)	(54.7)	砥石 1 類	片	2	44-1
広Z 16	W 3	9 b層	砂岩	(6.3)	(3.7)	(2.6)	(75.5)	砥石 2 類	片	7	44-1
広Z 17	W 3	6 b層	砂岩	(10.6)	(5.8)	(2.4)	159	砥石 1 類	⅔？	3	44-1
広Z 19	B 3	段落ち下	凝灰岩質砂岩	(9.4)	(6.8)	(2.1)	(148)	砥石 2 類	完	4	44-1
広Z 24	トレ	黒色	砂岩	6.7	3.8	1.1	46.3	砥石 2 類	片	6	44-1
広Z 26	W 3	1 層	砂岩	(3.5)	(3.0)	(1.2)	(20.4)	砥石 2 類	片	5	44-1
広Z 28	W 3	6 b層	砂岩	(6.0)	(3.8)	(1.3)	(36.8)	砥石 2 類	片		
広Z 29	B 2	7 b層	砂岩	(5.4)	(3.4)	(1.4)	(36.7)	砥石 1 類	片		
広Z 30	W 3	2 a層	砂岩	(3.7)	(3.4)	(1.2)	(16.8)	砥石 2 類	片		
広Z 31	B 4	9 b層	砂岩	(4.0)	(3.1)	(0.8)	(16.5)	砥石 2 類	片		
広Z 32	トレ2G	6 b層	砂岩	(3.1)	(3.4)	(0.6)	(9.4)	砥石 2 類	片		

その他（4・6）の7点を図示した。

砥石は砥面の状態で2種類に分けられる。

1類　砥面に溝ないしは凹みを有するもの，1～3が該当し，3は細い溝を有す。

2類　砥面が平坦であるもの，4～7が該当するが，4・5は端部に擦り切りの切り込みを有す。

石質では全て砂岩が用いられているが，1と4は細粒で生目が細かい。

削器・掻器（図版41～43，第63～65図，表12）

剝片の縁辺部に調整を加えたもの，調整は加わってないが，縁辺部に刃こぼれの状態をみとめるものを，縁辺部を刃部として使用された石器として一括した。総数99点あり，大半は安山岩剝片を素材とし，若干黒曜石剝片を素材とした資料を含む。

主に安山岩製資料の製作方法を中心にして区分すれば次の4種類に分けられる。

1類　横長剝片（黒曜石の資料では縦長剝片）を素材とし，横長剝片製作時の打面側を調整しないままのもの。打面と反対側の縁辺部（先端部）を刃部とする。

2類　横長剝片を素材とし，打面側を調整して握り易くしたもの。打面と反対側の縁辺部を刃部とする。

3類　不定形剝片を素材とし，打面側を調整しないもの。打面と反対側の縁辺部を刃部とするもの(A)と，打面と反対側の縁辺部を刃部とせずに，側縁部等を刃部にするもの(B)がある。

4類　横長剝片を素材とすることは1・2類と同様であるが，削器・掻器というよりはむしろ石鎌と称すべき形状を呈するもの。1類に近い14，2類に近い15をこの類に含めている。

また刃部の状態によって4種類の区別ができる。

a　刃部の調整加工がみられないもの，あるいは調整加工を施しても顕著なものでなく，刃部の厚みが薄めになるもの。

b　剝片の稜を有する面（主要剝離面側からみて背面となる面）側を調整加工して刃部としたもの。刃部の厚みが薄めになる。

c　剝片の主要剝離面側を調整加工して刃部としたもの。刃部の厚みが厚めになる。

d　刃部の両面に調整加工を施したもの。刃部の厚みが厚めになる。

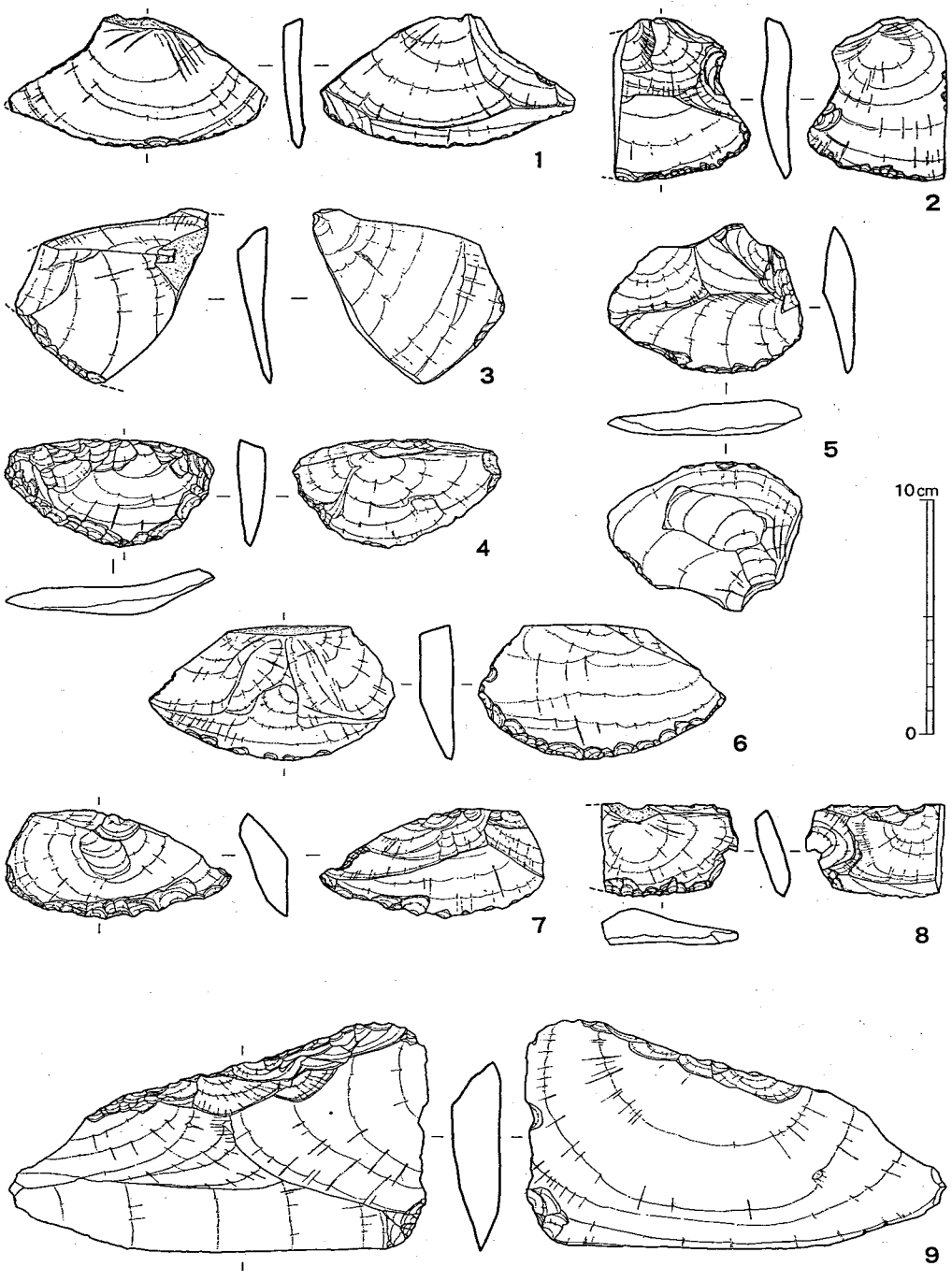
これらの区分では更に刃部を直線的に形成しているものをそれぞれに′を付し，a′・b′・c′・d′として区別している。

以上の分類を組み合わせると，1a類1・2，1b類3～5・21，1c類6，1b′類7・8，2a類9～11，2b類20，2c′類12，2d類13，3Aa類16，3Ba類17・18，4b類14・15になる。

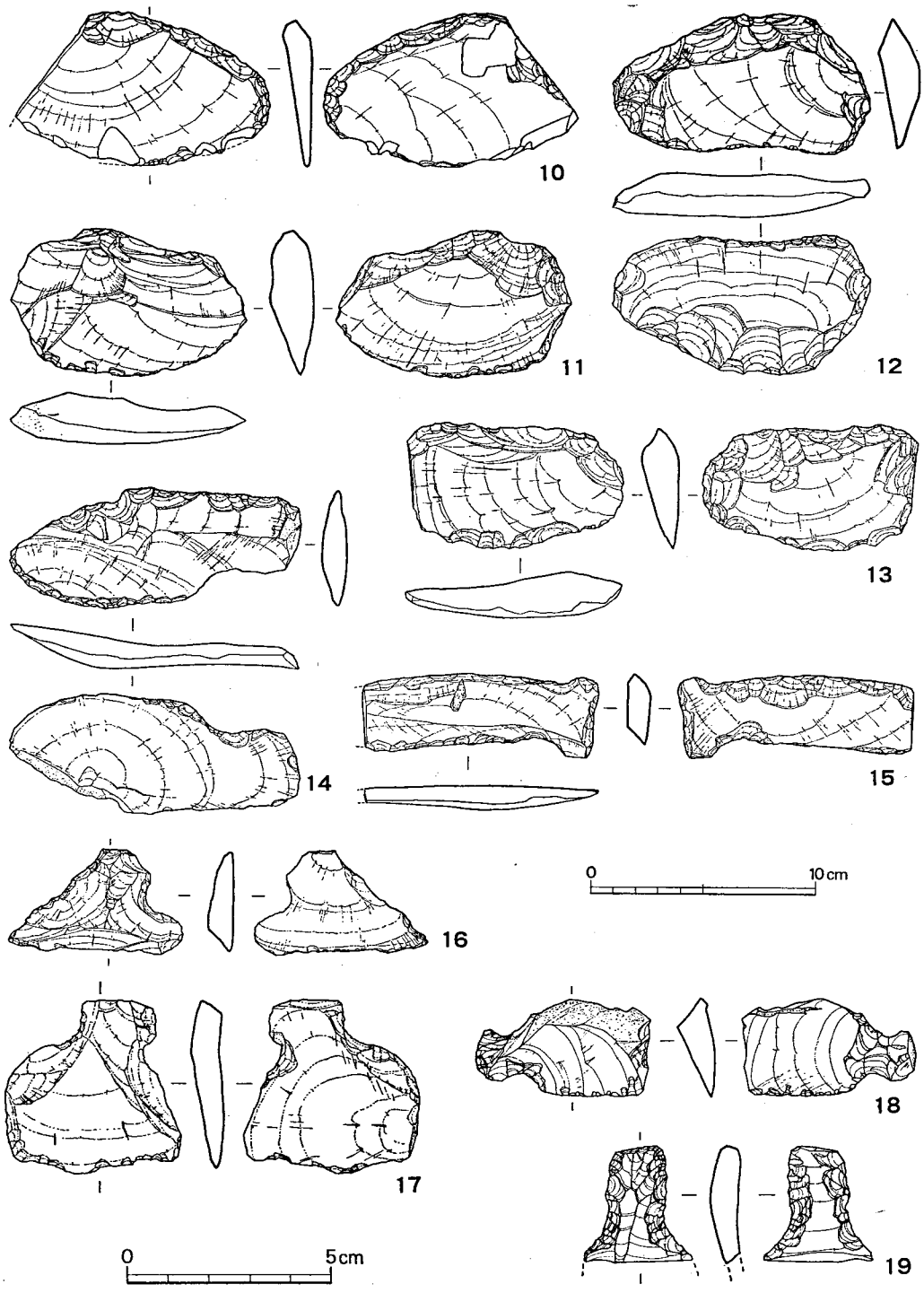
土器との共伴関係では，Ⅰ群に1・3・5・20，Ⅱ群に7・14・18，Ⅲ群に2・6・11・13・16・17，Ⅳ群に8・12・15，Ⅴ群に4がそれぞれ伴い，その他9・10・19・21は層位不明・表採資料である。

石　錐（図版44—2，第65図22，表12）

Ⅰ群・Ⅳ群土器に伴って各1点，Ⅱ群土器に伴って2点の計4点が出土している。Ⅱ群に伴



第 63 図　削 器 ・ 掻 器 実 測 図 1 (1/3)



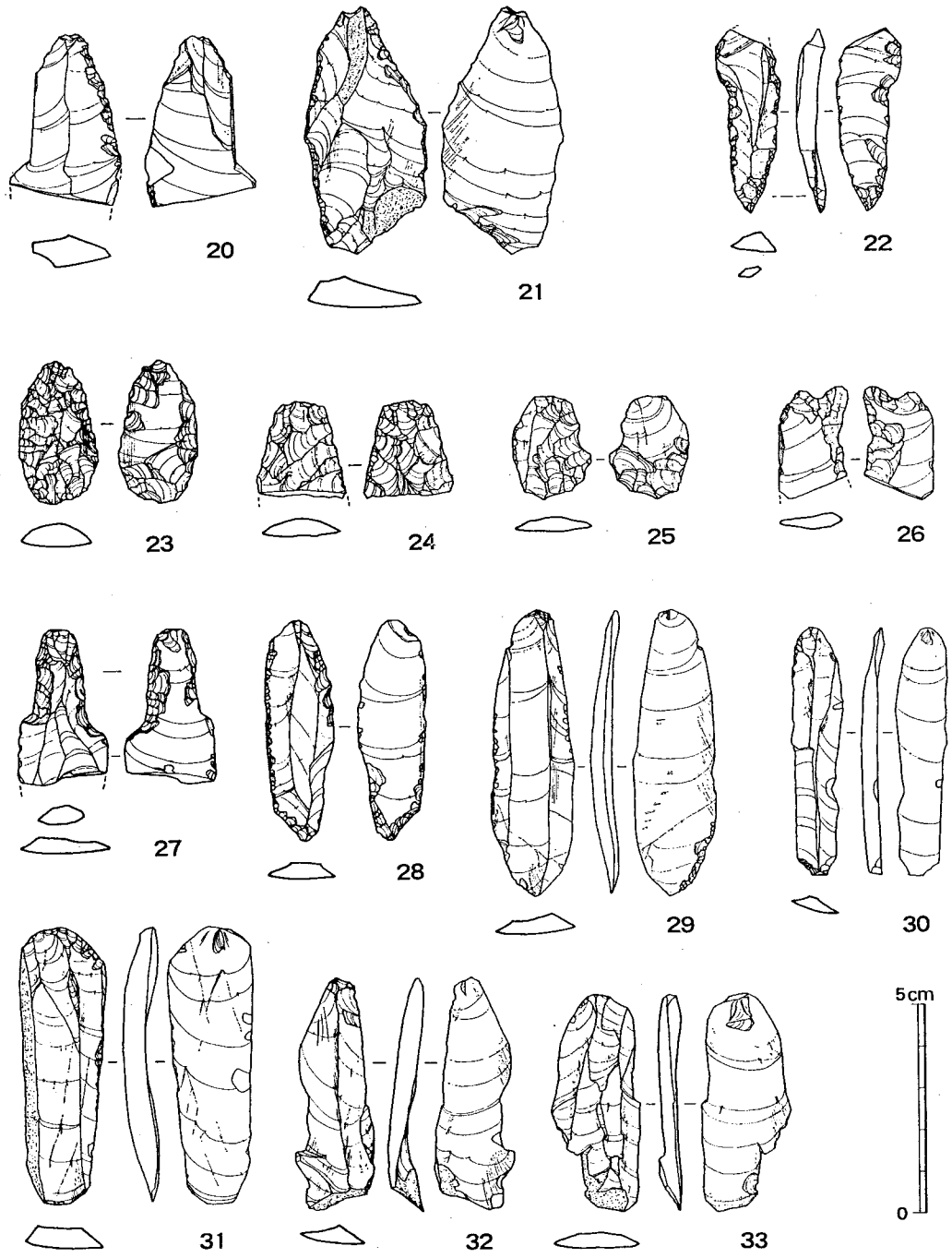
第 64 図　削 器 ・ 掻 器 実 測 図 2 (1/3,17～19は3/5)

表12　削器・掻器一覧表

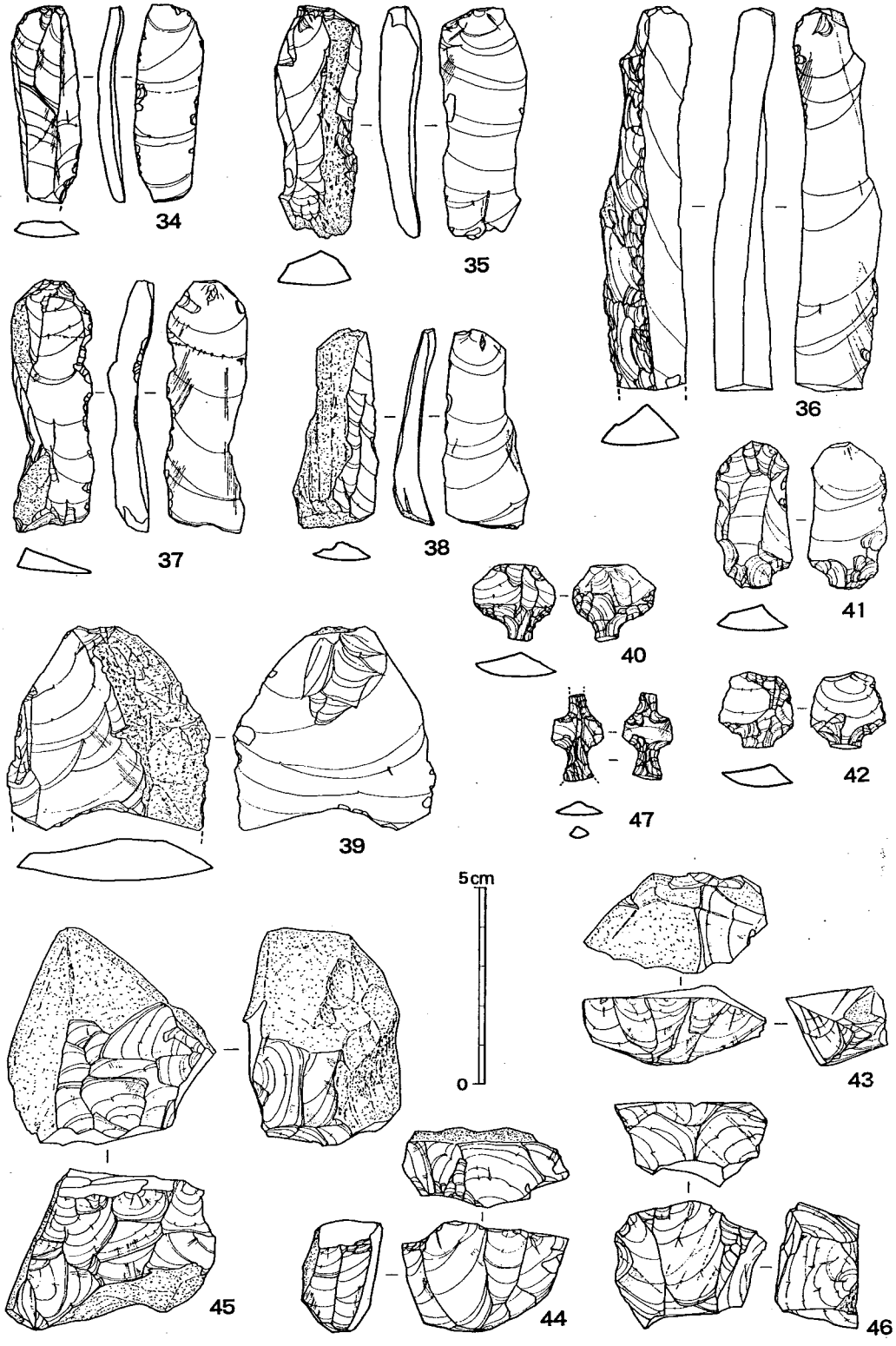
〔単位はcm及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広S 1	W 5	7 層	安山岩	10.5	6.5	2.1	140.2	2 a 類	完	64-11	42-2
広S 2	表 採		安山岩	18.4	9.6	2.0	295	2 a 類	完	63- 9	43-2
広S 3	W 4	7 層	安山岩	(8.3)	(6.3)	(1.4)	(53.3)	1 d 類	片？		42-1
広S 5	ト レ	2 層	安山岩	(5.7)	5.4	1.4	(45.2)	1 b′類	片		
広S 6	W 3	9 b層	安山岩	6.3	3.7	1.1	26.5	1 b 類	完		
広S 7	W 3	9 b層	安山岩	8.3	6.4	1.4	62.9	1 b 類	完	63- 5	41-1
広S 8	ト レ	8 層	安山岩	9.6	4.7	1.5	60.0	2 d′類	完	63- 7	41-2
広S 9	W 4	9 b層	安山岩	6.3	4.3	0.9	26.6	2 a 類	完		
広S 10	表 採		安山岩	(11.3)	6.8	1.5	(106.4)	2 a 類	片	64-10	43-2
広S 11	B 4	7 層	安山岩	(8.1)	(6.2)	1.9	(83.5)	2 d 類	片		42-2
広S 12	B 4	7 層	安山岩	(6.6)	(5.4)	(1.1)	(43.0)	1 c 類	片		
広S 13	A 3	7 層	安山岩	(4.5)	(5.5)	(1.3)	(32.1)	1 a 類	片		43-1
広S 14	B 3	7 層	安山岩	(6.6)	(3.1)	(1.1)	(21.3)	2 a 類	片		43-1
広S 15	B 3	7 層	安山岩	11.3	6.2	1.8	128.5	2 c′類	完	64-12	43-1
広S 16	B 3	7 層	安山岩	9.1	4.7	1.2	61.2	1 a 類	完		
広S 17	A 4	7 層	安山岩	10.4	5.7	1.5	91.4	1 c 類	完	63- 6	42-2
広S 18	A 4	7 層	安山岩	6.7	6.0	1.5	63.5	1 a 類	完？		
広S 19	A 4	7 層	安山岩	(5.0)	(5.0)	(1.2)	(26.7)	2 d 類	片		
広S 20	W 2	9 b層	黒曜石	(4.2)	(2.7)	0.8	(21.7)	3 a 類	片？	65-20	41-2
広S 21	W 5	9 b層	安山岩	10.8	5.7	0.9	45.9	1 a 類	完	63- 1	41-1
広S 22	W 5	9 b層	安山岩	(7.0)	(4.8)	(1.1)	(33.7)	2 c 類	片		
広S 23	E 4	7 層	安山岩	(5.6)	(3.4)	(0.6)	(11.2)	1 a 類	片		42-1
広S 24	W 3	7 層	安山岩	7.5	7.1	2.5	145.1	3 d 類	完		
広S 25	ト レ	7 層	安山岩	6.2	6.8	1.8	106.9	3 d 類	完		
広S 26	W 4	8 層	安山岩	(4.6)	2.8	0.6	(7.9)	2 a 類	一部欠		
広S 27	W 4	7 層	安山岩	(5.8)	(7.0)	(1.1)	(53.9)	1 a 類	½	63- 2	42-2
広S 28	W 3	9 b層	安山岩	(9.2)	5.6	1.7	(65.9)	2 a 類	ほぼ欠		
広S 29	E 2－6	崩落土一括	安山岩	(4.2)	(4.7)	(1.9)	(30.9)	3 d 類	½欠		
広S 30	E 2－6	崩落土一括	安山岩	(5.3)	(2.9)	(0.9)	(31.1)	2 a 類	欠		
広S 31	E 3	2 a層	安山岩	8.8	4.6	1.2	51.9	1 b 類	完	63- 4	43-2
広S 32	ト レ	7 層	安山岩	7.7	4.6	1.2	29.3	4 a 類	完	64-16	42-1
広S 33	W 3	7 層	安山岩	(5.6)	(5.2)	(1.1)	(35.5)	2 d 類	½		42-1
広S 34	W 4	4 層	安山岩	(5.8)	(3.9)	0.9	(29.2)	1 d′類	欠	63- 8	43-1
広S 35	W 5	8 層	黒曜石	5.2	1.6	0.4	(4.0)	3 a 類	ほぼ完		41-2
広S 36	W 5	8 層	安山岩	(2.7)	(4.3)	(1.0)	(12.4)	3 d 類	欠		
広S 37	ト レ	7 層	安山岩	9.6	5.5	1.4	91.2	2 d′類	完	64-13	42-2
広S 38	W 5	7 層	安山岩	5.7	4.0	0.9	19.9	1 d 類	完		
広S 39	W 4	7 層	安山岩	10.7	5.8	1.3	78.0	1 a 類	完？		42-2
広S 40	ト レ	7 層	安山岩	(11.5)	(5.8)	(1.5)	(110.5)	3 b 類	欠		
広S 41	ト レ	7 層	安山岩	4.4	4.2	0.7	12.7	3′a 類	完？	64-17	42-1
広S 42	ト レ	—	黒曜石	5.6	3.0	0.7	9.7	3 a 類	完	65-21	
広S 43	W 4	7 b層	安山岩	(7.9)	(4.6)	(0.8)	(31.3)	3′a 類	欠		41-2
広S 44	W 3	7 b層	安山岩	(9.8)	(7.1)	2.4	(128.0)	1 d 類	欠		
広S 45	表 採		安山岩	(9.6)	(5.6)	(1.4)	(82.9)	2 a 類	一部欠		
広S 46	表 採		安山岩	(5.5)	(4.6)	(1.1)	(31.7)	1 d 類	½欠		
広S 47	表 採		黒曜石	(2.8)	(2.7)	0.7	(4.1)	3 a 類	欠	64-19	41-2
広S 48	表 採		黒曜石	4.1	2.0	0.7	5.3	3′b 類	完		
広S 49	ト レ	9 b層	安山岩	(8.2)	(7.5)	(1.9)	(80.6)	1 b 類	½	63- 3	41-1
広S 50	W 5	4 層	安山岩	(5.3)	(5.8)	(1.2)	(40.8)	1 a 類	欠		43-1
広S 51	ト レ	7 層	安山岩	9.2	4.5	1.4	42.7	1 b 類	完？		42-1
広S 52	E 5	9 a層	安山岩	13.9	6.1	1.4	80.4	4 b 類	完？	64-14	41-2

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広S 53	E 3	10 層	安山岩	(9.9)	(7.5)	(1.1)	(87.4)	2 d 類	½		41-1
広S 54	E 5	6 層	安山岩	(10.4)	(3.6)	1.0	(48.4)	4 a 類	片	64-15	43-1
広S 55	W 3	7 層	安山岩	8.9	4.5	1.8	64.9	2 a 類	完		
広S 56	W 3	7 層	安山岩	9.2	9.0	1.8	160.2	2 a 類	完		42-1
広S 57	W 3	7 層	黒曜石	4.2	2.4	0.8	7.0	3 a 類	完	64-18	41-2
広S 58	W 3	7 層	安山岩	7.7	4.4	1.2	50.0	2 a 類			
広S 59	B 3	7 b層	安山岩	9.3	6.5	1.8	89.2	2 a 類	完		
広S 60	W 3	2 a層	安山岩	(3.5)	3.0	(0.5)	(8.1)	1 a 類	片		43-2
広S 61	トレ	3 層	安山岩	(5.8)	(5.8)	(32.1)	(1.0)	1 a 類	½		43-1
広S 62	トレ	3 層	安山岩	(3.2)	(3.6)	(6.5)	(0.6)	1 a 類	片		
広S 63	B 2	9 b層	黒曜石	4.2	2.8	8.3	0.8	3 a 類	完		
広S 64	B 2	9 b層	安山岩	(8.4)	(5.4)	(56.9)	(1.4)	2 a 類	½?		41-1
広S 65	AB-5・6	上 層	安山岩	(5.6)	(3.8)	(19.2)	(0.7)	2 a 類	¾		43-2
広S 66	B 4	上 層	安山岩	(5.3)	(3.6)	(13.5)	(0.7)	1 a 類	片		
広S 67	B 4	上 層	安山岩	(6.3)	5.5	(33.5)	(1.4)	1 a 類	½		
広S 68	A 3	7 層	安山岩	(7.6)	5.3	(67.6)	(1.4)	1 a 類	⅔		42-1
広S 69	B 3	9 b層	安山岩	6.8	3.4	15.0	0.9	2 a 類	完		
広S 70	E 6	4 層	安山岩	(2.2)	(3.0)	(6.2)	(0.8)	1 a 類	片		43-1
広S 71	A 3	7 層	安山岩	(6.6)	(5.7)	(47.2)	(1.3)	1 c 類	½		
広S 72	トレ	黒色包含層	安山岩	6.6	4.4	26.7	1.0	1 a 類	ほぼ完		
広S 73	A 3	9 a層	安山岩	5.3	6.5	36.5	1.5	2 a 類	ほぼ完		
広S 74	A 4	8 層	安山岩	(2.8)	(2.6)	(2.9)	(0.3)	3 d 類	つまみ部のみ		
広S 75	B 2	9 a層	安山岩	(4.4)	(4.8)	(31.8)	(1.5)	3 a 類	片		
広S 76	B 2	9 a層	安山岩	(7.3)	(7.6)	(63.9)	(1.2)	2 b 類	½		
広S 77	B 3	7 層	安山岩	(6.8)	2.8	15.0	0.8	1 a 類	完		43-1
広S 78	B 2	7 b層	安山岩	(5.1)	(3.3)	(18.8)	(1.1)	2 d 類	片		
広S 79	A 3	9 b層	安山岩	(7.4)	(4.7)	(53.2)	(1.9)	1 b 類	½		
広S 80	A 5	7 b層	安山岩	(7.3)	(4.7)	(34.8)	(1.1)	1 a 類	⅓?		41-2
広S 81	B 3	9 a層	安山岩	6.4	3.9	24.7	0.9	2 d 類	完		42-1
広S 82	B 3	9 a層	安山岩	7.9	3.4	15.6	0.7	2 a 類	完?		
広S 83	E 4	9 a層	安山岩	(6.0)	4.5	(41.9)	1.3	2 b 類	½?		
広S 84	B 3	7 b層	安山岩	(7.7)	(4.8)	(24.9)	(1.2)	1 a 類	½?		
広S 85	B 4	9 b層	安山岩	(5.6)	(3.3)	(17.4)	(0.9)	1 a 類	片		
広S 86	B 4	9 b層	安山岩	(5.4)	(7.5)	(46.9)	(1.4)	1 a 類	½?		
広S 87	B 4	9 b層	安山岩	(10.6)	6.6	(93.0)	1.2	1 a 類	ほぼ完		
広S 88	B 4	9 b層	安山岩	9.6	5.9	51.6	1.3	1 a 類	完		41-1
広S 89	B 4	9 b層	安山岩	(6.5)	(4.7)	(33.6)	(1.5)	1 a 類	½		
広S 90	B 4	9 b層	安山岩	8.3	4.5	44.7	1.2	1 a 類	ほぼ完		
広S 91	B 4	8 層	黒曜石	5.1	2.1	0.7	7.7	3′a 類	ほぼ完		41-2
広S 92	表採		黒曜石	5.3	2.1	0.7	6.5	3 a 類	完		
広S 93	B 4	7 b層	安山岩	(8.4)	8.7	1.0	(101.0)	3′a 類	¾		41-2
広S 94	トレ		安山岩	10.6	6.7	2.1	120.0	2 a 類	完		
広S 95	B 4	7 層	安山岩	5.9	4.2	1.0	22.5	4 a 類	完		42-1
広S 96	B 4	上 層	安山岩	5.8	2.5	0.6	11.9	2 c 類	完		
広S 97	表採		安山岩	(6.5)	4.0	(0.7)	(20.2)	2 d 類	⅔?		
広S 98	表採		安山岩	5.6	(4.0)	2.0	(50.3)	3 d 類	一部欠		
広S 99	表採		安山岩	(6.7)	4.3	0.8	(18.4)	1 a 類	一部欠		43-2
広S 100	表採		安山岩	9.0	4.9	1.1	32.0	1 a 類	完?		43-2
広S 101	0-1区	上 層	黒曜石	2.4	2.8	0.5	2.7	3′a 類	ほぼ完		41-2
広S 102	0-2区	上 層	安山岩	(4.1)	(4.1)	(1.1)	(17.3)	1 d′類	片		
広S 103	0-2区	上 層	安山岩	(4.9)	(6.4)	(1.5)	(43.6)	2 a 類	½		



第 65 図　削器・掻器・石錐・石刃実測図 (3/5)



第 66 図　石刃，つまみ形石器，石核，異形石器実測図 (3/5)

表13　石錐・石刃・つまみ形石器・石核一覧表

〔単位は㎝及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広K 1	W 5	9a層	黒曜石	4.3	1.5	0.5	2.8	石錐	ほぼ完	65-22	44-2
広K 2	B 4	9b層	黒曜石	(4.4)	3.1	1.0	(12.1)	石錐	先端欠		44-2
広K 3	E 3	6b層	黒曜石	2.3	1.7	0.5	1.6	石錐	完		44-2
広K 4	B 4	8層	黒曜石	2.9	2.3	0.4	2.0	石錐	完		44-2
広B 1	W 3	7層	黒曜石	5.5	1.7	0.8	7.2	石刃4類	完		
広B 2	W 3	7層	黒曜石	(5.2)	5.1	(1.2)	(26.2)	石刃5類	½	66-39	45-1
広B 3	W 4	7層	黒曜石	6.8	1.9	0.6	6.4	石刃2類	完		45-1
広B 4	W 3	6b層	黒曜石	(5.0)	2.0	0.6	(6.3)	石刃4類	基部欠		45-1
広B 5	W 3	6b層	黒曜石	5.8	2.0	0.6	6.6	石刃3類	完		45-1
広B 6	W 4	7層	黒曜石	(1.7)	(2.7)	(0.4)	(1.5)	石刃6類	欠		44-2
広B 7	W 4	7層	黒曜石	(0.9)	(2.0)	(0.2)	(0.5)	石刃6類	欠		44-2
広B 8	E2—6	崩落土	黒曜石	(5.8)	2.0	0.3	(3.4)	石刃1類	先端欠		45-1
広B 9	E2—6	崩落土	黒曜石	5.2	2.1	0.5	4.5	石刃1類	完	65-33	45-1
広B 10	E2—6	崩落土	黒曜石	3.9	1.5	0.5	2.4	石刃4類	完		
広B 11	W 5	9a層	黒曜石	6.3	2.1	0.8	9.1	石刃4類	完	66-37	45-1
広B 12	W 4	7層	黒曜石	(5.9)	1.2	0.4	(2.6)	石刃2類	先端欠	65-30	45-1
広B 13	W 5	8層	黒曜石	(3.3)	(2.1)	(0.7)	(5.1)	石刃2類	先端欠		45-1
広B 14	W 3	8層	黒曜石	5.5	1.9	0.7	4.9	石刃1類	完	65-32	45-1
広B 15	トレ	7層	黒曜石	(3.3)	(2.1)	0.7	6.7	石刃4類	ほぼ完		45-1
広B 16	W 4	7b層	黒曜石	5.9	2.2	1.0	11.9	石刃4類	完	66-35	45-1
広B 17	表採		黒曜石	(1.4)	(1.6)	(0.2)	(0.6)	石刃6類	欠		44-2
広B 18	表採		黒曜石	(1.1)	(2.2)	(0.3)	(0.6)	石刃6類	欠		44-2
広B 19	表採		黒曜石	(2.7)	(1.6)	(0.5)	(1.7)	石刃6類	欠	65-26	44-2
広B 20	トレ	9b層	黒曜石	5.0	1.9	0.4	3.6	石刃1類	完		45-1
広B 21	トレ	9a層	黒曜石	(5.0)	1.9	0.4	(4.9)	石刃1類	一部欠		45-1
広B 22	E 5	4層	黒曜石	(5.0)	1.8	0.5	(3.9)	石刃2類	一部欠	66-34	45-1
広B 23	W 4	7層	黒曜石	6.6	2.1	0.6	9.0	石刃1類	完	65-31	45-1
広B 24	E 3	3層	黒曜石	4.4	2.3	0.5	5.6	石刃1類	一部欠		45-1
広B 25	トレ	9層	黒曜石	3.4	1.9	0.6	3.6	石刃6類	完	65-23	44-2
広B 26	トレ	7層	黒曜石	(3.7)	(2.1)	(0.5)	(3.5)	石刃6類	片	65-27	44-2
広B 27	トレ	7層	黒曜石	6.8	2.0	0.4	5.5	石刃1類	完	65-29	45-1
広B 28	トレ	7層	黒曜石	5.0	2.2	0.8	5.6	石刃4類	完	66-38	45-1
広B 29	W 5	9b層	黒曜石	(9.6)	(2.3)	(1.1)	(20.9)	石刃3類	先端欠	66-36	45-1
広B 30	W 3	2a層	黒曜石	(1.2)	(1.9)	(0.4)	(0.9)	石刃6類	片		44-2
広B 31	E 4	2b層	黒曜石	2.5	1.9	0.4	0.9	石刃6類	ほぼ完	65-25	44-2
広B 32	W 3	7層	黒曜石	(2.3)	(2.2)	(0.5)	(1.5)	石刃6類	½？	65-24	44-2
広B 33	W 5	6層	黒曜石	(1.8)	(1.7)	(0.5)	(2.0)	石刃6類	½？		44-2
広B 34	A 3	7層	黒曜石	(2.2)	(1.2)	(0.4)	(1.5)	石刃6類	½？		44-2
広B 35	B 4	9b層	黒曜石	(2.8)	(1.2)	(0.3)	(1.1)	石刃6類	⅓？	65-28	44-2
広B 36	E 4	1層	黒曜石	(2.2)	(1.5)	(0.3)	(1.3)	石刃6類	½		44-2
広B 37	E 5	6層	黒曜石	(2.6)	(1.7)	(0.5)	(2.0)	石刃6類	⅜？		44-2
広B 38	E 4	1層	黒曜石	3.7	1.6	0.5	2.1	石刃1類	完		45-1
広B 39	B 2	7下層	黒曜石	5.0	1.6	0.6	4.2	石刃2類	完		45-1
広B 40	E 5	9b層	黒曜石	4.2	1.6	0.6	2.4	石刃4類	完		

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広B 41	E 5	9 b層	黒曜石	4.1	1.5	0.8	3.4	石刃2類	ほぼ完		45-1
広B 42	B 2	9 a層	黒曜石	5.2	2.6	0.8	8.0	石刃4類	完		45-1
広B 43	B 2	9 a層	黒曜石	(5.6)	2.4	(1.1)	(12.1)	石刃4類	先端欠		45-1
広B 44	B 2	9 a層	黒曜石	5.0	1.8	0.9	5.1	石刃3類	完		45-1
広B 45	B 3	9 b層	黒曜石	3.9	1.4	0.5	1.5	石刃1類	完		45-1
広B 46	B 3	9 b層	黒曜石	(5.5)	(2.2)	(0.6)	(6.1)	石刃4類	先端欠		45-1
広B 47	表採		黒曜石	(4.5)	(2.5)	(0.5)	(4.4)	石刃2類			45-1
広T 1	W 5	8 層	黒曜石	2.3	2.2	0.6	2.9	つまみ形石器	完		44-2
広T 2	W 4	7 層	黒曜石	(1.4)	(1.6)	(0.5)	(1.0)	つまみ形石器	基部欠		44-2
広T 3	E 6	9 a層	黒曜石	1.9	2.1	0.6	2.0	つまみ形石器	完		44-2
広T 4	W 5	9 b層	黒曜石	2.5	3.0	0.8	6.1	つまみ形石器	完		44-2
広T 5	E 3	2 a層	黒曜石	1.9	1.9	0.5	1.8	つまみ形石器	完	66-42	44-2
広T 6	B 4	9 b層	黒曜石	3.7	1.9	0.6	4.6	つまみ形石器	完	66-41	44-2
広T 7	A 5	9 b層	黒曜石	2.0	1.5	0.4	1.5	つまみ形石器	完		44-2
広C 1	W 3	7 層	黒曜石	5.5	5.2	3.5	100.1	石核2類		66-45	45-2
広C 2	B 3	7 層	黒曜石	3.1	2.7	2.5	11.3	石核4類			45-2
広C 3	B 3	7 層	黒曜石	3.6	2.6	2.7	18.1	石核4類			45-2
広C 4	E 1	1 層	黒曜石	3.8	2.8	1.8	15.2	石核2類			45-2
広C 5	表採		黒曜石	3.2	3.2	1.7	14.8	石核2類			45-2
広C 6	表採		黒曜石	2.6	2.6	2.2	12.2	石核1類			45-2
広C 7	表採		黒曜石	3.2	2.4	1.7	14.8	石核4類			45-2
広C 8	表採		黒曜石	3.1	2.0	2.0	13.0	石核4類			45-2
広C 9	E 5	2 b層	黒曜石	4.7	3.0	2.0	19.9	石核1類		66-43	45-2
広C 10	E 5	2 b層	黒曜石	3.3	2.7	2.0	12.3	石核4類			45-2
広C 11	E 5	2 b層	黒曜石	3.4	1.4	1.2	2.8	石核3類			45-2
広C 12	E 3	2 a層	黒曜石	4.2	2.8	1.6	22.1	石核1類		66-44	45-2
広C 13	W 3	3 層	黒曜石	3.7	2.8	2.0	21.7	石核4類		66-46	45-2
広C 14	E 5	2 b層	黒曜石	3.6	2.3	1.6	10.5	石核1類			45-2
広C 15	表採		黒曜石	4.0	3.0	2.0	18.3	石核4類			

った22を図示しているが，他の3例の逆三角形に比して細身の二等辺三角形を呈すが，石刃状剝片の打面側を調整加工して先端部とし，打瘤の厚みを活用する点は他の資料と共通する。いずれも黒曜石製。

石　刃（図版44—2・45—1，第65・66図23～39，表13）

いわゆる縦長剝片，サイドブレイドと称される資料を含む黒曜石の石刃状剝片を使用したものを一括し取り扱っている。

1類　剝離の方向が主要剝離面の剝離の方向と同一の方向になる石刃。29・31～33。

2類　剝離の方向が主要剝離面の剝離の方向と異なる方向のみられる石刃。30・34。

3類　剝離の方向が主要剝離面の剝離の方向と直交する方向になる方向のみられる石刃。いわゆるスポールと称されるもの。36。

4類　自然面を有し，自然面が多くの部分を占めるため，1類の可能性があるものの不明確なもの。35・37・38。

5類　幅広な石刃。39。

6類　いわゆるサイドブレイドと称されるもの。23～26。この他に16点出土している。

7類　石刃状剝片の打面側面を調整しているが，全体の形状の明らかでない27を一応区別した。あるいは19と共に削器類に含めるべきであろうか。

つまみ形石器（図版44—2，第66図40～42，表13）

黒曜石製石刃状剝片の両側縁に抉りを入れ最も幅狭になる部分で折断したもので，7点出土したが，Ⅰ群土器に伴って3点，Ⅱ群に2点，Ⅲ群・Ⅴ群に各1点伴っている。図示した40では素材となった石刃状剝片が石刃1類の可能性があり，41・42は石刃2類を素材としている。図示した3点では折断の際に加わった力の方向は稜のある背面側から主要剝離面側に向かっているが，同様な例が他に3点と，逆方向に力の加わった例が1点ある。

石　核（図版45—2，第66図43～46，表13）

15点あり，Ⅲ群に1点，Ⅳ群に3点，Ⅴ群土器に6点共伴している。

残された剝離面の形状から次の4種類に分類できる。

1類　一方向から剝離がなされており，打面は自然面及び比較的大きな剝離面を利用している。43・44。

2類　交互に打面を替えており，打面の方向が複数になるもの。45。

3類　やや大きな剝離によって厚みを有したまま離脱したもの。石刃3類に近く，C11が該当する。

4類　剝離の方向が一定せず，打面が全面に及ぶもの。46。

いずれの石核も黒曜石製で，残された最終剝離面は小さく短い。前述の石刃状剝片を作出したとは考え難い。残された自然面の広がり具合から想定すると5㎝角程度の礫が素材であろう。

5　石製品（図版46・47，第67～71図，表14）

異形石器・石柱・石棒・御物石器・石刀・版状石製品・十字形石器・円盤状石製品・玉類等を含めて25点が出土している。

異形石器（図版47—2，第66図47，表14）

Ⅱ群土器に伴って1点出土した。黒曜石石刃状剝片の両側縁から抉りを施している。先端部・基部共に欠失しているため全体の形状は不明だが，抉入の位置が複数であることから，石錐・つまみ形石器と性格の異なる用途を考えなければなるまい。現存長22.0㎜，最大幅12.7㎜，

厚さ3.0～3.4㎜を測る。

石　柱（図版46，第67—1図1，表14）

Ⅰ群土器に伴って，大溝下面のやや西寄りの位置に南側へ倒立した状態で，出土した。風化が進んでいることにも起因して欠損した部分は大きい。現存長28.3㎝を測り，直径10余㎝の最大径から上位にやや細くなる形状をなす。閃雲花崗岩を素材とし，研磨された面を有す。石棒にも似るが，比較的大きな法量になることから，住居内外に立石として用いらる石柱に近い用途を考えておきたい。

石　棒（図版46，第67—1図2，表14）

Ⅰ群土器に共伴して1点出土した。玄武岩質の石材を用い，研磨によって長軸方向でわずかに内彎する面を有する。端部は丸味をもつが，細めになる上端部は一部欠失する。体部でも上端部に近い部分ほど磨耗の程度が強く，石棒の用途を彷彿させる。なお全体に二次的な熱を受けた痕跡がみとめられる。

御物石器（図版46，第67—2図）

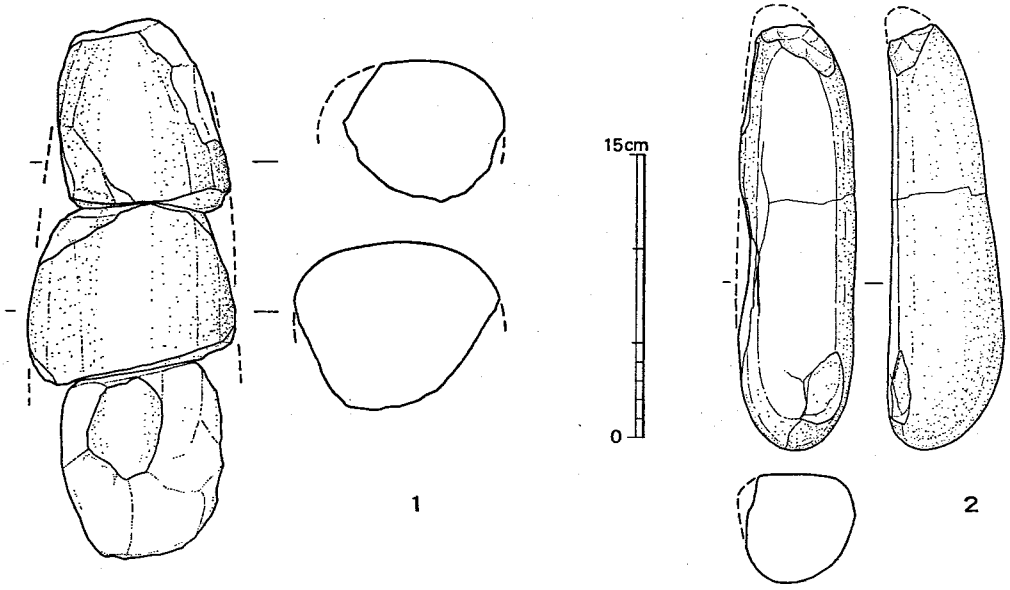
図版9～11の遺物出土状況にみられるように，大溝下面には土器片や円礫等が散乱しているが，ここで取り扱う石製品は溝下面でも西寄りの，W4区の地山である黄褐色粘土に接し，頭部が南側に向き風化した面が上になって，出土した。Ⅰ群土器に伴う。遺物の周囲には殊に目立った施設はみとめられなかったが，東側約2ｍには石柱が倒立した状態で検出されている。

この石製品は花崗岩の細粒を含む凝灰岩質の砂岩とみられる石材を素材としたもので，現存長12.3㎝，最大幅8.2㎝，最大厚4.7㎝を測るが，体部下半を欠失し，全体の形状は明らかではない。このため目下のところ，頭部としている部分が必ずしも本来の頭部であったのか疑問は残るものの，仮に頭部として考えておきたい。

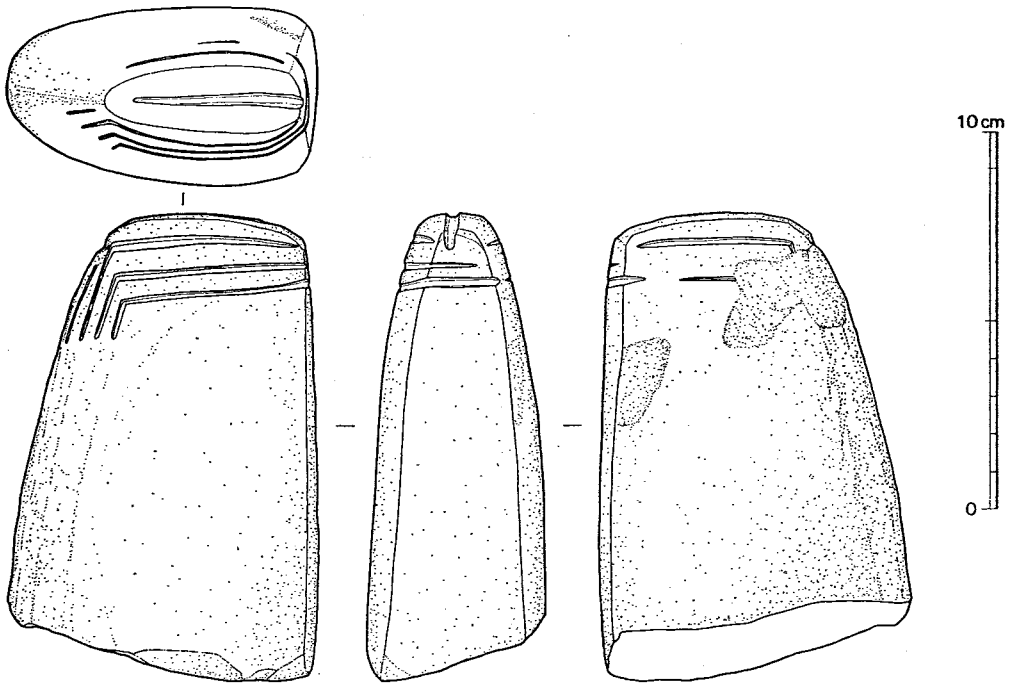
現存する部分の形状は，一方の側面が平坦になり，断面形がやや丸味のある砲弾形を呈す。幅5.2㎝，厚さ1.8㎝の頭部に向かってわずかに彎曲しながらすぼまり，頭部上面はやや平坦になる。全体の整形は敲打により，研磨で仕上げられたとみられるが，風化が進んでいるため，研磨痕はほとんど残存しない。色調は黄色ないしは黄褐色を呈し，風化の進んだ面では色調が赤味を増し，二次的な熱を受けた可能性もある。頭部上面では1条の擦り切りによる刻線が長軸方向に描かれるが，平坦になる右側面寄りに明瞭である。保存状況の良好な面を正面とした正面観では，3条の擦り切り刻線が横位に走り，左側面寄りで鉤形に折れる。なお左側面では鉤形にならない1条の刻線が加わっている。3条の沈線は右側面では下側2条のみ伸び，裏側へと続くが，上位の刻線は風化によるためか検出できず，極めて浅く残存する程度になり，3条の鉤形刻線も2条しか観察できない。

このような形状から，実用に供する利器ではなく，御物石器を考えている。

石　刀（図版47—1，第69図8）



第67—1図　石柱・石棒実測図（1/4）

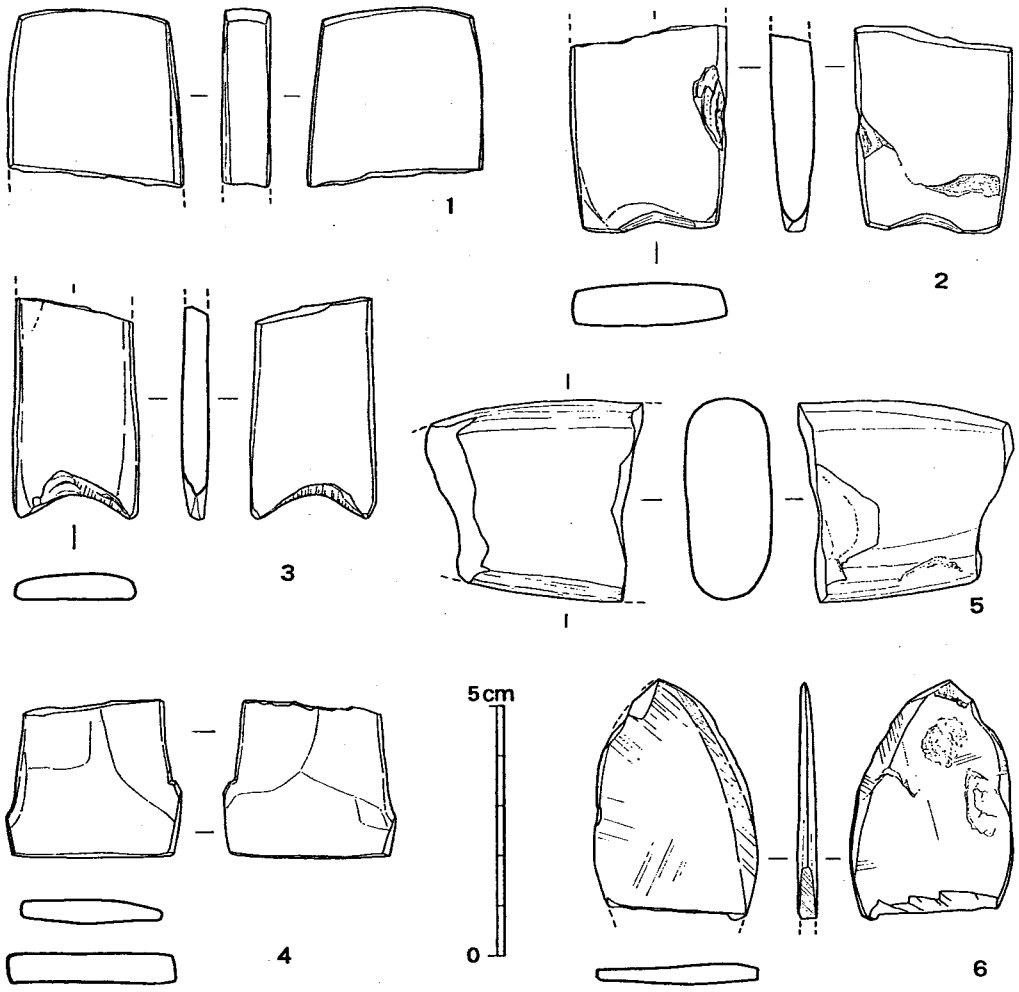


第67—2図　御物石器実測図（1/2）

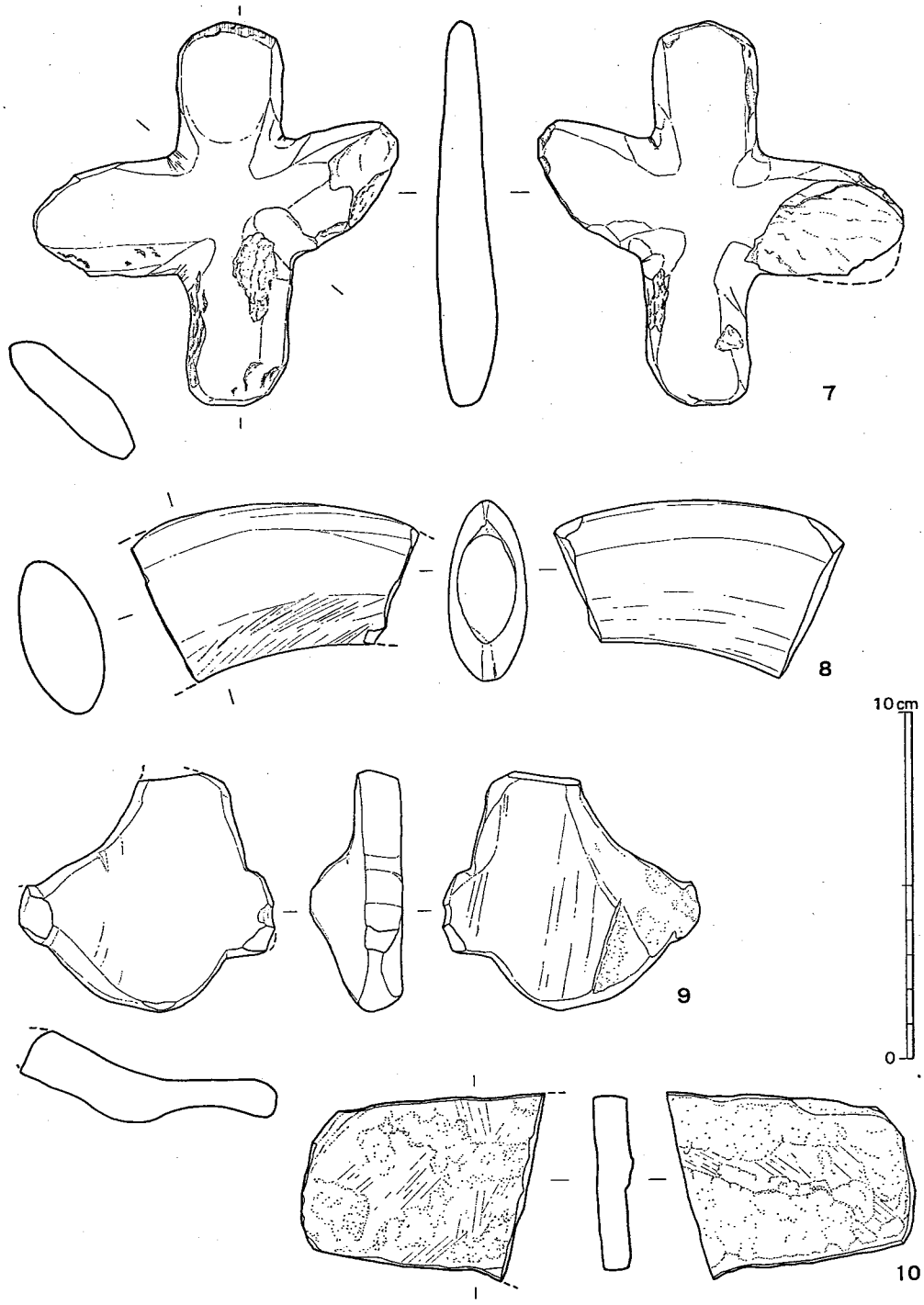
Ⅳ群土器に伴ってW4区第4層中より1点出土した。欠損した資料のため全体の形状については不明であるが，現存長8.2cm，厚さ2.3cmを測る。砂岩のやや硬い石を素材とし，全体はよく研磨されている。幅は反りながら一端に細くなり，断面は長楕円形を呈し，反りの内縁が平坦気味であるのに比して，外縁ではやや尖り気味になる。内縁側の片面には斜行する条線状の擦痕を観察できる。

版状石製品（図版47—2，第68図1）

W3区の地山に埋り込むようにして検出された資料で，砂岩製。下部を欠失するが，扁平な長方形を呈し，各面共丁寧な研磨が施されている。なお二次的な熱を受けており，赤褐色に変色している。一見弥生時代に盛行する扁平片刃石斧の頭部に似るが，周辺よりも体中央部がや



第68図　その他の石製品実測図1（2/3）



第69図　その他の石製品 2 (1/2)

や凹み気味であることからみても，他の用途を考える方が妥当であろう。文様こそみられないもののいわゆる岩版に似た形状を有することから版状石製品と仮称しておく。

浅い抉りを有する板状石製品（図版47—2，第68図2・3，表14）

それぞれB4・B3区の最下層からI群土器に伴って出土した資料で，極細粒の砂岩・硬質の砂岩を研磨によって仕上げられている。両者共に，反対側の端部を欠失しているため全体の形は不明だが，残された端部には浅い抉入を有し，抉入部も研磨されている。2は胴がわずかに脹らみ肉厚するのに比して，3は窄まり気味でやや薄い。また，2は側縁に平坦面を有すが，3は丸味をもつ。

利器様の石製品（図版47—2，第68図4・6，表14）

4は，南北トレンチ2区の第6b層より出土した資料で，Ⅳ群土器に伴う。極細粒の砂岩を素材とし，研磨によって仕上げられているが，小破片のため全体の形状は明らかではない。しかしながら極めて特徴的なのは，平坦面を有す両側縁が下端から一方に8㎜，他方に15㎜の位置までわずかに広がると，段をなして狭まり内彎気味になり，両側縁から表裏両面共に研磨されるため，鏑状の稜線が形成されて，側縁が薄く刃部状になることである。実用に供されたか否かは別として磨製石剣あるいは磨製石鎌としての機能をも考えなければならないであろう。

6は，南北トレンチの第2層より出土した資料で，粘板岩製。一方の端部を欠失するが，一部の凹みを除いて全面に研磨がみとめられる。両側縁には刃部とみられる稜がみられ，数回砥研された形状を呈す。形状は弥生時代に盛行する磨製石庖丁に酷似するが，両側縁の下部に平坦な砥がれた面を有すことから再製品あるいは他の用途も考えなければならない。

4・6の両者は、利器として使用された可能性を有すが，いずれも欠損しているために全体の形状を窺えず，時期的にも充分な検討を要する資料である。類似資料の増加を待ちたい。このため敢えて石器の項で取り扱わず利器状の石製品としている。

十字形石器（図版47—1，第69図7，表14）

南北トレンチ2区の2$^{1}_{4}$a層と第6層との接点になる層位から1点出土している。白雲母片岩を使用し，打欠き整形の後研磨によって仕上げられたとみられる。全体の形状は，十字形というよりはむしろX字形に近く，X字の交差は約10°～20°の傾きをなす。

抉入部の作る角度は，図の左側2ヶ所は90°に近く，右側は70°と110°を測る。抉入部から表裏共に体中央部に向かって内彎する凹みを形状させているが鈍角な抉入部のみ断面形でコ字形の面に磨滅し，他の抉入部では，磨耗しながらも断面に稜を有しており，鋭角のそれでは殊に顕著である。

突出部では，仮に図の上から右廻りにa・b・c・dとすれば，aが薄く凹み気味の断面形をなし，cが厚く肥厚する。aの端部は体中央部に向かう磨耗痕が観察でき，他の端部では不明瞭でcでは先端が鈍になる。bの端部では敲打による剝離をみとめ鈍角な抉り部を更に鈍に

表14　石製品一覧表

〔単位はcm及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
広Z 1	W 4	9b層	凝灰岩質	(12.3)	(8.2)	(4.7)	(311)	御物石器	頭部破片	67-(2)	46
広Z 2	W 4	4 層	砂岩	(8.2)	(5.1)	(2.3)	(86.2)	石刀	片	69- 8	47-1
広Z 3	トレ	2 層	粘抜岩質	(4.8)	3.2	0.4	(8.2)	利器様	片	68- 6	47-2
広Z 4	W 3	11層上面	砂岩	(3.5)	(3.5)	(1.0)	(22.3)	版状	片	68- 1	47-2
広Z 5	A 4	7 層	砂岩	(6.3)	(5.3)	(2.6)	(76.3)		片	70-14	44-1
広Z 6	B 4	8 層	黒曜石	(2.2)	(1.3)	(0.3)	(0.7)	異形石器	片	65-47	47-2
広Z 7	表採		アプライト	7.2	6.8	1.9	130	円盤状	完	70-13	47-1
広Z 8	W 5	9a層	細粒黒雲母花崗岩	(8.6)	(2.2)	(2.8)	(72.3)	柱状	両端欠	70-15	44-1
広Z 9	B 3	9b層	硬質の砂岩	(4.4)	2.5	0.5	(10.9)	浅い抉り	先端欠	68- 3	47-2
広Z 10	A 4	7b層	角閃片岩	(11.0)	(9.6)	(1.3)	(200.3)	円盤状	ほぼ完	70-12	47-1
広Z 11	E 5	9a層	片麻岩	9.4	9.1	1.4	211	円盤状	完	70-11	47-1
広Z 18	B 4	9b層	砂岩	(6.6)	(7.7)	(1.8)	(74)	突起	一部欠	69- 9	47-1
広Z 20	E 5西	9a層	砂岩	(4.8)	(2.0)	(1.3)	(15.3)	—	片		
広Z 21	E 5	9b層	砂岩	(4.2)	(2.1)	(1.2)	(11.2)	—	片		
広Z 22	B 3	9a層	砂岩	(6.3)	(5.5)	(1.0)	(53.6)	—	片	69-10	44-1
広Z 23	表採		硬質の砂岩	(6.6)	(5.0)	(0.5)	(14.7)	—	片	70-16	44-1
広Z 25	E 3	2a層	砂岩	(6.0)	(3.9)	(1.1)	(46.0)	—	片	68- 5	
広Z 27	W 3	9b層	砂岩	(3.3)	(3.2)	(1.2)	(8.0)	—	片		
広Z 31	B 4	9b層	砂岩	(4.0)	(3.1)	(0.8)	(16.5)	浅い抉り	片	68- 2	47-2
広Z 32	トレ2G	6b層	砂岩	(3.1)	(3.4)	(0.6)	(9.4)	利器様	片	68- 4	47-2
広M 11	E 4	9b層	玄武岩	(22.3)	6.0	5.7	(1240)	石棒	ほぼ完	67-(1)	46
広M 15	W 4	9b層	花崗岩	(28.3)	(10.9)	(8.9)	(3290)	石柱	片	67-(1)	46
広J 1	トレ2G	2a層	白雲母片岩	11.0	10.4	1.6	(133)	十字形石器	一部欠	69- 7	47-1

させる形状になる。またdでは端部c寄りの部分から打撃が加わり欠損部を生じさせている。

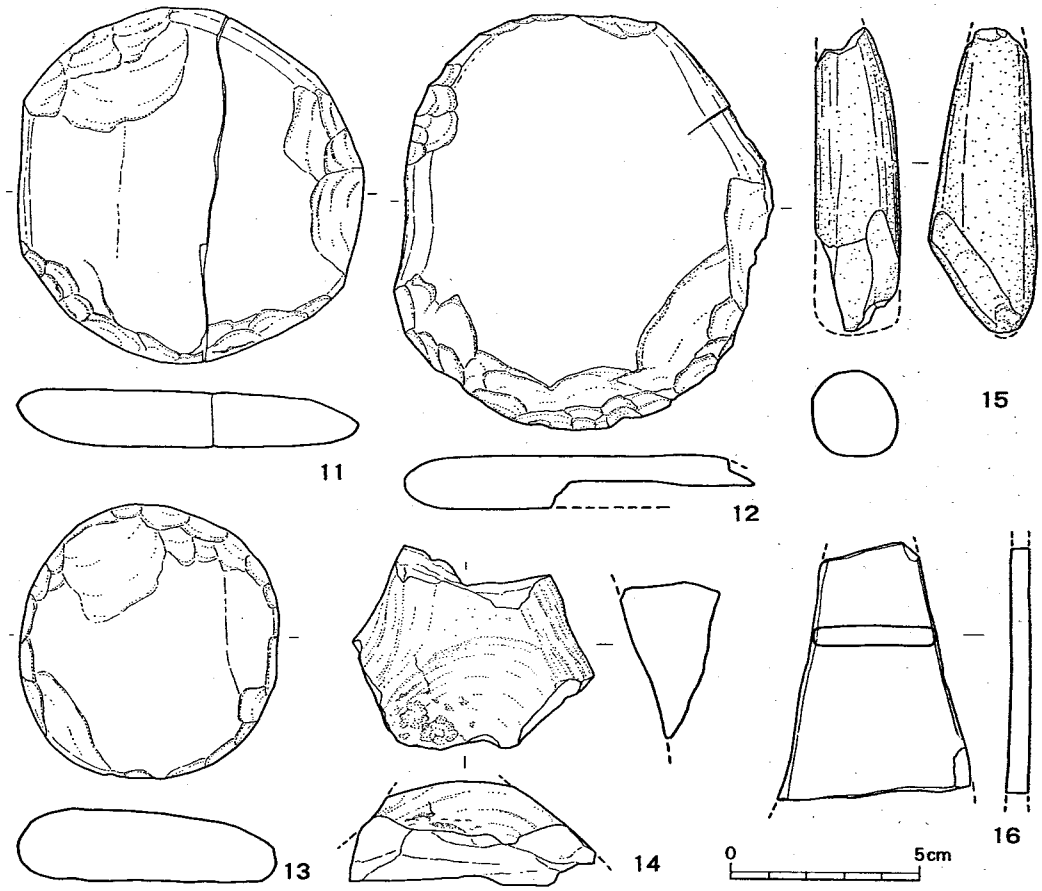
突出部と抉出部との間の周縁は，鋭角を有するab間で稜をもちab間ではa側は磨滅が進んでいるもののb側で稜を保っている。bc間・bd間ではd側に稜の一部をみとめる以外は丸味を帯びている。

石材の性質上，使用による不明瞭な磨耗が多く充分な検討をなしえないが，直接握って使用する用途であればa突出部の使用の可能性があり，第三の物を介したとすれば，aの部分を中心として装着しcを中心とした突き叩く機能を考えなければなるまい。

突起を有す石製品（図版47—1，第69図9）

端部を欠失するものの，3ヶ所の突起を有する資料で，突起部には糸掛けのような施設が造り出される。各面とも研磨によって仕上げられているが，砥石に転用されたのか大きな凹みがつき波打ったような形状になっている。I群土器に伴って出土した。

円盤状石製品（図版47—1，第70図11～13，表14）



第 70 図　その他の石製品実測図　(1/2)

3点あり，いずれも扁平円形を呈し周囲に細かな打裂がみられる。11は片麻岩を使用しているが打裂は全周に及ばず2ケ所に打裂のない磨耗部がみられる。掌に納まる程度の法量を有し，その場合図の下方が刃部として使された可能性を有する形状で，図示した状態では左の掌に納まった状態になり，右の掌の場合正面が掌に直接触れることになろう。Ⅰ群土器に伴う。

12は，角閃片岩を使用し，周縁の2ケ所に打裂のない磨耗する部分を有す。刃部に相当する部分の片面を欠失するがやはり掌に握れる形状である点は11に似る。Ⅲ群土器に伴う。

13は，表採資料で，花崗閃緑岩系のアプライトの扁平な素材を，周縁に打裂を加えることによって円盤形に整えている。前二者に比して小形で重量も軽い。石材の性質によるためか磨耗については観察出来なかった。

柱状の石製品（第70図15）

Ⅱ群土器に伴って出土した資料で，細粒黒雲母花崗岩を用いて，円柱状にしたもので，研磨

によって仕上げられている。両端とも欠失するが，太めの端部側は円柱を斜めに横切る平坦面を有し，平坦面と反対の側縁のなす角度からみて本来の長さとそれほどかけ離れた長さにはならないとみられる。二次的な熱を受けたためか赤色に変色している。

その他の石製品（第68～70図5・10・16，表14）

5は，両端を欠失し，全体の形を窺えないが長楕円形断面を呈す，丁寧に研磨された石製品片である。Ⅲ群土器共伴。

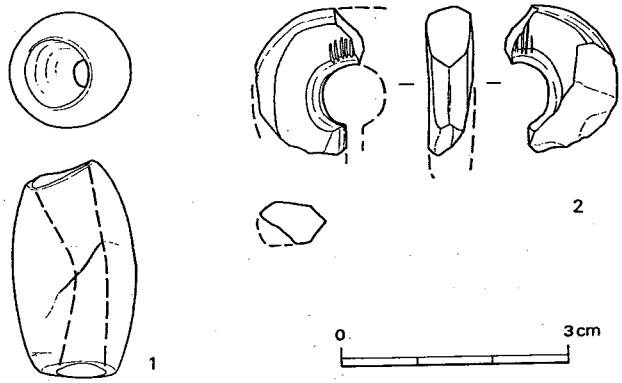
薄い板状を呈し，平面及び周縁に研磨あるいは磨耗痕を有す，用途の不明な製品が2点ある。いずれも欠損するため全体の形状は不明。10はⅢ群土器に伴い，細粒の砂岩の片面と周縁が研磨される。欠失する部分は大きく広がる可能性がある。16は表採資料で，石英玢岩の平坦な片面と側縁に磨耗痕を観察できる。

玉　類（図版46，第71図）

Ⅰ群土器に伴ってW4区南部の最下層から，玉類2点が出土した。

1は，翡翠製のずんぐりとした管玉で，長さ28.2㎜，胴部径14.9～16.5㎜を測り，両端部では約10㎜程度の径になる。上下から穿孔し，孔径は上端部7.5㎜，下端部6.7～7.0㎜で中央部に向かって細くなり3.7～3.8㎜になる。半透明質の淡い緑色の色調で手に持つとやや冷たい感じを与え，重量感もある。完形で10.5ｇを測る。研磨で仕上げられているが，わずかに研磨の及ばない面がある。

2は，蛇紋岩質の石を加工した欠損資料である。9㎜幅の直径3㎝程度になる弧をなしているが一方の端部が尾部を形成しており，8㎜程度の環孔を有す抉状耳飾の破片とみられる。現存値では，長さ19.0㎜，幅14.5㎜，厚さ6.0㎜，重量1.9ｇを測る。研磨によって仕上げられているが，環孔の奥部に相当する表裏面共に条線がみとめられる。緑がかった暗灰色の色調を呈すが，新しい欠損面では半透明な緑灰色を呈す。なお欠損面は尾側がやや新しい欠損であるのに比して中央の欠損面は風化が進んでいる。



第71図　玉類実測図（実大）

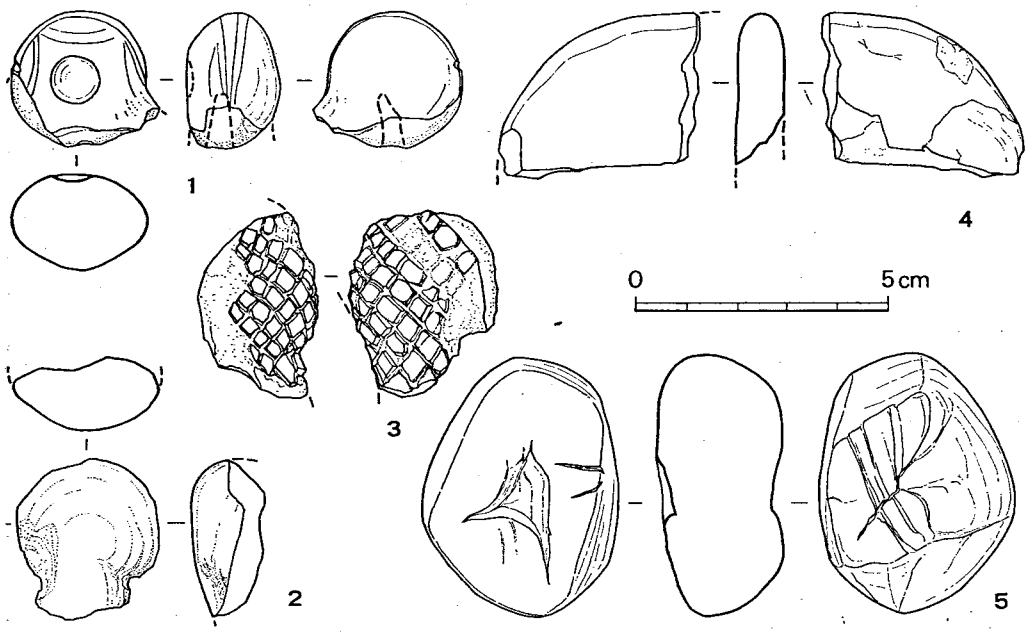
6　土製品（図版48・49，第72～76図）

土　偶（図版48—1，第72図1～3）

土偶の頭部破片とみられる資料が3点ある。1は，B4区の8層でⅡ群土器に伴った土偶頭部破片である。直径2.7cm・厚さ1.9cmの扁球形の片面に0.9cm径の凹点を付け，下半部を胴部に埋め込む種類の例で，接合部で離脱した状態に遺存する。頭部外側縁に沿って3条の細い沈線がめぐり，更に顔面寄りに3ケ所2条の細い弧線を配しており，沈線で頭髪，凹点で目・鼻・口をまとめて表現させている。球形の下面から中央に向かった小さな孔が穿たれる。胴部との接合を強化させるための施設とみるべきであろう。胎土は金雲母粒・花崗岩質細砂粒を若干含むが精良で，焼成良好，明褐色の色調を呈す。

2は，A4区でⅢ群土器に伴って出土した資料で，1の形状に似るが頭部前面を欠失しているが，残された部分では何らの文様等をみとめないことから，1よりも退化した形態とみるべきであろうか。1と胎土・焼成・色調共に似るが，雑な造りである。

3は，調査時の水没によるE2～6区南壁崩落土から検出されたため時期の明確な資料ではないが，Ⅰ～Ⅴ群のいずれかの土器に共伴するとみられる。現存長3.7cm・現存幅3.0cm・現存厚2.3cmを測り，残存する部分では2～5mm間隔に沈線を交差させ格子目状を呈する。頭髪を表現したものであろう。胎土に混入物がほとんどみられず精良で，暗黄褐色ないし暗灰色の色調を呈す。



第72図　土偶・版状土製品実測図　(2/3)

版状土製品（図版48—1，第72図4・5）

4は，欠損品であるが，弧を描く周縁を有し，円形あるいは楕円形の扁平な版状となる例である。全面ナデ仕上げで何らの文様もみとめられない。金雲母粒・細砂粒を含むやや精良な胎土で焼成良好，明褐色を呈す。W4区でⅡ群土器と共に出土した。

5は，版状というには厚い資料であり，2.5cmの厚みを有す。長辺5.2cm，短辺3.9cmの不整形な形状をなすが，片面に三稜形の凹み，反対側の面に皺状の凹みがみられる。金雲母と細砂粒をやや含む胎土で焼成良好，色調暗黄褐色を呈す。W5区でⅣ群土器に伴って出土した。

土製紡錘車（図版48—2・49，第73～76図，表15）

表15に示す総数15点出土し，全てを図示した。2点の破片を除いて全てに中央部の穿孔がみられ，孔の位置が扁平円板のほぼ中央部に位置することから紡錘車としている。

これらの紡錘車は，文様の有無等によって，次の4種類に分類できる。

1類　表裏両方の面に文様を有すもの。1～3・5・6・8。

2類　片面のみに文様を有すもの。4・7。

3類　文様を有さないもの。9～14。

4類　孔径の小さなもの。15。

なお1・2類の，8点に文様が施されているが，文様の種類としては，

a　沈線で孔をとりまく同心円を描き，周縁部にも円弧が逆方向に連続して施される例。1。

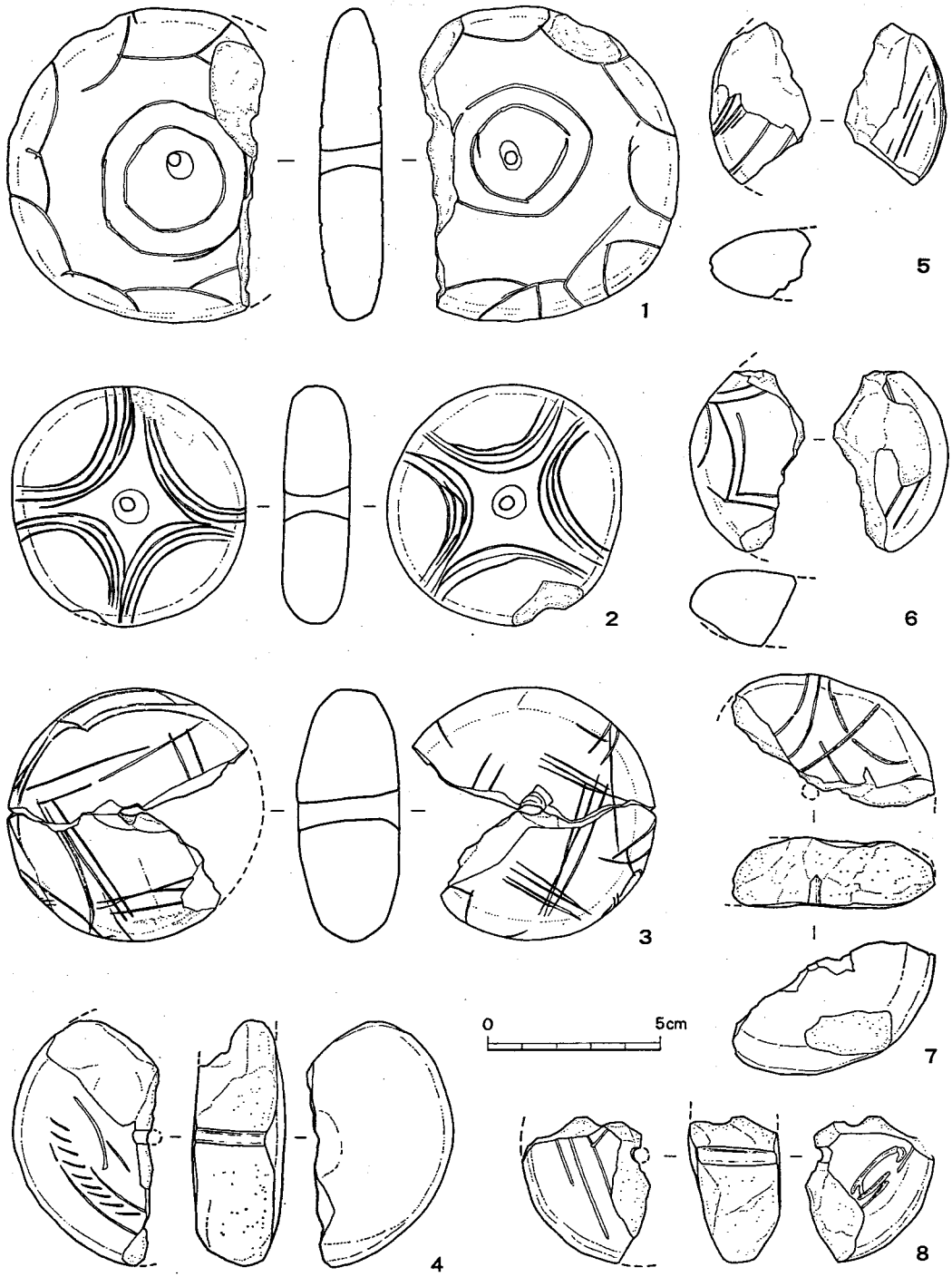
b　沈線の同心円が，孔のまわりに施される例。2・6・7。

c　沈線の同心円が孔のまわりに施され，周縁面にも一条の沈線がめぐる例。5。

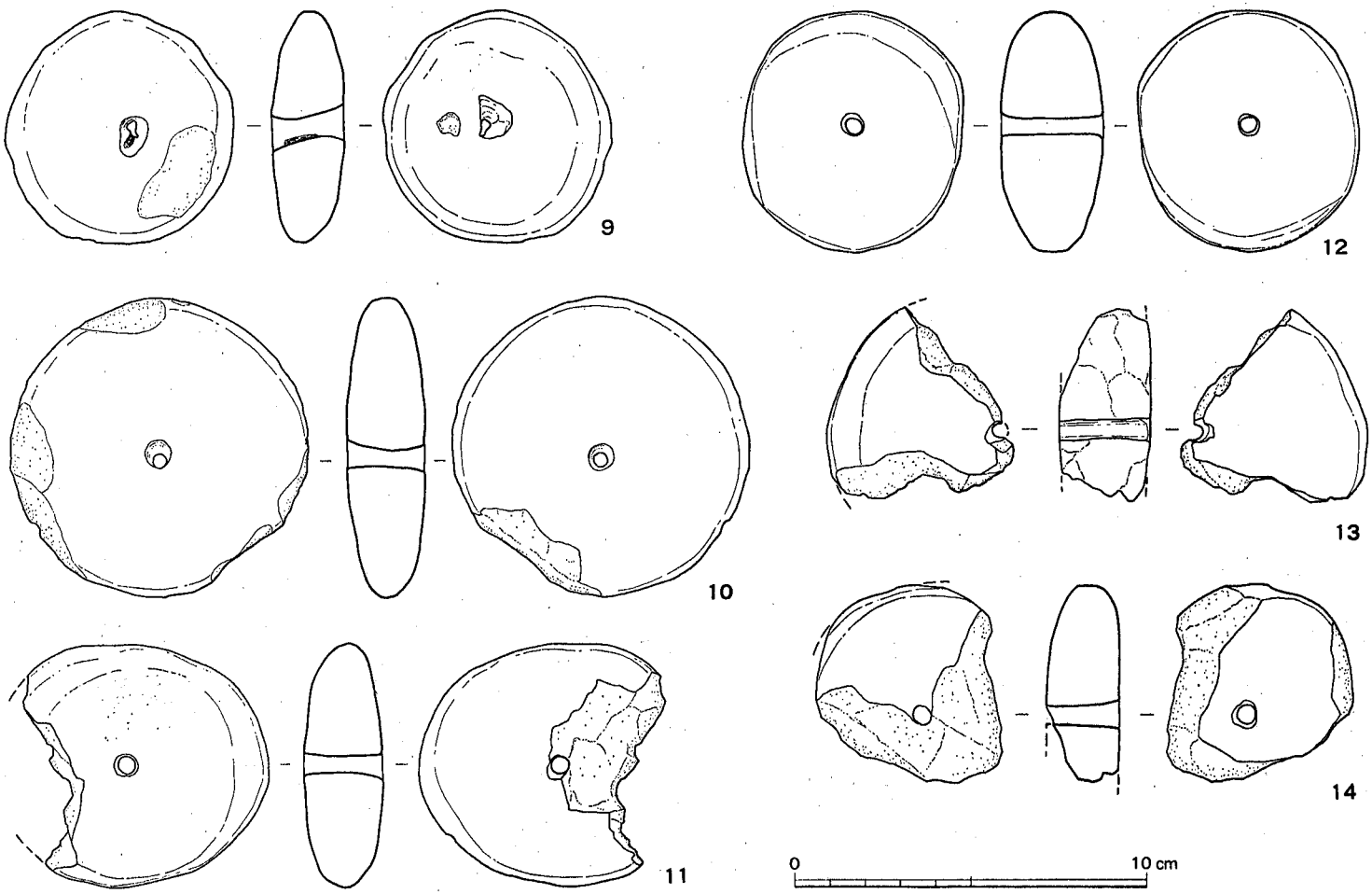
表15　土製紡錘車一覧表

〔単位はcm及びg（　）を付したものは現存値を示す〕

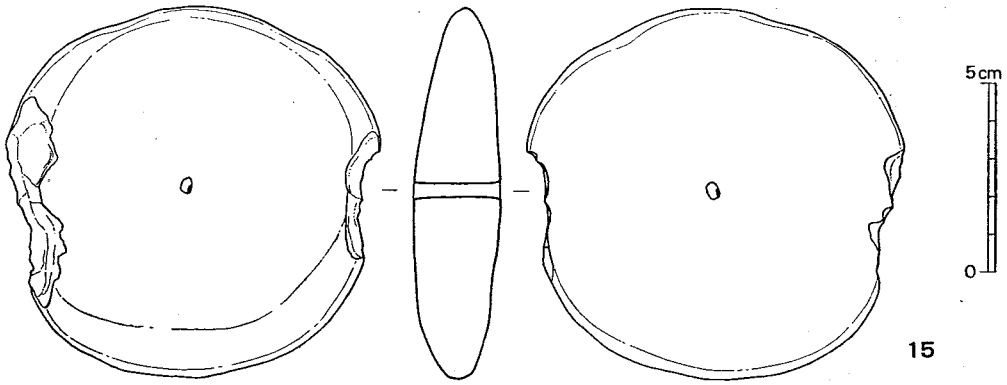
No.	地区	層序	長径	短径	厚さ	最小孔径	重さ	形態	遺存状況	挿図番号	図版番号
D 1	E 4	9a層	7.6	7.2	3.0	0.6	(120)	1d	1/3	3	49-1
D 2	W 4	3 層	6.8	4.3	2.9	0.6	70	3	完	9	48-2
D 3	W 3	7b層	8.5	8.4	2.2	0.4	(111)	3	一部欠	10	48-2
D 4	W 4	7b層	(9.8)	9.8	2.3	0.3	154	4	2ケ所打欠 完	15	48-2
D 5	W 2	7 層	(7.2)	(4.2)	2.6	(0.4)	(54)	2e	1/2	4	49-1
D 6	W 4	7 層	(7.5)	9.1	1.8	0.4	(111)	1a		1	49-1
D 7	表採		7.0	6.8	1.9	0.4	(86)	1b	ほぼ完	2	49-1
D 8	B 3	7 層	(5.8)	(3.8)	2.0	(0.3)	(30)	2b	1/3	7	49-1
D 9	B 4	7b層	(5.3)	(5.4)	2.6	0.5	(40)	3	1/4	13	48-2
D 10	トレ	9a層	(6.0)	(5.5)	2.1	0.5	(50)	3	3/5	14	48-2
D 11	B 4	9b層	6.8	6.2	2.9	0.4	129	3	完	12	48-2
D 12	B 3	9b層	(6.9)	6.9	2.3	0.5	(70)	3	3/4	11	48-2
D 13	W 3	9b層	(4.7)	(3.0)	(2.1)	—	(15.5)	1c	片	5	49-1
D 15	A 4	7 層	(4.6)	(4.4)	(2.2)	?	(21.0)	1b	1/5	6	49-1
D 16	W 2	2b層	(4.4)	(3.9)	(2.6)	(0.4)	(33.9)	1f	1/4	8	49-1



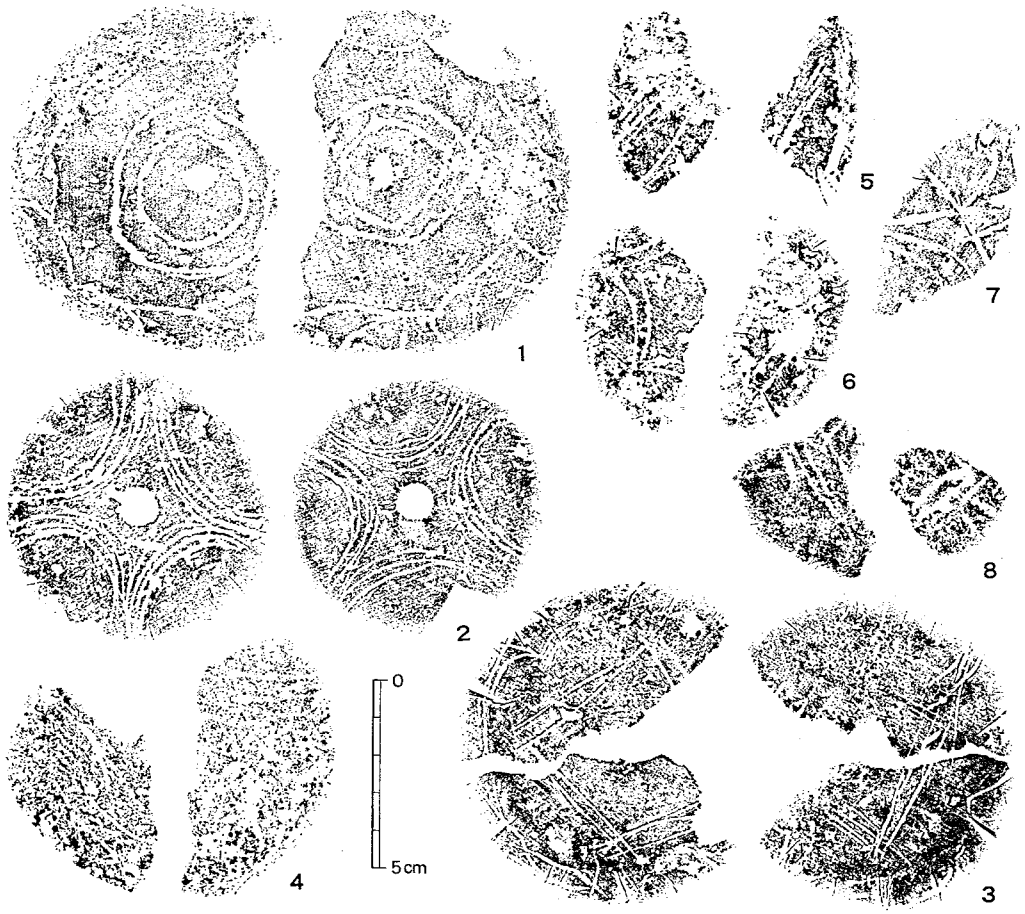
第 73 図　土 製 紡 錘 車 実 測 図 1 (1/3)



第74図　土製紡錘車実測図 2 (1/3)



第75図　土製紡錘車実測図3（1/2）



第76図　土製紡錘車1，2類拓影（1/2）

d　直線の沈線で孔のまわりを囲み，周縁部には円弧を配す例。3。

e　孔をとりまく同心円を描き，空間部を他の文様で充填するもの。4。

f　孔のまわりを直線で囲み，空間部の他の文様で充填するもの。8。

4類は，孔径3㎜で，全体の形状に比して孔が小さいこと，両端部が打欠かれていることから，紡錘車以外の用途を考える必要もあろう。しかしながら，他の資料でも最大値6㎜で4㎜という例が4例あることも無視できない。

土器との共伴関係では，Ⅰ群5・12，Ⅱ群3・10・11・14・15，Ⅲ群1・4・6・13，Ⅳ群7・9，Ⅴ群8，その他2となる。

特徴的なものとして，9，11の胎土中に金雲母粒が多く含まれ，表面がかなり光沢を有すことがあげられ，3・14にも金雲母粒が含まれる。また9の孔には炭化した木質がわずかに残存している点が注目されよう。

7　動　物　遺　体

大溝内では炭化物・焼土等と共に動物遺体の出土がみられた。Ⅰ群土器共伴のE4・W3区9b層・A4区9b層では鳥管骨片・獣骨片がみられ，Ⅲ群のW3区7層にマダイ椎骨・タイ類歯・棘骨・鳥管骨片・獣骨片，W4区7層にカニ類の爪片・鳥管骨片・イノシシ中足骨片，B3区7b層に獣骨片等がみられる。またⅣ群のE3区3層にタイ類歯・獣骨片，E4区の6b層にマダイ右下顎骨がある。いずれも小破片で脆弱な資料が多い。中には火を受けた例もある。なお，W4の地山下にもマダイ椎骨・タイ類歯と獣骨片が含まれていた。

8　花　粉　分　析

第1次調査時に花粉分析等供試資料として，南北トレンチ南壁のE3区・E5区2ケ所で5㎝単位に下から上にそれぞれ15点の土壌を採取した。また第2次調査時には畑中健一教授によってA3区南壁とA3区地山下の土壌が採取された。両者の資料は畑中教授によって分析が行なわれたものの，これらの試料からは全く花粉を検出し得なかった。

大溝の堆積土は，木炭を多く含んで黒っぽく見えるものを含めて，幾つかの黒色系色調を呈す例がある。しかしいわゆる低湿地の泥炭質堆積土ではなく，砂質で空間の多い堆積土であるために花粉が残存しないのであろうか。

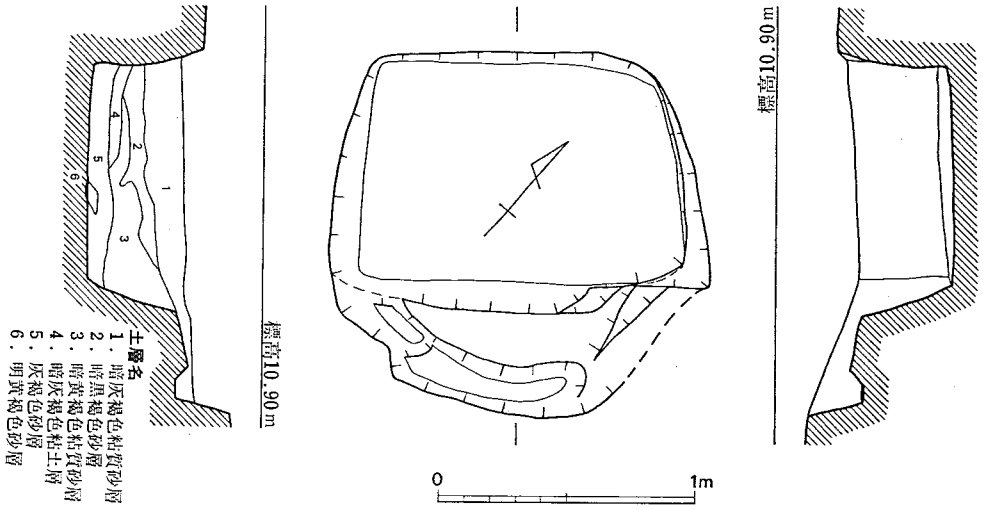
教授は，地形的にみて小高い居住地では花粉の残存する可能性は少なくて，このような立地の場合空気に触れ易く，花粉が酸化し易いことに起因するとされる。広田遺跡の場合もこのような小高い立地に近く，花粉が酸化されてしまったとみられる。

(2)　小　　竪　　穴（第77図）

大溝の東肩部に位置するが，大溝断面上層図c—d間の西端に小竪穴の埋土がみられる。これによると大溝第2a層上面から切り込まれており，上面の標高は10.85mを測る。

小竪穴を確認出来た面での上縁形は不整形な方形を呈し，一辺約1.5 mを測る。南東部は深く掘り込まれておらず，標高約10.55m位で平坦面となる。これに対し北西側では更に約0.4m掘り込まれ，底面形はN 49° Eに長軸をもつ不整方形のプランとなる。底面の長辺1.1～1.3 m，短辺0.85mを測り，明黄褐色の粘質砂の地山に掘り込まれているものの壁面と共に特に竪緻な状況はみとめられなかった。

埋土の堆積状況は図示する如くであるが，おおむね南東方向から埋没した状況をみとめる。

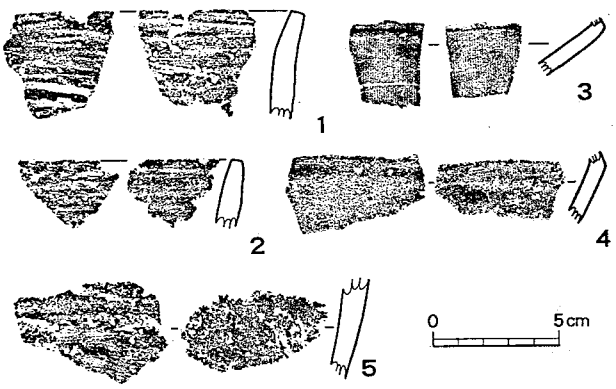


第77図　小竪穴実測図　(1/30)

埋土中の下位から，縄文土器の細片と円礫2個が出土した以外，何らの出土もみとめられなかった。

出土土器（第78図）

約30余点の縄文土器片が出土したが，いずれも細片で全体の器形を知り得る資料はない。特徴を有する資料5点のみを図示する。



第78図　小竪穴出土土器拓影　(1/3)

1・2は粗製条痕文土器の口縁部破片で，内外面共に条痕を施し，口唇上面をナデで平坦にさせている。共にアナダラ条痕で，胎土に細砂粒を含む気泡を有すが焼成良好。2には若干の金雲母も胎土に含まれる。

3・4は，精製の浅鉢形及び鉢形土器の屈曲部破片で，細砂粒・角閃石粒を若干含む精良な

胎土を用いて磨研しているが風化が進んで磨研痕は明瞭ではない。

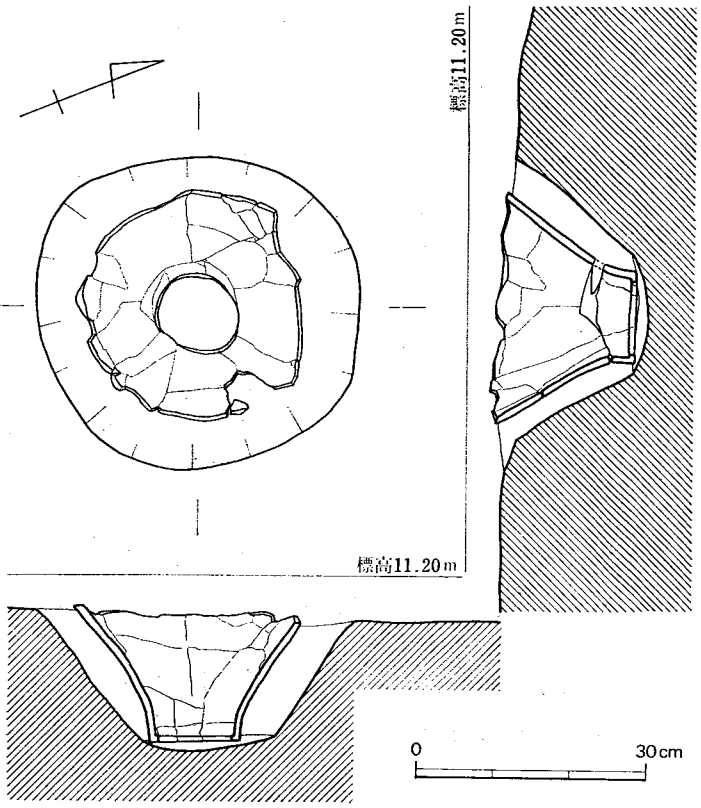
5は無文の土器片で，細砂粒・若干の金雲母粒を含み気泡もみとめられる。外面はやや粗いナデを施している。

これらの土器片のみでは時期を明確にしえないが，精製土器の屈曲に稜を有すこと，大溝第2a層上面から切り込まれている遺構であることから，大溝V群土器の時期を朔ることのない時期が考えられる。

(3) 埋　　甕（図版50—1，第79図）

小竪穴の東北東18mの位置に占地する。再堆積土直下に発見されたが，周辺には何らの遺物の出土がなく，当初全く遺構・遺物がないと判断していた地点でもある。なおこの遺構を確認した後に周辺を精査し，黒っぽい色調を呈する部分を掘り下げてみたが，色調の染まり込んだものや，木根等を伝った浸み込みと思われるものばかりで遺構とは判断できない。

埋甕は上部を削平されているため，標高11.15m位で，土壙は直径42cm程度の不整円形プランを呈し，甕は胴上半部を欠失する。残された部分の形状では，甕は土壙の中央に，底部を下にして据え立てており，底部中央は大きく打欠穿孔される。なお甕は西へ約5°の傾きを有して据えつけられるが，台地の傾斜に影響されたのであろうか。



第79図　埋甕実測図（1/10）

土壙は甕底部よりわずかに広い程度で約20cmの深さが残り，底面は直径約15cmの不整円形プランを呈す。甕内部の堆積土中には何らの遺構も検出できなかった。堆積土は採取したが燐分析等は未実施である。

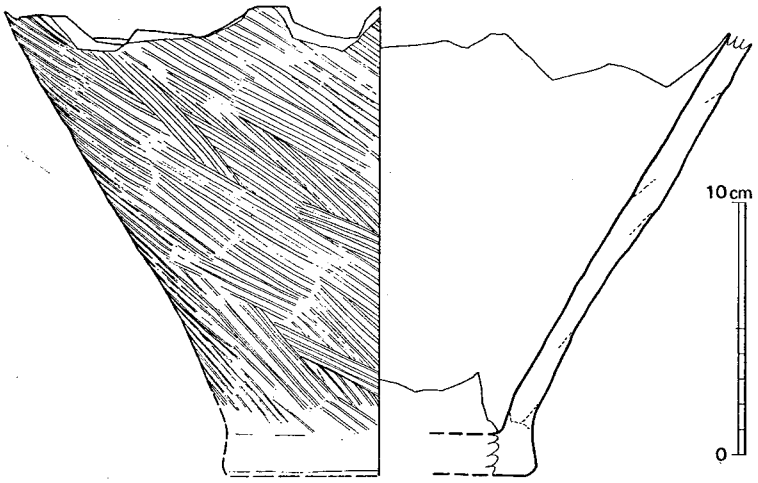
埋甕使用土器（図版50—2，第80図）

器高の現存値18.6cm・底径12.4cmを測る甕形（深鉢形）土器で，残存する胴部最大径29.2cm

に直線的にふくらむ器形を呈す。貝殻細片・植物片・花崗岩質砂粒を混入させる器壁は1㎝前後を有し，外面を左上りのアナダラ条痕・内面をナデ調整で仕上げている。

焼成は良好であるが，部分的に脆弱な部分があり，胴上部の脆い部分と下位の脆い部分は対角線の位置になる。

底部平坦面は穿孔され，調査時においても底面の破片すらも残存しないことから埋置以前に大きく穿孔されていたものとみられる。（小池　史哲）



第 80 図
埋甕使用土器実測図
(1/3)

3　広田遺跡大溝出土の種子類について　(図版51)

福岡県糸島郡二丈町吉井字広田にある縄文時代後・晩期の広田遺跡0区より，小池史哲氏によって採集された植物種子類の同定を行った。その結果は次のようであった。

後期末（三万田—御領期）の植物遺物（1～5）。すべて木炭化している。

1. 広田0区，W5東9b層——焼けて木炭化したカシ属（*Quercus*. 所謂ドングリ類）の子葉1個。完全で1.7×1.0㎝，先端はややいぼ状。2枚の子葉にはやや大小がある。
2. 広田0区，W4，9b層——カシ属の木炭化した子葉の破片4個。うち1個は明らかに異形子葉。
3. 広田0区，A4，9b層——カシ属の木炭化子葉の破片1個。著しい異形子葉である。仝上子葉半分（1枚）。これは上下に扁圧され，大きさは1.2×1.4㎝。
4. 広田0区，E5，9b層—カシ属の木炭化子葉で，大小の破片15個あり。またやや完全なもの1個は，丸みあり異形子葉で，イチイガシ（*Quercus gilva*）かもしれない。この他，マメ科の木炭化子葉，破片2個，1枚の子葉1個，やや完全なもの2個あり。5×3㎜程度の大きさで臍点はよく保存されず，溝状にへこむのみであるが，アズキかもしれない。る。・クス

5. 広田０区，Ｂ４，９ｂ層――木炭化したカシ属の子葉の半分（子葉１枚）のもの１個。1.5×1.5㎝程度の丸いもので，頂端には明らかな幼根のあとがある。かたちからいって或は，クヌギかアベマキかもしれない。同様のものの破片３個。普通のたてに長いカシ属の木炭化子葉の破片５個。これは種迄の同定はできなかった。

縄文時代後期後半の西平期の可能性のたかい植物遺物（６～８）。木炭化しておらず，量も多い。

6. 広田０区，Ｗ４，上部バフン層。――・カシ属（アカガシ亜属）（*Cyclobalanopsis*）―成熟した殻斗７個，未熟の幼果75個余。堅果の破片11個，小破片多数。木炭化した子葉小破片２個。小葉片２個。殻斗から見るとイチイガシに似ているが，種迄の同定は出来なかった。・ムクノキ（*Aphananthe aspera*）―種子１個。・クスノキ（*Cinnamomum camphora*）―種子の破片10片。・アブラギリ（*Aleurites cordata*）―種子の破片30片余。独特の割れ口をもっている。・アカメガシワ（*Mallotus japonicus*）―種子破片７片。・ホルトノキ（*Elaeocarpus decipiens*）―レンズ形の内果皮片９片。・ブドウ属（*Vitis* sp.）―種子の背面の破片１個。・ウドカズラ（*Ampelopsis leeoides*）―種子１個。・サカキ（*Cleyera ochnacea*）―種子27個。・サクラ属（*Prunus* sp.）―内果皮１個。・センダン（*Melia azedarach*）―内果皮１個。側面の１ケ所が，動物（ネズミ？）によってかじられている。表面に肉座菌が多くついている。・ムクロジ（*Sapindus mukrossi*）―幼果及び不実果片，合計15個。非常に若い未熟の種子７個。熟果は１つもない。・カラスザンショウ（*Fagara ailanthoides*）―種子19個。・ハマセンダン（*Evodia glauca*）―種子５個。・ミズキ（*Cornus controversa*）―内果皮１個。・クマノミズキ（*Cornus brachypoda*）―内果皮破片４個。・エゴノキ（*Styrax japonica*）―内果皮破片２個。・チシャノキ（*Ehretia ovalifolia*）―種子１個。この他，わからないものが１個あり。また冬芽が53個余あり。この中にはカシ属の芽は多くなかった。

7. 広田０区，Ｗ３，下部バフン層――・アカガシ亜属―幼果１個。・クスノキ―種子17個。・クス科―径５㎜程度の球形の種子15個で，皆多少ともわれている。アオモジかもしれない。・アブラギリ―種皮の破片２個。うち１個は大形の破片で，先端部近くに小さいが鋭い動物のかじった跡がある。・アカメガシワ―種子18個。・ホルトノキ―完全な内果皮２個（うち１個は動物にかじられている），破片４個。・サカキ―種子１個。・センダン―内果皮の完全なもの９個。大小あり，長さ７～13㎜。多くかじられている。破片２個。・カラスザンショウ―種子２個。・クマノミズキ―内果皮３個。・エゴノキ―内果皮，破片も含め６個。この他，葉の表面に生じた虫こぶが２個あった。

8. 広田０区，南北トレンチ４Ｇ，下部バフン層――・アカガシ亜属―殻斗12個。堅果２個，破片多数。幼果55個余。殻斗や幼果の状態をみるとイチイガシのようにみえる。しかし，完全な２個の堅果をみると，細長く先端がいぼ状で，下部の臍が著しく小さい点は，ウバメガシ（*Quercus phillyreoides*）にもにている。２種あったとも当然考えられる。・クスノキ―種

皮破片７個。・ムクノキ―種子の小破片１個。・アブラギリ―種子の大きな破片11個。・アカメガシワ―種子１個。・ホルトノキ―完全な内果皮１個（側面の１ケ所をかじられている），¼程度の破片１個。・サカキ―種皮小破片１個。・センダン―内果皮４個。このうち１個は側面３ケ所を，他の１個は側面２ケ所を動物によってかじられ穴があいている。・ムクロジ―幼果及び不実果15個・幼種子３個・カラスザンショウ―種子３個。・クマノミズキ―内果皮１個。エゴノキ―２個対をなし平面のある内果皮のその平面の部分の破片１個。・コケ（蘚類）―１片。

晩期初頭（御領―大石期）の植物遺物（９～11）。木炭化している°

9. 広田０区，Ａ３，９ｂ層，――木炭化したカシ属の子葉の破片３片。

10. 広田０区，Ｗ３，７層――木炭化したしたカシ属子葉７片。

11. 広田０区，Ｗ５，７層――不完全な木炭化子葉（カシ属），半分。幼根なども保存されず，よくわからない。

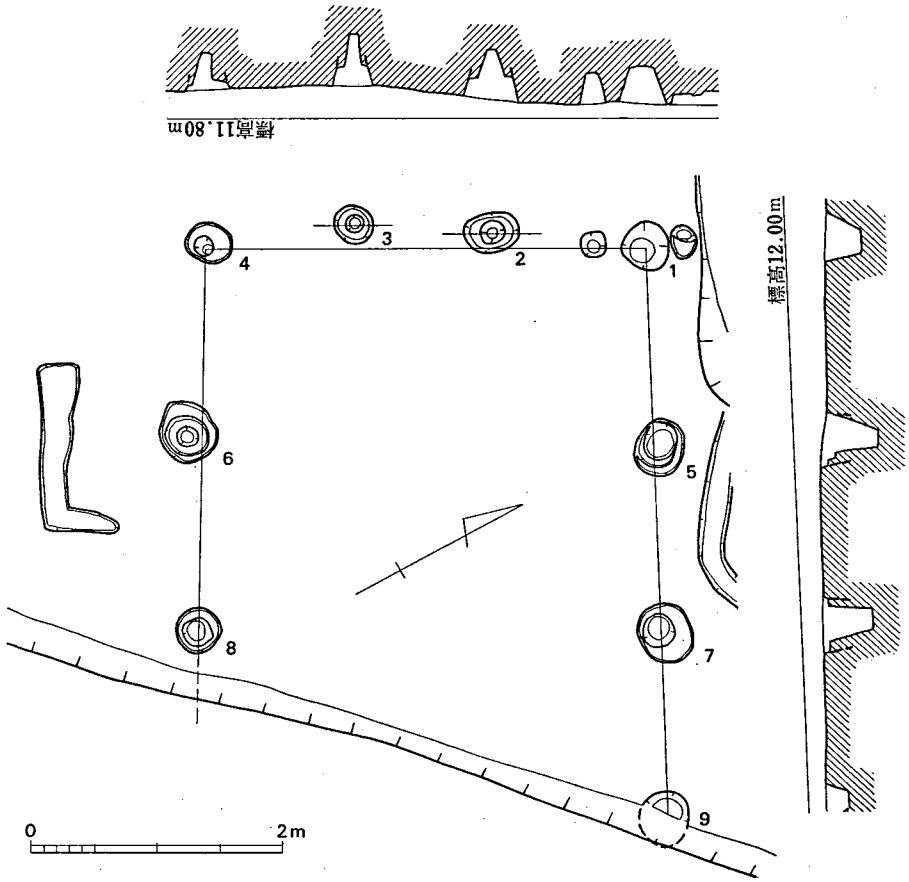
以上３時期にわたる11個の試料を同定したが，後期末（三万田―御領期）のもの１～５と，晩期初頭（御領―大石期）のもの９～11とは，焼けて木炭化した種実類で，そのほとんどは，カシ属の木炭化子葉であり，保存がよくなく同定もむつかしかった。４のＥ５区９ｂ層のものにみられたマメ科で，アズキの様にみえるものは注目に値する。この様な試料はよく似た時期の福岡市四箇遺跡からも出土している。後期後半の西平期の可能性のある植物遺物（６～８）は，所謂バフン層中のものであり，自然遺物らしく，人為の証跡はみられない。木炭化せず保存はよく，量も種類も多い。このバフン層からは，３ケ所の試料が採集されているが，皆似たような内容で，６が種数もっとも多く，約18種あり，７・８のものはすべて６と共通である。バフン層の上部と下部とでも差は認められない。西南日本暖帯の照葉樹林を構成する樹種で，特にホルトノキ・ウドカズラ・ハマセンダン・チシャノキなどは，いかにも九州らしい暖地性のもので，当時相当の森林が遠くないところにあった事を示している。（粉川　昭平）

4　歴史時代の遺構と遺物

０―１地区の東半部では，弥生土器・土師器・須恵器片等が混在する黒褐色の遺物包含層がみられ，遺物包含層を除去するに従って柱穴様ピット・土壙が検出できた。このうち柱穴様ピットの大半は建物の柱穴としてまとまるものであるが，既に重機を用いた試掘溝によって消滅した柱穴もある。調査区域内で検出し得た遺構は建物６棟と土壙１基で，第５図に配置を示す。

(1) 建　　物　　群（図版５～55，第81～86図，表16～21）

検出できた６棟の建物は重複することなく配置している。建物番号は検出し得た順に付して



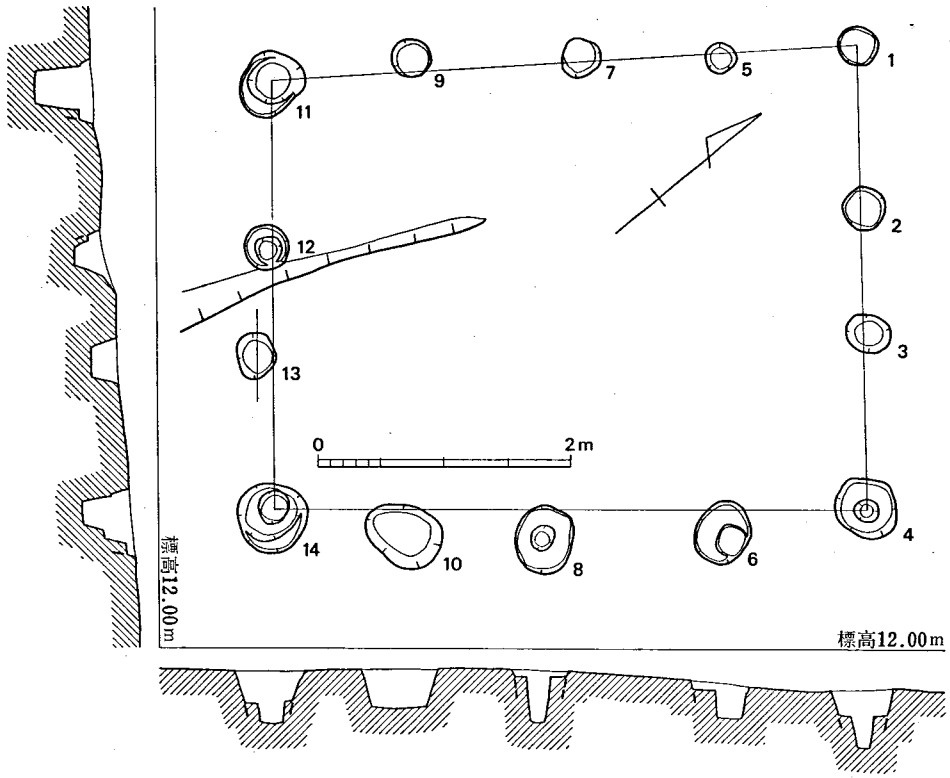
第81図　1号建物実測図 (1/60)

表16　1号建物計測表　　(単位cm)

3間×3間+α	梁間柱間	梁間間	N62°40′W	桁行柱間	桁行間
P1 \ P2	120	—	P1 P5	155	—
P2 P3	110	—	P5 P7	148	—
P3 \ P4	120	358	P7 P9	150	—
P5 — P6	—	366	P4 P6	150	—
P7 — P8	—	370	P6 P8	155	—
平均	116.7	364.7	平均	151.6	—

P	深さ	長径	短径
1	28.6	37	37
2	42.9	44	32
3	42.0	32	30
4	32.1	36	31
5	45.8	45	39
6	49.9	50	44
7	38.7	48	42
8	63.2	36	34
9	21.7	—	—
平均	40.54	41	36.1

P6—Y・H　P8—Y・O　P9—Y



第82図　2号建物実測図　(1/60)

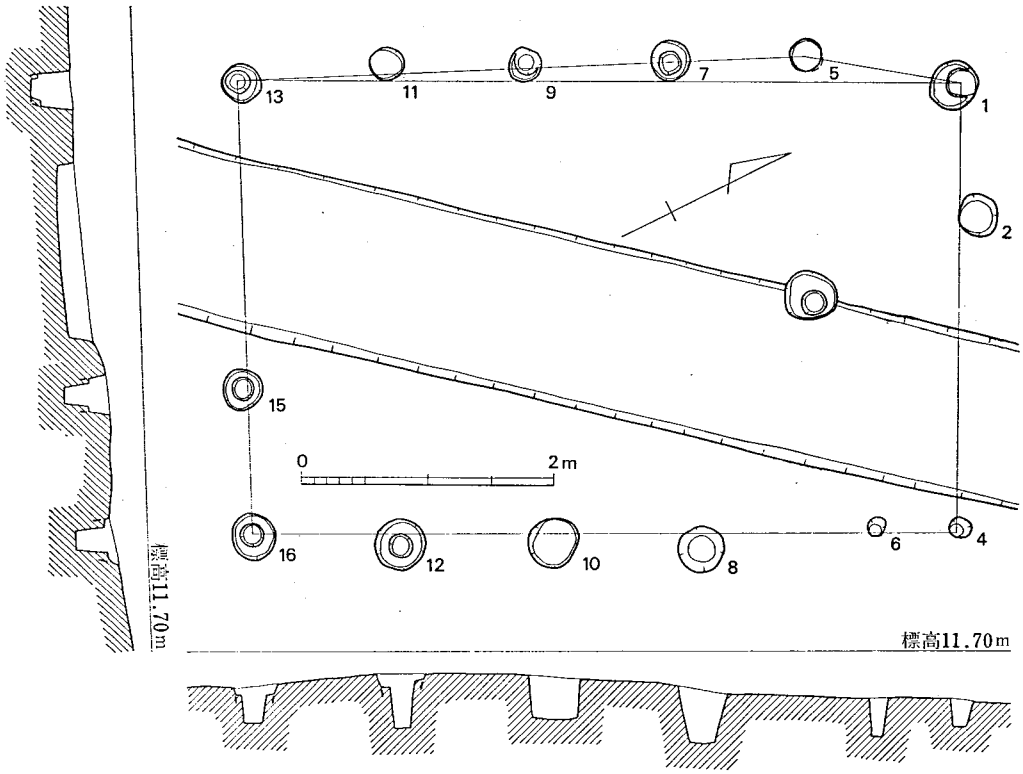
表17　2号建物計測表　(単位cm)

3間×4間	梁間柱間	梁間間
P1＼P2	128	—
P2＼P3	101	—
P3＼P4	140	369
P5 — P6	—	383
P7 — P8	—	383
P9 — P10	—	380
P11＼P12	135	—
P12＼P13	84	—
P13＼P14	121	340
平均	118.17	371

N38°20′E	桁行柱間	桁行間
P1＼P5	108	—
P5＼P7	112	—
P7＼P9	121	—
P9＼P11	113	464
P2 — P12	—	470
P3 — P13	—	485
P4＼P6	111	—
P6＼P8	149	—
P8＼P10	110	—
P10＼P14	106	470
平均	116.25	472.25

P	深さ	長径	短径
1	6.7	31	31
2	9.5	35	33
3	29.0	35	30
4	50.5	52	47
5	14.7	24	24
6	29.5	50	43
7	40.3	32	32
8	42.1	53	45
9	45.1	31	30
10	32.4	63	47
11	50.6	55	44
12	24	36	35
13	20.3	37	32
14	41.9	55	55
平均	31.19	42.07	37.71

P2—O　P4—Y　P6—O　P7—Yb・O　P10—Yb・H・O
P12—Y　P13—O　P14—Yb・O



第83図　3号建物実測図（1/60）

いるがおおむね西南方から東北方に向かう。なお建物群は南側と東側で更に広がる可能性を有すが，南側は用地外，東側は農道敷のために調査し得なかった。

各建物の規模等は計測表で示す。また各柱穴から縄文土器小片・弥生土器小片・土師器小片・黒曜石片・安山岩片等が出土しており，各計測表の下部にそれぞれJ・Y（aは前期・bは中期）・H・O・Aの略号で表わす。

1号建物（図版53—1，第81図，表16）

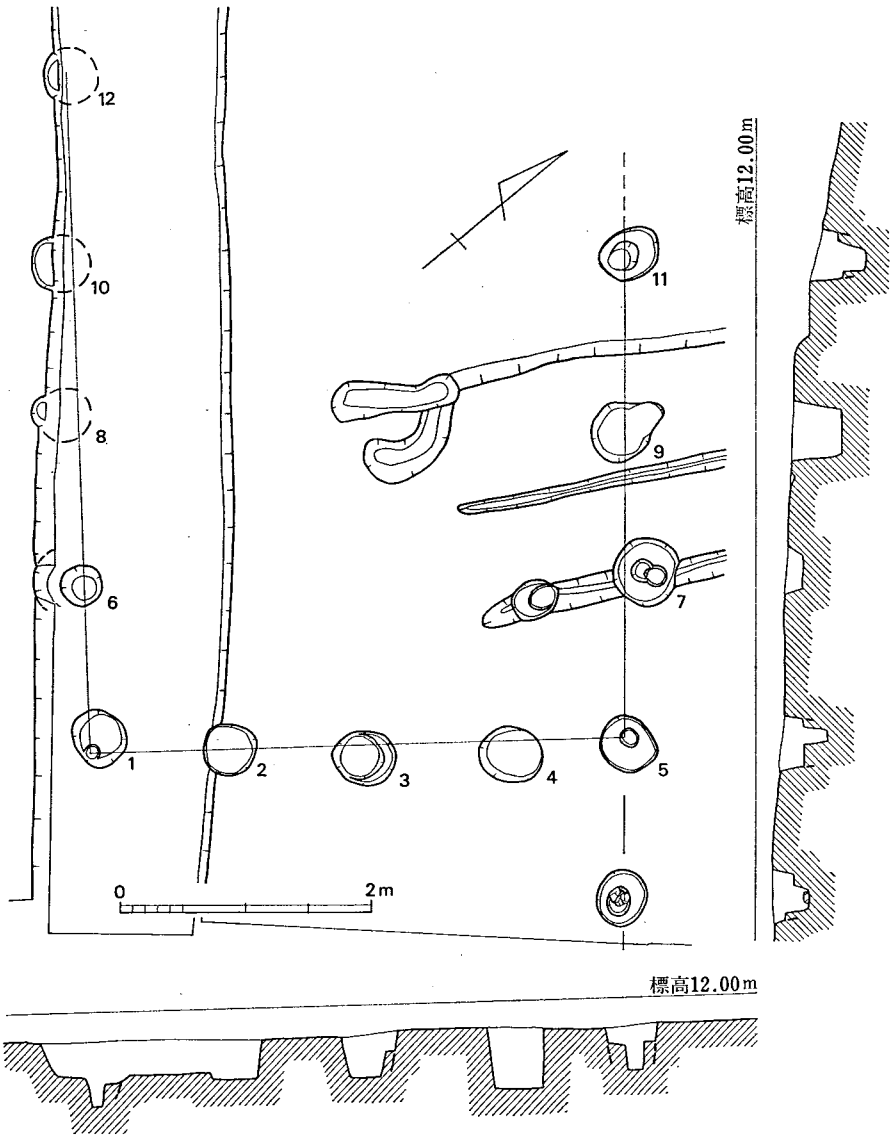
東部が調査区域外に及ぶため全体の規模は不明であるものの梁行3間を有す。柱穴としたピット以外に幾つかのピットが群がるが性格は不明である。P6に土師器小皿細片が出土している。

2号建物（図版53—2，第82図，表17）

1号建物の北東方に位置する3間4間の建物で，桁行方向をN38°20′Eにとる。P10に土師器椀小片が出土した。

3号建物（図版54—1，第83図，表18）

1号建物の北方・2号建物の西方に位置し，P3とP14を試掘溝で消失しているが，3間，



第84図　4号建物実測図（1/60）

5間になる建物であるP1～P14以外に2穴あるが関係は不明。P16から土師器細片が出土した。

4号建物（図版54—2，第84図，表19）

耕地開削で北西部を削平されており，試掘溝によって西部を切られてしまったが，試掘溝壁面にかろうじて柱穴を検出でき，4×4間になる建物とみられる。これらの柱穴以外に幾つかのピットが存在しP13には礫のまとまりをみる。P1・P4・P5・P7・P11に土師器片が

表18　3 号 建 物 計 測 表　（単位cm）

3間 × 5間	梁間柱間	梁間間
P 1 \ P 2	108	—
P 2 \ P 3	(125)	—
P 3 \ P 4	(125)	358
P 5 — P 6	—	380
P 7 — P 8	—	388
P 9 — P10	—	382
P11 — P12	—	380
P13 \ P14	(122)	—
P14 \ P15	(122)	—
P15 \ P16	116	360
平　均	112	374.67

N24°40′E	桁行柱間	桁行間
P 1 \ P 5	124	—
P 5 \ P 7	110	—
P 7 \ P 9	115	—
P 9 \ P11	110	—
P11 \ P13	120	573
P 2 — P14	—	(582)
P 3 — P15	—	(567)
P 4 \ P 6	66	—
P 6 \ P 8	138	—
P 8 \ P10	116	—
P10 \ P12	120	—
P12 \ P16	118	559
平　均	113.7	566

P	深　さ	長　径	短　径
1	34.7	39	36
2	44.2	40	29
3	—	—	—
4	23.4	17	17
5	72	26	25
6	32.7	17	14
7	—	32	31
8	45.6	38	36
9	—	28	27
10	34.7	41	39
11	26.9	28	27
12	44	41	40
13	32	32	31
14	—	—	—
15	35.1	32	32
16	32.2	37	35
平均	38.13	32	29.93

P 1—Y　P 8—Y・A　P10—Y・O　P11—木炭　P12—Y
P15—J　P16—Y・H

表19　4 号 建 物 計 測 表　（単位cm）

4間 × 4間	梁間柱間	梁間間
P 1 \ P 2	110	—
P 2 \ P 3	104	—
P 3 \ P 4	124	—
P 4 \ P 5	88	426
P 6 — P 7	—	444
P 8 — P 9	—	(438)
P10 — P11	—	(440)
平　均	106.5	435 (437)

N52°W	桁行柱間	桁行間
P 1 \ P 6	132	—
P 6 \ P 8	(140)	—
P 8 \ P10	(120)	—
P10 \ P12	(150)	(542)
P 5　P 7	133	—
P 7　P 9	113	—
P 9　P11	140	—
平　均	129.5	—
P 5　P13	130	—

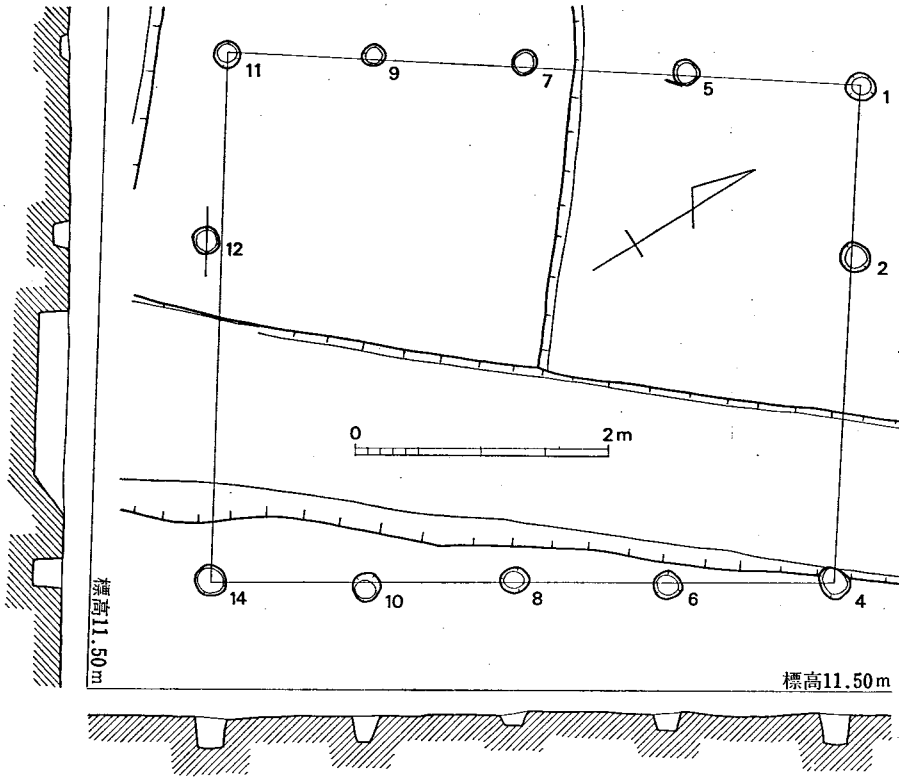
P	深　さ	長　径	短　径
1	(28.5)	46	42
2	32.5	42	42
3	31.5	51	43
4	51.2	51	44
5	36.8	47	41
6	55.6	—	—
7	55.7	55	50
8	—	—	—
9	39.2	60	46
10	—	—	—
11	42.2	50	40
12	—	—	—
平均	36.13	50.25	43.5
13	28	45	38

P 1—H　P 3—Y・O　P 4—Y・H　P 5—Y・H
P 7—Y・H・O・A　P 9—Y a・Y b・A　P11—Y・H・O
P13—Y b・O

出土している。2号建物の北東方に位置する。

5号建物（図版55—1，第85図，表20）

2号建物の北方，4号建物の北西方に位置する。試掘溝によってP 3・P13を消失するが，3間4間になる建物である。柱穴内からは何らの遺物も出土しなかった。



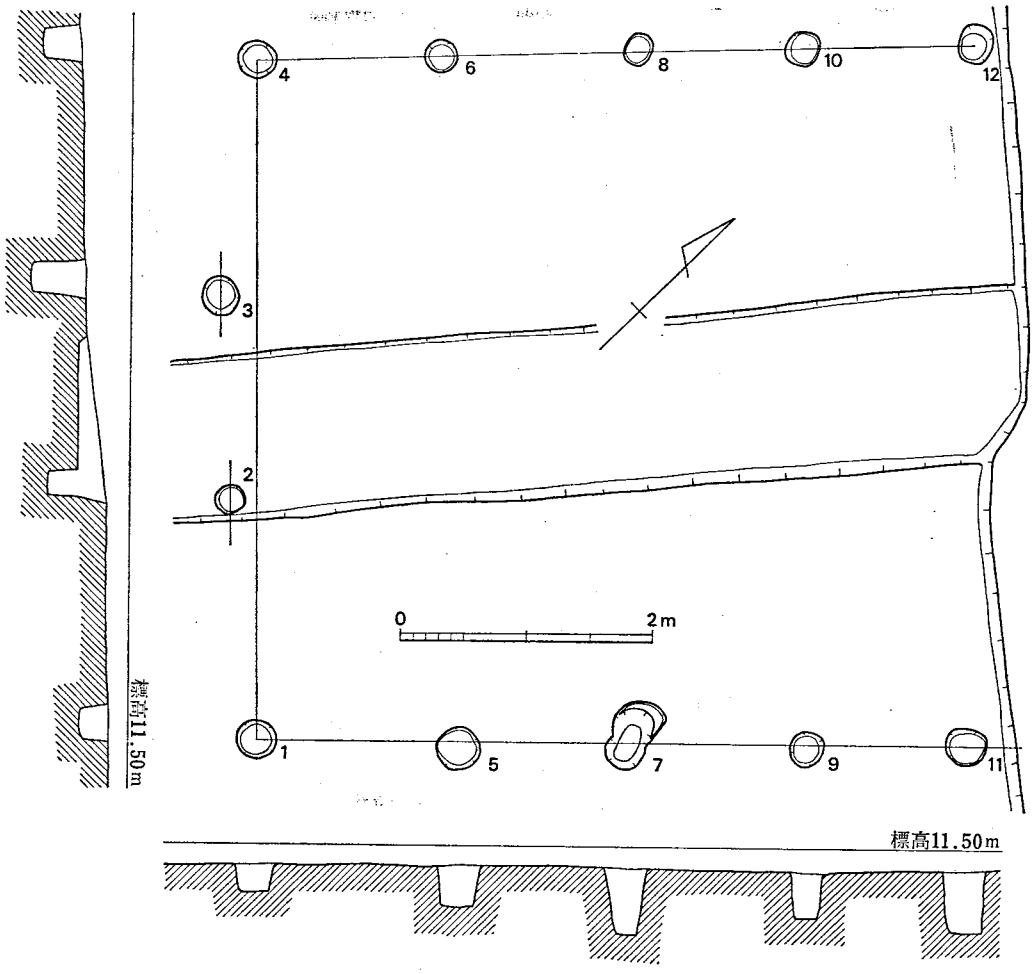
第85図　5号建物実測図　(1/60)

表20　5号建物計測表　(単位cm)

3間 × 4間	梁間柱間	梁間間
P1 \ P2	136	—
P2 \ P3	(130)	—
P3 \ P4	(130)	397
P5 — P6	—	405
P7 — P8	—	414
P9 — P10	—	422
P11 \ P12	150	—
P12 \ P13	(136)	—
P13 \ P14	(136)	402
平均	143 (136.33)	408

N35°E	桁行柱間	桁行間
P1 \ P5	140	—
P5 \ P7	127	—
P7 \ P9	120	—
P9 \ P11	117	504
P2 — P12	—	514
P3 — P13	—	—
P4 \ P6	132	—
P6 \ P8	122	—
P8 \ P10	108	—
P10 \ P14	124	495
平均	123.75	504.33

P	深さ	長径	短径
1	16.7	24	23
2	15.1	25	24
3	—	—	—
4	34.6	26	23
5	14.8	21	21
6	15.3	23	22
7	21.2	20	20
8	10.9	24	21
9	3.1	18	17
10	19.8	23	22
11	7.0	21	20
12	15.3	22	21
13	—	—	—
14	24.5	25	24
平均	16.53	272	21.5



第86図　6号建物実測図 (1/60)

表21　6号建物計測表　(単位cm)

3間×4間+α	梁間柱間	梁間間
P1 \ P2	192	—
P2 \ P3	162	—
P3 \ P4	188	540
P5 — P6	—	550
P7 — P8	—	557
P9 — P10	—	558
P11 — P12	—	560
平均	180.67	553

N44°E	桁行柱間	桁行間
P1 P5	160	—
P5 P7	132	—
P7 P9	145	—
P9 P11	126	—
P4 P6	146	—
P6 P8	155	—
P8 P10	130	—
P10 P12	136	—
平均	141.25	—

P	深さ	長径	短径
1	21.3	31	30
2	46.2	24	22
3	43	31	30
4	30.7	30	30
5	33.7	35	35
6	27.1	26	26
7	54.2	49	28
8	30.9	26	23
9	37.1	29	27
10	30.2	29	28
11	54.7	32	31
12	42.1	30	26
平均	37.6	31	28

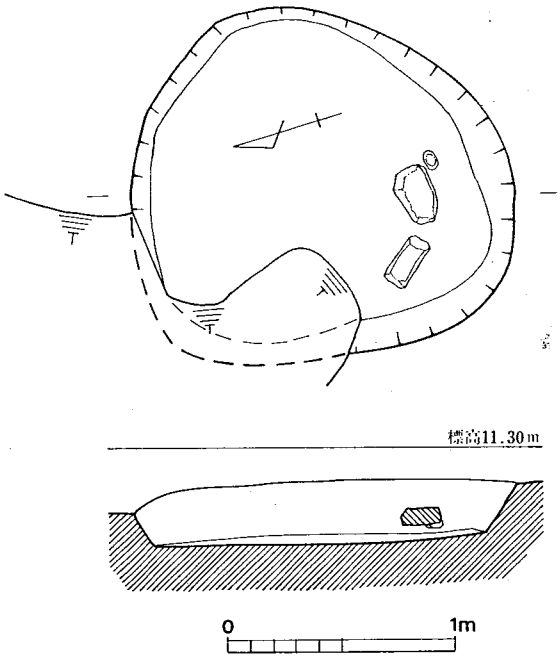
P5—O・A

6号建物（図版55—2，第86図，表21）

5号建物の北東方に位置する。調査区域外に桁行が延び，P11とP12の間に柱穴がみられないことから梁行3間に対して桁行5間あるいはそれ以上の規模を想定できる。P5に黒曜石，安山岩片が各1点出土した以外遺物の出土はみられなかった。

(2) 土　　壙（第87図）

3号建物の北西方に検出された，長径1.7*m*短径1.5*m*を測る不整円形プランの土壙で，北方を削平によって消失するが壁高は20*cm*程度残存する。土壙内の南寄りに円礫・角礫が床面よりやや浮いた状況で検出された。また土器類では縄文晩期土器小片1点・弥生中期土器片16点・土師器小片2点が含まれていた。土師器の特徴では奈良時代後半ないしは末頃の時期が与えられ，この時期を遡ることのない遺構とみられる。



第87図　土壙実測図　(1/30)

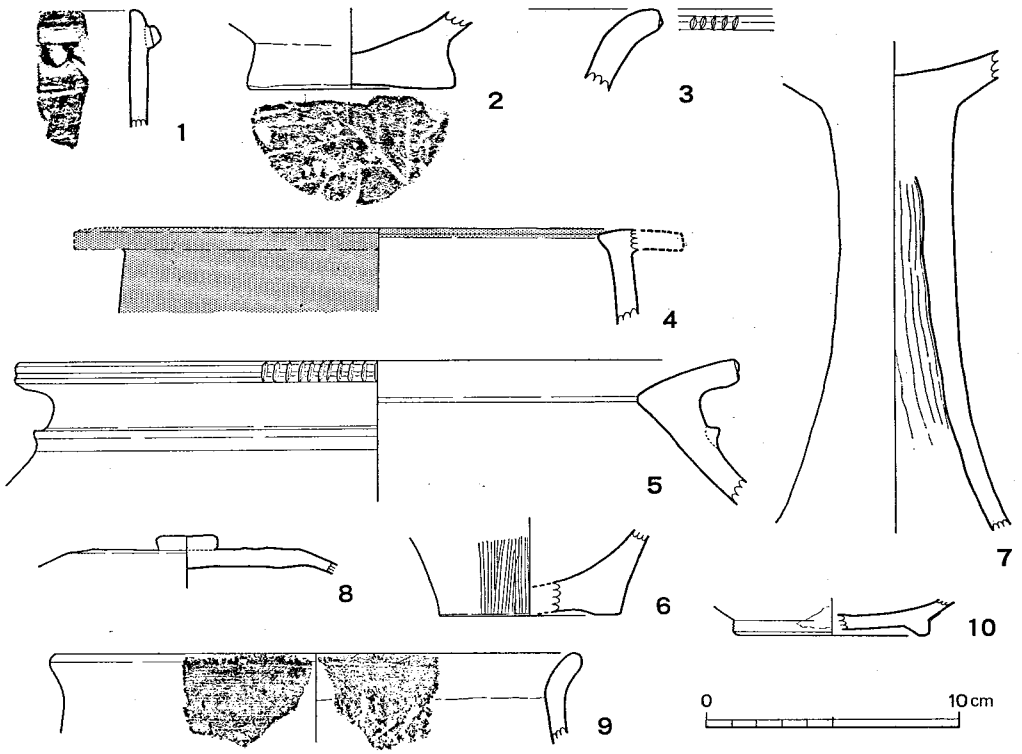
(3) 包含層出土の土器

（第88図）

0－1地区東部を中心とした黒褐色包含層からは各種の土器破片が混在して出土している。いずれも小破片であるが器形等の特徴ある例を図示する。

1は刻み目突帯を口縁下に有し外面板ナデ。内面ナデ調整される縄文時代晩期末頃の深鉢形土器片。2はやや上げ底になる底面に葉脈圧痕を有す底部破片で，形状から晩期後半ないしは末頃に属すとみられる。

3は口縁端部に刻み目を有す小破片であるが大きく外反する口縁を有す，弥生時代前期後葉頃の壺形土器であろう。4は甕形土器口縁部破片で口唇上面及び外面は丹塗り磨研される。口唇端部の形状は不明だが中期中葉頃であろう。5は口唇端部に刻み目を施す甕形土器破片で口縁直下に上反りになる三角突帯を有す，中期後葉頃に属す資料である。6は外面にハケ目のみられる甕形土器底部破片である。7は長い柱状部を有し脚部がなだらかに広がる高杯形土器破片で柱状部内面は絞り込まれたためにねじれた形状を呈す。杯部内面及び柱状部外面の一部に丹塗り研磨の痕跡を残す，中期に含めうる資料である。



第 88 図　包含層出土土器実測図 (1/3)

8は扁平なつまみをもつ須恵器杯蓋であるが，端部の形状は不明，天井部外面は逆時計廻りのヘラ削りのあとナデ調整，内面は回転ナデ調整される。9はやや肥厚する口唇部を有す甕形土器破片で外面及び内面上位はヨコナデ調整，内面下位はヘラ削りされる。8・9共に奈良時代に属すとみられる資料で，9は土壙内埋土から出土している。

10は白磁の小破片で，見込み部にヘラ描き沈線文がみとめられる。高台は低めで外面の釉が高台まで流れる。平安期に属する例であろう。

(4) 小　　結

この地区で検出できた建物群は，広田遺跡の中でもⅠ地区に近いことからⅠ地区の居住区域との関連を考えなければならない。しかし，その中間にあたる区域を調査し得なかったため，当該地区のみで一応配列を考えておきたい。

1～6号建物は相互に切り合うことなく配置されることから時期的に大きな幅は無いものとまず考えておきたい。次に主軸方位での傾向をみると1号・4号と他の例とは直交方向の主軸をもつことになるが，1・3号，2・4・5号，6号の3つのグループに分かれる。また柱列の関係をみると，1号建物の北列と3号建物の南列が見通せること，3号建物の東列の延長線

が5号建物の中軸線に相当すること，2号建物の西列が4号建物の西列に通り，延長線が6号建物の東列に通る。また2号建物の東列延長線は4号建物のP6－7を通る。

従って建物の配置からは，1・3号，2・4号をグループとして区別することが可能である。更に一歩穿った仮定をすれば前者に5号建物，後者に6号建物を含ませることも可能であろう。

建物群の時期は，柱穴内出土土師器がいずれも小片で時期を明確にし得ないが，包含層出土土器に奈良時代に属する破片が多数あり，平安時代に下る白磁が1片含まれることからして，奈良時代に属する可能性を有してはいるものの平安時代以降の時期とする方が妥当であろう。

（小池　史哲）

5　おわりに

広田遺跡0区の調査では多種多量の遺物が出土し，時間的・紙数共に制限があるために充分な検討はなし得ないが，生産活動・精神文化面での問題点について若干の予察的な私見を述べて一応のまとめとしたい。なおこの遺跡が福岡県下でも西端の狭い平野に位置し，西北九州の一角をなす海岸に近い低地に立地していることは生産活動等を考える上にもまず考慮する必要のあることは言うまでもない。

生産活動への視点

縄文時代の生産活動としては，植物質食料採集活動・狩猟活動・漁撈活動等が考えられる。当該遺跡大溝出土遺物ではこれらの生産活動に直接関連ある種類の石器も出土している。

打製石斧・石皿・すり石は，植物質食料採取活動に供せられる石器類とできるが，時期的にみて後晩期に農耕が存否するかという問題に関わってくる。打製石斧は，安山岩を素材とした例でも刃部に明瞭な使用痕がみられることから土掘具以外の用途は考え難く，対象物は砂質の土壌と考えられる。使用痕を観察すると打製石斧刃部でも厚みを有する側に広くみとめられ，法量からみて掌中に直接握り得ない大形例等は柄を装着したと想定すべきであろう。ただしこの種の打製石斧には柄との磨擦によって生じる擦痕（註1）は顕著ではない。形態では所謂短冊形・撥形・分銅形に近い例等の種類があるものの，共伴した土器群との関係では，短冊形において厚みのある例から薄くなる例へ移行しており，やや刃部が広くなる短冊形でもⅠ群からⅢ群へと薄くなる傾向がみられる。撥形では厚い例と薄い例がⅢ群で混在し，分銅形に近い種類ではやや厚みのある例がⅠ・Ⅱ群にみられる。従って全体的な傾向として薄い形状へと移行する傾向は認めざるを得ない。

打製石斧の製作方法では，縦剝ぎ剝片・不定形剝片を素材とする例は古い段階に限られ，横剝ぎによる横長剝片利用が主流となる傾向を窺える。この傾向は安山岩を素材とした削器・掻器類でも同様の傾向を示すことからして横剝ぎの技法が確立していると言えよう。また横剝ぎによる素材の打面部を更に調整剝離して，打瘤の厚みを減じ扁平にさせる手法が新しい時期で

は盛行するとみるのも可能であろう。

石皿・すり石では，前者13点・後者20点あるが，晩期農耕論で言われるところの鞍状石皿・棒状すり石（註2）はみられず，上面が平らな石皿とやや厚みのある円盤形のすり石がセットとして考えられる。すり石には敲打痕をも有す例があり敲く機能を兼ね備えていたとみられる。

打製石斧・石皿・すり石の盛行は既に中期農耕論における根拠（註3）としてとりあげられており，後期中葉期に属す多量の打製石斧が出土した京都府桑飼下遺跡調査報告では東日本から西日本へと圧倒的文化伝播と共に波及しその延長線が九州では三万田式期にあると論じられる（註4）。この視点からみれば，当該遺跡での打製石斧中に，横剝ぎ技法の確立のあること，大形打製石斧（むしろ鍬あるいは鋤と称すべき形状をなす）の出現がみられること，打製石斧の厚みが扁平に移行することが新たな側面としてあげられる他は，中期農耕論のそれと大差を見出し難い。いずれにしても農耕の存在を実証しうる具体的な植物種子がなく堅果類種子のみが検出できている現状では農耕の成立を直接解明し得ない。一方収穫具として弥生時代以降盛行する石庖丁に対し，これと同様の機能を有しうる石器に石刀と称される（註4）形状の例を，削器・掻器類に含めている。この中でも殊に4類にした石鎌と称すべき石器は穂摘具と考え易く，いわゆる石刀形をなす石器も打製石斧と同質の石材を横剝ぎ技法とする共通点から農耕的である可能性を大にしていると言えよう。

なお後期後半期に増大するとされる半磨製石斧（註5）については打製石斧の材質と使用によって局部が磨製石斧の如く磨耗するとみられる。むしろ打製石斧の中で考えなければならない性格のものであろう。いわゆる北古賀型石斧（註5）も出土しているが打製石斧として一括した。

狩猟具と考えうる石鏃に目を転ずると，当該遺跡の時期より朔る福岡県春日市柏田遺跡（後期中葉）でのあり方（註6）と特に大きな変化を看取できないものの，狭義の剝片鏃とその製作工程の残余とみられるつまみ形石器は量的に減少しており，石刃状剝片の減少がみられることと合わせて，黒曜石石刃状剝片・剝片鏃製作の盛行期を過ぎる段階とすることができよう。更には石刃状剝片を素材とする石器多用の生産・再生産活動からの脱皮へと向かう状況を想定しうる。一方片面あるいは両面を研磨する石鏃の存在も注目できる。下層では片面研磨の例のみ，上層に両面を研磨する例が加わることから当該時期に成立する手法とできよう。

漁撈具として確実に漁網錘とされる石錘（註7）では切目石錘はみられず有溝石錘1点のみ出土している。打欠石錘は漁網錘以外の用途も考えられるが軽量な例は漁網錘とすることも可能であろう。有溝石錘・軽量打欠石錘はⅢ群土器以降に共伴している。一方組み合わせによって鋸頭とする種類の石器として石鋸あるいはサイドブレイドと称される石器（註8）及び鋸歯鏃がある。鋸歯鏃の法量は小さめで直ちに鋸先とするには疑問が残り，この種石器は検討の余地を残していると言えよう。

生産用具とは別に注目される再生産用具の土製紡錘車もみられる。この種製品については既に三万田式以後に出現するとされている（註8）が，当該遺跡では文様を施した土製紡錘車のうち側面にも文様を有す１ｃ類・１ｄ類がⅠ・Ⅱ群土器に共伴する以外はⅢ群土器以降に共伴している。土器にみられる施文との対比では疑似縄文を施す例は三万田式期迄の特徴で，平行沈線文及び同心円弧文は，西平式以降・滋賀里式的な特徴である。いずれにしても土製紡錘車が後期末ないしは晩期初頭頃から用いられたと考えておきたい。なお土器に残された圧痕では織布を確認し得なかったが撚糸ないしは編物の圧痕がみられる。

これらの遺物にみられる現象から，三万田式期以降，殊に御領式期前後に生産活動の画期があると考えたい。土器製作の面でも黒色磨研の盛行・文様消失化現象に一つのピークを迎えることと共に，生産活動の面にも弥生時代的な性格を帯びてくる様相は，まさに縄文時代の中でも晩期として区別すべき段階に達したと言えよう。

精神文化面での視点

広田遺跡から出土した石製品・土製品のうち精神文化に関わるものとして，石柱・石棒・御物石器・玉類・土偶等があり，遺構では埋甕がある。これらのうち石柱・石棒・土偶及び埋甕は既に中期農耕論の論拠（註9）ともなっており，中部山岳地方を中心とした中期縄文文化に特徴的な資料と言えよう。当該遺跡でのこれらの資料は当初の形状とは大きく変化した形状のもので，石柱・石棒共に大溝の下面で検出されており，埋甕についても削平を受けて検出されたとはいえ住居跡内に埋遺された状況を確認し得ない。石棒は頭部・体部共に文様を有さない形状のものである。

御物石器は，従来飛騨・北陸地方に限られて分布する特殊な石製品である。最近この分布範囲がやや広がりつつある（註10）が，九州地方での発見は初例であろう。また所属時期は北陸地方の土器編年での晩期八日市新保式～中屋式に含まれるとされる説（註11）や後期後葉～晩期中屋式以降と前後に幅をもたせる説（註12）がある。

広田遺跡出土の御物石器は大溝下面に接しⅠ群土器に伴うことから後期末頃にあてることが出来る。文様構成は頭頂部に１条の刻線と頭部に３条の平行する鉤状刻線がみられる。文様を土器の文様に求めるならば，宮滝系土器に３条の沈線を主体とする文様があることから宮滝系土器と関連づけることが出来る。但し，素材とする石材は他の例にみられる硬質砂岩や頁岩質と異なり，軟質の砂岩でそれも凝灰岩質の軽量な例である。いずれにしても従来の資料よりも古い段階に成立して形態的に異なった変遷をたどった例と考えておきたい。大溝下面で検出された石柱・石棒と共に後期後半～末期に東日本的文化伝播と共に伝わった要素と考えるが妥当であろう。

また翡翠製玉・蛇紋岩質の抉状耳飾の存在は注目されよう。

この他石製品類のなかには用途の不明な資料が多いものの精神文化面に関わる資料と目下の

ところ断定できない。従来から用途不明とされる石製品として十字形石器・円盤状石製品がある。用途について充分に検討を加えていないがむしろ利器として使用された可能性を考えなければなるまい。軟質な石材である結晶片岩を素材とするが海岸部遺跡から多く出土する事例からしても海に関わる生業へのアプローチが要求されよう。

生産活動と精神文化とは生産の豊饒を求める点で結ばるとすれば，広田遺跡の例では東日本的な様相が優勢であるかのようにみえる。しかし，前述したように，横長剝片を素材とする石器がみられ，より扁平にさせる技法の確立は一つの画期とみるべきで，他方石刃類の衰退現象，土製紡錘車の出現と共に西北九州でのこの時期は大きな変動期とするにやぶさかではない。

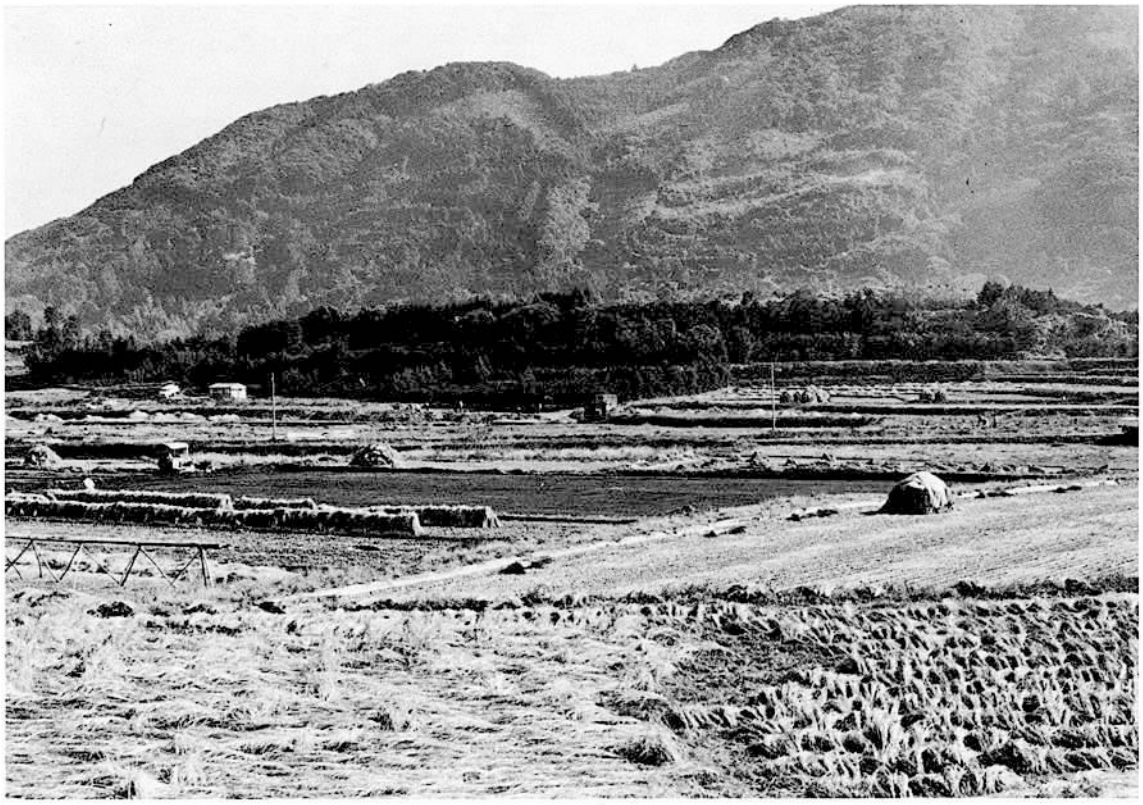
今後への課題

この遺跡から発見できた遺構・遺物は，福岡県下のみならず北部九州地域での，縄文時代後期末～晩期初頭資料として稀少価値がある。各種の資料からは，居住・生産地域等の解明し得ない部分を残しているとはいえ，当後の生産活動・精神文化の様相を片鱗ながら窺うことができる。とりわけ中部九州地域を中心として展開されている縄文晩期農耕論（註13）の視点から，地理的・時期的に前駆的な位置にあることが注目されよう。なお北部九州地域での当該時期土器群の変遷をはじめとして，今後更に追求していかねばならない問題を多々残している。

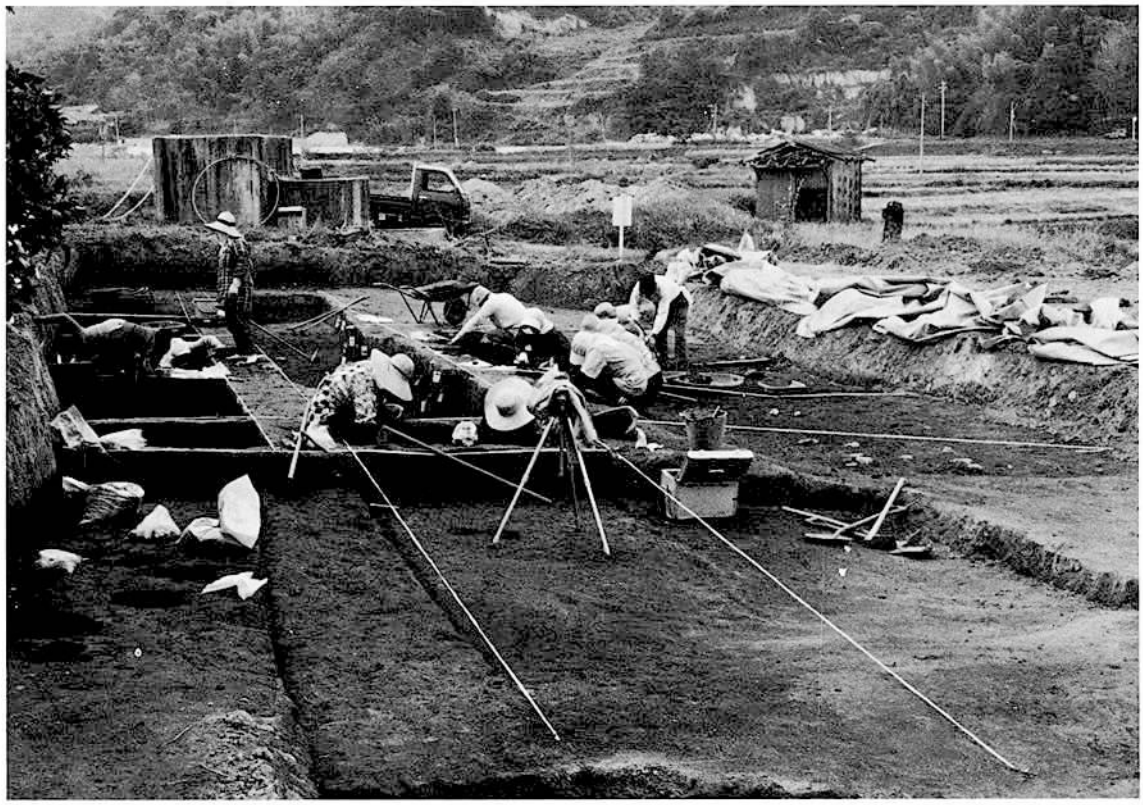
いずれにしても，この遺跡は，これ以上破壊してはならない重要な遺跡であり，遺跡範囲確認を要すると共に，周辺の環境破壊から保護し，後世に伝えたいものである。

（小池　史哲）

註1　渡辺誠編　1975　京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書，舞鶴。
2　賀川光夫他　1966　縄文晩期農耕文化の研究に関する合同調査，別府大学，別府。
賀川光夫　1968　日本石器時代の農耕問題，歴史教育16—4，東京。
3　藤森栄一　1973　縄文農耕，東京。
4　賀川光夫　1967　縄文晩期農耕文化に関する一問題——石刀技法——，考古学雑誌52—4，東京。
5　潮見浩　1973　北古賀遺跡，嘉穂地方史先史篇，嘉穂地方史編纂委員会，飯塚。
6　小池史哲編　1977　柏田遺跡の調査，山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告4，福岡県教育委員会，福岡。
7　渡辺誠　1973　縄文時代の漁業，雄山閣，東京。
8　乙益重隆・前川威洋　1969　縄文後期文化—九州，新版考古学講座3先史文化，雄山閣，東京。
9　註3に同じ。
10　岡本東三　1972　奈良市発見の御物石器について，考古学雑誌58—2，東京。
巽三郎　1972　紀伊発見の御物石器，考古学雑誌58—2，東京。
河本清他　1972　岡山県真庭郡落合町西原出土の線刻石製品，考古学雑誌58—2，東京。
11　天羽利夫　1966　御物石器の研究，考古学雑誌52—1，東京。
12　橋本正　1976　御物石器論，大境6，高岡。
13　註2に同じ。

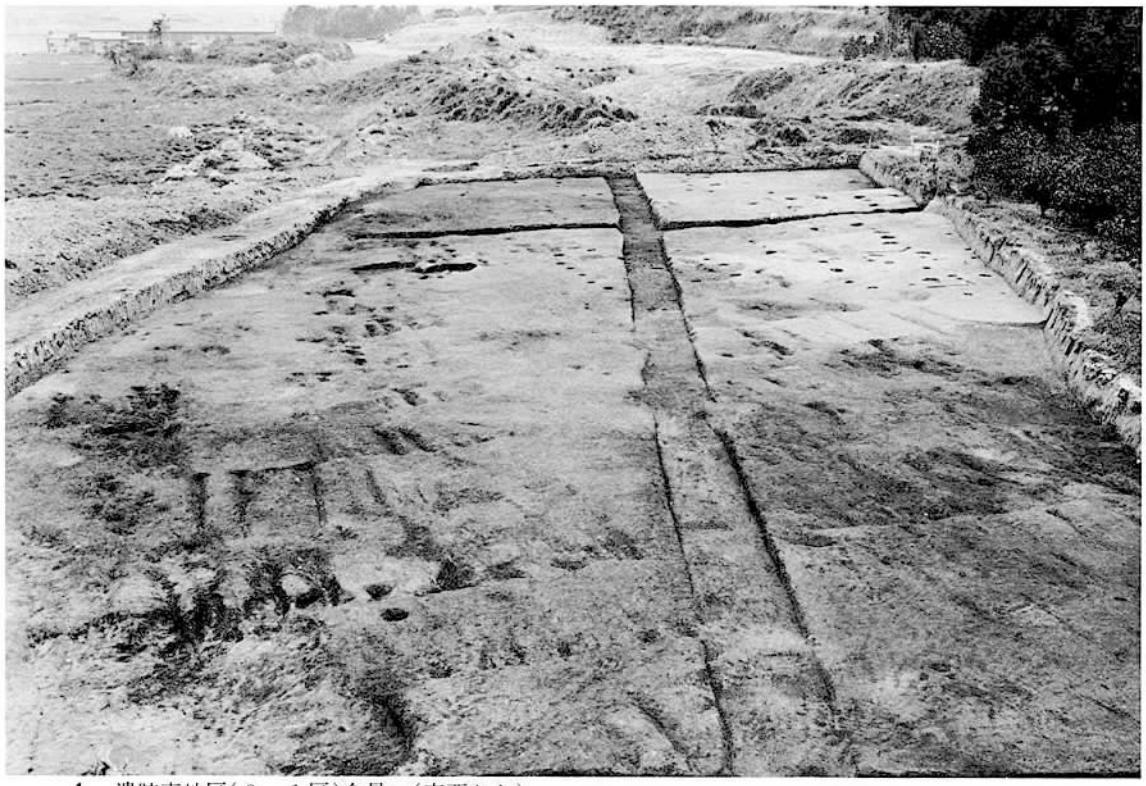


1　遺跡遠景　（西から撮影、対岸の台地裾が広田遺跡）



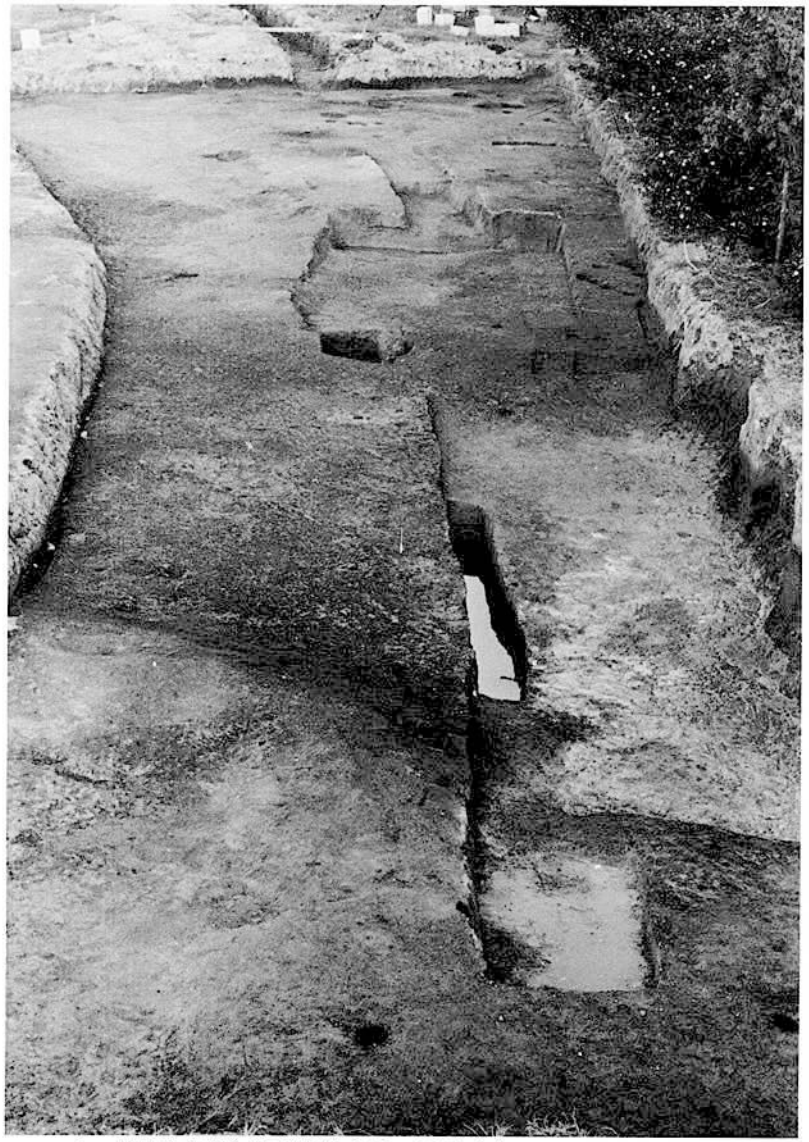
2　調査風景１

図版　2



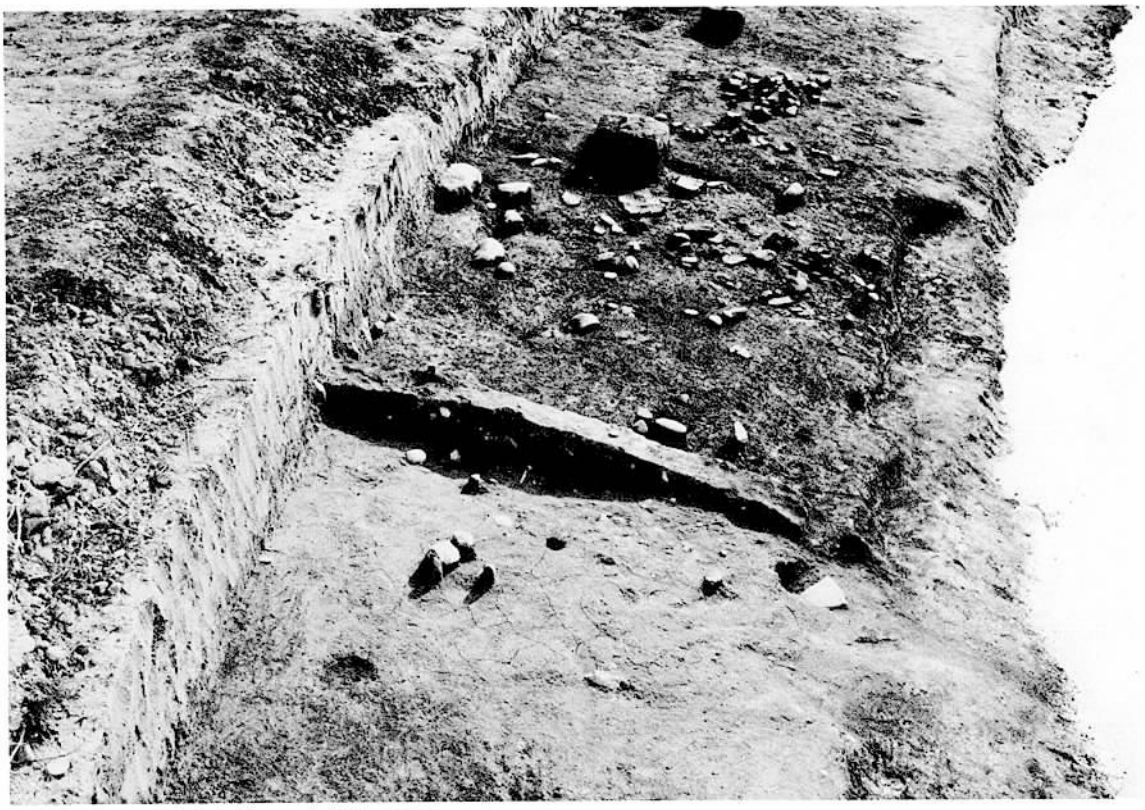
1　遺跡東地区(０－１区)全景　(南西から)

2　遺跡西地区(０－２区)全景　(北東から)

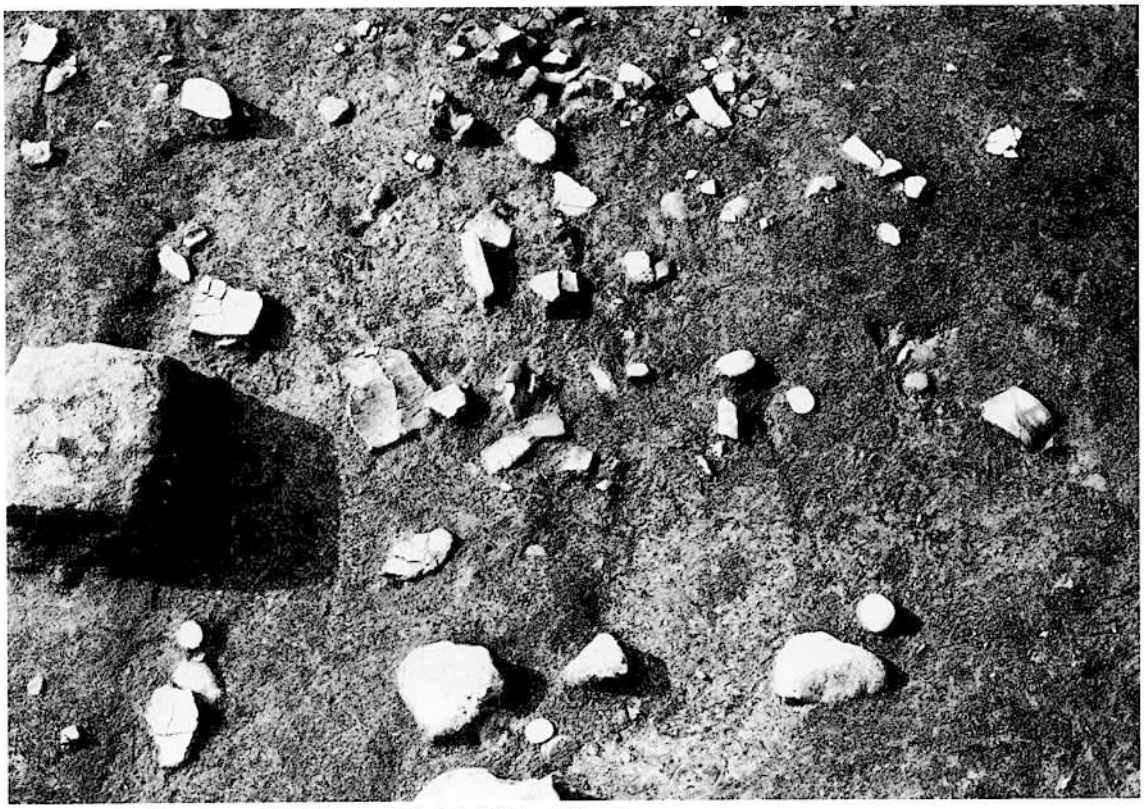


1　遺跡中央部(０区)南側全景　(西から)

2　遺跡中央部(０区)北側全景　(東から)



1　大溝北部上層での遺物出土状況　（東から）



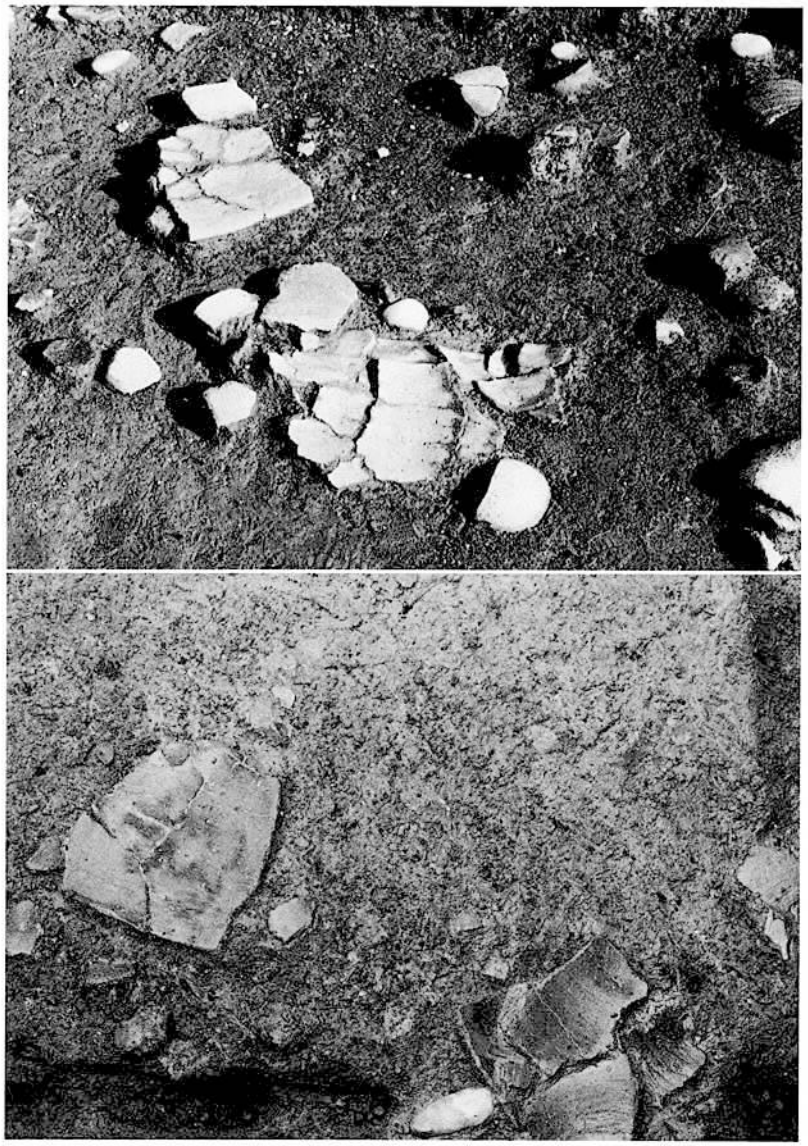
2　大溝（ＡＢ－３区）上層での遺物出土状況　（南から）

1　大溝（Ｂ４区）上層での遺物出土状況　（南から）

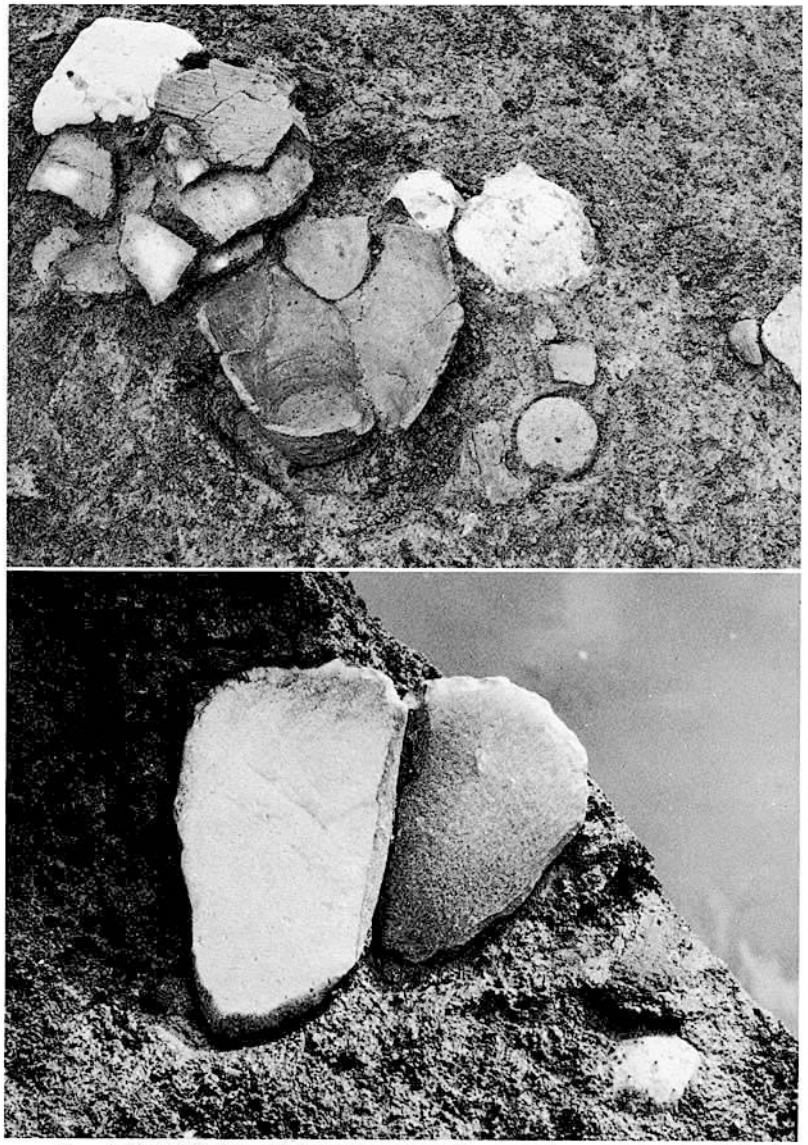
2　大溝（Ｗ３区）７層での遺物出土状況　（東から）

1　大溝(Ｅ４区)９層での遺物出土状況　（南から）

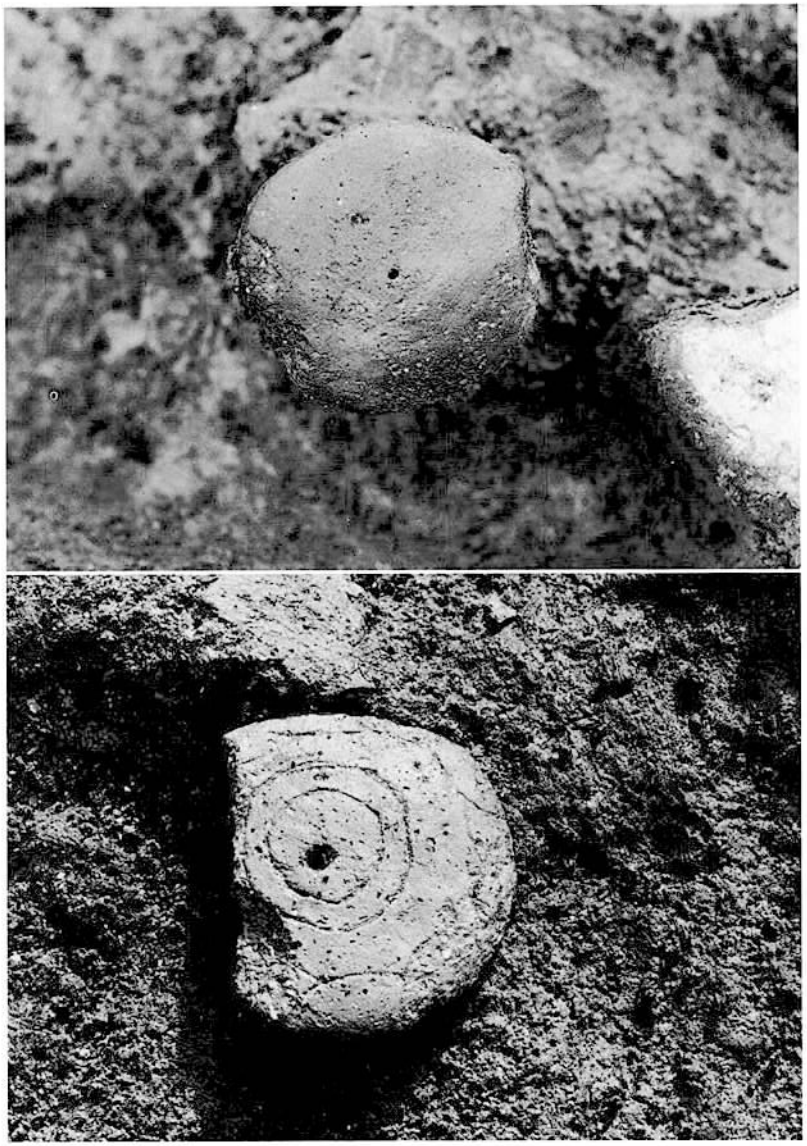
2　大溝(Ｅ５区)９ｂ層での遺物出土状況　（南から）



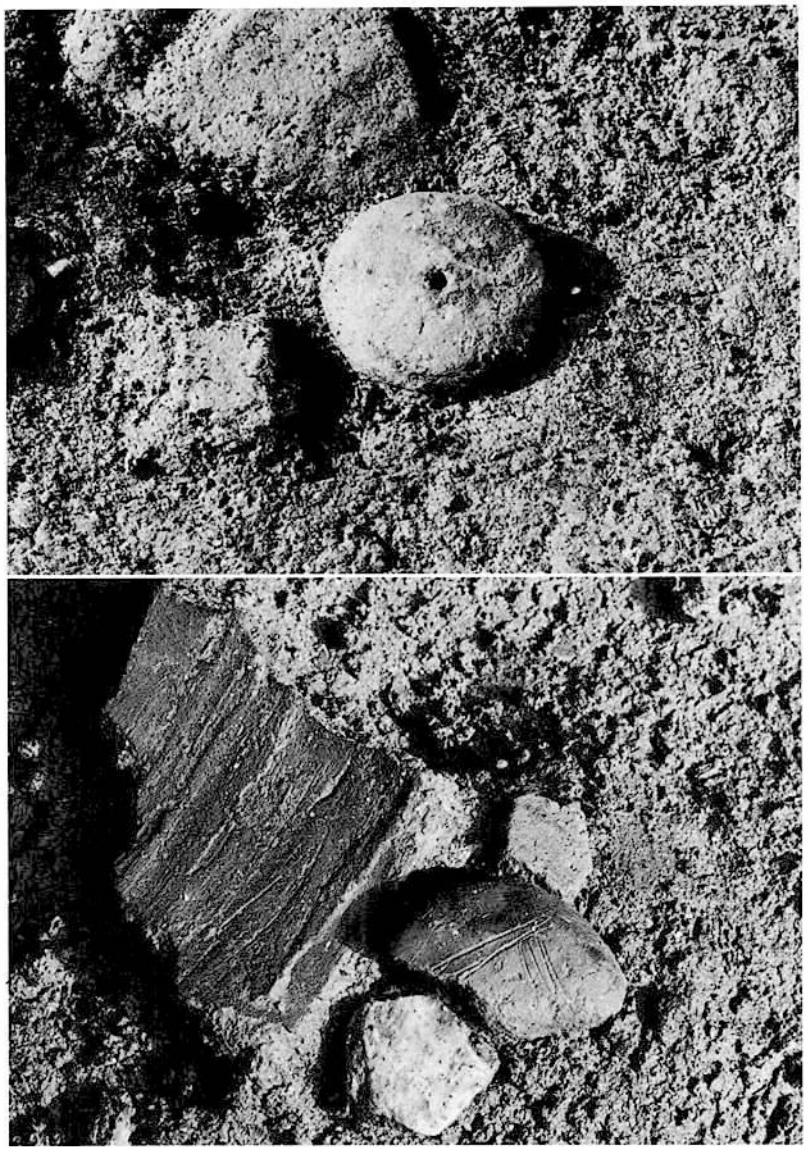
1　大溝下部での遺物出土状況



2　大溝内遺物出土状況(上W３区７下層・下重なって出土した打製石斧)



1　大溝７層での土製紡錘車出土状況（上Ｄ４・下Ｄ６）



2　大溝９層での土製紡錘車出土状況（上D11・下Ｄ１）

1　大溝W３～５区下面の遺物出土状況　（東から）

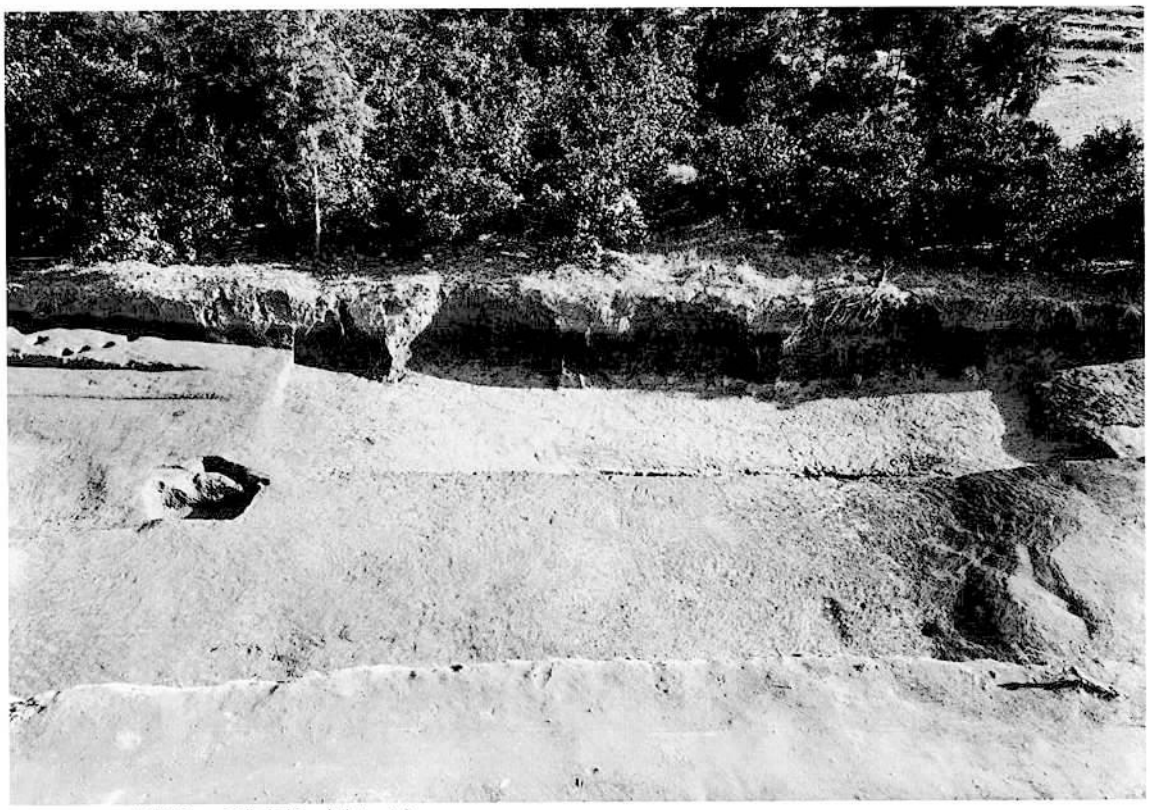
2　大溝ＡＢ２～４区下面の遺物出土状況　（東から）

1　大溝南部下面の遺物出土状況　（北から）

2　大溝北部下面の遺物出土状況　（北から）

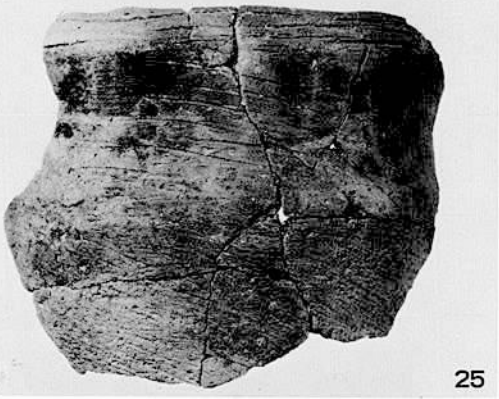
1　W 4 区での遺物出土状況

2　調査風景 2　上・右花粉分析試料採集，下土壌の水洗選別



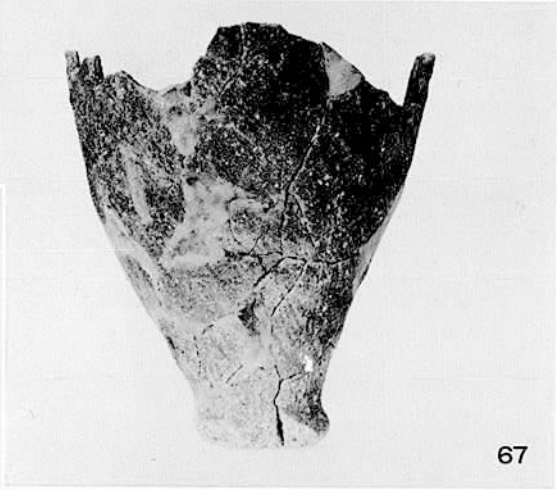
1　完掘後の大溝南部（北から）

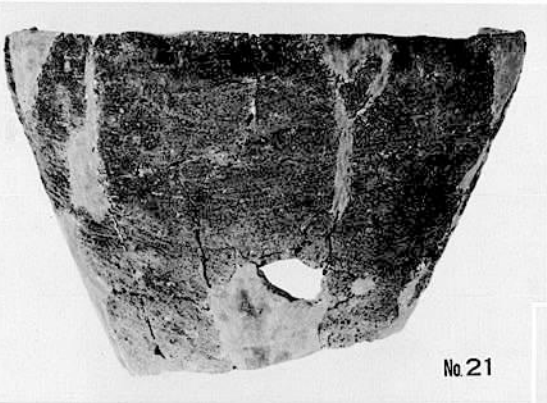
2　完掘後の大溝北部（北から）

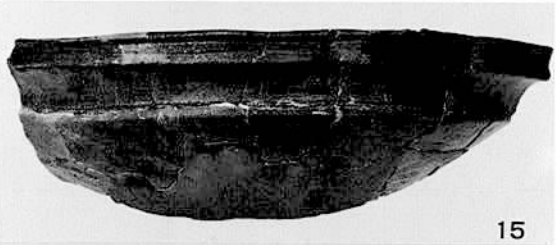

25

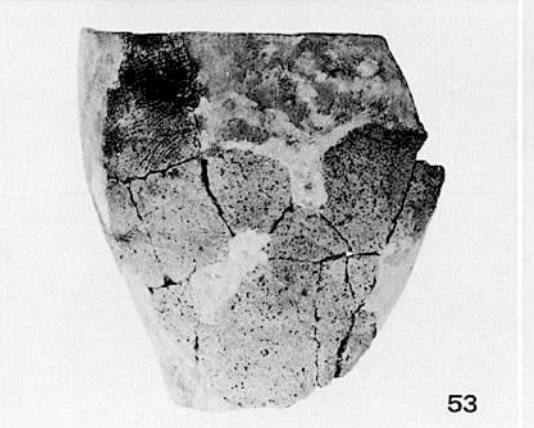
33

8

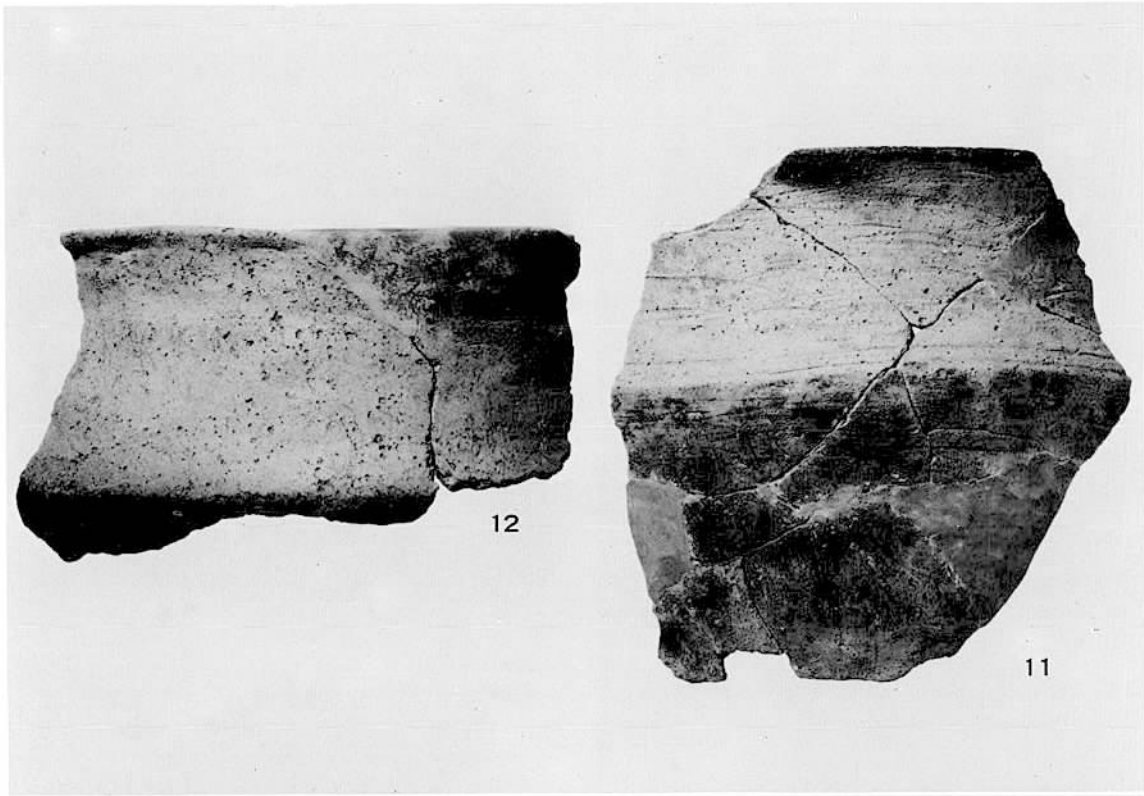

67

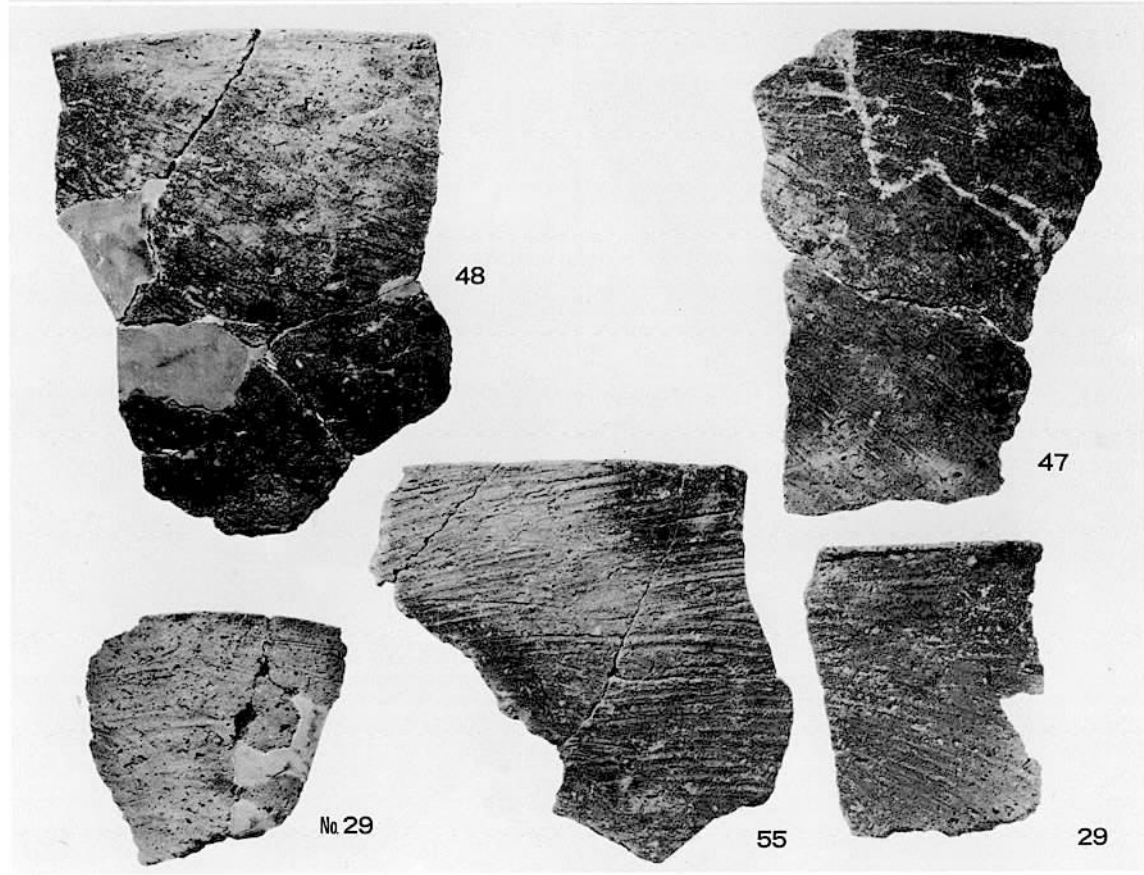

No.21


15

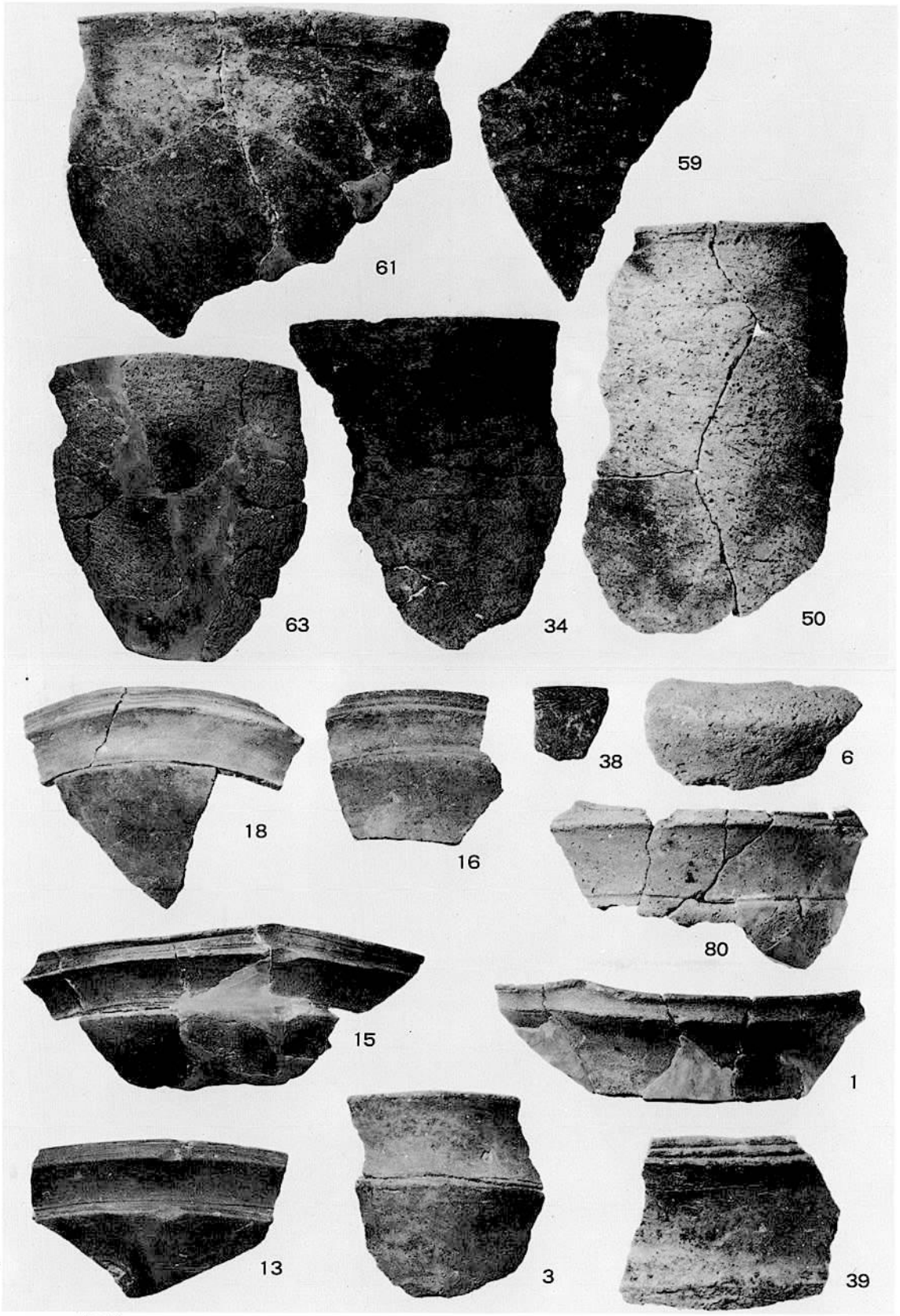

53

22



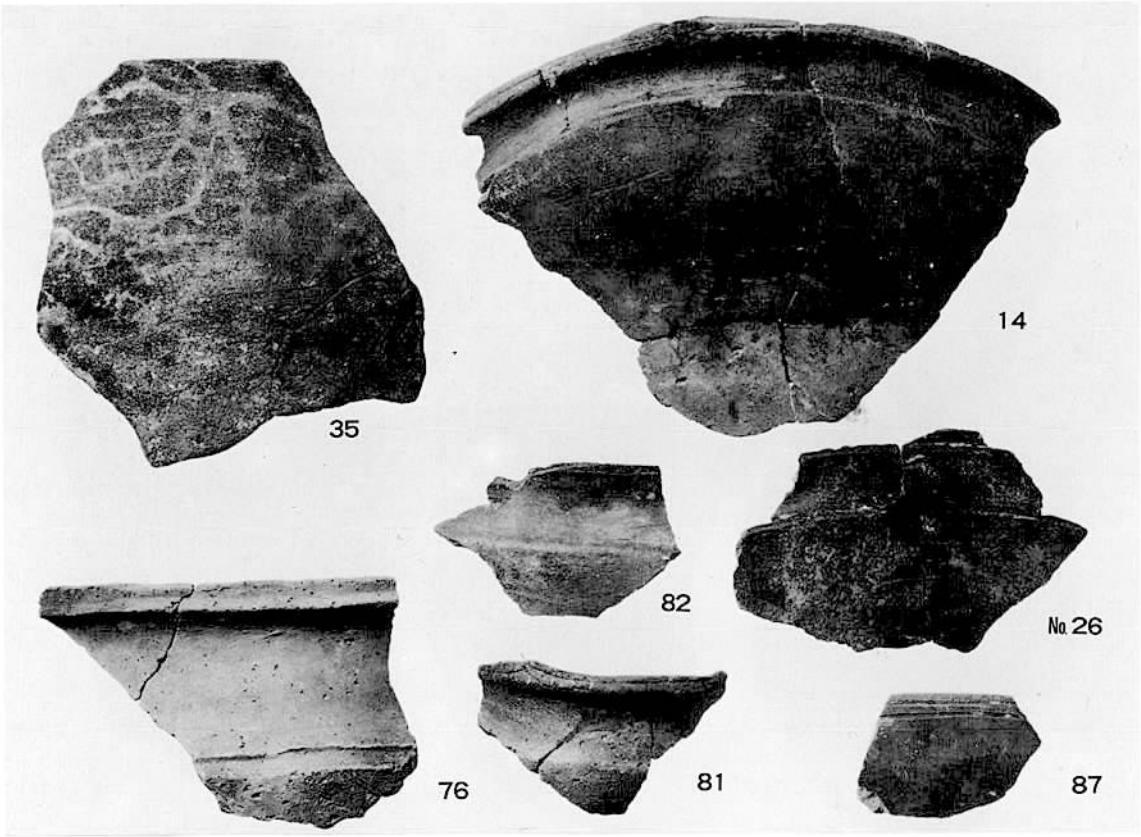


I 群土器 2

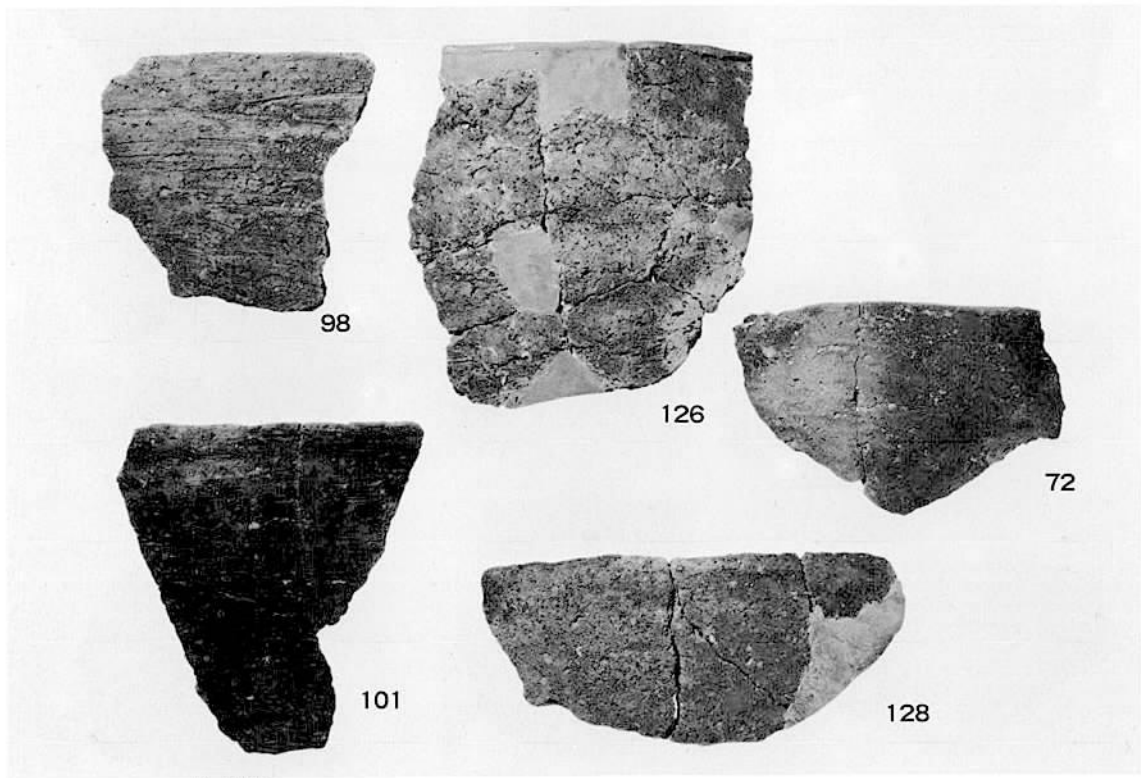


Ⅰ群土器３

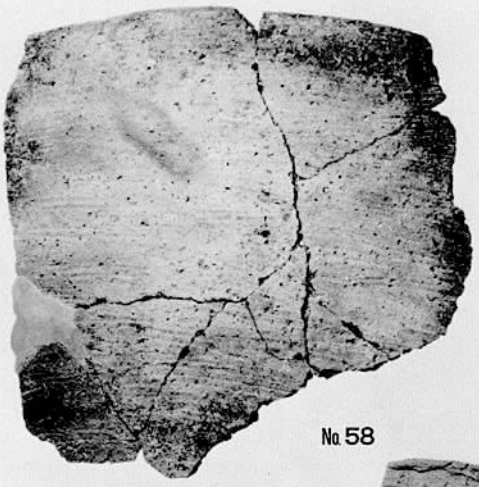
図版　16



1　Ⅰ・Ⅱ群土器1

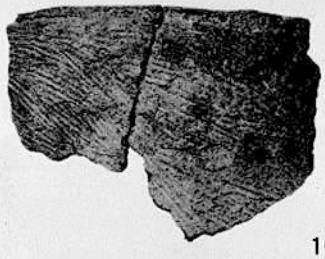


2　Ⅰ・Ⅱ群土器2



No. 58

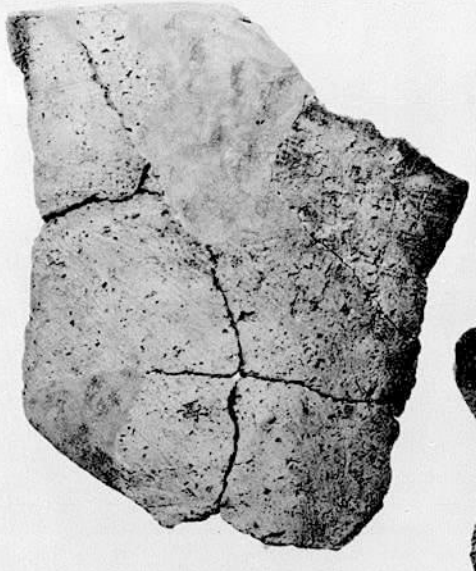
No. 44



109

89

111



90

104

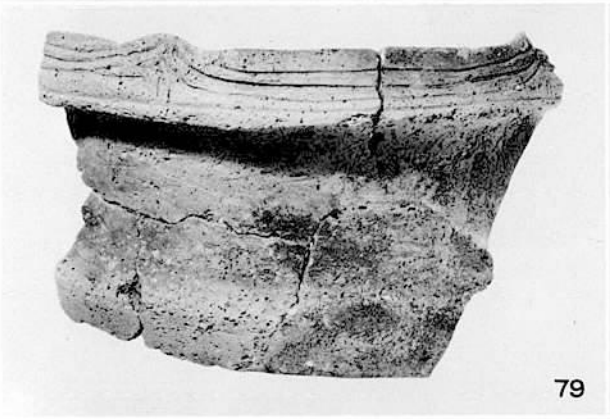
103

II群土器3

108

No.74

129



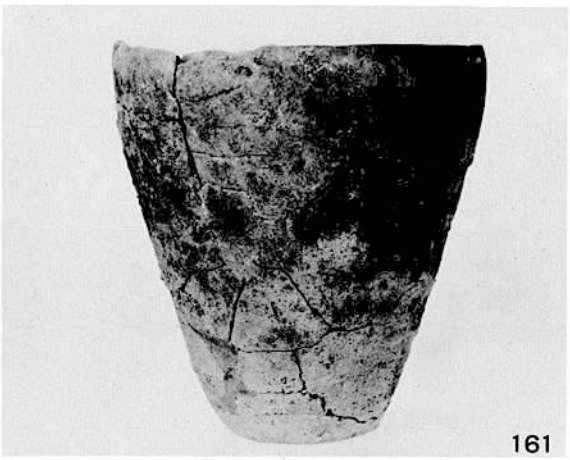
79

110

74

130

208

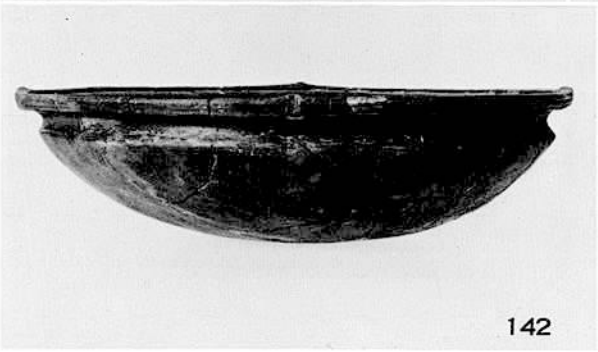

161

204

137

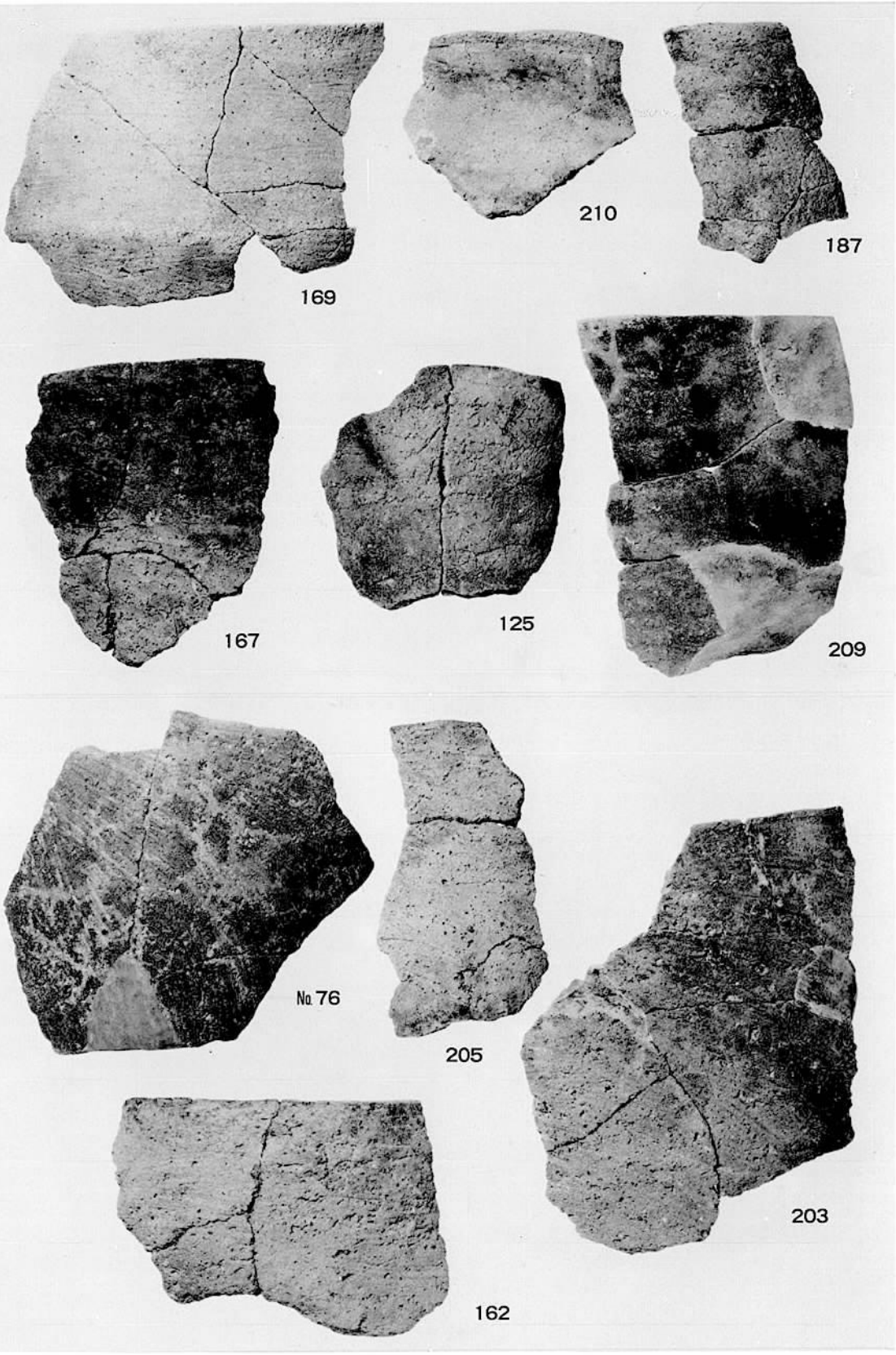
173

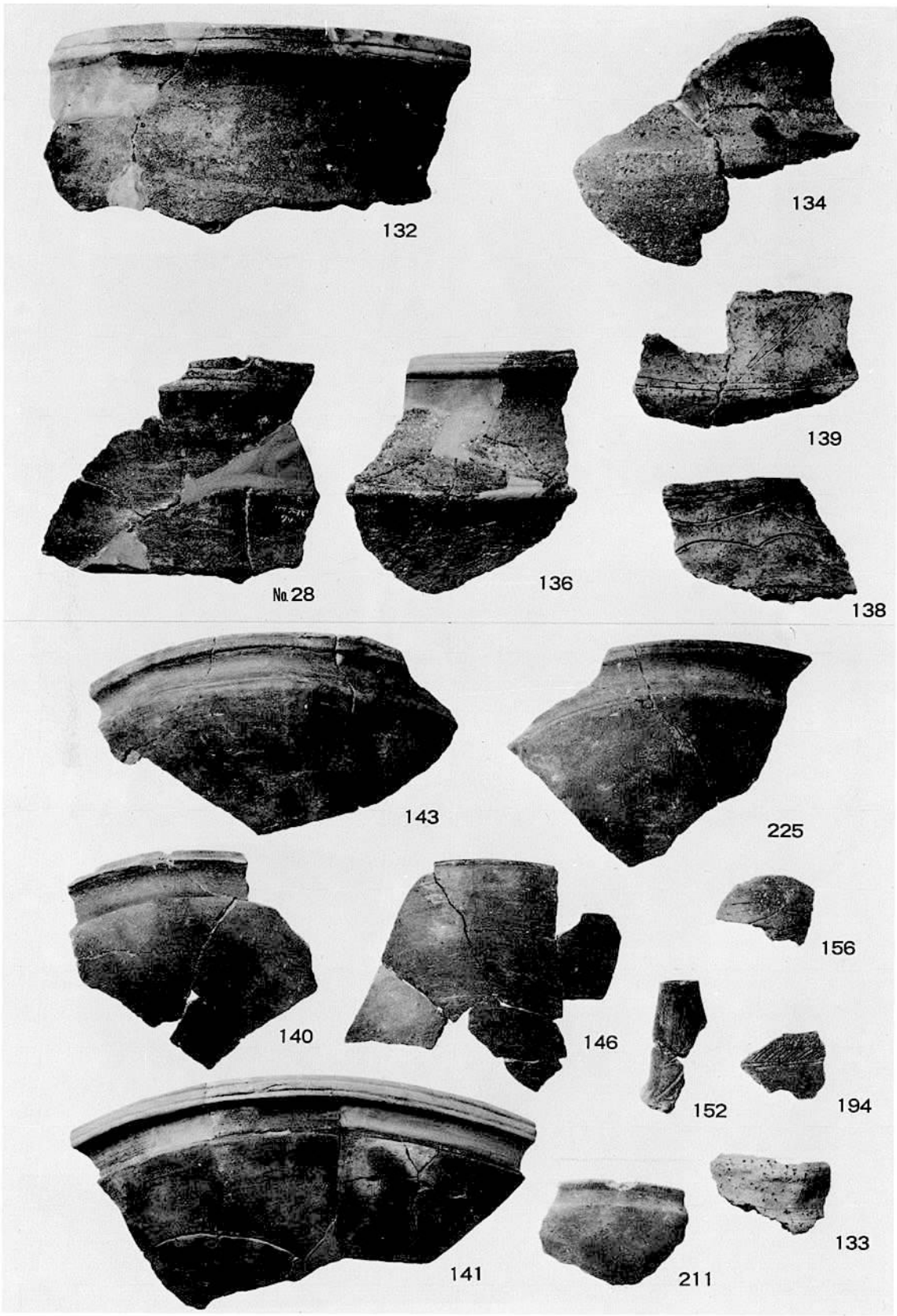
160


142

154

III群土器 1

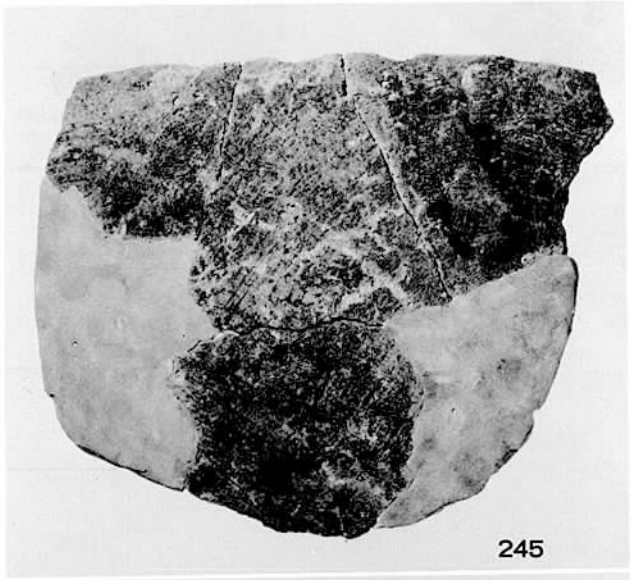

169
210
187
167
125
209
No. 76
205
203
162

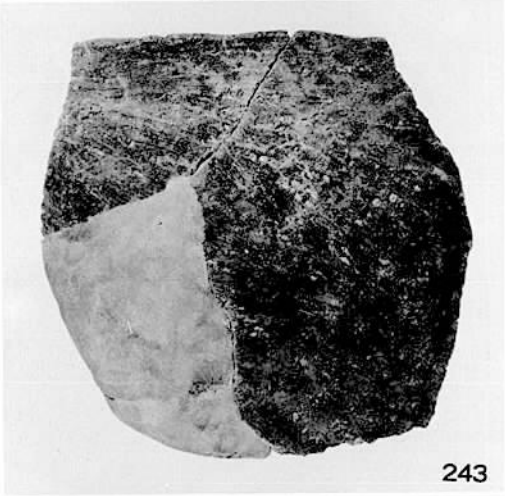

132
134
139
No.28
136
138
143
225
140
146
156
152
194
141
211
133

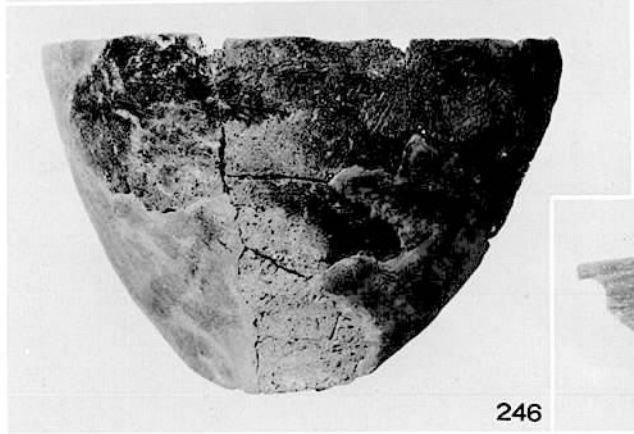
157

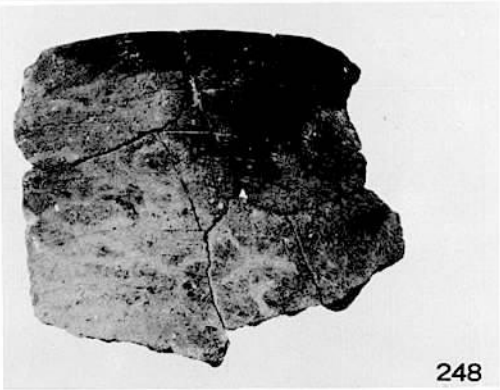
236

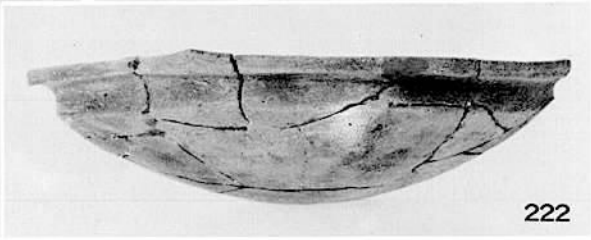
231

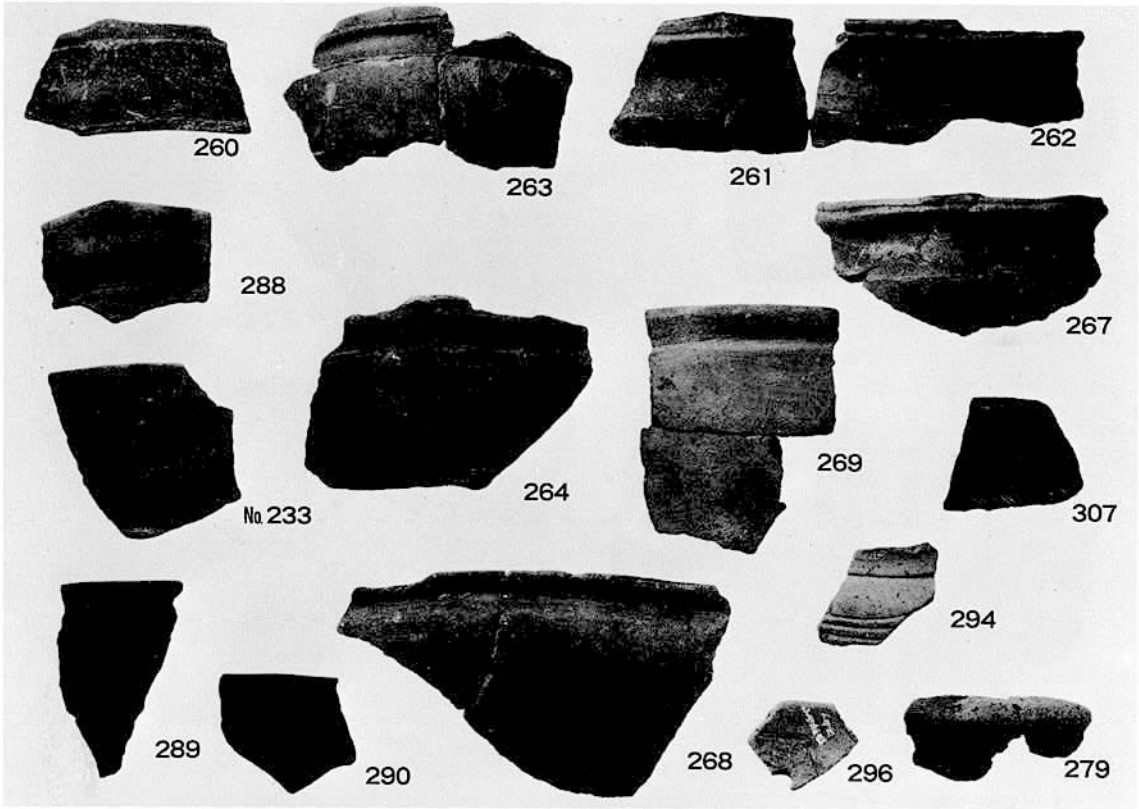

245

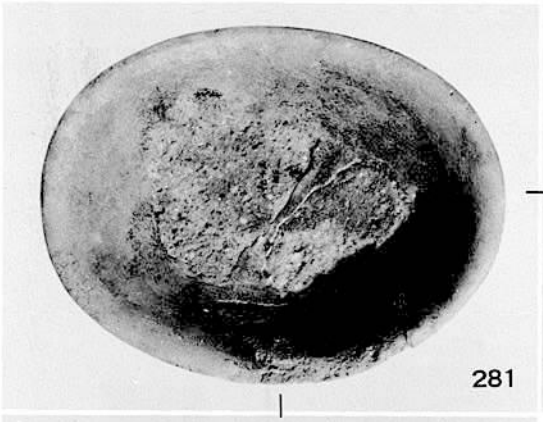

243

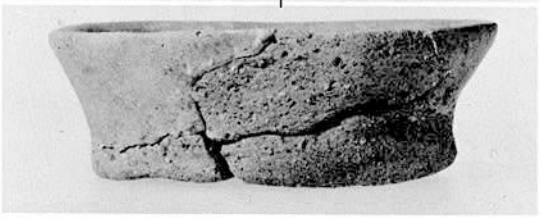

246


248


222


260
263
261
262
288
267
No. 233
264
269
307
294
289
290
268
296
279

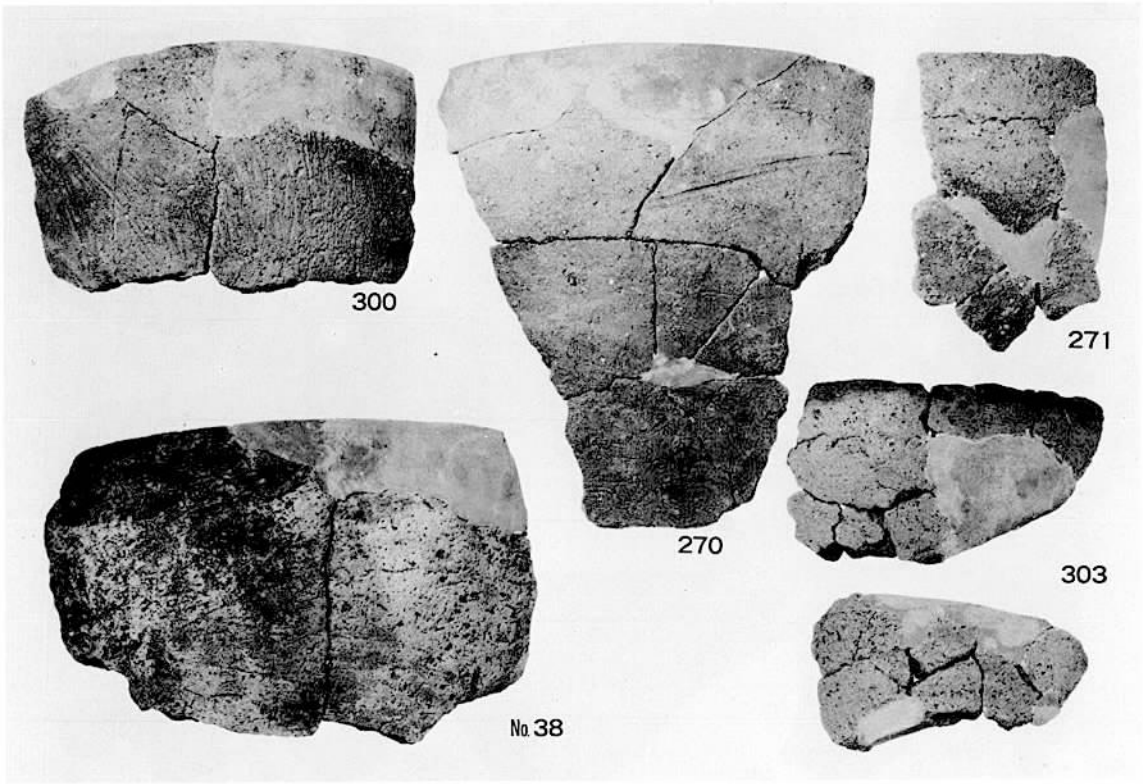

281



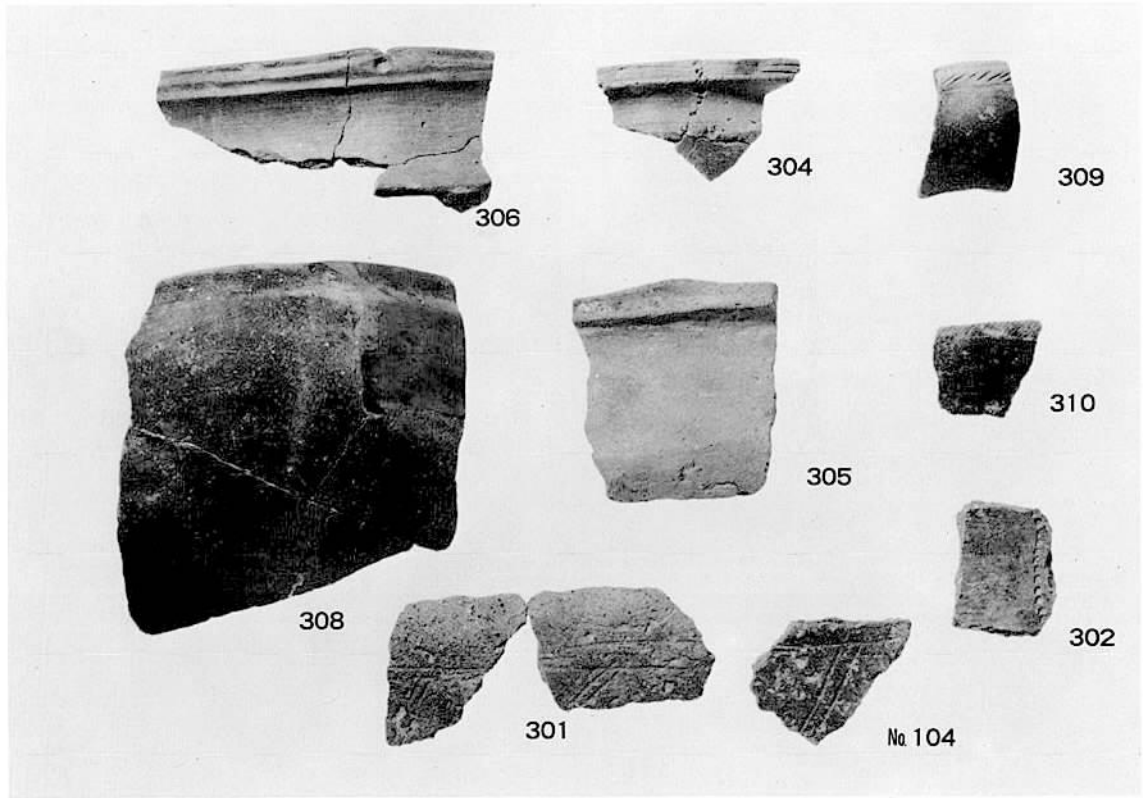
265

278

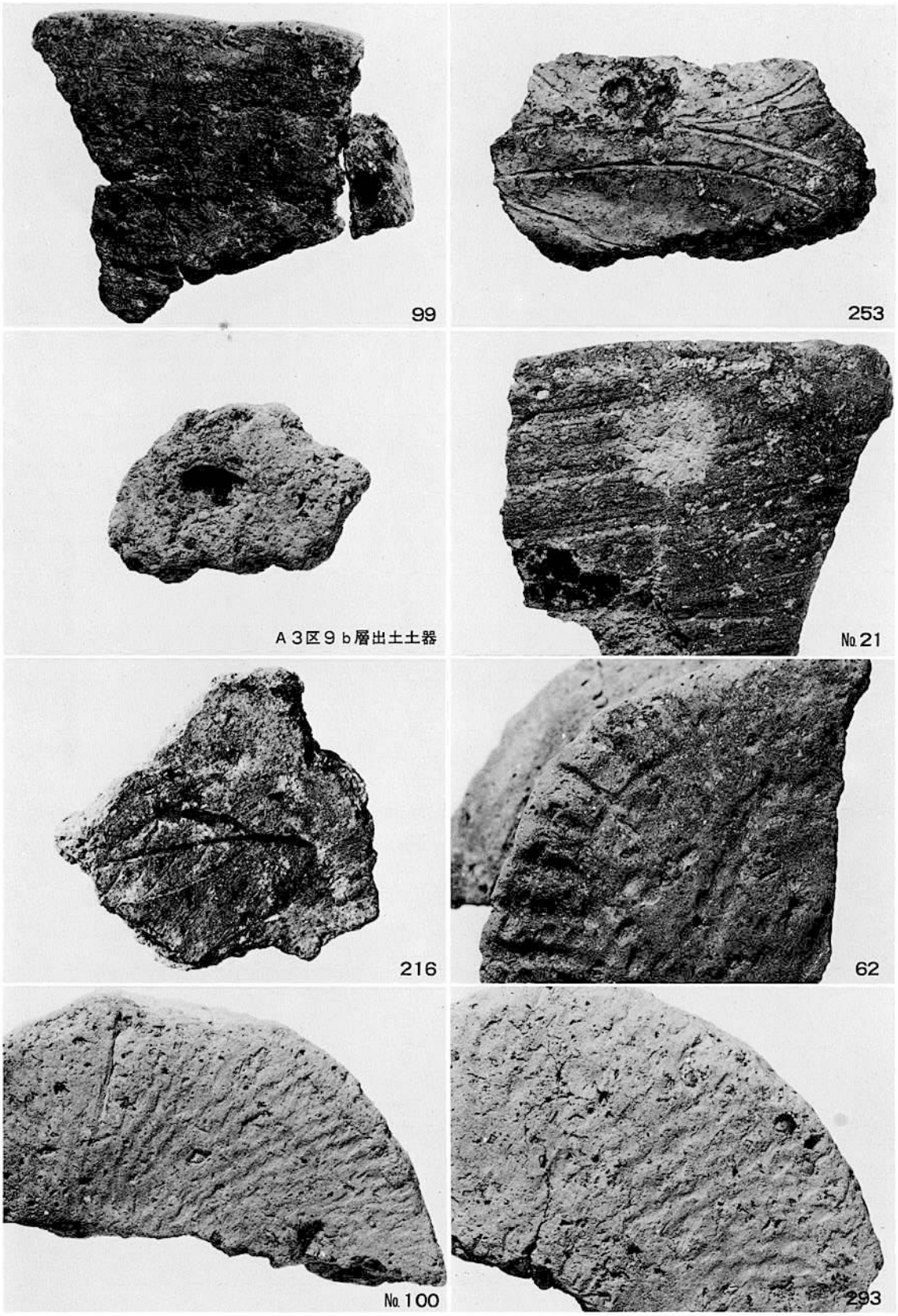
V 群土器



1　V群・表採土器

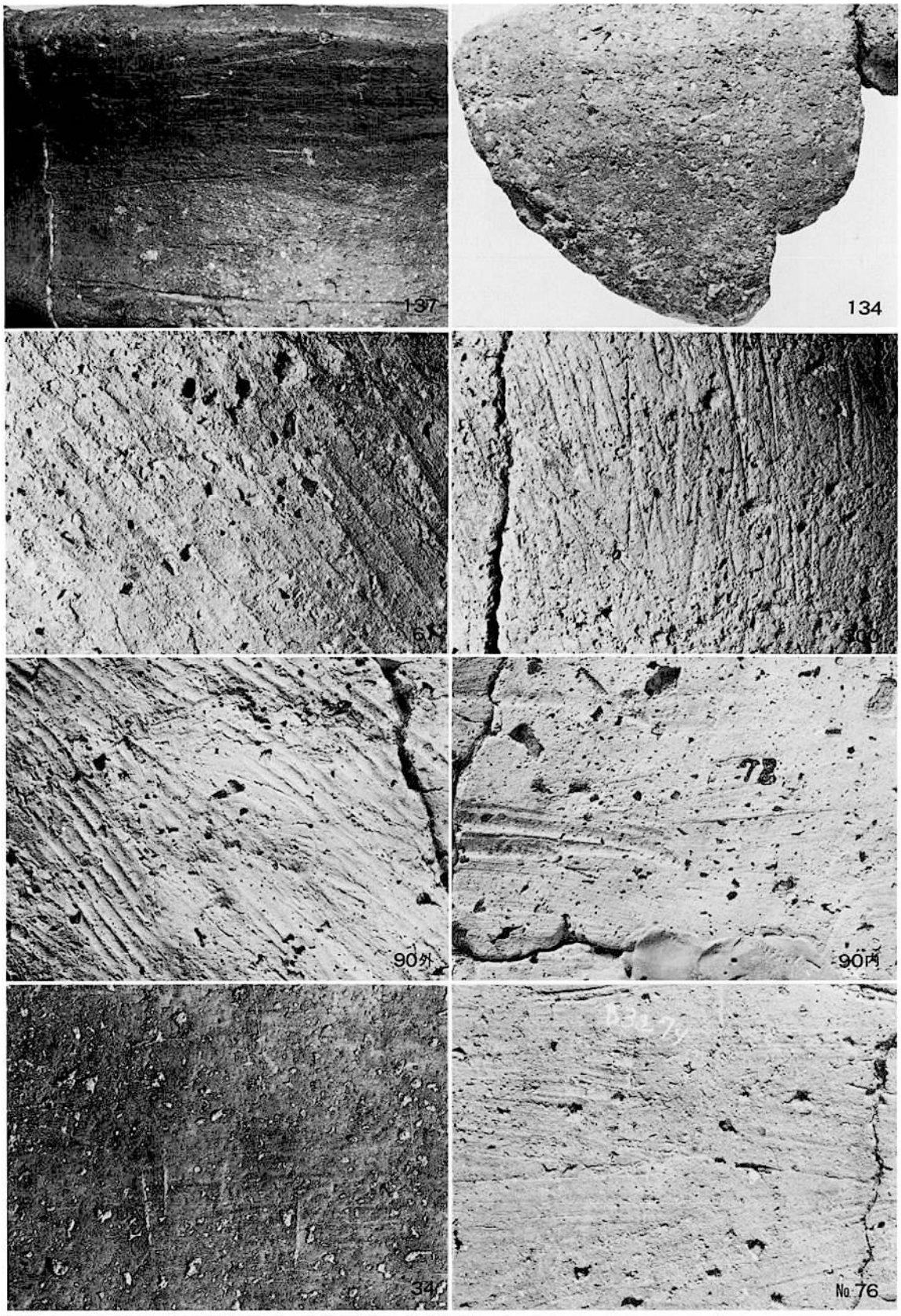


2　表採土器

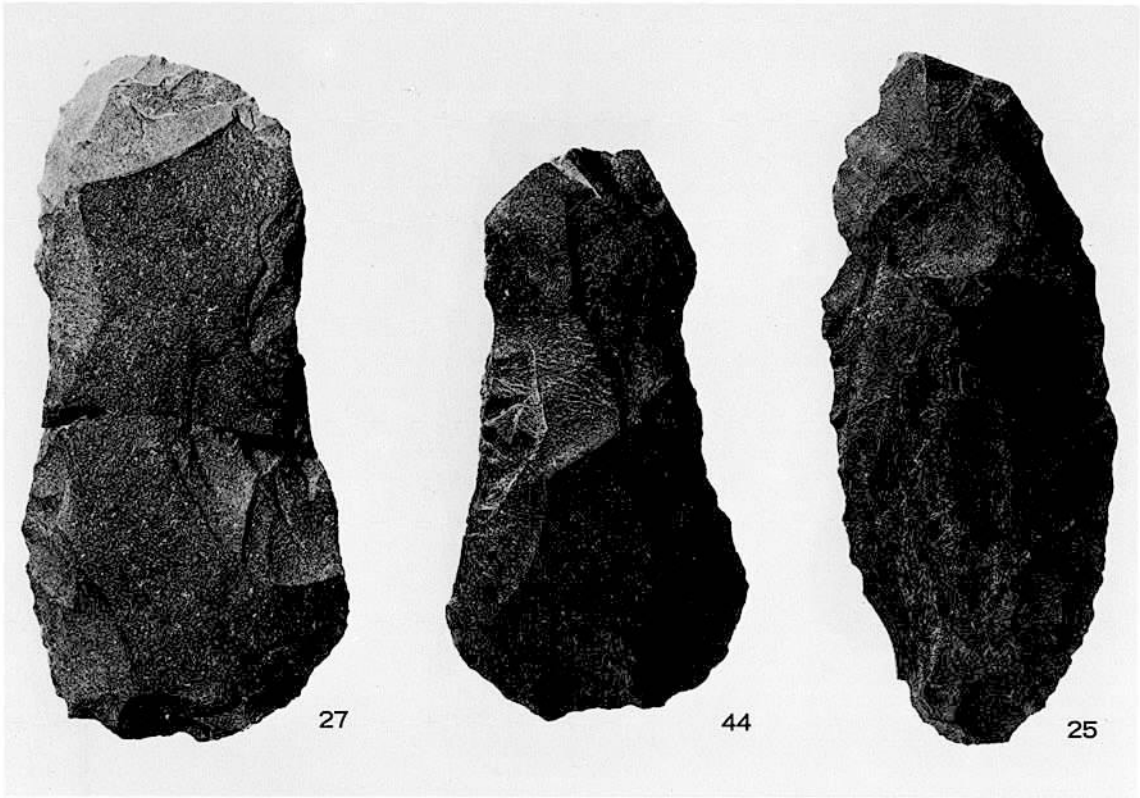


土器の細部１　植物の混入・底部圧痕　（実大）

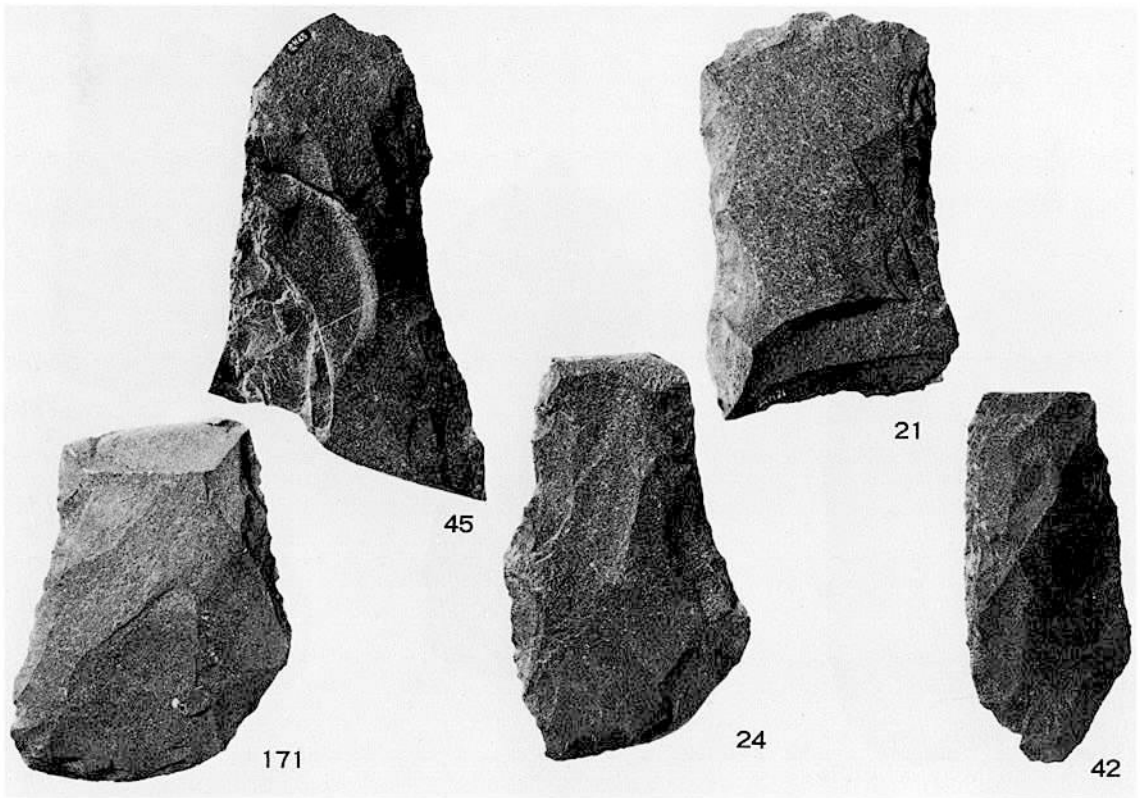
図版　26



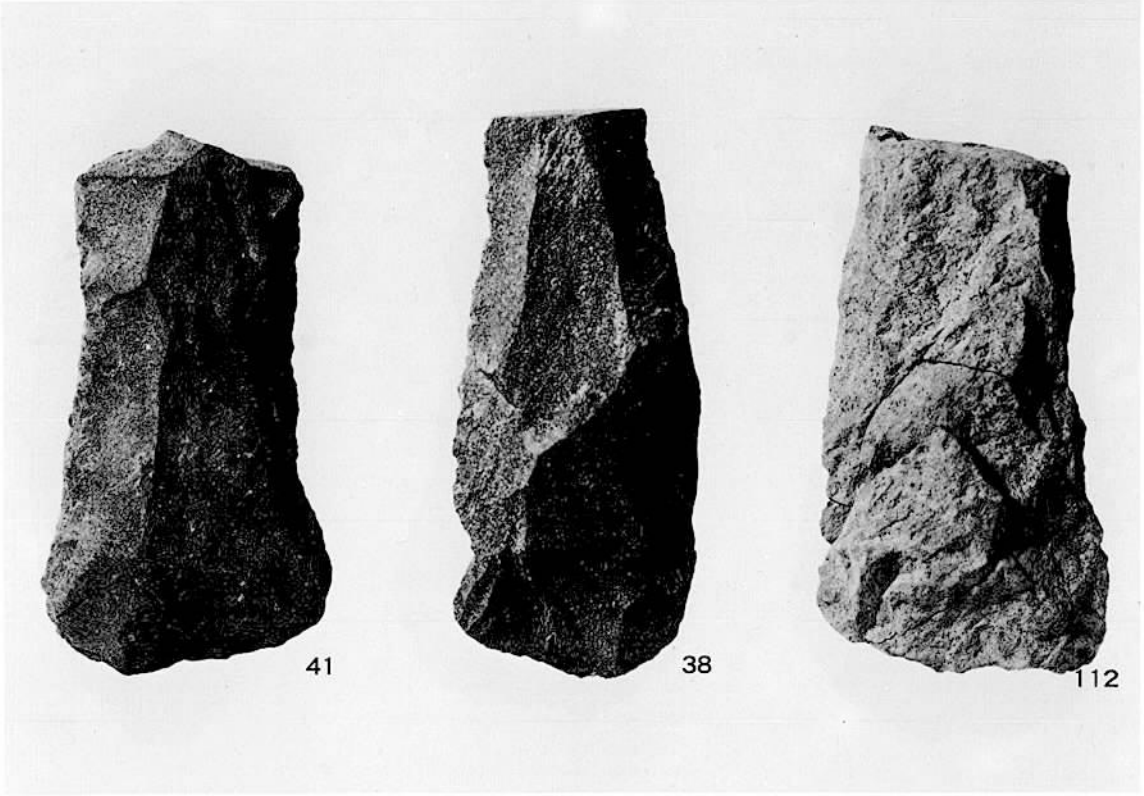
土器の細部２　金雲母の混入・調整　（実大）



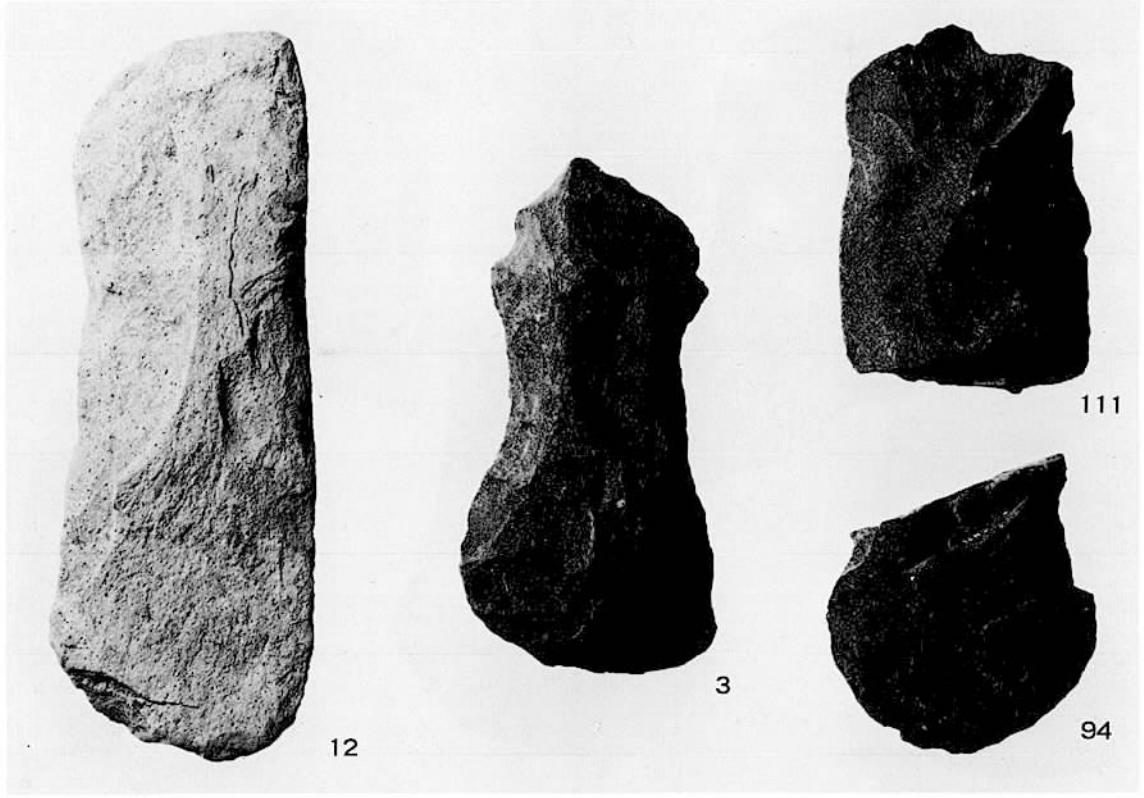
1　打製石斧１　（Ⅰ群共伴）（½）



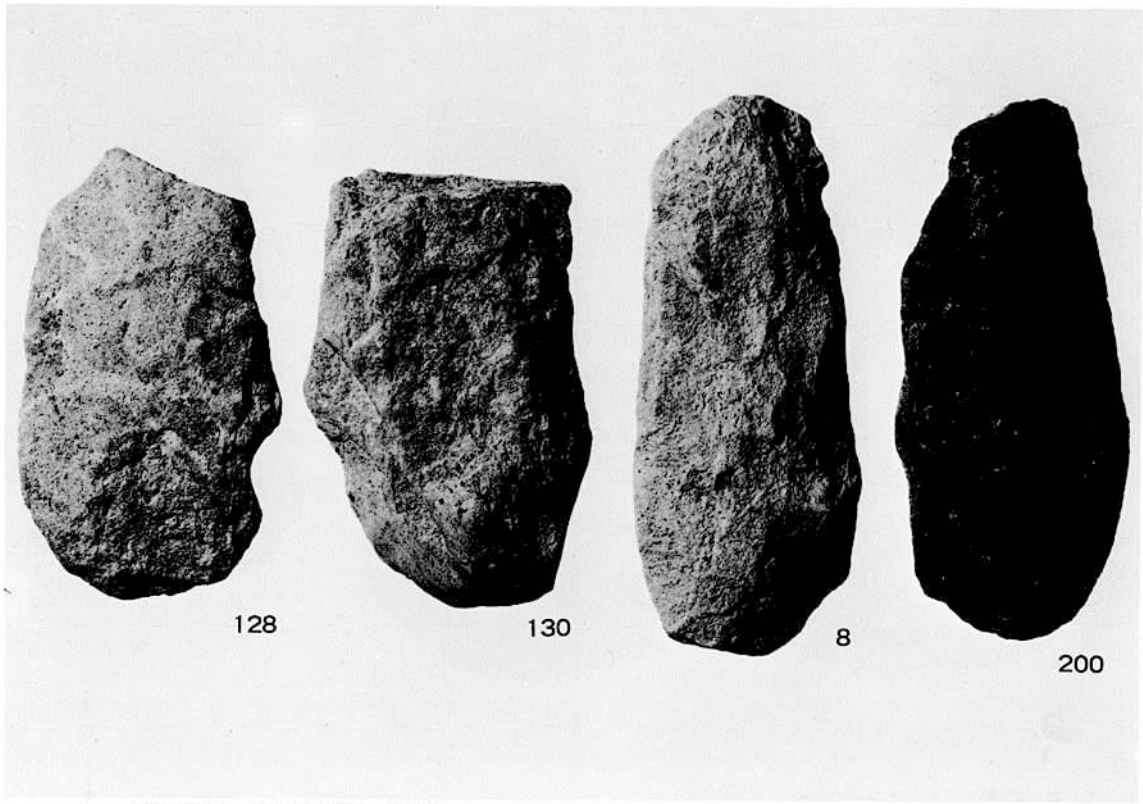
2　打製石斧２　（Ⅰ群共伴）（½）



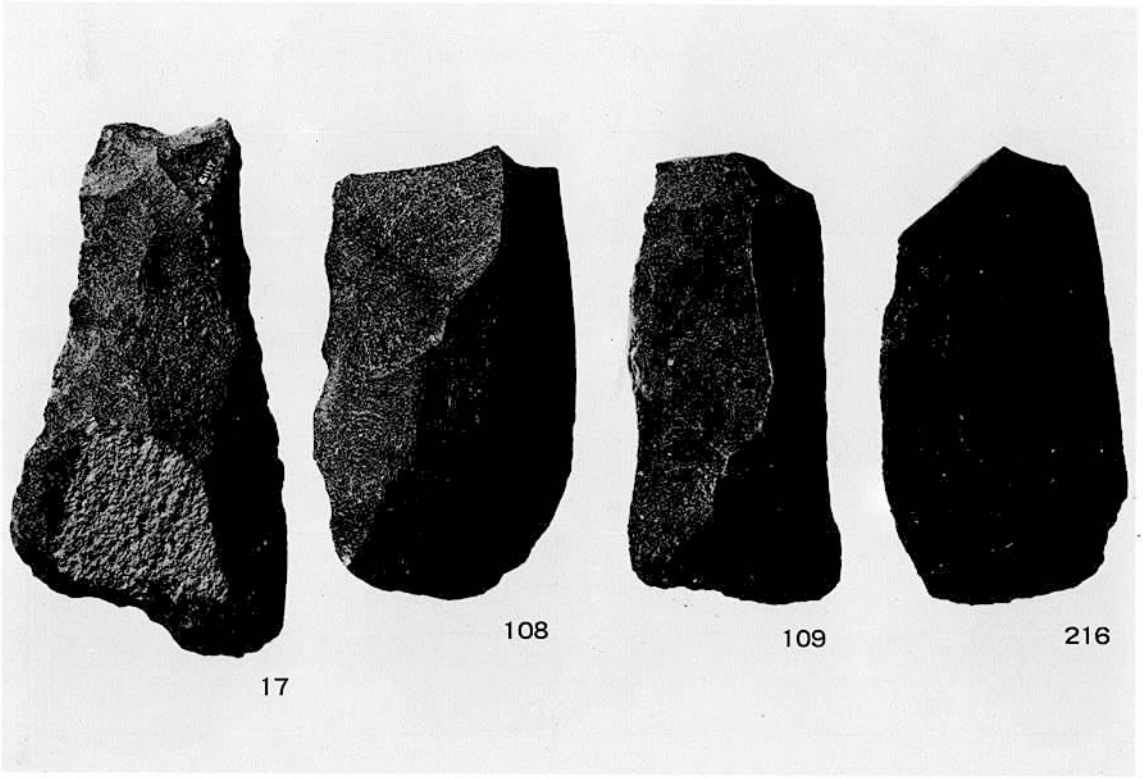
1　打製石斧３　（Ⅰ群共伴）（½）



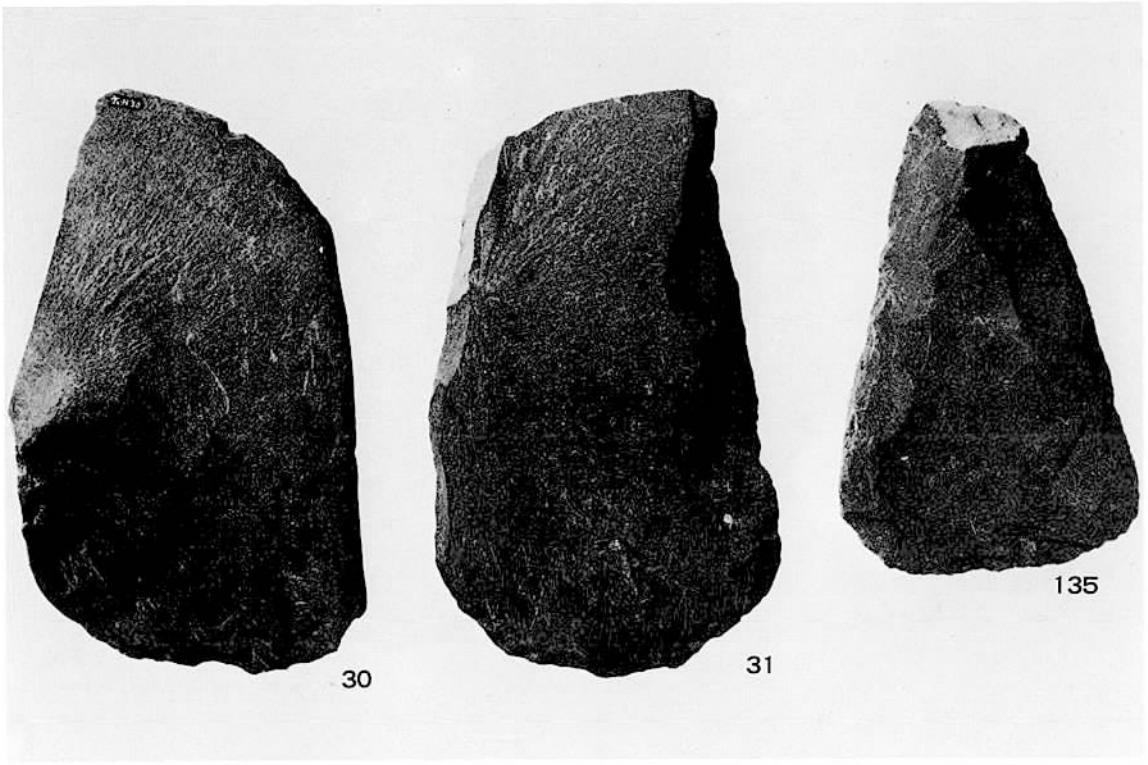
2　打製石斧４　（Ⅱ群共伴）（½）



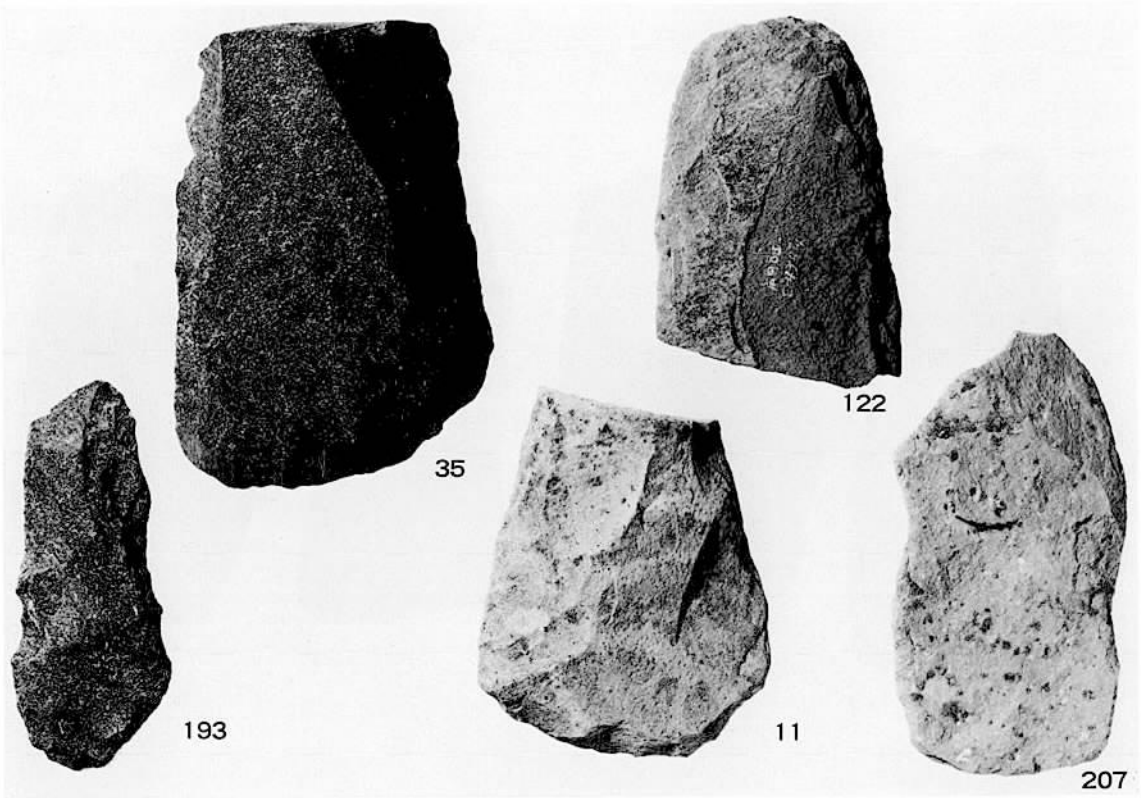
1　打製石斧 5 （Ⅲ群共伴） （½）



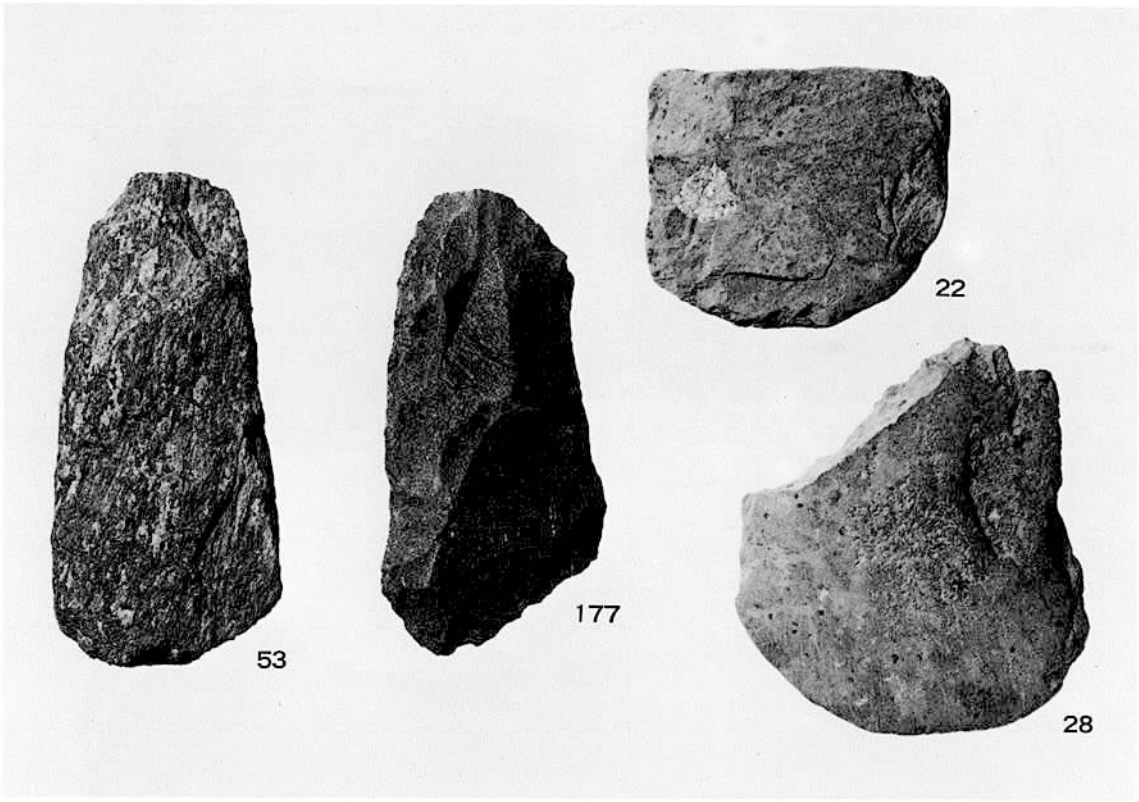
2　打製石斧 6 （Ⅲ群共伴） （½）



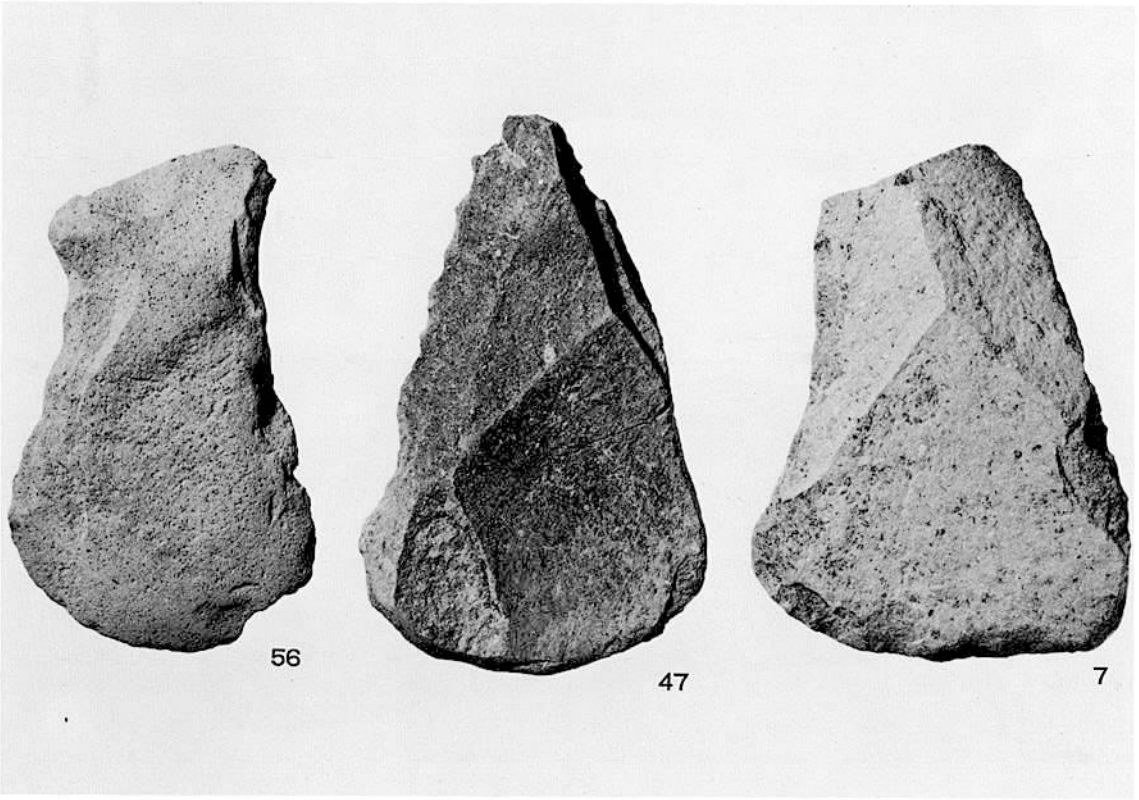
1　打製石斧 7（Ⅲ群共伴）（½）



2　打製石斧 8（Ⅲ・Ⅵ群共伴）（½）



1　打製石斧９　（Ｖ群共伴・その他）（½）



2　打製石斧10　（その他）（½）

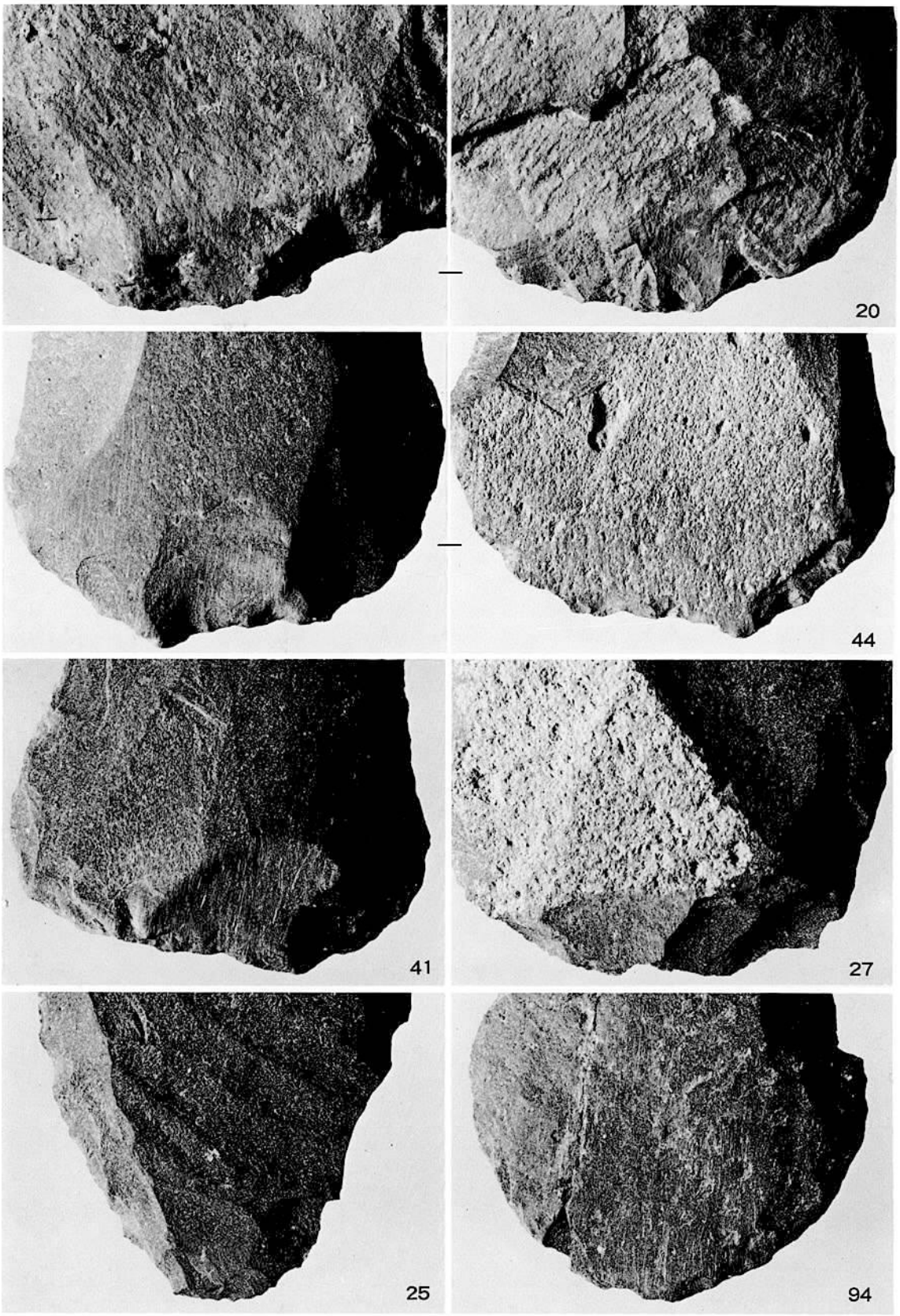
20

46

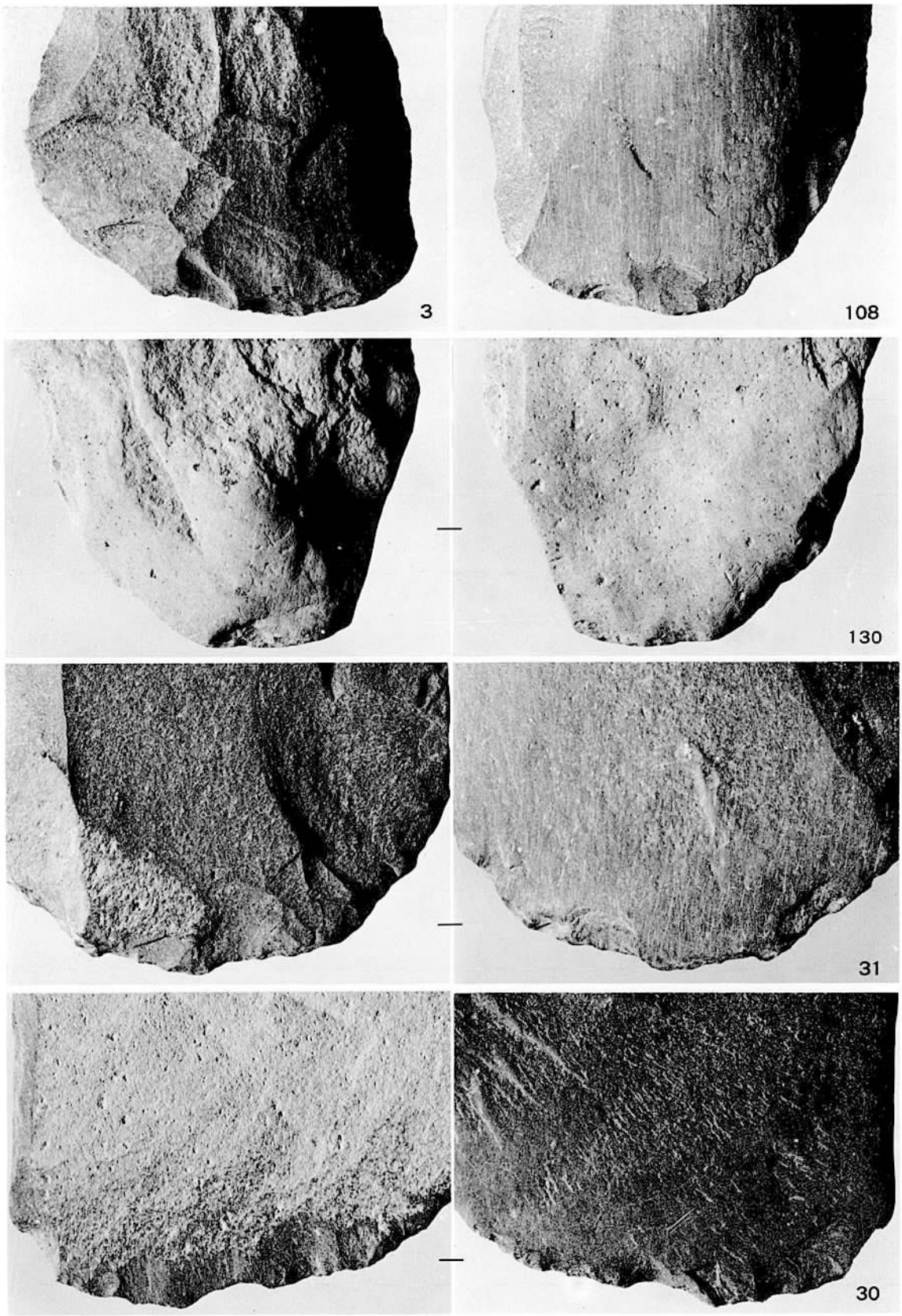
6

打製石斧11 （Ⅰ群共伴・その他）（½）

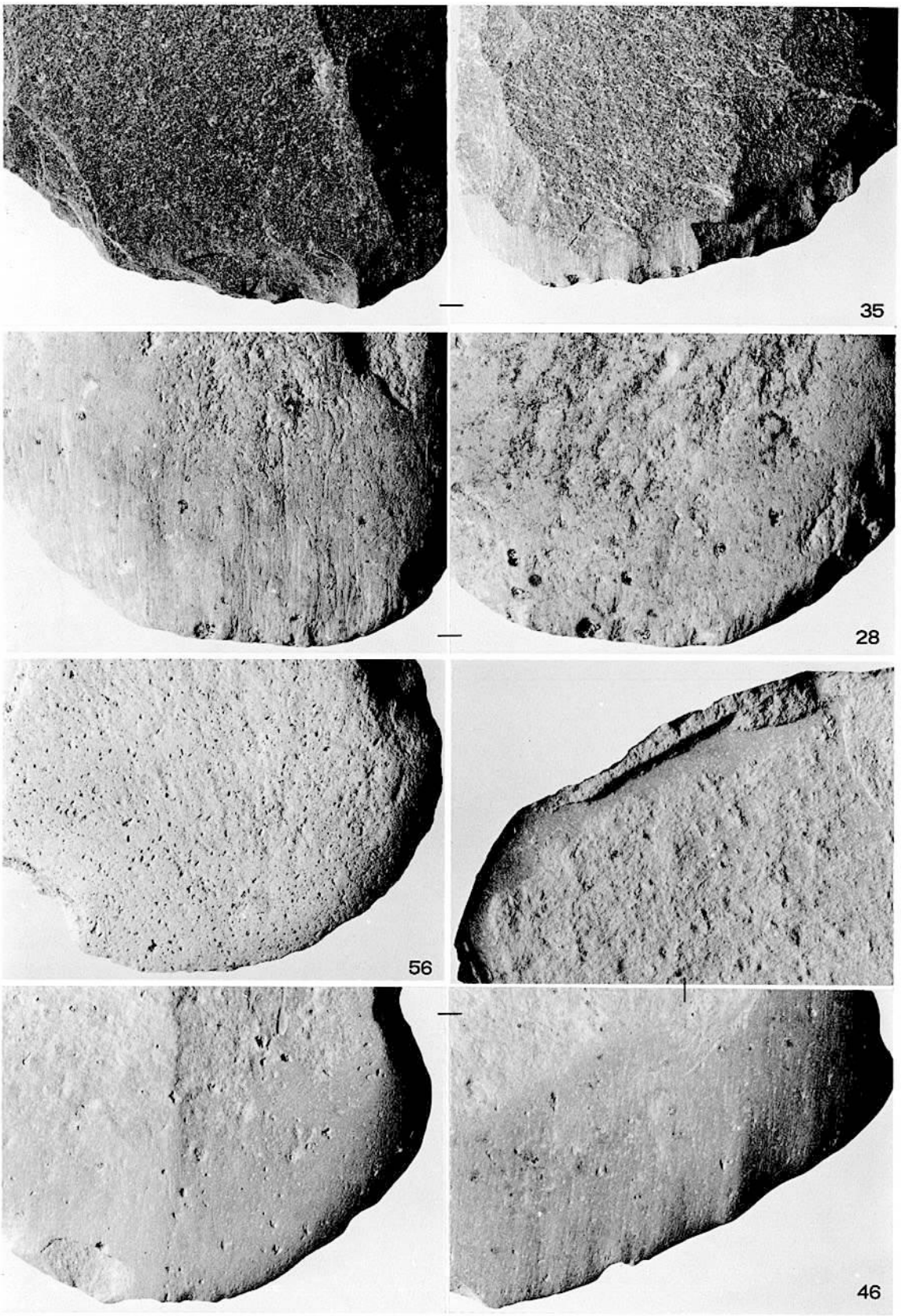
付図　竹戸遺跡遺構配置図　(1/200)



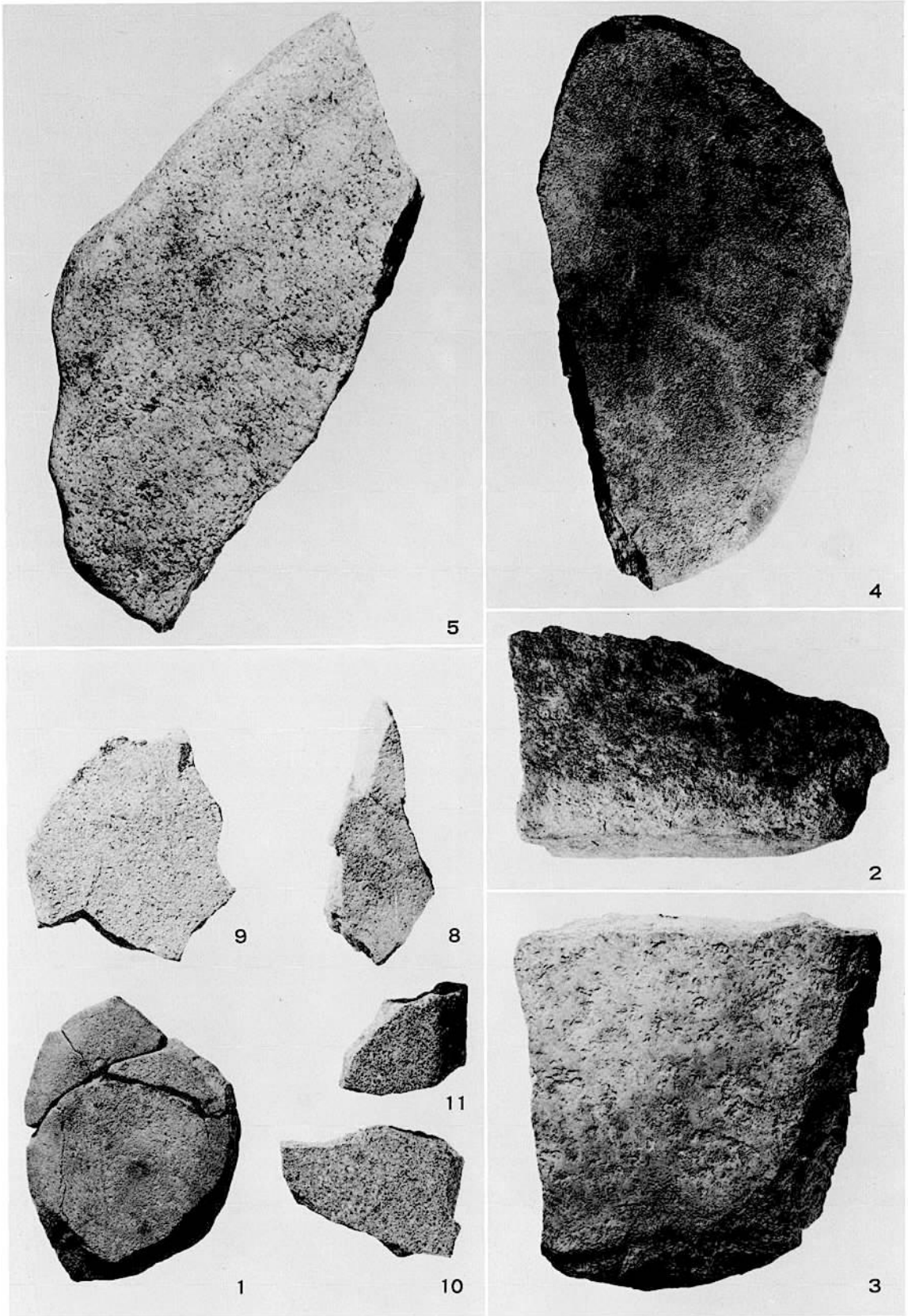
打製石斧刃部１　（実大）



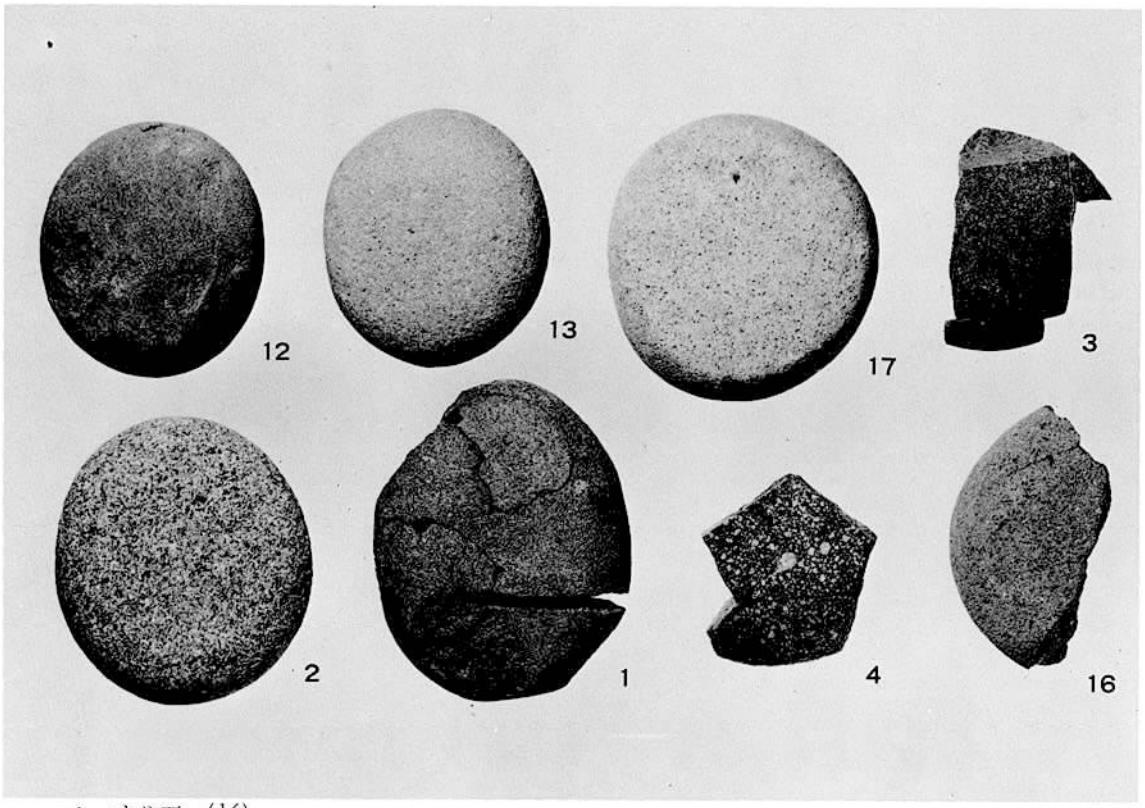
打製石斧刃部２ （実大）



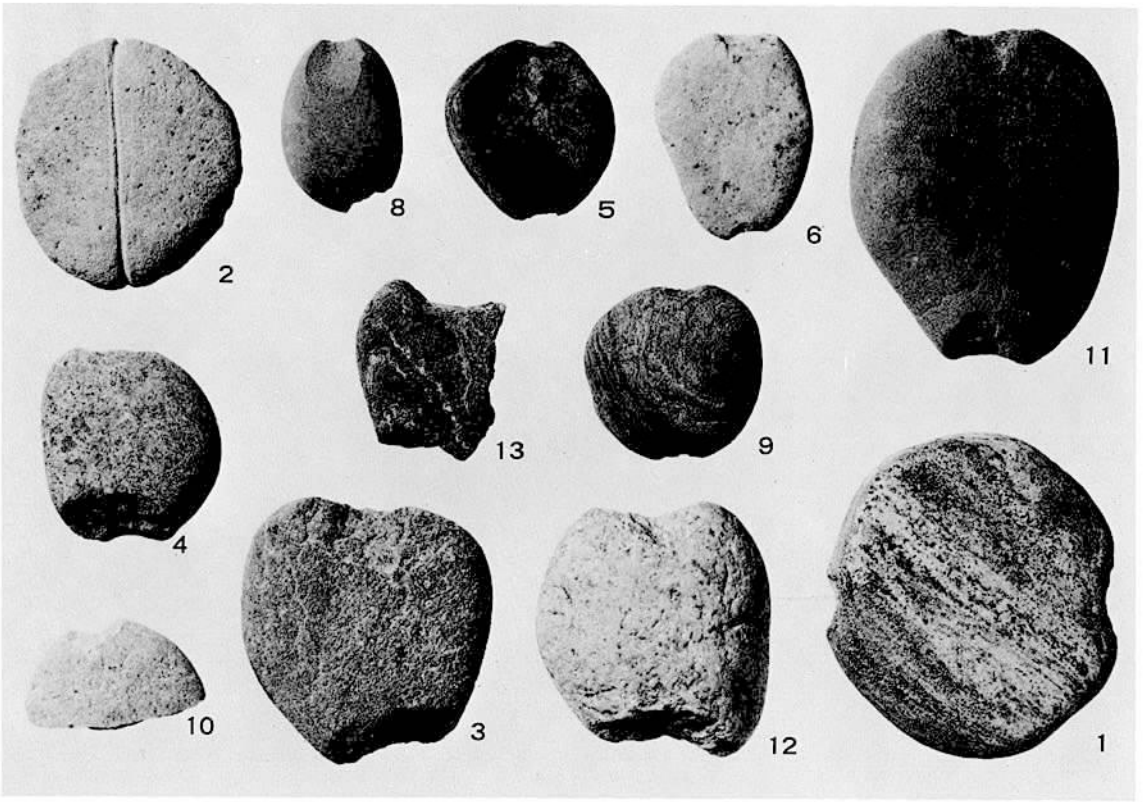
打製石斧刃部3 （実大）



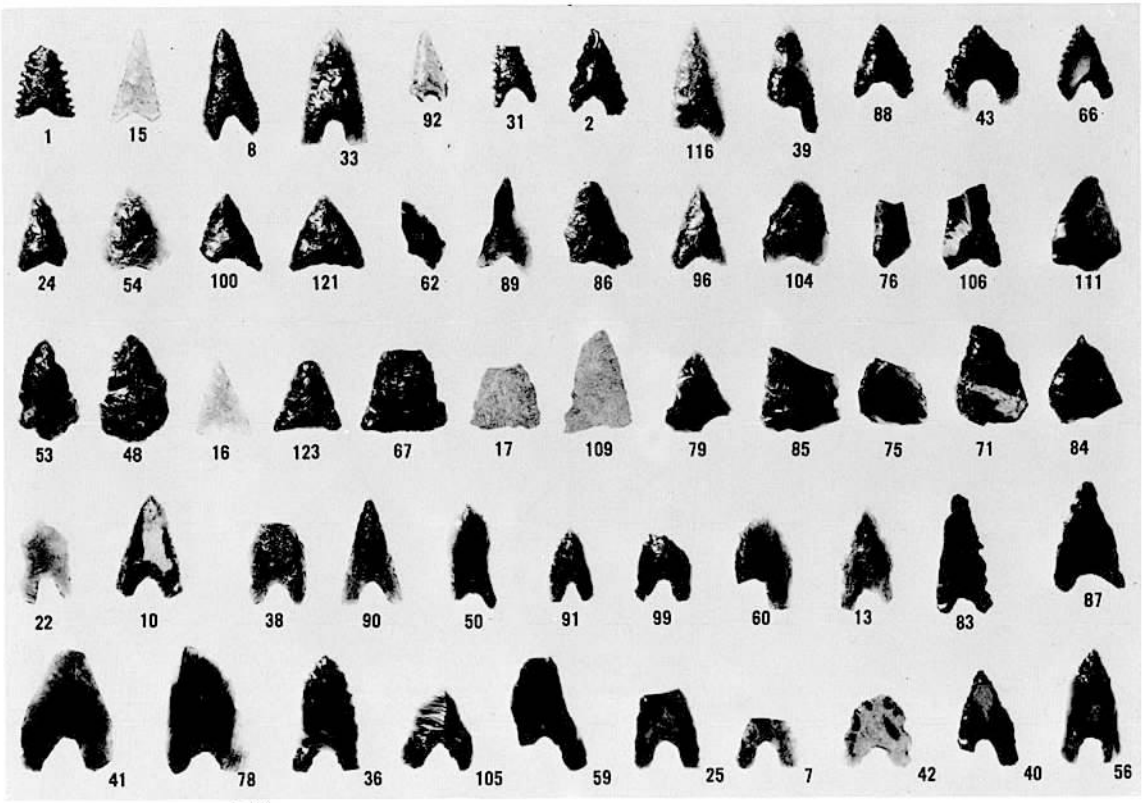
石　皿（¼）



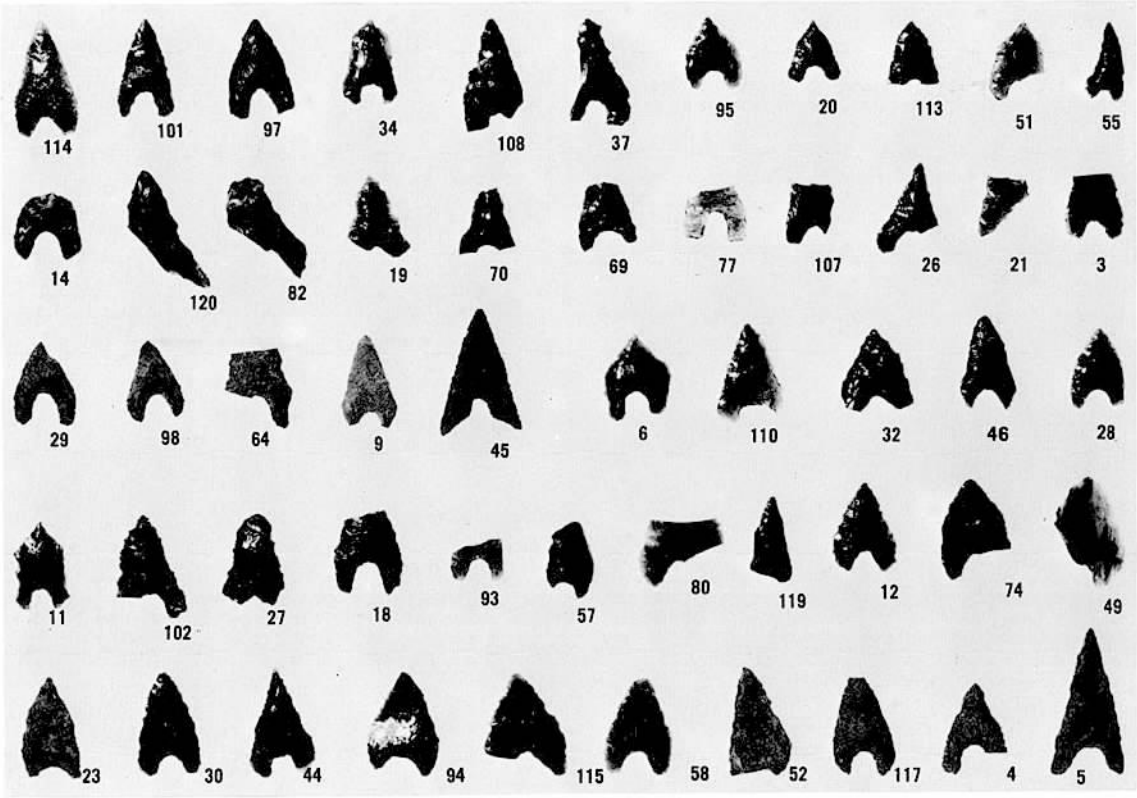
1　すり石　(⅓)



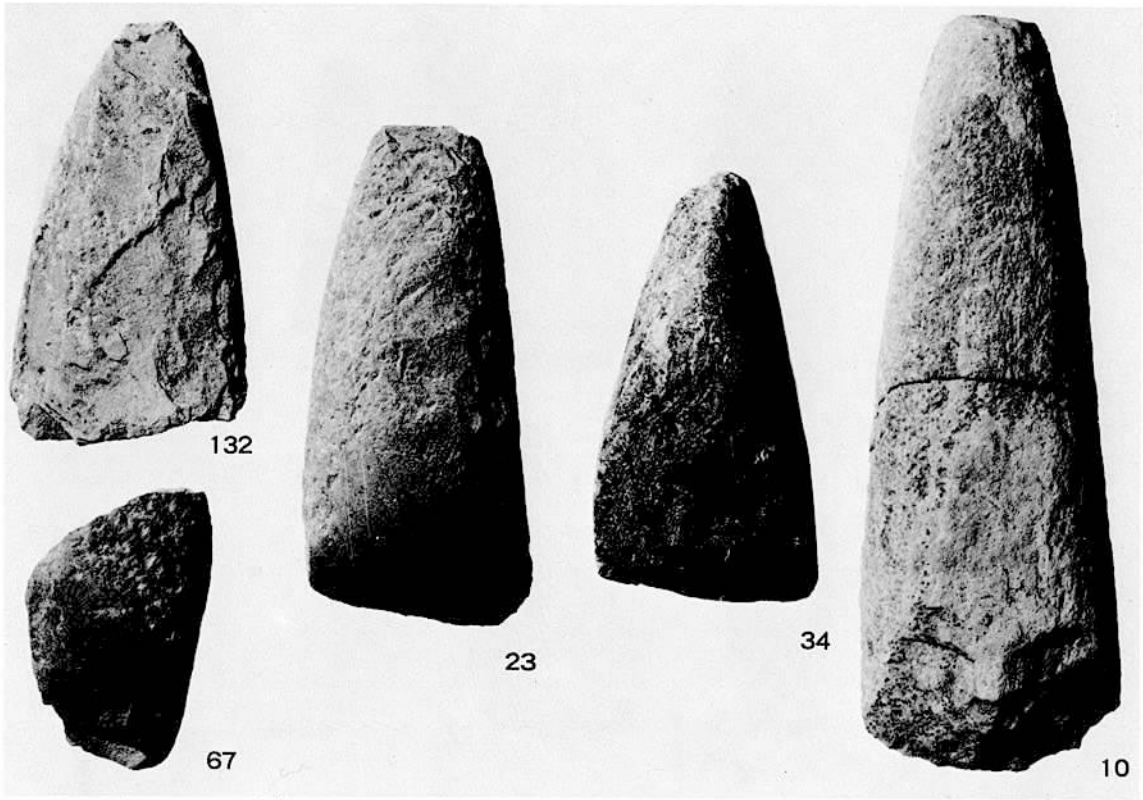
2　石　錘　(½)


1
15
8
33
92
31
2
116
39
88
43
66
24
54
100
121
62
89
86
96
104
76
106
111
53
48
16
123
67
17
109
79
85
75
71
84
22
10
38
90
50
91
99
60
13
83
87
41
78
36
105
59
25
7
42
40
56

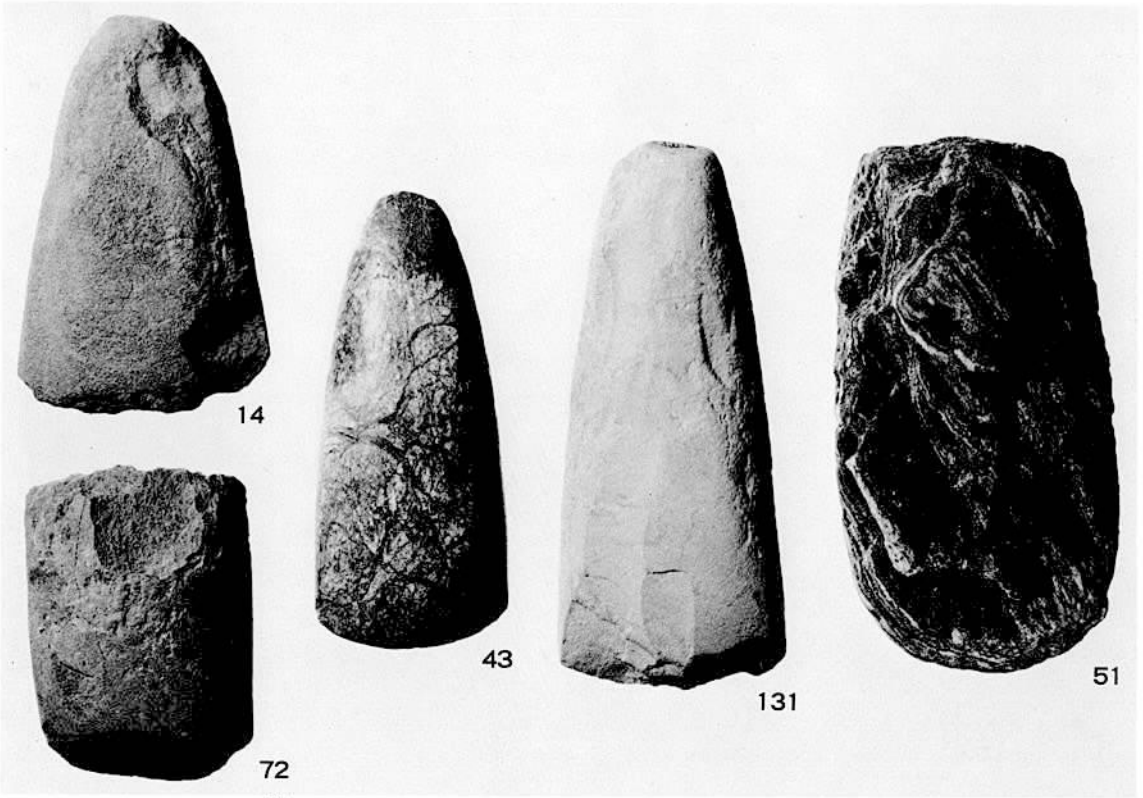
1　石　鏃 1　(½)


114
101
97
34
108
37
95
20
113
51
55
14
120
82
19
70
69
77
107
26
21
3
29
98
64
9
45
6
110
32
46
28
11
102
27
18
93
57
80
119
12
74
49
23
30
44
94
115
58
52
117
4
5

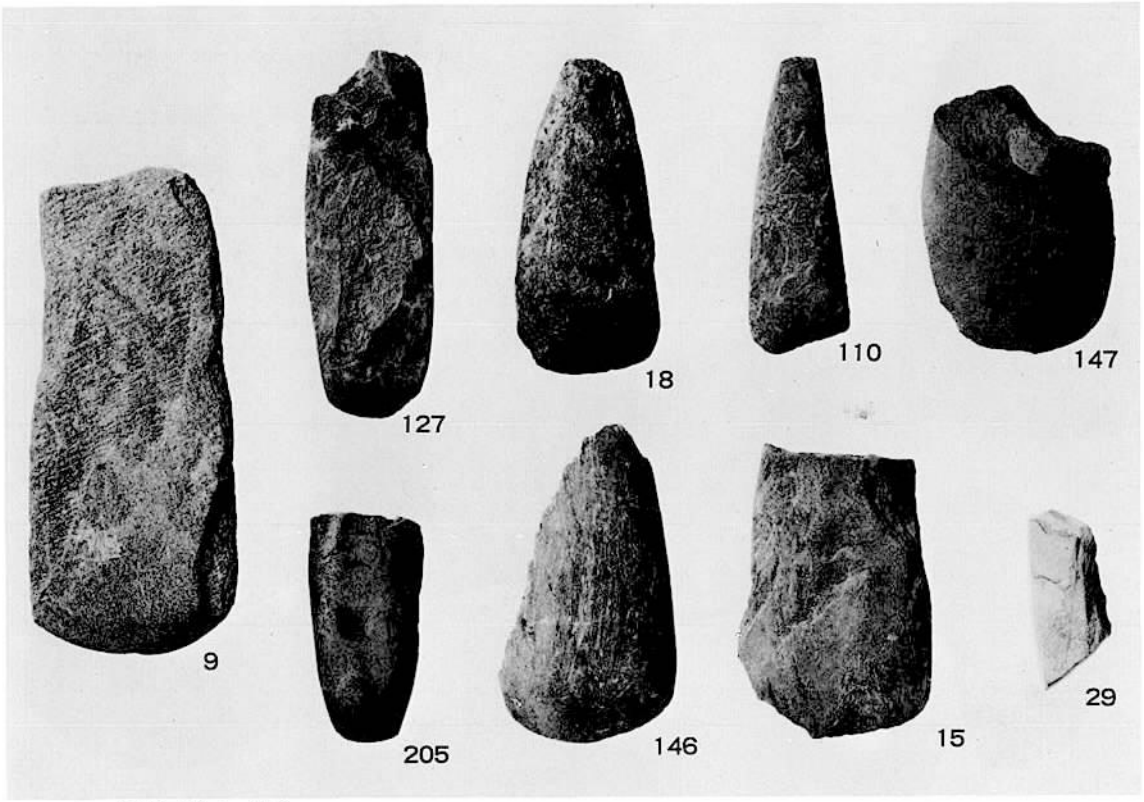
2　石　鏃 2　(½)



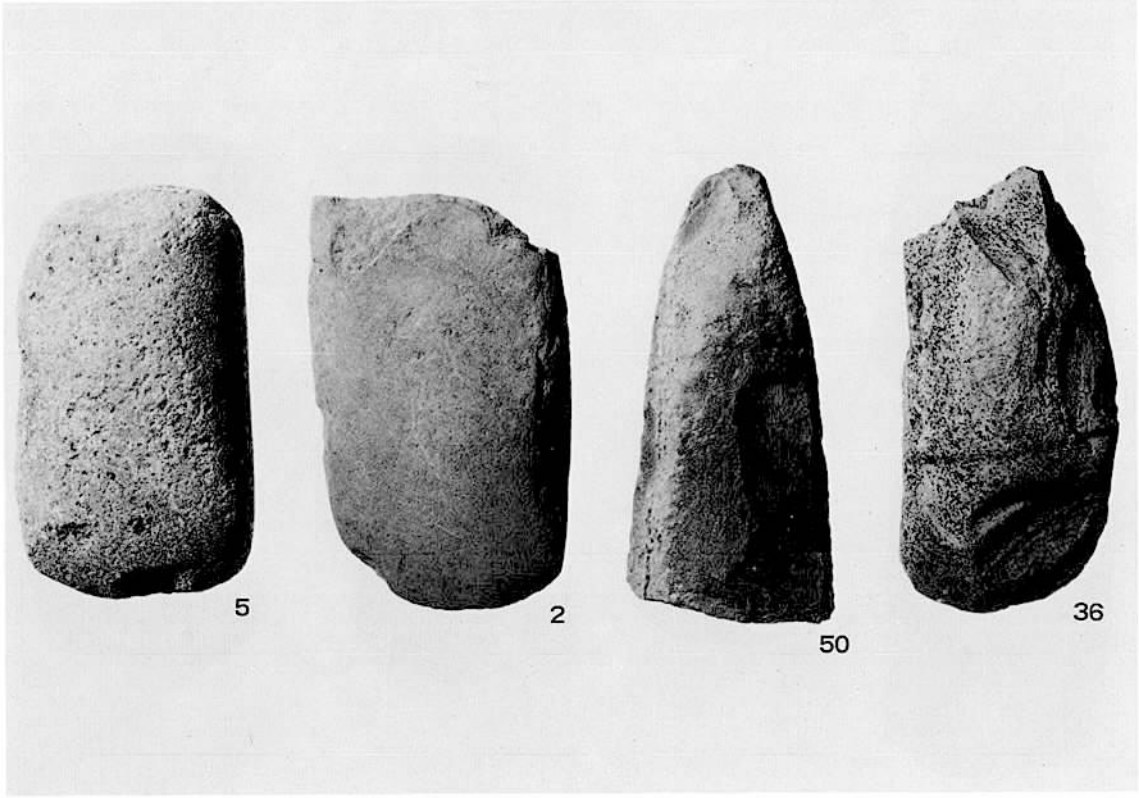
1　磨製石斧１　（½）



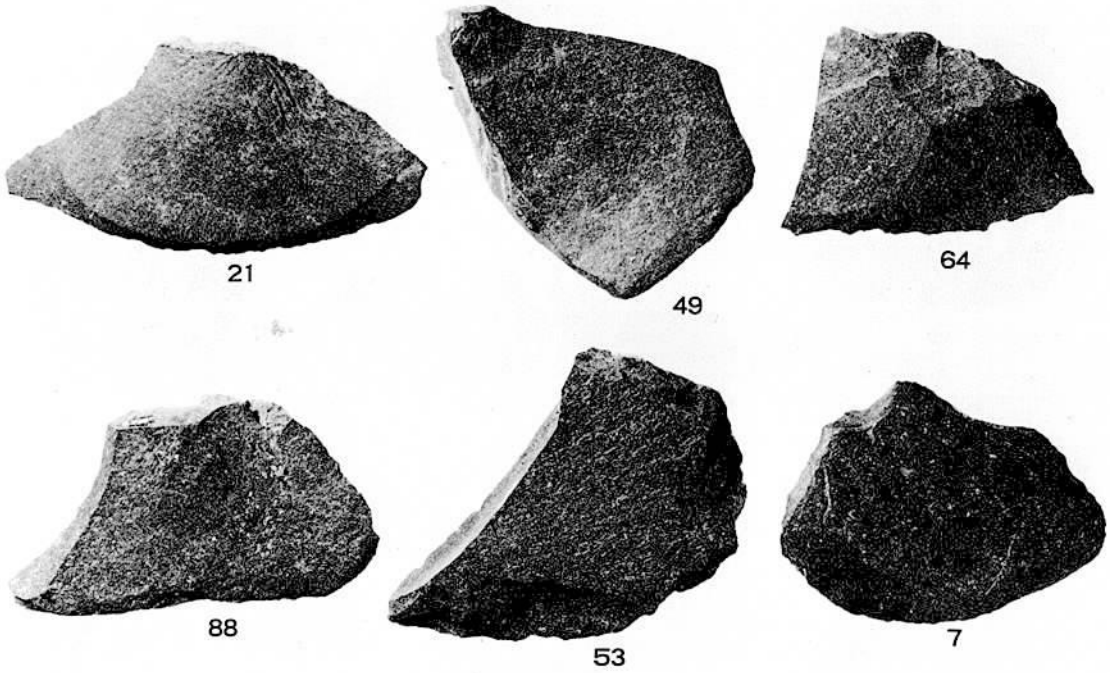
2　磨製石斧２　（½）



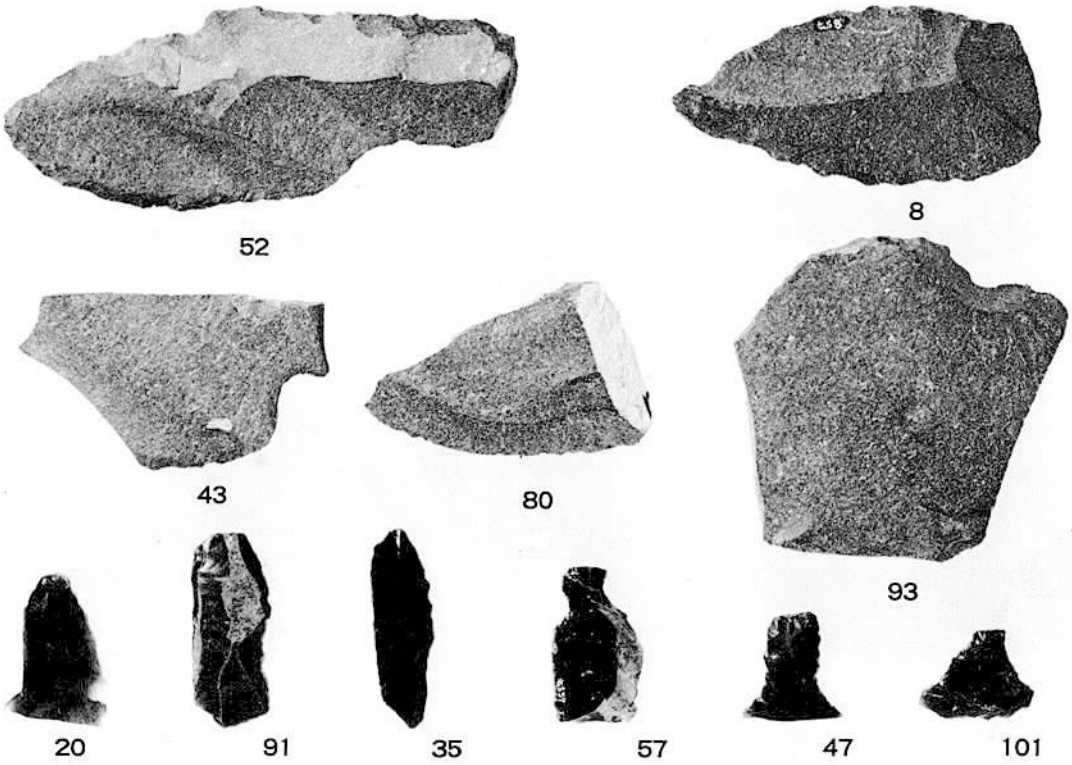
1　磨製石斧 3 （½）



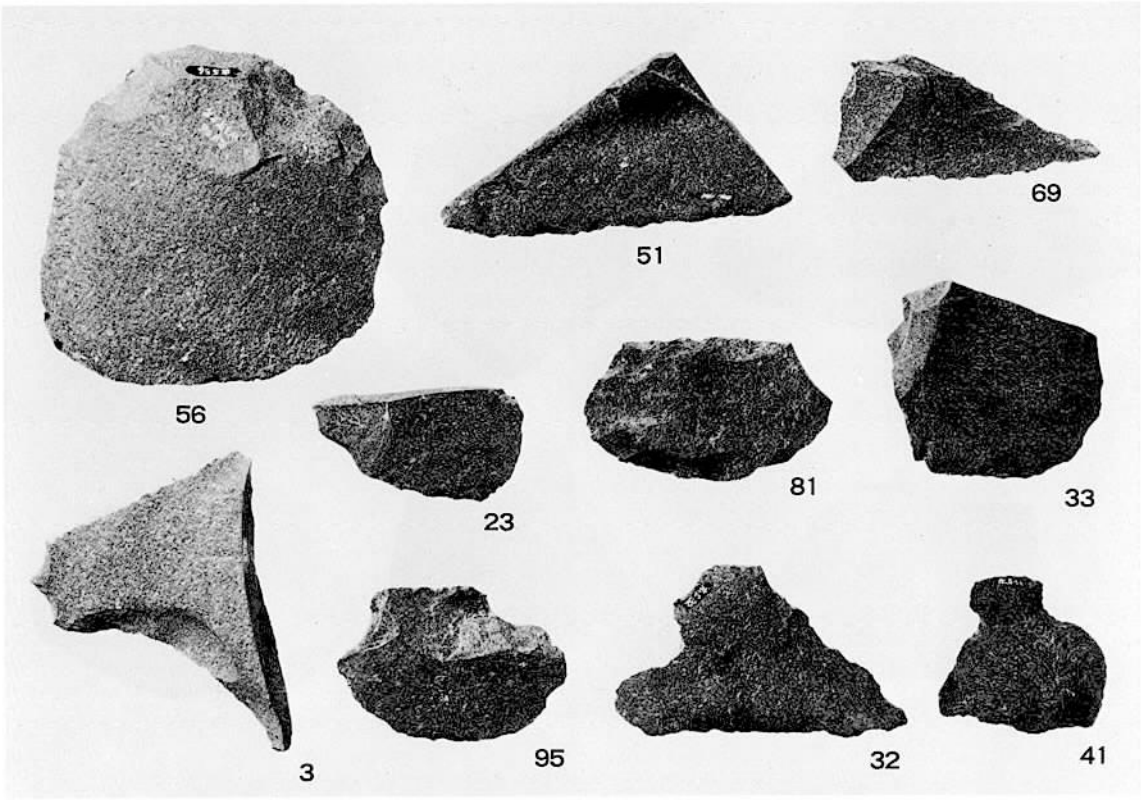
2　磨製石斧 4 （½）



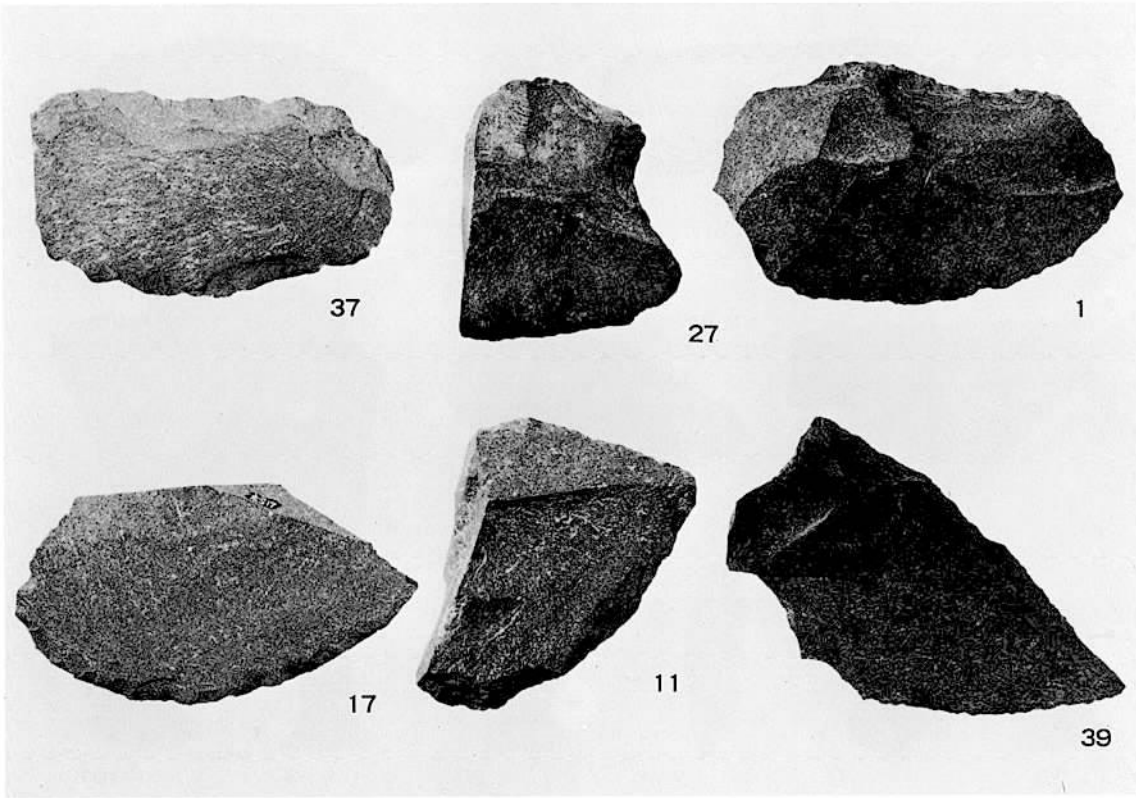
1　削器・掻器1　(½)



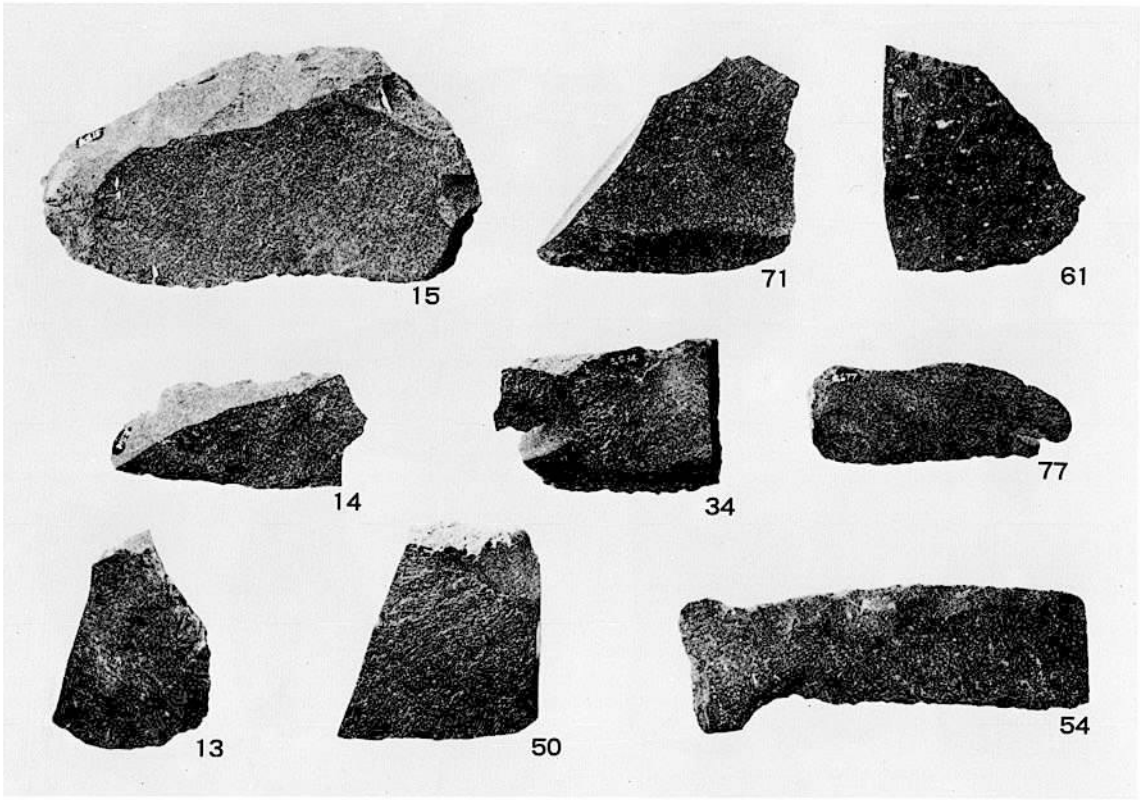
2　削器・掻器・石鏃2　(½)



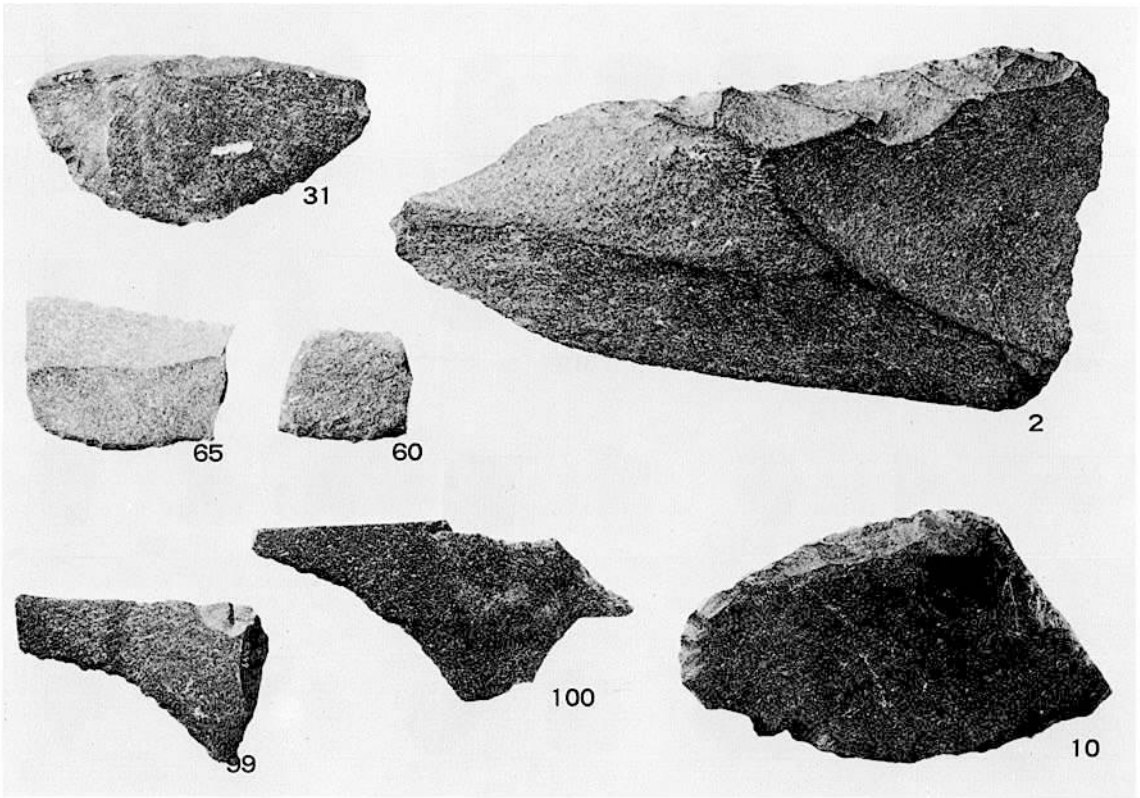
1　削器・掻器3　(½)



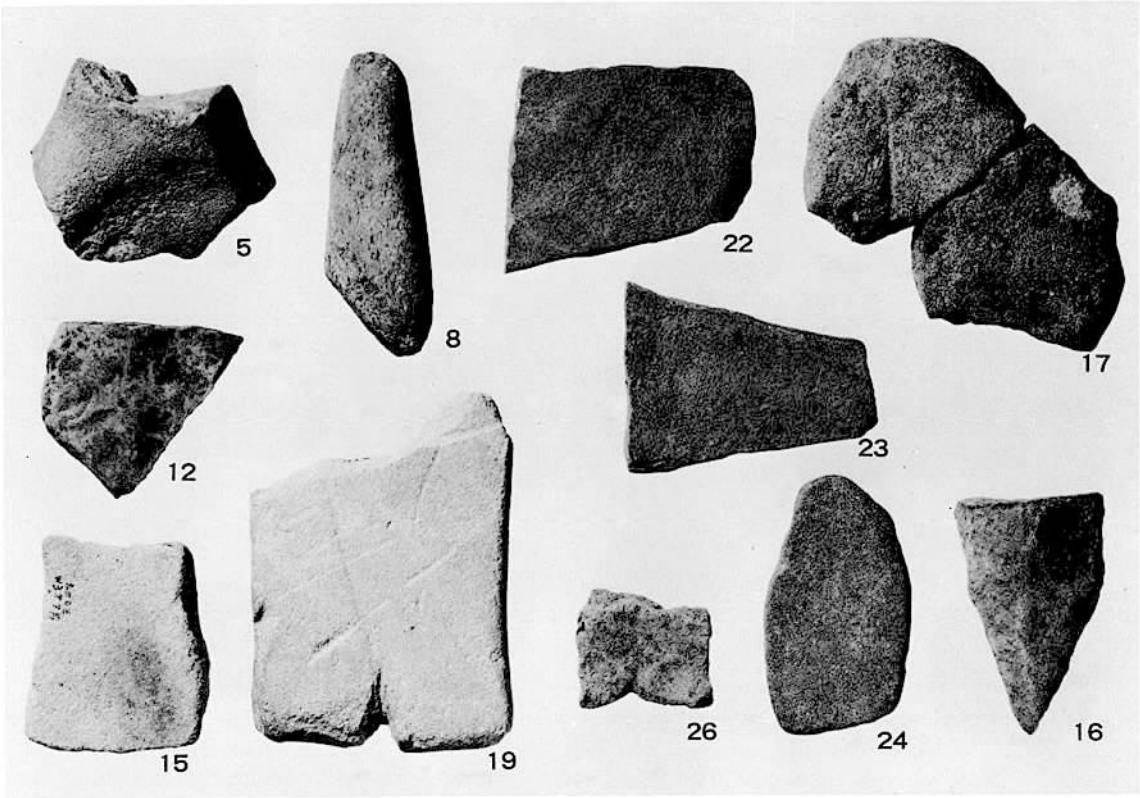
2　削器・掻器4　(½)



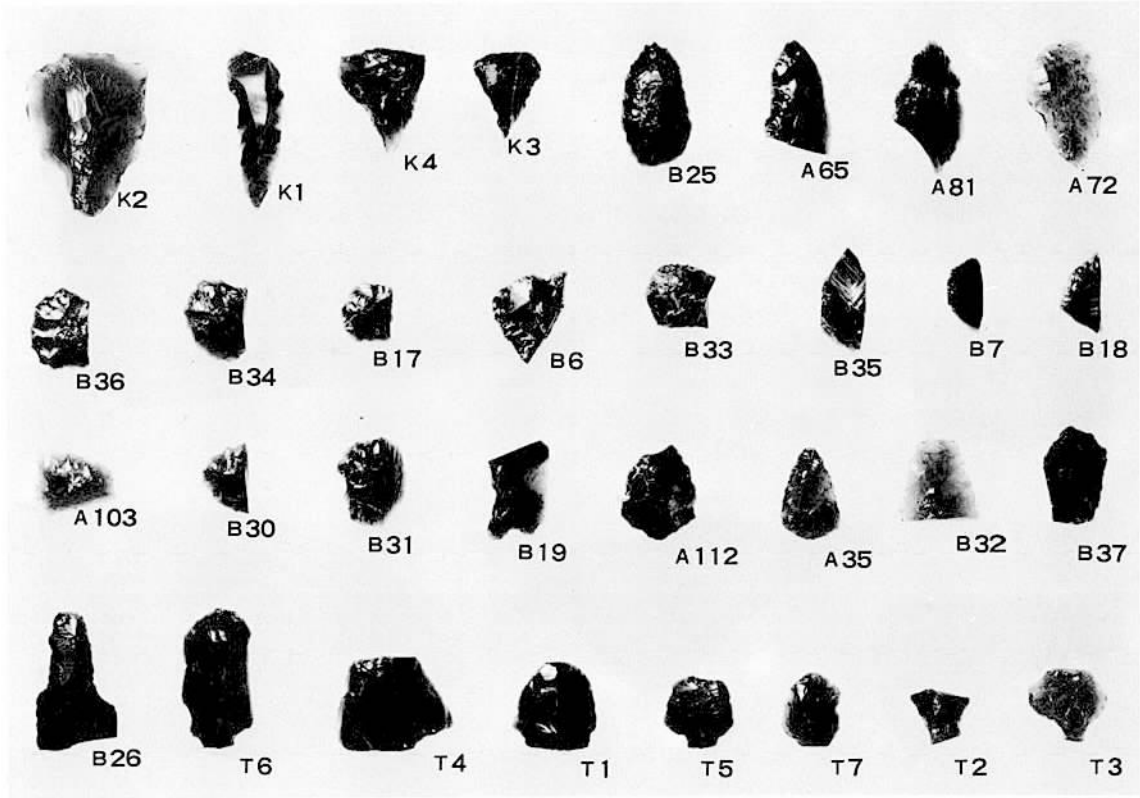
1　削器・掻器・石鎌5　(½)



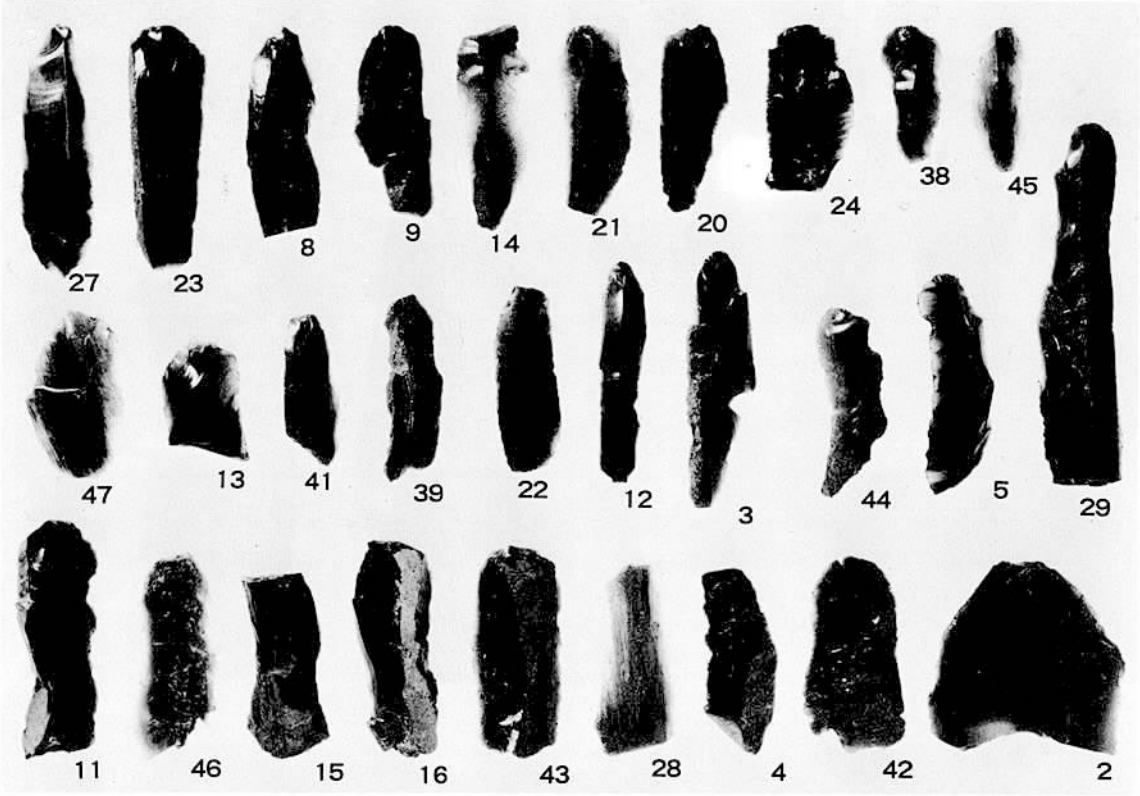
2　削器・掻器6　(½)



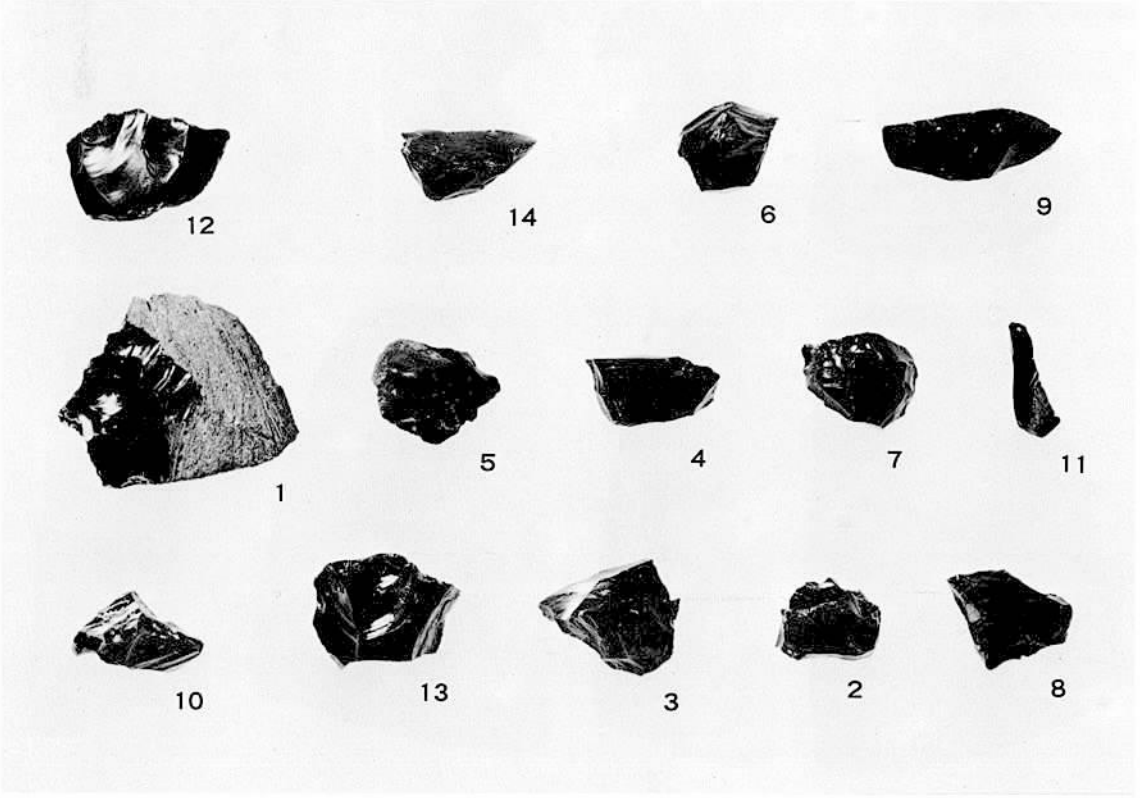
1　砥　石（½）



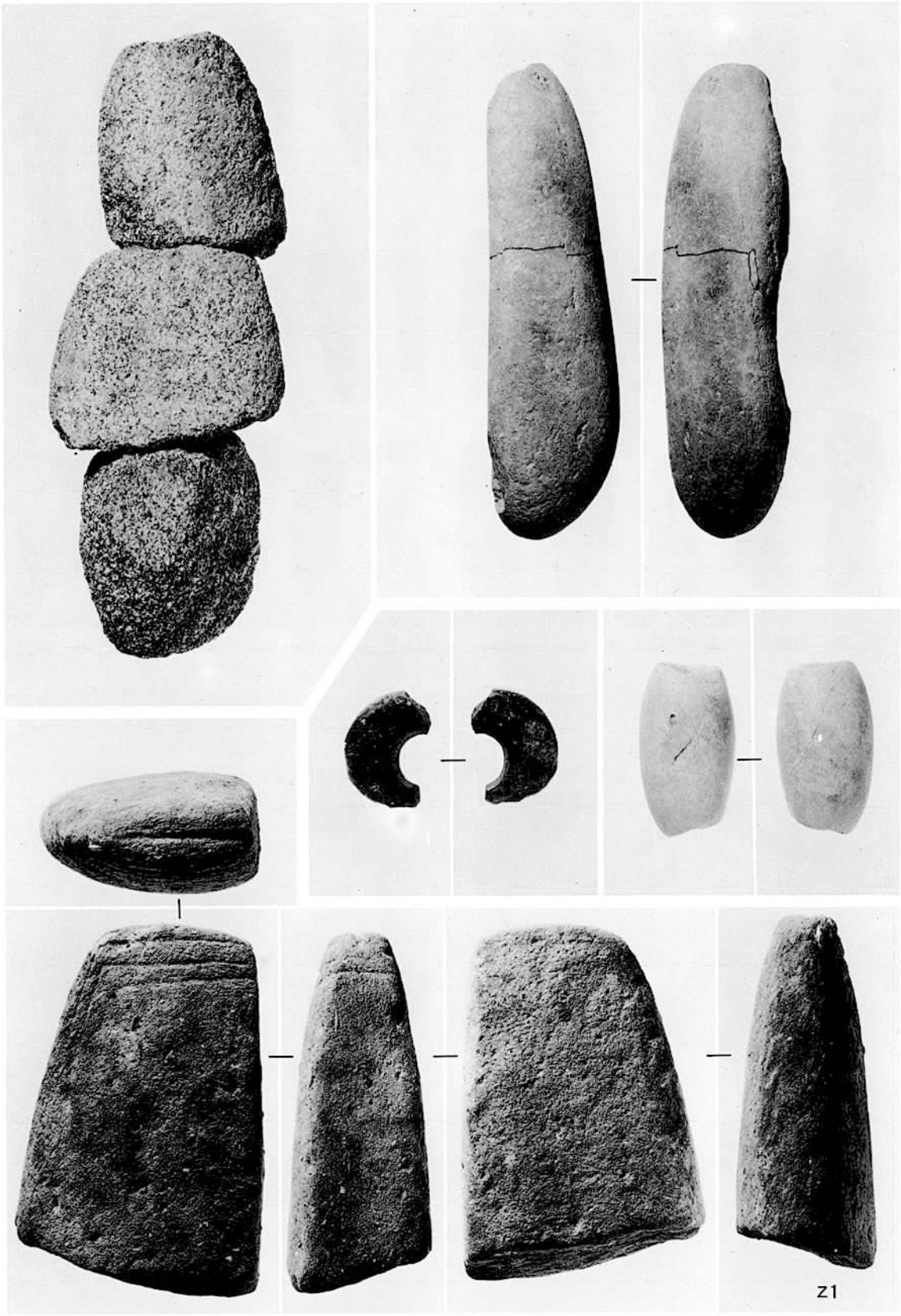
2　石錐，石刃６・７類，つまみ形石器　（½）



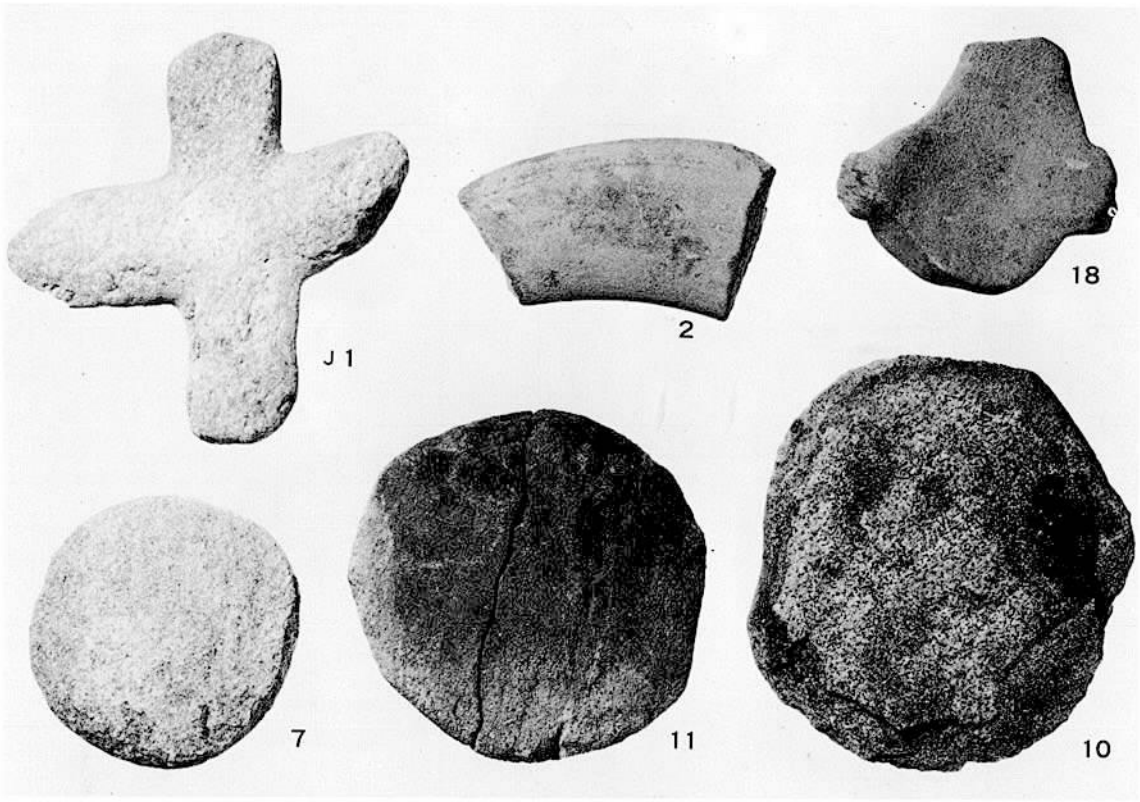
1　石刃1～5類　(½)



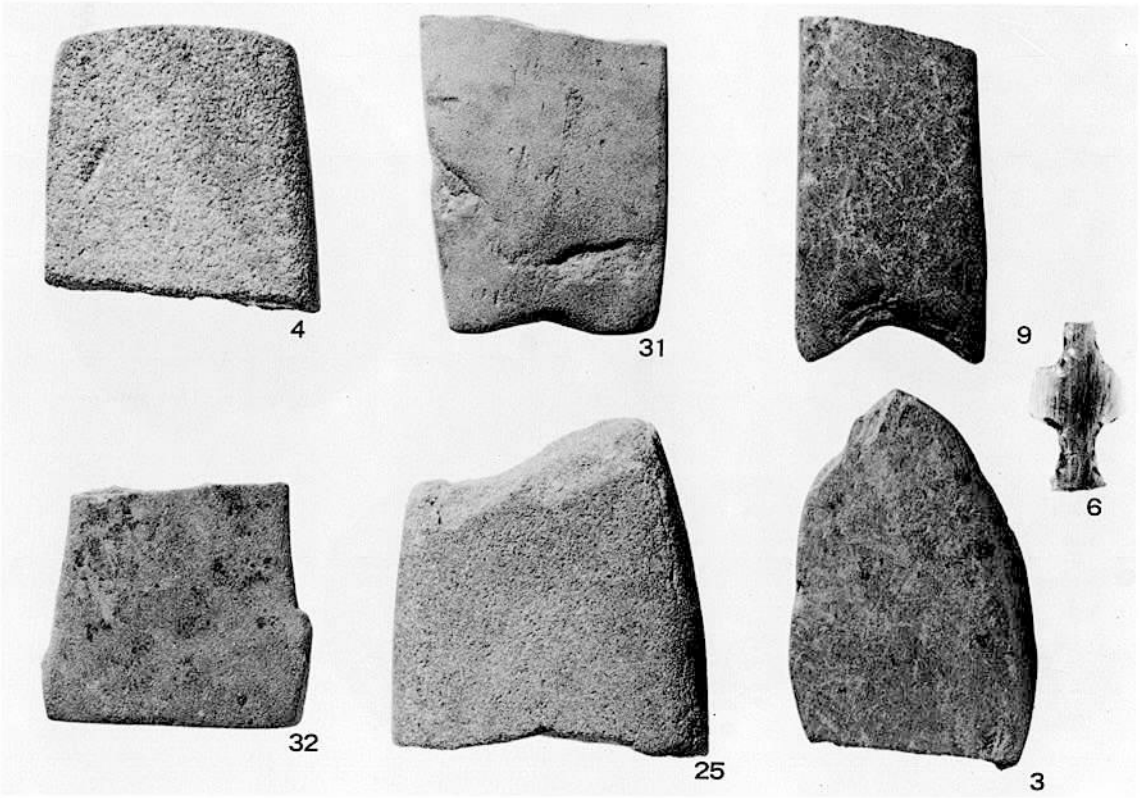
2　石　核　(½)



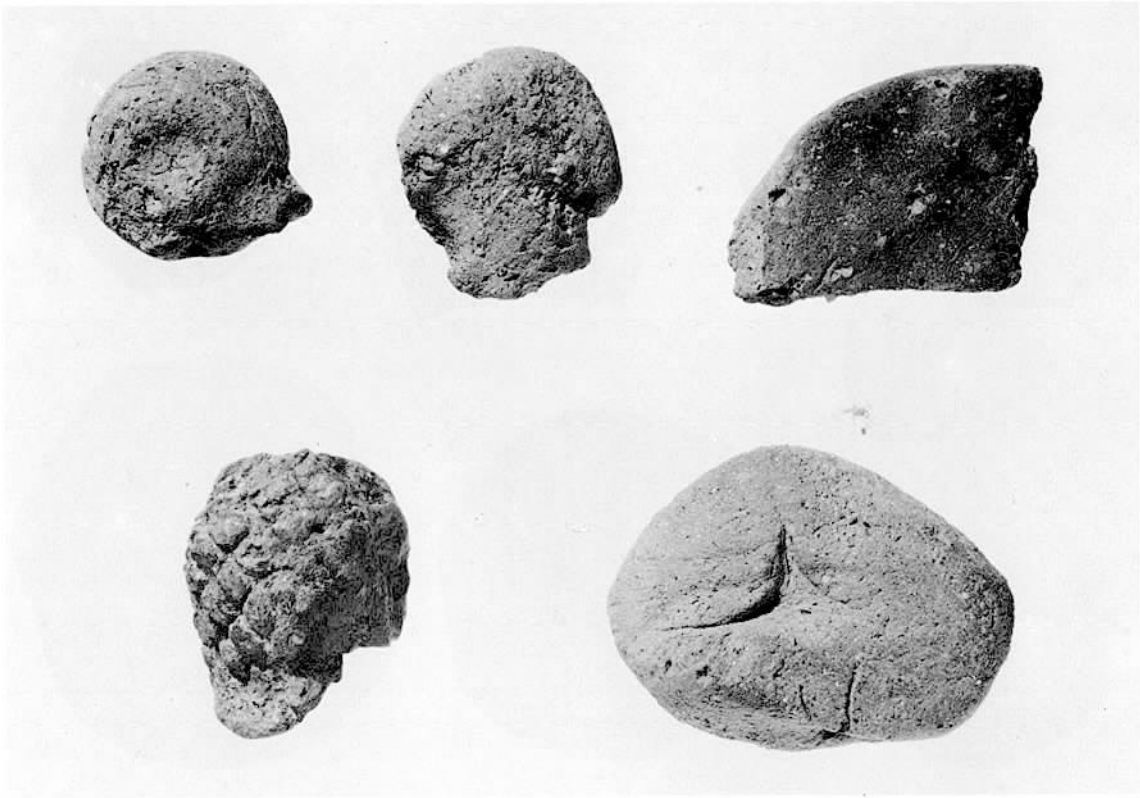
石柱・石棒　(⅓)，玉類　(実大)，御物石器　(½)



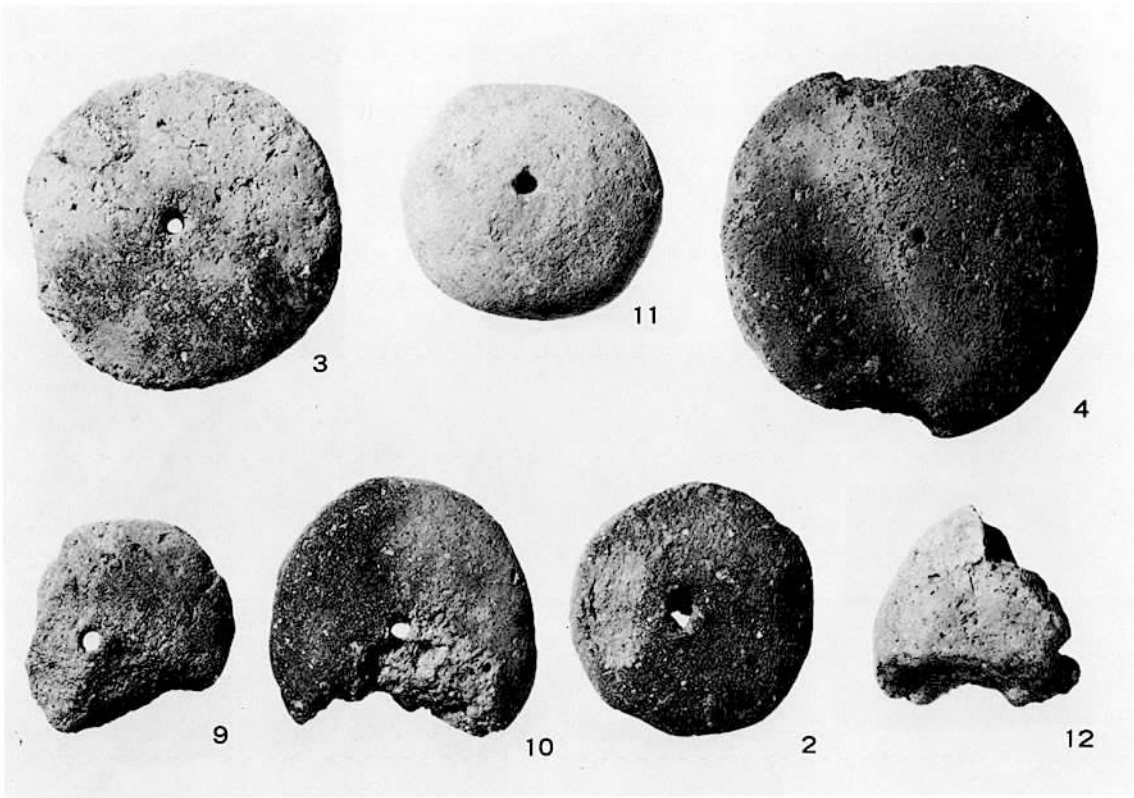
1　石製品 2 （½）



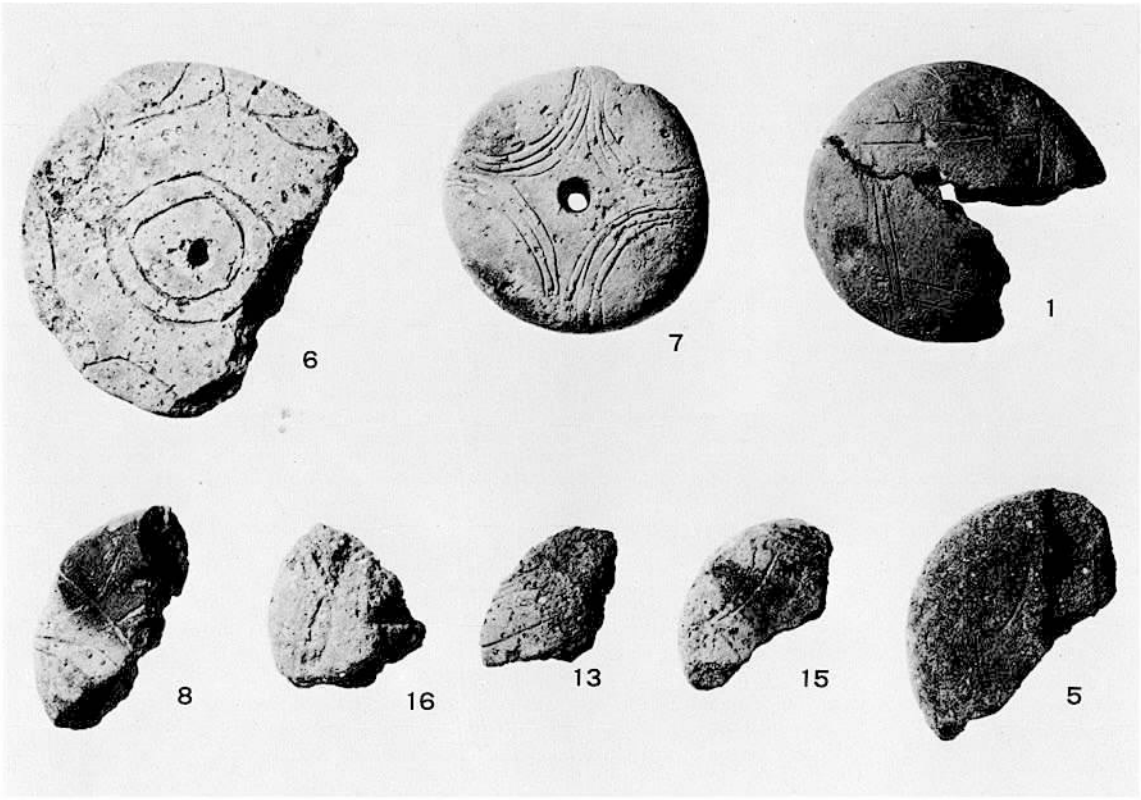
2　石製品 3 （実大）



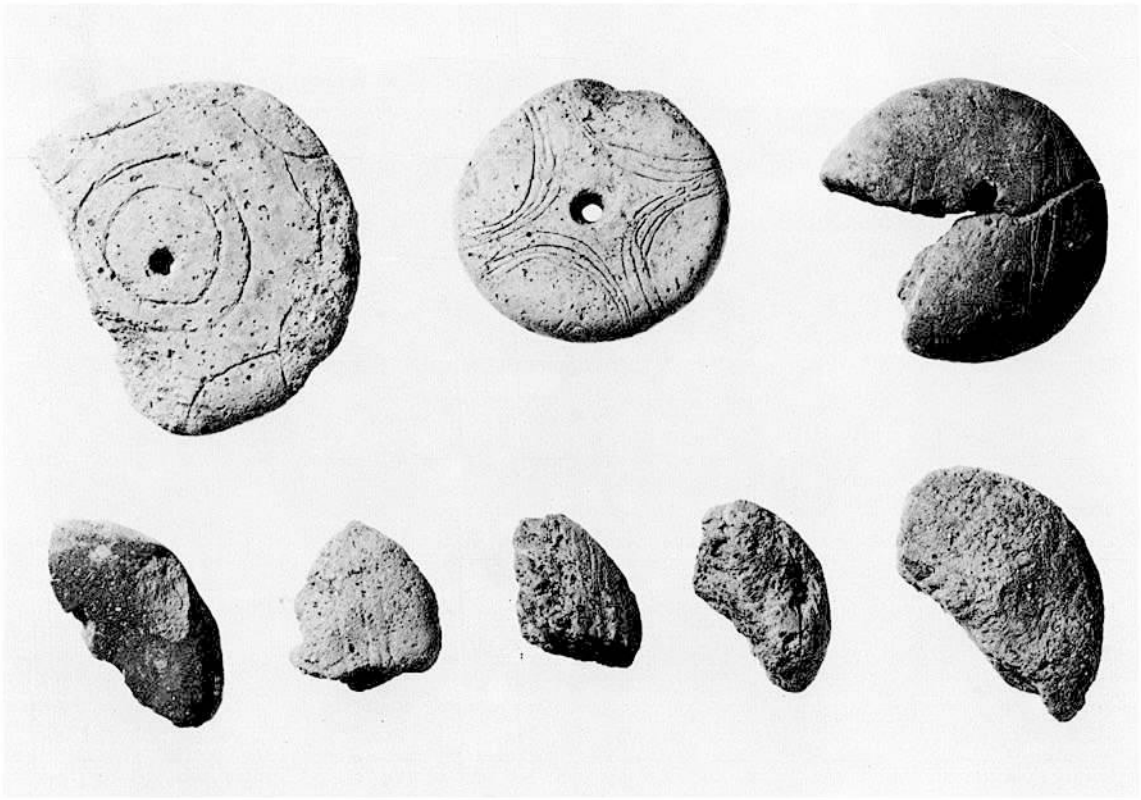
1　土偶・版状土製品　（実大）



2　土製紡錘車３・４類　（½）



1　土製紡錘車１・２類　(½)



2　土製紡錘車１・２類(裏面)　(½)

1　埋　甕（西から）

2　埋甕使用土器

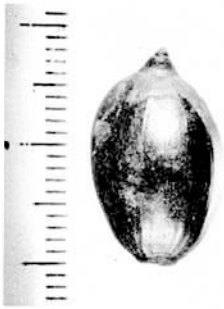
E５ 西 9b層
アズキ？

E５ 西 9b層
アズキ？(子葉１枚)

B４ 9b層 クヌギ？

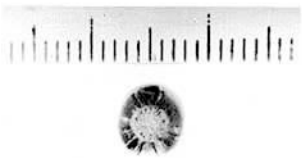
W５ 東 9b層
カシ属子葉

E５ 西 9b層
カシ属(イチイガシ？)の子葉



南北トレンチ ４区 パフン層
カシ属（堅果）

南北トレンチ ４区 パフン層
カシ属（堅果）

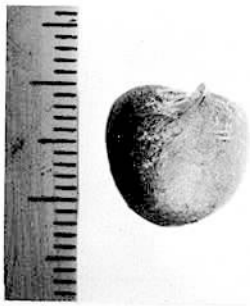


（下より見たところ）
臍点

南北トレンチ ４区 パフン層
カシ属の殻斗(下より見たところ)

南北トレンチ ４区 パフン層
センダンの核
（動物にかじられる）

W３ 下部パフン層
ホルトノキの核
（動物にかじられる）



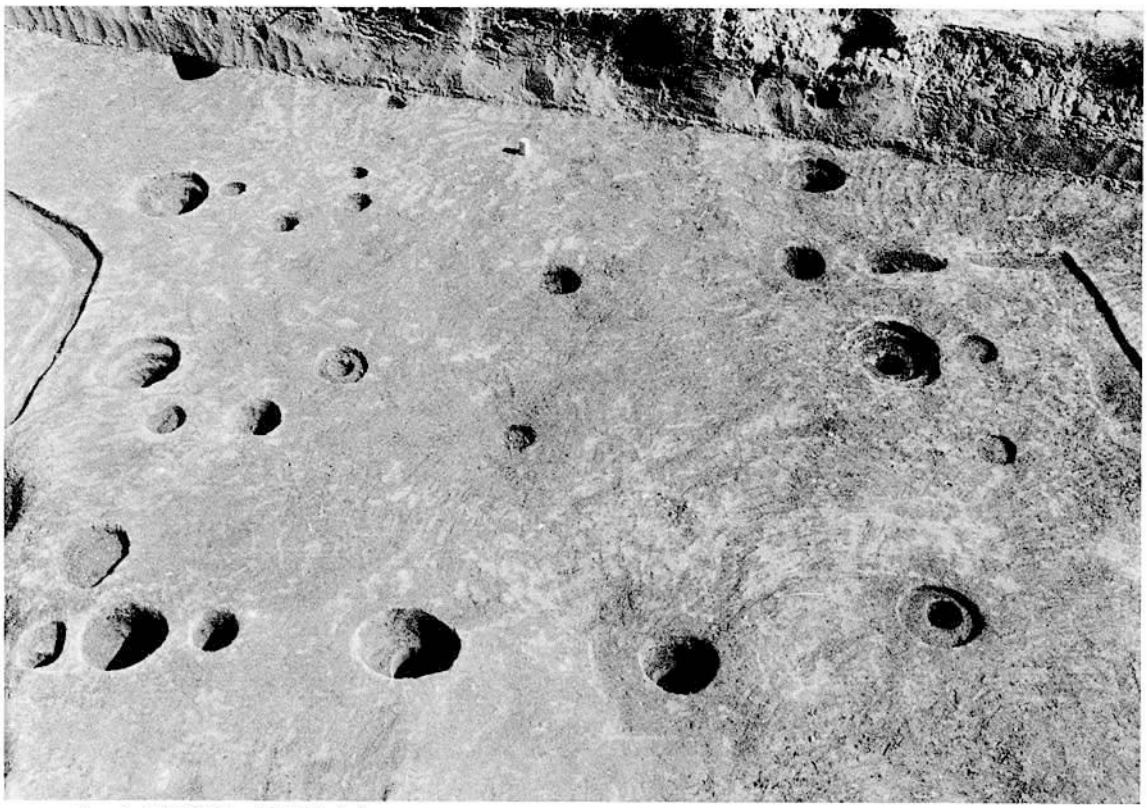
W３ 下部パフン層
アブラギリの種子
（動物のかじりあと先端にあり）

大溝出土種子類　(3/2)

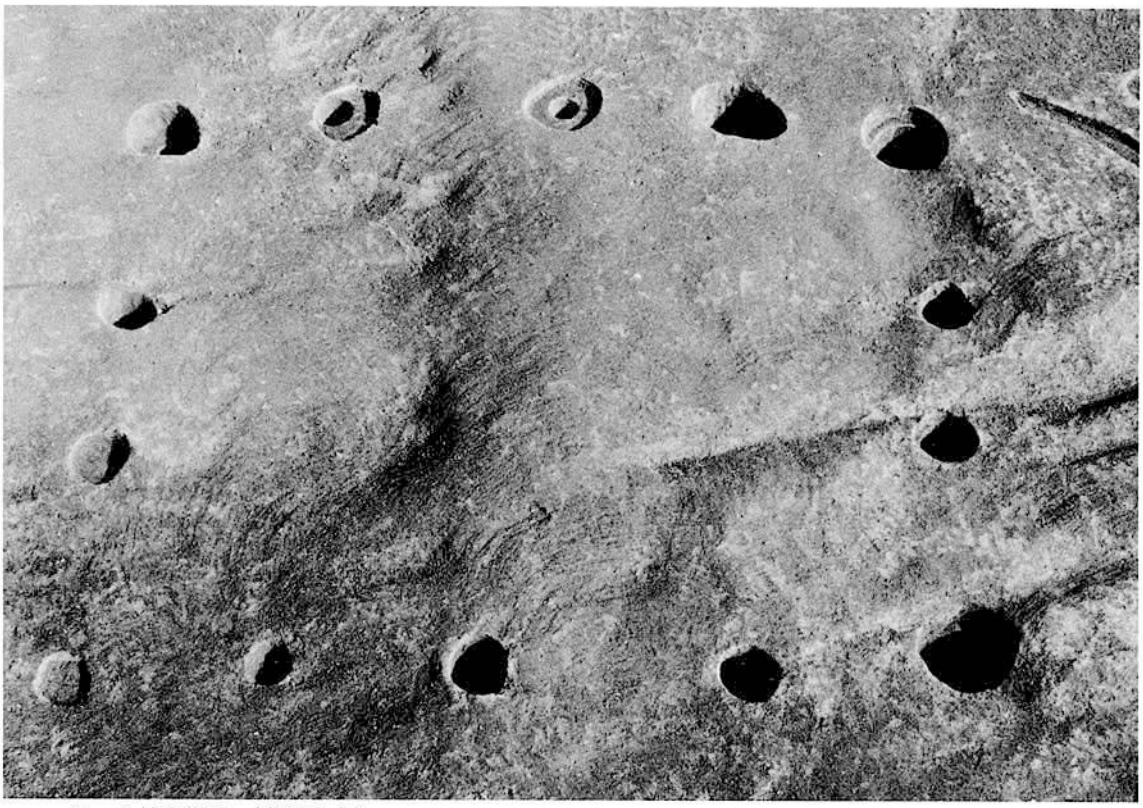
1　建物群全景（北西から）右手前は土壙

2　建物群全景（北東から）

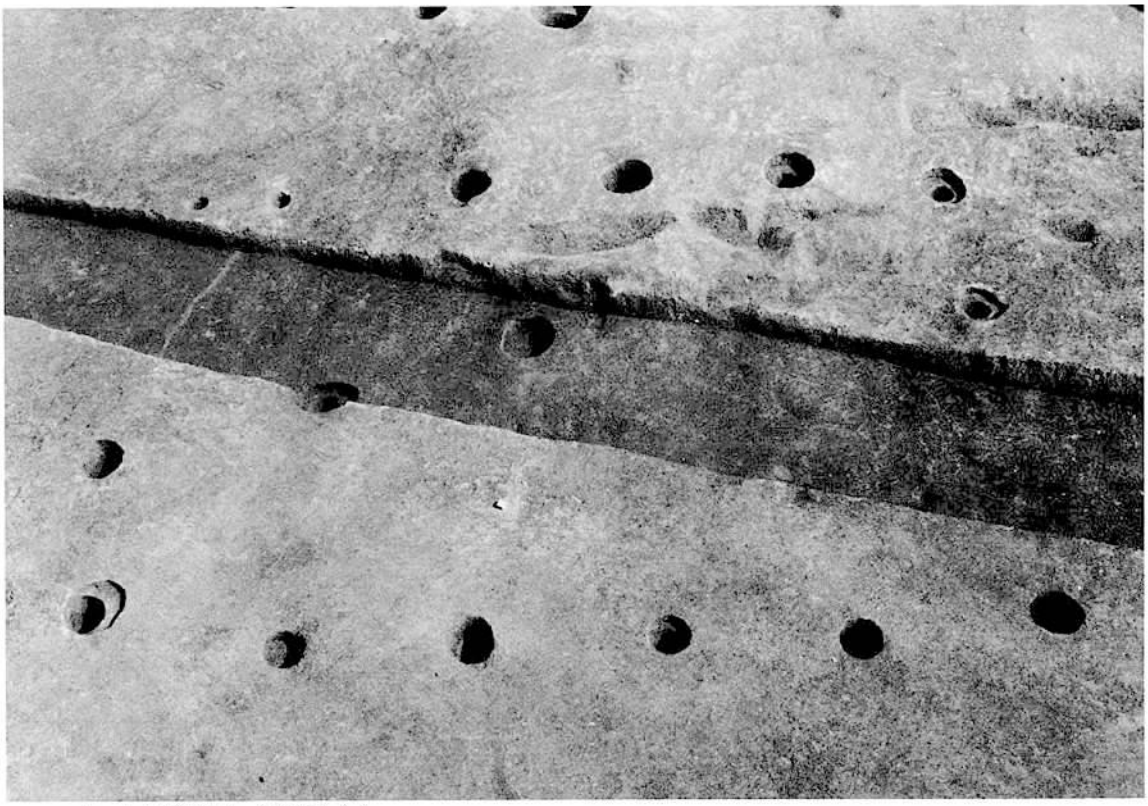
3　調査風景３



1　1号建物跡　（北西から）

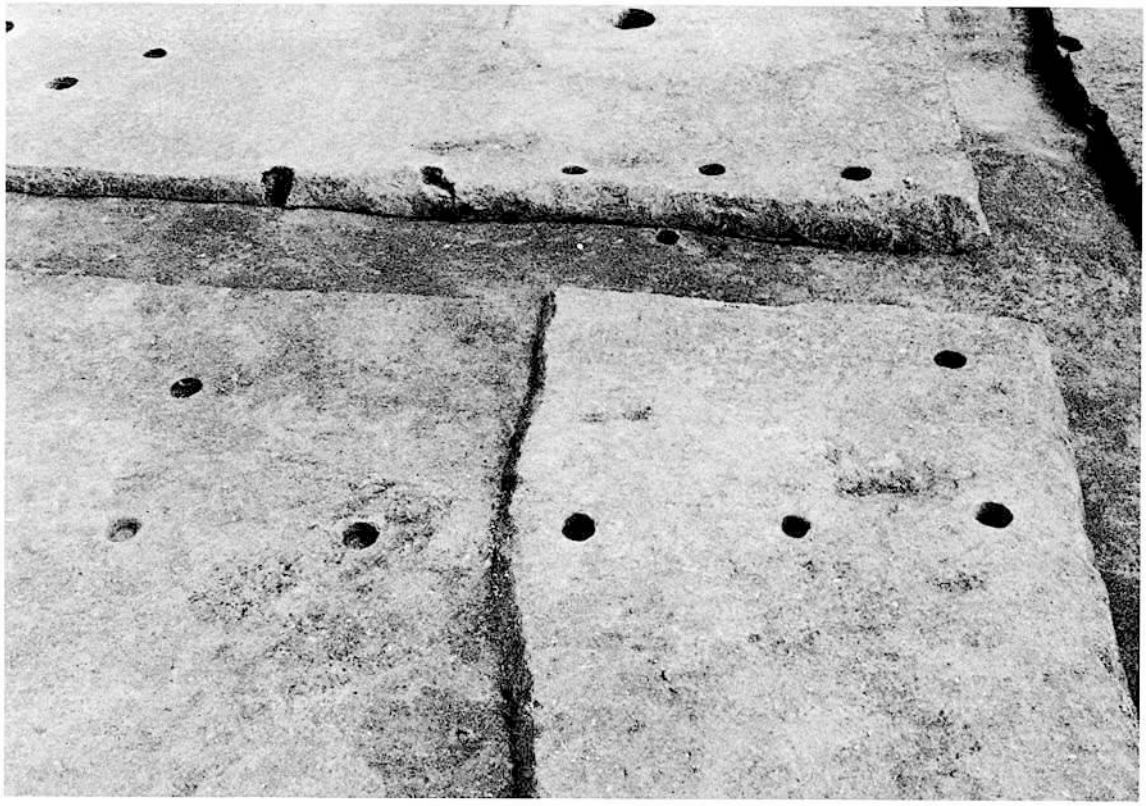


2　2号建物跡　（北西から）



1　3号建物跡　（北西から）

2　4号建物跡　（北西から）



1　5号建物跡　（北西から）

2　6号建物跡　（南西から）

Ⅲ 各遺跡の調査

2 竹戸遺跡

Ⅲ—2　竹　戸　遺　跡

1　は　じ　め　に

竹戸（たけど）遺跡の調査は，前後して事業主体の異なる発掘が行われたので，便宜上下記のとおりに区分した。

竹戸遺跡Ⅰ区（県道藤川二丈線内）　福岡県土木部道路建設課・前原土木事務所
竹戸遺跡Ⅱ区（バイパス工事用立花進入道内）　福岡県道路公社
竹戸遺跡Ⅲ区（農協冷凍倉庫建設予定地内）　二丈町教育委員会（国庫補助）

この区分は，出土遺構以下の説明でも使用するが，本来は同一遺跡である（註1）。なお，Ⅲ区は遺構確認までを行ない，発掘を担当した文化課技師佐々木隆彦が既に報告をしているので，今度の報告と一部重複する部分がある（註2）。

なお，方向は真北を使用した。

2　弥生時代の遺構と遺物

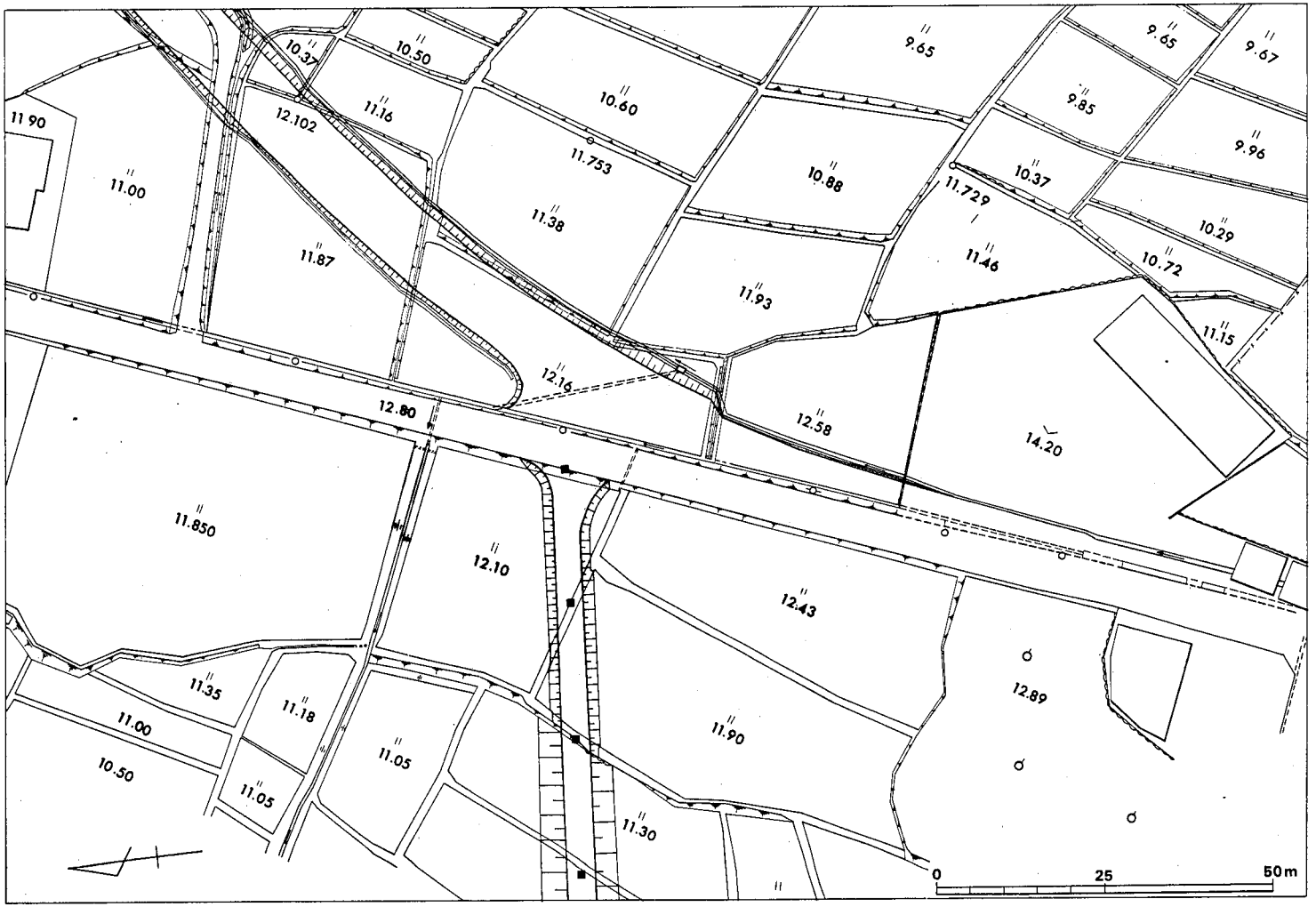
(1)　甕棺墓と甕棺

1号甕棺墓（図版58—1，第90図—1）

Ⅲ区の西南部で，SB13の西方から出土した。丘陵西緩斜面に位置し，主軸方向はW 13° S，埋置角度は 49° を測る。墓壙は，下甕との間に20㎝前後の余裕があり，横穴部は当初から設けなかったものと思われる。組合せの方法は，上甕・下甕共にほぼ接合出き，口縁径がほぼ一致することから，覆口式ではなく接口式である。しかし，粘土による目張りは認められなかった。組合せ器高は，68.0㎝を測る。

2号甕棺墓（図版58—2，第90図—2）

1号甕棺墓から，南に1ｍほど離れて出土した。主軸方向はE12.5° S，埋置角度は約45° を測る。頸肩部の破片は，水田化の時に削平され，周囲から出土したので，少なくとも頸肩部か



第 89 図　竹 戸 遺 跡 周 辺 地 形 図 (1/1,000)

らの打ち欠きではないが，口縁部が打ち欠かれた可能性は残る。底部近くに，穿孔を施す。

1号甕棺（第91図―1）

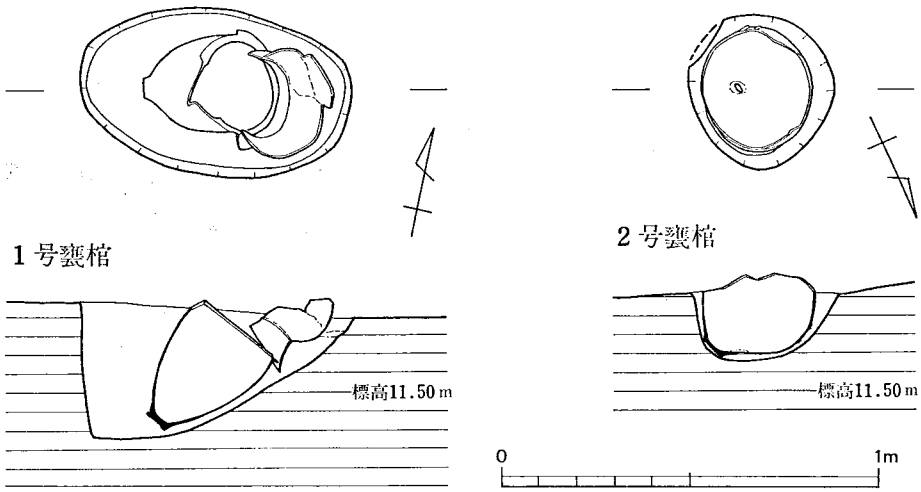
上甕　口縁部は，やや直立気味に外反するが，胴部径以上には開かない。口縁端部は，若干つまみ上げにより，口唇状をなし，シャープな稜を有す。胴部最大径は上位にあり，底部はほぼ水平である。胎土に石英等の砂粒を多く含み，焼成はやや不良で，底部と口縁部の一部は灰褐色・胴部は淡褐色を呈す。風化磨滅が著しいが，口縁部外面に一部縦方向の暗文を認める。口径28.0㎝・頸部径20.8㎝・胴部最大径31.4㎝・底径7.0㎝・器高34.6㎝を測る。

下甕　口縁部は，逆L字状を呈するが，内面に稜を有し，上面が若干内彎する。胴上半部は直立気味で，胴部の張りがない。底部の外面は水平であるが，内面は丸くすぼまる。器内面から口縁部にかけてのヨコナデやナデは丁寧である。砂粒を多く含み，焼成は普通で，器内は暗褐色・器外は褐色を呈す。口径29.0㎝・胴部最大径26.3㎝・底径6.8㎝・器高33.7㎝を測る。

2号甕棺（第91図―2）

下甕　鋤先状の口縁部を欠失する。頸部はすぼまり，肩部から胴部にかけてS字状にカーブをなす。肩部の器壁は薄く，3～4㎜を測る。口唇状の突帯のヨコナデは雑である。器内は丁寧なナデを施し，器外は磨滅しているが丹塗り痕を認める。精製胎土に砂粒を若干含み，焼成は良く，器内褐色・器外茶褐色を呈す。頸部内径約17.5㎝・胴部最大径33.0㎝・底径7.8㎝を測る。

以上の2基の甕棺は1号甕棺下甕の口縁部に前述の特徴があり，胴部に突帯は認められないが，上甕とのセットから，また2号甕棺の特徴から，弥生時代中期後半に属すると考えられよ



第90図　1号・2号甕棺墓実測図（1/20）

う。

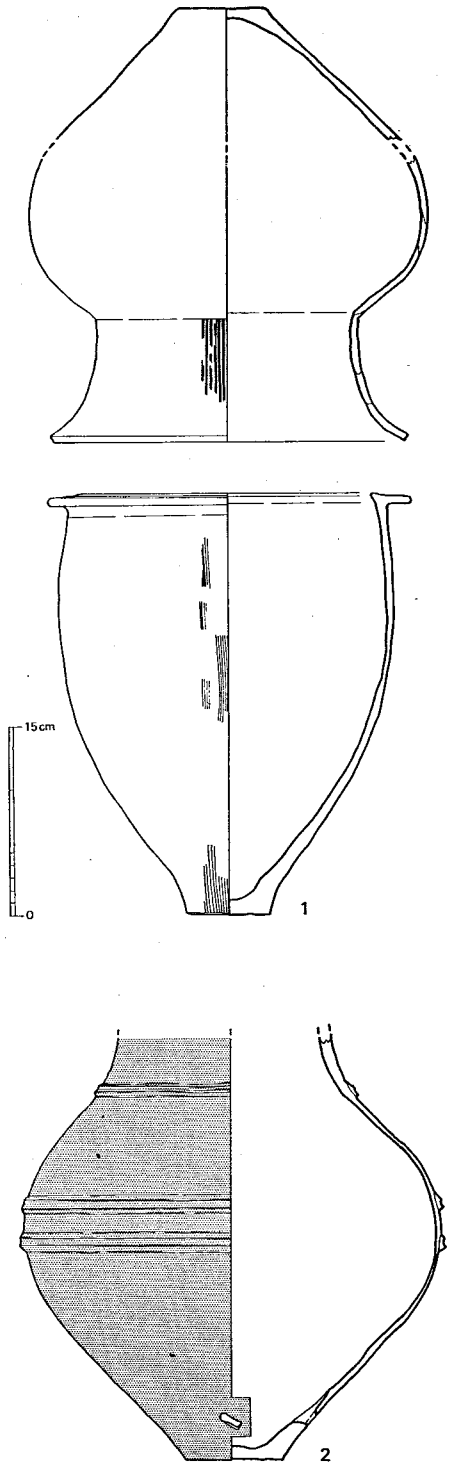
(2) 円形住居と遺物

Ⅱ区の西端の緩斜面で検出された。1号住居は同じ位置で拡張され，新しい2号住居はやや西側に位置している。なお，主柱穴の配置や円形竪穴の直径などに一定の計画性が認められるので，その詳細については4節で後述する。

1号円形住居（図版59—1，第106図）

当初の住居の周溝は，幅14㎝・深さ10㎝を測り，全体の⅝周が掘られており，一周しない。その長径は5.40ｍで，床面の標高は東側で11.35ｍ・西側で11.30ｍを測り，丘陵の緩斜面同様に若干西側が低い。北側床面で，径50×60㎝・高さ8㎝の地山を削り出した高まりが認められた。主柱穴の掘り方径は，55～65㎝の大きさであるが，柱痕径は15～20㎝と小さく，深さは70㎝前後と深い。中央部のピットは，径0.90×1.40ｍ・深さ33㎝を測るが，次期の住居のそれと重複している。

拡張された住居は，径6.40×6.70ｍで，壁上面の標高は東側で，11.60ｍ・西側で11.25ｍを測る。床面の標高は，同じく11.40ｍ・11.30ｍを測り，若干西に傾斜する。周溝は，幅22㎝・深さ20㎝を測り，北側の一部が掘られていない。この周溝は，西側で外方に向って2条が掘られ，また北側で径が大きくなる今1つの周溝が認められるので，更に一部建て替えが行なわれている事も考えられる。主柱穴は，古い住居とほぼ同じ位置に掘り替えられ，深さは前者よ



第91図 1号・2号甕棺実測図（1/6）

りも若干浅くなっている。なお，壁から20～30cm離れて，南半部で径15～20cmの小ピットが巡って検出された。

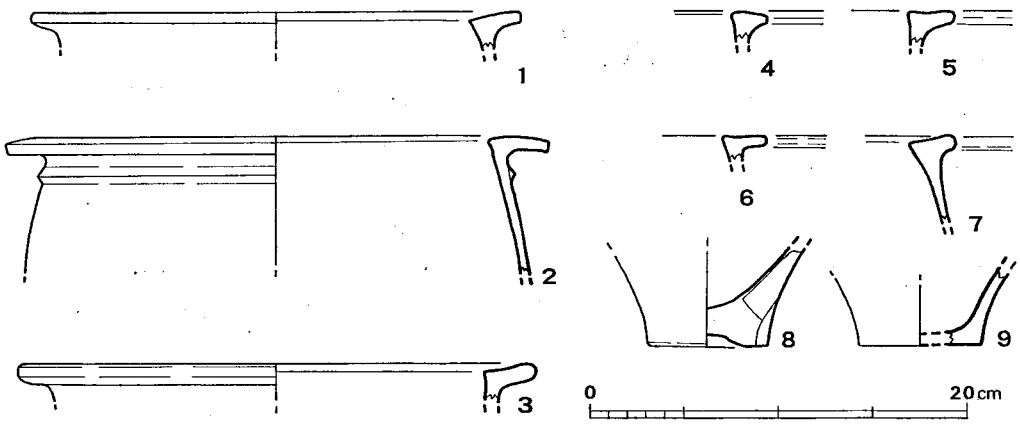
2号円形住居（図版59—1，第106図）

東側の壁上面の標高は11.60m・径は8.10mを測る。床面は，東側で11.50m・西側で11.30mを測り，その差が著しい。また，南側で床面の低い1号住居を切っていたため，周溝は南半部に1号住居の床面よりも深く掘られている。この周溝内の標高も，東側で11.40m・西側で11.25mと低くなっている。周溝の東先端部のみ，断面形がV字状をなしていたが，集水の為であろうか。床面には，3条の小溝が中央部に向って掘られ，1号住居で検出された地山の削り出しによる高まりが，4ケ所同様に認められた。主柱穴は6個で，1号住居内に位置する柱穴は特に深く，復原される床面からは80cmの深さに掘られている。中央部のピットは，径80×90cm・深さは床面から約45cmを測る。なお，壁外には，1号住居と同じように小ピットが巡って検出された。

円形住居出土遺物（第92図）

住居および柱穴の埋土からは，多数の土器と砥石などの石器が若干出土した。しかし大半は，中期初頭の土器細片で，主柱穴内出土の土器片で実測可能なもののみを説明する。

いづれも甕の破片で，口縁内部の屈折に稜をもつ。4は口縁部が未発達で厚く，上面はやや下がり気味である。8の底部と共に，中期初頭の特徴を示している。5・6は口縁部がやや発



第92図　1号・2号円形住居出土土器実測図　(1/4)

達し，上面は平坦化している。1・5～7と共に，中期前半の特徴を示している。2はやや下がり気味の口縁直下に突帯を有し，中期中葉の特徴を示すが，3はその過渡的なものである。

以上の土器の中で，2号円形住居は2の出土から中期中葉前後に，これに切られた1号円形住居で拡張されたものは1・6の出土から中期前半に，また拡張前のそれは中期初頭以降に属するものであると考えられる。

(3) 土器溜遺構

多数の柱穴様小ピットの他に，径が1mを越え，弥生時代の土器のみを出土した竪穴が2基あった。

1号土器溜遺構（第93図―3）

SB1号建物に接して出土した。径1.5m×1.6mの隅丸方形で，床面は二段に掘られている。石は，小石が床面に接していたが，大きめの石は浮いていた。

2号土器溜遺構（第93図―1）

円形住居近くで出土した。径1.40m×2.20mの隅丸長方形で，比較的大きめの破片が多く出土した。

なお，出土した土器はいずれも弥生時代中期前半のもので，深さ1m前後の袋状貯蔵穴の遺棄後に，土器捨てに利用したものであろう。後者の方も，削平以前は二段掘りで，径2m強の隅丸方形をなしていた可能性がある。

1号土器溜状遺構出土遺物（第94図1～11）

1は壺で，頸部から外彎しつつ開口し，末発達な口縁部は厚手に仕上げる。甕でも2・6・7の口縁部が同様で，6・7の突帯の稜は低い。これに対して8の口縁部は逆L字状に仕上げ，突帯の稜も高い。3～5・9はその過渡的特徴を呈している。

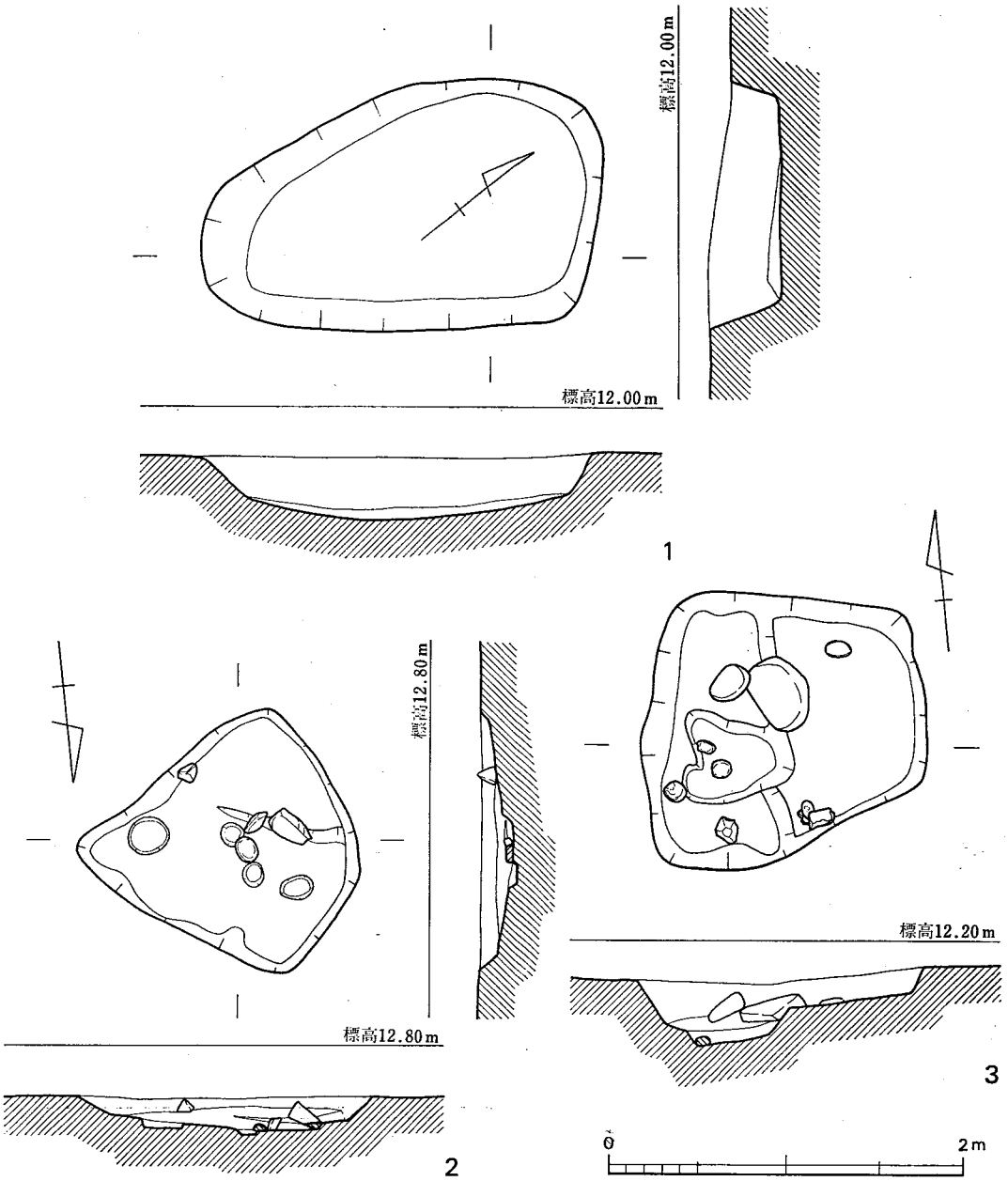
以上の中では，8の土器が新しく中期前半でも新しい時期には土器溜として利用されていたものと考えられる。

2号土器溜状遺構出土土器（第94図12～22）

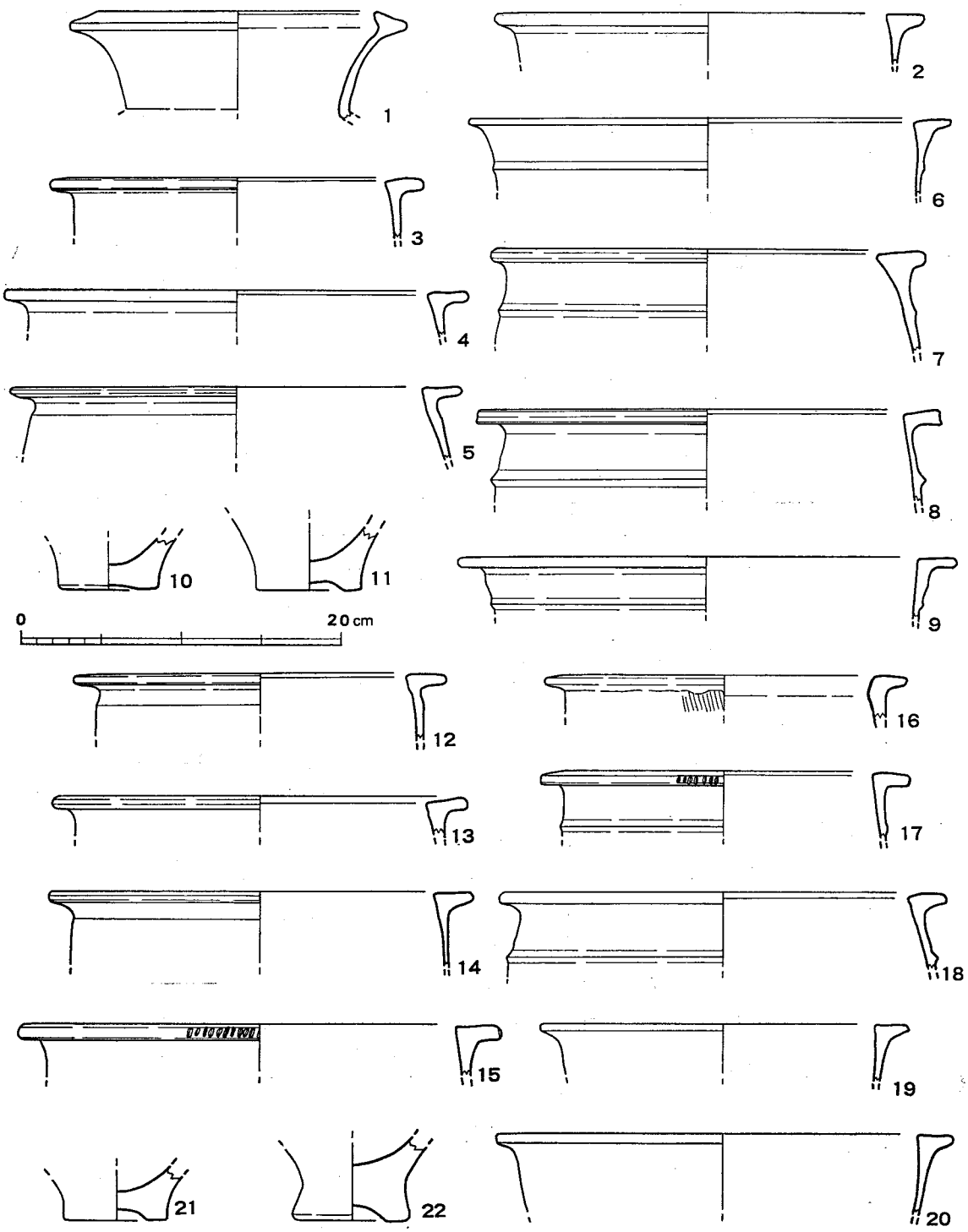
いずれも甕で，16は口縁部の内面が胴部から若干屈折して稜をなし，逆L字状口縁上面の幅が小さい。19・20と共に胴部に張りがなく，中期初頭の特徴をもっている。12～15・17は胴部

に若干の張りが認められるが，前者の時期に属する。18は胴部の張りが強く，中期前半に属する。

以上の土器から，中期前半には土器溜として利用されていたものと考えられる。



第 93 図　1号・2号土器溜状遺構，ＳＫ２号土壙実測図（1/40）



第 94 図　1号・2号土器溜状遺構出土土器実測図（1/4）

3　古墳時代以降の遺構と遺物

(1)　方形住居と出土遺物

方形竪穴住居（付図）

Ⅲ区のＳＤ２号溝の南側で出土した。床面はほぼ水平で，現在の深さは10㎝前後を測る。未調査区を残すが，南側調査区端のピットを主柱穴の一部とすれば，東西壁間の復原値は，約５ｍ強となる。

出土遺物（第103図）

１は甕で，口径14.6㎝・胴部最大径14.4㎝を測り，接合できなかったが底部の破片がある。底部は厚さ７㎜を測る丸底で，内外面共に密なハケ目痕を認める。胴部の内面は磨滅が著しいが，外面は斜方向に近い幅広のタタキ仕上げのままで，このタタキは口縁にも一部及んでいる。大きめの砂粒を含み，焼成は悪く，赤茶褐色を呈し，外面には煤の付着を認める。弥生終末期のタタキの幅より大きく，既に古墳時代に属するものと考えられる。

(2)　掘立柱建物と出土遺物（第107図参照）

19棟が確認され，これらは柱穴に切り合いのあるものや，配置上同時期に共存できないものを含めて，数時期にわたる建物群である。それぞれの計測値は表記し，その平均置で1/200の模式図を作成したので，主に出土状態を説明するにとどめる。なお，実測図に示した●印は，柱痕による真心の位置で，確認できなかった場合は掘り方の真心で，これにより計測した。梁行と桁行の方向は，このうち隅柱真心間を結んで示したものである。

ＳＢ１号掘立柱建物（図版59―２，第96図）

Ⅱ区南半部の，ＳＤ１号溝の北側で出土した。西側は，水田による削平が著しい。

柱穴からは，土師器杯片，須恵器杯片・甕片が出土した。また，14個の柱穴中で５個から鉄滓が出土しているのが留意される。なお，Ｐ14より古い柱穴からは，弥生土器片が出土した。

ＳＢ２号掘立柱建物（図版59―３，付図）

Ⅲ区のＳＤ１号溝南側で出土した。梁行と桁行の方向は90°を測る。またＰ８～Ｐ10の方向は，桁行方向と一致する。なお，Ｐ７がＰ３～Ｐ５の中心に位置するので，入口部とみていいであろう。

ＳＢ３号掘立柱建物（図版60―３，付図）

Ⅲ区の東半部で出土した。東桁行と南北の両梁行方向は90°を測る。柱穴の切り合いは全くない。

SB4号掘立柱建物（図版60—2，付図）

Ⅲ区の東端部で検出された。SB8号・SB13号の規模を考慮し，またP6の北側に梁間柱が検出されなかったので，東の未調査区にのびるものと考えられる。P4とP6には柱痕大の扁平な石が敷かれている。P3は，柱痕周辺の攪乱があり，全掘していない。桁行方向は一致し，桁行と梁行の方向は90°を測る。P4がSB6号建物のP3より新しい。

SB5号古掘立柱建物（第98図，表27）

Ⅲ区の東半部で出土し，ほぼ同じ位置にある新しい建物の柱穴から，P15とP23が切られている。東桁行と南梁行方向は90°を測る。桁行方向には，共に南側にのみ間柱がある。梁行方向では，対角線上にP16とP27の間柱が位置する。

SB5号新掘立柱建物（第98図，表27）

西桁行と北梁行方向は90°を測る。梁行方向では，共に西側のP3とP4・P13とP14の梁間柱間の計測値が大きい。桁行方向では，対角線上のP1とP5・P10とP14の桁行柱間の計測値が小さい。この建物は，P14とP32の切り合いから，計測値の大きい西側に，桁行方向が一致するP29～P32を設けて，増築がなされている。このうち，P30とP31の柱間の計測値が，P29とP30・P31とP32のそれより大きい。これは，P33～P36を目隠塀ないし柵列として設けているので，入口部に相当すると考えられる。

柱穴からは，土師器・須恵器の杯片が出土し，P10とP11から切られている柱穴からは，共に弥生土器片が出土している。

SB6号掘立柱建物（付図）

Ⅲ区の東端で出土した。東側が未調査で，P1から南側は削平が著しいので，詳細は不明である。SB4号建物のP4よりも古い。

柱穴からは，P2から黒色土器椀口縁部小片が出土したのが，留意される。

SB7号掘立柱建物（図版60—3，付図）

Ⅲ区の南東隅で出土した。この周辺が，旧地形の丘陵頂部に位置するため，削平が著しい。南側桁行と西側梁行は，P3～P4梁行と共に方向は90°を測る。なお，北側桁行方向の北に接して，いずれも古い柱穴が位置し，建て替えられている。また，P7とP8も，桁行方向と90°を測るので，再度一部の建て替えが行われている。

柱穴からは，土師器・須恵器の出土はなかった。

SB8号掘立柱建物（図版61—1，第96図，表25）

Ⅲ区の中央部で出土した。東桁行方向の柱穴以外は，一段下の水田で大きく削平を受けており，各柱穴底面の標高はいずれも 11.70*m*前後で一定しているので，他の建物に比べると一段

と深く掘られている。また，その掘方径も大きい。ＳＢ９号，ＳＢ10建物と競合するが，柱穴間の切り合いは，いずれもない。

ＳＢ９号掘立柱建物（図版61—１，付図）

Ⅲ区の中央で出土した。ＳＢ８号建物と競合するが，掘方の規模はほぼ等しく，他の１間×２間の建物群の中では最大である。

Ｐ２とＰ３に切られたピットからは，弥生土器片が出土した。

ＳＢ10号古掘立柱建物（図版61—１，付図）

Ⅲ区の東半部で出土した。柱穴の切り合いはないが，ＳＢ８号建物と競合する。桁行方向は，南側・北側共に一致し，Ｐ９とＳ10・Ｐ11とＰ12の梁行方向とは90°を測る。なお，Ｐ13とＰ14の掘り方は小さく，Ｐ９とＰ10と同様で，桁行方向上に位置するので，１間×３間の規模になる事も考えられる。また，Ｐ９とＰ10を設けて，より東側への改築した可能性も残る。柱穴からは，須恵器杯片が出土し，Ｐ７に切られた柱穴からも同様に出土した。

ＳＢ10号新掘立柱建物（図版61—１，付図）

Ｐ２は，Ｐ８を切っている。桁行と梁行方向は90°を測り，各柱間の計測値もほぼそれぞれの方向間で一致している。

ＳＢ11号掘立柱建物（図版61—２，付図）

Ⅲ区の西南部で出土した。Ｐ７・Ｐ８の位置から，柱の一部建て替えが行われた可能性がある。東西の両桁行方向は一致し，南梁行方向とＰ３～Ｐ４・Ｐ７～Ｐ８のそれも一致する。

ＳＢ12号掘立柱建物（図版62—１，付図）

Ⅲ区の南半部中央で出土した。東桁行と南梁行方向は90°を測る。Ｐ４は，ＳＢ13号建物のＰ12から切られている。

ＳＢ13号掘立柱建物（図版62—１，第97図，表26）

Ⅲ区の南端で出土した。建物の南隅部に未調査区を残し，Ｐ１は未確認である。Ｐ15は削平されていた。庇部を含めて，桁行と梁行方向はいずれも90°を測り，整然としている。なお，庇部のＰ15～Ｐ20の柱穴は，当初から他の主柱穴に比べて浅く，また径も小さく掘り込まれている。

ＳＢ14号掘立柱建物（図版62—１，付図）

Ⅲ区の北側で出土した。削平が著しいので，東西方向にのびることも考えられるが，ＳＢ16号建物の規模とＳＢ15号建物の位置を考慮すれば，３間で未調査区に続くものであろう。なお，真心間の計測値，それぞれ多少の差位が認められる。

ＳＢ15号掘立柱建物（付図）

Ⅲ区の南西隅で出土した。Ｐ３の削平が著しいので，更に西にのびることも考えられるが，西側の方形住居が同時期であれば，ほぼ接することになる。また，東側に一部未調査区を残し

ている。

SB16号掘立柱建物（図版62—2，付図）

Ⅰ区の西南部で，ＳＥ１号井戸近くで出土した。柱穴検出時に，柱痕は確認できたが，広田遺跡の発掘と併行したため，柱痕の断面図を作成できなかった。Ｐ１は，柱部が二段に掘られている。

SB17号掘立柱建物（付図）

Ⅰ区のＳＤ３号溝北側で出土した。桁行方向は一致する。また，Ｐ７～Ｐ８は，西梁行方向と一致するが，更に西側にピットが続くので，時期的に近い別の建物の存在も考えられる。なお，柱部の床面は，二段に掘られたとするよりも，柱の重さによる凹みに近い形状をなす。

柱穴からは，土師器・須恵器の出土はなかった。

SB18号掘立柱建物（付図）

Ⅰ区の北端部で出土した。北側から進行して来た工事が一部既にここに及んでいたので，遺存状態は良くなかった。

柱穴からは，土師器杯片や須恵器の出土はなかった。

SB19号掘立柱建物（付図）

Ⅰ区の北西部で出土した。ＳＢ18号建物と近接する。削平が著しく，各柱穴間の計測値は一定しないが，Ｐ５の検出があるので，総柱の建物と考えた。

出土遺物（第95図，表22）

柱穴内の遺物は一覧表に示した。その多くが土器の小破片で，明らかに弥生中期前半頃の口縁や底部片を弥生土器片，同様に土師器の杯を口縁片・底部片・破片とし，須恵器以外の細片を土器片とした。土師器の杯はすべてヘラ切り離し底である。この中で，実測可能なものは少なく，10数片である。

須恵器

１はＳＢ３号Ｐ７から・２はＳＢ16Ｐ８から出土した杯蓋で，内面は天井部と口縁部の屈折にシャープさがない。２・４はそれぞれＳＢ４号のＰ２・Ｐ３から出土した杯で，底部内面は不定方向のナデ，外面はヘラ切り離し後ヨコナデを施し，ヘラ切り離しの高台を付す。体部外面は高台との屈折部のみをヨコナデし，他はヘラ削りを施す。

いずれも砂粒をほとんど含まず，焼成は良く青灰色を呈する破片である。

土師器

いづれも精製胎土を使用し，淡橙色を呈す。その法量の計測値は，表22に示すとおりである。

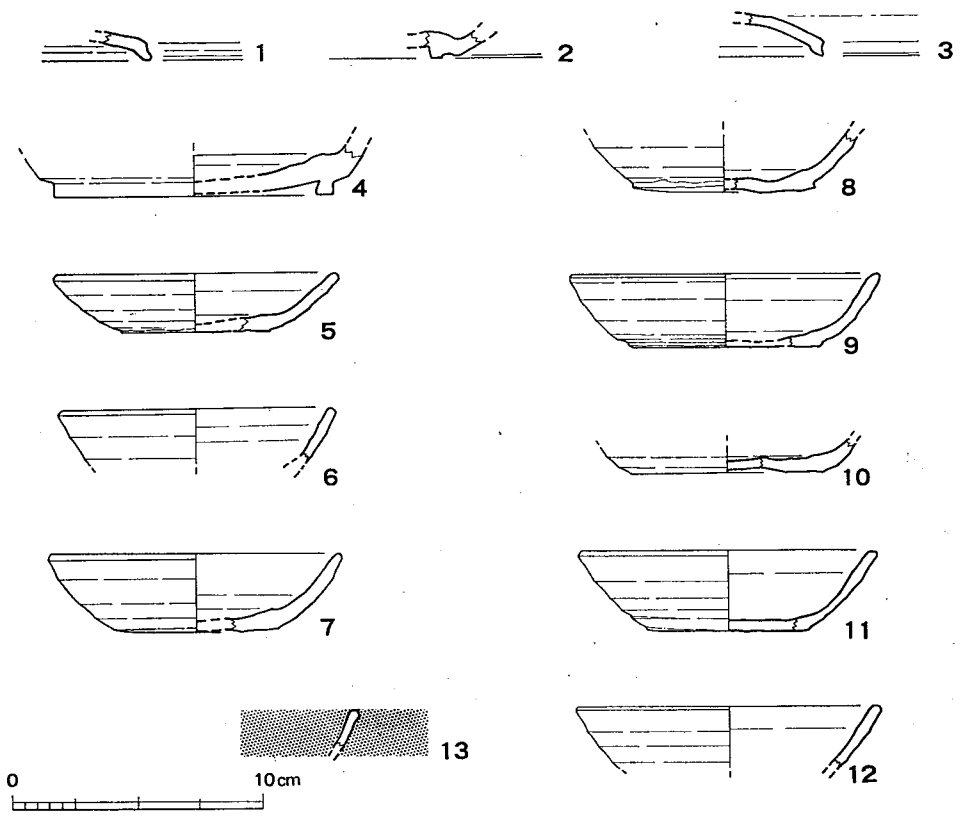
黒色土器

BはＳＢ６号Ｐ２から出土した小破片で，高台付椀口縁部で，内面は磨滅しているが，外面はヨコ方向にヘラ研きを施す。精製胎土で，焼成は普通，黒色を呈す。

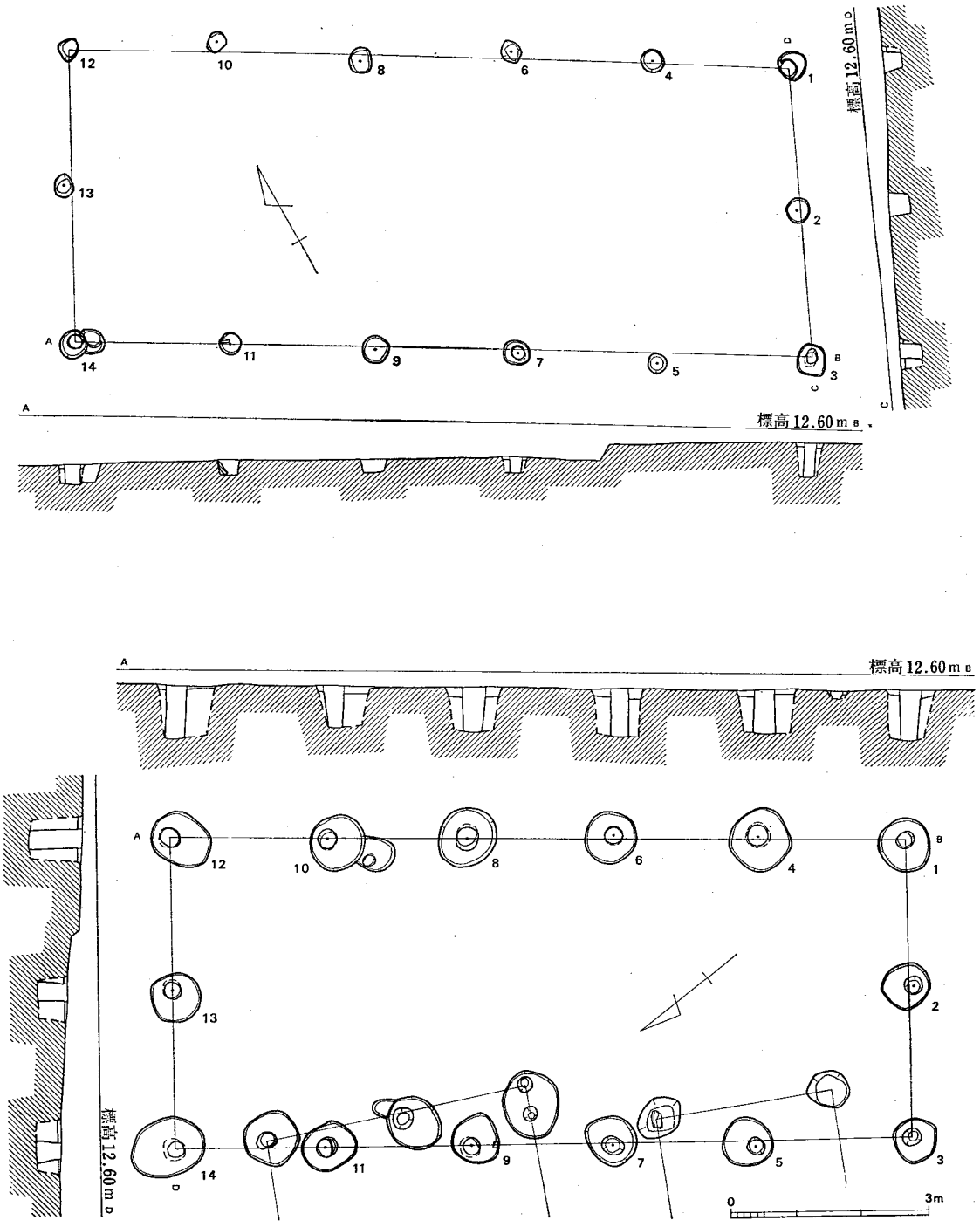
以上の土器の中で，須恵器は８世紀後半頃のものである。土師器の杯は，それぞれの掘立柱建物での器種の異なる一括土器による法量の計測値の比較ができない。しかし，Ⅲ区のＳＫ１号土壙の一括土器と同様の法量をもっており，小皿が供伴しないので，10世紀前後のものと考えられよう。

表22　掘立柱建物出土土師器計測表　　(cm)

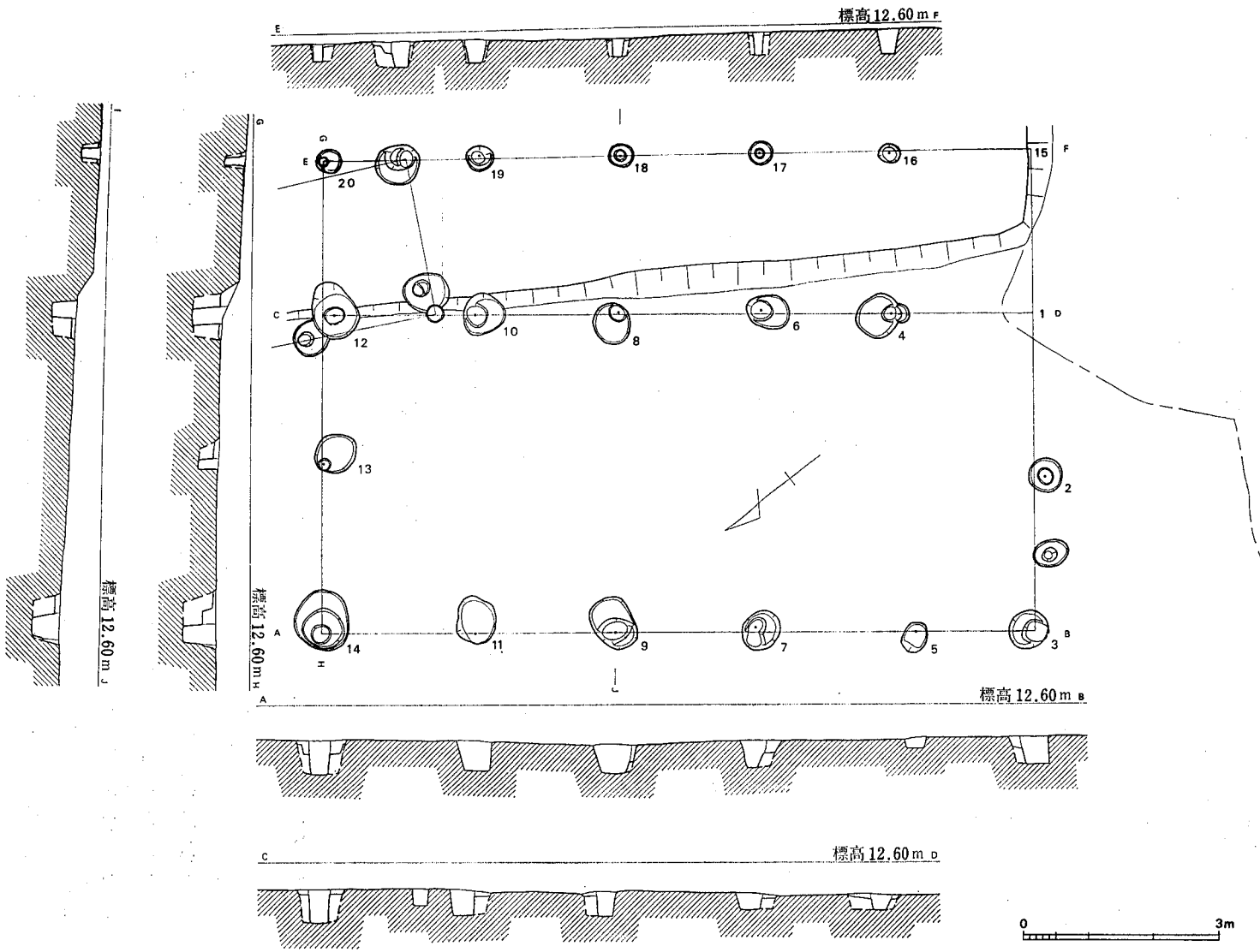
No.	口　径	底　径	器　高	建物内Ｐ番号
5	11.4	6.0	2.3	ＳＢ４-Ｐ１
6	11.1			ＳＢ４-Ｐ２
7	11.7	6.5	3.1	ＳＢ古５-Ｐ17
8		7.3		ＳＢ６-Ｐ６
9	12.3	7.7	2.9	ＳＢ８-Ｐ１
10		7.6		ＳＢ13-７
11	11.8	6.4	3.2	ＳＢ13-14
12	12.1			ＳＢ13-14



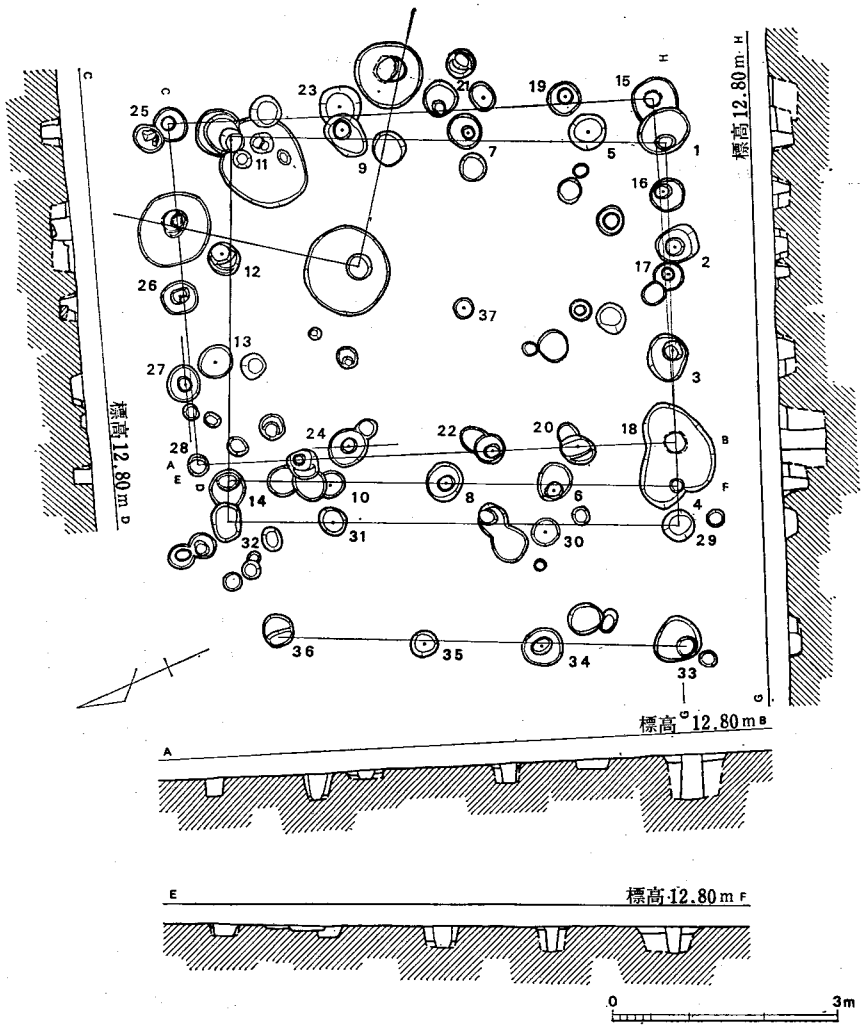
第 95 図　掘立柱建物柱穴出土土器実測図（1/3）



第 96 図　ＳＢ１号・８号掘立柱建物実測図（1/100）



第 97 図　　S B13号掘立柱建物実測図　(1/100)



第 98 図　ＳＢ５号掘立柱建物実測図（1/100）

(3)　井戸と出土遺物

ＳＥ１号井戸（第99図）

Ｉ区の西南部で，ＳＢ16号建物から 2.5*m*離れて出土した。掘り方は，1.08*m*×1.10*m*の隅丸方形で，深さ1.15*m*まで壁面はほぼ垂直である。この部分は，黒褐色粘質土で埋められ，20個ほどの石が検出された。その後，壁面は断面をＵ字状となり，小さい木片を含む暗灰色粘質土が同様に堆積していた。底部最下層は，上部の地山である褐色粘質土のブロック土層があり，若干の木の枝片を含む。現在の深さは，1.55*m*を測り，下半部は砂質地山層に掘り込まれ

ている。曲物等の木片は検出されず，完形に近い土師器等が出土した。石は，井戸を遺棄して埋めもどす際に投げ込まれたものであるが，これが井戸の石組みのものであるかは不明である。

出土遺物（第101図）

須　恵　器

杯蓋　1は擬宝珠状のツマミが退化し，天井部内面はナデ，外面はヘラ削り後ヨコナデする。焼成は普通で青灰色を呈す。2はボタン状のツマミで，焼成は悪く灰色を呈す。3～5の口縁部の立ち上がりはほとんどない。6の口縁部も同様であるが，天井部が高い。7の口縁部内面の天井部との屈折には若干の稜を認める。

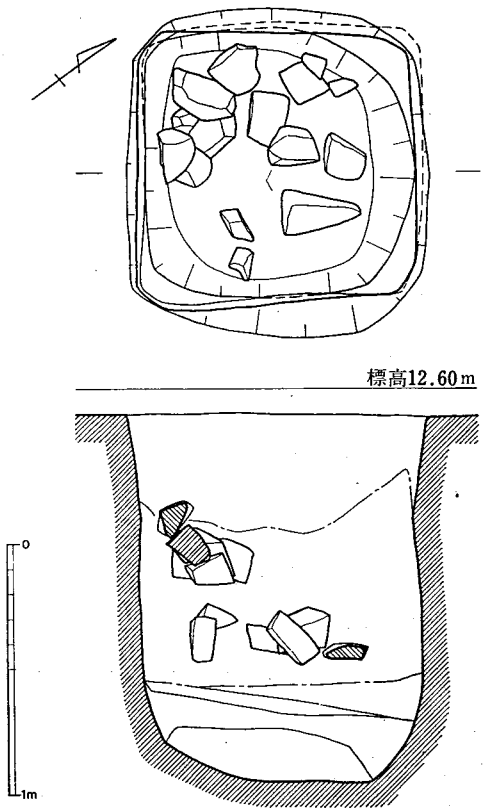
土　師　器

皿　9は口径15.2㎝，底径12.7㎝，器高 2.0㎝を測る。底部はヘラ切りで，内面から体部外面はヨコナデを施すが，ヘラ研きはしていない。焼成は良く，褐色を呈す。

杯　8は高台が付き，内外面共にヨコナデを施し，底部はヘラ切りである。焼成は良く明るい褐色を呈す。10・11の体部は直線的に外反し，口径13.0㎝・12.4㎝を測る。11の内面は横方向にヘラ研きを施す。焼成は良く，明るい褐色を呈す。12は口径15.7㎝・器高4.9㎝を測り，体部との口縁部の屈折は内外共に稜をなし，体部内面をヘラ研きし，外面はヨコナデである。ヘラ切りされた底部から3㎜程はヘラ削りを施す。焼成は普通で褐色を呈す。13の口径は17.6㎝を測り，内外面共にヨコナデのみで，ヘラ研きは施されていない。

以上の土器は，1は底面，2・4・8は最下層，12・13は暗灰色粘質土層，その他は黒褐色粘質土層から出土したものである。他にスサ入り焼土塊や，内面に布目痕があり，砂粒を多く含む軟質焼成の製塩関係の土器片が出土している。

これらの土器から，8世紀後半頃の井戸であると考えられる。



第 99 図　ＳＥ１号井戸実測図（1/30）

(4) 土壙と遺物

ＳＫ１号土壙（図版63—１，付図）

Ⅲ区の中央部で，ＳＢ８号建物の西側で検出した。隅丸長方形の土壙で，長径6.20*m*，短径2.70*m*を測るが，東側は3.40～3.70*m*と広がり，深さは浅い。土壙内部は，床面はほぼ水平であるが，南半部が一段と深く掘られている。北半部の床面の深さは0.5*m*を測り，北半部のそれは0.6*m*を測る。土壙の側縁内側に沿って，11個の柱穴様小ピットが並んで検出され，北西隅から，深さ0.02*m*の溝が1.2*m*の長さで続く。

土壙内からは，大くの完形に近い土師器杯・高台付椀類が，挙大の鉄滓と共伴している。鉄滓の中にはとりべの形状そのままの塊もあり，柱穴様小ピットの存在も含めて，鍛冶関係の性格を考慮する必要があろう（註3）。

ＳＫ２号土壙（第93図—２）

Ⅲ区の南半部で出土した。隅丸不整方形状の浅い掘り込みで，長径1.30*m*・短径1.20*m*を測る，床面の深さ0.15*m*の中から，小石が数個出土した。

ＳＫ３号土壙（図版63—２，第104図）

Ⅰ区の北半部で，ＳＤ３号溝に切られ検出された。埋土は，８層の暗褐色粘質土層のみで，中からは多くの遺物が出土した。壁面の傾斜はなだらかで，床面がほぼ水平な隅丸の土壙である。北側の隅が若干残っており，南北方向で約５*m*を測るが，東西方向は７層に切られて不明である。床面までの深さは，約 0.2*m*を測る。

ＳＫ１号土壙出土遺物（第100図，表23・24）

１～７は土壙の南側掘方縁内の上層から，８～24は段状に掘られた床面近くの下層から出土した土器で，いずれもヘラ切り離し底である。

土師器杯　１・８～16は，口径11.7*cm*・底径7.1*cm*・器高3.2*cm*前後を測るが，２は口径底径共に若干大きい。

表23　ＳＫ１号土壙上層出土土師器計測表

(*cm*)

杯				高台付椀					
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	高台径	器高	高台高
1	11.9	7.4	3.2	3	12.0	7.1	7.6	4.1	0.7
2	13.2	8	3.0	4	12.4	7.4	8.6	5.5	1.5
				5		7.6	8.5		1.5
				6		7.3	8.2		1.4
				7		8.7	10.2		2.0

土師器高台付椀　小形のものは体部に丸味があり，高台の高さも含めて法量の小さい3と若干大きめの4・17がある。大形のものは体部が直線的な18・19がある。

内黒土器高台付椀　高い高台をもち，体部に丸味をもつ20・21がある。

黒色土器高台付椀　高台が低い24がある。以上の土器の中で，上層出土の3は，底部に丸味があり，若干新しい特徴を示している。下層出土の土器は，土師器高台付椀の体部が直線的で内外面共にナデを施し，黒色土器24は底部内面を横方向にヘラ研きしている。上層・下層共に土師器の小皿・椀類の出土がなく，前川威洋氏の筑紫郡太宰府町の御笠川南条坊遺跡出土の土器編年によるⅠ—2A9世紀終末～10世紀初頭の時期に属するものである（註4）。

なお，下層の完形土器に供伴して，滑石製石鍋が出土しており，古い段階で出土した好資料として留意すべきであろう（註5）。

表24　SK1号土壙下層出土土師器計測表　(cm)

杯				高台付椀					
No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	高台径	器高	高台高
8	11.1	7.0	3.0	17	12.6	7.5	8.1	5.4	1.2
9	11.4	7.0	3.1	18	13.1	7.4	8.3	5.7	1.5
10	11.5	7.0	3.2	19	14.8	8.6	10.0	6.6	1.7
11	11.6	6.4	3.3	20	14.7	8.7	9.8	7.0	1.9
12	11.6	6.5	3.3	21	13.7	8.3			
13	11.7	6.8	3.1	22		7.9	10.4		2.3
14	11.8	7.0	3.2	23		8.2	9.5		1.8
15	11.9	7.7	3.0	24		8.5	9.1		1.0
16	12.2	7.7	3.1						

SK3号土壙出土遺物（第103図）

土師器　4～6の杯は，口径11.2～11.8cm，底径6.6～7.1cm・器高2.9～3.0cmを測る。いずれもヘラ切り底である。8は高台付椀で，底径 7.8cmを測るヘラ切り底である。

内黒土器　9は内外面とも磨滅するが，体部と底部の屈折がシャープで高台の高い椀である。

青磁　7は越洲窯系の底部片である。

土製品　10・11は径 1.1cmの孔を有し，小さめの砂粒を含み，焼成は良く，褐色を呈す。表面には成形時の若干の多面を残すが，丁寧にナデている。2個が完形で出土した。

以上の遺物は，暗褐色粘質土のみの単一埋土からの出土で，他に緑釉陶器片が出土している。SD3号から出土した白磁・青磁類を含まず，小皿の出土はない。9世紀後半頃の時期と考えられる。

(5) 溝状遺構と出土遺物

ＳＤ１号溝と遺物（付図）

Ⅲ区のＳＢ１号・２号建物の間で検出した。東端は，未調査区にのび，西端は下の水田に削平されて消滅している。底面の標高は，東端で12.07m西端で11.97mを測り，若干西へ向って低くなる。東端での深さと幅は，それぞれ0.64m・0.39mで，溝中軸方向はN75°Wを測る。

溝内から，龍泉窯系の青磁椀底部片が出土している。

ＳＤ２号溝と遺物（付図）

Ⅲ区の西南隅で出土し，未調査区の西側にのびる。底面のレベルは，西に向って順次底くなり，その差は約0.15mを測る。削平が著しく現在の深さは0.1m前後で，幅は約0.6mで，溝の中軸方向は，S81°Wを測り，方形竪穴住居，ＳＤ15号・16号建物の主軸にほぼ同じである。

なお，出土した遺物は弥生土器・土師器・須恵器の細片である。

ＳＤ３号溝と遺物（図版63―２，第101・102図）

Ⅰ区の中央部で検出した。ほぼ同じ位置に重複して掘られた為に，現在の幅は南側で 2.4m・北側で5.3mを測る大溝となっている。

土層の１ａ層は，大溝の東縁に沿って，0.8～0.9mの幅で明確に検出され，砂層の中には地山の黄褐色粘質土がブロック状に混入していた。また，頭大から拳大の石も出土し，２層に掘り入まれた小溝を，意識的に埋めたものである。遺物はほとんど出土しなかった。

２層は褐色の砂層で，同様に大溝の東縁に沿って，２mの幅で掘られているが，ＳＤ３号土壙の北壁付近から，大溝の西縁に沿って分かれて検出された。両者が分岐する地点は，他の砂層とは鉄分を含んで硬い６層を共に切るのみで，新旧関係は確認されなかった。

初期の溝は，ＳＤ３号土壙の東壁を切っているが，北端部の底面が２条に分かれるので，少なくとも２回は掘り替えられている。

溝の南北端は，共に未調査区にのびており，この間の全長は，18mを測る。主軸は，１層の溝がN5°E・２層東側溝がN5°W・同西側溝がN16°W・N9°Wをそれぞれ測る。

土　師　器

小皿　14は糸切り底で，口径9.8cm・底径7.2cm・器高1.2cmを測る。５層出土。

杯　15～19はヘラ切り底で，口径11.1～11.9cm・底径6.1～7.5cm・器高3.0～3.6cmを測る。５層出土。

高台付椀　20の口径は12.4を測り，体部は直線的に外反する。内外面共に磨滅している。７

層出土。21の高台径は 7.2cmを測り，磨滅している。4層出土。前者と共に褐色を呈す。22の口径は14.5cmを測り，内面全体に黒色付着物がある。砂粒を少し含み，焼成は良く，明るい褐色を呈す。3層出土。

白　　磁

皿　1の釉調は淡緑白色で薄く，口径9.9cm・器高2.3cmを測る。内底の見込みの釉はカキ取らない。6層出土。

椀　2の釉調・胎土ともに白色で，小さめの玉縁口縁をなす。破片からの復原口径15.7cm・器高4.1cmを測る。4層出土。3・4は共に釉調は淡緑白色，胎土は白灰色で，5層出土。3は口径16.1cm・器高6.5cmを測り，4は口径17.3cmを測る。5の釉調・胎土は前者同様で，口径17.8cm・器高6.1cmを測る。2層と4層から出土し，接合できた。3～5はいずれも体部内面と見込みに1条の沈線を有し，高台が高い。6の釉調は淡緑灰色で厚く，胎土は灰色で，口径16.5cm・器高5.9cmを測る。3層出土。7の釉調は淡灰白色で薄く，胎土は灰白色である。5層出土。6・7は共に見込みを施釉後にカキ取り，高台は3～5に比べて低い。8の釉調は淡緑白色で薄く，胎土は白灰色で，口径15.7cmを測る。5層出土。玉縁口縁をなす。

青　　磁

皿　14の釉調は緑灰色で，胎土は灰白色をなす。4層出土。13釉調は淡青灰色で薄い。体部が同類のものに比べて若干立ち上がり気味で，器高が高い。13・14は共にいわゆる珠光青磁といわれるもので，見込みに櫛歯文・ヘラ描き文を施している。

椀　9～12の釉調は淡黄緑色ないし淡緑色で，胎土は灰白色をなす。9は5層・10は4層・11は2層出土。9・10の見込みにスタンプを施すが破片で不明瞭である。9～12は龍泉窯系のもので，10～12の底部と9の高台に焼成台痕を認める。他に4層から越洲窯系の底部片の出土がある。

縁釉陶器　20片近くの破片が出土している。蛇の目高台のものがあり，焼成は堅緻で灰色を呈するものも認められる。

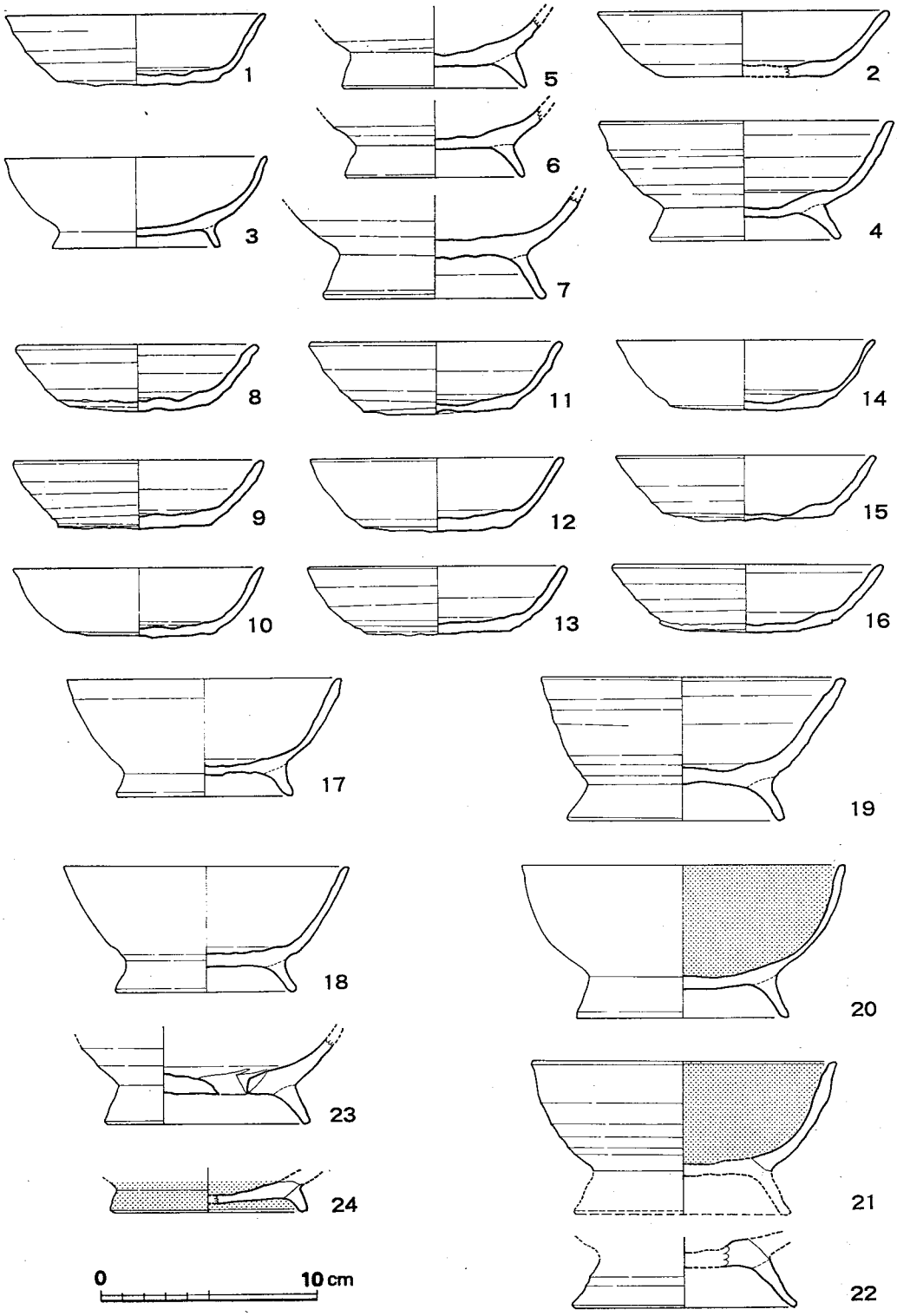
瓦質土器

23は口径約37cmを測る大甕口縁部片で，外面に櫛括波状文を施す。胎土に砂粒をほとんど含まず，内外面灰色・内部は灰白色を呈す。5層出土。口唇部の断面形状・施文・焼成が須恵器大甕と異なり，瓦質に焼成されている。

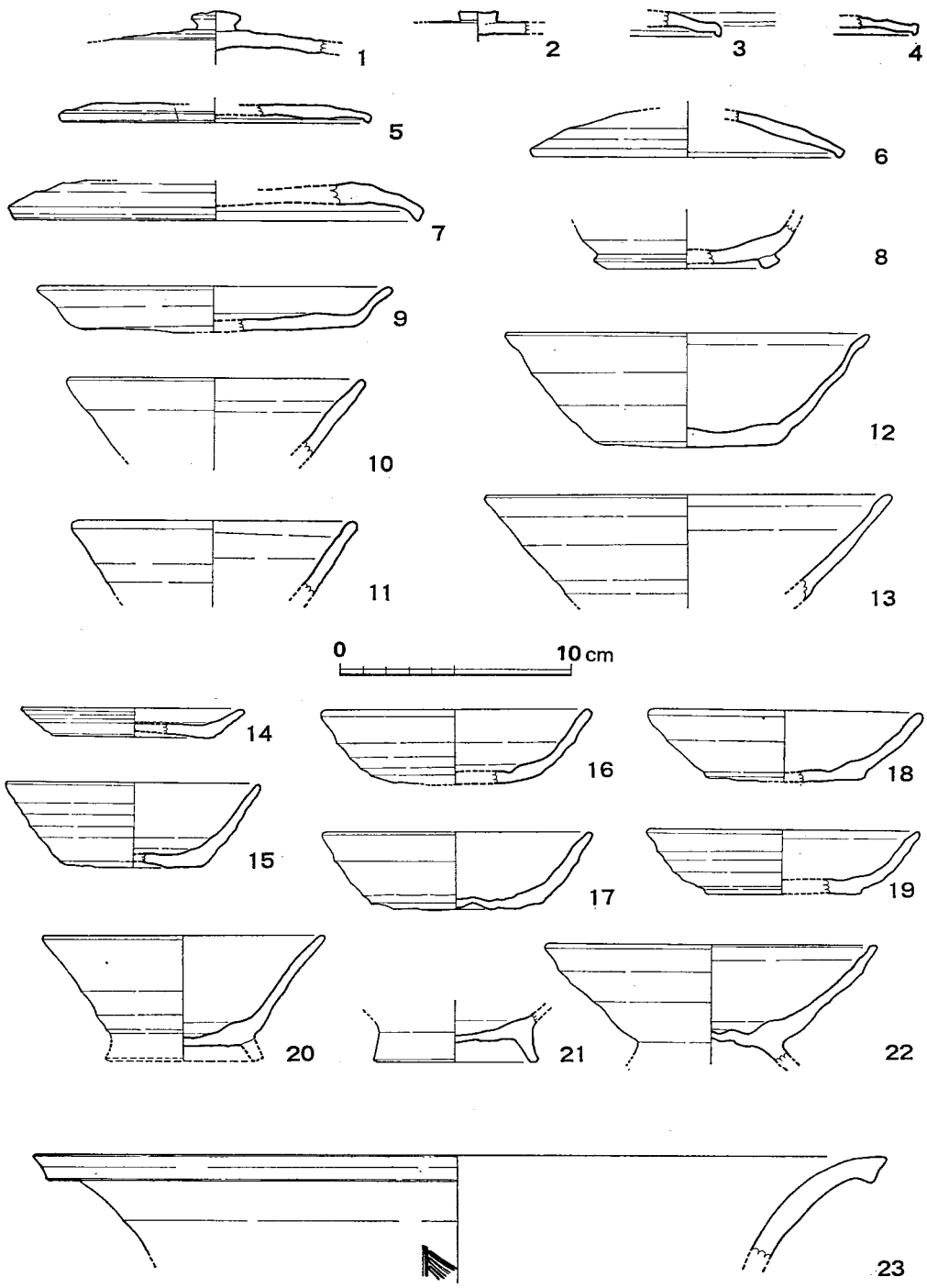
瓦

いずれも小片で，斜格子文を施し，断面は薄い。3～6層で出土している。

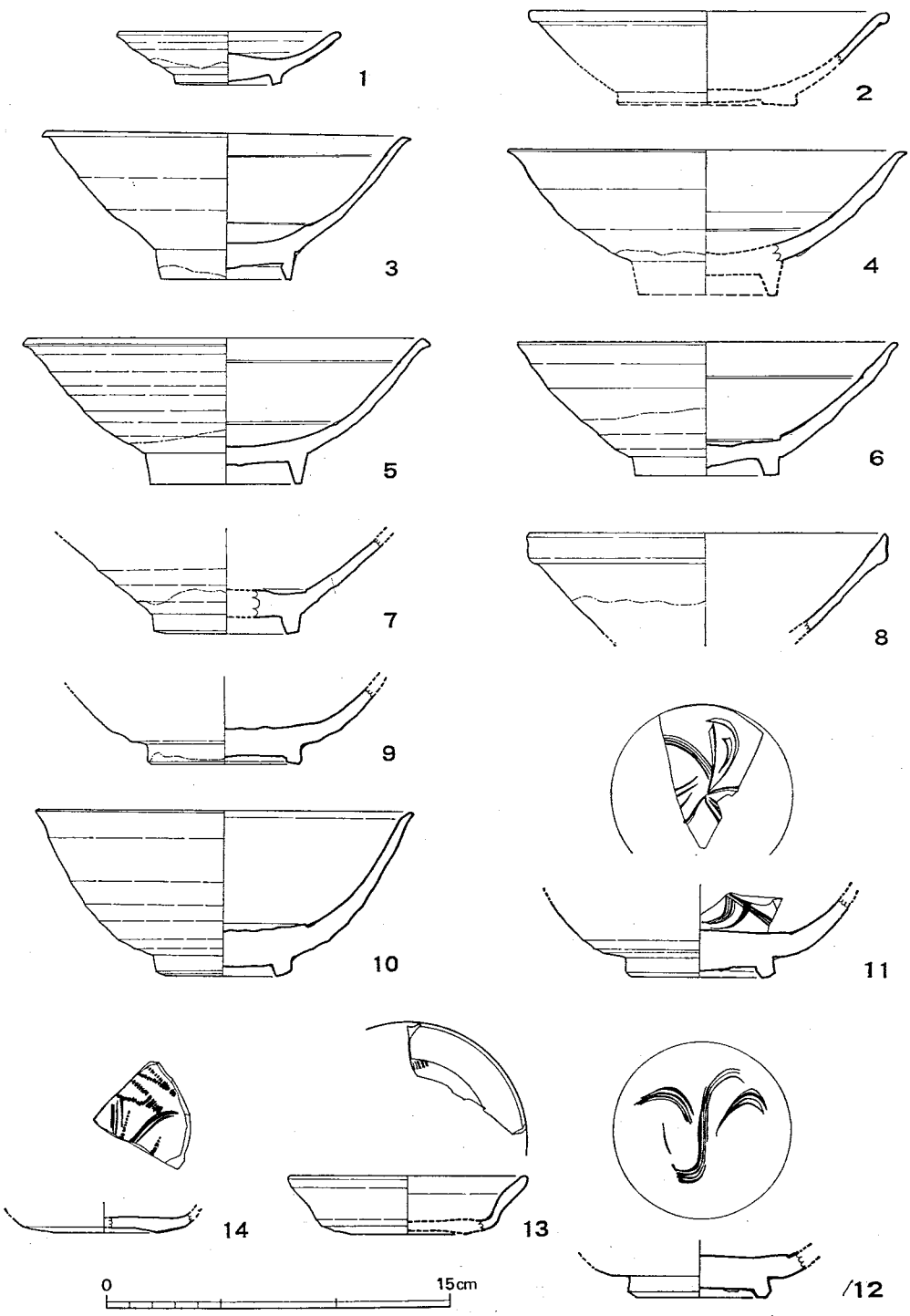
以上の土器の中で，土師器類ではＳＫ１号土壙一括出土の杯と同類のヘラ切り底の杯と共に同じ5層から糸切り底の小皿が出土している。また，磁器類にはこの他に，越洲窯系の青磁や龍泉窯系のいわゆる砧青磁片が出土している。このように，9世紀から13世紀の幅広い時期にかけての遺物が混在して出土している。



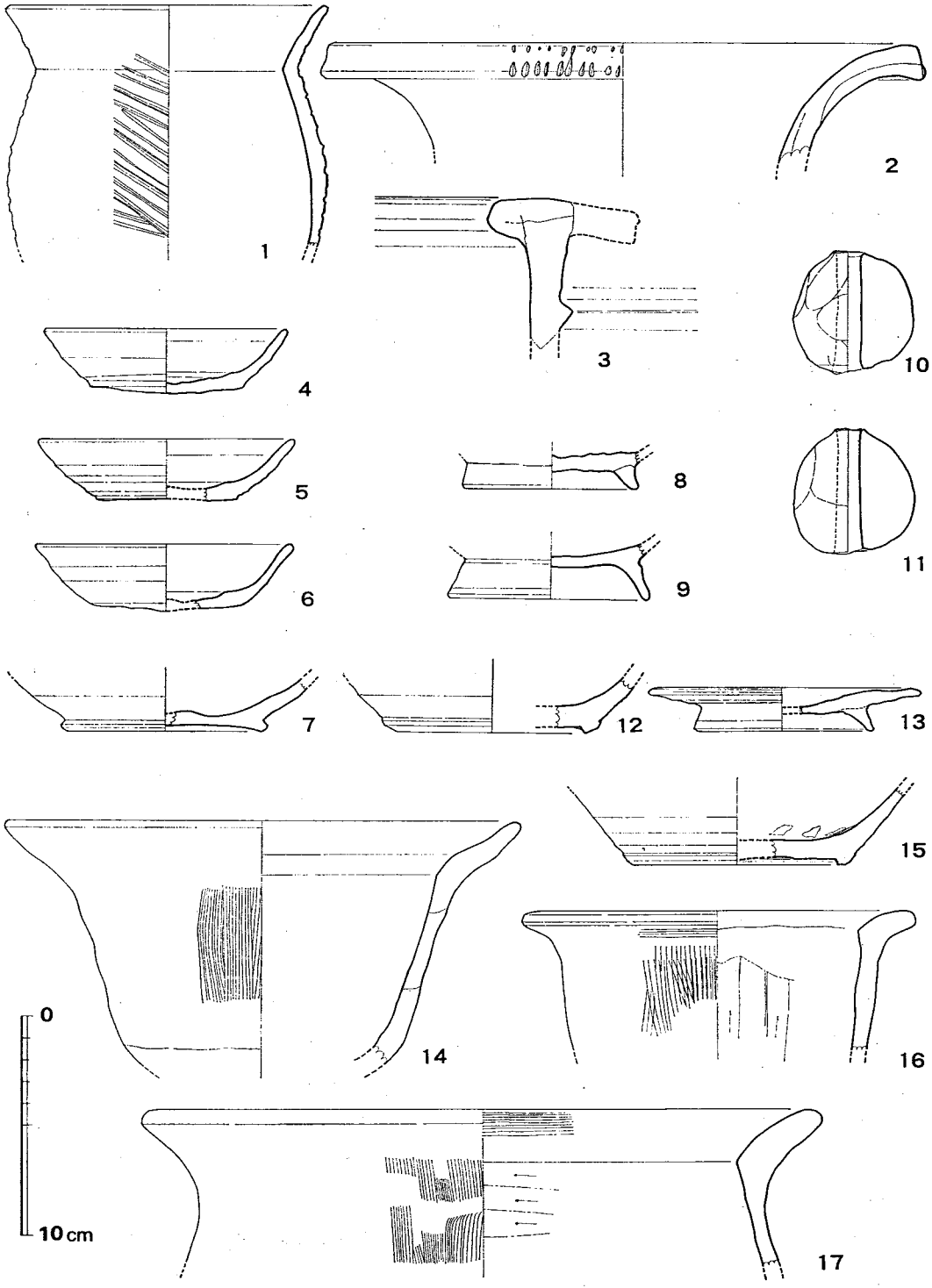
第100図　ＳＫ１号土壙出土土器実測図（1/3）



第101図　ＳＥ１号井戸・ＳＤ３号溝出土土器実測図（1/3）



第102図　ＳＤ３号溝出土土器実測図（1/3）



第103図　方形住居・ＳＫ３号土壙・その他の遺構出土遺物実測図（1/3）

4　Ⅱ区西トレンチとその他の遺構と遺物

Ⅱ区西トレンチ（第104図）

Ⅱ区西半部で検出した弥生時代の円形住居は，水田の標高約 12.00*m*の丘陵西緩斜面に位置している。その西側は，標高約11.00*m*から11.50*m*の谷水田となり，竹戸遺跡と対峙する標高約15*m*前後の丘陵が現在蜜柑園となっている。この蜜柑園までが，バイパス建設立花工事用進入道の範囲となっていたので，この間にユンボーによりトレンチを入れた。

その結果，蜜柑園として開墾された丘陵上は，既に表土下は直接地山層となって，大きく削平を受けており，遺構は検出されなかった。表土層から，数点の中世土器片が見い出されただけである。

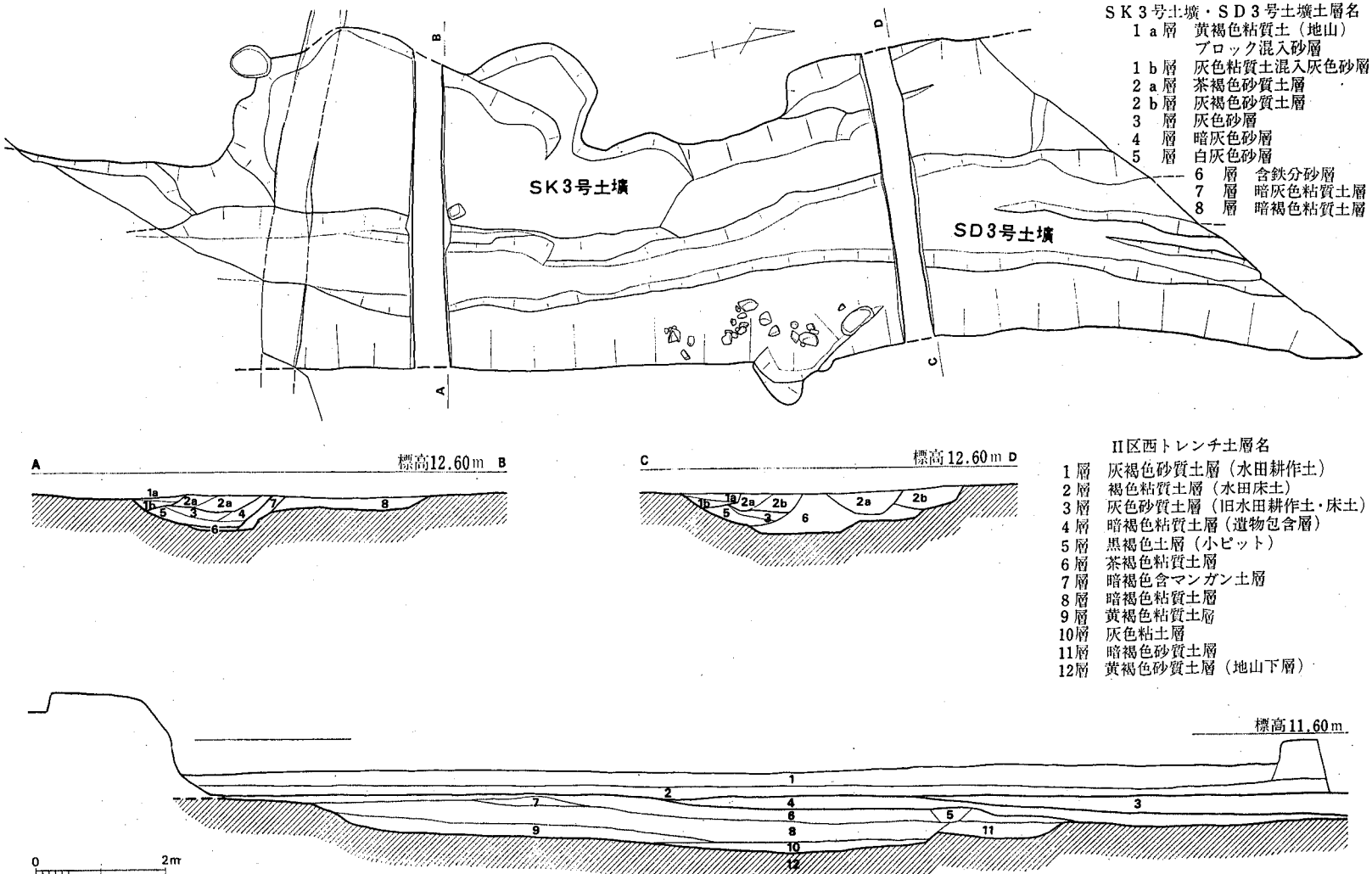
谷水田は，Ⅰ区とこの蜜柑園の両陵丘間の谷水田を利用している。3層は，現水田を広くする以前の旧水田で，4層は弥生土器に須恵器を含む遺物包含層である。6層以下には土器の出土はなかった。6層は，一枚西に下がった水田の床土の下層にのびており，自然堆積したものであるが，その下に大きな落ち込みが認められた。この落ち込み内の土層は，やはり自然堆積の様相を示し，南の谷頭からの流水により開折され，また順次埋まったものである。地山の上層は，Ⅰ～Ⅱ区での遺構検出面で，褐色粘質土であるが，12層はその下層で黄褐色砂質である。この12層に至ると湧水が認められ，Ⅰ区ＳＥ１号井戸の床面はこの層まで掘り込まれていた。

5　おわりに

(1)　竹戸遺跡について

竹戸遺跡は，石斧が出土した縄文時代遺物散布地とされていた（註6）。調査の結果，Ⅰ区の柱穴様小ピットから，縄文時代後期の沈線を有する鉢形土器の破片が出土している。後期後半～晩期初頭の遺物を多量に出土した広田遺跡とは，東に福吉川をはさんで 400*m*の距離で東西の低丘陵上に対峙しており，両者は時期的にも立地的にも留意すべき点が多い。しかし，弥生時代以降の各種遺構の重複で，明確な遺構の検出はできなかった。

弥生時代では，前期の遺物は出土しなかったが，Ⅱ区で中期初頭の壺形土器が出土した（第103図－２）。中期前半の土器片は大半の柱穴様小ピットを含めて，その他の遺構からも出土し



第104図　II区西トレンチ・SK3号土壙・SD3号溝実測図（1/100）

た。Ⅱ区では円形住居が検出されたが，西緩斜面で壁の遺存も悪く，Ⅲ区の多数の柱穴様小ピット群の中には，円形住居の柱穴となるものもあることが充分に考えられる。また，中期中頃の大形甕棺口縁片がⅢ区のＳＤ３号溝から出土し（第103図―３），中期後半の同破片も表採され，Ⅲ区の小児用甕棺墓の出土から，中期の甕棺墓の大半が消滅したと考えられる。なお，丹塗磨研土器片も出土している。

古墳時代では，Ⅰ区のＳＢ18号掘立柱建物の東側調査区端のピットから，布留式の甕形土器片が出土しており，Ⅲ区の方形住居の検出も含めて，その前期の遺構が存在している。

歴史時代では，Ⅰ区のＳＤ３号溝南端の東縁で，挙大の集石遺構があり，土師器が出土した（第103図14～17）。８世紀中頃のもので，同様の破片はⅡ・Ⅲ区でも若干認められた。掘立柱建物・井戸・土壙・溝からの出土遺物は，８世紀後半から12･3世紀までのものがみられ，Ⅲ区から10世紀頃のヘラ切り離しの托が出土した（第103図―13）一括資料の中には９世紀終末頃のものが多い。また，掘り方の径が大きく，規模も大きいものも含めて多数の掘立柱建物群の検出は，磁器・緑釉陶器の出土と共に留意すべきであろう。Ⅲ区の報告では，何らかの公的機能を有した建物群の性格を考え，『延喜式』（巻28）兵部省・西海道―筑前国駅馬「……佐尉。深江。比菩。……綱別各五疋」とあり，竹戸遺跡の西の小字名才ノ原地区を，佐尉駅家の比定と合わせて（註７），東の深江地区の深江駅家の存在を考慮している（註２）。なお，才ノ原地区の一部が，バイパス関連遺跡として調査されたが，遺構の確認には至っていない。竹戸遺跡の掘立柱建物群は，数次期にわたって整然と配置されており，肥前国境近くの筑前国境に位置した駅家跡としての可能性を示唆するものである。

(2) 円形住居について（第105・106図）

２号円形住居

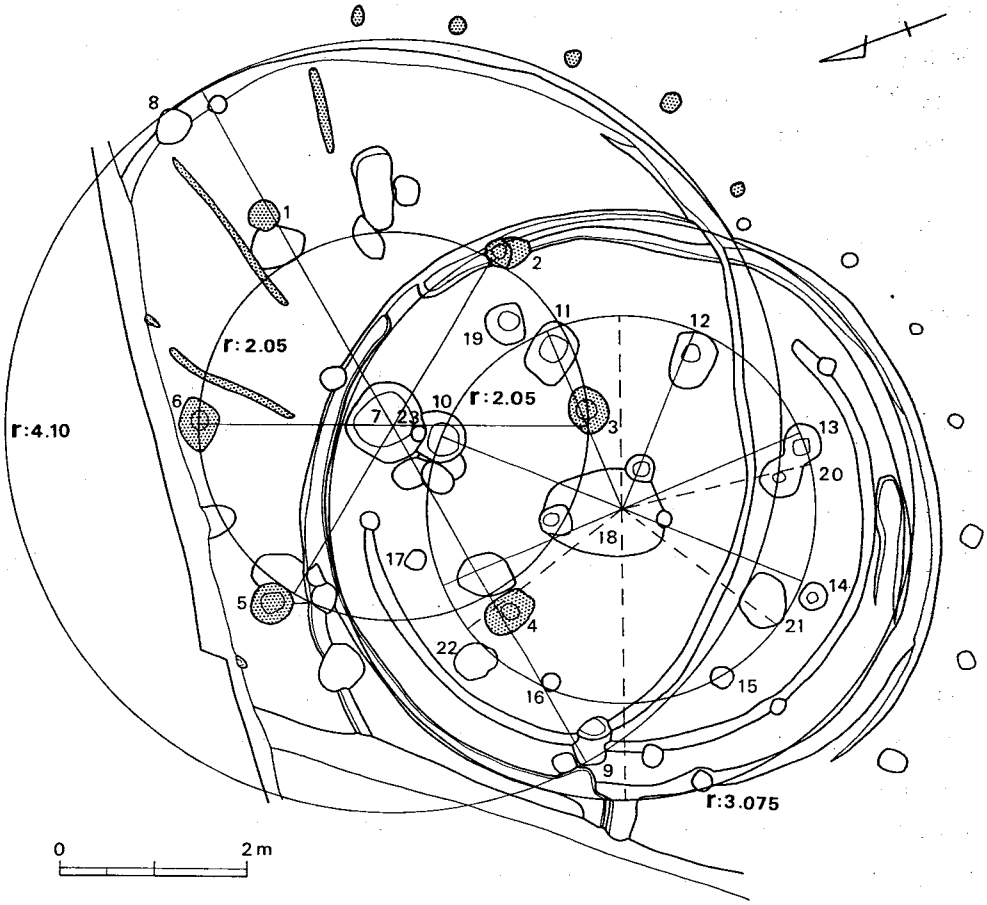
径4.10mの外円は壁面に，径2.05mの内円は主柱穴の中心に一致して描いた同心円である。円の中心にはＰ７が，内円を60°に分割して主柱穴Ｐ１～Ｐ６が位置する。３条の小溝は，いづれも中心に向って走る。Ｐ１とＰ５に接して高まりがあるが，その断面により，それは当初から地山を削り出したものであることを確認した。Ｐ１とＰ４を結び，外円までのばすと，Ｐ８とＰ９が近くに位置するが，Ｐ９は集排水溝と考えられる周溝内で検出されているので，住居に伴うかどうかは疑問である。しかし，Ｐ８については，３条の小溝を入口部に伴なう間仕切り壁と考え，その支柱穴とできる。この場合の入口中軸方向は，Ｎ65°Ｅを測る。

１号円形住居

径3.075mの外円は，内円を1.5倍して得たものであるが，拡張された住居の壁面に一致して描いた同心円である。円の中心には，初期の住居と拡張された住居と重複したＰ18が位置する。

当初の住居の主柱穴は，小円を45°に8分割してP10～P17が位置する。この中で，P10～P13は掘り方が大きく，また深い。これは，東側で切れている周溝との関係が指摘でき，その先端を結ぶ中軸線上にP11が位置し，2号住居のP4の東に接した高まり部とP13を結ぶ中軸線上でもある。従って入口部は，東側と考えられ，その中軸方向はN60°Eを測る。

拡張された住居の主柱穴は，当初の柱穴から少し北側に移動し，深さは若干浅い。P23は径が小さく，むしろP10と12を再利用し，他にP19～22を新たに設けて，計6個と考えられる。また，P11とP12・P21とP22とのそれぞれの中軸線が一致し，その北側に外方に向う周溝が設けられ，これは丘陵の西緩斜面の位置にあたるので，排水溝と考えられよう。また，入口部は，周溝が一部切れるP10とP19の間と考えられる。この入口中軸方向は，N60°Eを測る。



第105図　1号・2号円形住居模式図（1/80）

以上のように，各住居は重複するが，住居壁の掘り方半径（便宜上これを外円と呼ぶ）と，主柱穴を配する半径（同内円）に関して，統一ある製円とその分割を行っていることは明らかである。横式図では，2号住居の外径を4.10mとし，内径を½の2.05mで描き，内径の6分割線を配した場合に実際のプランと一致する。1号住居は，当初の住居が内径は同じく2.05mで外径はその¾の2.5625mで描き，内径の8分割線を配した場合に，同様に一致する。また，拡張された住居は，内径は同じく2.05mとし，外径はその⅔の 3.075mで描き，古い主柱穴を一部使用するが，新たに設けて計6個と2個減少させた為に，この北半部のP21とP22と外方への排水溝の位置のみ内径の6分割線を配した場合に，同様に一致する。1号住居の内径と外径の差，つまり内径の¼は0.5125mであるが，これを1つの単位とすることもできよう。尺度を用いたとまでは言及できないが，大略指先を伸ばした片腕の長さに等しいことを指摘しておきたい。なお，出土した土器はいづれも中期前半に属し，同様の内径を使用しているので，ほぼ連続して築かれ，外径の規模の拡大と主柱穴の減少は，前期を経て中期には入った，弥生時代の社会の発展の一部を示しているようである。住居の西側に接して，現在も谷頭を利用した水田が開かれているが，Ⅱ区西トレンチの土層で観察された8～10層の粘土層の存在から，弥生期以降から利用されて来たものと考えられる。

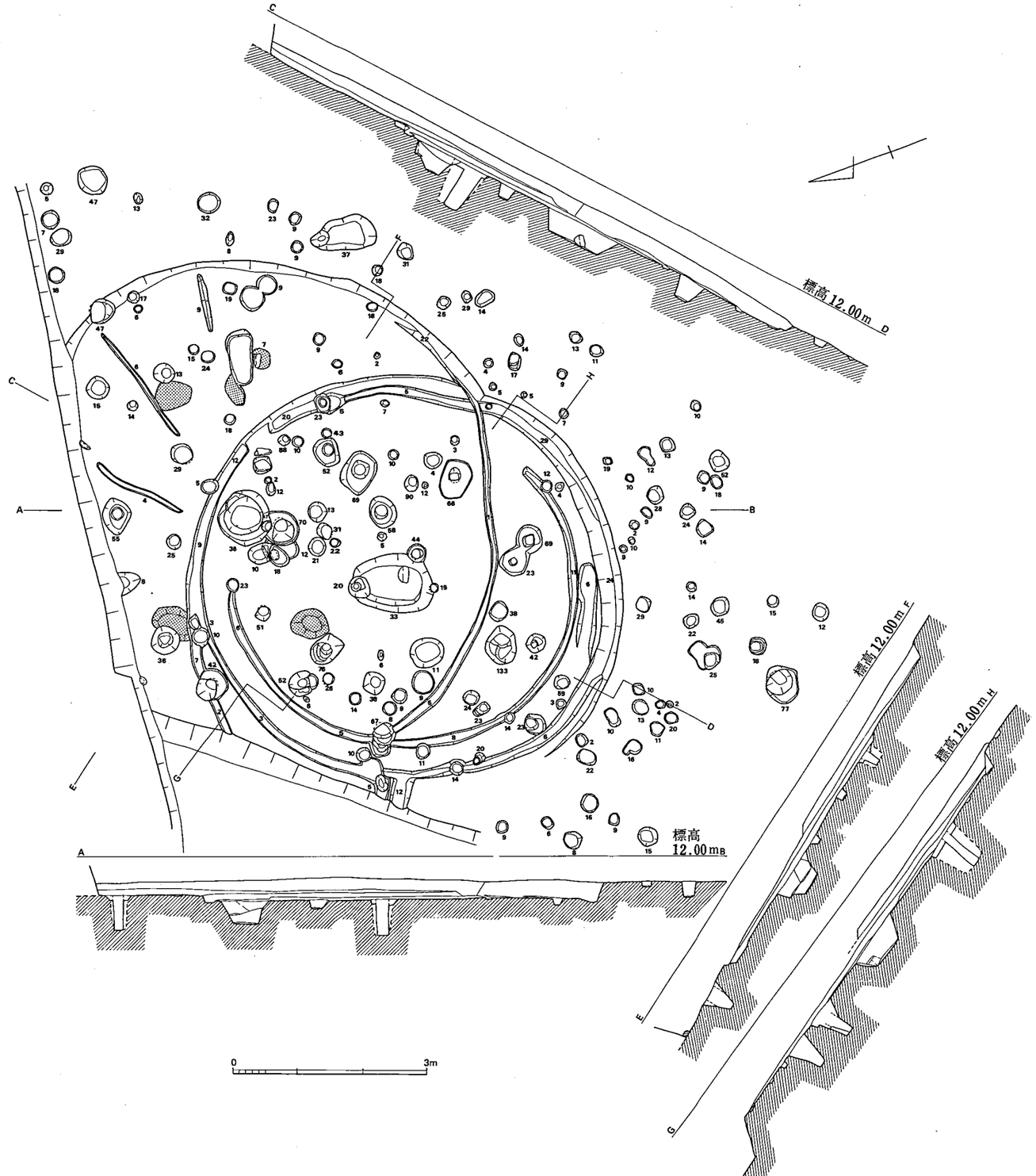
(3) 掘立柱建物について（第107図，付図）

建物は，各棟ごとに表25のように計測値を作成したが，割愛したのでその平均値を表28に示し，これにより模式化したものが第107図である。上限の時期は掘り方が未掘なため，下限の時期は柱穴出土遺物が少ないために，明確にし得ない。しかし，柱穴の切り合いから，6号(古)→4号(新)，同12号→13号が，共存できないものに4号と5・6号，8号と9・10号，13号と12・14号が明確である。また，建物の規模に主軸方向を考慮すると，大略次のことが考えられる。

Ⅰ期　2号・9号・11号・12号・16号建物，1号井戸……N24°～26°E。梁行柱間で〔2号と9号・11号と16号〕，桁行間で〔9号と12号〕が近似し，桁行延長で〔9号と11号〕・梁行延長で〔11号と12号〕がその線上に位置する。16号建物と1号井戸は1間離れ，両者の出土遺物から8世紀後半頃に比定される。

Ⅱ期　6号・14号・15号・18号・19号建物，3号・2号（？）土壙……N15°～20°E。梁行柱間で〔14号と18号〕が近似する。梁行延長で〔18号と19号〕が一致するが，近接するので新旧関係のあることを考慮すべきであろう。15号は14号から3間西に，また1間南に位置する。6号建物と3号土壙の出土遺物から9世紀後半頃に比定される。

Ⅲ期　4号・8号・13号建物，1号土壙……N35°～39°E。西桁行延長で〔8号と13号〕が，8号北梁行延長で〔8号と4号〕がその線上に位置する。8号は13号から3間（庇までを



第106図　1号・2号円形住居実測図 (1/80)

表25　SB8号掘立柱建物計測表　(cm)

2間×5間	梁行柱間	梁行間
P1 \ P2	222	—
P2 \ P3	230	450
P4 \ P5	—	468
P6 \ P7	—	468
P8 \ P9	—	464
P10 \ P11	—	464
P12 \ P13	230	—
P13 \ P14	238	468
平均	230	464

主軸方向	N 39°E

	桁行柱間	桁行間
P1 \ P4	224	
P4 \ P6	219	
P6 \ P8	221	
P8 \ P10	211	
P10 \ P12	237	1110
P2 \ P13	—	1120
P3 \ P5	238	
P5 \ P7	218	
P7 \ P9	213	
P9 \ P11	221	
P11 \ P14	226	1114
平均	223	1115

P	深さ	柱痕径	掘方径	出土遺物
1	72	24×27	79×82	土師器杯口縁片2他、須恵器片2、斜格子瓦片1、鉄滓1
2	28	27×28	68×70	
3	34	27×28	66×68	
4	64	31×32	87×88	鉄滓1、須恵器片1、土器片6
5	40	25×27	72×76	黒曜石片2、サヌカイト片2、他土器片
6	71	26×27	77×78	須恵器杯片5他、土師器甕片1他、鉄滓3、砥石1他
7	43	27×35	60×76	須恵器甕片1他、白磁口縁片1(註1)、鉄滓1、他土器片
8	68	33×34	82×92	
9	42	25×26	69×74	土師器杯口縁片2、高台片2他
10	61	28×29	81×83	須恵器杯口縁片他、土器片他
11	43	23×26	68×81	須恵器杯片2、高台片1、甕口縁片1、土師器口縁片1、他土器片
12	77	26×29	74×93	須恵器杯口縁片4他、土師器杯片5他、青磁片1(註2)、鉄滓3
13	41	23×24	72×74	
14	66	23×24	84×114	
平均	54	26×28	74×82	

註1…椀口縁部小片
註2…龍泉窯系椀片
} SB8号に共伴？

表26　SB13号掘立柱建物計測表　(cm)

2間×5間	梁行柱間	梁行間
P1 \ P2	?	—
P2 \ P3	236	?
P4 \ P5	—	(490)
P6 \ P7	—	(488)
P8 \ P9	—	492
P10 \ P11	—	(490)
P12 \ P13	231	—
P13 \ P14	260	491
平均	245	490

主軸方向	N 38°E

	桁行柱間	桁行間
P1 \ P4	?	—
P4 \ P6	200	—
P6 \ P8	219	—
P8 \ P10	221	—
P10 \ P12	217	?
P2 \ P13	—	1104
P3 \ P5	(182)	—
P5 \ P7	246	—
P7 \ P9	215	—
P9 \ P11	(215)	—
P11 \ P14	(235)	1089
平均	219	1097

P	深さ	柱痕径	掘方径	出土遺物
1	?	?	?	
2	26	30×36	51×52	
3	41	37×38	58×60	
4	23	28×30	60×68	
5	14	—	34×47	弥生甕片3、土器片10
6	22	32×42	52×68	
7	41	26×?	56×64	土師器杯底片1、土器片2
8	36	24×29	57×64	
9	42	38×48	63×81	土器片多数
10	33	33×42	62×66	土器片7
11	42	—	58×74	
12	44	24×32	70×71	須恵器杯片1、甕片1、土器片2
13	31	18×19	60×62	須恵器杯底片1、甕片1、土器片1、サヌカイト片1、
14	45	29×30	82×88	土師器杯片12、須恵器杯片2、黒曜石片1、土器片多数
平均	34	29×35	59×67	

(2間×5間)+庇	梁行柱間	梁行間	桁行柱間	桁行間
平均	245	490	217	1097

庇	梁行柱間
P15 \ P16	?
P16 \ P4	251
P17 \ P6	246
P18 \ P8	246
P19 \ P10	250
P20 \ P12	243
平均	247

	桁行柱間
P15 \ P16	?
P16 \ P17	200
P17 \ P18	214
P18 \ P19	219
P19 \ P20	240
平均	218

P	深さ	柱痕径	掘方径	出土遺物
15	?	?	?	
16	37	—	29×34	須恵器片1 土器片6
17	34	14×14	36×37	
18	29	19×20	36×38	
19	25	34×36	39×40	
20	24	15×16	36×39	
平均	30	21×22	35×38	

含めた梁行間）北に，4号は8号から5間東に位置する。13号の南には，8号同様の建物が配されていた可能性が強い。1号土壙西側縁内の5個の小柱穴間は8号の2間で，8号より3間西に位置する。1号土壙の出土遺物から9世紀終末頃に比定される。

Ⅳ期　1号・3号・5号・10号建物，1号・3号溝……N24°～27°E。梁行柱間でいづれも近似する。3号西桁延長で1号が，1号西梁行延長で10号新が位置する。なお，1号桁行方向はN35°E（第107図○印模式図）を測るが，この場合の西梁行延長で10号古のP11・12が位置する。5号は，3号から1間南および西に位置し，10号新と共に他より若干新しく建てられた

表27　SB5号掘立柱建物計測表　(cm)

2間×3間		梁行柱間	間柱間	梁行間
P15	P16	—	124	—
P16	P17	232	110	—
P17	P18	220	—	453
P19	P20	—	—	461
P21	P22	—	—	466
P23	P24	—	—	446
P25	P26	226	—	—
P26	P27	—	116	—
P27	P28	219	105	—
平均		224	114	457

主軸方向	N 24°E

		桁行柱間	間柱間	桁行間
P15	P19	—	115	—
P19	P21	222	108	—
P21	P23	188	—	—
P23	P25	227	—	635
P16	?	?	?	?
P17	P26	—	—	638
?	P27	?	?	?
P18	P20	—	130	—
P20	P22	240	113	—
P22	P24	186	—	—
P24	P28	198	—	625
平均		210	117	632

P	深さ	柱痕径	掘方径	出土遺物
15	35	21×21	59×60	弥生甕口縁片1 破片6
16	24	19×23	42×45	弥生甕口縁片1 土器片多数
17	20	16×18	36×40	土師器杯片2・土器片3
18	61	27×27		弥生甕口縁片1 土器片多数
19	30	20×21	43×43	
20	14	—	38×48	土器片多数
21	5	—	30×38	
22	27	16×20	38×39	土器片3
23	30	—	56×56	須恵器片1・土器片9
24	10	19×21	46×54	
25	51	16×19	43×44	
26	22	19×25	41×45	
27	16	18×21	42×48	
28	24	22×26	26×27	
平均	26	19×22	42×45	

3間×4間		梁行柱間	梁行間
P1	P2	138	—
P2	P3	137	—
P3	P4	178	453
P5	P6	—	475
P7	P8	—	462
P9	P10	—	468
P11	P12	150	—
P12	P13	141	—
P13	P14	155	446
平均		150	457

主軸方向	N 27°E

		桁行柱間	桁行間
P1	P5	102	—
P5	P7	157	—
P7	P9	164	—
P9	P11	146	570
P2	P12	—	592
P3	P13	—	600
P4	P6	164	—
P6	P8	140	—
P8	P10	150	—
P10	P14	133	587
平均		145	587

P	深さ	柱痕径	掘方径	出土遺物
1	30	22×25	56×68	須恵器杯片1 破片多数
2	19	24×25	46×54	土師器杯片1 土器片6
3	24	25×26	52×58	弥生甕口縁片1 土器片1
4	34	18×18	?	須恵器杯片1 土器片1
5	29	—	46×48	
6	33	22×25	43×50	黒曜石片1 土器片13
7	40	16×17	43×46	土器片2
8	24	20×22	46×50	弥生甕口縁片1 土器片1
9	36	23×25	44×62	弥生甕底片1 土器片1
10	10	—	36×37	
11	52	29×32	60×63	土器片5
12	?	27×35	38×50	土器片多数
13	7	—	42×45	
14	15	21×28	44×48	
平均	27	22×25	46×52	

事も考えられる。3号溝の出土遺物から12世紀後半頃以降に比定される。

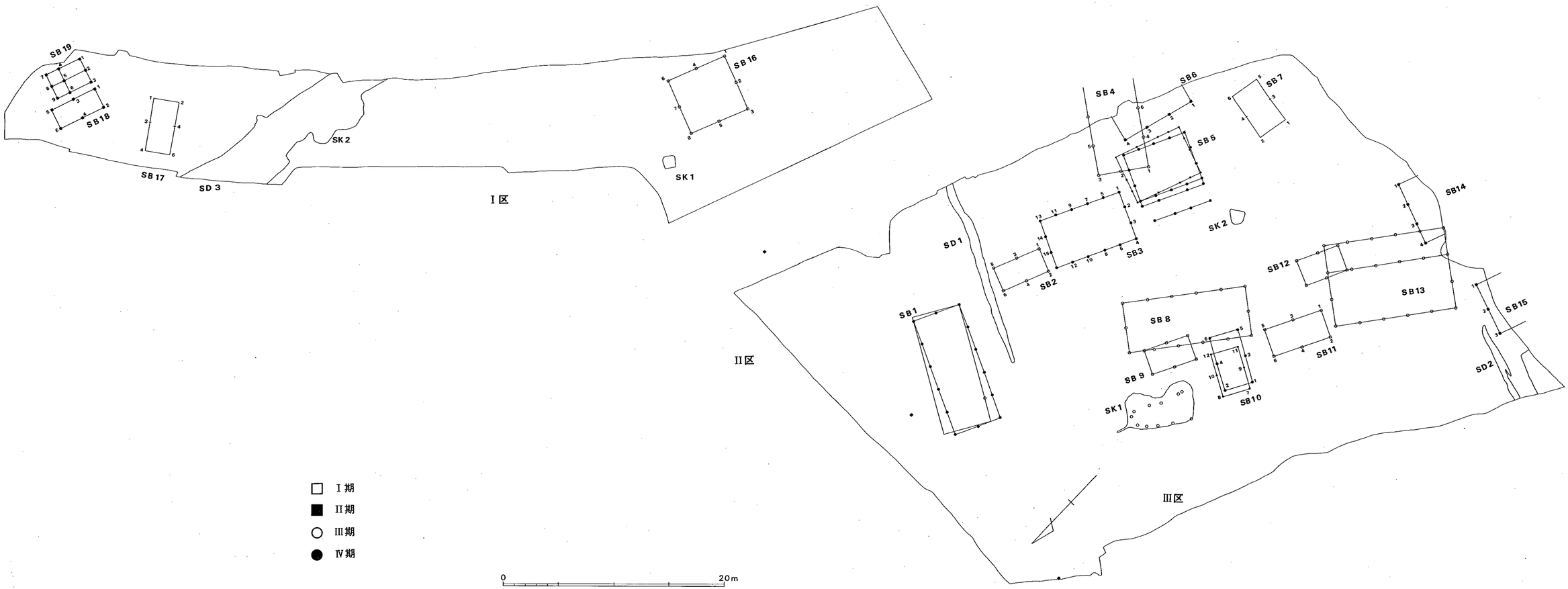
なお，7号からは須恵器・土師器の出土がないので古墳時代前期の方形住居に伴う事が考えられ，17号は不明である。

このように大きく4期にわけられ，5号（3号）・13号・16号は各期の建物群の中で主要な位置を占めていたと考えられる。また，庇を有した13号を含めて整然とした建物群の配置と，付属した井戸・鍛冶関係工房の可能性を有するＳＫ１号土壙・溝などの検出は，律令制にみる地方官衙を考える上で留意すべきであろう。掘り方はいづれも円形で，1間×2間の9号・12号等の掘り方も大きく，また11世紀前後の時期の空白が気になるが，Ⅲ区南側未調査区に所在することも考えられる。

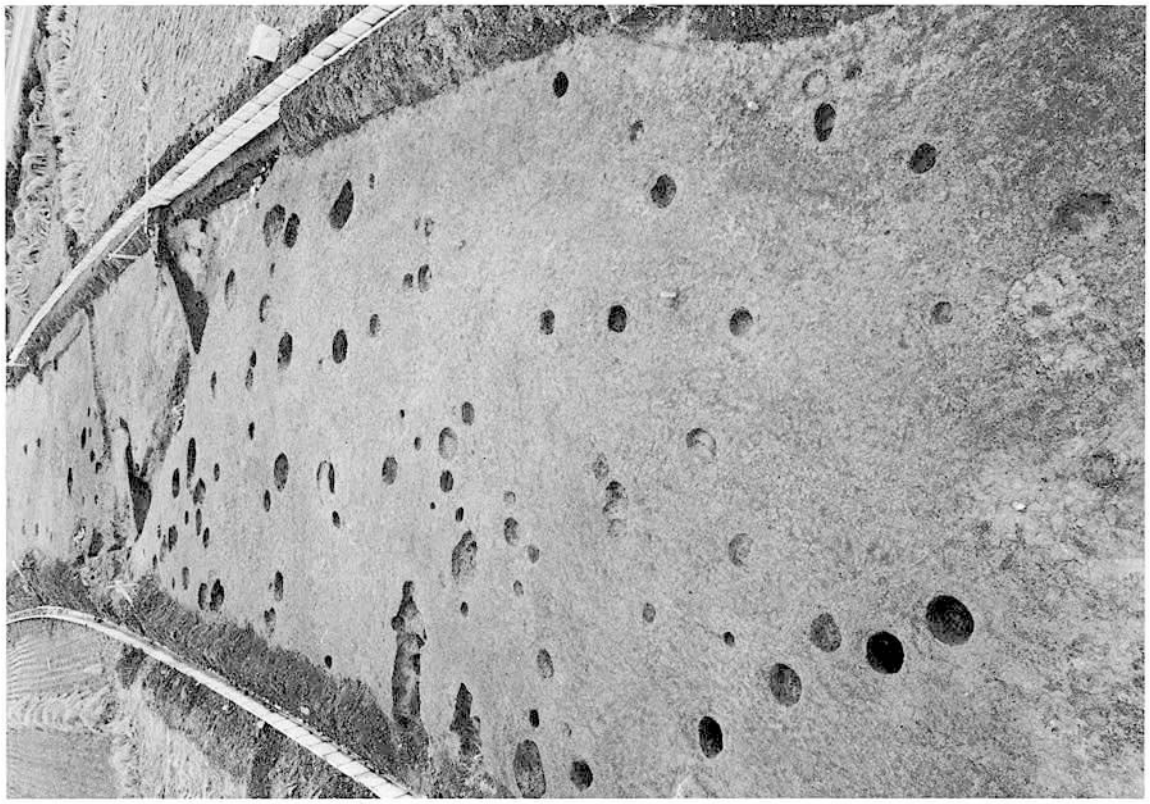
註1　Ⅰ～Ⅲ区の所在地は次のとおりである。
　Ⅰ区　吉井字竹戸3362—1，3363—1番地
　Ⅱ区　吉井字竹戸3637—3，3638—3番地
　Ⅲ区　吉井字竹戸3637—1番地
註2　佐々木隆彦編『竹戸遺跡』「二丈町文化財調査報告書　第1集」1979　二丈町教育委員会
註3　註2で言及されている。
註4　前川威洋編『筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)～(4)』1975～1978　福岡県教育委員会
註5　歴史時代の遺物については、九州歴史資料館の森田勉氏から多くの御教示を得た。石鍋が同様にこの時期の土師器と供伴して、大宰府政庁跡の最近の調査で出土したことも、氏から教示があった。
註6　原田大六鑑修『二丈町文化財地名表』1978　二丈町教育委員会
註7　註2に同じ。藤岡謙二郎「古代日本の交通路Ⅳ」1978　大明堂

表28　掘立柱建物計測表　(cm)

建物番号	規模	梁行柱間	梁行間	桁行柱間	桁行間	主軸方向	深さ	柱痕径	掘方径	出土遺物
ＳＢ1	2間×5間	218	444	219	1099	{N 25° E {N 31° E	26	21×24	34×37	土師器杯片2、須恵器杯片1、同大甕片2、鉄滓26
ＳＢ2	1間×2間	227		225	449	N 26° E	33	22×26	53×61	土師器杯口縁片1
ＳＢ3	3間×5間	146	445	151	769	N 26° E	18	23×28	43×47	土師器杯片2、須恵器杯口縁片1、鉄滓1、砥石1
ＳＢ4	2間×？	233	461	270	？	N 35° E	23	28×31	88×95	土師器杯口縁片5、須恵器杯片15、同大甕片1
ＳＢ6	3間×？	226	680			N 15° E	21	29×32	63×76	黒色土器口縁片1、須恵器杯片1
ＳＢ7	1間×2間	275		231	461	N 10° E	13	24×26	52×67	弥生甕口縁片1
ＳＢ9	1間×2間	225		201	402	N 26° E	42	29×32	71×90	須恵器杯片2、同大甕片1 砥石1
ＳＢ10古	1間×2間	226		197	391	N 24° E	38	28×33	50×56	須恵器杯片2
ＳＢ10新	1間×2間	268		252	505	N 27° E	36	34×42	59×69	須恵器杯甕片1
ＳＢ11	1間×2間	263		272	544	N 26° E	41	26×28	60×70	須恵器杯片1
ＳＢ12	1間×2間	241		206	402	N 25° E	30	26×31	59×63	須恵器片1
ＳＢ14	3間×？	195	586			N 20° E	6	24×29	52×60	須恵器杯片1
ＳＢ15	2間×？	248	498			N 19° E	18	23×24	76×86	
ＳＢ16	2間×2間	262	525	279	558	N 24° E	34		69×79	土師器杯片2 須恵器杯口縁片2
ＳＢ17	1間×2間	233		244	487	N 46° E	30	25×27	69×78	弥生片、焼土1
ＳＢ18	1間×2間	193		219	438	N 19° E	14		30×34	
ＳＢ19	2間×2間	120	241	173	343	N 19° E	14		27×34	土師器杯口縁片3



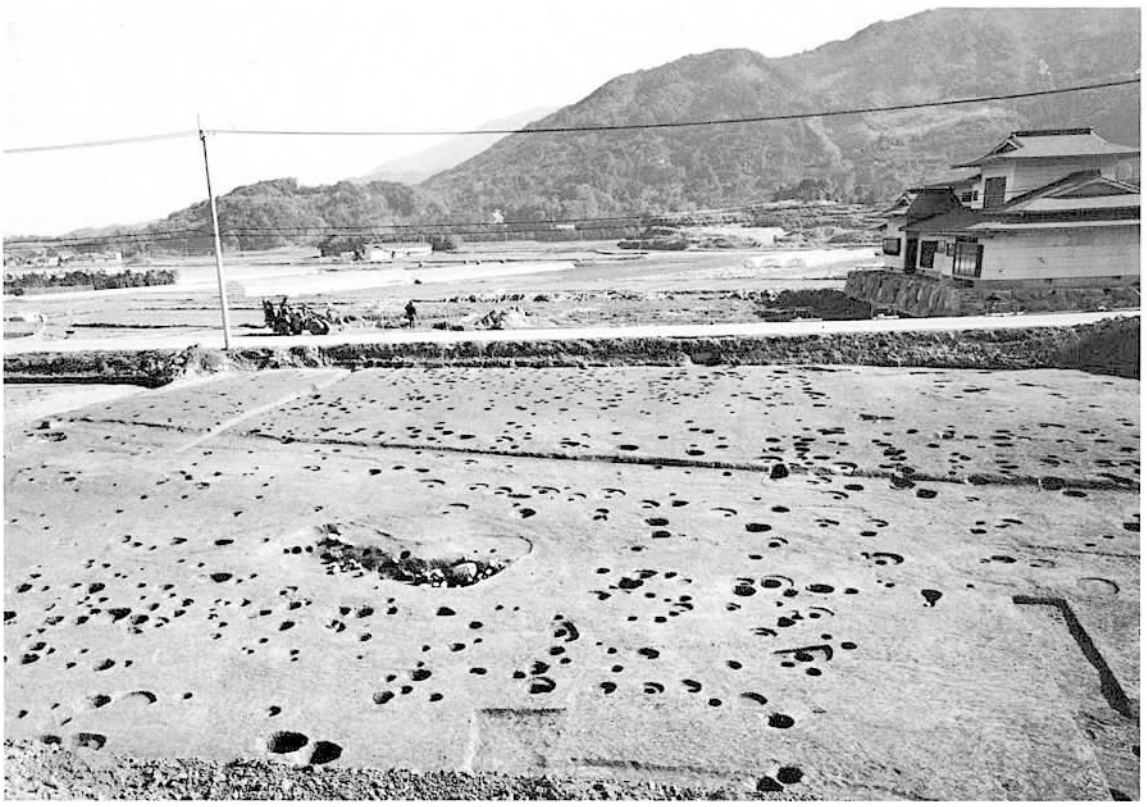
第107図　竹戸遺跡掘立柱建物配置模式図　(1/300)



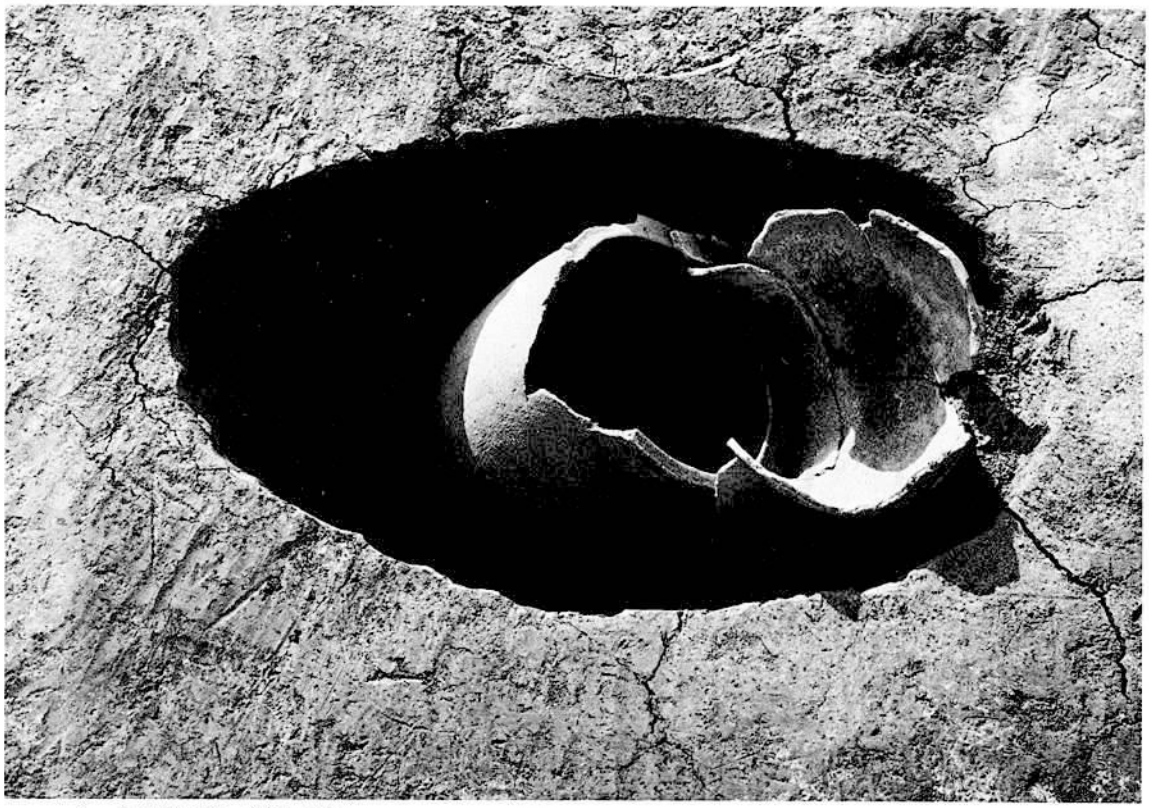
1　竹戸遺跡I区全景（北から）

2　竹戸遺跡II区全景（東から）

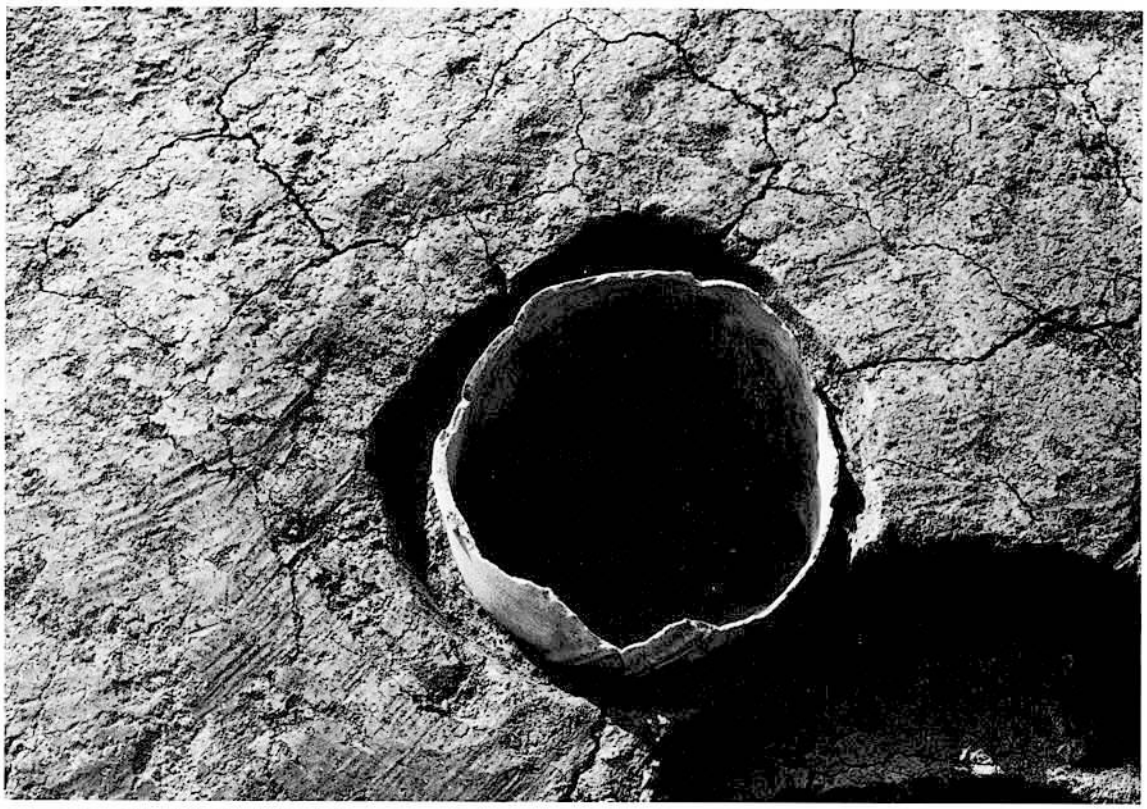
1　竹戸遺跡Ⅲ区全景　（北から）



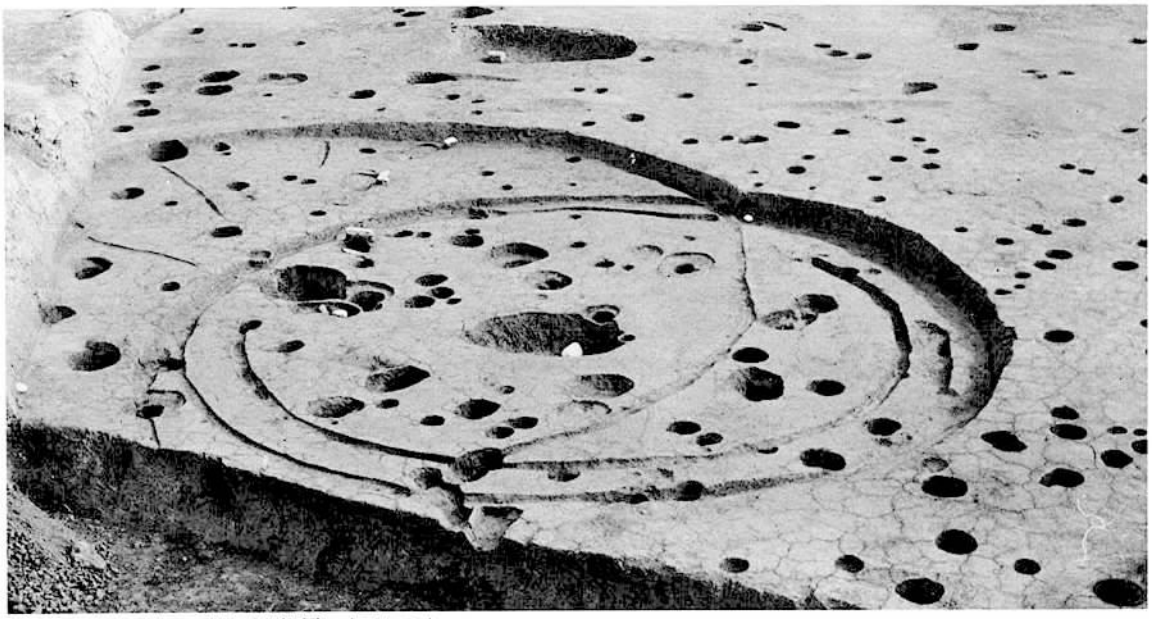
2　竹戸遺跡Ⅲ区全景　（西から）



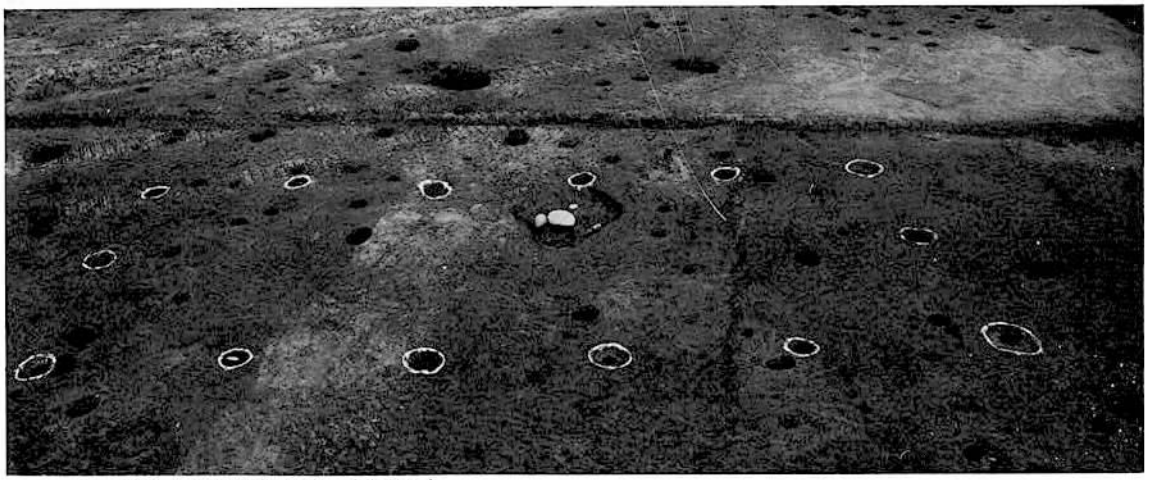
1　1号甕棺墓（南から）



2　2号甕棺墓（南から）



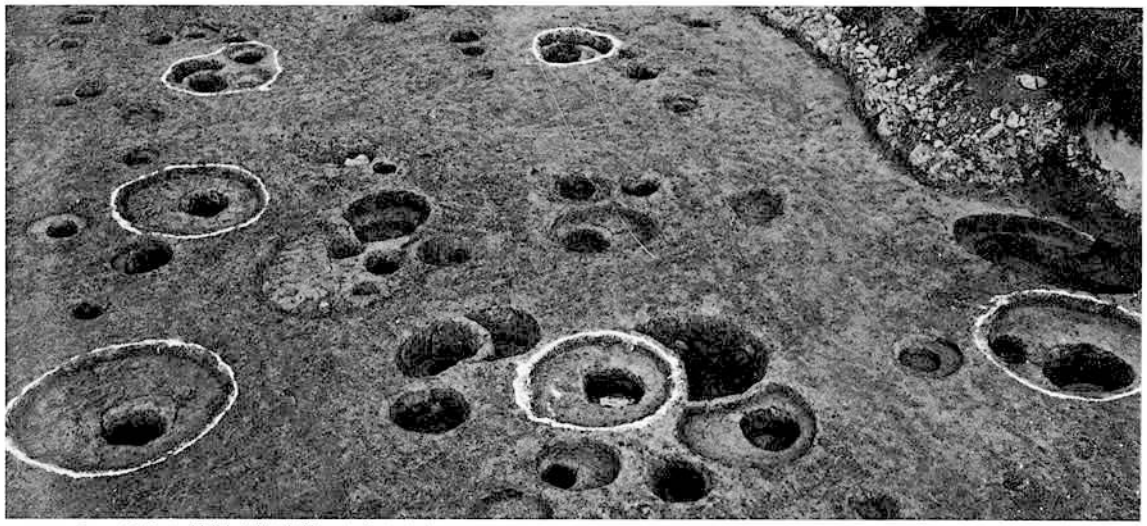
1　１号・２号円形住居　（西から）



2　ＳＢ１号掘立柱建物　（北から）

3　ＳＢ２号掘立柱建物　（東から）

1　ＳＢ３号掘立柱建物　（西から）



2　ＳＢ４号掘立柱建物　（南から）

3　ＳＢ７号掘立柱建物　（北から）

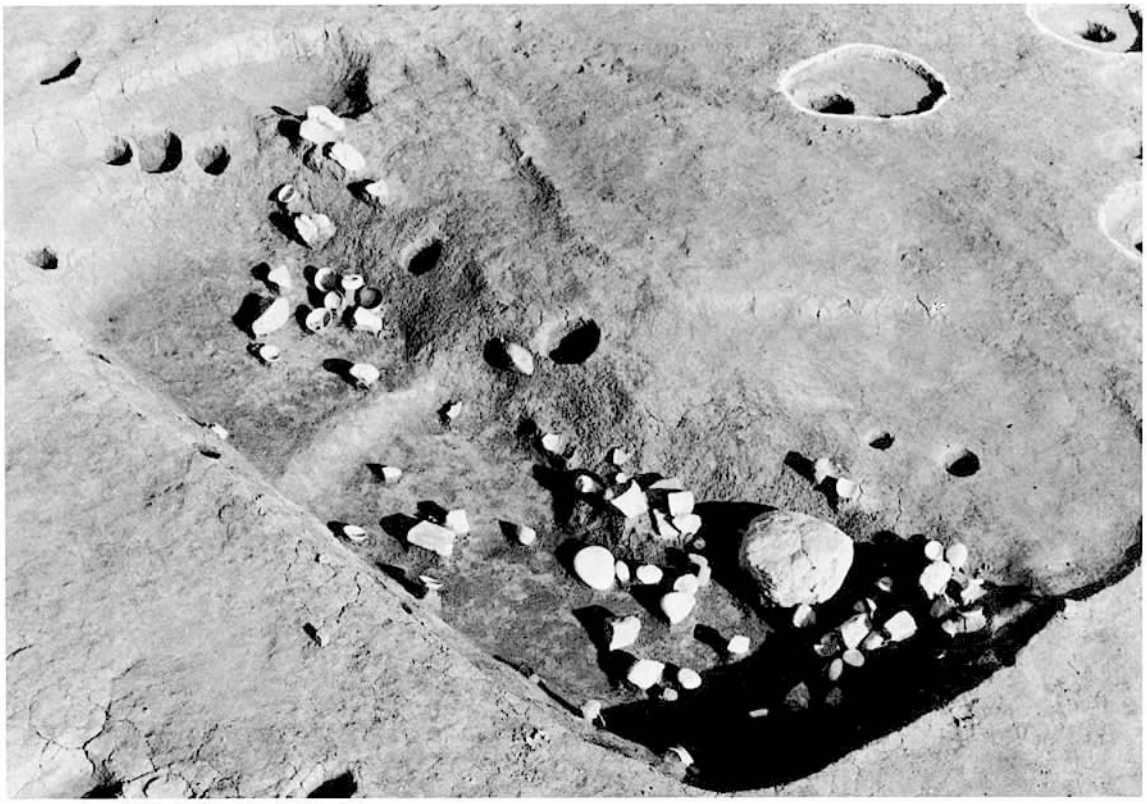
1　ＳＢ８号(上)・ＳＢ９号(左下)・ＳＢ10号旧(右下黒枠)・同新(同白枠)掘立柱建物　(西から)

2　ＳＢ11号掘立柱建物　(西から)

3　ＳＢ17号掘立柱建物　(西から)

1　ＳＢ12号(左上黒)・ＳＢ13号(中央)・ＳＢ14号(右上黒)掘立柱建物　(西から)

2　ＳＢ16号掘立柱建物　(西から)



1　ＳＫ１号土壙（西から）

2　ＳＫ３号土壙・ＳＤ３号溝（北から）

Ⅲ 各遺跡の調査

3 長須隈古墳

Ⅲ—3　長須隈古墳

1　調査の目的

長須隈古墳は，県内では類例が極めて稀な舟形石棺を主体とすることで著名である。全長約2.8*m*の同石棺は，現在前原町の県立糸島高校に保管されており，昭和35年に考古資料として県指定されている。しかし，墳丘の実態は不明で，前方後円墳と円墳の二説があった。

今回の調査は，福岡県道路公社による二丈浜玉道路建設のための工事用道路（白石道路）の開設に伴うものである。当初の工事計画では，本墳の墳丘が前方後円形をとるとすれば，その前方部（西側）の大半と後円部の一部とがカットされることが予測された。

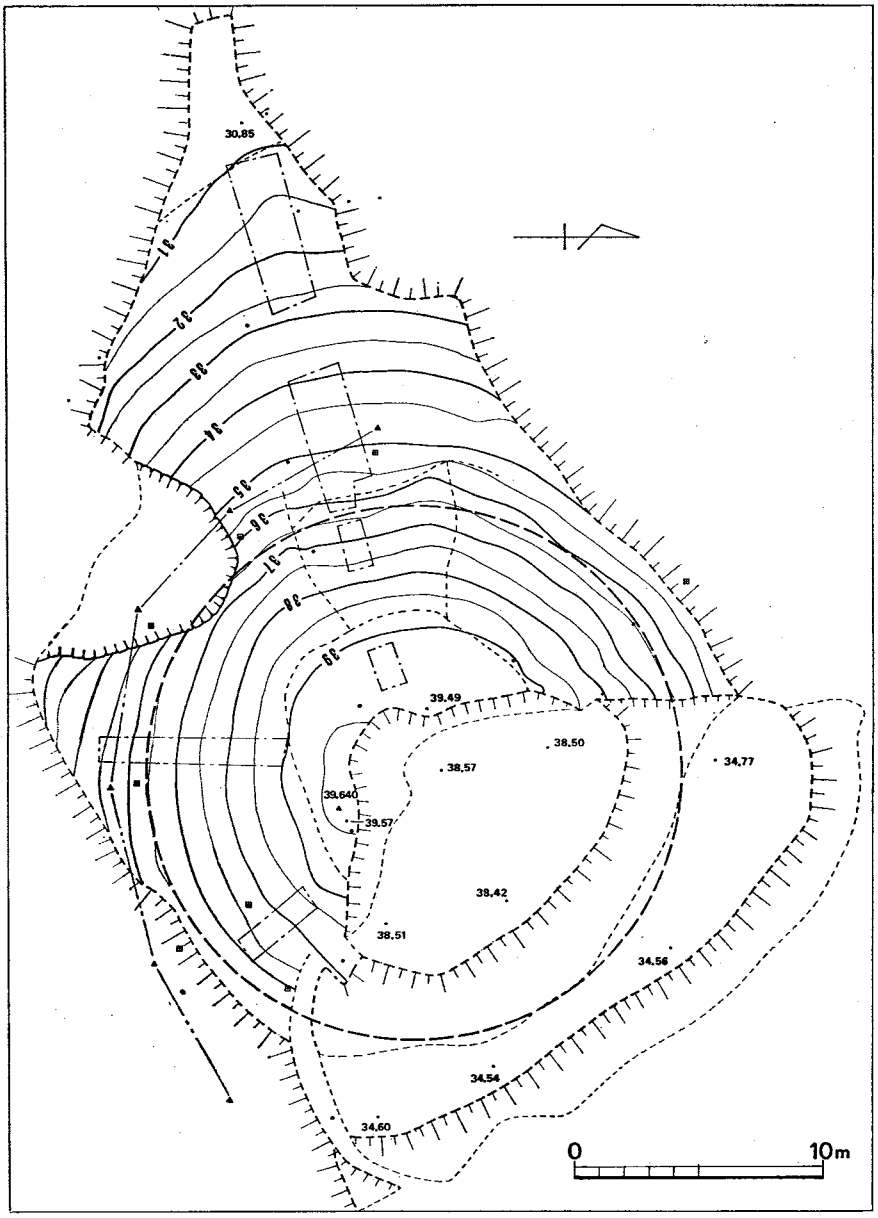
従って，道路公社に対して工事用道路自体の位置の変更を打診するとともに，本墳の墳丘形態と規模とを確認するための調査が必要となった。このように確認を目的とする調査であり，かつ，〝後円部〟の大半は道路建設予定地外であるため，測量のための伐採範囲と裾部確認のためのトレンチ数は最少限に留めた。

2　位　　置

本墳は，玄海灘に向って突出する急峻な山陵の最先端に位置し，唐津湾の東縁にあたる糸島郡二丈町大字鹿家（しかか）字長須隈（ちょうすくま）に所在する。墳頂部に立てば，湾内の船舶の動静を一望の下に見渡せる。

3　現　　況

〝後円部〟の高まりは歴然としているが，裾近くは西側を除いて段あるいは崖状となっており，全体的に旧地形の遺存度は良好ではない。特に，舟形石棺を抜き取ったとみられる北から東にかけての四半分は，開墾によって全く旧状を留めていない。しかし，果樹園の段のカーブは辛じてその痕跡を残しているようである。西側にのみ旧地形が残り，海に向って緩斜面が続いている。



第108図　長須隈古墳墳丘測量図（1/300）

凡例
- 一点鎖線――トレンチ
- 二点鎖線――工事施工線（変更後）
- 太　破　線――墳丘推定線
- ⊡　――道路用地杭

4 調 査 結 果

墳丘測量によって，〝後円部〟の現墳頂部と〝前方部〟と伝えられていた西側のみかけの裾部（〝連接部〟）とには，3.6～4 mの比高があることが判明した。裾部以西の緩斜面にもトレンチ設定したが，盛土あるいは地山整形などは確認されず，またなんらの遺物も出土していない。以上から，本墳は円墳であると判断するに至った。

範囲を確認するために，南東側に2本のトレンチを設定した。墳丘の築成に際しては，原地形の高まりを最大限に利用している。表土を除去し，地形の若干の凹凸を均して形態を整える程度に薄く土盛を行ったもので，整然とした層序はみられない。裾部を明確にする意図があったかどうかさえ疑わしい程である。しかし，仕上りとしては，海に臨む古墳として一際目立つ高まりとなり，意図は達成されている。

築成法が以上の簡便なものであるため，逆に裾部を明確にし難いが，地山の屈折点などから推して，本墳の直径は21.5m前後，西側からの高さは4 m強とみられる。

墳頂部の石棺抜取跡周辺には，丸石が散在していた。ボーリング棒をさしてみたが，その限りでは特に密集する箇所はない。これらの丸石は，伝えられていた葺石ではなく，石棺の埋置に伴う施設の存在を示唆するものと推定される。

5 現状保存について

上述のように，本墳は円墳と判断されたが，舟形石棺を内部主体とする本墳の意義はその分布状態からみても極めて高い。従って，当委員会では道路公社に対して昭和53年9月6日付53教文第1574号を以て上記の調査結果を報告するとともに，本墳の現状保存を図るために，切土上端を墳丘裾部推定線から2～3 mは離すように求めた。道路公社は，これに対して昭和53年9月25日付 53福道公第 335 号を以て，一部用地巾と工事施工線とを変更される旨を回答された。今回の設計変更により，本墳は裾部のカットを辛じて免れることになった。裾部の余地は充分とはいえないが，本墳の意義に理解を示され，設計変更の措置をとられた道路公社各位の御高配に対して，心から御礼申し上げます。（石山 勲）

後　　記

5年間にわたって断続的に行なわれた当バイパス関係の遺跡調査は，遺跡そのものの学術的な高い評価もさることながら，遺跡所在地を含めた地域での歴史的追体験としての関心をも呼び起こした。これらの成果は，二丈町の歴史，糸島地方の文化史の一部分を塗り替えるに充分である。

本報告書には3遺跡分を掲載したが，他に，赤岸遺跡（第1次・第2次調査），水付古墳，広田遺跡Ⅰ～Ⅲ区，多々羅遺跡の各地点の調査分があり，今回は諸事情に顧み，掲載を断念せざるを得なかった。これらは今後，機会ある毎に順次報告してゆきたい。

最後に，当バイパス関係発掘調査の担当者であり，事業中途において不慮の災害により帰天された故前川威洋氏の冥福を祈り，本報告書を捧げたいと思う。（中間記）

1　長須隈古墳遠景　（前方は唐津湾と虹の松原）

2　墳頂部から見た西側墳丘裾部　（右端と上部に海面が見える）

1　舟形石棺抜取痕　（北から）

2　第２・３トレンチ断面　（北から）

南筑後
教育事
務所蔵

二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告

昭和55年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印　刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1-1

B
09
3K